

平成15年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書

# 一本木前遺跡 V

2004

埼玉県熊谷市教育委員会

平成15年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書

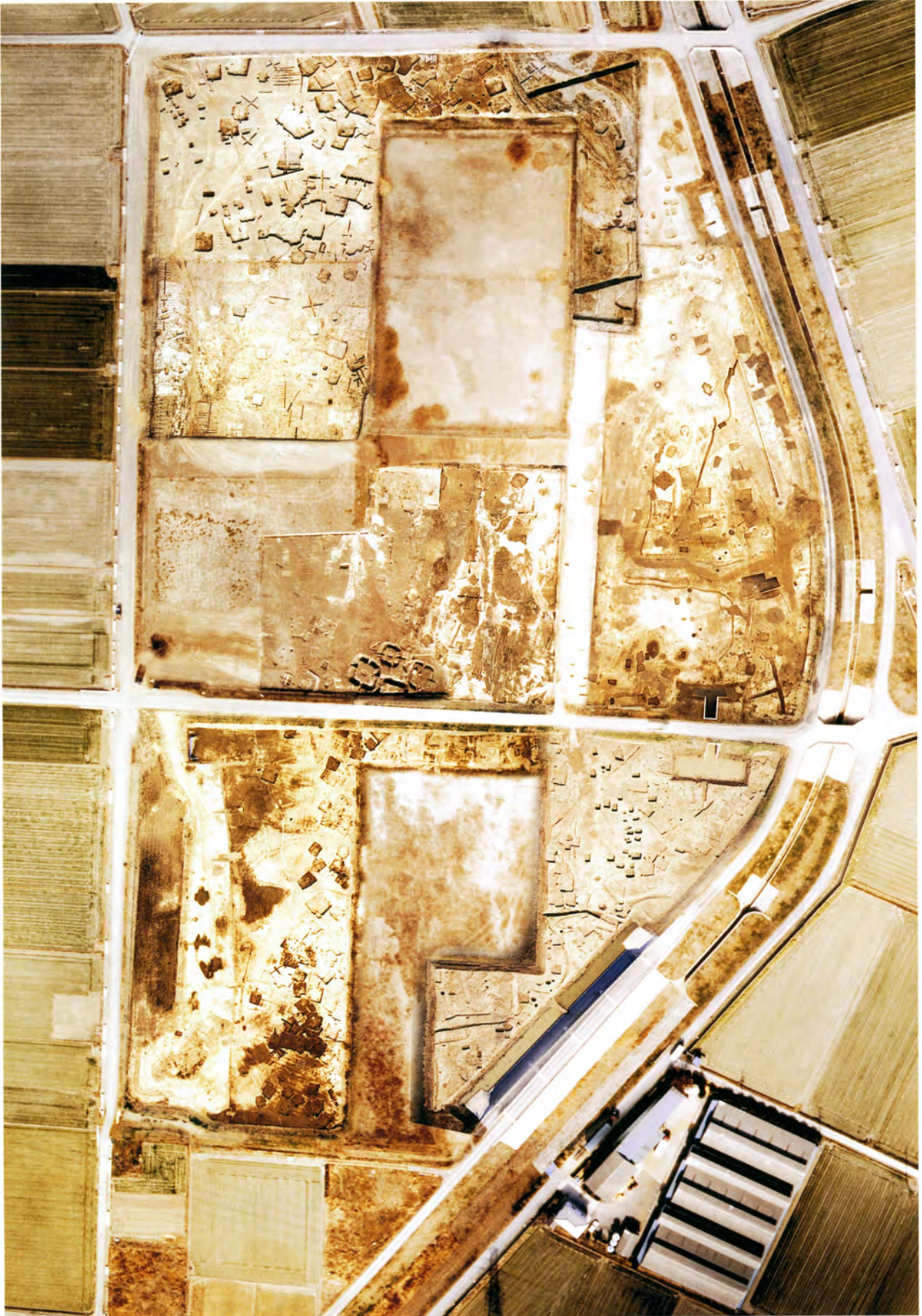
# 一本木前遺跡 V

2004

埼玉県熊谷市教育委員会



口絵2 遺跡全景 (合成)



# 序

私たちの郷土熊谷には、原始・古代の集落や中世の館跡等の埋蔵文化財が、数多く分布しております。

こうした埋蔵文化財は、郷土の発展やその過程を物語る証しであるとともに、私たち子孫の繁栄の指標ともなる、先人の貴重な足跡であります。私たちは、こうした文化遺産を継承し、次世代に伝え、さらに豊かな熊谷市を形成する礎としていかなければならないと考えております。

本書は、準用河川新奈良川の調節池の建設に伴い、平成14年6月から平成15年1月にかけて実施された、一本木前遺跡の第五次発掘調査の成果をまとめたものです。

今回の発掘調査では、古墳時代の住居跡、さらには多数の畠跡が確認されました。今回の成果を含めて、大集落の中の生産地・墓域という、性格の異なる遺構が共存することが確認されたこと、また、たび重なる洪水と人々の対応など、きわめて注目すべき成果だと言えます。

本書の成果が、埋蔵文化財保護、学術研究の基礎資料として、また埋蔵文化財保護思想の普及・啓蒙資料として、広く活用されることとなれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書刊行に至るまで、文化財保護法の趣旨を尊重され、ご理解、ご協力を賜りました熊谷市建設部河川課並びに地元関係者には厚くお礼申し上げます。

平成16年3月

熊谷市教育委員会








教育長 飯塚 誠一郎

# 例 言

- 1 本書は、埼玉県熊谷市大字東別府字一本木前1390番地他に所在する、一本木前遺跡第5次調査（平成14年度分）の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、新奈良川第3調節池掘削工事に伴う事前調査であり、熊谷市教育委員会が実施した。
- 3 本事業の組織は、第1章3のとおりである。
- 4 発掘調査期間は、平成14年6月1日から平成15年1月31日であり、整理報告書刊行期間は、平成15年4月1日から平成16年3月31日である。
- 5 発掘調査は、寺社下博、松田哲、渡邊大士、船場昌子、整理報告書作成は寺社下博、船場昌子がそれぞれ担当した。
- 6 発掘調査の写真撮影は寺社下、松田、渡邊、船場、遺物の写真撮影は寺社下がそれぞれ担当した。
- 7 出土品の整理及び図版の作成は、寺社下、船場が行った。
- 8 本書の執筆・編集は、寺社下が行った。
- 9 遺跡の基準点測量及び航空写真撮影は、(株)東京航業研究所に委託した。
- 10 本書にかかる資料は、熊谷市教育委員会が保管する。
- 11 本書の作成にあたり、下記の方々及び機関等からご教示、ご協力を賜った。記して謝意を表します。

埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課、埼玉県立埋蔵文化財センター  
財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団、大里郡市町村文化財担当者会

# 凡 例

- 1 各遺構の番号は、発掘調査時に付した略号から、整理時にA・B・Cそれぞれの調査区において、北東隅を基点として、東から西へ、さらには北から南への順序で付け直した。また各区とも、同一調査区の調査が2年度以上に亘ったため、それぞれに連続した名称を付している。
- 2 遺構挿図の縮尺は、原則として次のとおりである。  
遺跡分布図 1/50,000 遺構配置図 1/600  
方形周溝墓平面図 1/80 方形周溝墓断面図 1/60 畠跡 1/100  
住居跡・掘立柱建物跡・柵列・土坑・井戸跡・方形周溝遺構 1/60  
溝跡平面図 1/400 溝跡断面図 1/60 遺構部分図 1/30、1/60  
他の縮尺については、その都度示した。
- 3 遺構挿図中のレベル基準線は、全体でのレベル統一が不可能であったため、一図版内で統一できたものについてはスケール上位に数値を示したが、それもできなかった場合には、それぞれの基準線上に数値を示した。
- 4 遺構挿図中の略号及びスクリーントーンは、原則として次の内容を示す。  
地山 =  炭化物・灰 =   焼土 =   骨 = ※
- 5 遺構覆土の色調は、『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・1998年版）に照らし、最も近似した色相を表示した。
- 6 遺物挿図の縮尺は、原則として1/4である。他の縮尺については、その都度示した。  
遺物挿図中、須恵器及び陶磁器については、断面を黒で塗りつぶして表示している。
- 7 遺物挿図中のスクリーントーンは、原則として次の内容を示す。  
釉彩 =  赤彩 = 
- 8 遺物観察表中、番号に網目表示のある遺物は、写真図版掲載遺物であることを示す。
- 9 遺物観察表中の単位は、全て"である。なお、実測できず推定復元した場合には、推定値として( )で括って表示した。
- 10 遺物観察表中の胎土は、肉眼観察可能な次の包含物質について、多い順にその番号を示した。  
① 白色粒子 ② 黒色粒子 ③ 赤色粒子 ④ 片岩粒子 ⑤ 白色針状物質 ⑥ 礫
- 11 遺物観察表中の焼成は、次のように3段階に区分して、該当する項目を番号で示した。  
① 良好（良く焼きしまっている） ② 普通 ③ 不良（脆く、崩れやすい）
- 12 遺物観察表中の色調は、『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・1998年版）に照らし、最も近似した色相を表示した。

# 目次

口 絵

序

例 言

凡 例

目 次

I	発掘調査の概要	1
1	調査に至る経過	1
2	発掘調査・報告書作成の経過	2
3	発掘調査、整理・報告書刊行の組織	2
II	遺跡の立地と環境	3
III	遺跡の概要	14
1	調査の方法	14
2	検出された遺構と遺物	17
IV	A区の遺構と遺物	31
1	住居跡	32
2	土坑	57
3	井戸跡	66
4	溝跡（河川跡）	70
5	不明遺構	82
V	B区の遺構と遺物	92
1	住居跡	92
2	土坑	179
3	井戸跡	183
4	畠跡	193
5	溝跡（河川跡）	197
6	不明遺構	203
VI	C区の遺構と遺物	209
1	住居跡	209
2	土坑	322
3	井戸跡	339
4	畠跡	340
5	遺物包含層	343
VII	まとめ	345



# 挿 図 目 次

第1図	埼玉県 の 地形 図 ……………3	第26図	A区100号住居跡 ……………56
第2図	一本木前遺跡周辺遺跡分布図 ……9・10	第27図	A区土坑(1) (296号・297号・298号・299号・ 300号・303号・313号・314号) 61
第3図	一本木前遺跡位置図 ……………13	第28図	A区土坑(2) (315号・316号・317 号・318号・323号・324号・325号・ 326号・331号) ……………63
第4図	一本木前遺跡調査区全測図 ……………15	第29図	A区土坑出土遺物 (303号・306号・ 307号・318号・325号) ……………65
第5図	一本木前遺跡調査区グリッド配置図 16	第30図	A区井戸跡 (7号・8号・10号井戸跡、 302号・309号土坑) ……………68
第6図	一本木前遺跡平成14年度調査区 検出遺構配置図 ……………19・20	第31図	A区溝跡・(河川跡)・河川跡土層図(1) ……………71・72
第7図	一本木前遺跡基本土層図 ……………28	第32図	A区溝跡断面図 (70号～94号溝跡) ……………75
第8図	A区検出遺構配置図 ……………29・30	第33図	A区溝跡・河川跡出土遺物(1) ……79
第9図	A区86号住居跡及び出土遺物 ……31	第34図	A区河川跡出土遺物(2) ……………80
第10図	A区87号・89号住居跡、304号土坑、 89号住居跡出土遺物(1) ……………33	第35図	A区河川跡出土遺物 (3) ……………81
第11図	A区88号住居跡、301号土坑 ……35	第36図	A区4号不明遺構 ……………83
第12図	A区88号住居跡出土遺物 ……………36	第37図	A区4号不明遺構出土遺物 ……………84
第13図	A区89号住居跡出土遺物(2) ……38	第38図	A区5号不明遺構 ……………85
第14図	A区90号住居跡、306号・307号・ 308号土坑、6号井戸跡 ……………39	第39図	A区5号不明遺構出土遺物 ……………86
第15図	A区90号・91号・92号 住居跡出土遺物 ……………40	第40図	A区6号不明遺構 ……………87
第16図	A区91号住居跡、305号・311号・ 312号土坑 ……………41	第41図	A区6号不明遺構出土遺物 ……………88
第17図	A区92号住居跡、310号土坑、 9号井戸跡 ……………43	第42図	A区遺構外出土遺物 ……………89
第18図	A区93号住居跡及び出土遺物 ……44	第43図	B区検出遺構配置図 ……………91・92
第19図	A区94号・95号住居跡、319号・320 号・321号・322号・332号土坑 ……47・48	第44図	B区39号住居跡 ……………90
第20図	A区94号住居跡出土遺物(1) ……49	第45図	B区39号住居跡出土遺物 ……………93
第21図	A区94号住居跡出土遺物(2) ……50	第46図	B区40号住居跡 ……………94
第22図	A区96号住居跡、327号・328号・ 333号土坑 ……………51	第47図	B区40号住居跡出土遺物 ……………95
第23図	A区96号住居跡出土遺物 ……………52	第48図	B区41号住居跡、59号土坑 ……97
第24図	A区97号・98号住居跡、329号土坑、 97号住居跡出土遺物 ……………54	第49図	B区41号住居跡出土遺物 ……………98
第25図	A区99号住居跡、330号土坑 ……56	第50図	B区42号・43号・44号住居跡、42号 住居跡出土遺物(1) ……………100

第51図	B区42号住居跡出土遺物(2) ……101	第84図	B区60号住居跡出土遺物(3) ……145
第52図	B区44号住居跡出土遺物 ……104	第85図	B区61号・62号住居跡 ……147
第53図	B区45号住居跡 ……105	第86図	B区61号住居跡出土遺物 ……148
第54図	B区45号住居跡出土遺物(1) ……106	第87図	B区63号・65号住居跡 ……149
第55図	B区45号住居跡出土遺物(2) ……107	第88図	B区63号・65号住居跡出土遺物 150
第56図	B区46号住居跡 ……109	第89図	B区64号住居跡 ……151
第57図	B区46号住居跡出土遺物 ……110	第90図	B区66号住居跡 ……153
第58図	B区47号住居跡、23号井戸跡及び 47号住居跡出土遺物 ……112	第91図	B区66号住居跡出土遺物 ……154
第59図	B区48号住居跡、24号井戸跡 ……113	第92図	B区67号・68号住居跡、 40号井戸跡 ……156
第60図	B区48号住居跡出土遺物 ……114	第93図	B区67号住居跡出土遺物(1) ……157
第61図	B区49号住居跡 ……116	第94図	B区67号住居跡カマド及び 出土遺物(2) ……158
第62図	B区50号住居跡及び出土遺物 ……117	第95図	B区69号住居跡、 39号・41号井戸跡 ……160
第63図	B区51号住居跡、 26～29号井戸跡(1) ……119	第96図	B区69号住居跡出土遺物(1) ……162
第64図	B区51号住居跡、 26～29号井戸跡(2) ……120	第97図	B区69号住居跡出土遺物(2) ……163
第65図	B区51号住居跡出土遺物 ……121	第98図	B区70号住居跡 ……164
第66図	B区52号住居跡 ……123	第99図	B区70号住居跡出土遺物 ……165
第67図	B区52号住居跡出土遺物 ……124	第100図	B区71号住居跡及び出土遺物 ……166
第68図	B区53号住居跡 ……126	第101図	B区72号住居跡 ……167
第69図	B区53号住居跡出土遺物(1) ……127	第102図	B区73号住居跡 ……168
第70図	B区53号住居跡出土遺物(2) ……128	第103図	B区73号住居跡出土遺物 ……169
第71図	B区54号住居跡 ……129	第104図	B区74号住居跡 ……170
第72図	B区54号住居跡出土遺物 ……130	第105図	B区75号住居跡 ……171
第73図	B区55号住居跡 ……131	第106図	B区76号住居跡、 43号井戸跡及び出土遺物 ……172
第74図	B区55号住居跡出土遺物 ……132	第107図	B区77号住居跡 ……174
第75図	B区56号住居跡及び出土遺物 ……133	第108図	B区78号住居跡、67号土坑 ……175
第76図	B区57号住居跡、31号井戸跡及び 57号住居跡出土遺物(1) ……135	第109図	B区78号住居跡出土遺物 ……176
第77図	B区57号住居跡出土遺物(2) ……136	第110図	B区79号住居跡及び出土遺物 ……177
第78図	B区58号住居跡 ……138	第111図	B区80号住居跡及び出土遺物 ……178
第79図	B区58号住居跡出土遺物 ……139	第112図	B区土坑 (57号・58号・60号・61号・62号・ 63号・64号・65号・66号) ……181
第80図	B区59号住居跡 ……140	第113図	B区井戸跡(1) (25号・30号・32号・ 33号・34号・35号・36号) ……186
第81図	B区59号住居跡出土遺物 ……141		
第82図	B区60号住居跡及び出土遺物(1) 143		
第83図	B区60号住居跡出土遺物(2) ……144		

第114図 B区井戸跡(2) (37号・38号・42号) .....	190	第145図 C区48号住居跡.....	239
第115図 B区井戸跡出土遺物.....	192	第146図 C区49号住居跡.....	240
第116図 B区13号畠跡及び出土遺物.....	195	第147図 C区49号住居跡出土遺物(1).....	241
第117図 B区14号畠跡.....	196	第148図 C区49号住居跡出土遺物(2).....	242
第118図 B区溝跡・河川跡.....	199・200	第149図 C区50号住居跡、71号土坑.....	244
第119図 B区1号不明遺構.....	204	第150図 C区51号住居跡.....	246
第120図 B区1号不明遺構出土遺物.....	205	第151図 C区51号住居跡出土遺物.....	247
第121図 C区検出遺構配置図.....	207・208	第152図 C区52号・53号住居跡(1).....	249
第122図 C区28号住居跡.....	210	第153図 C区52号・53号・54号住居跡(2).....	250
第123図 C区29号住居跡.....	211	第154図 C区52号住居跡出土遺物(1).....	251
第124図 C区30号住居跡.....	212	第155図 C区52号住居跡出土遺物(2).....	252
第125図 C区31号住居跡及び出土遺物.....	213	第156図 C区52号住居跡出土遺物(3).....	253
第126図 C区32号住居跡及び出土遺物.....	214	第157図 C区53号住居跡出土遺物(1).....	254
第127図 C区33号住居跡及び出土遺物.....	215	第158図 C区53号住居跡出土遺物(2).....	255
第128図 C区34号住居跡、68号土坑及び 34号住居跡出土遺物.....	217	第159図 C区54号住居跡.....	257
第129図 C区35号住居跡及び出土遺物.....	218	第160図 C区54号住居跡出土遺物.....	258
第130図 C区36号・37号住居跡及び 37号住居跡出土遺物.....	220	第161図 C区55号住居跡及び出土遺物.....	259
第131図 C区38号住居跡及び出土遺物.....	221	第162図 C区56号住居跡.....	261
第132図 C区39号住居跡、79号土坑.....	223	第163図 C区56号住居跡出土遺物.....	262
第133図 C区39号住居跡出土遺物.....	224	第164図 C区57号住居跡及び出土遺物.....	264
第134図 C区40号住居跡及び出土遺物.....	225	第165図 C区58号住居跡.....	265
第135図 C区41号住居跡、92号・93号・94 号・95号土坑.....	226	第166図 C区58号住居跡出土遺物.....	266
第136図 C区41号住居跡出土遺物.....	227	第167図 C区59号住居跡.....	268
第137図 C区42号住居跡、69号・70号土坑 及び出土遺物(1).....	228	第168図 C区59号住居跡出土遺物(1).....	269
第138図 C区42号住居跡出土遺物(2).....	230	第169図 C区59号住居跡出土遺物(2).....	270
第139図 C区43号住居跡.....	231	第170図 C区60号住居跡及び出土遺物.....	273
第140図 C区44号住居跡.....	232	第171図 C区61号住居跡.....	275
第141図 C区45号住居跡及び出土遺物.....	234	第172図 C区61号住居跡出土遺物.....	276
第142図 C区46号住居跡及び出土遺物.....	235	第173図 C区62号住居跡及び出土遺物.....	277
第143図 C区47号住居跡、84号・85号土坑.....	236	第174図 C区63号住居跡、 1号井戸跡及び出土遺物.....	279
第144図 C区47号・48号住居跡出土遺物.....	237	第175図 C区64号住居跡.....	280
		第176図 C区64号住居跡出土遺物.....	281
		第177図 C区65号住居跡.....	283
		第178図 C区65号住居跡出土遺物.....	284
		第179図 C区66号住居跡、76号土坑及び 出土遺物.....	285

第180図 C区67号住居跡	287	99号・100号・101号・102号・103号・104号・108号)	328
第181図 C区67号住居跡出土遺物(1)	288	第214図 C区土坑(4) (113号・114号・115号・116号・117号) 土坑出土遺物(1)	330
第182図 C区67号住居跡出土遺物(2)	289	第215図 C区土坑(5)	
第183図 C区67号住居跡出土遺物(3)	290	(96号・105号・106号・107号・109号・110号・111号・112号)	332
第184図 C区68号住居跡及び出土遺物	292	第216図 C区土坑出土遺物(2)96号	334
第185図 C区69号住居跡及び出土遺物	293	第217図 C区土坑出土遺物(3)106号109号	336
第186図 C区70号住居跡	294	第218図 C区土坑出土遺物(4)110号	338
第187図 C区71号住居跡及び出土遺物	295	第219図 C区16号畝跡及び出土遺物	341
第188図 C区72号住居跡	296	第220図 C区17号畝跡	343
第189図 C区72号住居跡出土遺物	297	第221図 C区弥生土器包含層出土遺物	344
第190図 C区73号住居跡	299	第222図 出土土器集成・I期	346
第191図 C区73号住居跡出土遺物	300	第223図 出土土器集成・II期、III期	348
第192図 C区74号住居跡及び出土遺物	301	第224図 出土土器集成・IV期	350
第193図 C区75号住居跡	303	第225図 出土土器集成・V期	351
第194図 C区75号住居跡出土遺物(1)	304	第226図 出土土器集成・VI期	352
第195図 C区75号住居跡出土遺物(2)	305	第227図 出土土器集成・VII期	353
第196図 C区76号・81号住居跡	306	第228図 出土土器集成・VIII期	354
第197図 C区76号住居跡出土遺物	307	第229図 出土土器集成・IX期、X期	355
第198図 C区77号・78号住居跡	309	第230図 住居跡の配置・I期、II期	357
第199図 C区77号・78号住居跡出土遺物	310	第231図 住居跡の配置・III期	357
第200図 C区79号住居跡	310	第232図 住居跡の配置・IV期	358
第201図 C区79号住居跡出土遺物	311	第233図 住居跡の配置・V期	358
第202図 C区80号住居跡	312	第234図 住居跡の配置・VI期	359
第203図 C区80号住居跡出土遺物	313	第235図 住居跡の配置・VII期	359
第204図 C区81号住居跡出土遺物	314	第236図 住居跡の配置・VIII期	360
第205図 C区82号住居跡、77号土坑	316	第237図 住居跡の配置・IX期	360
第206図 C区82号住居跡出土遺物	317	第238図 住居跡の配置・X期	361
第207図 C区83号住居跡	318	第239図 古墳時代後期河川流路及び土器祭祀遺構の配置	362
第208図 C区83号住居跡出土遺物(1)	319	第240図 土器祭祀遺構集成	366
第209図 C区83号住居跡出土遺物(2)	320		
第210図 C区84号住居跡出土遺物	322		
第211図 C区土坑(1)			
(72号・73号・74号・78号)	324		
第212図 C区土坑(2)			
(80号・81号・82号・83号・86号・87号・88号・89号・90号)	326		
第213図 C区土坑(3) (91号・97号・98号・			

# 表 目 次

第1表	遺跡一覽表……………9・10	第34表	B区55号住居跡出土遺物觀察表 ……132
第2表	A区86号住居跡出土遺物觀察表 ……32	第35表	B区56号住居跡出土遺物觀察表 ……133
第3表	A区88号住居跡出土遺物觀察表 ……37	第36表	B区57号住居跡出土遺物觀察表 ……137
第4表	A区89号住居跡出土遺物觀察表 ……37	第37表	B区58号住居跡出土遺物觀察表 ……138
第5表	A区90号住居跡出土遺物觀察表 ……40	第38表	B区59号住居跡出土遺物觀察表 ……………140・142
第6表	A区91号住居跡出土遺物觀察表 ……40	第39表	B区60号住居跡出土遺物觀察表 ……………145・146
第7表	A区92号住居跡出土遺物觀察表 ……40	第40表	B区61号住居跡出土遺物觀察表 ……148
第8表	A区93号住居跡出土遺物觀察表 ……44	第41表	B区63号住居跡出土遺物觀察表 ……150
第9表	A区94号住居跡出土遺物觀察表 ……46	第42表	B区65号住居跡出土遺物觀察表 ……150
第10表	A区96号住居跡出土遺物觀察表 ……53	第43表	B区66号住居跡出土遺物觀察表 ……155
第11表	A区97号住居跡出土遺物觀察表 ……54	第44表	B区67号住居跡出土遺物觀察表 ……159
第12表	A区土坑出土遺物觀察表……………65	第45表	B区69号住居跡出土遺物觀察表 ……163
第13表	A区81号溝跡出土遺物觀察表 ……78	第46表	B区70号住居跡出土遺物觀察表 ……165
第14表	A区94号溝跡出土遺物觀察表 ……78	第47表	B区71号住居跡出土遺物觀察表 ……166
第15表	A区河川跡出土遺物觀察表……………82	第48表	B区73号住居跡出土遺物觀察表 ……169
第16表	A区4号不明遺構出土遺物觀察表 ……83	第49表	B区76号住居跡出土遺物觀察表 ……173
第17表	A区5号不明遺構出土遺物觀察表 ……86	第50表	B区78号住居跡出土遺物觀察表 ……176
第18表	A区6号不明遺構出土遺物觀察表 ……88	第51表	B区79号住居跡出土遺物觀察表 ……177
第19表	A区縄文・弥生土器包含層 出土遺物觀察表……………89	第52表	B区80号住居跡出土遺物觀察表 ……179
第20表	B区39号住居跡出土遺物觀察表 ……94	第53表	B区23号井戸跡出土遺物觀察表 ……183
第21表	B区40号住居跡出土遺物觀察表 ……96	第54表	B区28号井戸跡出土遺物觀察表 ……185
第22表	B区41号住居跡出土遺物觀察表 ……99	第55表	B区38号井戸跡出土遺物觀察表 ……189
第23表	B区42号住居跡出土遺物觀察表 ……102	第56表	B区41号井戸跡出土遺物觀察表 ……191
第24表	B区44号住居跡出土遺物觀察表 ……103	第57表	B区43号井戸跡出土遺物觀察表 ……191
第25表	B区45号住居跡出土遺物觀察表 ……107	第58表	B区13号畠跡出土遺物觀察表 ……194
第26表	B区46号住居跡出土遺物觀察表 ……111	第59表	B区1号不明遺構出土遺物觀察表 206
第27表	B区47号住居跡出土遺物觀察表 ……112	第60表	C区31号住居跡出土遺物觀察表 ……213
第28表	B区48号住居跡出土遺物觀察表 ……115	第61表	C区32号住居跡出土遺物觀察表 ……214
第29表	B区50号住居跡出土遺物觀察表 ……118	第62表	C区33号住居跡出土遺物觀察表 ……216
第30表	B区51号住居跡出土遺物觀察表 ……122	第63表	C区34号住居跡出土遺物觀察表 ……216
第31表	B区52号住居跡出土遺物觀察表 ……125	第64表	C区35号住居跡出土遺物觀察表 ……218
第32表	B区53号住居跡出土遺物觀察表 ……125	第65表	C区37号住居跡出土遺物觀察表 ……220
第33表	B区54号住居跡出土遺物觀察表 ……131		

第66表	C区38号住居跡出土遺物觀察表	…222	第95表	C区70号住居跡出土遺物觀察表	…295
第67表	C区39号住居跡出土遺物觀察表	…224	第96表	C区71号住居跡出土遺物觀察表	…296
第68表	C区40号住居跡出土遺物觀察表	…225	第97表	C区72号住居跡出土遺物觀察表	…298
第69表	C区41号住居跡出土遺物觀察表	…227	第98表	C区73号住居跡出土遺物觀察表	…298
第70表	C区42号住居跡出土遺物觀察表		第99表	C区74号住居跡出土遺物觀察表	…302
	……………	229·230	第100表	C区75号住居跡出土遺物觀察表	…305
第71表	C区45号住居跡出土遺物觀察表	…235	第101表	C区76号住居跡出土遺物觀察表	
第72表	C区46号住居跡出土遺物觀察表	…237		……………	307·308
第73表	C区47号住居跡出土遺物觀察表	…238	第102表	C区77号住居跡出土遺物觀察表	…308
第74表	C区48号住居跡出土遺物觀察表	…238	第103表	C区78号住居跡出土遺物觀察表	…310
第75表	C区49号住居跡出土遺物觀察表	…243	第104表	C区79号住居跡出土遺物觀察表	…311
第76表	C区51号住居跡出土遺物觀察表	…246	第105表	C区80号住居跡出土遺物觀察表	…314
第77表	C区52号住居跡出土遺物觀察表		第106表	C区81号住居跡出土遺物觀察表	
	……………	253·255		……………	314·315
第78表	C区53号住居跡出土遺物觀察表		第107表	C区82号住居跡出土遺物觀察表	…317
	……………	255·256	第108表	C区83号住居跡出土遺物觀察表	…321
第79表	C区54号住居跡出土遺物觀察表	…258	第109表	C区84号住居跡出土遺物觀察表	…322
第80表	C区55号住居跡出土遺物觀察表	…260	第110表	C区78号土坑出土遺物觀察表	……331
第81表	C区56号住居跡出土遺物觀察表		第111表	C区81号土坑出土遺物觀察表	……331
	……………	262·263	第112表	C区82号土坑出土遺物觀察表	……331
第82表	C区57号住居跡出土遺物觀察表	…263	第113表	C区83号土坑出土遺物觀察表	……331
第83表	C区58号住居跡出土遺物觀察表	…267	第114表	C区96号土坑出土遺物觀察表	……335
第84表	C区59号住居跡出土遺物觀察表	…271	第115表	C区106号土坑出土遺物觀察表	…337
第85表	C区60号住居跡出土遺物觀察表	…273	第116表	C区107号土坑出土遺物觀察表	…337
第86表	C区61号住居跡出土遺物觀察表	…274	第117表	C区109号土坑出土遺物觀察表	…337
第87表	C区62号住居跡出土遺物觀察表	…278	第118表	C区110号土坑出土遺物觀察表	…339
第88表	C区63号住居跡出土遺物觀察表	…278	第119表	C区112号土坑出土遺物觀察表	…331
第89表	C区64号住居跡出土遺物觀察表	…282	第120表	C区1号井戸跡出土遺物觀察表	…340
第90表	C区65号住居跡出土遺物觀察表	…284	第121表	C区16号畠跡出土遺物觀察表	……340
第91表	C区66号住居跡出土遺物觀察表	…285	第122表	C区弥生土器包含層出土遺物觀察表	…343
第92表	C区67号住居跡出土遺物觀察表		第123表	時期別住居跡等一覽表	……………356
	……………	290·291	第124表	時期別馬齒出土遺構一覽表	……………364
第93表	C区68号住居跡出土遺物觀察表	…292	第125表	時期別土器祭祀遺構一覽表	……………365
第94表	C区69号住居跡出土遺物觀察表	…292			

# 図版目次

図版1	一本木前遺跡全景	304号、305号、306号・307号
図版2	A区遠景 南より、北より	308号、309号、310号、311号 312号土坑
図版3	A区86号住居跡 全景、遺物出土状況(1) 遺物出土状況(2)	図版14 A区土坑(3) 313号、314号、315号、316号 317号、318号・319号・320号・ 321号・322号・10号井戸跡、 323号、324号
図版4	A区87・88・89号住居跡 87・88号全景、88号カマド 89号住居跡カマド	図版15 A区土坑(4)・井戸跡(1) 325号、326号、327号・328号 329号、330号、331号 6号井戸跡、7号井戸跡
図版5	A区90・91・92号住居跡 90号全景、91号全景、92号全景	図版16 A区井戸跡(2)・溝跡(1) 8号井戸跡、9号井戸跡、72号溝跡 75号・76号・77号・78号・79号溝 跡・B区34号・35号・36号溝跡 80号・81号溝跡、82号溝跡
図版6	A区93号・94号(1)住居跡 93号全景、同遺物出土状況 94号全景	図版17 A区溝跡(2) 83号、84号～87号、88号 89号～94号、94号遺物出土状況
図版7	A区94号住居跡(2) 住居跡内土坑、遺物出土状況(1) 遺物出土状況(2)	図版18 A区河川跡(1) 全景(北西より)、全景(北東より)
図版8	A区94号(3)・95号住居跡 94号遺物出土状況(3)、95号全景 94号・95号カマド	図版19 A区河川跡(2) 遺物出土状況(1)、遺物出土状況(2) 遺物出土状況(3)
図版9	A区96号住居跡(1) 全景、カマド、貯蔵穴	図版20 A区河川跡(3) 遺物出土状況(4)、遺物出土状況(5) 遺物出土状況(6)
図版10	A区96号(2)・97・98号住居跡 96号遺物出土状況、97号全景 98号全景	図版21 A区河川跡(4) 遺物出土状況(7)、遺物出土状況(8) 遺物出土状況(9)
図版11	A区99・100号住居跡・296号土坑 99号全景、100号・296号土坑全景 100号遺物出土状況(1)	図版22 A区河川跡(5) 遺物出土状況(10)、遺物出土状況(11) 遺物出土状況(12)
図版12	A区土坑(1) 296号遺物出土状況(2) 296号遺物出土状況(3) 297号・298号、299号、300号 301号、302号、303号	
図版13	A区土坑(2)	

- 図版23 A区不明遺構(1)4号  
 全景、遺物出土状況(1)  
 遺物出土状況(2)
- 図版24 A区不明遺構(2)5・6号  
 5号全景、5号遺物出土状況  
 6号遺物出土状況
- 図版25 A区86・88号住居跡出土遺物  
 86-3、4  
 88-1、10、12、13、14、15
- 図版26 A区89号住居跡出土遺物(1)  
 1、2、3、4、5、6
- 図版27 A区89号(2)・90・91・92・93  
 号・94号(1)住居跡出土遺物  
 89-7、90-1、91-1、92-2  
 93-1、2  
 94-2、4
- 図版28 A区94号(2)・96号(1)住居跡出土遺物  
 94-5、7、10、11、12、20、23  
 96-2
- 図版29 A区96号(2)住居跡・土坑出土遺物  
 96-3、4、5  
 土坑296- (参考)、土坑303-1  
 土坑325-2、(参考)
- 図版30 A区溝跡・河川跡(1)出土遺物  
 94-1  
 河川跡-2、4、8、9、12、13
- 図版31 A区河川跡出土遺物(2)  
 14、15、16、20、23、25、28
- 図版32 A区河川跡(3)・不明遺構(1)出土遺物  
 河川跡-31  
 4不明-3、7  
 5不明-1、2、3、4、7 (参考)
- 図版33 A区不明遺構出土遺物(2)  
 6-1、2、4、7  
 作業風景
- 図版34 B区全景
- 西より、東より
- 図版35 B区39・40・41号住居跡  
 39号全景、40号全景、41号全景
- 図版36 B区42号住居跡  
 全景、カマド、遺物出土状況
- 図版37 B区43号・44号(1)住居跡  
 43号全景、43号カマド、44号全景
- 図版38 B区44号(2)・45・46・47号住居跡  
 44号カマド、45号・46号全景  
 47号全景
- 図版39 B区48号住居跡(1)  
 全景、遺物出土状況(1)  
 遺物出土状況(2)
- 図版40 B区48号(2)・49・50号住居跡  
 48号遺物出土状況(3)、49号全景  
 50号全景
- 図版41 B区51・52号住居跡  
 51号全景、51号カマド、52号全景
- 図版42 B区53・54号住居跡  
 53号全景、53号カマド、54号全景
- 図版43 B区55・56号・57号(1)住居跡  
 55号全景、56号全景、57号全景
- 図版44 B区57号(2)・58・59号住居跡  
 57号遺物出土状況、58号全景  
 59号全景
- 図版45 B区60号住居跡(1)  
 全景、カマド、遺物出土状況(1)
- 図版46 B区60号(2)・61・62・63・65号住居跡  
 60号遺物出土状況(2)  
 61号・62号全景、63号・65号全景
- 図版47 B区64・66号・67号(1)住居跡  
 64号全景、66号全景、67号全景
- 図版48 B区67号住居跡(2)  
 カマド、遺物出土状況(1)  
 遺物出土状況(2)
- 図版49 B区68・69・70号住居跡  
 68号全景、69号全景、70号全景



図版50	B区71・72・73号住居跡 71号全景、72号全景、73号全景	38号・39号溝跡、41号・42号溝跡	図版61	B区溝跡(2) 43号、44号・45号、46号 47号・48号、49号、50号
図版51	B区74・75・76号住居跡 74号全景、75号全景、76号全景		図版62	B区溝跡(3)・不明遺構 52号溝跡、54号溝跡、55号溝跡 1号不明遺構全景 1号不明遺構遺物出土状況
図版52	B区77号・78号(1)住居跡 77号全景、78号全景 78号遺物出土状況(1)		図版63	B区39号・40号(1)住居跡出土遺物 39-3、6、7、9 40-1、2、6
図版53	B区78号(2)・79号(1)住居跡 78号遺物出土状況(2) 78号遺物出土状況(3) 79号全景(南より)		図版64	B区40号(1)・41号・42号(1)住居跡出土遺物 40-7、41-7、9、10、17、18 42-2、3、5
図版54	B区79号(2)・80号(1)住居跡 79号全景(東より) 80号全景(南より) 80号全景(西より)		図版65	B区42号(2)・44号・45号(1)住居跡出土遺物 42-6、10、 44-1、2、5、6、7、45-1
図版55	B区80号住居跡(2) 遺物出土状況(1)、遺物出土状況(2) 遺物出土状況(3)		図版66	B区45号住居跡出土遺物(2) 2、5、12、15、16、20、21
図版56	B区土坑(1) 57号、58号、59号、60号、61号 62号、63号、64号		図版67	B区45号(3)・46・47号・48号(1)住居跡出土遺物 45-23、24、46-1、6、23 47-2、3、48-1、3、12
図版57	B区土坑(2)・井戸跡(1) 65号土坑、66号土坑 23号井戸跡、24号井戸跡 25号井戸跡、27号井戸跡 28号井戸跡、29号井戸跡		図版68	B区48号(2)・50号・51号(1)住居跡出土遺物 48-13、16、17、50-1、5 51-1、5、6
図版58	B区井戸跡(2) 30号、31号、32号、33号 33号・34号・35号、37号、38号 39号		図版69	B区51号(1)・52号・53号(1)住居跡出土遺物 51-10、13、26 52-1、15、16、17、53-1、2
図版59	B区井戸跡(3) 40号、41号、41号遺物出土状況 42号、43号 作業風景		図版70	B区53号住居跡出土遺物(2) 5、6、7、10、11、12
図版60	B区畠跡・溝跡(1) 13号畠跡、14号畠跡 34号・35号・36号溝跡、37号溝跡		図版71	B区53号(3)・54号(1)住居跡出土遺物

- 53-13、14、16、18、19、20  
54-1
- 図版72 B区54号(2)・56号・57号(1)住居跡出土遺物  
54-2、14、56-1  
57-2、3、4、6、7、8
- 図版73 B区57号(2)・58・59号住居跡出土遺物  
57-13、21、22、23、58-1  
59-2、16、19、20
- 図版74 B区60号住居跡出土遺物(1)  
1、2、3、4、7、13、14、17、25
- 図版75 B区60号(2)・61号(1)住居跡出土遺物  
60-26、27、39、40  
61-2、5、6
- 図版76 B区61号(2)・63・65号・66号(1)住居跡出土遺物  
61-9、63-1、65-3、10、11  
66-1、2、3、4
- 図版77 B区66号(2)・67号(1)住居跡出土遺物  
66-5、6  
67-1、2、4、5、6、7、10
- 図版78 B区67号住居跡出土遺物(2)  
11、12、14、15、16
- 図版79 B区67号(3)・69号(1)住居跡出土遺物  
67-17、18、19、21、22、24  
69-3
- 図版80 B区69号住居跡出土遺物(2)  
4、5、6、7、8、11、12、13、14
- 図版81 B区69号(3)・70号住居跡出土遺物  
69-17、18、23、25、70-10
- 図版82 B区73・78・79号住居跡出土遺物  
73-5、78-3、6、7、8、9
- 79-2
- 図版83 B区80号住居跡・井戸跡(1)出土遺物  
80-1、3、4、5、8、  
23井戸-1、3
- 図版84 B区井戸跡出土遺物(2)  
23-4、5、6、7、38-1  
43-1、2
- 図版85 B区井戸跡(3)・畠跡・不明遺構(1)出土遺物  
43井戸-3、13畠-1、2  
1不明-1、2、3、4
- 図版86 B区不明遺構出土遺物(2)  
1-6、8、9、10、11
- 図版87 C区遠景  
南東より、北西より
- 図版88 C区28・29・31号住居跡  
28号全景、29号全景、31号全景
- 図版89 C区32・33号住居跡  
32号全景、33号、  
33号遺物出土状況
- 図版90 C区34・35・36・37号住居跡・68号土坑  
34号・68号土坑全景、35号全景  
36号・37号全景
- 図版91 C区38・39号住居跡  
38号全景、39号全景、  
39号遺物出土状況
- 図版92 C区40号・41号(1)住居跡・92号土坑  
40号全景、41号・92号土坑全景  
41号住居跡遺物出土状況(1)
- 図版93 C区41号(2)・42号(1)住居跡  
41号遺物出土状況(2)  
42号全景、42号カマド
- 図版94 C区42号(2)住居跡・16号畠跡  
遺物出土状況(1)、遺物出土状況(2)、

- 42号・16号畠跡全景
- 図版95 C区43・44号・45号(1)住居跡  
43号全景、44号全景、45号全景
- 図版96 C区45号(2)・46・47・48号住居跡  
45号カマド、46号・47号全景  
48号全景
- 図版97 C区49号住居跡  
全景、遺物出土状況(1)  
遺物出土状況(2)
- 図版98 C区50号・51号(1)住居跡  
50号全景、51号全景  
51号遺物出土状況(1)
- 図版99 C区51号(2)・52号(1)・53号住居跡  
51号遺物出土状況(2)  
52・53号全景、52・53号全景
- 図版100 C区52号(2)・54号住居跡  
52号カマド、54号全景  
54号遺物出土状況
- 図版101 C区55号・56号(1)住居跡・67号土坑  
55号・67号土坑全景、55号貯蔵穴、  
56号全景
- 図版102 C区56号住居跡(2)  
遺物出土状況(1)、遺物出土状況(2)  
遺物出土状況(3)
- 図版103 C区57・58号住居跡  
57号全景、57号同遺物出土状況  
58号全景
- 図版104 C区59号住居跡(1)  
全景、遺物出土状況(1)  
遺物出土状況(2)
- 図版105 C区59号住居跡(2)  
遺物出土状況(3)、遺物出土状況(4)  
遺物出土状況(5)
- 図版106 C区59号(3)・60号(1)住居跡  
59号遺物出土状況(6)  
60号全景、60号炉跡
- 図版107 C区60号(2)・61号(1)住居跡  
60号炉跡、61号全景  
61号焼土炭化物検出状況
- 図版108 C区61号住居跡(2)  
炉跡、遺物出土状況(1)  
遺物出土状況(2)
- 図版109 C区62・63号住居跡  
62号全景、62号炉跡、63号全景
- 図版110 C区64号住居跡  
全景、遺物出土状況(1)  
遺物出土状況(2)
- 図版111 C区65・66号・67号(1)住居跡  
65号全景、66号全景、67号全景
- 図版112 C区67号(2)・68号住居跡  
67号遺物出土状況(1)  
67号遺物出土状況(2)、68号全景
- 図版113 C区69号・70号(1)住居跡  
69号全景、70号全景  
70号遺物出土状況(1)
- 図版114 C区70号(2)・71号住居跡  
70号遺物出土状況(2)  
70号遺物出土状況(3)、71号全景
- 図版115 C区72・73号住居跡  
72号全景、72号遺物出土状況  
73号全景
- 図版116 C区74・75号住居跡  
74号全景、75号全景  
75号遺物出土状況
- 図版117 C区76・77・78号住居跡  
76号全景、77号全景、78号全景
- 図版118 C区79・80号・81号住居跡  
79号全景、80号全景、81号全景
- 図版119 C区82・83号住居跡・77号土坑  
82号・77号土坑全景、  
83号全景、83号炉跡
- 図版120 C区畠跡・土坑(1)  
17号畠跡、79号土坑、70号土坑

	71号土坑、72号土坑、73号土坑	42-10、11、14、15、16
	74号·75号土坑、76号土坑	45-1、2、3
	78号土坑	
图版121	C区土坑(2)	图版129 C区45号(2)·48号·49号(1)住居跡 出土遺物
	79号、80号、81号、82号	45-7、8、48-1、2
	82号土坑遺物出土狀況	49-1、3、5、6、7、8
	83号土坑遺物出土狀況、84·85号、 86号	图版130 C区49号住居跡出土遺物(2)
图版122	C区土坑(3)	9、10、11、13、14、15
	87号、88·89号、90号、91号	图版131 C区49号住居跡出土遺物(3)
	93号、94·95号、97号桶檢出狀況	16、17、18、19、20
	96号桶内遺物出土狀況(1)	图版132 C区49号(4)·51号(1)住居跡出土遺物
图版123	C区土坑(4)	49-22、23、24、25、28、29
	96号桶内遺物出土狀況(2)	51-1
	97·98号、99号	图版133 C区51号(2)·52号(1)住居跡出土遺物
	100·101·102号、103号	51-4
	104号、105号、106号	52-1、2、3、4、5、6、7
图版124	C区土坑(5)	8、9
	107号、108号、109号、110号	图版134 C区52号住居跡出土遺物(2)
	111号、112号、113号、114号	10、11、12、13、14、15、16
图版125	C区土坑(6)·井戸跡·弥生時代遺物 包含層	图版135 C区52号住居跡出土遺物(3)
	115·116号土坑、117号土坑	17、18、19、21、25
	1号井戸跡	图版136 C区52号(4)·53号(1)住居跡出土遺物
	包含層土器出土狀況(1)	52-29、30、32
	包含層土器出土狀況(2)	53-9、10、11、12
	包含層土器出土狀況(3)	图版137 C区53号(2)·54号·55号(1)住居跡 出土遺物
图版126	C区31·32·33·40号·41号(1) 住居跡出土遺物	53-13、14、17~41
	31-3、32-2、33-5、6、7	54-1、2、3、7、55-1
	40-2、41-3、4、5	图版138 C区55号(2)·56·57号·58号(1) 住居跡出土遺物
图版127	C区41号(2)·42号(1)住居跡出土遺 物	55-4、56-3、15、57-5
	41-6	58-1、2、3、4、5
	42-2、3、4、6、7、8、9	图版139 C区58号住居跡出土遺物(2)
图版128	C区42号(2)·45号(1)住居跡出土遺 物	6、8、9、10、11、12、13、14
		图版140 C区58号(3)·59号(1)住居跡出土遺物
		58-15、17、18
		59-1、5、6、7、8

- 图版141 C区59号住居跡出土遺物(2)  
 9、10、11、12、13、14、23  
 75-11、12、15、16、17、18、19  
 76-1、2、3
- 图版142 C区59号(3)·60号·61号(1)住居跡  
 出土遺物  
 59-24、60-1、2  
 61-1、6、11、12  
 图版148 C区76号(2)·77号·79号(1)住居跡  
 出土遺物  
 76-4、5、8、9、10、11  
 77-1、79-1
- 图版143 C区61号(2)·62·64号·67号(1)  
 住居跡出土遺物  
 61-14、62-4、64-3、4  
 67-1、2、4、5  
 图版149 C区79号(2)·80号·81号(1)住居跡  
 出土遺物  
 79-2、3、6、80-1、6  
 81-2、3、5
- 图版144 C区67号住居跡出土遺物(2)  
 6、12、14、18、19、20、22  
 图版150 C区81号(2)·82号·83号(1)住居跡  
 出土遺物  
 81-6、8、82-1  
 83-2、3、5、6、8、9
- 图版145 C区67号(3)·70·71号·72号(1)  
 住居跡出土遺物  
 67-23、24、32、34、70-1  
 71-1、72-1  
 图版151 C区83号住居跡出土遺物(2)  
 10、11、15、16、17、18、21、22
- 图版146 C区72号(2)·73·74号·75号(1)  
 住居跡出土遺物  
 72-3、4、73-4、9  
 74-2、75-3、5、7  
 图版152 C区83号(3)·84号住居跡·土坑·  
 井戸跡·畠跡出土遺物  
 83-23、24、84-1  
 78土坑-1、81土坑-1  
 1井戸-1、16畠-1
- 图版147 C区75号(2)·76号(1)住居跡出土遺物

# I 発掘調査の概要

## 1 調査に至る経過

平成9年10月9日、熊谷市長から熊谷市教育委員会教育長に対して、熊谷市大字東別府1390番地他地内の、総面積61,280㎡に及ぶ、準用河川新奈良川第3調節池事業予定地内における文化財の所在及び取扱いについて協議があった。

この協議に対して、熊谷市教育委員会教育長から熊谷市長に対して、開発予定地が現時点では埋蔵文化財の所在は確認されていないものの、周知の遺跡（別府条里遺跡・遺跡番号59-49）の縁辺部にあたり、遺跡の存在する可能性の非常に高い地域であるため、事前に埋蔵文化財の所在を確認するための試掘調査を必要とする旨、平成9年10月15日付けで回答した。

この回答に対し、熊谷市長から平成9年10月15日付けで、埋蔵文化財の所在を確認するための試掘調査の依頼を受けた。

平成9年12月1日から同月9日にかけて試掘調査を実施した結果、当該地が古墳時代から平安時代に及ぶ複合集落であることが確認された（一本木前遺跡・遺跡番号59-115）ため、開発予定地は、現状で保存するか、または埋蔵文化財に影響を及ぼさない方法での開発が望ましい旨、平成9年12月19日付けで回答した。

その後、両者において保存策について協議を重ねたが、開発事業に重要性・緊急性があり、工事の中止及び他所への変更は不可能である点が確認され、やむを得ず、記録保存の措置を講ずることとなった。

発掘調査は、対象が広範囲に及ぶため、A～F区の6区に区分された工区に合わせて分割し、第1次調査（平成10年度・A地区）、第2次調査（平成11年度・A地区の北地域、B地区の東端部、D・E地区）、第3次調査（平成12年度・B地区の中央部、E・F地区）、第4次調査（平成13年度・B地区西地域、C地区南地域、F地区西地域）、第5次調査（平成14年度・A地区北西地域、B地区北地域、C地区中央から北地域）というように、平成10年度から平成14年度の5次・5ヵ年に亘って実施することとなった。

そして、報告は、第1次・平成10年度調査分は平成11年度にというように、発掘調査翌年に行うこととした。よって、今回報告するのは、第5次・平成14年度発掘調査分及び最終年度としてのまとめである。

発掘調査に先立って、熊谷市長から文化財保護法第57条の3第1項に基づく埋蔵文化財発掘の通知が、平成13年9月4日付け熊河発第93号で提出された。これに対し、埼玉県教育委員会教育長から、周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について、平成13年12月31日付け教文第3-561号をもって、発掘調査実施の指示通知があった。

また、熊谷市教育委員会教育長は、文化財保護法第58条の2第1項に基づく埋蔵文化財発掘の報告（第5次調査分）を平成14年5月31日付け熊教社発第235号で提出した。

## 2 発掘調査・報告書作成の経過

第1次発掘調査は、平成10年6月1日より平成11年3月31日まで、第2次発掘調査は、平成11年6月1日より平成12年7月28日まで、第3次発掘調査は、平成12年6月1日より平成13年3月31日まで、第4次発掘調査は、平成13年6月1日より平成14年3月31日まで、それぞれ実施された。

今回報告の第5次発掘調査は、平成14年6月1日より開始された。重機による遺構確認面までの掘削、遺構確認、遺構掘り下げ、遺構精査、遺物取り上げ、実測、写真撮影と、一連の調査を繰り返し、平成15年1月31日をもって調査を終了した。調査対象面積は、総対象面積のうち7,787㎡である。

第1次・2次・3次・4次発掘調査分についてはそれぞれ、「一本木前遺跡」「一本木前遺跡II」「一本木前遺跡III」「一本木前遺跡IV」として既に報告書を刊行済みである。

第5次調査分の整理・報告書作成作業は、平成15年4月1日より開始された。遺物の洗浄・注記・復元作業を行い、並行して遺構の図面・写真整理を行った。7月に入り遺物の実測・拓本取り、8月には遺構のトレース・版組みを開始していった。10月からは遺物のトレース・版組み、遺物の写真撮影、11月からは写真図版の作成、原稿執筆、割付を行い、1月に印刷業者を決定した。入稿後、3ヶ月に亘って構成を行い、本報告書の刊行に至ったものである。

## 3 発掘調査、整理・報告書刊行の組織

主体者 熊谷市教育委員会

### (1) 発掘調査（平成14年度）

教育長	飯塚 誠一郎
教育次長	小林 武夫
社会教育課長	岩田 隆
副参事	田中英司
課長補佐	藤原 清
主幹兼係長	金子 正之
主査	寺社下 博
主査	浅見 敦夫
主査	吉野 健
主事	松田 哲
発掘調査員	船場 昌子
発掘調査員	渡邊 大士

### (2) 整理調査（平成15年度）

教育長	飯塚 誠一郎
教育次長	田島 洋利
社会教育課長	平井 隆
副参事	田中英司
課長補佐	藤原 清
主幹兼係長	金子 正之
主査	寺社下 博
主査	吉野 健
主事	松田 哲
事務員	松村 聡
発掘調査員	船場 昌子

## II 遺跡の立地と環境

**遺跡の立地** 一本木前遺跡は、熊谷市大字東別府1930番地他に所在する。荒川と利根川の最も近接する地域にあって、荒川の北約5.2km、利根川の南約5.2kmに位置する。またJR高崎線籠原駅からは、北約3.0kmにあたる。

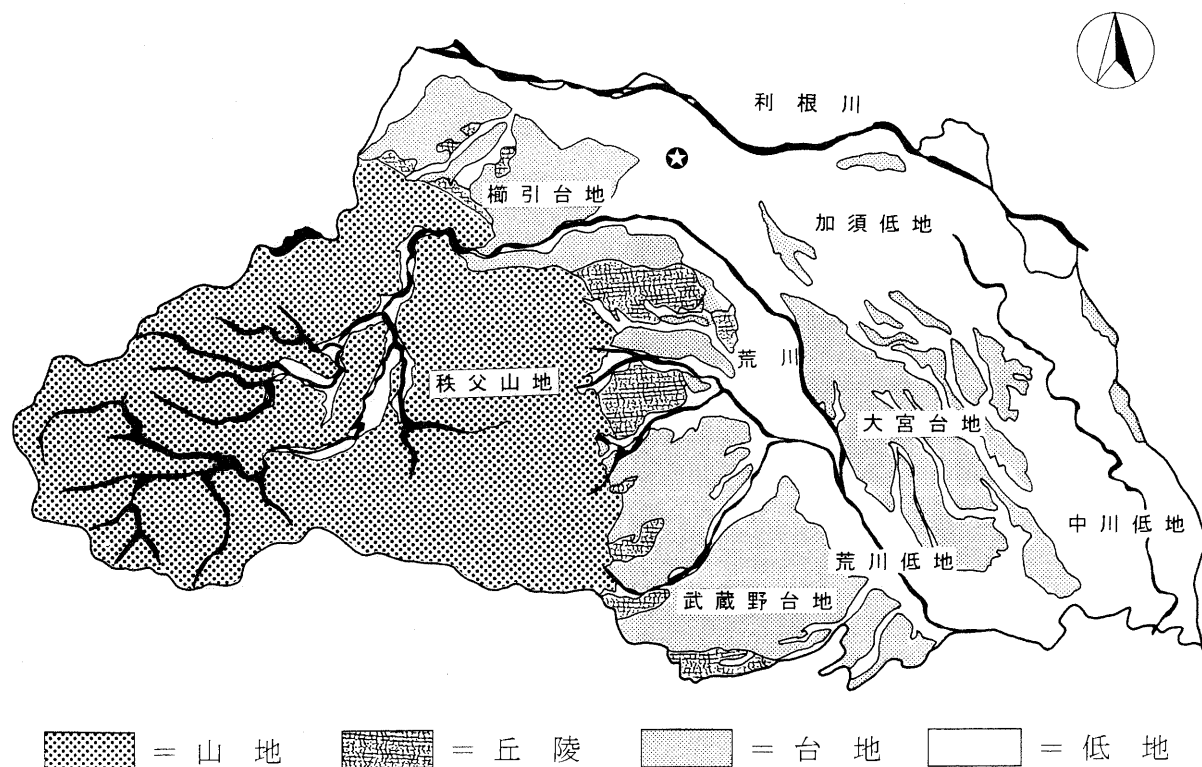
熊谷市域は、西部が櫛挽台地上、荒川以南が江南台地上に位置するほか、大半は新荒川扇状地（熊谷扇状地）上に含まれる。また市域の北縁から北東縁にかけては、利根川によって形成された妻沼低地がひろがっている。

本遺跡の所在する東別府地区は、熊谷市の北西部に当たり、旧集落が立地する櫛挽台地北東隅部と、その北部に広がる低地帯の両者が含まれている。櫛挽台地北東部の北面は、低地帯と1～2mの断崖をなすものの、東面は緩傾斜で低地帯に移行している。また低地帯は、熊谷扇状地末端地と妻沼低地末端地が錯綜する地に当たり、複雑に入り組んだ湧水地、旧河道、自然堤防によって形成されている。

このような地域であるため、低地帯では、両河川の氾濫等によって砂・シルト・粘土層が幾重にも厚く堆積し、遺跡の発見を遅らせる原因ともなっている。

しかしこうした土壌であるため、現況では大規模に整理された麦畑あるいは水田として大いに利用されている所でもある。標高は、30.0m前後である。

こうした土地の性格上、本地域にはまだまだ未発見の遺跡が多数存在する可能性が高い。



第1図 埼玉県の地形図



## 歴史的環境

(第2図)

本遺跡を中心とした熊谷扇状地末端付近の荒川の古流路地域及び、櫛挽台地北端と妻沼低地南端の接する地域では、低地上に弥生時代中期の初期稲作が展開されるのであるが、特に櫛挽台地北端と妻沼低地南端の接する地域では、先行する縄文時代の遺跡も散見される。さらに櫛挽台地上では、時代が遡る様相を呈している。

このような中、現在までの段階で最古の遺物と考えられるのは、櫛挽台地上東端の籠原裏遺跡(73)から発見された黒曜石製尖頭器(旧石器時代)である。縄文時代に入っては、櫛挽台地上北端の深谷市東方城跡(28)から検出された尖頭器が、草創期に該当すると考えられている。しかし、いずれも覆土中からの出土であり、詳細は不明である。

前期に入ると、やはり櫛挽台地上に集落跡が確認されてくる。櫛挽台地北東先端部に位置する寺東遺跡(61)では、前期(関山式)土器が検出されている。櫛挽台地は、寺東遺跡の所在する北東端部では、北もしくは東に向けて緩斜面を成して低地へ移行するが、現荒川に近接する南部三ヶ尻地区では、東に広がる熊谷扇状地との間に断崖を成している。この三ヶ尻地区に位置する林遺跡(94)では、前期(黒浜式)の集落跡が検出されており、さらに台地奥部の小台遺跡(33)でも前期(黒浜式・諸磯b式)の土器等が発見されている。また、小台遺跡の周辺でも早期の遺物が、同様に近在の割山遺跡(未掲載)でも前期(諸磯a式)土器が検出されている。このように、前期(一部早期も含む)の遺跡は、全て櫛挽台地上に位置しているといえる。

中期には、さらに遺跡数が増加する。櫛挽台地上には、前期から継続する小台遺跡(33・中葉-中峠式)及びその周辺部、さらに後葉にかけては、深谷町遺跡(26)、根岸遺跡(木の本古墳群Bのほぼ中央部・勝坂式)、三ヶ尻遺跡(90)、寺東遺跡(61)が所在している。

一方、寺東遺跡の北・妻沼低地上には、城西遺跡(21)、上敷免遺跡(10)、本郷前遺跡(11)、原遺跡(15)、前遺跡(18)が福川の自然堤防上に、また別府沼(利根川旧河川)の緩斜面上には石田遺跡(49)・入川遺跡(43)や深町遺跡(44)など、中期(加曾利E式)から後期(堀之内式)に及ぶ集落跡が確認されている。

こうした低地帯の中期の遺跡は、そのほとんどが後期に継続する特色をもっている。

後期に開始される遺跡には、福川の自然堤防上に、新屋敷東遺跡(11・晩期に継続)、明戸東遺跡(13)、清水上遺跡(25)が、別府沼の緩斜面上には先に見た石田遺跡の対岸に、後期(加曾利B式)の土器群が検出された横間栗遺跡(45)が所在しているのを始め、一本木前遺跡(\*)でも土器群が検出されている。

一方、熊谷市東部地域での縄文時代の遺跡は、肥塚古墳群内(J)、諏訪木遺跡(118・加曾利B式)や北島遺跡(80)、池上遺跡(119)などで、いずれも後期(北島遺跡では晩期まで継続しており、前中西遺跡(117)では晩期の土器群が検出されている。)の土器や石器が検出されており、西部地域同様、低地帯旧河川の緩斜面上での集落形成が展開されてきた状況がうかがえる。

縄文時代後期の集落跡が検出された横間栗遺跡(45)は、弥生時代中期(須和田式期)の再葬墓16基が検出されていることでも知られている。横間栗遺跡は、先にみたとおり別府沼左岸の自然堤防上に立地しているが、こうした弥生時代中期中葉の再葬墓は、熊谷

市三ヶ尻遺跡内の上古遺跡（89）が櫛挽台地上に位置する他は、深谷市森下遺跡（8）、上敷免遺跡（10）、明戸東遺跡（13）、妻沼町飯塚北遺跡（35）、飯塚遺跡（36）、飯塚南遺跡（37）等、いずれも横間栗遺跡の北側一帯に展開される妻沼低地上に集中的に所在しているのである。このうち横間栗遺跡や飯塚北遺跡では、再葬の過程が推定される人骨や灰、焼土を含む土坑が検出されている。

また、当該期の集落遺跡は、再葬墓より若干時期が下がるが、やはり妻沼低地上に、森下遺跡（8）、上敷免遺跡（10）、宮ヶ谷戸遺跡（14）、関下遺跡（46）、一本木前遺跡（\*）、飯塚遺跡（36）、飯塚南遺跡（37）等が知られている。また櫛挽台地上の別府氏館跡（60）、寺東遺跡（61）でも当該期の土器が検出されている。このうち上敷免遺跡では、前期（遠賀川式）の土器も検出されており、集落の開始が遡る可能性がある。

一方、熊谷市東部地域から行田市に及ぶ熊谷扇状地の末端（標高約26m前後）にも、弥生時代中期のいまひとつの集中がみられる。

北島遺跡（80）では、中期後半の再葬墓や土坑墓が検出されている。また、近在する前中西遺跡（117）では、北島遺跡に後続する中期後半～後期初頭の再葬墓と方形周溝墓さらには木棺墓という、異なる三つの葬送形態が同居しており、異彩を放っている。さらに、前中西遺跡や北島遺跡の東に位置する行田市の小敷田遺跡（120）では、これら両遺跡に先行する、関東地方で最古段階の須和田式期の方形周溝墓5基が検出されている。またこれら三遺跡に囲まれた星川・忍川流域に立地する、翡翠の勾玉が出土した古宮遺跡（116）、多量の磨製石鏃が出土した諏訪木遺跡（118）、水田と隣接する環濠集落の池上遺跡・池上西（119）、平戸遺跡（121）でも当該期の土器群が検出され、大規模な集落が展開されているのである。

このうち北島遺跡では、掘立柱建物跡や土坑と共に70軒を超える住居跡を中心に、堰・水路や5～8mの方形区画をもつ水田跡も検出されている。時期は、開始が前期末（土坑）とされ、中期から後期に及ぶ。装着されたままの打製石斧、大型蛤刃石斧、扁平片刃磨製石斧、磨製石鏃、弓・容器等の木製品等、大量の遺物が出土している。すでにこの時期に、扇状地末端の湧水地を背景として低地を利用した、大規模で積極的な水田経営が行われていたことを明白に物語っている、といえよう。

このように、妻沼低地に集中する遺跡群と、熊谷扇状地末端に集中する2つの遺跡群にあって、立地状況及びその開始が前期に遡る可能性をもつという共通性をもつものの、墓制においては、再葬墓と方形周溝墓の両者を併せもつ前中西遺跡を境にして、熊谷市の東部と西部で、まったく異なる制度が展開されていた様子が伺えるのである。

弥生時代中期の立地状況は、後期に至ってもそのまま踏襲され、依然として妻沼低地上と熊谷扇状地末端部の2地点に集中するが、それぞれの地域が拡大する様相が加わってくる。

先の妻沼低地上には、深谷市明戸東遺跡（13）、清水上遺跡（25）、妻沼町弥藤吾新田遺跡（38）等が所在し、明戸東遺跡では吉ヶ谷式の集落及び二軒屋式系櫛描文土器、清水上遺跡では櫛描文土器、弥藤吾新田遺跡では弥生町式土器が検出されている。

東部の北島遺跡周辺では、北島遺跡（80）、中条条里遺跡内（83）の東沢遺跡、行田市池守遺跡（地図未掲載）等、大規模な集落遺跡が展開されてくる様相を呈してくる。ほとんどで吉ヶ谷式土器が出土している。また、北島遺跡の西に接した天神遺跡（77）では、小規模な集落が確認されている。

古墳時代前期に入ると、立地状況は前代を踏襲するものの、遺跡数は増大し、さらには各遺跡それぞれの規模も拡大してくる。

熊谷市西部から深谷市にかけての妻沼低地上では、深谷市域の戸森松原遺跡（7）上敷免遺跡（10）、本郷前東遺跡（11）、明戸東遺跡（13）、宮ヶ谷戸遺跡（14）、前遺跡（18）、戸森前遺跡（19）、東川端遺跡（24）、清水上遺跡（25）、妻沼町域の弥藤吾新田遺跡（38）、鶴ノ森入胎遺跡（40）、熊谷市域の根絡遺跡（42）、横間栗遺跡（45）、一本木前遺跡（\*）、中耕地遺跡（50）等で集落が営まれている。このうち一本木前遺跡、弥藤吾新田遺跡は、大規模な集落が想定されており、清水上遺跡では畠跡も検出されている。

さらに、上敷免遺跡（9）では9基、東川端遺跡（24）では6基、一本木前遺跡（\*）では4基の方形周溝墓群が検出されており、いずれも墓域を形成している。このうち東川端遺跡第2号方形周溝墓からはパレススタイルの大型壺が、一本木前遺跡2号方形周溝墓からは器台・埴等の土器群と共に、方台部中央に検出された主体部からは翡翠製勾玉・碧玉製管玉等が出土している。

一方、熊谷市東部から行田市域の熊谷扇状地末端から妻沼低地の錯綜地帯では、池上遺跡（119）、池守遺跡（地図未掲載）、小敷田遺跡（120）、皿尾遺跡（地図未掲載）、東沢遺跡（83）、天神遺跡（77）、北島遺跡（80）、天神東遺跡（82）、中条遺跡内の雷電塚遺跡（I-a南接周辺）等、多数の集落遺跡が知られている。このうち小敷田遺跡では、畿内や東海地方系の土器が出土し、雷電塚遺跡からは脚部穿孔高杯・器台・S字口縁台付甕と共に剣型をはじめとした多数の滑石製模造品が出土している。また小敷田遺跡、東沢遺跡、北島遺跡からは鋤・鍬等多数の木製農具が出土している。

さらに小敷田遺跡では18基、東沢遺跡でも数基の方形周溝墓が確認され、両周溝墓群の溝内からは木製の鋤等、多数の木器類が検出されている。

このように、弥生時代中期（一部では前期の可能性）に開始された低地帯での稲作農耕は、それぞれの地で継承され、規模等が発展・拡大し、定着してきた様相を呈しているのである。

中期の様相は今ひとつ明確ではないが、各遺跡の規模は小さいものの、当該期の遺物が出土する遺跡数は多い。

西部の妻沼低地上では、深谷市の砂田遺跡（5）森下遺跡（8）、上敷免遺跡（10）、新田裏遺跡（12）、宮ヶ谷戸遺跡（14）、原遺跡（15）、城北遺跡（16）、居立遺跡（17）、戸森前遺跡（19）、東川端遺跡（24）、熊谷市の一本木前遺跡（\*）等で1軒～9軒の住居跡が検出されている。このうち東川端遺跡では、剣型の滑石製模造品を用いた集落内祭祀が確認されている。

また、深谷市の戸森松原遺跡（7）、妻沼町の飯塚北遺跡（35）内の飯塚古墳群（C）

では、後期に移行する5世紀後半の時期所産の、方形周溝墓と円形周溝墓の共存した状況がみられる。戸森松原遺跡では、方形周溝墓3基、円形周溝墓10基が検出されており、方形から円形（大型のものは円墳）への変化と捉えている。飯塚古墳群では、方形周溝墓3基、円形周溝墓（全て円墳として捉えられている）16基が検出されており、やはり方形から円形への変化と捉えている。本古墳群は、7世紀代まで継続する。

一方、東部の中条遺跡内の権現山遺跡（I-a 西接付近）では把手付大型甗を伴った出現期の竈を備えた住居跡が検出され、北島遺跡では須恵器瓦を模倣した土師器小型壺が出土している。さらに最近の調査では、藤之宮遺跡（28）でも一括の土器群が検出されている。いずれも中期後半以降の所産であり、東部地区では、今後の調査への期待が大きい。

明確な古墳の出現は、中期の後半、B種横刷毛をもつ朝顔型円筒埴輪をもつ前方後円墳・横塚山古墳をもってその嚆矢とする。

西部地区では、妻沼低地上に立地する、この横塚山古墳を初源として、その周辺部で埴輪盛期の古墳が群在している。現在までのところ、妻沼低地上最西端に立地する古墳群は上増田古墳群（A）であり、直径20m以下の円墳12基が確認されている。北方には、先にみた、方形周溝墓から始まり、6世紀初頭から7世紀まで継続する円墳群で構成される妻沼町飯塚古墳群（C）が位置している。さらに妻沼町域では、福川に沿って上江袋古墳群（D）、王子古墳（地図未掲載）、鶴ノ森入胎遺跡（40）内古墳、が点在（全て円墳）している。

横塚山古墳群の南に位置し、熊谷低地上に立地する玉井古墳群（H）は、17基の円墳と、2基の方墳で構成されている。このうち調査された新ヶ谷戸1号墳は、円墳で川原石積み の胴張り型の横穴式石室をもち、土師器・須恵器・直刀・鉄鏃等が出土している。

熊谷低地を南下すると、葉師堂古墳（円墳・控積の横穴式石室、銅釧・耳環・直刀・鉄鏃・埴輪）を中心とする坪井古墳群（L）、埴輪をもつ8基の円墳からなる石原古墳群（N）と続く。

また、櫛挽台地縁辺部にも古墳群が形成されている。東南端に位置している三ヶ尻古墳群（K）は、二子山古墳・運派塚古墳という2基の前方後円墳と58基の円墳で構成されている。埴輪をもつ場合と持たない場合があるが、石室は河原石使用の横穴式石室である。そのうち、やねや塚古墳は、全周する円筒埴輪列のほか、人物・馬・大刀・家形埴輪が検出されている。また石室内から頭椎大刀・鉄鏃・耳環・銅釧等が出土している。台地北東端では、前方後円墳1基、円墳16基で構成される別府古墳群（E）がある。このうち円墳・仲廓古墳が調査され、円筒埴輪列が検出されている。またヤス塚古墳では、農夫の埴輪が出土しているなど、形象を含む埴輪盛期の古墳が継続して造営されている。この櫛挽台地北東端の別府古墳群から、台地北縁に沿って西行すると、東西に延々と続く木の本古墳群（B）が分布している。最大規模の古墳は、径50mを計る稲荷町北古墳であり、前方後円墳の可能性も考えられている。その他、径30mを超える古墳も4基確認されており、大規模な古墳群である。

一方、東部地区・熊谷低地で出現した中条古墳群内（I）の鎧塚古墳（b）は、盾型の

周溝をもち、前方部を西に向けた帆立貝式全前方後円墳で、全長43.8mを測る。須恵器高杯型器台を中心に土師器高杯・坏・甕をセットとした墓前祭祀土器群が2ヶ所検出されている。女塚1号墳(c)は、二重周溝をもつが、やはり前方部を西に向けた帆立貝式前方後円墳で、全長46.0mを測る。前方部及び周溝外堤から盾持武人埴輪、太鼓を抱える人物埴輪等、多数の形象埴輪の出土が特徴的である。両古墳共5世紀末頃の築造と考えられている。また両古墳は、東西約200mの距離に位置し、周囲に円墳が群在する。そのうち2号墳(d)では馬・鹿・猪等の動物や人物等の形象埴輪が出土し、4号墳(e)では川原石使用の礫礮が検出されている。これらを含む中条古墳群(I)では、国重要文化財の馬型・武人埴輪を出土した鹿那祇東古墳(f)、最近の調査で検出された北島遺跡(80)内の古墳群等の、埴輪最盛期の古墳から、直径38m、周溝をもち中央に長方形の礫敷のみられた権現山古墳(a)や、側壁に切組積の角閃石安山岩、天井・奥壁に緑泥片岩を用いた大型の横穴式石室をもつ大型円墳・大塚古墳(g)まで、5世紀の末頃から7世紀前半までの古墳が造営され続ける。

こうした状況は、中条古墳群の南に位置する、現存する東光寺古墳を中心とした上之古墳群(O)、16基の円墳が確認された肥塚古墳群(J)でも同様(開始時期は6世紀)である。このうち、肥塚古墳群では川原石乱石積と角閃石安山岩切組積2種類の胴張型横穴式石室が確認されており、後者は利根川系、前者は荒川系の石材であり、中条古墳群内の大塚古墳(g)同様、両河川の相克によって作り出された当地の地形的特長と一致し、非常に興味深い様相を呈しているのである。

このような、埴輪をもつ古墳からもたない古墳へと継続して築造され続けた古墳群とは異なり、埴輪消滅後に築造が開始された古墳群も現れる。広瀬古墳群(M)、籠原裏古墳群(G)、在家古墳群(F)が、それである。

熊谷扇状地の要付近に築造された広瀬古墳群(M)は、上円下方墳である宮塚古墳、蕨手刀を出土した熊谷商業高校内古墳などで構成されている。宮塚古墳は、現況では上円下方の形態を示しているが、一部露出した墳丘裾部の観察から、多角形墳の可能性も考えられている。

櫛挽台地東縁部に築かれていた三ヶ尻古墳群(K)と別府古墳群(E)の中間台地上には、埴輪をもたず、川原石乱石積の胴張型横穴式石室を有する古墳群が南北に分離して築造されてくる。南側には、一部の古墳に八角形や六角形の終末期古墳を含む籠原裏古墳群(G)が築かれる。10基から成り、いずれも7世紀の後半から末の築造と考えられる。

北側には、これよりもやや先行する7世紀台の6基が確認された在家古墳群(F)が築かれている。

これら三古墳群は、南から広瀬古墳群(M)、籠原裏古墳群(G)、在家古墳群(F)と、ほぼ南北の直線状に位置し、その延長線上には、8世紀初頭の創建と考えられる西別府廃寺(56)、7世紀中ごろから11世紀まで継続された、石製模造品・土錘・墨書土器を用いた水源祭祀跡である西別府祭祀遺跡(55・旧湯殿神社祭祀遺跡)、さらには、幡羅郡衙に比定されている幡羅遺跡(29)が連なるのである。



- |                    |            |             |             |
|--------------------|------------|-------------|-------------|
| 深谷市                | 41 東城遺跡    | 82 天神東遺跡    | F 在家古墳群     |
| 1 住原氏館跡            | C 飯塚北古墳群   | 83 中条条里東沢遺跡 | G 籠原裏古墳群    |
| 2 ウツギ内遺跡           | D 上江袋古墳群   | 84 樋の上遺跡    | H 玉井古墳群     |
| 3 蓮沼氏館跡            | 熊谷市        | 85 上辻遺跡     | I 中条古墳群     |
| 4 堀内遺跡             | 42 根絡遺跡    | 86 下辻遺跡     | a 権現山古墳     |
| 5 砂田遺跡             | 43 入川遺跡    | 87 東遺跡      | b 鎧塚古墳      |
| 6 柳町遺跡             | 44 深町遺跡    | 88 三尻中学校遺跡  | c 女塚1号墳     |
| 7 戸森松原遺跡           | 45 横間栗遺跡   | 89 三ヶ尻上古遺跡  | d 女塚2号墳     |
| 8 森下遺跡             | 46 関下遺跡    | 90 三ヶ尻遺跡    | e 女塚4号墳     |
| 9 上敷免北遺跡           | 47 別府条里遺跡  | 91 若松遺跡     | f 鹿那祇東古墳    |
| 10 上敷免遺跡           | 48 横塚山遺跡   | 92 黒沢館跡     | g 大塚古墳      |
| 11 本郷前東・<br>新屋敷東遺跡 | 49 石田遺跡    | 93 三ヶ尻天王遺跡  | J 肥塚古墳群     |
| 12 新田裏遺跡           | ※ 一本木前遺跡   | 94 三ヶ尻林遺跡   | K 三ヶ尻古墳群    |
| 13 明戸東遺跡           | 50 中耕地遺跡   | 95 肥塚中島遺跡   | L 坪井古墳群     |
| 14 宮ヶ谷戸遺跡          | 51 西通遺跡    | 96 出口下遺跡    | M 広瀬古墳群     |
| 15 原遺跡             | 52 東通遺跡    | 97 肥塚氏館跡    | N 石原古墳群     |
| 16 城北遺跡            | 53 奈良東耕地遺跡 | 98 出口上遺跡    | O 上之古墳群     |
| 17 居立遺跡            | 54 光屋敷遺跡   | 99 八幡上遺跡    | P 村岡古墳群     |
| 18 前遺跡             | 55 西別府祭祀遺跡 | 100 河上氏館跡   | 川本町         |
| 19 戸森前遺跡           | 56 西別府廃寺   | 101 庚甲塚遺跡   | 126 亥の堀遺跡   |
| 20 血沼城跡            | 57 西別府館跡   | 102 松原遺跡    | 127 長在家遺跡   |
| 21 城西遺跡            | 58 原遺跡     | 103 社裏北遺跡   | 128 大門遺跡    |
| 22 八日市遺跡           | 59 別府城跡    | 104 社裏南遺跡   | 129 山ノ腰遺跡   |
| 23 幡羅太郎遺跡          | 60 別府氏館跡   | 105 社裏遺跡    | 130 舟山遺跡    |
| 24 東川端遺跡           | 61 寺東遺跡    | 106 臺遺跡     | 131 荷鞍ヶ谷戸遺跡 |
| 25 清水上遺跡           | 62 天神下遺跡   | 107 高根遺跡    | 132 白草遺跡    |
| 26 深谷町遺跡           | 63 土用ヶ谷戸遺跡 | 108 不二ノ腰遺跡  | 133 諦光寺跡遺跡  |
| 27 斤鼻和城跡           | 64 稻荷東遺跡   | 109 兵部裏屋敷遺跡 | 134 百済木遺跡   |
| 28 東方城跡            | 65 奈良氏館跡   | 110 御藏場跡遺跡  |             |
| 29 幡羅遺跡            | 66 新ヶ谷戸遺跡  | 111 熊谷氏館跡   |             |
| 30 中宿遺跡            | 67 玉井陣屋跡   | 112 箱田氏館跡   |             |
| 31 桜ヶ丘石組遺跡         | 68 在家遺跡    | 113 藤乃宮遺跡   |             |
| 32 秋元氏館跡           | 69 稻荷木遺跡   | 114 成田氏館跡   |             |
| 33 小台遺跡            | 70 水押下遺跡   | 115 上河原遺跡   |             |
| A 上増田古墳群           | 71 中条氏館跡   | 116 古宮遺跡    |             |
| B 木の本古墳群           | 72 中条遺跡    | 117 前中西遺跡   |             |
| 妻沼町                | 73 籠原裏遺跡   | 118 諏訪木遺跡   |             |
| 34 高城城跡            | 74 下河原遺跡   | 119 池上遺跡    |             |
| 35 飯塚北遺跡           | 75 拾六間後遺跡  | 120 小敷田遺跡   |             |
| 36 飯塚遺跡            | 76 堂西遺跡    | 121 平戸遺跡    |             |
| 37 飯塚南遺跡           | 77 天神遺跡    | 122 持田藤の宮遺跡 |             |
| 38 弥藤吾新田遺跡         | 78 女塚遺跡    | 123 万吉西浦遺跡  |             |
| 39 道ヶ谷戸遺跡          | 79 中島遺跡    | 124 村岡遺跡    |             |
| 40 鶴森入胎遺跡          | 80 北島遺跡    | 125 市田氏館跡   |             |
|                    | 81 田谷遺跡    | E 別府古墳群     |             |

第2図 一本木前遺跡周辺遺跡分布図

古墳時代後期における西部地域の集落遺跡は、櫛挽台地東端部では、熊谷市域の樋之上遺跡（84）、上辻遺跡（85）、下辻遺跡（86）、三尻中学校遺跡（88）、三ヶ尻遺跡内の天王遺跡（93）等があり、いずれも奈良・平安時代へと継続している。

また妻沼低地の自然堤防上では、熊谷市域の一本木前遺跡（\*）、根絡遺跡（42）、天神下遺跡（62）、深谷市域の砂田遺跡（5）、柳町遺跡（6）、上敷免北遺跡（9）、上敷免遺跡（10）、新屋敷東・本郷前東遺跡（11）、宮ヶ谷戸遺跡（14）、原遺跡（15）、城北遺跡（16）、居立遺跡（17）、前遺跡（18）、戸森前遺跡（19）、城西遺跡（21）、八日市前遺跡（22）、東川端遺跡（24）、清水上遺跡（25）、妻沼町域の飯塚南遺跡（37）、道ヶ谷戸遺跡（38）等、遺跡数・規模共に爆発的に拡大する。

特に一本木前遺跡では、300軒を越える住居跡が検出され、その規模は群を抜いている。また一本木前遺跡では、河川の入り江脇、住居内（廃絶後）に数ヶ所の祭祀跡が検出されている。河川の入り江脇祭祀跡（A区1号祭祀跡）では、入り江の南岸に平坦面を作り出し、礫が敷かれていた。その北東端に馬の下顎が置かれ、東辺に須恵器の甕、これから西へ鍵形に連続した平坦面北端に土師器の甕が配され（河川と平坦面の境界に土師器甕類が配されていたことになる）ていた。そして甕類の南側に須恵器・土師器杯と土錘、白玉等の滑石製模造品が配されていたものである。またD・E区4号遺構も礫・馬歯・土器群・管玉・土錘等が検出されており、A区1号祭祀跡と同様な性格が考えられている。いずれも7世紀初頃の所産と考えられている。また住居内（廃絶後）の祭祀跡は数ヶ所検出され、馬歯を伴うものと伴わないもので、土器の配置状況に差がみられるとともに、古墳時代後期には模造品等を伴うのに対して、奈良時代には伴わなくなるという変化もみせている。

同様に城北遺跡（16）では、5ヶ所の祭祀跡が検出されている。1号・2号は集落内にあり、石製模造品、土器の組み合わせ、3号・4号は集落外にあつて土器のみ、5号は河川脇にあつて土器と船形木製品の組み合わせから成っている。このうち1号では3方コの字形に壺・甕・高杯を配し、中に大量の杯を積み重ねている。コの字の左下に当たる位置に柱が抜かれた穴がみられ、剣形及び有孔円板形の石製模造品が集中している。また、土器群の下には猪とみられる獣焼骨が検出されている。一方5号は、河川への土器群投棄の祭祀跡である。1号が6世紀第I四半期、5号が6世紀第II四半期の所産と考えられている。

さらに新屋敷東遺跡（11）では、集落北側の河川跡縁辺部から、勾玉形、大型有孔円板形、鉄鏃形、櫛形等の石製模造品が土師器杯とともに、集中して出土している。成形が雑であること、孔をもつものが多いことなどを特色としている。また河川跡内には、同種の模造品（櫛形が中心か）と手捏ね土器、土師器杯・甕、須恵器の甕が出土している。7世紀初の所産と考えられている。

また東部地域でも北島遺跡（80）、諏訪木遺跡（118）、中条遺跡内（72）の中島遺跡（79）・光屋敷遺跡（54）・常光院東遺跡（71に含まれる）、前中西遺跡（117）、行田市小敷田遺跡（120）、池守遺跡（地図上未掲載）等、やはり遺跡数・規模共に爆発的に拡大する。

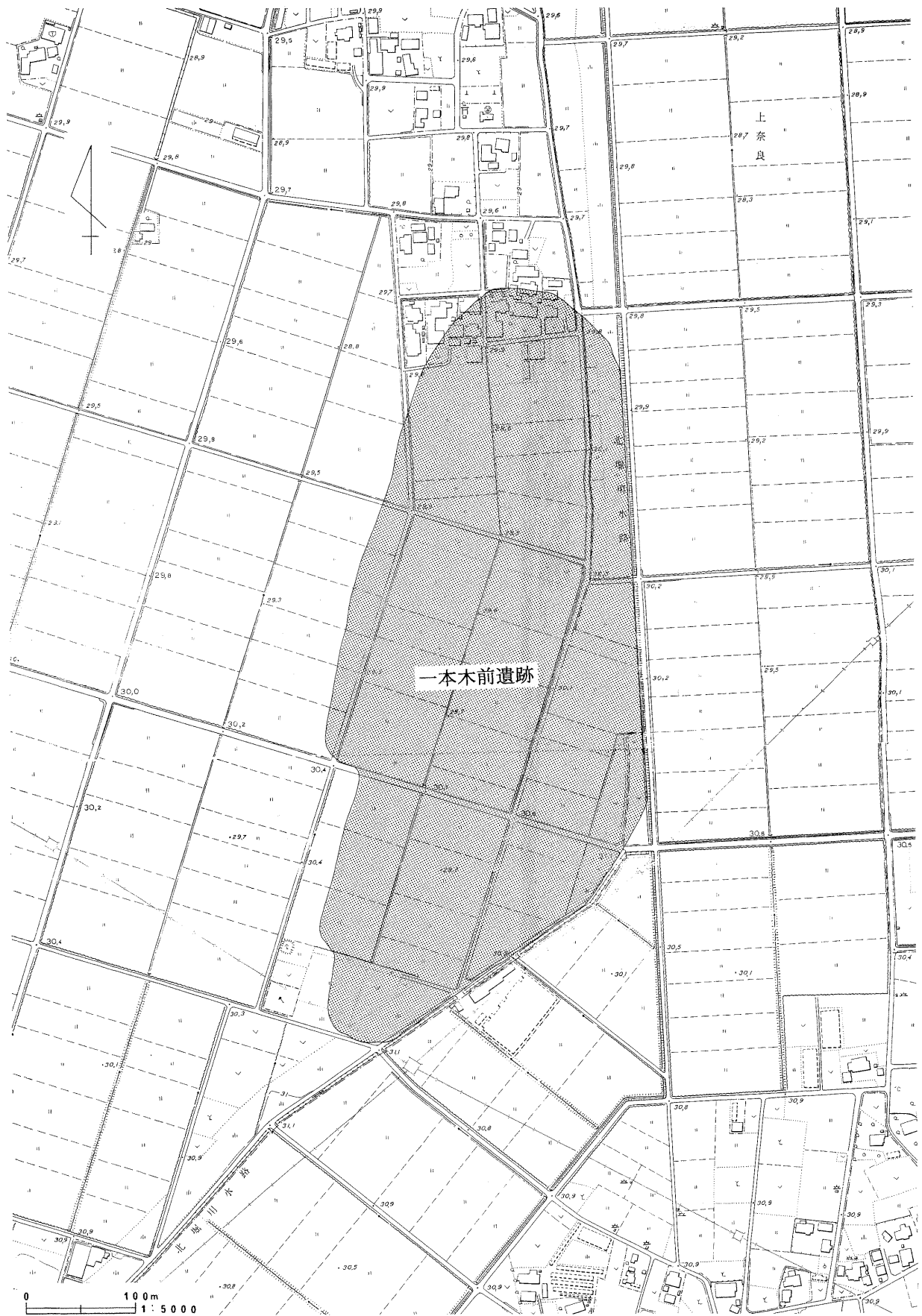
このうち諏訪木遺跡（26）では、河川に伴う祭祀跡が5ヶ所で検出されている。B地点では、古墳時代後期（6世紀後半から7世紀代）の土器群と共に馬頭蓋骨、木製壺鐙・堅

杵等の木製品、白玉等が出土している。馬頭蓋骨は、下顎を伴わないものの、ほぼ完全であり、体高約130cm、10歳前後の雌中型馬であるという。また前頭部中央が故意に打ち欠かれたように陥没していたものである。このB地点よりわずかに上流のF地点では、8世紀から11世紀に及ぶ遺物群と共に馬形、斎串、馬頭骨等が出土している。またB地点より下流のC地点では、3ヶ所で祭祀遺物が出土している。このうち2ヶ所では、6世紀後半から8世紀代の遺物群と9世紀から11世紀に及ぶ遺物群が重複して検出されている。他の1ヶ所は6世紀後半から8世紀代の遺物群である。これは重複した2ヶ所部分と単独の1ヶ所部分の間で9世紀に成された、瀬替えに伴うもの（年代の異なる遺物群の出土した位置は、瀬替え後も流路として生きている場所である。結果、流路が違っても祭祀場所は変化しなかったことを物語っている）である。6世紀後半から8世紀代の遺物群には、土器類と共に滑石製白玉、有孔円板型模造品、勾玉・小玉・丸玉・管玉等の玉類、ミニチュア土器、刀型・弓等の木製品が出土している。また、木製の櫛、被熱して溶解した銅椀、馬歯なども出土している。一方、9世紀から11世紀に及ぶ遺物群は、斎串、人形と共に、石製\_帯具の巡方、三彩陶器小壺、馬頭蓋骨等が出土している。こうした古墳時代後期から平安時代に至る出土遺物の変化は、河川祭祀の質的变化を直接示す、貴重な資料となっている。また、こうした祭祀に時代を超えて馬が存在している点も重要であろう。さらに、B地点より出土した前頭部中央が陥没した馬頭蓋骨は、6世紀後半に屠殺行為があった可能性を大きくするものである。

こうした古墳時代後期の馬の存在は、先に見た一本木前遺跡（\*）や城北遺跡（16）でも知られているところである。城北遺跡では4軒の住居跡から歯及び骨格が混在した状況で検出されており、6世紀の前半代と考えられている。一本木前遺跡では、祭祀跡の他、数軒の住居跡からも歯が検出されており、最古は、5世紀の後半代と考えられている。また諏訪木遺跡と同様な木製壺鐙は、行田市池守遺跡（地図未掲載）や小敷田遺跡（120）でも出土しており、いずれも6世紀後半と考えられている。こうした馬自体あるいは乗馬に付属する遺物を出土した城北遺跡—一本木前遺跡—諏訪木遺跡—小敷田遺跡—池守遺跡のラインは、まさに妻沼低地から熊谷扇状地先端部を巡るラインであり、当地での乗馬の風習と、当地に埼玉政権下での馬飼集団が存在した可能性を、共に強く物語るものである。

古墳時代後期に櫛挽台地東端もしくは北東端、あるいは妻沼低地及び熊谷扇状地の微高地に形成された集落は、あるいは古墳時代後期で終焉を迎える遺跡、あるいは古墳時代後期の途中から出現する遺跡、あるいはまた律令制下に出現する遺跡等も存在し、その数はわずかに減ずるものの、そのほとんどが奈良・平安時代集落へと継続されていく。そして、櫛挽台地北東端部の幡羅郡衙の想定される西別府廃寺（56）、西別府祭祀遺跡（55）、深谷市から熊谷市にかけて広がる幡羅遺跡（29）の所在する櫛挽台地北東端部を中心として、北側妻沼低地上に展開される別府条里跡（47）、条里跡の東端に位置する一本木前遺跡（\*）への広がり、東部では北島遺跡（80）、諏訪木遺跡（26）を中心として、その北・東に展開される中条条里遺跡（83）への広がり、こうした東西の二つの拠点を核として、以後の展開をみるることとなるのである。





第3図 一本木前遺跡位置図

# I 遺跡の概要

## 1 調査の方法

発掘調査は、調査区全体の北東を基点として、一辺10mのグリッド方式をとった。グリッド名は、北東の交点名を用い、北東隅グリッドをA-Oグリッドとした。グリッドライン名は、順次南へB・C・D・E……、西へ1・2・3・4……とし、南へのZ以降の呼称は、AA・AB・AC・AD……とした。また、X-11グリッドポイントを国家座標X=21.000、Y=-42.500上に一致させて設定している。

調査区は、6区に区分された工事区画に合わせて、中央を東西行する道路の北側を、東から西へA～C区、道路の南側を東から西へD～F区とした。

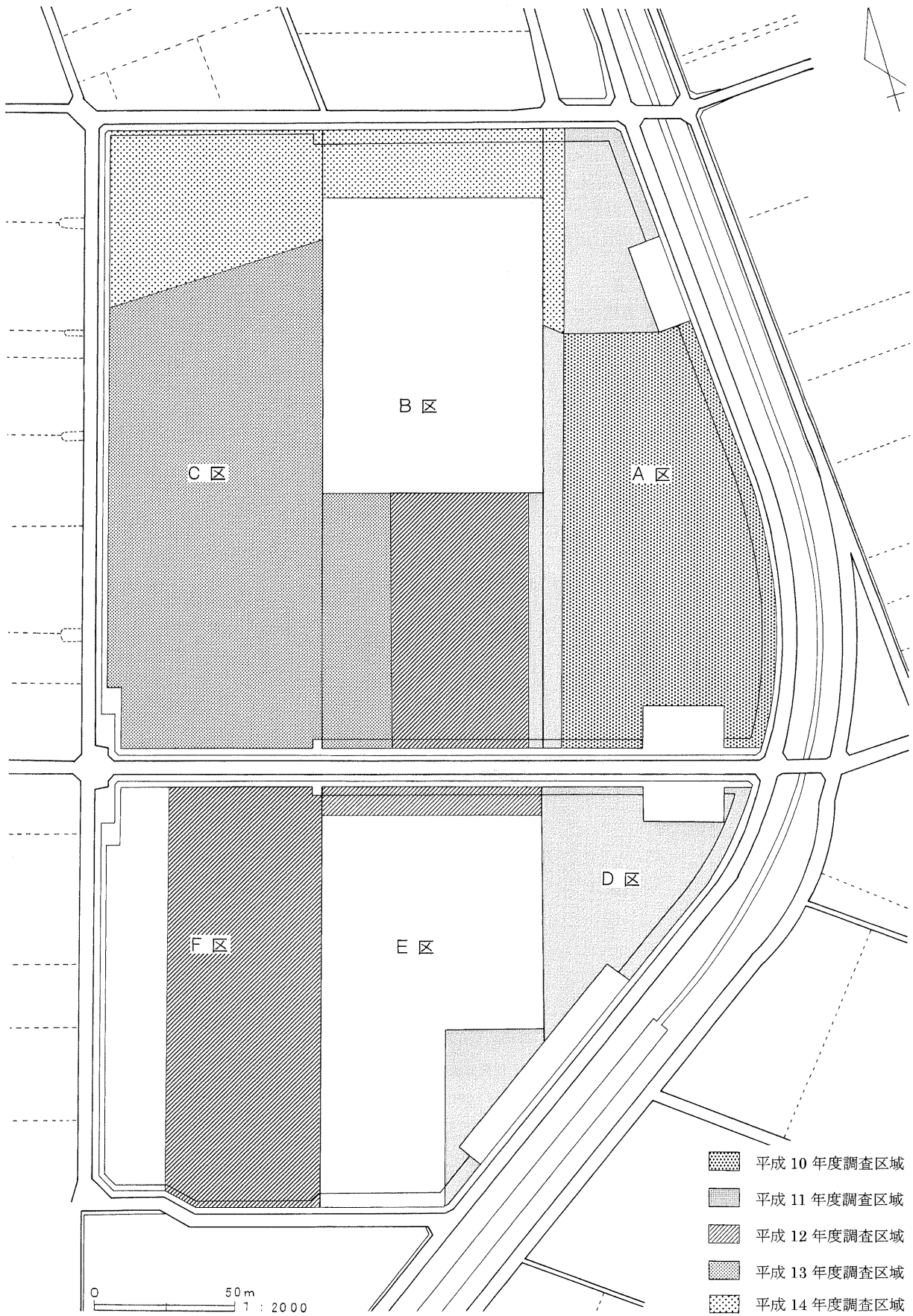
第1次調査（平成10年度）区域は、全てA地区に含まれ、そのうち、中央部・南部・南東部が調査されたものである。グリッド範囲は、南北P～AEグリッド、東西2～10グリッドに及ぶ。

第2次調査（平成11年度）区域は、A地区・D地区・E地区に及ぶ。A地区調査は、第1次調査の残り北側・西側（北西部は第5次調査）に当たり、グリッド範囲は、南北H～ACグリッド、東西2～12グリッドに及ぶ。D地区は、全域が含まれている。グリッド範囲は、南北AD～APグリッド、東西5～15グリッドに及ぶ。E地区は、北端部と南東隅部のみが調査対象地域である。本年次は南東部が調査されており、グリッド範囲は、南北AK～APグリッド、東西15～20グリッドに及ぶ。なお、報告書（一本木前遺跡II）では、第2次調査分のD地区及びE地区を合体させ、D・E地区として扱っている。

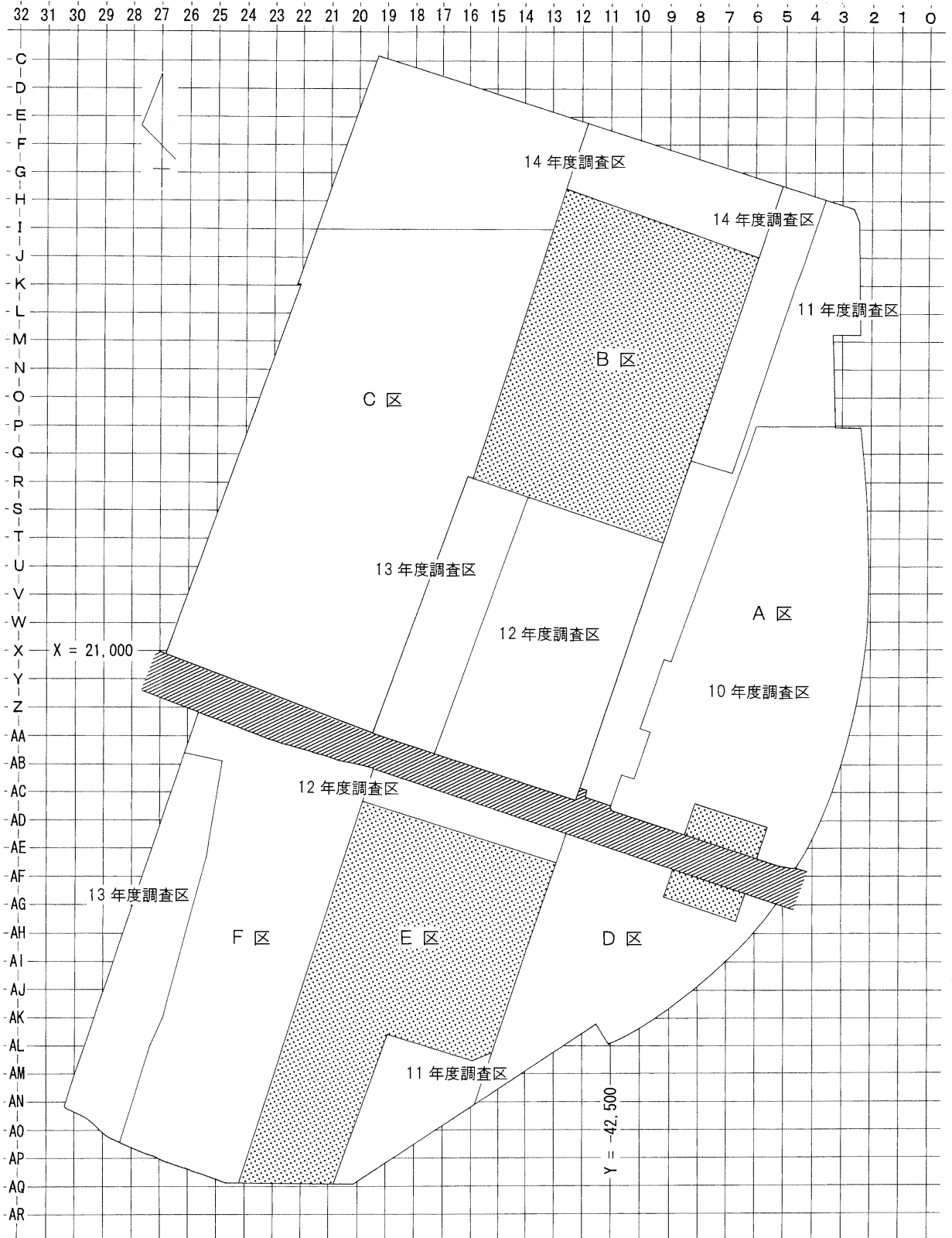
第3次調査（平成12年度）区域は、B地区・E地区・F地区に及ぶ。B地区のグリッド範囲は、南北R～ACグリッド、東西9～17グリッドに及ぶ。E地区は、残された道路に接する北端部の調査が行われた。グリッド範囲は、南北AB～AEグリッド、東西12～19グリッドに及ぶ。F地区のグリッド範囲は、南北Z～APグリッド、東西19～30グリッドに及ぶ。なお、報告書（一本木前遺跡III）では、第3次調査分のE地区及びF地区を合体させ、E・F地区として扱っている。またF地区の西側については、第4次調査分である。

第4次調査（平成13年度）区域は、F地区・B地区・C地区である。F地区は、西側部分、グリッド範囲は、南北AA～AOグリッド、東西24～30グリッドに及ぶ。B地区は、南半部分の西側残り部分であり、グリッド範囲は、南北Q～AAグリッド、東西14～19グリッドに及ぶ。C地区は、南2/3、グリッド範囲は、南北K～Zグリッド、東西14～26グリッドに及ぶ。またこれより北部は、Iラインまでの範囲で、第1確認面の調査を実施している。

第5次調査（平成14年度）区域は、A地区・B地区・C地区である。A地区は、北西部部分、グリッド範囲は、南北G～Qグリッド、東西3～8グリッドに及ぶ。B地区は、北半部分であり、グリッド範囲は、南北E～Iグリッド、東西5～12グリッドに及ぶ。C地区



第4図 一本木前遺跡調査区全測図



第5図 一本木前遺跡調査区グリッド配置図

は、北1/3、グリッド範囲は、南北C～Lグリッド、東西12～22グリッドに及ぶ。またこれより北部は、Iラインまでの範囲で、第1確認面の調査を実施している。

第5次発掘調査は、試掘調査及び第4次調査の成果により、遺構確認面の上位の保護土層を重機によって削除し、上記のグリッド設定から開始した。

その後、人力によって遺構確認の精査を実施し、確認された各遺構の手掘りでの掘り下げを行った。途中、検出された土器等の遺物は、写真撮影・測量をした後、慎重に取り上げ、収納していった。また、遺構に対しても、掘り下げ途中で必要に応じて、あるいは完掘時に写真撮影・測量を実施した。遺物出土状況・遺構検出状況の測量実測は、グリッド基本杭を基準として、水系による1mメッシュを設定する、簡易遣り方の方法をとった。

なお、B区・C区は、他の調査区同様、遺構確認面が上下2面あったことから、上面を第1確認面、下面を第2確認面として、上記作業をそれぞれ繰り返し実施したものである。

最後に、遺跡全体の空中写真撮影を実施し、本調査を完了した。

各調査区の調査回数及び所収報告書は、次のとおりである。

- A区 第1次・2次・5次 『一本木前遺跡』『一本木前遺跡II』『一本木前遺跡V・本誌』
- B区 第3次・4次・5次 『一本木前遺跡III』『一本木前遺跡IV』『一本木前遺跡V・本誌』
- C区 第4次・5次 『一本木前遺跡IV』、『一本木前遺跡V・本誌』
- D区 第2次 『一本木前遺跡II』
- E区 第2次・3次 『一本木前遺跡II』、『一本木前遺跡III』
- F区 第3次・4次 『一本木前遺跡III』

## 2 検出された遺構と遺物

第5次調査対象は、A地区・B地区・C地区の北端部分（A地区のみ北西端部分）で、計7,781㎡である。

検出された遺構は、A地区で住居跡15軒、土坑38基、井戸跡5基、溝跡25条、性格不明遺構3基、河川跡1条等、B地区で住居跡42軒、土坑10基、井戸跡21基、溝跡22条、畠跡2ヶ所、性格不明遺構1基、河川跡1条等である。またC地区では、住居跡57軒、土坑51基、井戸跡1基、溝跡1条、畠跡2ヶ所等の遺構が検出されている。

よって、第5次調査分では、住居跡113軒、土坑99基、井戸跡27基、溝跡48条、性格不明遺構4基、畠跡4ヶ所、河川跡2条等の遺構が検出されたこととなる（第6図）。なお、A地区及びC地区では、弥生時代中期の遺物包含層も検出され、このうちA地区河川跡基盤層中には、竪穴状遺構も確認されている。

この結果、A地区からF地区までの遺構総数は、方形周溝墓4基、住居跡509軒、柵列3列、掘立柱建物跡8棟、土坑790基、井戸跡70基、溝跡233条、土器祭祀跡（河川際祭祀

跡のみで住居跡内は含まない) 4基、礫礫状遺構1基、道路状遺構1基、畝跡32ヶ所、方形周溝遺構1基、円形周溝遺構1基、土器集中地点4ヶ所、河川跡2条(5期)、性格不明遺構7基等を数えることとなる。また、弥生時代中期の遺物包含層は、D・E地区でも検出されており、広域な拡がりをもつ。さらにA地区中央東端部では縄文時代後期の遺物包含層も検出されているところである。

こうした遺構群のあり方は、各調査区ごとに差異がみられ、特徴的である。

以下各地区の検出遺構・遺物についてみてみることにする。

## A地区

第1次・第2次および第5次調査によって検出された遺構総数は、住居跡100軒、土坑333基、井戸跡10基、溝跡94条、土器祭祀跡1基、円形周溝遺構1基、道路状遺構1基、性格不明遺構5基、河川跡1条(支流を別河川とすると2条)等である。遺構は、南部では密に重複し、北部では点在する状況を呈している。また、本区における遺構の分布状況から、さらに東側への遺構の広がりが想定される。

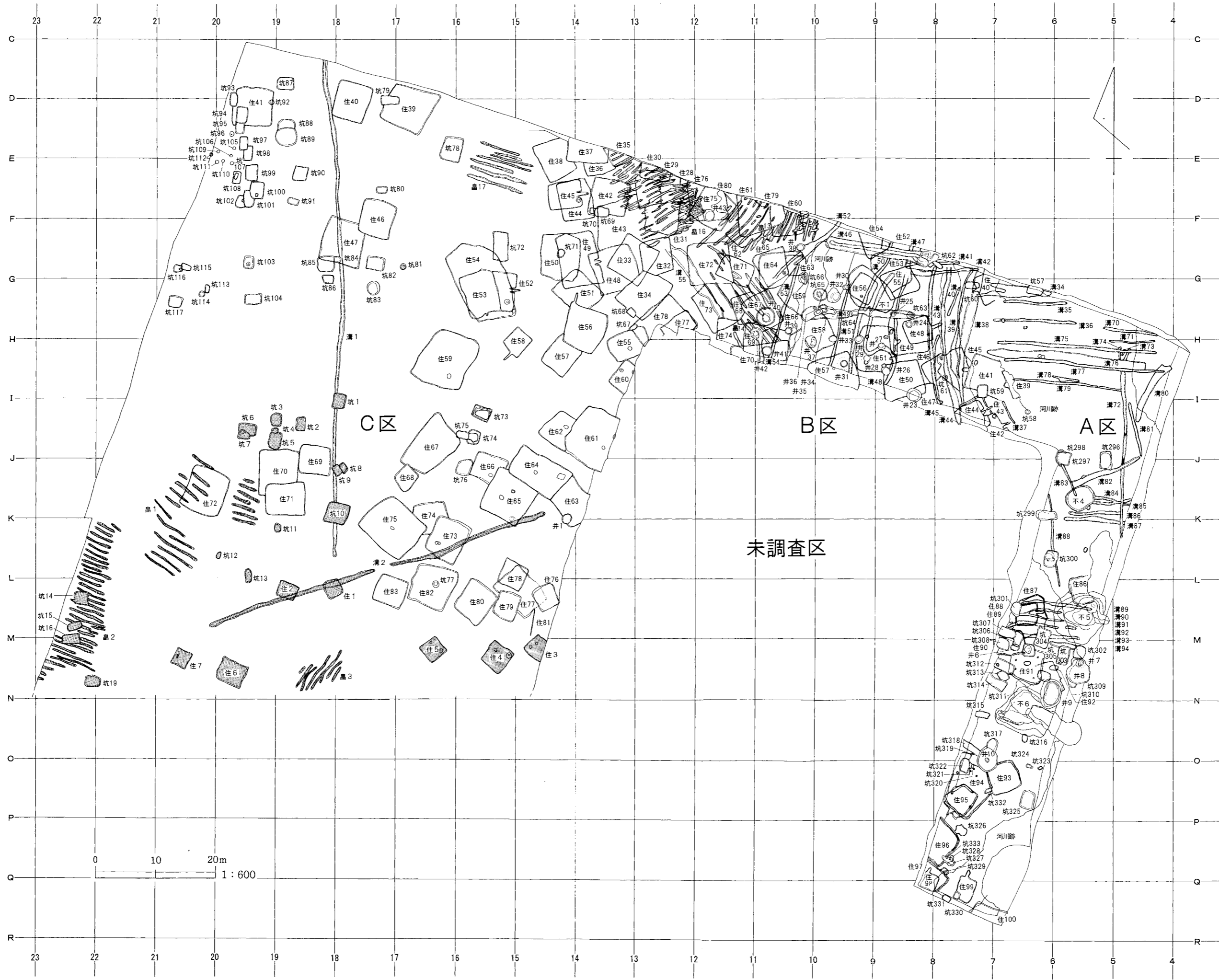
調査区検出遺構の年代は、古墳時代前期・同中期・同後期、奈良時代、平安時代と継続し、1号溝をもって終了している。方形土坑群は、中世に属すると思われるが、積極的な証左が上げられない状況である。こうした中、特に奈良・平安時代の住居跡が34件検出され、その集中の度合いが大きな特色となっている。また、平安時代に属する住居跡からは、スラッグが出土している点も特色の一つであろう。このうち13号住居跡では、軟質土器の高台椀、羽釜等の土器類、滑石製白玉、砥石、さらには多量の焼土粒・炭化物粒・スラッグとともに銅鏡が出土している。銅鏡は、直径9.0cmの瑞花鴛鴦八稜鏡であり、西暦1,000年前後の年代が与えられている。

本調査区面積の過半を占める1号溝は、覆土中に浅間B軽石層(天仁元年-1108年-降下)の純層が堆積し、上端幅22m、深さ80cmに及ぶ大溝である。他の大部分の遺構は、この大溝の両岸に分布しており、本溝にかなりの遺構が削除されたことを想定させる状況である。

古墳時代前期に属する遺構は、住居跡が7軒検出されたが、全てB区に接する区域にあって、85号住居跡が南西端に位置する他は、いずれも本区北西部(第5次調査区域)に限定されている。これらのことから、93号住居跡の位置するO-6グリッド中央部から、85号住居跡の位置するAC-12ポイント付近を結んだラインが、本期の住居跡東限ラインを示すと、みることができる。

中期に属する遺構は、15号・68号、2軒の住居跡が検出されている。このうち15号住居跡は、土師器高杯・埴・甕が出土している。炉は検出されているものの、竪穴の規模等は不明である。また68号住居跡は、3m弱の小型の住居跡である。

後期に属する遺構は、住居跡がほぼ全域から42軒検出されている。このうち73号住居跡からは、カマド脇の壁に、土師器杯・高杯64点が、最大9点が積み重ねられた状況で粘土に塗り込められていた。



第6図 一本木前遺跡平成14年度調査区検出遺構配置図

本調査区北西隅（B地区北東隅・G-4～7グリッド）から南南西方向に伸びる河川跡は、第1次調査区中央東端（X～Z-2グリッド）にかけて存在し、埋没後、三段口縁杯をもつ6号・10号住居跡、糸切底坏をもつ11号住居跡が構築されている。逆にB地区の模倣杯出現前の遺物をもつB区39号・40号・41号各住居跡は、本河川によって切断されている。また、N-5ポイント付近で、南西行し、Q-8ポイント付近を通ってB区へと連続する支流と分岐している。全体で5期に及ぶ河川跡である。

本河川跡の入り江部分（AA-4グリッド）では、馬下顎骨を中心に、須恵器・土師器杯、甕、須恵器提瓶等の土器、白玉等の滑石製模造品、土錘等で構成された祭祀跡（1号祭祀跡）が検出されている。本祭祀跡出土遺物は、6号・10号住居跡よりも一段古い時期を示す遺物群である。他に2基、土器の集中が検出されている（2・3号祭祀跡）が、遺物包含層の状況から、後に集積されたものと判断されている。

また、N-5ポイント付近・支流との分岐点（本流の角度変換点）には、西側への入り江が想起される遺構（6号不明遺構）が検出され、西端部分で礫の集中と、底面から土器の出土がみられたことから、この部分でも、1号土器祭祀跡と同様な土器祭祀が行われた可能性を示すものと思われる。いずれも、第5期の流路に伴う土器祭祀である。

T・U-2グリッド付近では、弥生時代中期遺物包含層及び、縄文時代後期遺物包含層である黒褐色シルトの堆積がみられる。

**B地区** 本区は、第3次・第4次および第5次に亘って調査されている。本区のうちJ-8、T-9、Q-16、G-12各グリッド内を結ぶ範囲は未調査区であり、これによって本調査区は南北に分断されている。

第3次及び第4次調査によって調査された南調査区では、ほとんど重複しない状況で、ほぼ全面に遺構が検出されている。検出された遺構は、方形周溝墓4基、住居跡38軒、柵列3列、掘立柱建物跡3棟、土坑56基、井戸跡22基、溝跡33条、畠跡12ヶ所等である。また第5次調査によって調査された北調査区は、狭い範囲に遺構が密に重複している。検出された遺構は、住居跡42軒、土坑10基、井戸跡21基、溝跡22条、畠跡2ヶ所、性格不明遺構1基等である。遺構数を南北調査区で合計すると、方形周溝墓4基、住居跡80軒、柵列3列、掘立柱建物跡3棟、土坑66基、井戸跡43基、溝跡55条、畠跡14ヶ所、性格不明遺構1基等となる。

本区南調査区の東側2/3地域においては、A地区1号溝と河川跡（B区北調査区を南北流するものと、A区からの支流）が入り込み、複雑な様相を呈している。

平安時代に属する5軒の住居跡は、北東隅に集中している。1軒のみ離れて南部中央に位置する28号住居跡は、遺物は刀子のみであり、明確ではないが、カマドの構造から本期に属すると思われる。これにより、T-11ポイント付近とAB-17ポイントを結んだラインが、本期の西限を示すといえる。このうち5号住居跡からは銅製の責金具が出土している。また、羽釜を出土している16号住居跡を切断しているのは、A地区から連続している1号溝である。



古墳時代後期に属する住居跡は20軒であるが、そのうち2軒が北東部に位置するものの、18軒が南西部に集中している。これらの住居跡は、ほとんど重複していない。本期の住居跡も、河川跡の影響によって、複雑な様相をみせている。模倣杯の出現期の住居跡である21号・24号が切断されているところから、河川の侵略の時期は限定されてくる。しかしながら、25号・29号・30号・34号・36号各住居跡など、模倣杯全盛時から衰退期にかけての住居跡が再び河川跡によって切断されてくるようになる。このうち36号住居跡は、一旦河川跡の埋没後に構築されたものが、再び別流の河川跡に切断されたものである。また、河川埋没後に構築された37号住居跡は、他の河川に切断された様子は伺えない。このように、蛇行する河川跡の流路と存続期間は、当調査区の様相をより一層複雑化しているものである。

4基検出された古墳時代前期に属する方形周溝墓は、南調査区の南西隅に、集中して築かれている。このうち河川跡に上面を削平された4号方形周溝墓以外の3基からは、方台部に埋葬施設がみられた。2号方形周溝墓埋葬施設は、 $(3.80 + \alpha) \times 3.54\text{m}$ の長円形土坑中央部に、 $2.08 \times 1.02\text{m}$ の長方形土坑が掘り込まれた形態で、中央土坑底面からは、頭骨の一部、歯、翡翠製勾玉、緑色凝灰岩製管玉が出土している。他の方形周溝墓の埋葬施設でも、基本形はこの長方形二段の土坑である。

方形周溝墓検出の土器類は、主として溝内から出土している。単体である場合は溝隅部から出土するものが多いが、特定の溝に集中する傾向もあり、その場合、単一土層内に含まれる特長を示す。また、1号・2号各方形周溝墓では、溝外の基盤層上及び、正に溝に落ちんとする土器も検出されており、墓前祭祀の一形態を示す好資料となっている。

方形周溝墓は、互いに近接するが、切り合い関係はみられない。また、住居跡との重複関係もみられない。

4号方形周溝墓上に位置する29号・36号・37号各住居跡は、河川埋没後の構築であり、直接の切り合い関係はない。また古墳時代前期に属する13軒の住居跡は、方形周溝墓群との間に50m前後の空白地を挟んで北側に集中して位置している。ただし、この間に河川跡が存在し、1・2・3・8・10・11・17・18号の各住居跡が切断されているように、古墳時代前期に属する遺構は全て切断されており、まったく削除され消滅した住居の存在した可能性もあるため、明確ではないが、住居空間と墓域の区別がなされていた可能性も高いものがある。

空白地からは、掘立柱建物跡と畠跡が検出されている。時代を示す証左は少ないが、前者は全て河川跡埋没後の構築であり、古墳時代後期後半以降の所産と考えられている。一方畠跡は、古墳時代後期の遺物が含まれる場合が多いが、第2確認面から検出されるもの、古墳時代前期の遺物が含まれるもの、河川跡に切断されているものも多く、現状では古墳時代前期から後期の所産であるというに止まっている。

一方、北調査区で検出されている畠跡（13号）は、畝間の底面レベルに、上下2段が認められ、西半の下段では、古墳時代前期の80号住居跡の覆土上層を掘り込んでいるものの、やはり前期の61号住居跡には上面を削平し整えられて住居を構築されている。さらには、

東半の上段部分では、古墳時代後期の60号住居に、上面を削平し整えられて住居を構築されている。こうした状況は、14号畠跡、さらにはC地区16号畠跡でもみられるものである。これらは、一応古墳時代前期の所産であるといえよう。

## C地区

第4次・第5次調査によって検出された遺構は、住居跡83軒、土坑117基、井戸跡1基、溝跡1条、畠跡17ヶ所、方形周溝遺構1基、土器集中地点4ヶ所等の遺構が検出されている。

83軒検出された住居跡は、D-16ポイントとZ-23ポイントを結んだラインから西ではその存在が希薄となり、C-20ポイントから、本区に南接するF区のAB-24ポイントを結ぶラインから西では、まったく見られなくなる。所属時期は、古墳時代前期と後期に限られる。このうち、後期に属する住居跡が、他地区と比較して極端に少ないという、大きな特色をもっている。

83軒検出された住居跡のうち、可能性を有するものを含めて、70軒は古墳時代前期に属していると思われる。この分布密度は、Mラインを境として、南北で大きな違いをみせている。Mラインより北側では、比較的大型の住居跡を中心に、ほとんどが重複するように、密集している。特に北東隅地域・B調査区に接する地域では顕著である。これに対して、Mラインより南側では、中心が小型の住居跡であり、ほとんど重複することなく分布している。さらに、RラインからWラインの間は1軒の住居跡もみられず、南北約50mの地域が住居跡の空白地帯となっている。

空白地帯の南端に位置する2軒の住居跡（24号・25号）は、B区南西端に群在する方形周溝墓群と同様、前期の中でも新しい段階に属し、方形周溝墓群西端の2号方形周溝墓とは、10mの位置に近接している。また、両者の中間には、時期的には両者より新しい段階の、2ヶ所の土器集中地点（2号・3号であり、4号は除く）が位置している。2号土器集中地点では甕・台付甕・壺、3号土器集中地点では高杯・台付甕・埴というように、異なる土器組成を示している。こうした、住居-土器集中地点-方形周溝墓という3種の遺構の関連性は、方形周溝墓における一祭祀形態（周溝墓内祭祀とは別の、時期差の認められる墓前祭祀）及び、集落内における墓域と居住域の関連性を物語るものとして、特に注目されることである。

こうした住居跡の分布状況から、C-20ポイントからの住居跡全体の西限ラインと同一ラインを歩み、O-21ポイント付近から湾曲して、E・F区の境であるAC-20ポイント（同期南西隅に当たる）に至るラインが古墳時代前期の西限ラインである、といえる。

RラインからWラインの間の住居跡空白地帯には、畠跡が集中している。畠跡が、古墳時代前期の住居跡と重複していないこと、逆に後期・模倣杯盛行期から衰退期の住居跡（21号・22号住居跡）に切断されていること、出土遺物が、小片であるものの前期の土器に限られること等から、本期に属しているとするのが最も妥当であろう。畠跡は、住居跡西限ラインを超えて西側へ、北側へと拡がっている。このうち1号畠跡は、最も西端に位置する、前期の住居跡（72号）と位置的に重複するが、直接の切り合いはなく、72号の埋没

後、その上面に掘り込まれているものである。こうした様相は、居住区末端地でのあり方を示すものといえよう。

13軒が検出された古墳時代後期の住居跡の分布状況は、E-14ポイント～H-16ポイント～I-13ポイントをL字型に結び囲まれた地域＝B地区に接し、前期の住居跡が最も密集する北東隅地域、及び、24ライン～WラインをL字型に結び囲まれた地域＝空白地帯の南側・南東隅地域の2地域に大きく離れ、それぞれ7軒・5軒と集中している。そして、両者のほぼ中間に9号住居跡1軒が独立する、という状況を呈している。これにより、古墳時代後期住居跡の西限は、全体の西限よりわずかに東寄りの、E-14ポイントとAB-24ポイントを結ぶラインとなる。

住居跡分布範囲の外側（西）に、土坑が群在する様相は、F区と同様である。ただし、北西隅地域では、座棺を用いた墓坑群が検出され、異彩を放っている。

**D・E地区** D区は本来、AD-11グリッドからAM-15グリッドを結ぶラインをその西限としているが、AM-15グリッドから西・AK～APグリッド、東西15～20グリッドの間の調査区（本来はE・南調査区）を同時に調査したため、この調査区を含めて便宜的にD・E地区とするものである。

第2次調査によって、検出された遺構は、住居跡116軒、土坑157基、井戸跡14基、溝跡68条、土器祭祀跡3基、礫榔状遺構1基等であり、D・E地区の境界・AM-15グリッド付近では、弥生式土器の包含層が検出されている。

平安時代に属すると断定できる住居跡はなく、可能性を残す住居跡は4軒である。

116軒検出された住居跡の大半は、古墳時代後期に属しているが、奈良時代に属するものも15軒と、その割合は高い。しかし配置は、D区内しかも南東半に限られ、B区に近接する北西半には、1軒も所在していない。

本調査区において最も多い、古墳時代後期の住居跡の配置に決定的な要因を与えているのは、2条の河川跡の存在である。1条は、A区を南北流して、A区中央東端（X～Z-2グリッド）で一旦東の調査区域外に出たものが、大きく蛇行し、再びAE-9～10グリッドに出現して南西に流路をとるが、AH-11・12グリッド付近で大きくカーブして、南東に流路を変え、AK-10～11グリッドに及ぶという河川跡（東流路）である。いま1条は、B・北調査区からほぼ南北流するものとA区内で本流から南西方向に分岐した支流が、B・南調査区内で合流し、E北調査区内をもほぼ南北流し、AL-16～17グリッドに出現して、AO-16～17グリッドへと、直線的に連続する河川跡（西流路）である。この流路上には、住居跡が極まばらにしかみることができない。東流路縁辺部にかかる住居跡は、15号・16号・56号・57号であり、流路中央部に位置する58号・59号両住居跡は、奈良時代に属し、まったく河川跡埋没後に構築されたものである。各住居跡は、両河川跡の両岸に密集して構築されている。

河川跡の湾曲部分・AF-10グリッドで検出されたのが、4号北不明遺構である。河川の東岸から河川内に、礫・馬歯をはじめとして、土師器杯・高杯・甕・須恵器壺等の土器群、

管玉・土錘・土製支脚が落ち込んだ状況を呈しているものである。土器は、模倣杯の衰退期の所産である。A区1号土器祭祀跡同様、ここでも岸上での馬歯を伴う土器祭祀跡が行われたことを物語っている。

土器祭祀跡で最も特徴的な遺物である馬歯は、45号・54号・67号・83号・86号・92号・98号等、多くの住居跡からも出土している。このうち、98号住居跡では、床面上に第1次埋没土がわずかに堆積した段階で、礫が2.1m四方に敷かれ、礫上に馬歯及び剣形模造品が置かれている。そして礫敷きの周囲には、南西辺を除く3辺に杯・甕30点がコの字状に並置されていた。83号住居跡では、カマド前の床面上から、馬歯・杯・高杯・椀・甕・甌（いずれも土師器）が出土している。また86号住居跡では、竪穴南隅の床面上から、馬歯・杯・椀・甕・甌（いずれも土師器）が、北面を開けたコの字状に出土している。83号・86号両住居跡は共に、98号住居跡と同様な、住居内祭祀が行われていたと考えられている。

45号・54号・67号・92号各住居跡では、覆土中から少量の土器と共に出土している。

一方、馬歯を伴わない住居内祭祀も行われている。42号住居跡では、南隅の床面上で、南西壁に沿って外側に甕・甌（1個の甌に杯2個を内包）が2個ずつ並び、その内側に杯7個が2列に並ぶ。この南端から南東壁に沿って4個の甕及び杯・鉢が列を成す。北端からは、南西列と直交して4個の甕（1個の甕に杯を内包）が列を成し、全体で北東面を開けたコの字状に配されていたことになる。また、コの字内には、礫が敷かれていた。

さらに、103号住居跡では、竪穴の第1次埋没完了後の窪みの上に、総数97点の土器群が一括投棄されている。土器群は、須恵器蓋杯1点を除いて全て土師器であり、杯・高杯・小型壺・罎・甕・甌であり、他に石製紡錘車・砥石・白玉・土製円玉・支脚が伴出している。このうち、底部に穿孔された杯・甕が一例ずつ含まれている。また、遺物群の上面にはFA火山灰が堆積しており、FA火山灰降下直前の住居内土器群投棄祭祀の様相を直接に物語るものである。こうした状況は、馬歯の出土した45号・54号・67号・92号（92号は奈良時代に属する）各住居跡でもみられるが、出土量が少なく、土器の量に大きな差が認められる。奈良時代に属する31号住居跡でも、馬歯を伴わない住居内土器群投棄祭祀が行われた様子が伺えるが、やはり土器の量が少ないものである。

AN-16グリッドからは、小石礮と思われる遺構が検出されている。底面には小礫が敷かれ、内径52×18cmを計る長方形空間の周囲及び上面を、長円形自然礫で囲んだものである。周囲に積まれた長円礫は、壁線に沿って長辺を並べ、上下面に平坦面を配して、2～3段の積み重ねを容易にしている。壁の高さは28～38cmを計る。外径は120×75cmを計り、長円形を呈する。蓋石は、長円礫の長辺を壁の短軸線に平行させ、2列2段で積まれている。近在する古墳時代後期・模倣杯盛行期の住居跡（103号）と同一基盤層から掘り込まれており、同住居跡とほぼ同時期の所産と考えられる。

特殊な遺物としては、土鈴の出土があげられる。55号住居跡床面上から出土したもので、紐孔が斜めに穿たれている。下面には切り込みが入れられているものの、貫通しておらず、固形物が内包されているにもかかわらず、音は響かない。人物埴輪の美豆良状土製品が伴出している。また、52号住居跡からも土鈴が出土している。紐の部分のみであるが、紐身

が円錐形で細長く、長方形を意識した孔が穿たれている。形状から、鐸型を呈していた可能性がある。土玉、土錘が伴出している。いずれも、大きく東へ湾曲する河川跡の、東岸脇に位置（北から4号遺構－52号住居跡－55号住居跡の配置となる）し、有段口縁杯が主流となってくる時期に属する。

古墳時代前期に属する住居跡は、29号1軒のみであり、北方のE・F区と接し、B区に近接する地点に位置している。これらのことから、A区93号住居跡の位置するO-6グリッド中央部から、A区85号住居跡の位置するAC-12ポイント付近を通過し、29号住居跡の位置するAF-12グリッドを結んだラインが、本期の住居跡東限ラインを確定するものであるといえる。また、29号住居跡の南端・AG-13ポイント付近は、東南限の角隅に当たる位置でもある。

また、51号土坑から人骨1体が検出されており、仰臥した人骨の胸部からはガラス小玉が出土している。51号土坑は、 $(3.18 + \alpha) \times 1.96\text{m}$ 、深さ32cmの長方形土坑中央部に、 $(1.45 + \alpha) \times 0.55\text{m}$ 、深さ6cmの長方形土坑が掘り込まれているものであり、中央下段土坑内に人骨が仰臥し、頭を西、顔を南に向け、腕は右を胸に折り込み、左を伸ばし、両足は伸展していたものである。中央下段土坑の壁は直立し、棺の存在を想定させるものである。

こうした状況は、B区2号方形周溝墓の主体部と構造上の根本的な差異はなく、また主軸方位も近似していることから、あるいは、本土坑が形周溝墓の主体部であった可能性も考えられる。しかしながら、後期の模倣杯盛行時の住居跡に削平され、それよりも古いことは事実であるが、発掘時に、後期の住居跡が密集する中で土坑周囲に溝は検出されておらず、所属時期・性格ともに積極的な証左は得られていない。

**E・F地区** F区は本来、AB-19グリッドからAP-24グリッドを結ぶラインをその東限としているが、AB-19グリッドから東、AB～AEグリッド、東西12～19グリッドの間の調査区（本来は・E北調査区）を同時に調査したため、この調査区を含めて便宜的にE・F地区とするものである。

第3次・第4次調査によって検出された遺構は、住居跡129軒、掘立柱建物跡5棟、土坑117基、井戸跡2基、溝跡15条、畠跡1ヶ所、その他である。検出された住居跡129軒の大部分は、古墳時代後期に属しているが、古墳時代前期に属するもの1軒、平安時代に属するもの2軒を含んでいる。

平安時代に属する2軒の住居跡（1号・10号）は、いずれもE北調査区の東半部分に位置しており、D・E地区及びF地区に同期の住居跡が存在する可能性が低いことから、AFライン付近が、当該期の南限を示しているといえる。このうち1号住居跡内からは、小鍛冶遺構が検出されており、羽口、礫、スラグが出土している。また、10号住居跡からは、末野産の須恵器杯等が出土している。

126軒と、当区の大部分を占める古墳時代後期の住居跡は、E北調査区においては河川跡の影響で、またF区においては密集・重複状態で、それぞれ複雑な様相を呈している。

E北調査区における河川跡は、B区の南部で3分し始めていたものが、東・中・西の3条に分離し、いずれも北北東から南南西方向に流路をもつ。東が最も太く3期、中央が2期に亘り流路が重なるが、西は1期だけの流路である。西流路は、模倣杯全盛期の住居跡(28号)を切断しているものの、次代の模倣杯衰退期の住居跡(27号)が埋没後に構築されていることから、その存続期間は極短いものであるといる。中央流路は、西流路の埋没後構築された27号住居跡と同時期の17号・22号、さらに一段新しい18号各住居跡を切断している。東流路は、模倣杯混在時の住居跡(11号・12号・13号)を切断しており、埋没後、平安時代に属する10号住居跡が構築されている。これらのことから、E北調査区における河川跡は、東・西・中へと、その流路の変遷がたどれるものである。

当該期の住居跡99軒が検出されたF区では、AB-24ポイントからAP-28ポイントを結ぶラインから東地域で住居跡が密集する。ライン間近では、31号・32号・81号の3軒が密集地帯から分離し、それぞれが単独で位置する他、掘立柱建物跡がみられるのみである。結局、C区のC-24ポイントからAB-24ポイントを通り、AP-28ポイントを結ぶラインから西地域では、住居跡が存在していないこととなるのである。なお、ライン以西には、方形土坑群、近世の溝跡等が散在するのみであり、遺跡の西端を想起させるに十分であろう。

こうした住居跡群の中、堅穴の第1次埋没完了後の窪み上での土器群一括投棄による祭祀跡は、18号・32号・33号・118号・125号各住居跡で検出されている。このうち125号住居跡では、第1次埋没完了後の窪み上での、土器群一括投棄ではなく、土器並置による祭祀跡が検出されている。土師器杯・高杯・甕、手捏ね土器、須恵器短頸壺・横瓶・提瓶等多量の土器群、ガラス小玉、滑石製白玉の玉類の他、刀子、鋤先、13本の鉄鏃が、約90cmの方形区画の中に重ねられて出土しているものである。

また、堅穴の第1次埋没中の土器並置による祭祀跡も、61号・62号各住居跡で検出されている。

さらに、支柱穴が2本ずつ、カマドに向かってそれぞれの間には副柱穴が1本ずつ穿たれている83号住居跡では、左の2支柱穴脇、および右奥支柱穴・副柱穴の脇からは、1点ずつ手捏ね土器が出土している。このうち、右奥支柱穴の脇から出土した手捏ね土器は、底部に2穴が穿たれているが、1穴は内側から粘土で塞がれているものである。特殊遺物の役割を知る、一つの手がかりとなろう。

古墳時代前期に属する唯一の住居跡(29号)は、内容は不詳であるが、E北調査区西端・AB-19グリッドに位置している。他に15号・21号各住居跡から同期の土器が出土しており、同住居跡下面に所属する住居の存在した可能性はあるものの、F区からはまったく出土しておらず、いずれにせよ、AC-20ポイント付近が、同時期住居跡群の西南角に当たることは間違いない。

AD-15グリッドでは、19・20号土坑が検出されている。20号土坑は、 $(1.75 + \alpha) \times 2.42$  m、深さ12cmの長方形土坑であり、19号土坑は、20号土坑の中央部に、 $1.35 \times (0.50 + \alpha)$  m、深さ14cmの長方形土坑が掘り込まれているものである。このうち、中央下段土坑

内に当たる19号土坑長方形土坑内に、人骨1体が検出されている。人骨は、仰臥し、頭を西、顔を南に向け、手足は伸展していたものである。中央下段土坑の壁は直立し、棺の存在を想定させるものである。同様に、AD-15グリッドでは、15・16号土坑が検出されている。16号土坑は、 $(3.60 + \alpha) \times 1.90\text{m}$ 、深さ11cmの長方形土坑であり、15号土坑は、16号土坑の中央部に、 $(2.06 + \alpha) \times 0.85\text{m}$ 、深さ18cmの長方形土坑が掘り込まれているものである。

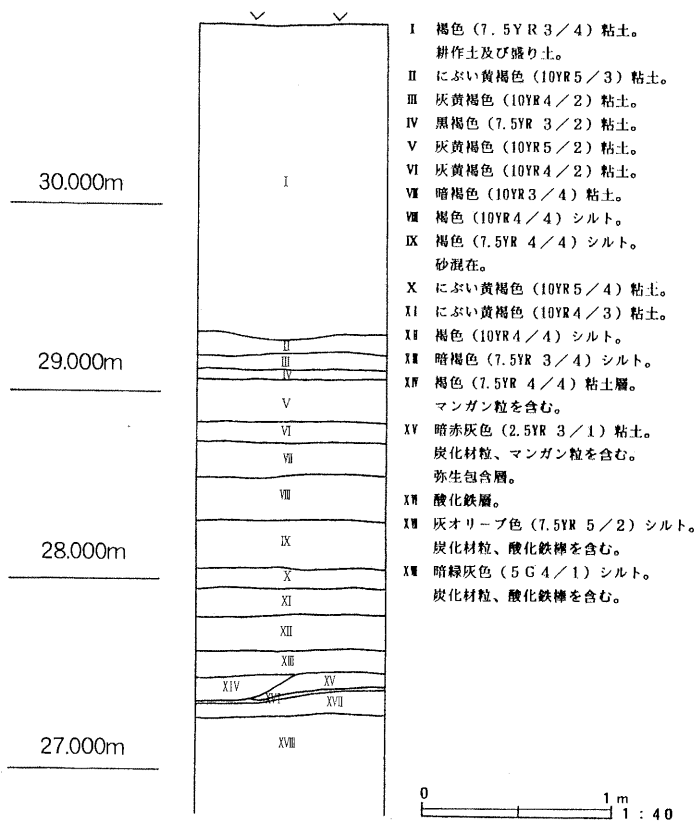
こうした状況は、B区2号方形周溝墓の主体部及びD・E区51号土坑と構造上の根本的な差異はなく、また主軸方位も近似していることから、あるいは、本土坑も方形周溝墓の主体部であった可能性も考えられる。しかしながら、古墳時代後期・模倣杯出現期の住居跡及び、河川跡東流路に一部が削平されているのみであり、それよりも古いことは事実であるが、発掘時に、土坑周囲に周溝は検出されておらず、所属時期・性格ともに積極的な証左は得られていないのは、D・E区51号土坑と同じである。

**基本土層** 本遺跡の基本土層は、第7図のとおりである。I層は、耕作土上に堤防道路の盛り土がなされているため、厚さを増しているものである。上層からみると、標高28.50mに至って、粘土質からシルト質に変化したVIII層以下に、7世紀以前の遺物が包含されている。

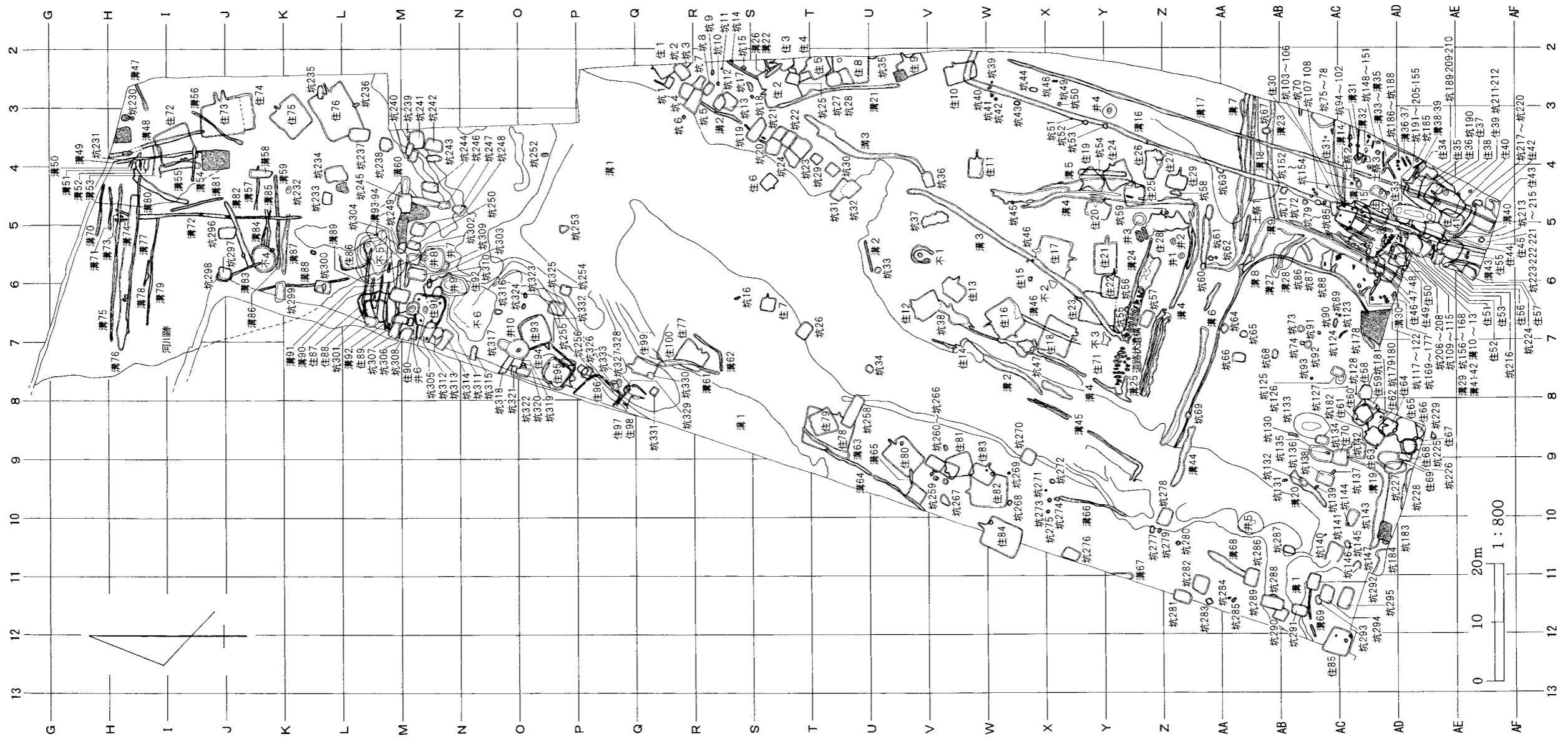
第1確認面はVIII層であり、第2面はX層である。またウ層層は1・2面の中間面とした。

このVIII層とX I層の間には、古墳時代の遺物を包含するシルト層・粘土層が相克し、場所によって複雑な様相を呈している。

XV層は、弥生時代中期の遺物包含層であるが、遺跡全体には堆積していない。XV層上面の標高は、D・E区AM-15グリッド付近では27.500m、A区T-2グリッド付近では27.400m、H-4グリッド付近では26.900mを計り、南が高く北が低い様相を呈している。またC区I-14ポイント付近では27.000mであり、東が高く西が低い様相を呈している。XV層の下位には、通常、酸化鉄棒を大量に含む灰オリーブシルト層(XVII層)が堆積しているが、T・U-2グリッド付近では、XV層とXVII層の間に縄文土器包含層である黒褐色(10YR 3/1)シルトの堆積(標高27.200m付近)をみる。なお、本層の堆積は、当地区以外では確認されていない。



第7図 一本木前遺跡基本土層図

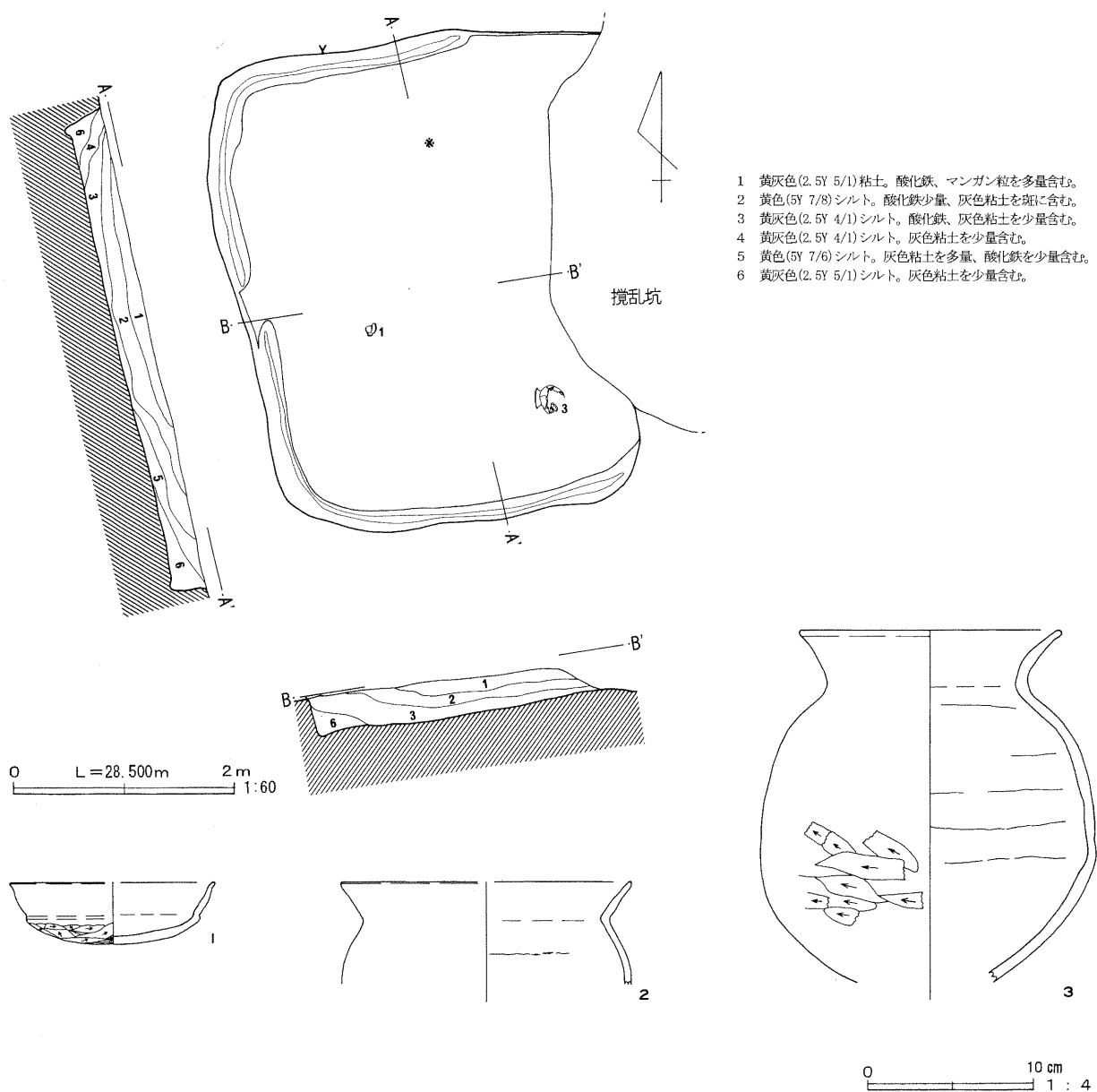


第8图 A区檢出遺構配置图



## IV A区の遺構と遺物

A区において、平成14年度調査分で検出された遺構は、住居跡が15軒、土坑38基、井戸跡5基、溝跡25条、河川跡1条（支流を入れると2条）、不明遺構3基である。北半部分の河川の流路跡では、わずかに河川跡南西端で河川跡埋没後に構築された86号住居跡、及び上位に各溝跡・土坑・不明遺構等が存在するのみである。住居跡を主体とした他の遺構群は、この86号住居跡を北端として、いずれも調査区の南半部分に集中して位置している（第8図）。



第9図 A区86号住居跡及び出土遺物

# 1 住居跡

A区における住居跡は、平成14年度・第5次調査で、86号から100号の15軒が検出されている。調査区北半部分の河川の流路跡では、わずかに河川跡南西端で河川跡埋没後に構築された86号が存在するのみである。他の住居跡は、この86号を北端として、いずれも調査区の南半部分に集中して位置している。また、河川跡東側岸部分でも、北東方向の所在は希薄である。

**86号住居跡** 北辺部分がK-5グリッドに入るものの、大部分がL-5グリッドに位置している。

(第9図) 第一確認面からの検出である。

東辺部分を攪乱坑に切断されているが、南辺部分では5号不明遺構の一部を削除している。河川跡埋没後に構築された住居跡である。

形態は、北辺東隅及び東辺が削除されており不詳である。各辺長は、西辺が4.40m、南辺が3.28mを測るところから、各隅がやや丸みをもつ長方形を呈するともいえるが、北辺の周溝が切れた東側では壁の検出状況も悪く、3.50m以上伸びる可能性もあって、不整形であるといわざるを得ない。長軸方位は、N-13°-Wを示す。

壁は、ほぼ直線的に立ち上がり、掘り込み確認面から床面までの深さは、30cm前後である。床面は、わずかに凹凸がみられるものの安定している。壁直下には、東辺では確認されていないものの、西辺中央部を除いて周溝が廻っている。幅12~15cm、深さ6cm前後を計る。床面上にピットは穿たれていない。カマド等も、検出されていない。

覆土は、壁寄り部分に少量の灰色粘土を含む黄灰色シルト（第6層）を最下層として、上位には、少量の灰色粘土及び酸化鉄粒を含む黄灰色シルト（第3層）、灰色粘土及び酸化鉄粒を斑状に含む黄色シルト（第2層）、多量の酸化鉄粒及びマンガン粒を含む黄灰色粘土（第1層）が堆積している。また第6層と第3層の間には、北側で少量の灰色粘土を含む黄灰色シルト（第4層）、南側で多量の灰色粘土及び少量の酸化鉄粒を含む黄色シルト（第5層）がみられる。

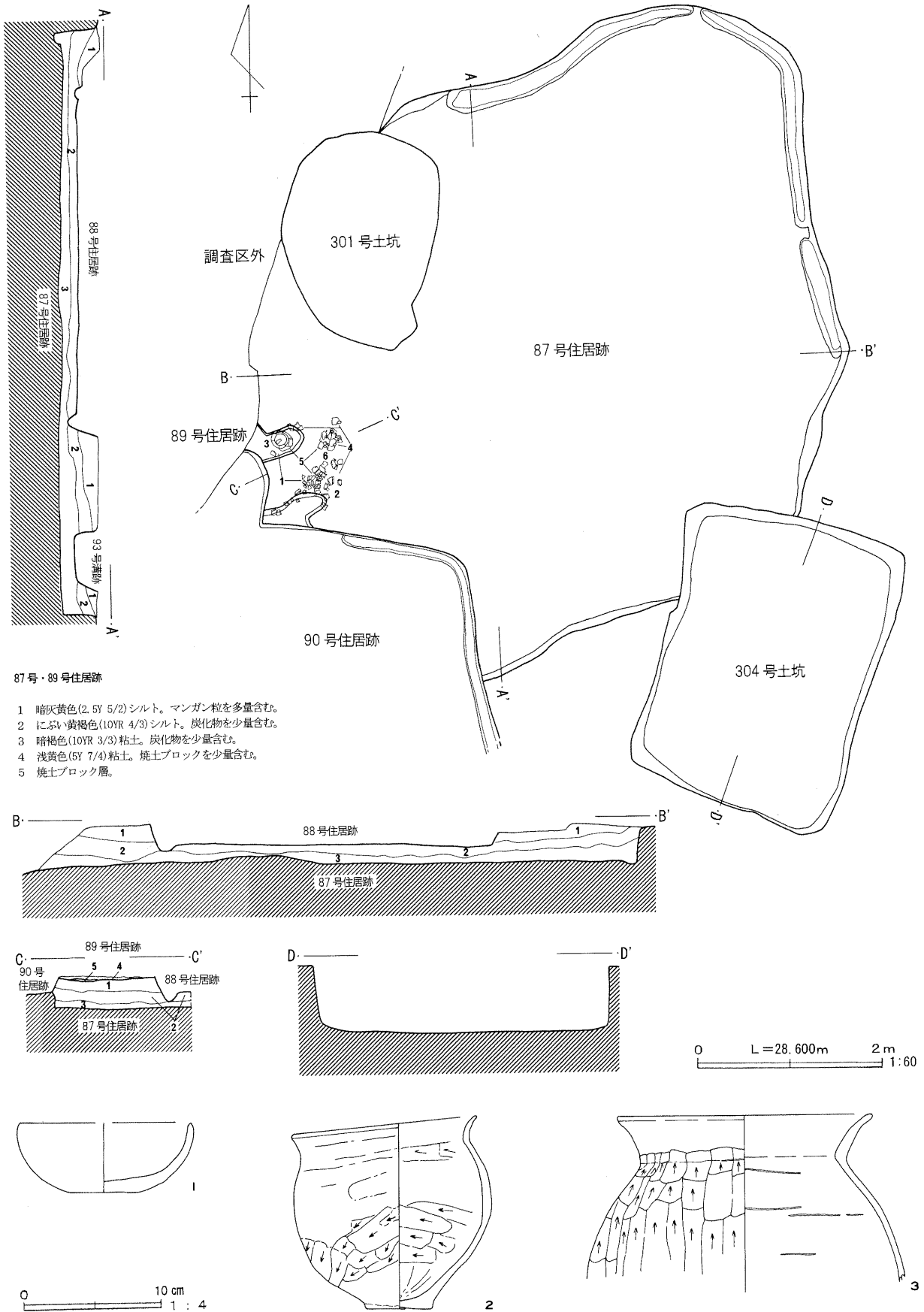
遺物は床面上から土師器杯（1）、土師器甕（3）、覆土中から土師器甕（2）が出土している。また、竪穴中央と北壁の中間の床面上（第9図※）から、馬歯が出土している。

**第2表 A区86号住居跡出土遺物観察表（第9図）**

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・杯	(12.5)	3.8	—	②①③	②	橙	1/4	口縁部横ナデ。体部内面ナデ、外面ケズリ。
2	土師器・甕	(17.6)	—	—	①②	②	褐灰	口縁部1/8	全面吸炭。表面剥離。二次加熱。
3	土師器・甕	16.0	—	—	①④②	②	橙	3/5底部欠	胴部外面中位以外はナデが加えられる。二次加熱。内外面吸炭部分多い。
参	馬歯	—	—	—	—	—	—	—	—

**87号住居跡** L-6グリッドに位置している。第一確認面下位からの検出である。

(第10図) 西側は、調査区外に及んでいる。北西隅を301号土坑、南東隅を304号土坑、南西隅を90号住居跡、北辺から南辺にかけては89号溝から93号溝までの東西方向に伸びる5条の溝



第10図 A区87号・89号住居跡、304号土坑、89号住居跡出土遺物(1)

跡にそれぞれ切断されている。また、竪穴中央部の覆土上面には88号住居跡が、南西隅付近の覆土上面では89号住居跡のカマドが構築されている。

各辺とも蛇行し、切断されている場所が多く、また西側が調査区外に及んでいることから、形態・規模共に不明であるといわざるを得ない。ただし、検出部分の南北中央部分の長さは6.28mを計る。主軸方位も計測不能である。

壁は、ほぼ直線的に立ち上がり、掘り込み確認面から床面までの深さは、43cm前後である。

床面は、凹凸が激しく安定していない。しかし、北辺から東辺の中央付近の壁直下には、周溝が廻っている。幅15～20cm、深さ5～8cm前後を計る。床面上にピットは穿たれておらず、炉等も検出されていない。

覆土は、少量の炭化物を含む暗褐色粘土（第3層）を最下層として、上位には、少量の炭化物を含むにぶい黄褐色シルト（第2層）、多量のマンガン粒を含む暗灰黄色シルト（第1層）が堆積している。

遺物は、図示可能なものはないが、刷毛目調整の土師器台付甕小破片が第3層中から出土しており、当該期の住居跡であると思われる。

**88号住居跡** L-6グリッドに位置している。第一確認面からの検出である。

(第11図) 北西隅を301号土坑、北辺から南辺にかけては89号溝から92号溝までの東西方向に伸び

(第12図) る4条の溝跡にそれぞれ切断されている。また、87号住居跡の覆土を掘り込んでいるが、上面には89号住居跡が構築されている。

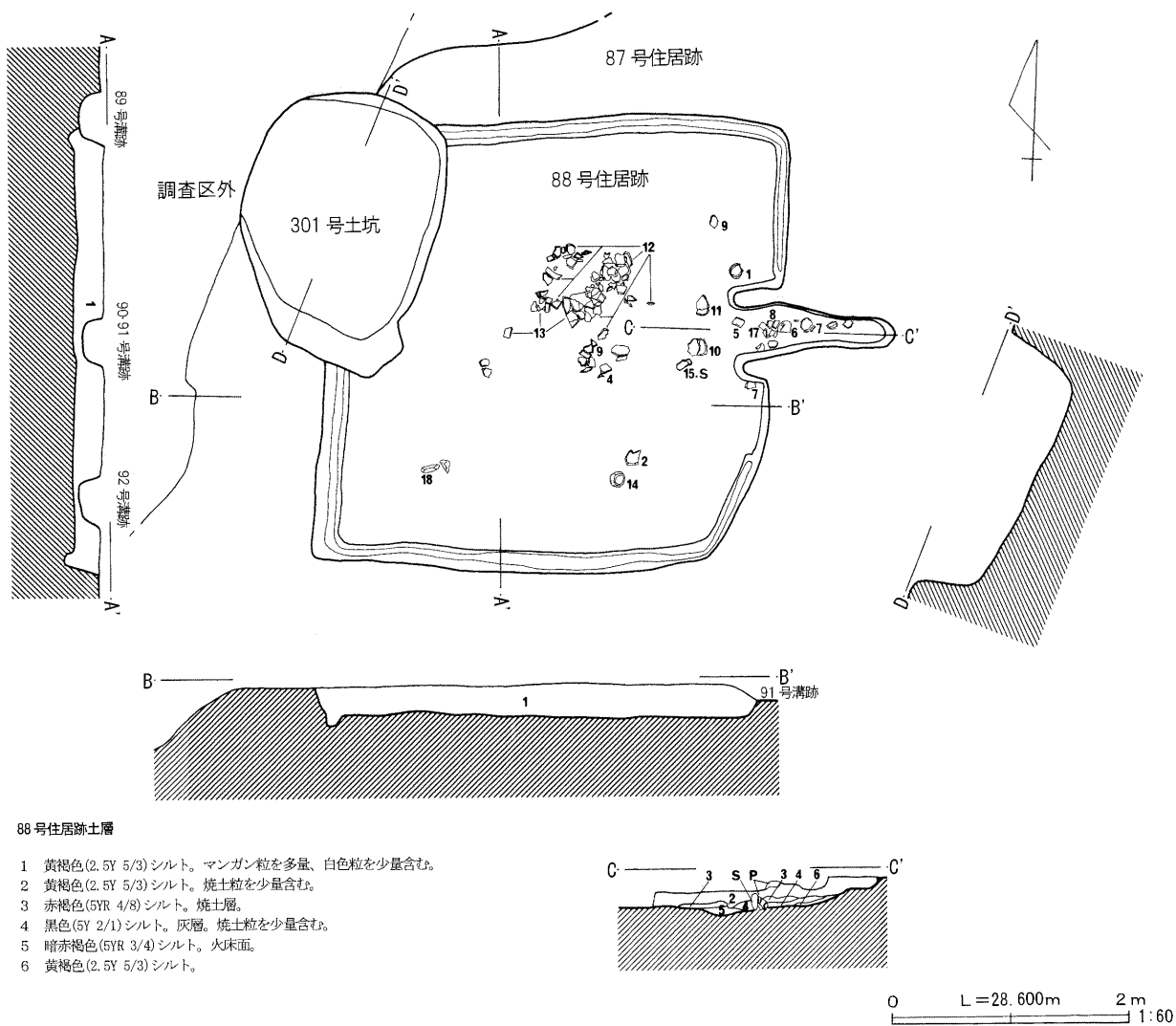
各辺長は、東辺3.80m、南辺3.40mを計る。北辺と西辺は301号土坑によって削除されているため実測はできないが、北辺3.82m、西辺3.70mを計るものと推定される。東辺の南半部分が内側に湾曲し、南辺が若干短くなるが、ほぼ正方形を呈するといえる。主軸方位は、N-88°-Eを示す。

壁は、ほぼ直線的に立ち上がり、掘り込み確認面から床面までの深さは、23cm前後である。

遺構床面は、ほとんど凹凸がみられず、安定している。壁直下には、カマド南脇を除いて周溝が廻っている。幅10～12cm、深さ8cm前後を計る。床面上にピットは穿たれていない。

カマドは、東壁中央わずかに北寄りに設けられている。袖は、壁から北側が45cm、南側が32cmの長さに作り付けられている。袖幅は、北側が20cm、南側が27cmを計る。袖々間は40cmを計り、平行している。火床は、袖前面よりさらに52cm程竪穴内からはじまり、掘り込み開始点から74cm地点（袖前面より22cm地点であり、竪穴壁ライン上）に石製の支脚が立てられている。前面から奥部までの長さは125cmを計る。幅は、40cmのまま竪穴壁まで推移したものが、壁ラインで両側壁が狭まり、最奥部では幅30cmとなる。断面は、前面から窪みをもち、支脚に向けて上昇している。支脚の背後は緩斜面を成す。煙道は、前面が湾曲した斜面であるが奥部はほぼ水平となる。長さは、52cmを計る。両側壁は徐々に狭まり、最奥部では幅24cmとなる。煙出し奥壁は急傾斜を成す。カマド全体の長さは、183cmを計る。

覆土は、多量のマンガン粒及び少量の白色粒を含む黄褐色シルト（第1層）が全体に堆積している。



第11図 A区88号住居跡、301号土坑

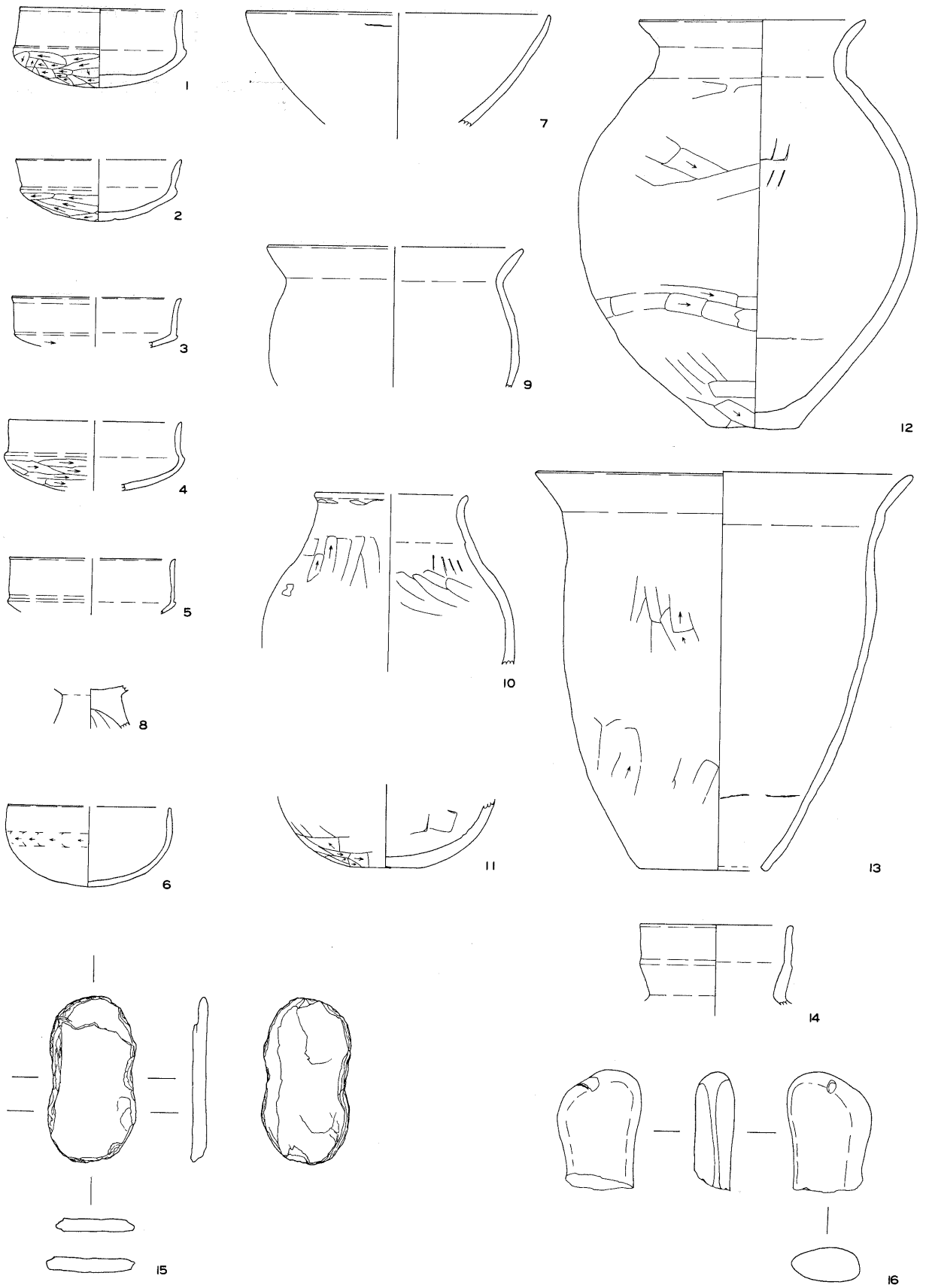
遺物は、床面上から土師器杯（1）、カマド内から土師器杯（5・6）、高坏（7・8）、支脚（17）が出土している他、覆土中から土師器杯（2・3・4）、甕（9～12）、甗（9）、壺（14）、石錘（15）、砥石（16）、編み物石（18～21）等が出土している。

**89号住居跡** L-6グリッドに位置している。第一確認面からの検出である。

(第10図) カマド及びカマドにつながる壁の極一部が検出されたのみであり、詳細は不明である。

(第13図) 床面は、88号住居跡の上面に連続すると思われるが、確認されていない。

カマドは、奥部が90号住居跡カマドに切断されており、火床部分が確認されたのみである。袖は、壁面から38cm前後縦穴内に張り出し、幅30cm前後で作り付けられている。袖々間は45cmを計り、平行している。南袖は、縦穴壁の部分で5cm広がり、さらに縦穴外へ掘り込まれている。現状では、袖前面から78cmまでの奥行きが確認できる。縦穴外の両壁も平行しており、火床全体の形態は、長方形を呈している。火床の長軸方位は、N-



第12图 A区88号住居跡出土遺物

第3表 A区88号住居跡出土遺物観察表(第12図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・杯	10.6	5.8	—	①②③④	②	橙	3/4	内底面に炭化物付着。内外面煤付着。
2	土師器・杯	(12.0)	4.5	—	①②③	③	明赤褐	1/4	内面全面表面剥離。
3	土師器・杯	(12.2)	—	—	①②③④	③	橙	口縁部1/5	
4	土師器・杯	(12.5)	—	—	①②③④	③	橙	1/4	体部外面黒斑。
5	土師器・杯	(11.9)	—	—	①②③④	③	橙	口縁部1/4	表面剥離した部分多い。口唇内外面炭化物付着。
6	土師器・杯	(11.8)	5.9	—	①②③④	③	にぶい橙	3/8	口縁部外面吸炭、内面全面吸炭。炭化物付着。
7	土師器・深鉢	(21.8)	—	—	①②③④	③	にぶい褐	口縁部1/5	5mm 大礫多量に含む。
8	土師器・高杯	—	—	—	①②③④	③	橙	脚部のみ	脚部外面横の水拭き。
9	土師器・甕	(18.5)	—	—	①②③④	③	橙	口縁部1/5	5mm～1cm 大の礫多量に含む。
10	土師器・甕	(11.1)	—	—	①②③④	②	にぶい赤褐	上位1/3	内面全面吸炭、炭化物付着。外面吸炭、煤付着。
11	土師器・壺	—	—	—	①②③	②	明赤褐	底部のみ	二次加熱。
12	土師器・壺	16.4	29.8	6.2	①②③④	③	橙	4/5	胴部内面肩以下吸炭。下位炭化物付着。二次加熱。
13	土師器・瓶	27.4	28.3	9.2	①②③	③	明赤褐	3/5	胴部外面縦のヘラケズリの後ナデ。二次加熱。
14	土師器・壺	11.0	—	—	①②③④	③	橙	口縁部のみ	内外面共表面剥離。
15	石鏃	重さ 140g						完形	
16	砥石	長さ 8.8+α(半折) 最大幅 6.0 厚さ 2.9						—	二面使用。
17	編物石	長さ 18.0 幅 5.5 厚さ 6.0 重さ 920g						—	
18	編物石	長さ 15.0 幅 6.0 厚さ 3.0 重さ 440g						—	
19	編物石	長さ 10.4 幅 4.5 厚さ 3.3 重さ 240g						—	
20	編物石	長さ 16.0 幅 5.5 厚さ 2.7 重さ 410g						—	
21	編物石	長さ 14.5 幅 4.7 厚さ 2.8 重さ 310g						—	

115° -Wを示す。火床は、わずかに窪み、焼土ブロック層(第5層)を成す。上位には焼土ブロックを多量に含む浅黄色粘土(第4層)が堆積している。

遺物は、北袖内から土師器甕(3)が出土し、土師器杯(1)、甕(2)、(4～6)は、火床前面に集中して出土している。

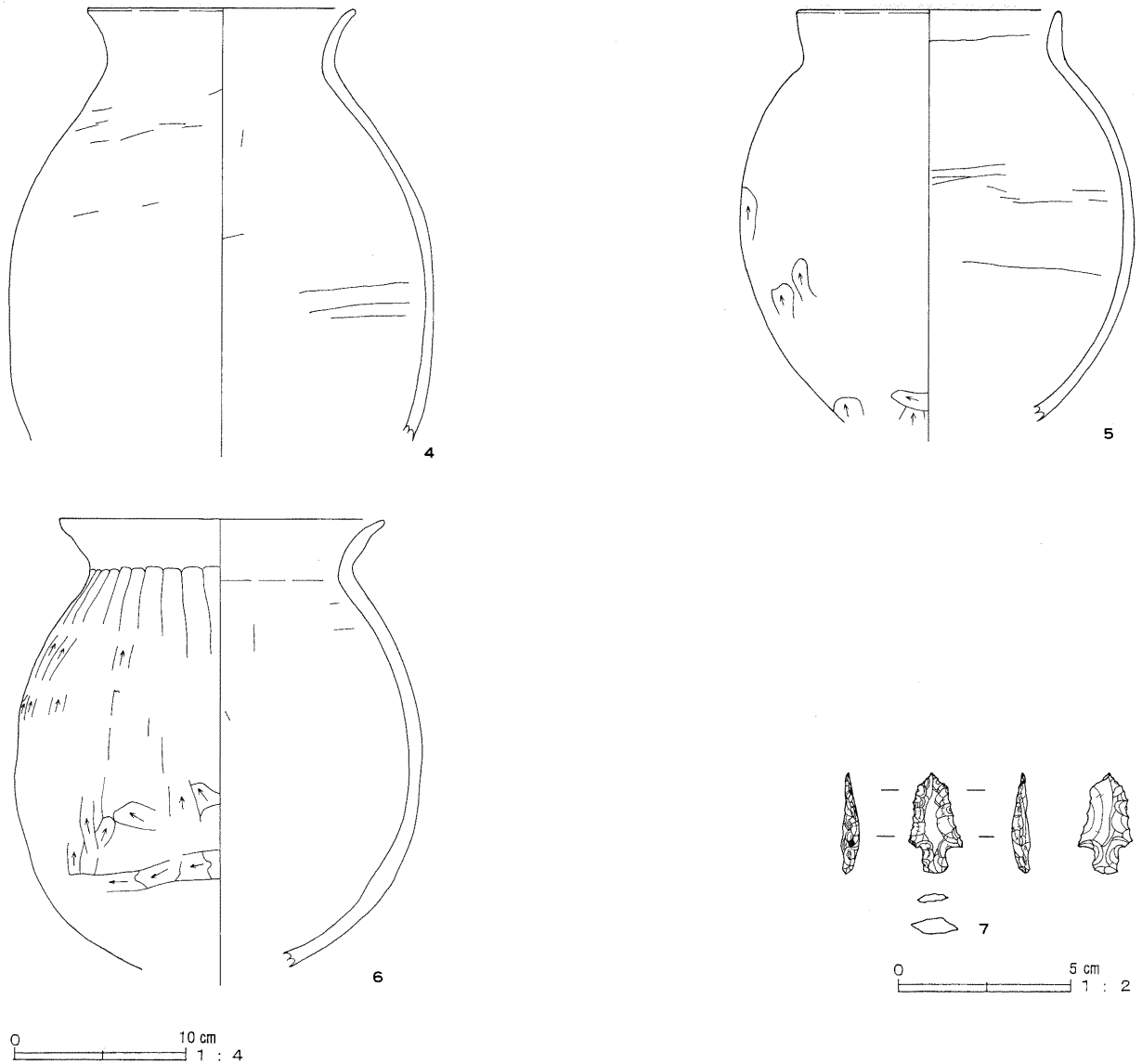
第4表 A区89号住居跡出土遺物観察表(第10・13図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・杯	(12.2)	5.1	5.0	③②①	②	橙	1/2	内底面炭化物付着。全体に表面磨滅。
2	土師器・甕	13.6	14.2	4.8	⑥④	②	にぶい橙	一部欠	口縁部横ナデ、胴部外面上位線のケズリの後ナデ、中位～下位横のケズリ、底部ナデ、底面ケズリ。内面上位ナデ、中位横のケズリ、底部横のナデツケ。
3	土師器・甕	18.4	—	—	①③④⑥	②	浅黄橙	上位2/3	口縁部横ナデ。胴部外面縦のケズリ、内面横のナデ。
4	土師器・甕	15.4	(25.4)	—	①②④⑤⑥	②	明赤褐	下位欠1/2	胴部外面縦のケズリの後、丁寧なナデ。口縁部から胴部上位にかけて、内外面共一部吸炭。
5	土師器・甕	15.0	(24.2)	—	①②④⑥	②	にぶい赤褐	底部欠1/2	外面全面スリップ状のナデ、一部削り様ナデ。内面ナデ、接合部木口状工具によるナデ。二次加熱。
6	土師器・甕	18.6	(26.2)	—	⑥①③④⑤	②	にぶい褐	底部欠3/4	口縁部横ナデ、一部横のナデが加わる。胴部外面ケズリ、上位のみナデが加わる。
7	石鏃	全長 3.0 下幅 0.8 茎長 0.7 刃幅 1.6 刃厚さ 0.5"						完形	

90号住居跡 L-6からL-7グリッドにかけて位置している。第一確認面からの検出である。

(第14図) 西側は、調査区外に及んでおり、305号から308号土坑、及び6号井戸跡によってかなりの部分が切断されている。また、北端カマド部分は、東西行する92号溝によって上面が切断されている。さらに、南東隅は、91号住居跡によって切断されている。

辺長は、南北が4.46mを計るが、東西は、西側が調査区外に延びるため不明であるものの、南北より長くなる様相を呈しており、東西に長い長方形を呈すると思われる。しかし、東辺が直交せず、不整形であるといわざるを得ない。平行する南・北辺の方位(長軸方位)



第13図 A区89号住居跡出土遺物(2)

は、 $N-100^{\circ}-E$ を示す。

壁は、ほぼ直線的に立ち上がり、掘り込み確認面から床面までの深さは、35cm前後である。

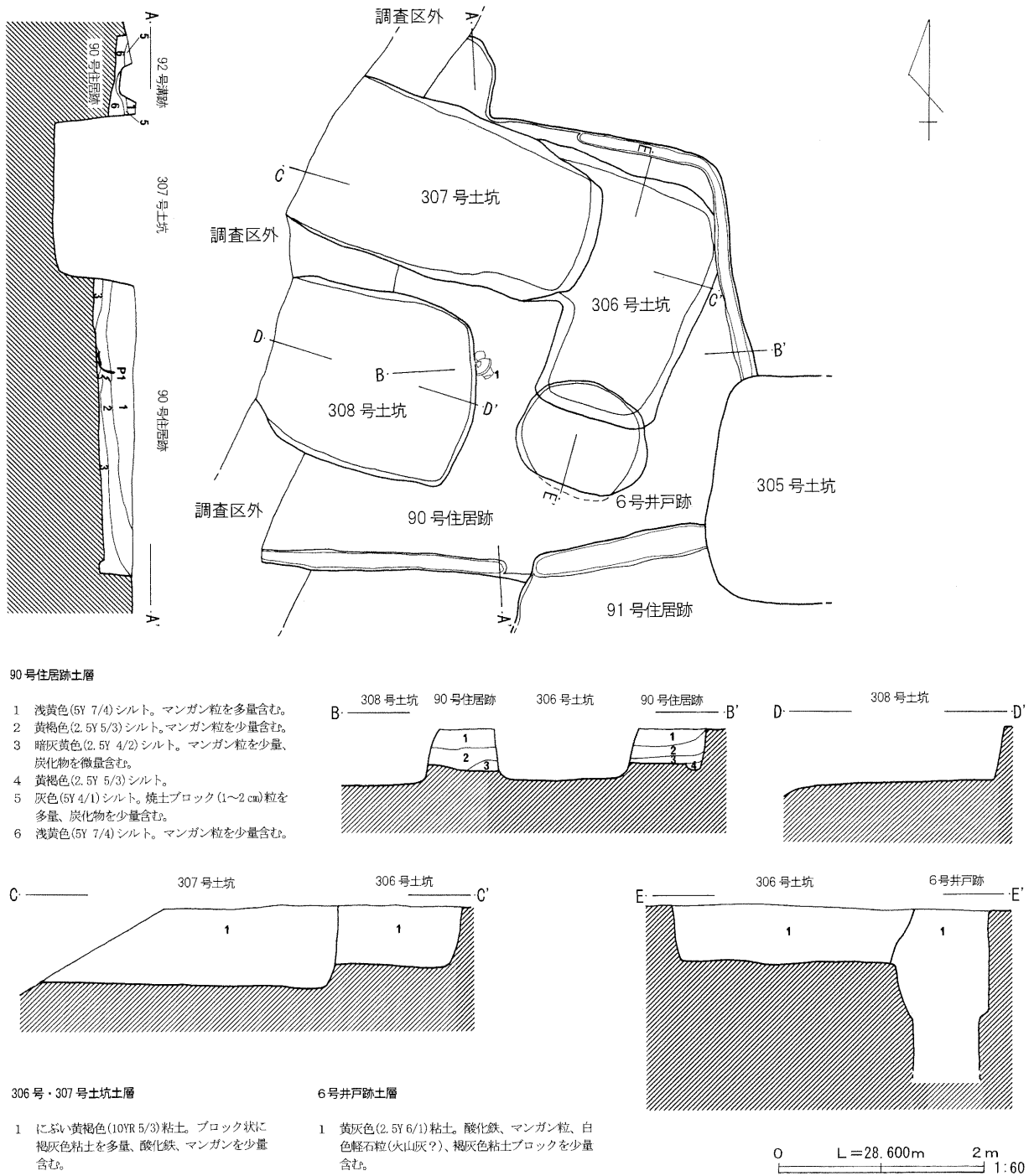
床面は、凹凸がみられ、安定しない。壁直下には、周溝が断続して廻っている。幅10～14cm、深さ6cm前後を計る。床面上にピットは穿たれていない。

カマドは、北壁の壁外に設けられており、底面が北から南へ緩やかに傾斜する。最も竪穴寄りの底面は、床面より15cm高い。壁はいずれも急傾斜をもつ。しかしながら、西側が調査区外に位置し、南側が307号土坑に切断されているため、詳細は不明である。覆土は、下層が少量のマンガン粒を含む浅黄色シルト（第6層）、中位が多量の焼土ブロックと少量の炭化物を含む灰色シルト（第5層）であり、上位に竪穴内覆土と同一の多量のマンガン粒を含む浅黄色シルト（第1層）が堆積している。しかしながら、最上層の覆土の同一性から一応、本住居跡のカマドとしたものの、底面が焼土化していないこと、煙道とすると幅が広すぎる事等から、本跡に伴うものでなく、独立した焼土を伴うピットと考えられるものである。



また、本跡が古墳時代前期に属する91号住居跡に切断されていること、カマドとした部分が古墳時代後期に属する89号住居跡カマドを切断していることから、本跡に伴わない別遺構と考えた方が妥当であろう。

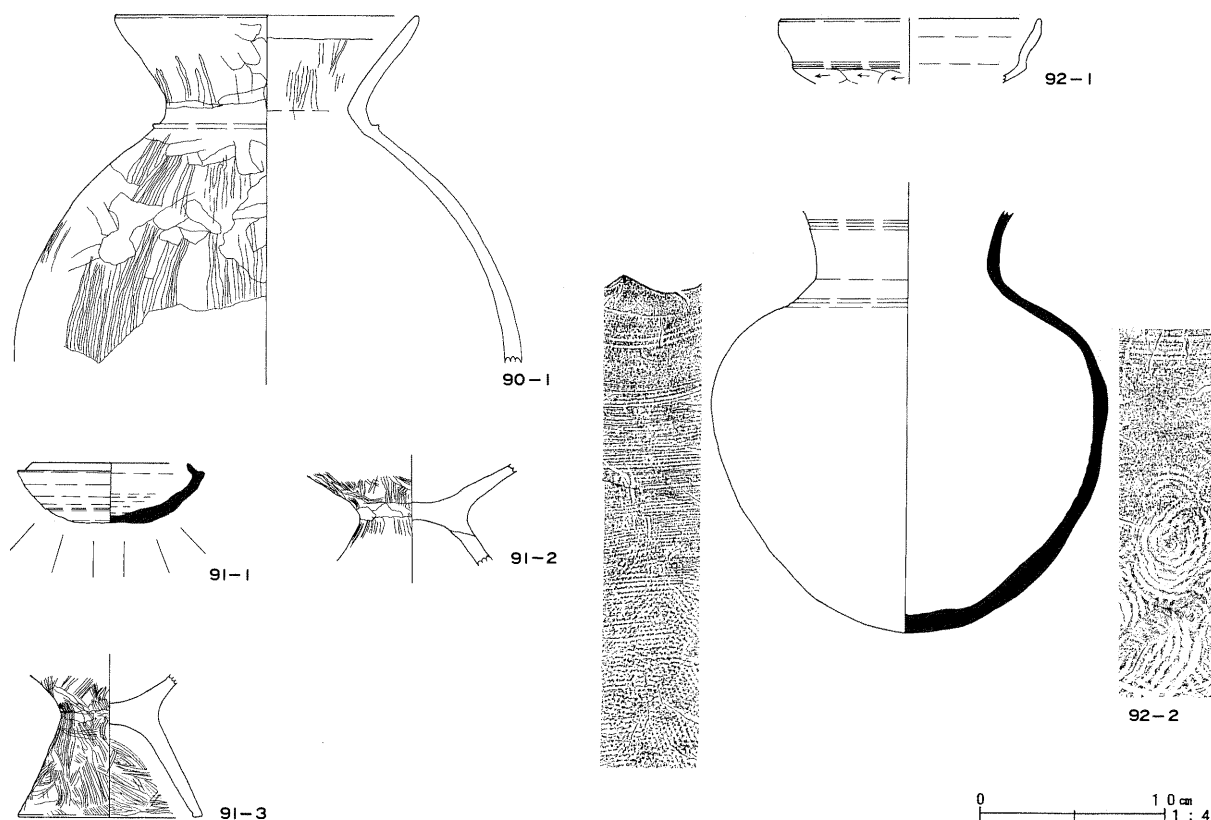
堅穴の覆土は、下位に少量のマンガン粒及び微量の炭化物を含む暗灰黄色シルト（第3層）、中位に少量のマンガン粒を含む黄褐色シルト（第2層）、上位に多量のマンガン粒を含む浅黄色シルト（第1層）が堆積している。また、周溝内の一部には、黄褐色シルト（第4層）



第14図 A区90号住居跡、306号・307号・308号土坑、6号井戸跡

のみられる部分もある。

遺物は、中央床面上から土師器壺（1）が出土している。



第15図 A区90号・91号・92号住居跡出土遺物

第5表 A区90号住居跡出土遺物観察表（第15図）

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・杯	(12.2)	5.1	5.0	②①④	②	橙	1/2	口縁部内外面、胴部外面朱塗。表面剥離した部分多い。胴部内面横のナデ。

第6表 A区91号住居跡出土遺物観察表（第15図）

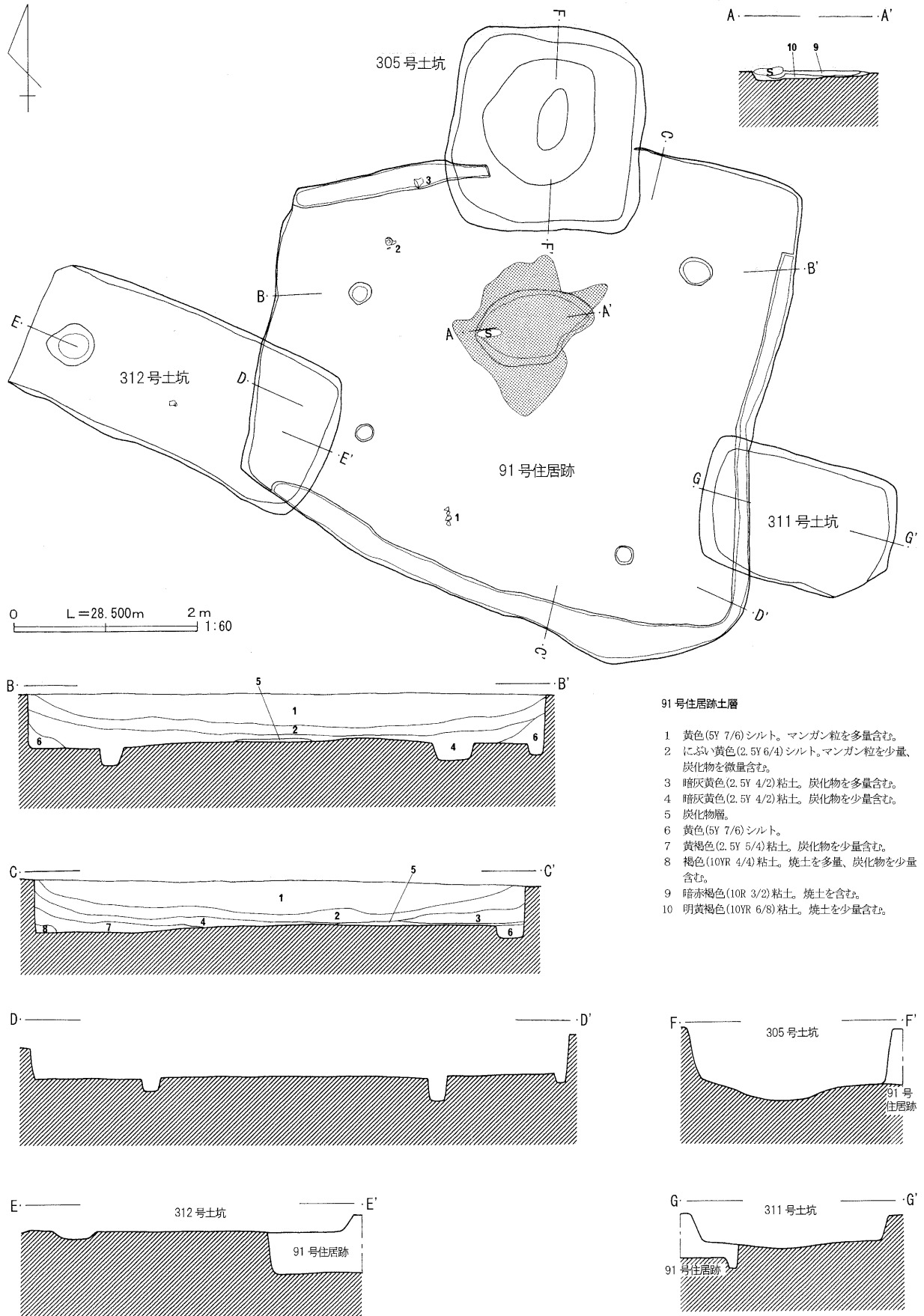
No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	須恵器・杯	8.5	3.4	—	①②	①	灰	一部欠	底面回転ヘラケズリ。
2	土師器・台付甃	—	—	—	⑥①②③④	②	赤橙	接合部のみ	底部内面炭化物付着。脚接合部外面スリップ。内面剥離した部分多い。
3	土師器・台付甃	—	—	10.2	①⑥④②	②	赤	脚部のみ	外面表面剥離した部分多い。二次加熱。

第7表 A区92号住居跡出土遺物観察表（第15図）

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・杯	(14.1)	—	—	②①④	②	橙	口縁部1/8	内面表面剥離。
2	須恵器・壺	—	22.8	—	①②	?	灰白	4/5	

91号住居跡 M-6グリッドに位置している。第一確認面下位からの検出である。

(第16図) 北辺中央を305号土坑によって切断されている。一方、北西隅では、90号住居跡を切断(第15図) している。また、東辺南隅を311号土坑、南西隅を312号土坑。南東隅を92号住居跡によ



第16図 A区91号住居跡、305号・311号・312号土坑

って、それぞれの上面が削平されている。

各辺長は、北辺が5.50m、東辺が4.72m、南辺が5.19m、西辺が3.16mを計る。西辺が極端に短く、北・南辺が膨らみ、東・西辺が窪みをもつため、全体では台形に近い不整形を呈することとなる。北辺と南辺の中間ラインの方位は、N-8°-Eを示す。

壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、掘り込み確認面から床面までの深さは、60cm前後である。

床面は、やや凹凸がみられるものの、安定している。西辺及び北辺東半以外の壁直下には、周溝が断続して廻っている。幅15cm前後であるが、南辺南東隅は最高で45cmを測る部分もある。深さは10~14cm前後を計る。

ピットは、柱穴と思われ、竪穴形態と相似形に4ヶ所穿たれている。いずれも円形を呈し、北西ピットは径23cm、深さ22cm、北東ピットは径28×35cm、深さ20cm、南東ピットは径20cm、深さ28cm、南西ピットは径20cm、深さ16cmを計る。各ピット芯々間距離は、北辺3.70m、東辺3.22m、南辺3.17m、西辺1.54mである。

北辺2ピットの間内側に、炉が設けられている。南北84cm、東西132cmを計り、南東部がやや窪むものの、ほぼ長円形を呈する。西隅には焼土上に長円礫が置かれている。また周囲には炭化物が厚く堆積している（第5層）。

覆土は、下層が少量の炭化物を含む暗灰黄色粘土（第4層）、中位に少量のマンガン粒及び微量の炭化物を含むにぶい黄色シルト（第2層）、上位に多量のマンガン粒を含む黄色シルト（第1層）が堆積している。壁際では、第4層の下位に黄色シルト（第6層）が堆積している部分が多く、北辺の一部では少量の炭化物を含む黄褐色粘土（第7層）や、多量の焼土及び少量の炭化物を含む褐色粘土（第8層）がみられる部分もある。

遺物は、土師器台付甕（2・3）が出土している。須恵器杯（1）は、床面上に一部堆積した、本住居跡覆土と異なる砂質土に含まれており、本跡に伴わないものと考えられる。

**92号住居跡** M-5・6グリッドにかけて位置している。第一確認面からの検出である。

(第17図) 東辺上位は310号土坑によって削平され、南半は9号井戸跡及び6号不明遺構によって

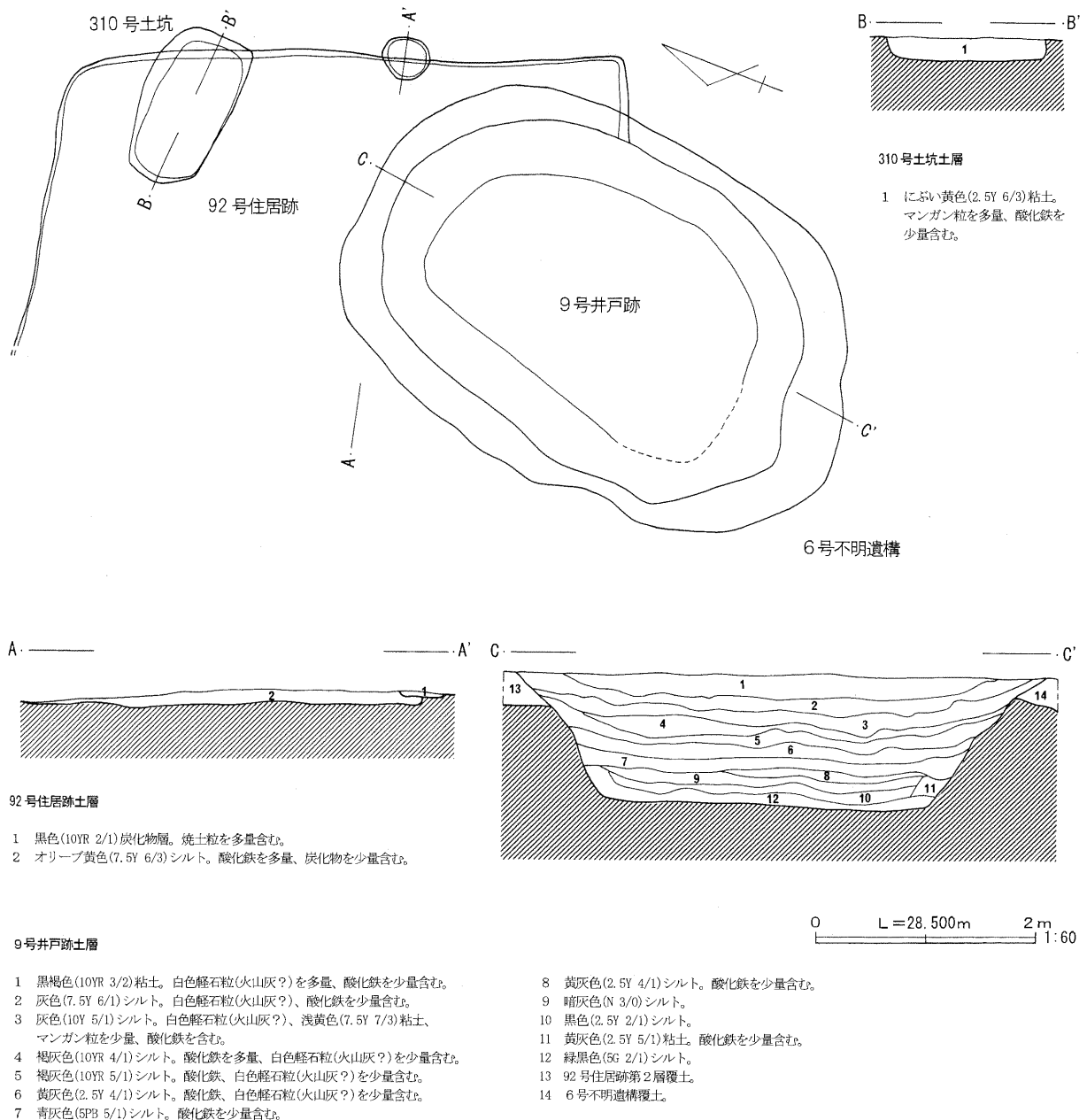
(第15図) 大きく切断されている。また、検出段階が遅かったため、西側では壁を検出できていない。このため辺長は、東辺が5.27mであることが知れるのみである。北辺南辺とも、東辺から90度以上に開き、全体では台形に近い不整形を呈することとなると思われる。

壁は、下端が検出されたのみであり、形状は不明である。東辺方位は、N-20°-Wを示す。

床面は、凹凸がみられ、不安定である。それでも東壁から2.7m前後の東半部分は比較的安定しており、この部分から西へ緩傾斜をもって上昇している。当初、この部分で竪穴が終了するものとも思われたが、一旦上昇した後の西側の平坦部分にも同一覆土が連続しており、同一竪穴としたものである。床面上から、ピット等は検出されていない。

カマド等は、検出されていない。

覆土は、多量の酸化鉄及び少量の炭化物を含むオリーブ褐色シルト（第2層）である。遺物は、土師器杯（1）、須恵器甕（2）が出土している。



第17図 A区92号住居跡、310号土坑、9号井戸跡

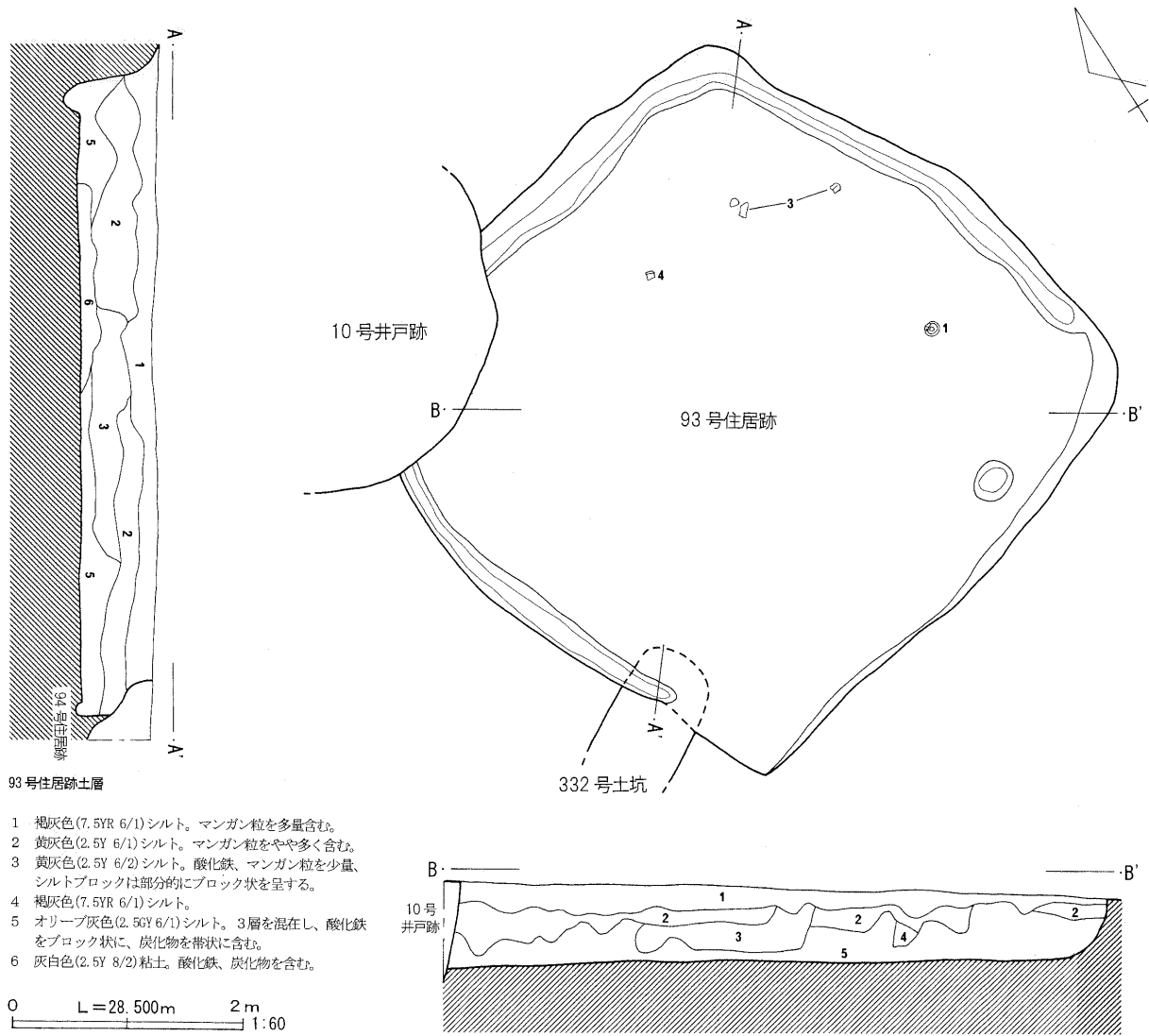
**93号住居跡** O-6・7グリッドにかけて位置している。第一確認面下位からの検出である。

(第18図) 北西隅を10号井戸跡によって切断、西側を332号土坑によって削平されている。

辺長は、北西隅が10号井戸跡によって切断されているため、北辺・西辺は計測できないが、東辺4.83m、南辺4.76mを計り、北辺・西辺もほぼ直交していることから、全体ではほぼ正方形を呈するといえる。主軸方位は、N-14°-Wを示す。

壁は、ほぼ直線を成す部分と、湾曲する部分がみられる。

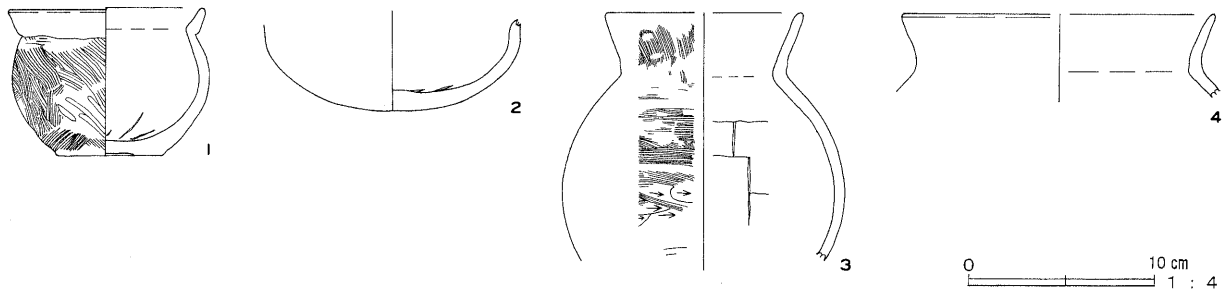
床面は、凹凸はほとんどないが、硬くしまった部分もなく、不安定である。壁直下には、南辺を除いて周溝が廻る。幅は13~24cm、深さ5~14cmと、共に安定していない。南辺中央から南東隅寄りに径28×37cm、深さ15cmのピットが穿たれている。



93号住居跡土層

- 1 褐色(7.5YR 6/1)シルト。マンガン粒を多量含む。
- 2 黄灰色(2.5Y 6/1)シルト。マンガン粒をやや多く含む。
- 3 黄灰色(2.5Y 6/2)シルト。酸化鉄、マンガン粒を少量、シルトブロックは部分的にブロック状を呈する。
- 4 褐色(7.5YR 6/1)シルト。
- 5 オリーブ灰色(2.5GY 6/1)シルト。3層を混在し、酸化鉄をブロック状に、炭化物を帯状に含む。
- 6 灰白色(2.5Y 8/2)粘土。酸化鉄、炭化物を含む。

0 L=28.500m 2m 1:60



第18図 A区93号住居跡及び出土遺物

第8表 A区93号住居跡出土遺物観察表 (第18図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・	10.7	8.1	5.6	①④②	②	橙	完形	内面上位横のナデ、下位ナデツケ。内面吸炭。二次加熱。
2	土師器・	—	—	—	①④③⑥	②	明赤褐	2/5	全面表面剥離した部分多いが底面には内面にナデツケ、外面には削りの痕跡がみられる。
3	土師器・甕	(10.8)	—	—	①②④③	②	浅黄橙	上位1/5	内面一部炭化物付着。
4	土師器・甕	(16.9)	—	—	①②④	②	橙	口縁部1/8	全面吸炭。外面炭化物付着。

炉等は、検出されていない。

覆土は、上位から多量のマンガン粒を含む褐灰色シルト（第1層）、やや多量のマンガン粒を含む黄灰色シルト（第2層）が自然堆積しているが、これより下位の土層は、いずれも投入土の様相を呈している。第3層は、少量の酸化鉄・マンガン粒を含み、灰色シルトブロックと黄灰色シルトの混在層、第5層は、第3層を混在し、酸化鉄をブロック状に、炭化物を帯状に含むオリーブ褐色であり、両層が上下に入り組み、中間に第4層・褐灰色シルトブロックがみられる部分もある。また、床面上の一部には、酸化鉄及び炭化物を含む灰白色粘土（第6層）が堆積している。

遺物は、土師器<sub>1</sub>（1・2）、土師器甕（3・4）が出土している。

**94号住居跡** O-7グリッドに位置している。第一確認面からの検出である。

(第19図) 西側は調査区外に延伸し、北側を10号井戸跡及び、319～322号の4基の土坑、及び322

(第20図) 号土坑に切断されている。逆に95号住居跡の上面を削平している。

(第21図) 北壁が土坑群の北西部に検出されたが、安定せず、本跡の壁であると断言できないが、多量のマンガン粒を含むオリーブ黄色シルト（第1層）がこの部分まで堆積していることから、本跡の北壁としたものである。南辺からの距離は、9.25mを計る。

しかし、東壁直下の周溝が中断した地点から北側部分のみに、多量のマンガン粒を含むオリーブ灰色シルト（第3層）が堆積し、この南縁でほぼ垂直の壁面をもつこと、93号住居跡覆土中に本跡の覆土及び床面が延伸していないことを勘案すると、第3層は本跡覆土ではなく、南縁が本跡の北壁であり、第1層は異なる2遺構に共通した覆土であると考えることが妥当であろう。これによれば、南北の長さは、6.30m前後となろう。また、主軸方位は、N-140°-Wを示す。

東・南壁は、一部（第19図Fライン付近）がやや緩傾斜となるが、他の大部分は直線的で急傾斜を成している。

床面は、凹凸が激しく安定していない。東・南壁の直下には、周溝が廻っている。幅は17cm前後、深さ5cm前後である。

ピットは、竪穴南東隅寄りと、南辺と平行した西側に2ヶ所穿たれている。竪穴南東隅寄りピットは、径38cm、深さ20cm、西側ピットは、径44cm、深さ16cmを計る。

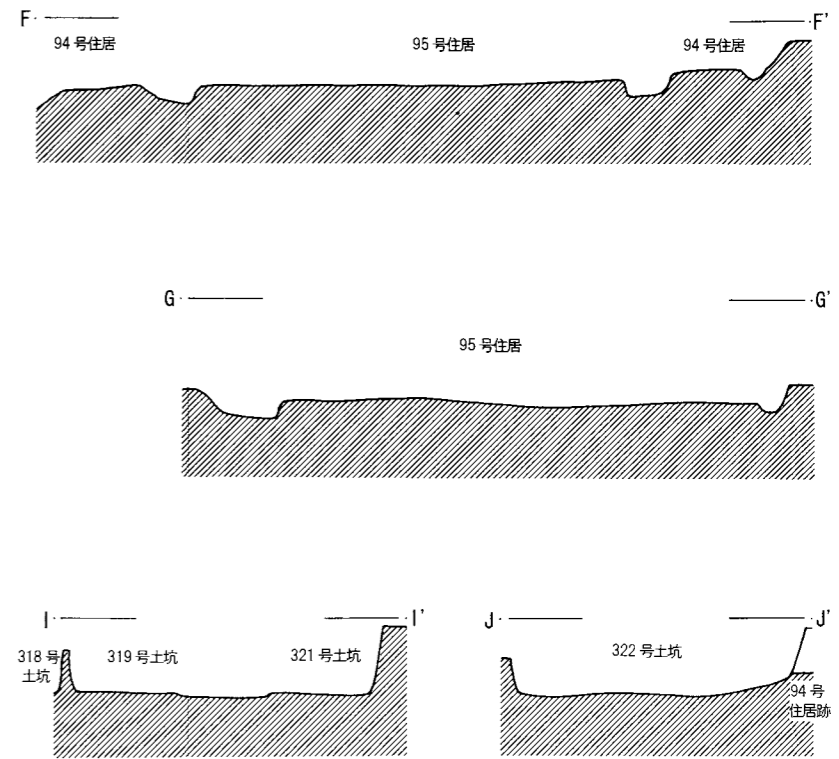
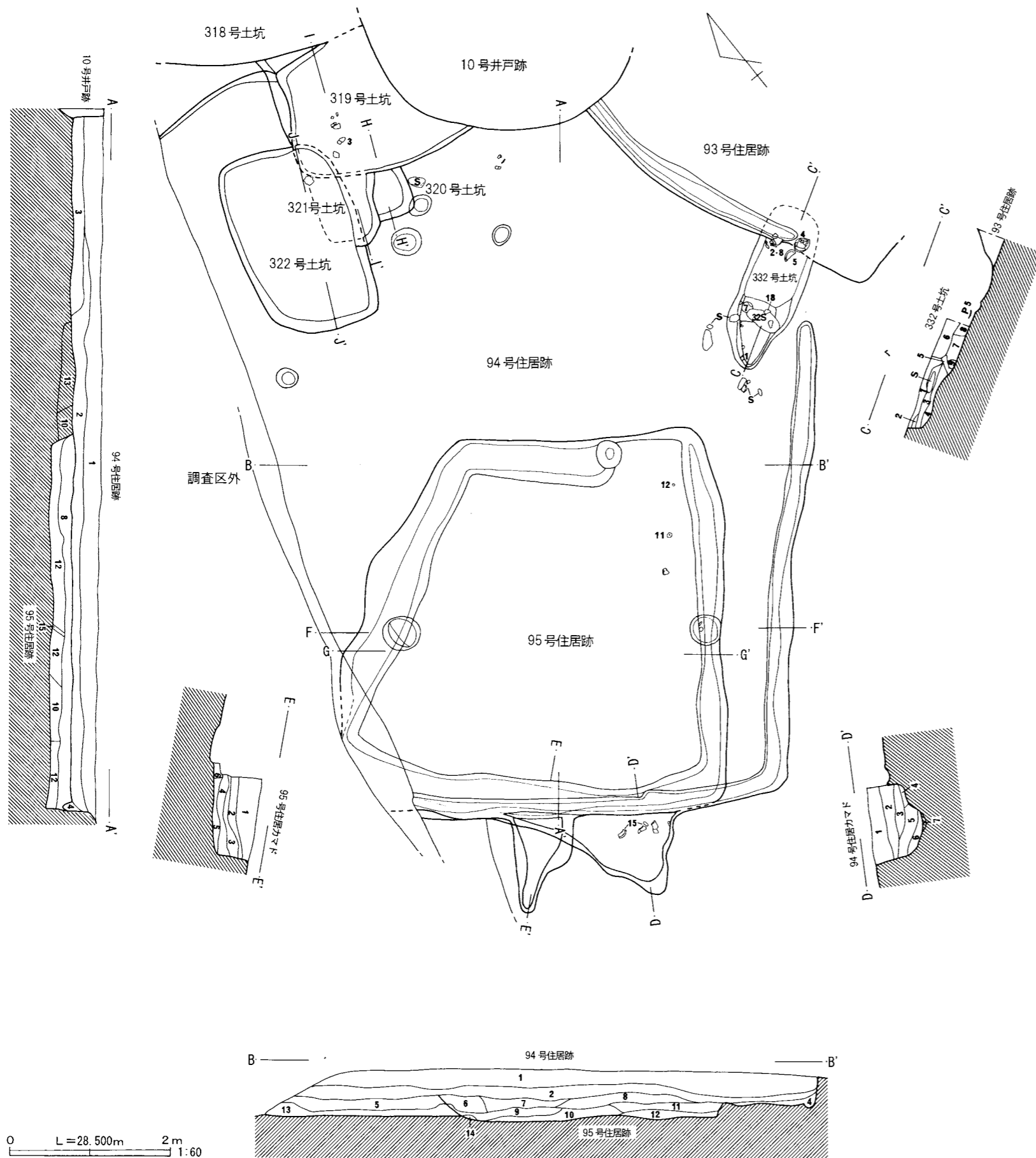
カマドは、南壁から張り出して設けられている。しかし前面に周溝が廻り、使用されていた状況を示しているものではない。ただ、床面下に位置するところから、炭化物を含む土層（第19図Dライン・第4～第6層）が検出されたのみである。各部の詳細も不明であるが、断面形態は、床面より下位にピット状に掘り込まれ、緩傾斜から湾曲する奥壁に至っている。平面形態は、幅・奥行共に90cm程で三角形を呈する張り出しである。

覆土は、先のみた第1層下に、多量のマンガン粒・酸化鉄粒、少量の炭化物粒を含む灰オリーブ色シルト（第2層）が堆積している。壁際には、第2層の下位に灰色シルト（第4層）が堆積している部分が多い。

第9表 A区94号住居跡出土遺物観察表(第20・21図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	須恵器・杯	—	—	—	①②⑤⑥	①	灰	底面一部のみ	外底面吸炭。
2	土師器・杯	(14.0)	2.7	—	③①②	②	赤褐	1/2	全面吸炭。内面一部炭化物付着。
3	土師器・杯	(14.8)	(5.5)	—	③②①④	②	橙	1/4	内外面共表面剥離し部分多い。
4	土師器・杯	14.1	3.8	—	③②①④	②	にぶい橙	完形	内外面吸炭。内面一部炭化物付着。
5	土師器・杯	13.6	3.8	—	③④①②	②	にぶい黄褐	3/4	全面吸炭。内面煤付着。二次加熱。
6	土師器・杯	(12.5)	—	—	①②③④	②	赤	上部1/8	体部外面斜を主体としたケズリ痕。二次加熱。
7	土師器・甕	15.6	13.8	7.2	②⑥①④	②	橙	完形	外面全面吸炭。内面中位から口縁下端炭化物付着。二次加熱。全体に歪みが激しい。
8	土師器・甕	(17.4)	—	—	⑥①②③④	②	橙	上位3/4	内外面一部吸炭。外面一部煤付着。二次加熱。
9	土師器・甕	(16.3)	—	—	⑥②③④①	②	浅黄橙	口縁部1/6	胴部内面吸炭。胎土中砂礫多。
10	砥石	長さ 8.4 厚さ 1.9 幅 6.5 重さ 161g						—	
11	石製紡錘車	下端径 4.0 孔径 0.5						上部欠	側面及び広面線刻有り。
12	管玉	長さ 2.1 最大径 0.7 孔径 大0.3 小0.2						完形	緑色凝灰岩。
13	須恵器・甕	—	—	—	①②	①	灰	—	
14	須恵器・甕	—	—	—	②①	①	灰	—	
15	土師器・甕	—	—	—	④①②③⑥	②	橙	—	
16	土師器・台付甕	—	—	—	①②④	②	暗赤褐	接合部のみ	内外面共吸炭。二次加熱。
17	土師器・台付甕	—	—	11.7	①②④	②	明赤褐	脚部のみ	脚部外面丁寧なミガキ、内面上位指頭によるナデツケ、下位ナデ。二次加熱。
18	土師器・甕	—	—	(5.1)	⑥①②	②	赤橙	底部2/5	内面吸炭。二次加熱。
19	土師器・壺	(15.0)	—	—	①③②④	②	にぶい橙	口縁部1/7	
20	土師器・甕	(17.1)	—	—	①③②④	②	橙	底部欠1/8	
21	土師器・埴	(11.4)	—	—	⑥①②③④	②	浅黄橙	口縁部1/4	
22	土師器・埴	—	—	—	②③①	②	明褐灰	—	
23	土師器・甕	18.2	39.7	5.2	⑥②①③	②	淡橙	胴部1/2欠	
24	磔	長さ 5.6 幅 4.0 厚さ 1.6 重さ 60g						—	
25	磔	長さ 10.5 幅 4.2 厚さ 3.0 重さ 240g						—	
26	磔	長さ 13.5 幅 6.4 厚さ 2.9 重さ 400g						—	
27	磔	長さ 14.6 幅 5.0 厚さ 4.4 重さ 500g						—	
28	磔	長さ 10.3 幅 6.1 厚さ 4.8 重さ 470g						—	
29	磔	長さ 15.0 幅 6.3 厚さ 4.3 重さ 625g						—	
30	磔	長さ 15.0 幅 8.5 厚さ 4.7 重さ 1,110g						—	
31	磔	長さ 15.7 幅 7.0 厚さ 4.6 重さ 790g						—	
32	磔	長さ 46.5 幅 23.5 厚さ 4.6 重さ 5,700g						—	
33	磔	長さ 5.5 幅 2.3 厚さ 2.6 重さ 60g						—	
34	磔	長さ 4.3 幅 2.6 厚さ 2.1 重さ 37g						—	
35	磔	長さ 8.0 幅 6.2 厚さ 4.2 重さ 280g						—	
36	磔	長さ 8.8 幅 6.3 厚さ 3.3 重さ 320g						—	
37	磔	長さ 9.5 幅 4.8 厚さ 3.4 重さ 200g						—	
38	磔	長さ 10.6 幅 8.8 厚さ 3.6 重さ 500g						—	
39	磔	長さ 12.5 幅 4.7 厚さ 3.1 重さ 313g						—	
40	磔	長さ 13.0 幅 5.0 厚さ 4.2 重さ 365g						—	
41	磔	長さ 10.7 幅 7.3 厚さ 5.9 重さ 480g						—	
42	磔	長さ 13.0 幅 6.0 厚さ 3.5 重さ 490g						—	
43	磔	長さ 14.2 幅 5.2 厚さ 5.2 重さ 550g						—	
44	磔	長さ 14.3 幅 5.7 厚さ 4.0 重さ 585g						—	
45	磔	長さ 15.2 幅 7.0 厚さ 3.6 重さ 535g						—	
46	磔	長さ 15.8 幅 6.7 厚さ 3.5 重さ 510g						—	
47	磔	長さ 17.1 幅 6.3 厚さ 4.3 重さ 725g						—	
48	磔	長さ 16.8 幅 8.0 厚さ 6.2 重さ 956g						—	





94・95号住居跡土層

A — A' · B — B'

- 1 オリーブ黄色(5Y 6/3)シルト。マンガン粒を多量含む。
- 2 灰オリーブ色(5Y 6/2)シルト。やや粘質。マンガン粒、酸化鉄粒を多量、炭化物粒を少量含む。
- 3 オリーブ灰色(10Y 6/2)シルト(粘土質)。マンガン粒を多量含む。
- 4 灰色(10Y 6/1)シルト。94号住居跡の壁溝。
- 5 灰色(5Y 6/1)シルト(やや粘土質)。下位にオリーブ黄色(5Y 6/4)シルト粒を多量含む。
- 6 灰オリーブ色(5Y 5/2)粘土(シルト質)。ブロック状に灰白色(5Y 7/2)シルト、マンガン粒が点在している。
- 7 黄褐色(2.5Y 5/3)粘土(シルト質)。
- 8 灰色(7.5Y 5/1)シルト。灰白色(7.5Y 7/2)シルト粒が小ブロック(0.5~1cm)状に点在している。部分的に極めて多量に集中している部分もある。
- 9 オリーブ灰色(10Y 5/2)粘土(ややシルト質)。灰色(5Y 7/2)シルトを多量含む。
- 10 灰白色(5Y 7/2)シルト(やや粘土質)。浅黄色(5Y 7/3)シルトを含む。
- 11 灰色(10Y 6/1)シルト。灰オリーブ色(7.5Y 6/2)シルトを部分的に少量含む。灰オリーブ色シルトを含まない部分は、ほぼ粘土化している。
- 12 オリーブ灰色(2.5Y 6/1)シルト。灰オリーブ色(7.5Y 6/2)シルトを多量に含むが、11層より粒子が極めて細かい。炭化物を微量に含む。
- 13 オリーブ黄色(7.5Y 6/3)シルト。極めて砂質。上位の一部で5層の上が混入している。
- 14 灰色(7.5Y 6/1)粘土(シルト質)。灰白色(7.5Y 8/2)シルト粒をやや多く含む。粘性強い。
- 15 灰色(5Y 6/1)砂。

C — C' (94号住居跡内土坑)

- 1 褐灰色(10YR 6/1)粘土(シルト質)。浅黄色(2.5Y 7/4)シルトを部分的に多量に含む。
- 2 1層とほぼ同質だがよりシルト質。浅黄色(2.5Y 7/4)シルトを多量に含む。
- 3 黄灰色(2.5Y 6/1)粘土(シルト質)。炭化物粒を微量に含む。
- 4 灰白色(2.5Y 7/1)粘土(シルト質)。かなり粘土化している。
- 5 橙色(5YR 6/8)焼土層。
- 6 灰白色(10YR 7/1)シルト。マンガン粒多量、橙色(5YR 6/8)焼土塊が少量点在している。
- 7 にぶい黄色(2.5Y 6/3)シルト(やや砂質)。
- 8 灰色(5Y 6/1)粘土(シルト質)。炭化物粒微量を含む。
- 9 褐灰色(10YR 6/1)シルト(やや砂質)。マンガン粒、炭化物微量を含む。

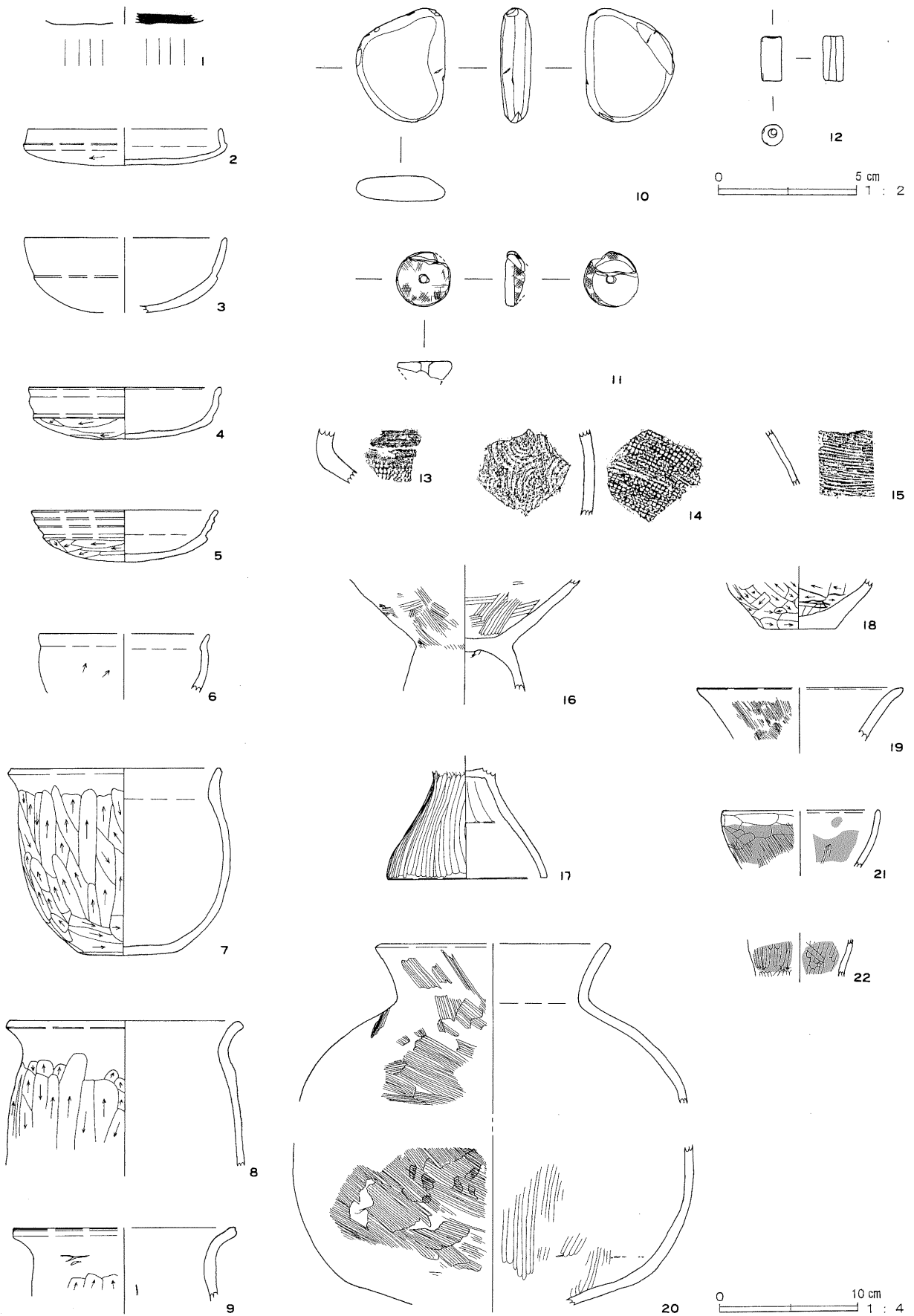
D — D' (94号住居跡カマド)

- 1 オリーブ黄色(7.5Y 6/2)シルト(粘土質)。
- 2 黄褐色(2.5Y 5/4)粘土(シルト質)。
- 3 マンガン粒を多量含む。
- 4 にぶい黄褐色(10YR 5/4)シルト。
- 5 灰黄色(2.5Y 7/2)シルト。炭化物を少量含む。
- 6 灰オリーブ色(5Y 6/2)シルト(やや粘土質)。炭化物をやや多量含む。
- 7 にぶい黄褐色(10YR 6/3)シルト。マンガン粒、炭化物を微量含む。
- 8 灰色(5Y 6/1)シルト(やや砂質)。

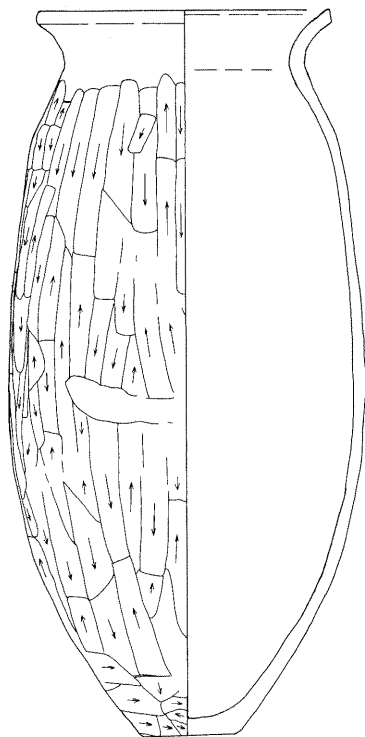
E — E' (95号住居跡カマド)

- 1 オリーブ黄色(7.5Y 6/3)シルト(粘土質)。灰白色(10Y 7/2)粘土を主体として、小ブロック状に黄褐色(10YR 7/8)シルトが点在している。
- 2 灰黄色(2.5Y 6/2)粘土(シルト質)。
- 3 1層とほぼ同質だが粘性は強い。
- 4 明黄褐色(2.5Y 5/4)粘土(シルト質)。
- 5 黄褐色(2.5Y 5/4)シルト。マンガン粒多量、炭化物が僅かに点在している。
- 6 灰オリーブ色(7.5Y 5/2)シルト(砂質)。
- 7 天井部崩落。炭化物を少量に含む。
- 8 黄褐色(2.5Y 5/6)シルト(やや粘土質)。
- 9 炭化物を多量に含む。

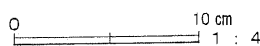
第19図 A区94号・95号住居跡、319号・320号・321号・322号・332号土坑



第20図 A区94号住居跡出土遺物(1)



23



第21図 A区94号住居跡出土遺物(2)

遺物は、土師器<sub>1</sub> (6)、土師器甕 (8・9)、須恵器甕 (13・14・15)、側面及び広面に格子状線刻の入った石製紡錘車 (11)、管玉 (12) が出土している。また、土師器甕 (23)、及び土師器台付甕 (16・17)、土師器壺 (19・20)、土師器埴 (21・22) は、本跡検出時に出土しており、帰属は不明である。また、土師器杯 (3) は319号土坑、須恵器杯 (1)、土師器杯 (2・4・5)、土師器甕 (7・8・18)、砥石 (10) は332号土坑に帰属する遺物である。

### 95号住居跡 (第19図)

〇-7グリッドに位置している。カマドのみが第一確認面からの検出であり、竪穴全体は94号住居跡の下面に位置している。また、南西隅が調査区外に延伸している。

辺長は、南西隅が調査区外に延伸しているためは正確ではないが、北東辺3.00m、南東辺4.62m、南西辺5.10m (推定)、北西辺4.60m (推定) を計る。北西辺が短い台形を呈するといえる。主軸方位は、N-129°-Wを示す。

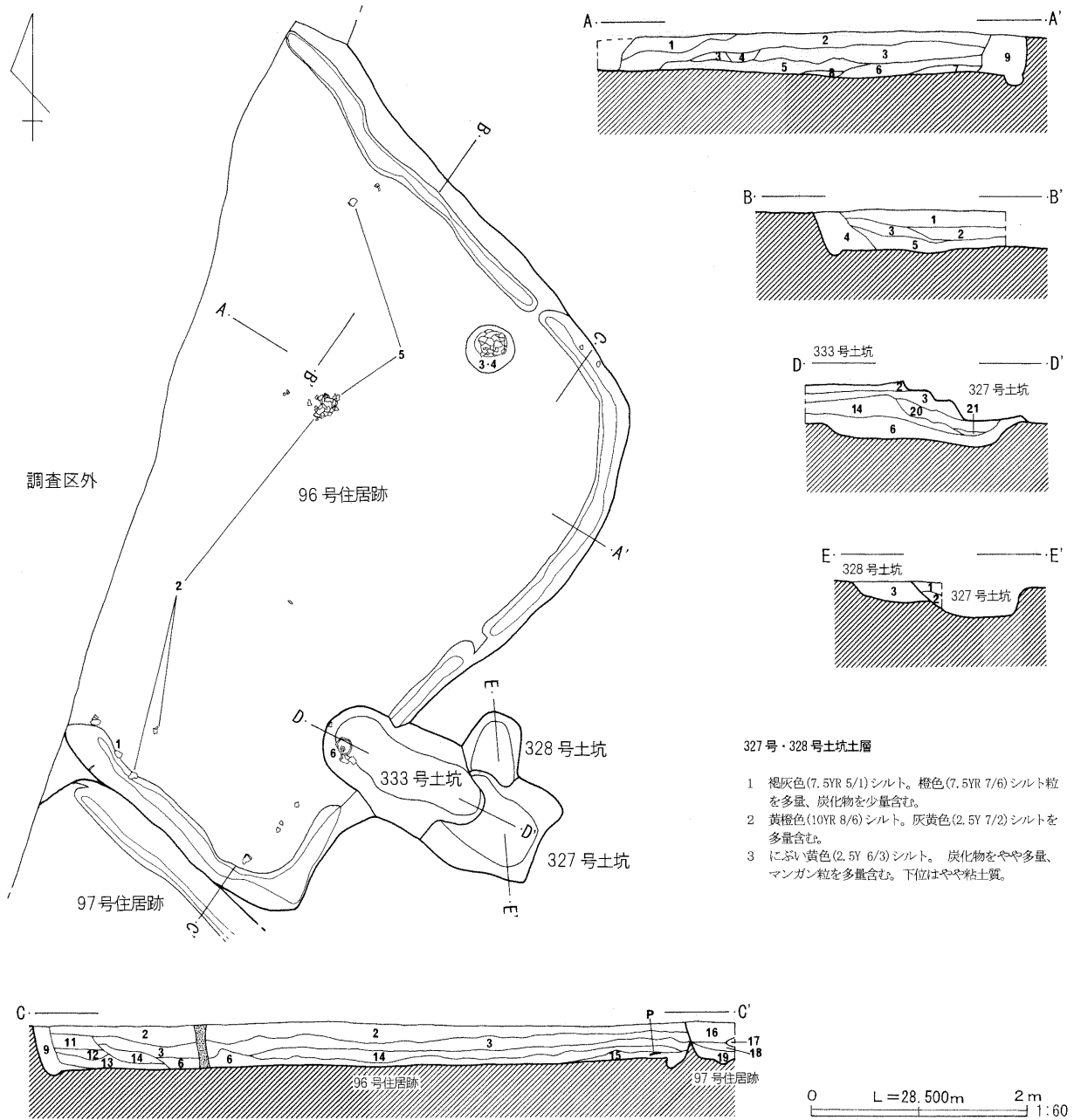
壁は、北西及び南西の西隅部分が緩やかな傾斜となるものの、他は直線的で急傾斜を成している。

床面は、凹凸が激しく安定していない。壁の直下には、北東辺東隅部を除いて、周溝が廻っている。全体に浅く、形状も安定していない。幅は15~45cm前後、深さ2~5cm前後である。

カマドは、南壁中央から張り出して設けられている。しかし、94号住居跡同様、前面に周溝が廻り、使用されていた状況を示しているものではない。ただ、床面から緩傾斜をもって奥壁に移行し、最下層に炭化物を含む土層 (第19図Eライン・第6層、第4・第5層もわずかに含む) が検出されたのみである。各部の詳細も不明であるが、断面形態は、緩傾斜から直立する奥壁に至っており、平面形態は、前面幅75cm、奥行116cm程で三角形を呈する張り出しである。

覆土は、灰白色シルト及びマンガン粒をブロック状に含む灰オリーブ色シルト質粘土 (第6層)、黄褐色シルト質粘土 (第7層)、灰白色シルト粒をブロック状に多量に含む灰色シルト (第8層)、灰色シルトを多量に含むオリーブ灰色シルト質粘土 (第9層)、浅黄色シルトを多量に含む灰白色粘土質シルト (第10層)、灰オリーブ色シルトを含む灰色シルト (第11層)、多量の灰オリーブ色シルト及びわずかな炭化物を含むオリーブ灰色シルト (第12層)、灰白色シルト粒を多量に含む灰色シルト質粘土 (第14層) が入り組んで堆積している。いずれも、投入土の様相を呈している。

遺物は、磨耗した土師器甕の細片が出土したのみで、図示可能なものは出土していない。



327号・328号土坑土層

- 1 褐灰色(7.5YR 5/1)シルト。橙色(7.5YR 7/6)シルト粒を多量、炭化物を少量含む。
- 2 黄褐色(10YR 8/6)シルト。灰黄色(2.5Y 7/2)シルトを多量含む。
- 3 にぶい黄色(2.5Y 6/3)シルト。炭化物をやや多量、マンガン粒を多量含む。下位はやや粘土質。

96号住居跡・333号土坑土層

- 1 褐灰色(7.5YR 6/1)シルト。酸化鉄、マンガン粒を多量含む。
- 2 黄灰色(2.5Y 6/1)シルト。部分的にやや粘土質。酸化鉄を多量含む。灰白色(2.5Y 8/1)シルト、黄褐色(10YR 8/6)シルトをブロック状に含む。
- 3 黄褐色(2.5Y 6/3)シルト。2層と同様であるが粘性が弱い。
- 4 にぶい黄色(2.5Y 6/3)粘土(シルト質)。黄灰色(2.5Y 6/1)シルト、黄褐色(10YR 8/6)粘土を極多量含む。
- 5 褐灰色(10YR 5/1)粘土(シルト質)。黄褐色(10YR 8/6)シルトを多量、灰白色(2.5Y 8/1)シルトを少量含む。
- 6 灰白色(5Y 7/2)粘土(シルト質)。黄褐色(10YR 8/6)シルト、マンガン粒をブロック状に含む。下位はシルト状。
- 7 灰白色(10YR 7/1)シルト。部分的に粘土と砂が混在する。
- 8 5層と同様であるが、やや砂質。
- 9 灰白色(10YR 7/1)シルト(シルト質)。黄褐色(10YR 8/6)シルトを小ブロック状に含む。
- 10 灰白色(10YR 7/1)シルト。やや砂質。
- 11 灰白色(2.5Y 7/1)シルト。マンガン粒、炭化物を少量、酸化鉄微量含む。
- 12 灰色(5Y 6/1)粘土(シルト質)。にぶい橙色(7.5YR 7/4)シルトを小ブロック状に含む。
- 13 褐灰色(10YR 6/1)粘土(シルト質)。12層に近く、混入粒子はほとんどない。粘性強い。
- 14 灰白色(2.5Y 7/1)シルト。にぶい橙色(7.5YR 7/4)シルト粒を微量、炭化物を少量含む。
- 15 灰白色(5Y 7/1)粘土(シルト質)。炭化物粒をごく微量含む。
- 16 灰黄色(2.5Y 7/2)シルト。多量の明黄褐色(2.5Y 7/6)シルトを小ブロック状に含む。
- 17 灰色(7.5Y 6/1)シルト。16層と同様の混入粒子をやや多量含む。
- 18 灰色(7.5Y 6/1)シルト。17層と同様の土を主体としているが、粒子が極めて粗い。にぶい橙色(7.5Y 7/4)シルトをやや多量含む。
- 19 灰白色(2.5Y 8/1)シルト。にぶい橙色(7.5Y 7/4)シルト、灰色(5Y 5/1)シルトを極微量一部、灰白色(2.5Y 8/1)砂を微量含む。
- 20 灰色(7.5Y 5/1)粘土(シルト質)。オリーブ黒色(7.5Y 3/1)シルトを小ブロック状に、マンガン粒を部分的に多量含む。粘性きわめて強い。
- 21 炭化物層。20層を主体とする粘土層中に炭化物を極多量含む。

第22図 A区96号住居跡、327号・328号・333号土坑

96号住居跡 P-7・8グリッドにかけて位置しており、一部がO-7グリッドに広がっている。第一(第22図) 確認面下位からの検出である。

(第23図) 西側は、調査区外に延伸し、南東辺の一部は333号土坑によって切断されている。また南西辺は、97号住居跡が接するように構築されており、壁の一部が切断されている。

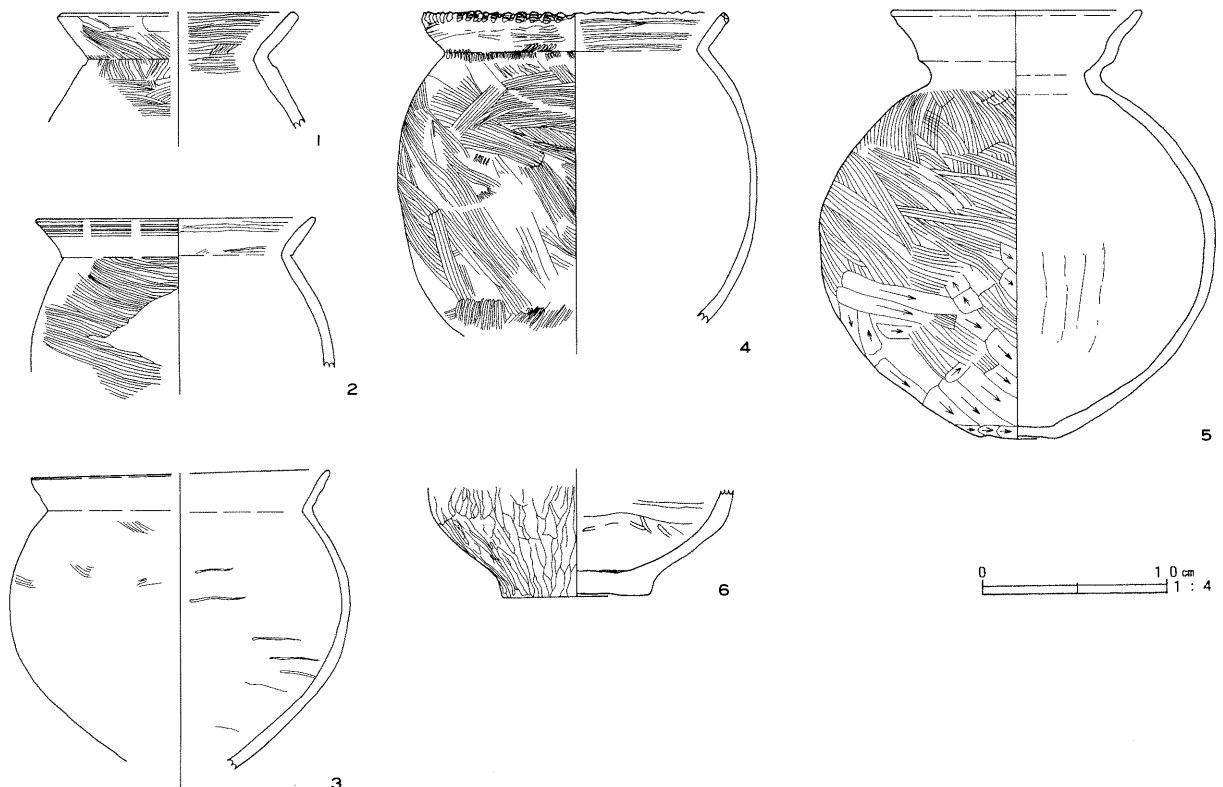
西側部分が調査区外であるため、全体規模は知れないが、南東辺が5.95mを計り、これと直交して北東・南西辺が配されているところから、形態は、一辺6m前後の正方形を基本にしていると考えられる。主軸方位は、N-40°-Wを示す。

壁は、全体的にやや緩やかな傾斜となる。

床面は、凹凸がほとんどなく、部分的に硬化した面もみられ、安定している。壁の直下には、周溝が断続して廻っている。幅は10~18cm前後、深さは、南西壁下で浅い部分もあるが、ほぼ8cm前後で安定している。

床面上に炉等は検出されていないが、竪穴東隅寄りの北東壁下には、径45.0cm、深さ18cmの円形ピットが穿たれている。中からは、いずれも底部のない土師器甕(3・4、台付か)が横位に重なった状態で出土している。

覆土は、多量の酸化鉄及びマンガン粒を含む褐灰色シルト(第1層)、灰白色シルト及び黄橙色シルトをブロック状に、また多量の酸化鉄を含む黄灰色シルト(第2層)、第2層と同様であるもののやや粘質の強い第3層、黄褐色粘土を極多量に含むにぶい黄色シルト質粘土(第4層)、多量の黄橙色シルト及び少量の灰白色シルトを含む褐灰色シルト質粘土(第5層)、黄橙色シルト及びマンガン粒をブロック状に含む灰白色シルト質粘土(第6層)、部分



第23図 A区96号住居跡出土遺物

第10表 A区96号住居跡出土遺物観察表（第23図）

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・甕	(13.0)	—	—	①⑥④	②	赤褐	上位1/5	内外面一部吸炭。二次加熱。
2	土師器・甕	15.2	—	—	⑥①③②④	②	橙	上位3/5	外面吸炭。内面剥離した部分多い。二次加熱。
3	土師器・甕	(16.1)	—	—	①②③⑥④	②	明赤褐	底部欠1/2	胴部上位のみ刷毛目。中位～下位は縦のナデが加わる。全面に吸炭。内外面の一部に炭化物付着。二次加熱。
4	土師器・台付甕	16.0	—	—	⑥①②④	②	橙	下位欠	口唇部押捺の後刻み目。括れ部直下、一部横のナデが加わる。外面煤付着。二次加熱。
5	土師器・壺	13.6	23.3	4.3	②③①	②	橙	体部1/2欠	口縁部横ナデ。胴部内面ナデ、中位下部のみ木口状工具。一部吸炭。

的に砂と粘土が混在する灰白色シルト（第7層）、第5層と同様であるもののやや砂質の強い第8層、黄橙色シルトをブロック状に含む灰白色シルト（第9層）、灰白色シルト（第10層）、マンガン粒・酸化鉄粒・少量の炭化物を含む灰白色シルト（第11層）、にぶい橙色シルトをブロック状に含む灰色シルト質粘土（第12層）、褐灰色シルト質粘土（第13層）、少量のにぶい橙色シルトおよび炭化物を含む灰白色シルト（第14層）、炭化物を極わずかに含む灰白色シルト質粘土（第15層）がり組んで堆積している。第1層以外、いずれも投入土の様相を呈している。

このうち、第2・3・14・6層は、333号土坑にも堆積しており、同土坑が本来本住居跡に付随していた可能性が高いことを示している。なお土坑内には、オリーブ黒色シルトをブロック状に含む灰色シルト質粘土（第21層）及び、第21層を主体として多量の炭化物を含む第22層が堆積している。

遺物は、先にみた円形ピット内から土師器甕（3・4）のほか、床面上から土師器甕（1・2）、土師器壺（5）が出土している。また、333号土坑からは、土師器壺（6）が出土している。

**97号住居跡** P-7・8、Q-7・8グリッドにかけて位置している。第一確認面下位からの検出である（第24図）る。

西側及び南側は調査区外である。北東辺の一部で329号土坑を切断しているが、覆土の上面は98号住居跡によって削平されている。また最上面は、河川跡によって削平されている。

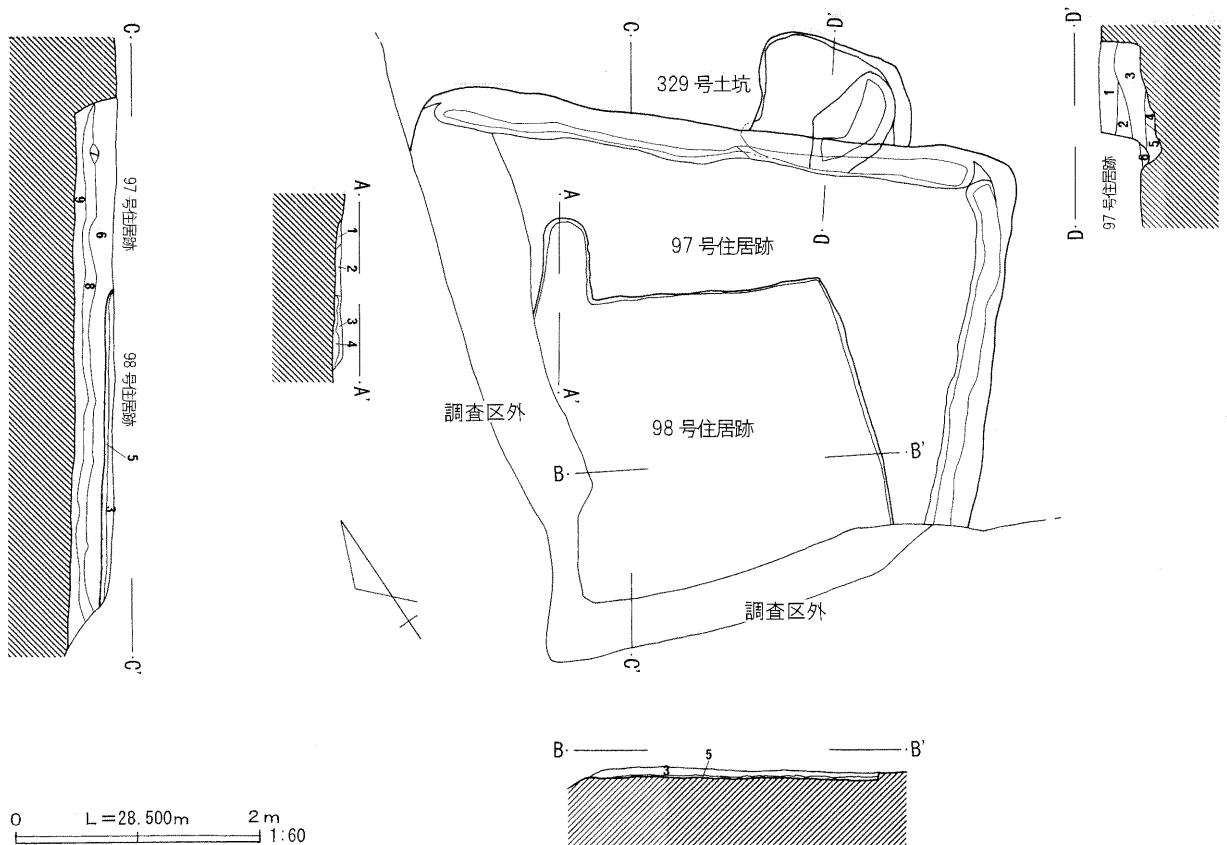
西側及び南側部分が調査区外であるため、全体規模は知れないが、北東辺が4.96mを計り、これと直交して北西・南東辺が配されているところから、形態は、一辺5m前後の正方形を基本にしていると考えられる。主軸方位は、N-48°-Wを示す。

壁は、やや湾曲するものの、全体的に急な傾斜を成している。

床面は、ほとんど凹凸がなく、安定している。壁の直下には、周溝が各辺ごとに断続して廻っている。幅は16cm前後、深さはほぼ3～5cm前後で安定している。

床面上に炉等は検出されていない。

覆土は、上位に多量の明黄褐色シルトをブロック状に含む灰黄色シルト（第6層）、中位に多量のにぶい橙色シルトをブロック状に含む灰色砂質シルト（第8層）、下位に少量のにぶい橙色シルト・灰色シルト及び部分的に灰白色砂を含む灰白色シルト（第9層）が堆積



97・98号住居跡土層

- 1 灰褐色(7.5YR 4/2)シルト。橙色(2.5YR 6/8)焼土、明オリーブ灰色(2.5GY 7/1)粘土粒(シルト質)が小ブロック(1~2mm)状に多量に含まれている
- 2 焼土。明オリーブ灰色(2.5GY 7/1)粘土(シルト質)中に炭化物、橙色(2.5YR 6/8)焼土ブロックが多量混在する。
- 3 にぶい黄色(2.5Y 6/3)シルト。酸化鉄をやや多量、炭化物粒を少量含む。
- 4 灰白色(2.5Y 7/1)シルト。酸化鉄を多量、3層より大粒の炭化物を少量含む。
- 5 4層と同様であるが、粒子が極めて細かく、炭化物を極少量である。
- 6 灰黄色(2.5Y 7/1)シルト。小ブロック状の明黄褐色(2.5Y 7/6)シルトを多量に含む。
- 7 灰色(7.5Y 6/1)シルト。6層と同様だがやや多量に含む。
- 8 灰色(7.5Y 6/1)シルト。粒子が極めて粗くなっている。にぶい橙色(7.5Y 7/4)シルトをやや多量含む。
- 9 灰白色(2.5Y 8/1)シルト。にぶい橙色(7.5Y 7/4)・灰色(5Y 5/1)シルトを極微量含む。一部灰白色(2.5Y 8/1)砂を微量含む。

329号土坑土層

- 1 にぶい黄色(2.5Y 6/4)シルト。黄褐色(10YR 7/8)シルトを小ブロック状に多量含む。
- 2 灰白色(2.5Y 7/1)シルト。灰白色(2.5Y 8/1)砂粒を極めて多量に含む。
- 3 灰黄褐色(10YR 5/2)粘土(シルト質)。炭化物粒(0.5~1mm)をやや多量に含む。
- 4 灰黄色(2.5Y 7/2)砂質層。炭化物粒(0.5mm)を微量に含む。
- 5 灰オリーブ色(5Y 6/2)シルト(やや粘土質)。炭化物粒微量を含む。
- 6 灰色(7.5Y 5/1)粘土(シルト質)。灰白色(7.5Y 7/2)シルトが主体である。(97号住居跡覆土)



0 10 cm 1:4

第24図 A区97号・98号住居跡、329号土坑、97号住居跡出土遺物

している。また第6層と第8層の間には、極多量の明黄褐色シルトをブロック状に含む灰色シルト(第7層)の堆積している部分もみられる。

遺物は、覆土中から甕(1・2)が出土している。1・2は、同一個体である可能性が高い。

第11表 A区97号住居跡出土遺物観察表(第24図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	弥生土器	—	—	—	①②③	①	にぶい橙	口縁部	
2	弥生土器	—	—	—	①②③	①	にぶい橙	口縁部	

**98号住居跡** P-7・8、Q-7・8グリッドにかけて位置している。第一確認面からの検出である。

(第24図) 西側及び南側は調査区外であり、97号住居跡覆土の上面を削平している。また最上面は、河川跡によって削平されている。

西側及び南側部分が調査区外であるため、全体規模は知れない。現状では、北東辺が2.40m、南東辺が2.15mを計る。

壁は、下端が確認されたのみであり、形状は不明である。

床面は、やや凹凸があるものの安定している。

床面上にピット等は検出されていない。

カマドは、北東辺に、壁から張り出して設けられている。壁面部幅40cm、奥行は、南東部側が75cmであるが、北西側は85cmを計る。前面に炭化物を含有する土層（第3・4層）、中間に焼土ブロック及び炭化物を含有する土層（第2層）、奥に焼土を含有する土層（第1層）が堆積している。焼土化した面が確認されず、機能の区別はつかない。断面形は奥に向けて緩やかに傾斜し、奥壁部分では湾曲して立ち上がっている。平面形は、長円形を呈する。カマド主軸ラインの方位は、N-48°-Wを示す。

覆土は、上位に多量の酸化鉄及び少量の炭化物を含むにぶい黄色シルト（第3層）、下位には、第3層と同様であるが、全体に粒子が細かい第5層が堆積している。

遺物は、ほとんどみられず、図示可能なものもない。

**99号住居跡** P-7からQ-7グリッドにかけて位置している。第一確認面からの検出である。

(第25図) 南西隅は330号土坑によって切断され、最上面は、河川跡によって削平されている。

辺長は、南西隅が330号土坑によって切断されているためは正確ではないが、北辺2.85m、東辺4.03m、南辺2.66m（推定）、西辺4.00m（推定）を計る。長方形を呈するといえるが、南半部分が西にずれ、東西の壁が鍵の手状となる、変則的な形態を呈している。主軸方位は、N-19°-Eを示す。

壁は、下端が確認されたのみであり、形状は不明である。

床面は、凹凸があり安定していない。

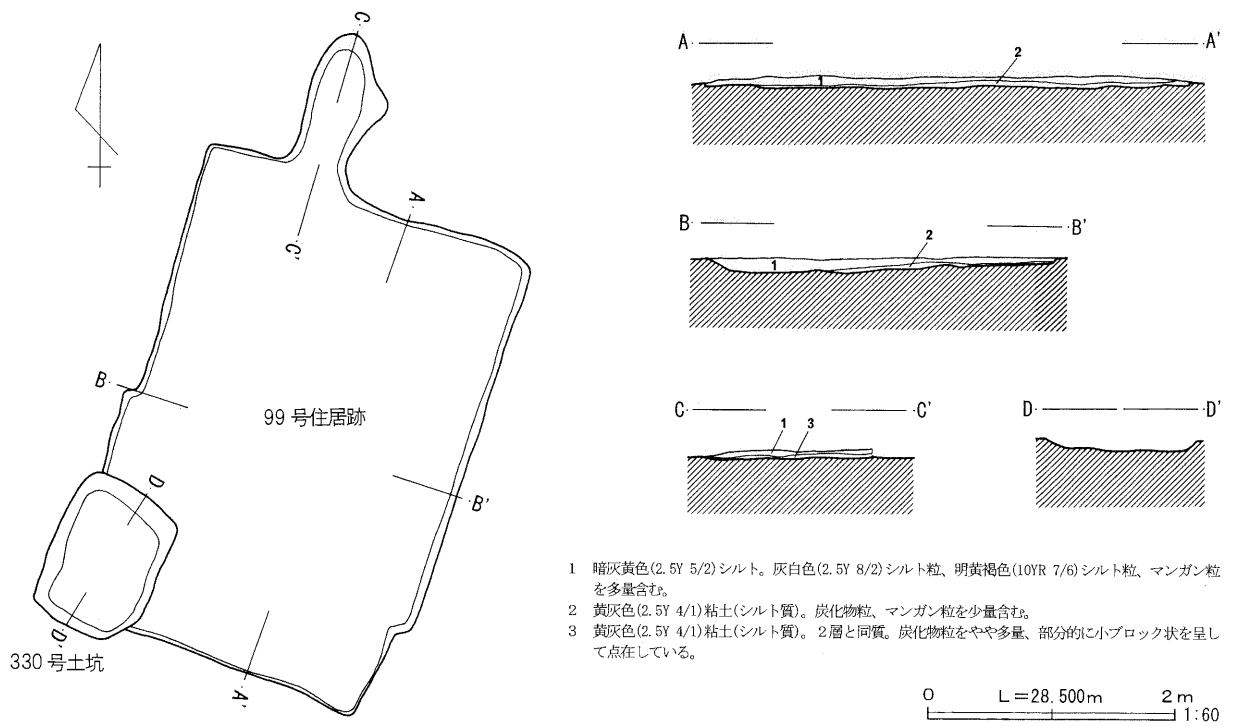
床面上にピット等は検出されていない。

カマドは、北辺中央から北西隅に寄った地点に、壁から張り出して設けられている。壁面部幅50cm、奥行は、南東部側が140cmであるが、北西側は115cmを計る。炭化物を含有する土層（第3層）が、前面部分にやや厚く堆積している。焼土化した面が確認されず、機能の区別はつかない。断面形は緩やかな波状を示して奥に向けて移行し、奥壁部分では湾曲して立ち上がっている。平面形は、やや中膨みの長円形を呈する。

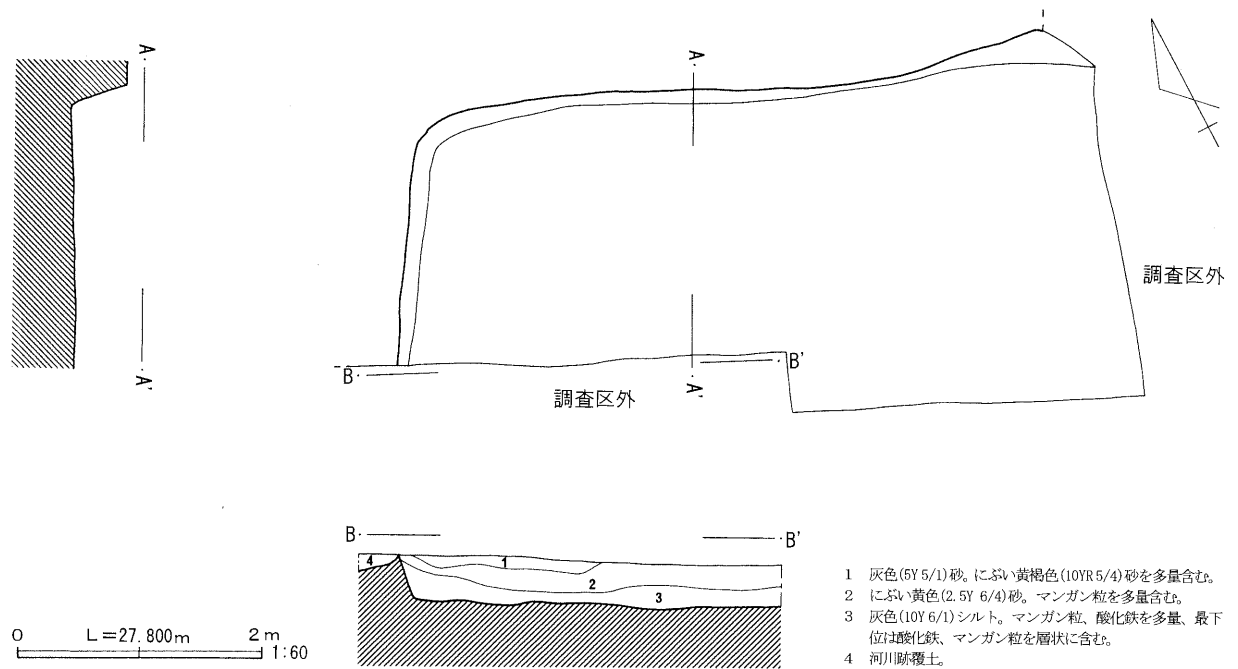
覆土は、上位に、明白色シルト・明黄褐色シルト及びマンガン粒を多量に含む暗灰黄色シルト（第1層）、下位に少量の炭化物及びマンガン粒を多量に含む黄灰色シルト質粘土（第2層）が堆積している。

遺物は、ほとんどみられず、図示可能なものもない。





第25図 A区99号住居跡、330号土坑



第26図 A区100号住居跡

**100号住居跡** Q-6・7グリッドにかけて位置している。第二確認面からの検出である。

(第26図) 第1次・第2次そして第5次調査と、三期にわたる調査区域の接点にあたり、東側及び南側の一部が削除されたものである。また、西側の上面は、河川跡によって削平されている。本跡の上面に77号住居跡、66号溝が位置している。

西側及び南側部分が調査区外であるため、全体規模は知れない。現状では、北東辺が5.20m、北西辺が1.90mを計る。

壁は、直線的で急傾斜を成している。

床面は、凹凸が多く安定していない。床面上にピット等は検出されていない。

覆土は、下位に多量の酸化鉄・マンガン粒を含む灰色シルト（第3層・下面では酸化鉄・マンガン粒が層を成す）、上位に多量のマンガン粒を含むにぶい黄色砂（第2層）、最上位ににぶい黄色砂を含む灰色砂（第1層）であり、いずれも河川跡の覆土が堆積している。

遺物は、ほとんどみられず、図示可能なものもない。

## 2 土 坑

A区における土坑は、平成14年度・第5次調査で、296号から333号までの38基が調査されている。第一確認面及び第一確認面下位からの検出である。住居跡を切断し、溝跡には削平されている場合が多い。また、遺物の出土が少なく、時期の不明瞭なものも多い。

遺跡全体では、その形態から以下の五つのタイプに分類されるが、本調査区第5次調査分では、小型で浅く、概ね円形を呈するタイプ（1タイプ）は確認されていない。

**2タイプ** 小型で浅く、長方形を呈するタイプである。310号、316号、320号、323号、324号、330号の各土坑が含まれる。

**310号土坑**（第17図）は、M-5グリッドに位置する。92号住居跡を切断している。西部でやや幅を狭めるものの、ほぼ長方形を呈し、1.50×0.85m、深さ20cmを計る。覆土は、多量のマンガン粒、少量の酸化鉄を含むにぶい黄色粘土である。遺物は、出土していない。

**316号土坑**（第28図）は、N-6グリッドに位置する。長円形を呈し、1.40×0.90m、深さ14cmを計る。覆土は、多量のマンガン粒、少量の酸化鉄を含む黄褐色粘土である。遺物は、出土していない。

**320号土坑**（第19図）は、O-7グリッドに位置する。94号住居跡を切断している。北側を319号土坑に切断され、西側は321号土坑と重複している。このため規模は不明であるが、現状では、 $(55+\alpha) \times (46+\alpha)$  cm、深さ15cmが判知されるのみである。長方形を基本とした形態を呈すると思われる。覆土は、321号・322号各土坑と同じ、318号の核を成す、多量のマンガン粒を含む明黄褐色粘土層である。このため、直接重複する321号土坑との新旧関係は、明確にできなかった。遺物は、318号・320号・322号土坑から出土した破

片と接合された、土師器杯（第29図318・320・321・322-1）、土師器甕（第29図318・320・321・322-2・3）が出土している。

**323号土坑**（第28図）は、O-6グリッドに位置する。平行四辺形を呈し、80×47cm、深さ10cmを計る。覆土は、マンガン粒及び酸化鉄を含む黄褐色粘土である。遺物は、出土していない。

**324号土坑**（第28図）は、O-6グリッドに位置する。西側が矩形を呈し、東側が丸みをもつ、変則的な長方形である。1.06×0.40（東部）～0.60m（西部）、深さ10cmを計る。覆土は、マンガン粒及び酸化鉄を含む黄褐色粘土（シルト質）である。遺物は、出土していない。

**330号土坑**（第25図）は、Q-7グリッドに位置する。99号住居跡を切断している。ほぼ長方形を呈し、1.25×0.90m、深さ9cmを計る。床面は、やや凹凸がみられる。覆土は、マンガン粒及び酸化鉄を含む黄灰色粘土である。遺物は、出土していない。

**3タイプ** 小型で深く、円形を呈するタイプである。328号土坑が含まれる。

**328号土坑**（第22図）は、P-7グリッドに位置する。327号土坑に切断されており、また333号土坑の上位に位置している。このため、規模形態共に不明であるが、北辺両隅が丸みをもち、327号土坑の南側まで達していないことから、本タイプに属するものとした。現状では、 $(54 + \alpha) \times 55$ cm、深さ15cmが知れるのみである。覆土は、多量の炭化物及びマンガン粒を含むにぶい黄色シルト（第3層）である。遺物は、出土していない。

**4タイプ** 大型で深く、方形もしくは長方形を呈するタイプである。296号、299号、300号、301号、302号、303号、304号、305号、306号、307号、308号、311号、312号、313号、314号、315号、317号、318号、319号、321号、322号、325号、326号、331号の各土坑が含まれる。

これらの各土坑は、さらに3グループに区分される。

第1のグループは、大型で深く、正方形もしくは正方形に近い長方形を呈するグループである。300号、301号、302号、313号、325号、326号、331号の各土坑が含まれる。

**301号土坑**（第11図）は、L-6グリッドに位置する。87号・88号住居跡を切断している。南西壁が直角を成さないため、変則的な形態を呈する。下端規模は、長辺1.85m、短辺は南側が狭く1.05m、北側が1.62mを計る。全体では、正方形を基本としていると思われる。底面はやや凹凸がみられ、深さは68cmを計る。遺物は出土していない。

**302号土坑**（第30図）は、M-5グリッドに位置する。河川跡埋没後の掘削である。8号井戸跡（309号土坑を含む）を切断している。東側が調査区外に及ぶため、規模形態共に不明であるが、方形を基本とした形態であると思われる。現状では $2.10 \times (1.96 + \alpha)$ を計る。底面はやや中央部が窪む。覆土は、多量の褐灰色粘土ブロック及び少量の酸化鉄・マンガン粒を含むにぶい黄褐色粘土（第16層）である。投入土の様相を呈している。遺物は、

出土していない。

**313号土坑**（第27図）は、M-6グリッドに位置する。314号土坑によって切断されている。規模は1.70×1.60mを計り、ほぼ正方形を呈する。底面はやや凹凸がみられ、深さは15cmを計る。覆土は、少量の酸化鉄・マンガン粒及び炭化物をわずかに含む黄褐色シルトである。遺物は、出土していない。

**325号土坑**（第28図）は、O-6グリッドに位置する。規模は3.10×2.16mを計り、ほぼ長方形を呈する。底面はやや凹凸がみられ、深さは33cmを計る。覆土は、灰色粘土粒子及び酸化鉄・マンガン粒を含む黄褐色シルトである。遺物は、覆土中から土師器杯（第29図325-1）、砥石（第29図325-2）、馬歯が出土している。

**326号土坑**（第28図）は、P-7グリッドに位置する。西側に壁の崩落した部分がみられるが、長方形を呈すると思われる。2.00×1.43m、深さ26cmを計る。覆土は、黄褐色シルトブロック及び酸化鉄・マンガン粒を含む灰オリーブ褐色シルトである。投入土の様相を呈している。遺物は、出土していない。

**331号土坑**（第28図）は、Q-7グリッドに位置する。南側が調査区外に及ぶため、規模形態共に不明であるが、方形を基本とした形態であると思われる。現状では1.50×(0.94+ $\alpha$ )を計る。底面は平坦である。覆土は、酸化鉄・マンガン粒及び黄褐色シルトブロックを多量に含む灰オリーブ色シルト質粘土である。投入土の様相を呈している。遺物は、出土していない。

第2のグループは、大型で深く、正方形もしくは長方形を呈し、底面の中央もしくは中央付近に小ピットをもつグループである。なお、この小ピットは、底面・側面共に酸化鉄で覆われている。300号、305号、312号の各土坑が含まれる。

**300号土坑**（第27図）は、K-5からK-6グリッドにかけて位置する。河川跡埋没後の掘削である。長方形を呈し、2.81×2.04mの規模を示す。深さ58cmで平坦面をもち、底面中央から北寄り部分には、1.80×1.55mの規模で、平坦面からの深さ35cmの不整長円形の窪みをもつ。窪みは、断面緩いU字型を呈する。覆土は、多量の褐灰色粘土ブロック及び、少量の酸化鉄・マンガン粒を含むにぶい黄褐色粘土である。投入土の様相を呈している。窪みを含む底面は、酸化鉄で覆われている。遺物は、出土していない。

**305号土坑**（第16図）は、M-6グリッドに位置する。90号・91号住居跡を切断している。ほぼ正方形を呈し、2.20×2.15m、深さ65cmを計る。底面中央部分には、1.35×1.25m、底面からの深さ22cmの不整長円形窪みをもつ。窪みの底径は63×38cmを計る。覆土は、多量の褐灰色粘土ブロック及び、少量の酸化鉄・マンガン粒を含むにぶい黄褐色粘土である。投入土の様相を呈している。窪みを含む底面及び壁面は、酸化鉄で覆われている。遺物は、出土していない。

**312号土坑**（第16図）は、M-6グリッドに位置する。91号住居跡を切断している。西端が調査区外に及ぶため全体の規模は不明であるが、(3.55+ $\alpha$ )×1.66m、深さ20cmを計る。ほぼ長方形を呈する。底面西側には、径45cm、底面からの深さ10cmの円形の窪み

をもつ。窪みの底径は20×26cmを計る。覆土は、多量の褐灰色粘土ブロック及び、少量の酸化鉄・マンガン粒を含むにぶい黄褐色粘土である。投入土の様相を呈している。窪みを含む底面は、酸化鉄で覆われている。遺物は、出土していない。

第3のグループは、大型で深く、長方形を呈するグループである。296号、299号、303号、304号、306号、307号、308号、311号、314号、315号、317号、318号、319号、321号、322号の各土坑が含まれる。

**296号土坑**（第27図）は、I-5からJ-5グリッドにかけて位置する。河川跡埋没後の掘削である。台形に近いがほぼ長方形を呈し、3.06×1.85～2.15m、深さ95cmを計る。覆土は、多量の褐灰色粘土ブロック及び、少量の酸化鉄・マンガン粒を含むにぶい黄褐色粘土である。投入土の様相を呈している。遺物は、馬歯が出土している。

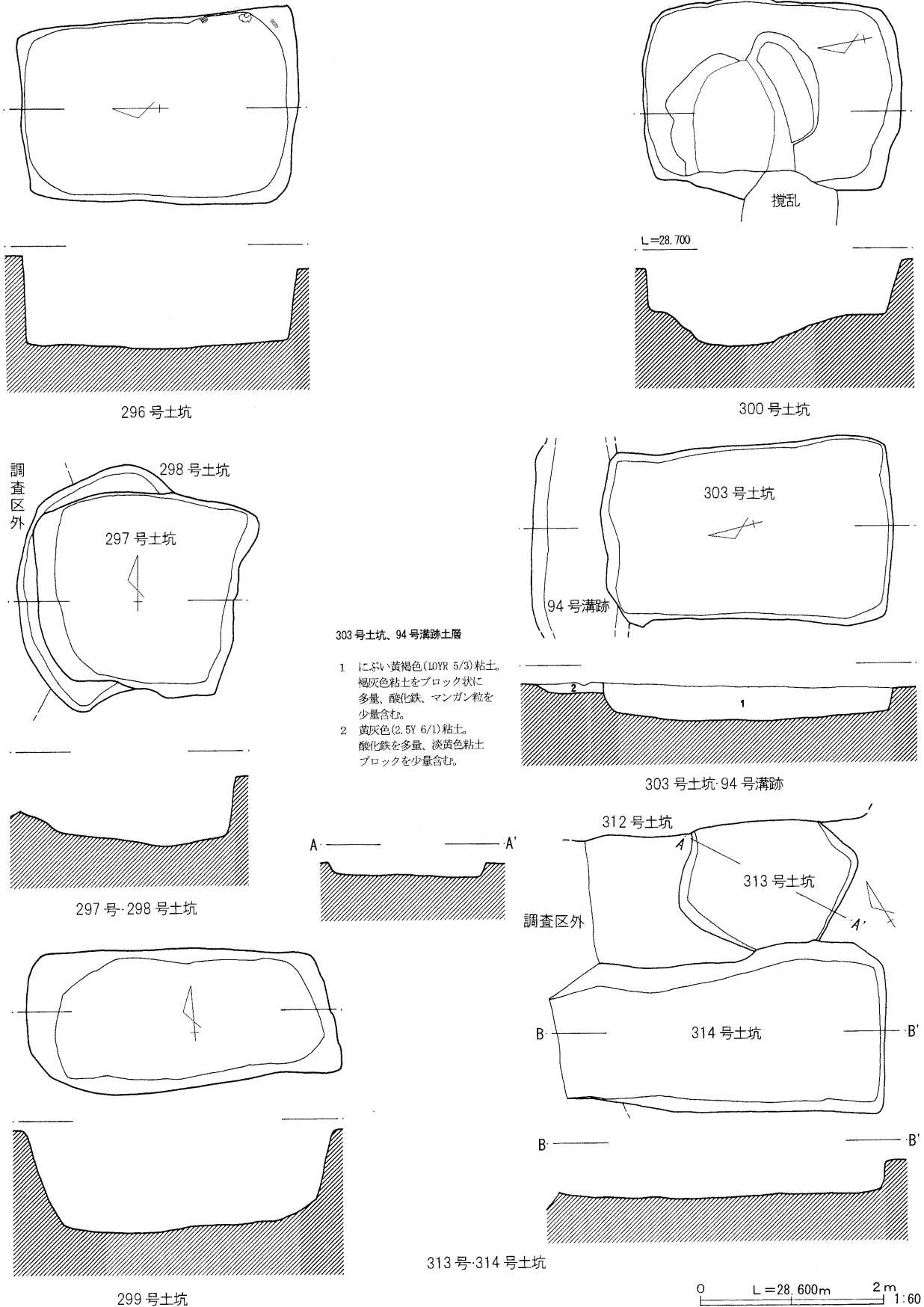
**299号土坑**（第27図）は、J-5からJ-6グリッドにかけて位置する。河川跡埋没後の掘削である。ほぼ長方形を呈し、3.37×1.55mを計る。底面は段を成し、東側が浅く深さ75cm、西側が深く深さ1.05mである。覆土は、多量のマンガン粒を含む明黄褐色粘土である。遺物は、出土していない。

**303号土坑**（第27図）は、M-5グリッドに位置する。94号溝を切断している。ほぼ長方形を呈し、3.08×1.80～1.95m、深さ37cmを計る。覆土は、多量の褐灰色粘土ブロック及び、少量の酸化鉄・マンガン粒を含むにぶい黄褐色粘土である。投入土の様相を呈している。遺物は、覆土中から土師器杯（第29図303-1）が出土している。

**304号土坑**（第10図）は、L-6からM-6グリッドにかけて位置する。87号住居跡を切断している。長方形を呈し、3.30×2.30m、深さ65cmの規模をもつ。底面は、ほぼ水平であり、酸化鉄が層を成している。遺物は、出土していない。

**306号土坑**（第14図）は、L-6からM-6グリッドにかけて位置する。90号住居跡、6号井戸跡を切断し、307号土坑に切断されている。長方形を呈し、2.41×1.20m、深さ55cmの規模をもつ。しかし、北辺はさらに西へ延び、307号土坑に切断されるまで、1.80mの長さが確認でき、西辺も途中で西へ折れていることから、全体ではL字型を呈する可能性もある。また、本土坑の覆土は、多量の褐灰色粘土ブロック及び、少量の酸化鉄・マンガン粒を含むにぶい黄褐色粘土であり、投入土の様相を呈しているが、307号土坑覆土と同一である。両土坑の区別は、307号土坑覆土の端にわずかな空間が存在したことによっている。本土坑のL字型になる部分にも、同一覆土でありながら、異なる土坑が重複していた可能性も棄てられないのが現状である。遺物は、覆土中から土師器杯（第29図306-1）が出土している。

**307号土坑**（第14図）は、L-6グリッドに位置する。90号住居跡、306号土坑を切断している。西端が調査区外に及ぶため全体の規模は不明であるが、 $(2.85 + \alpha) \times 1.65$ m、深さ83cmを計る。全体では長方形を呈すると思われる。覆土は、多量の褐灰色粘土ブロック及び、少量の酸化鉄・マンガン粒を含むにぶい黄褐色粘土が投入土の様相を呈しており、306号土坑と同一であることは、先に述べたとおりである。遺物は、覆土中から土師器杯



第27図 A区土坑(1) (296号・297号・298号・299号・300号・303号・313号・314号)

(第29図307-1)、土師器壺(第29図307-2)が出土している。

**308号土坑**(第14図)は、M-6グリッドに位置する。90号を切断している。西端が調査区外に及ぶため全体の規模は不明であるが、 $(2.00 + \alpha) \times 1.77\text{m}$ 、深さ56cmを計る。南辺がやや不規則ではあるが、全体では長方形を呈すると思われる。覆土は、多量の褐灰色粘土ブロック及び、少量の酸化鉄・マンガン粒を含むにぶい黄褐色粘土であり、投入土の様相を呈している。遺物は、出土していない。

**311号土坑**(第16図)は、M-6グリッドに位置する。91号・92号住居跡及び9号井戸跡を切断している。長方形を呈し、 $2.15 \times 1.40\text{m}$ を計る。床面は、緩い傾斜を示し、中央部分が最も深く38cmの深さをもつ。覆土は、多量の褐灰色粘土ブロック及び、少量の酸化鉄・マンガン粒を含むにぶい黄褐色粘土であり、投入土の様相を呈している。底面は、酸化鉄で覆われている。遺物は、出土していない。

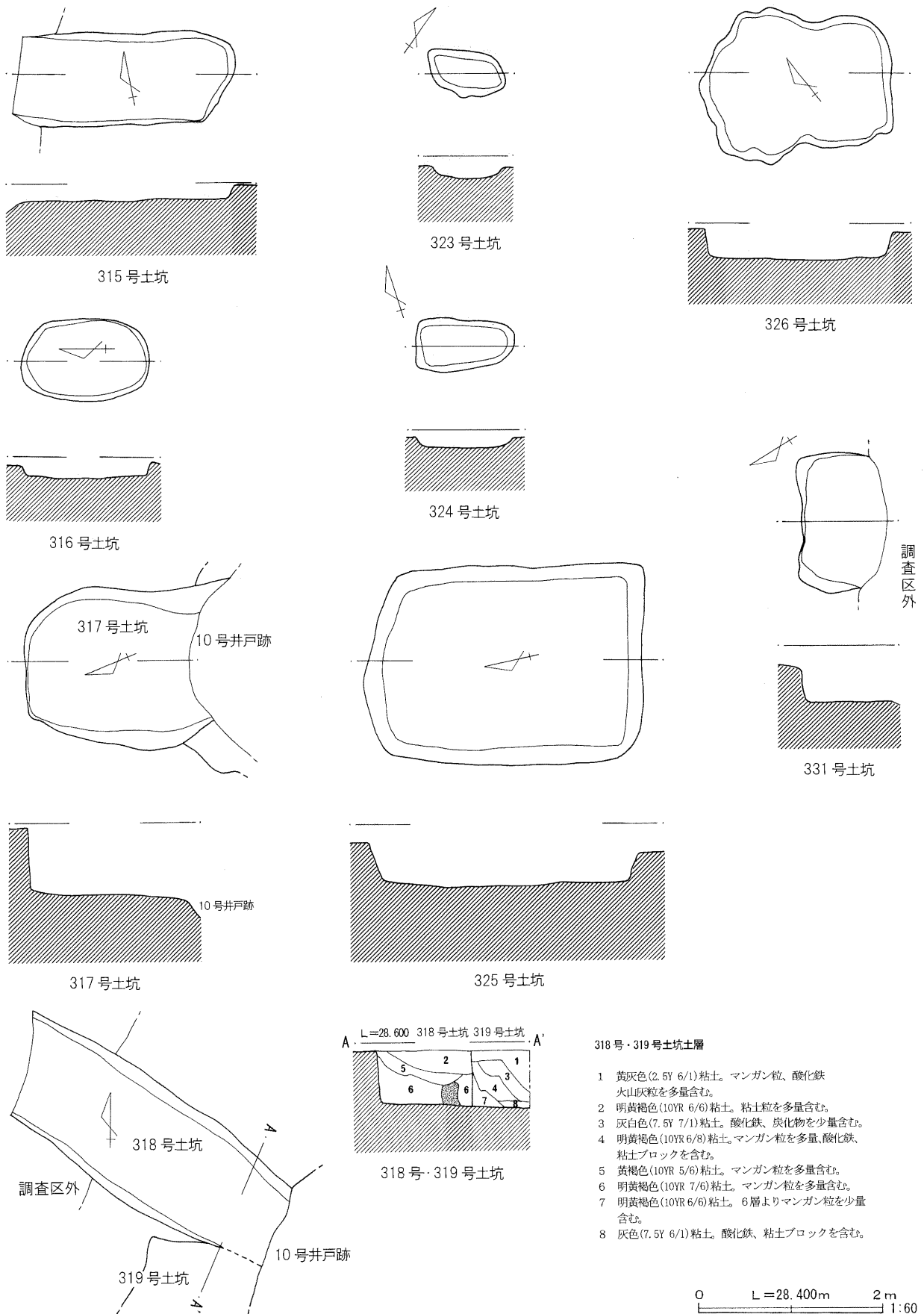
**314号土坑**(第27図)は、M-6からM-7グリッドにかけて位置する。313号土坑を切断している。下端規模は、長辺3.05m、短辺は西側が狭く75cm、東側が1.05mを計る。全体では、ほぼ長方形を呈する。底面はやや凹凸がみられ、深さは32cmを計る。覆土は、多量のマンガン粒を含む明黄褐色粘土である。遺物は、出土していない。

**315号土坑**(第28図)は、N-7グリッドに位置する。西側が調査区外に及ぶため規模は不明であるが、現状では、 $(2.35 + \alpha) \times 1.00\text{m}$ 、深さ15cmを計る。長方形を呈すると思われる。覆土は、多量のマンガン粒を含む明黄褐色粘土である。遺物は、出土していない。

**317号土坑**(第28図)は、N-6からN-7グリッドにかけて位置する。南部を10号井戸跡に切断されているため、規模は不明であるが、現状では、 $(2.30 + \alpha) \times 1.75\text{m}$ 、深さ75cmを計る。長方形を呈すると思われる。覆土は、多量の褐灰色粘土ブロック及び、少量の酸化鉄・マンガン粒を含むにぶい黄褐色粘土であり、投入土の様相を呈している。底面は、酸化鉄で覆われている。遺物は、出土していない。

**318号土坑**(第28図)は、N-7グリッドに位置する。319号土坑及び10号井戸跡に切断されている。西側が調査区外に及び、東側が10号井戸跡に切断されているため、規模は不明であるが、現状では、 $(3.50 + \alpha) \times 1.32\text{m}$ 、深さ55cmを計る。長方形を呈すると思われる。覆土は、上位より、多量の灰白色粘土粒を含む明黄褐色粘土(第2層)、多量のマンガン粒を含む黄褐色粘土(第5層)、最下層が多量のマンガン粒を含む明黄褐色粘土(第6層)である。遺物は、320号・321号・322号土坑から出土した破片と接合された、土師器杯(第29図318・320・321・322-1)、土師器甕(第29図318・320・321・322-2・3)が出土している。

**319号土坑**(第19図)は、N-7からO-7グリッドにかけて位置する。94号住居跡、318号・320号・321号・322号各号土坑を切断している。東側が10号井戸跡に切断されているため規模は不明であるが、現状では、 $(2.25 + \alpha) \times 1.85\text{m}$ 、深さ58cm前後を計る。長方形を呈すると思われる。覆土は、上位より、多量の火山灰粒、酸化鉄、マンガン粒を含む黄褐色粘土(第1層)、少量の酸化鉄及び炭化物を含む灰白色粘土(第3層)、多量の



第28図 A区土坑(2) (315号・316号・317号・318号・323号・324号・325号・326号・331号)



灰白色粘土粒、少量の酸化鉄・マンガン粒を含むにぶい明黄褐色粘土（第4層）、マンガン粒を含む明黄褐色粘土（第7層）、最下層が灰白色粘土ブロック及び、酸化鉄を含む灰色粘土（第8層）である。投入土の様相を呈している。遺物は、出土していない。

**321号土坑**（第19図）は、O-7グリッドに位置する。94号住居跡を切断し、北側を318号土坑に切断されている。このため規模は不明であるが、現状では、 $(2.60 + \alpha) \times 0.70$  m、深さ55cmを計る。長方形を呈すると思われる。覆土は、318号の核を成す、多量のマンガン粒を含む明黄褐色粘土層である。320号・322号各土坑覆土とほぼ同一である。このため、重複する320号・322号各土坑との新旧関係は、明確にできなかった。遺物は、318号・320号・322号土坑から出土した破片と接合された、土師器杯（第29図318・320・321・322-1）、土師器甕（第29図318・320・321・322-2・3）が出土している。

**322号土坑**（第19図）は、N-7からO-7グリッドにかけて位置する。94号住居跡を切断し、319号土坑に切断されている。西南隅がやや丸みをもつが、ほぼ長方形を呈する。2.35×1.55mの大きさで、深さは55cmを計る。覆土は、321号土坑と同じ、318号の核を成す多量のマンガン粒を含む明黄褐色粘土層である。320号・321号各土坑覆土とほぼ同一である。このため、重複する321号土坑との新旧関係は、明確にできていない。遺物は、318号・320号・321号土坑から出土した破片と接合された、土師器杯（第29図318・320・321・322-1）、土師器甕（第29図318・320・321・322-2・3）が出土している。

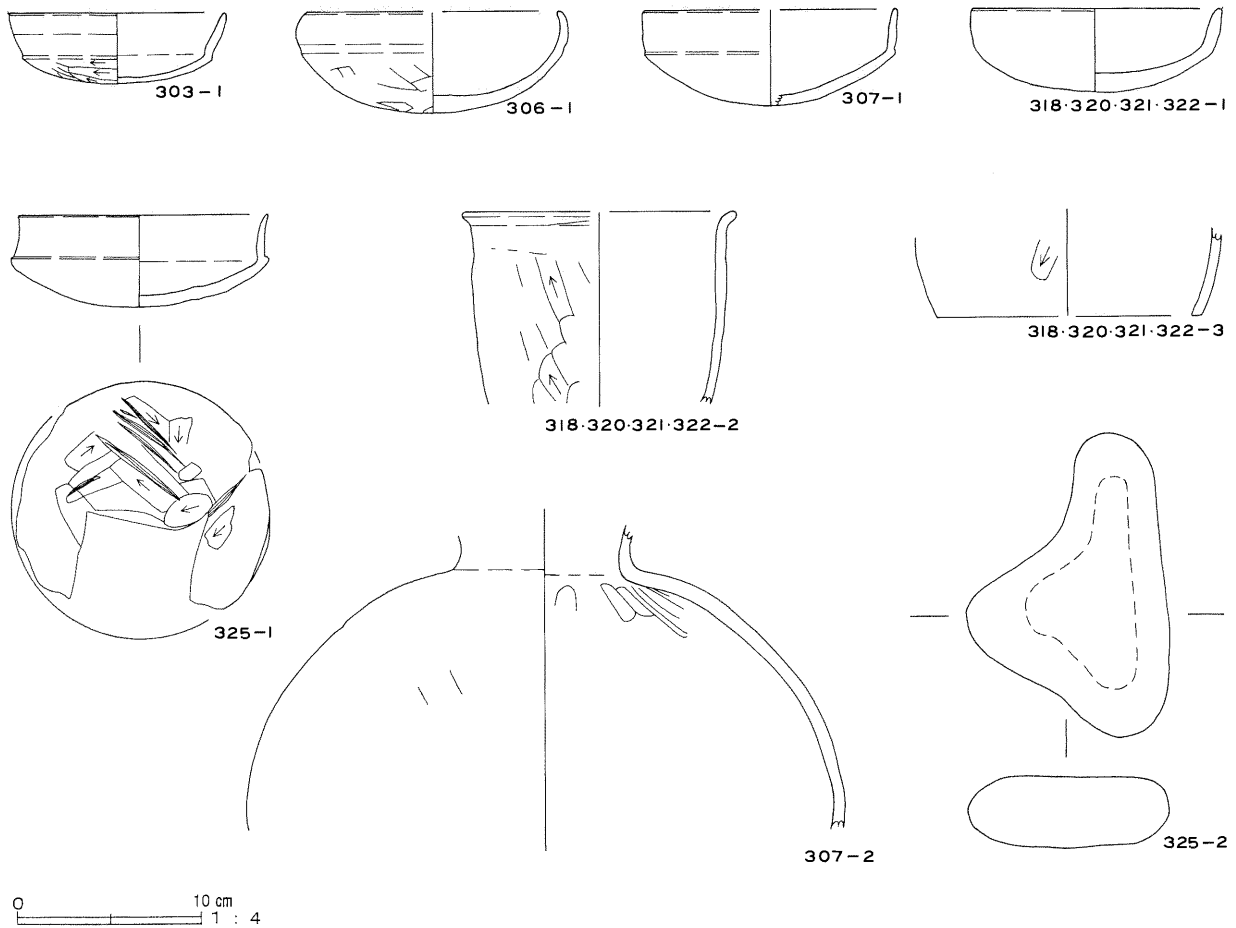
**5タイプ** その他、上の4タイプに属さない形態のもの、及び不整形を呈するものの一括である。297号、298号、309号、327号、329号、332号、333号の各土坑が含まれる。

**297号土坑**（第27図）は、I-5からJ-5グリッドにかけて位置する。河川跡埋没後の掘削である。298号土坑と重複している。2.22×2.20m、深さ10cmを計り、隅円方形を呈すると思われる。覆土は、酸化鉄・マンガン粒を含む灰褐色シルトで、298号土坑とほぼ同一であるため、両者の新旧関係はつかめていない。遺物は、出土していない。

**298号土坑**（第27図）は、I-5からJ-5グリッドにかけて位置する。河川跡埋没後の掘削である。297号土坑と重複している。台形を呈し、2.18×1.65～2.44m、深さ64cmを計る。覆土は、酸化鉄・マンガン粒を含む灰褐色シルトで、297号土坑とほぼ同一であるため、両者の新旧関係はつかめていない。遺物は、出土していない。

**309号土坑**（第30図）は、M-5グリッドに位置する。8号井戸跡の西半部分に南北に張り出す形となっている。本来、8号井戸跡と一連の遺構と考えられたが、8号井戸跡内にはみられない、多量の浅黄色粘土を含む灰色粘土（第4層）が堆積していたため、一応区別したものである。北端を302号土坑に切断されている。詳細は、8号井戸跡の項で述べる。

**327号土坑**（第22図）は、P-7グリッドに位置する。328号土坑を切断しており、また333号土坑の上位に位置している。長方形を呈し、1.35×1.05m、深さ35cmを計る。床面は、全体でU字型を呈する。覆土は、上位が多量の橙色シルト及び少量の炭化物を含む褐灰色シルト（第1層）、多量の灰黄色シルトを含む黄橙色シルト（第2層）である。遺物



第29図 A区土坑出土遺物（303号・306号・307号・318号・325号）

第12表 A区土坑出土遺物観察表（第29図）

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
303-1	土師器・杯	11.7	3.8	—	②①④	③	にぶい黄橙	3/4	黒色処理。表面摩滅した部分多い
306-1	土師器・杯	(14.2)	(5.5)	—	⑥①②	③	明赤褐	1/4	体部外面ケズリの後ナデ。内面吸炭。表面剥離
307-1	土師器・杯	(13.8)	(5.2)	—	③①②④	②	橙	1/8	表面摩滅整形不詳
307-2	土師器・壺	—	—	—	②①	②	橙	1/4	胴部外面斜のケズリの後ナデ。頸部～胴部上位内面指頭によるナデ。表面摩滅した部分多い。
318-320-321-322-1	土師器・杯	13.5	4.5	—	①②④⑥	②	橙	1/4	内外面共全面ナデ。
318-320-321-322-2	土師器・甕	(14.8)	—	—	⑥②④①	②	にぶい橙	上位1/8	内面全面ナデ。
318-320-321-322-3	土師器・甕	—	—	(14.2)	①②③⑥	②	橙	底部1/8	
325-1	土師器・杯	(13.5)	5.0	—	②①④⑥	②	橙	3/4	底部外面砥石として使用。
325-2	磨石	長さ 16.5 幅 10.9 厚さ 3.8 重さ 850 g				—	—	—	—
296-参	馬歯	—	—	—	—	—	—	—	—
325-参	骨	—	—	—	—	—	—	—	—

は、出土していない。

329号土坑（第24図）は、P-7グリッドに位置する。97号住居跡に切断されている。そのため、規模形態共に不明であるが、方形を基本とした形態であると思われる。現状では $1.25 \times (0.80 + \alpha)$ を計る。底面は平坦であるが、東半では $96 \times 55$ cmで不整長円形の窪みをもつ。平坦面までの深さ35cm、最深部までは平坦面からさらに15cm窪んでいる。覆土は、最下層にわずかに炭化物を含む灰黄色砂（第4層）及びわずかに炭化物を含む灰

オリーブシルト（第5層）、その上位にはやや多量の炭化物を含む灰黄褐色シルト質粘土（第3層）、多量の砂粒を含む灰白色シルト（第2層）、多量の黄橙色シルトブロックを含むにぶい黄色シルト（第1層）が堆積している。遺物は、出土していない。

**332号土坑**（第19図）は、O-6からO-7グリッドにかけて位置する。93号・94号住居跡を切断している。長円形を呈し、2.15×0.77mの規模をもつ。床面は、三段となる。西部は浅く深さ22cm、中央部との間で段を成し30cm、東部はさらに一段深くなり、深さ40cmを計る。壁は、全体に緩い傾斜を成す。西部と中央部の段には焼土塊（C-C'第5層）が床上から堆積し、この焼土塊を挟んで床面上西部には灰白色シルト質粘土（同第4層）、東部にはにぶい黄色シルト（同第7層）及び、わずかに炭化物を含む灰色シルト質粘土（同第8層）がそれぞれに堆積している。また、最浅部＝西部の第4層の上位には、わずかに炭化物を含む黄灰色シルト質粘土（同第3層）、多量の浅黄色シルトを含む褐灰色シルト質粘土（同第2層）、浅黄色シルトを部分的に含む褐灰色シルト質粘土（同第1層）が堆積し、東部の第7・8層の上位には、焼土ブロックを含む灰白色シルト（第6層）が堆積している。なお第6層は、第1・2・3層上面にも堆積している。最浅部＝西部の覆土中には、板状の緑泥変岩（32）を中心として礫（24～48）が集中している。礫は、土坑確認面（94号住居跡床面）では、土坑の範囲外にも拡がっている。しかしその出土位置は、土坑壁の傾斜に沿って土坑内に治まる範囲に集中している。土層上では確認できなかったものの、これらの礫群も本土坑内に含まれ、土坑規模も確認段階よりも大きかったと思われる。遺物は、最浅部面で礫の他に土師器甕（第20図7）、土師器壺（第20図16）、最深部で土師器杯（2・4・5）、土師器甕（第20図8）

**333号土坑**（第22図）は、P-7グリッドに位置する。上位に327号・328号土坑が位置している。調査時、96号住居跡を切断していると思われたが、覆土の詳細な検討の結果、96号住居跡覆土のうち、中央部での最下層－黄橙色シルト及びマンガン粒ブロック状に含む灰白色シルト質粘土（第6層）－が本土坑内に連続して堆積していることから、住居跡の張り出し土坑とすることが妥当であろうと思われる。第6層の上位には、炭化物層（第21層）を挟んで、多量のマンガン粒及びオリーブ黒色シルトブロックを含む灰色シルト質粘土（第20層）が堆積し、やはり投入土の様相を呈している。長円形を呈し、1.68×0.94m、竪穴外の部分が最も深く、深さ58cmを計る。遺物は、第6層中から土師器壺（第23図-6）が出土している。

### 3 井戸跡

A区における井戸跡は、平成14年度・第5次調査で、6号から10号までの5基が調査されている。全て第一確認面からの検出である。なお、壁の崩落があり、深い井戸跡の深部は調査されていない場合（6号・7号・10号）がある。

**6号井戸跡** M-6グリッドに位置する。90号住居跡を削除しているが、306号土坑に削除されている(第14図) 。

確認面での平面形は、ほぼ円形を呈し、 $1.32 \times 1.06\text{m}$ の規模を示す。ほぼ垂直な壁は、確認面から深さ100cm前後の深さで、狭まり、径60cm程の円形ピットへ移行する。全体の深さは167cmまで調査されたが、それ以下に連続していることが確認されている。覆土は、酸化鉄、マンガン粒及び、白色軽石粒(浅間B軽石)、褐灰色粘土ブロックを混在する黄灰色粘土が堆積している。土器等の遺物は、出土していない。

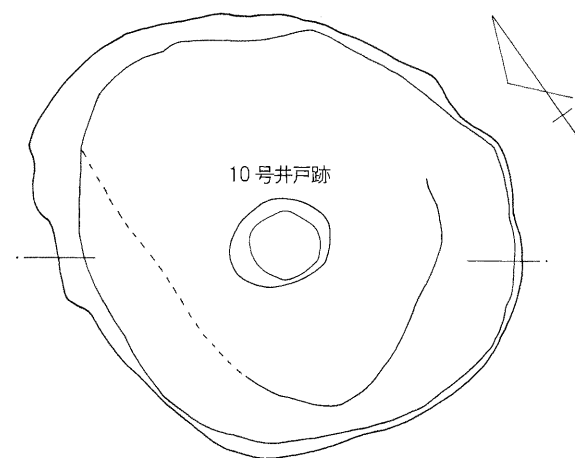
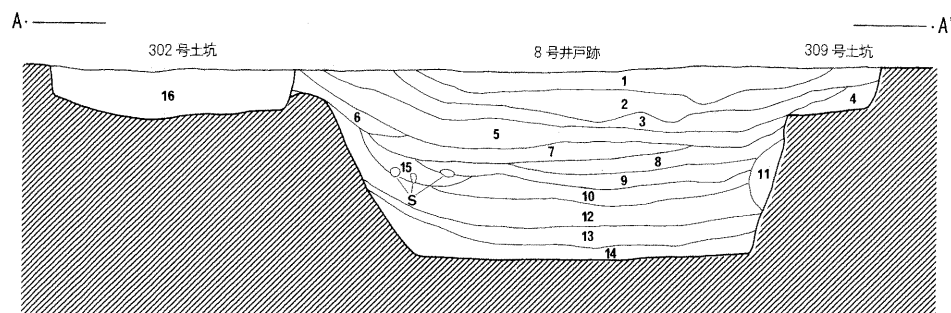
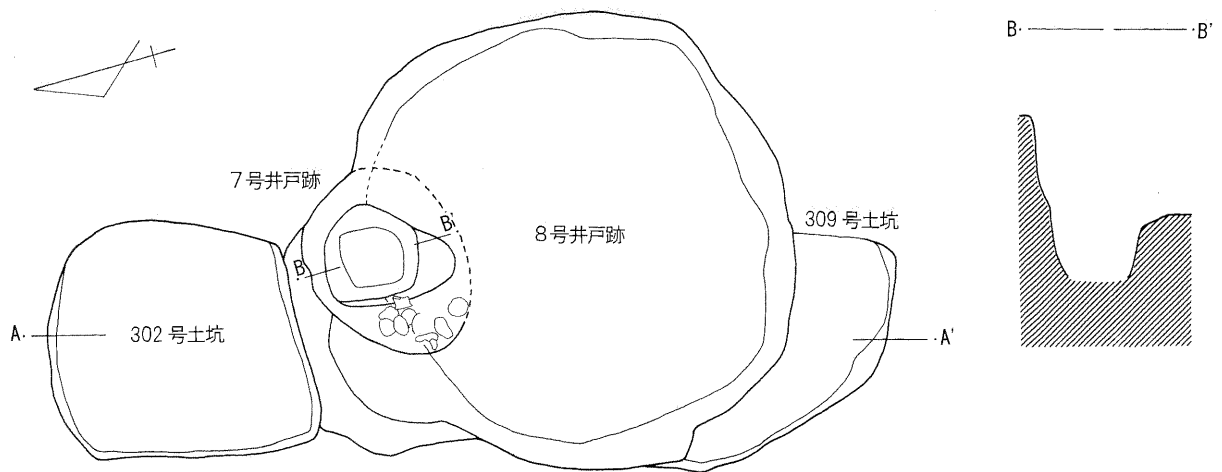
**7号井戸跡** M-5グリッドに位置する。8号井戸跡(309号土坑を含む)を削除している。

(第30図) 確認面での平面形は、卵形を呈し、 $1.65 \times 1.23\text{m}$ の規模を示す。確認面から深さ70～80cmの深さで、北壁は稜をもつのみであるが、その他の辺では平坦面を作り出している。この平坦面から、 $70 \times 77\text{cm}$ でほぼ正方形を呈するピットが穿たれている。南辺では平坦面の幅が狭く、傾斜してピットへ移行している。ピットの深さは65cmまで調査されたが、それ以下に連続していることが確認されている。西側平坦面では、径15cm前後ほどの円礫、 $10 \times 15\text{cm}$ 前後の長円礫が集中して出土している。覆土は、酸化鉄及び白色軽石粒(浅間B軽石)を混在する黄灰色シルトがブロック化して堆積している。土器等の遺物は、出土していない。

**8号井戸跡** M-5グリッドに位置する。7号井戸跡及び302号土坑に削除されている。

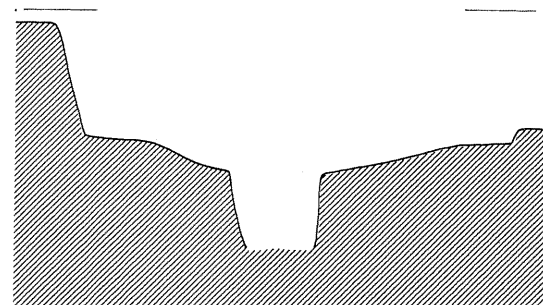
(第30図) 本井戸跡は当初、長方形の中央部が円形に張り出した土坑(309号土坑)としたものであるが、調査の進行に伴って、井戸跡が土坑を切断しているとの判断から、両遺構を分離して命名したものである。309号土坑(平坦面)の南部では、最下層に井戸跡内に見られない浅黄色粘土を含む灰色粘土(第4層)が堆積しており、これを切り込んで井戸跡の壁(第4層上面)が築かれている、としたものである。しかしながら、第4層の上位に堆積する、いずれも白色軽石粒(浅間B軽石)を含む土層(第1層～第3層)は、北部平坦面ではこの下に、井戸跡内に深く堆積しており、やはり白色軽石粒(浅間B軽石)を含んでいる第5・第6層のみが見られたのである。これらのことから結局ここでは、309号土坑を、本井戸跡の張り出し平坦面として扱うものである。

西半部分では、確認面から深さ20～30cmの深さで、南北へ張り出した平坦面をもつ。張り出し平坦面(309号土坑)の規模は、北端が302号土坑に切断されているため不明確であるが、それぞれ50cm前後の張り出しであり、現状での全体規模は、 $(5.08 + \alpha) \times 1.70\text{m}$ 、深さは南部で35cm、北部で20cmを計る。平坦面から再度落ち込み、全体の深さは1.56mに及ぶ。再落ち込みの平面形は、ほぼ円形を呈し、 $3.94 \times 3.76\text{m}$ の規模を示す。やや緩やかな傾斜をもち、底面径は $3.30 \times 2.95\text{m}$ を計り、隅円方形に近い円形を呈する。底面の基盤層は、青灰色粘土層であり、以下に延伸しないことを示している。水溜施設をもっていない。覆土は、上位第1層～第6層(第4層は除く)に白色軽石粒(浅間B軽石)を含んでいる。このうち第6層のみが少量であるが、他層には多量に含まれている。また、



8号井戸跡、302号・309号土坑土層

- 1 黄灰色(2.5Y 5/1)粘土。酸化鉄、白色軽石粒(火山灰?)を多量含む。
- 2 暗灰黄色(2.5Y 5/2)粘土。酸化鉄、白色軽石粒(火山灰?)を多量含む。
- 3 黄灰色(2.5Y 4/1)シルト。酸化鉄、白色軽石粒(火山灰?)を多量含む。
- 4 灰色(5Y 6/1)粘土。酸化鉄、浅黄色粘土を多量含む。
- 5 灰色(N 4/0)粘土。酸化鉄、白色軽石粒(火山灰?)を多量含む。
- 6 灰色(7.5Y 5/1)粘土。酸化鉄、白色軽石粒(火山灰?)を少量含む。
- 7 灰オリーブ色(7.5Y 6/2)シルト。酸化鉄、炭化物を少量含む。
- 8 灰色(N 5/0)粘土。酸化鉄少量含む。
- 9 青灰色(10B 6/1)粘土。
- 10 灰オリーブ色(5Y 6/2)粘土。酸化鉄、炭化物を少量含む。
- 11 灰オリーブ色(5Y 6/2)粘土。酸化鉄を多量含む。
- 12 灰色(7.5Y 6/1)粘土。酸化鉄を少量含む。
- 13 灰オリーブ色(7.5Y 5/2)粘土。酸化鉄、炭化物を少量含む。
- 14 暗オリーブ色(7.5Y 4/1)粘土。酸化鉄、炭化物を少量含む。
- 15 灰色(7.5Y 6/1)粘土。炭化物、酸化鉄を少量含む。
- 16 にぶい黄褐色(10YR 5/3)粘土。褐灰色粘土をブロック状に多量、酸化鉄、マンガンを少量含む。



0 L=28.600m 2m 1:60

第30図 A区井戸跡(7号・8号・10号井戸跡、302号・309号土坑)

これらの層には、酸化鉄も含まれている。上位から、黄灰色粘土（第1層）、暗灰黄色粘土（第2層）、黄灰色シルト（第3層）、灰色粘土（第5層）、灰色粘土（第6層）である。以下、少量の酸化鉄及び炭化物を含む灰オリーブ色シルト（第7層）、少量の酸化鉄を含む灰色粘土（第8層）、青灰色粘土（第9層）、少量の酸化鉄及び炭化物を含む灰オリーブ色粘土（第10層）、多量の酸化鉄を含む灰オリーブ色粘土（第11層）、少量の酸化鉄を含む灰色粘土（第12層）、少量の酸化鉄及び炭化物を含む灰オリーブ色粘土（第13層）、少量の酸化鉄及び炭化物を含む暗オリーブ色粘土（第14層）、礫及び少量の酸化鉄、炭化物を含む灰色粘土（第15層）が堆積している。土器等は、出土していないが、桃の種子が出土している。

**9号井戸跡** M-5・6からN-5・6グリッドにかけて位置する。92号住居跡及び6号不明遺構を（第17図）を削除している。

確認面での平面形は、長円形を呈し、5.08×3.36mの規模を示す。壁は、緩傾斜を成し、確認面からの深さ55センチ前後で稜をもつ。この稜以下の壁面は、すべて酸化鉄が付着している。底面はほぼ水平で、全体の深さは1.25mを計る。底面の基盤層は、青灰色粘土層であり、以下に延伸しないことを示している。水溜施設をもっていない。覆土は、上位6層中に白色軽石粒（浅間B軽石）を含んでいる。上位から、多量の軽石粒、少量の酸化鉄を含む黒褐色粘土（第1層）、軽石粒及び酸化鉄を含む灰色シルト（第2層）、軽石粒、酸化鉄、浅黄色粘土、マンガン粒を含む灰色シルト（第3層）、多量の酸化鉄、少量の軽石粒を含む褐灰色シルト（第4層）、酸化鉄及び少量の軽石粒を含む褐灰色シルト（第5層）、酸化鉄及び少量の軽石粒を含む黄灰色シルト（第6層）が堆積し、この第6層下位の第7層以下、白色軽石粒（浅間B軽石）を含まなくなる。以下、少量の酸化鉄を含む青灰色シルト（第7層）、少量の酸化鉄を含む黄灰色シルト（第8層）、暗灰色シルト（第9層）、黒色シルト（第10層）、少量の酸化鉄を含む黄灰色粘土（第11層）、緑黒色シルト（第12層）が堆積している。土器等の遺物は、出土していない。

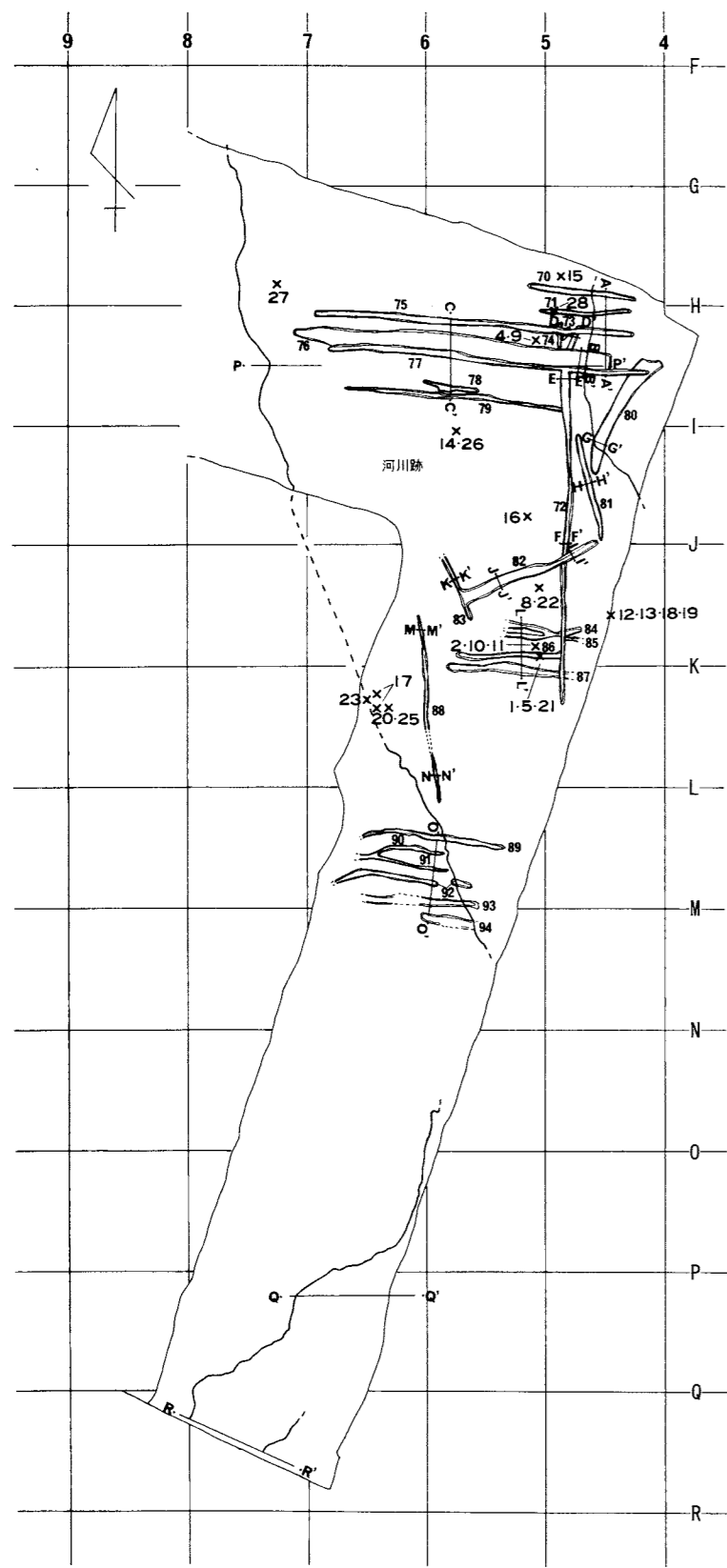
**10号井戸跡** N-6・7からO-6・7グリッドにかけて位置する。93号・94号住居跡及び317号・（第30図）318号・319号土坑を削除している。

確認面での平面形は、ほぼ円形を呈し、4.19×3.57mの規模を示す。ほぼ垂直な壁は、確認面から深さ95cm前後の深さで、平坦面を成している。平坦面は、幅45～55cmで緩傾斜を示し、中央部に穿たれた径95×70cm程の円形ピットへ移行する。確認面からピット掘りこみ面までの深さは、1.22mを計る。ピットは、深さ65cmまで調査されたが、それ以下に連続していることが確認されている。覆土は、多量の酸化鉄、マンガン粒及び、白色軽石粒（浅間B軽石）、褐灰色粘土粒を混在する黄灰色シルトが堆積している。土器等の遺物は、出土していない。

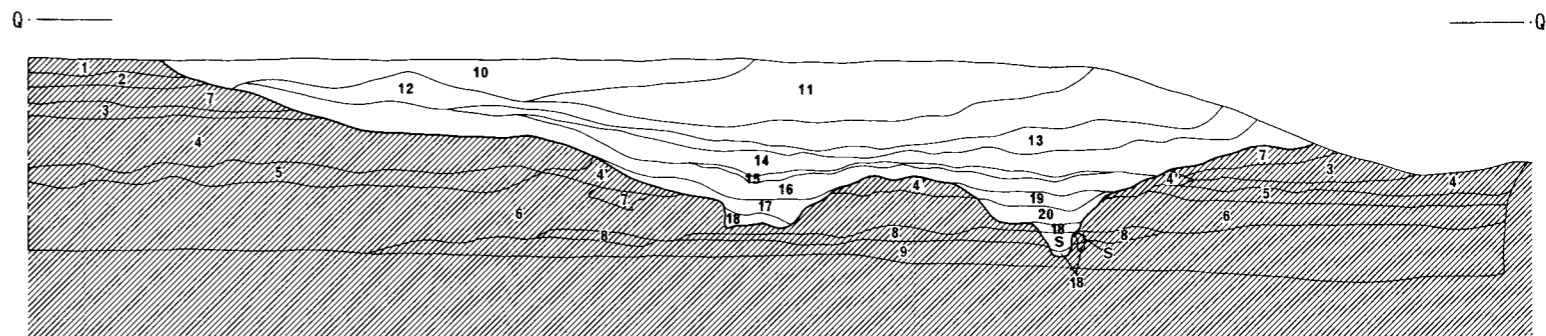
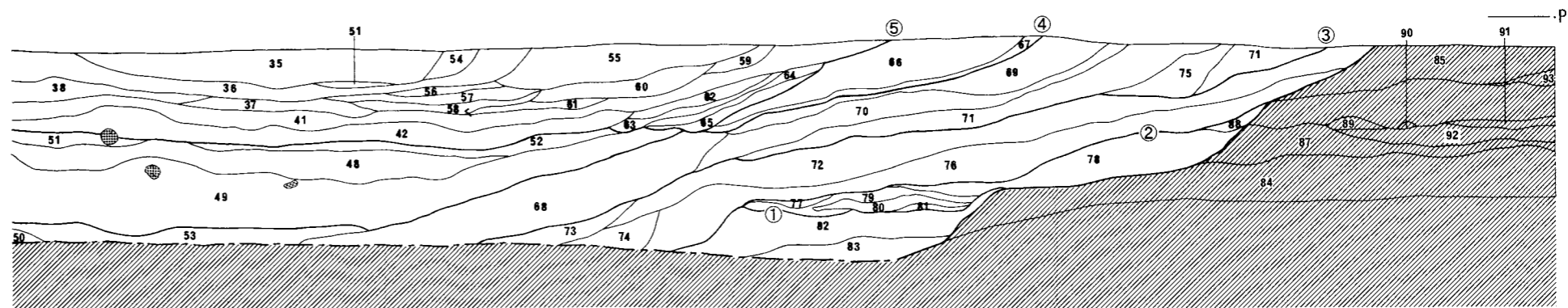
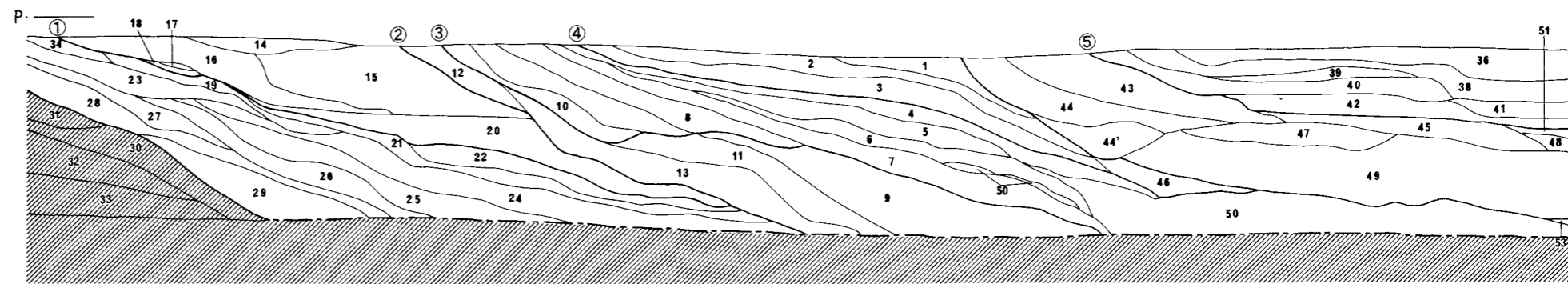
## 4 溝跡（河川跡）

A区における溝跡は、平成14年度・第5次調査で、70号から94号までの25条が調査されている（第31図・第32図）。全て第一確認面からの検出である。また、西側岸ラインがB区F-7グリッドから本区M-5グリッド、東側岸ラインがG-4グリッドからI-4グリッドに及ぶ南東行する河川跡は、N-5ポイント付近で、そのまま南東行を続行する本流と、B区南半部分・南西方向に延伸する支流に分岐している。

- 70号溝跡** G-4からG-5グリッドに亘って、河川跡の上面に位置している。全体でほぼ直線を成し、総延長9.25m、幅40cm前後、深さはほぼ均等であり、6～10cmを計る。方位は、ほぼ東西方向のN-84°-Wを示す。覆土は、多量のオリブ黒色粘土ブロックを含む黄色粘土層である。実測可能な遺物は、出土していない。
- 71号溝跡** H-4からH-5グリッドに亘って、河川跡の上面に位置している。途中でやや屈曲するが全体でほぼ直線を成し、総延長7.66m、幅30～35cm、深さはほぼ均等であり、6cm前後を計る。方位は、東西方向のN-90°-Wを示す。覆土は、酸化鉄を含む灰黄褐色シルト層である。実測可能な遺物は、出土していない。
- 72号溝跡** H-4からK-4グリッドに亘って、河川跡の上面に位置している。75号・76号・77号各溝跡に切断されている。また南部では、84号・85号・86号・87号各溝跡を切断し、82号溝跡に切断されている。北隅でやや東に屈曲するが、全体でほぼ直線を成し、総延長31.80mを計る。幅は、北部で広く92cm前後、南部では狭く55cm前後を計る。また深さは、幅広部分では10cm前後、幅狭部分では逆に深くなり25cm前後を計る。断面形は、幅広部分では矩形、幅狭部分ではV字形を呈する。方位は、ほぼ南北方向のN-1°-Eを示す。覆土は、酸化鉄を含む黄褐色シルト層である。実測可能な遺物は、出土していない。
- 73号溝跡** H-4グリッド、河川跡の上面に位置している。75号溝跡に切断されている。長さは短く、1.20mを計るのみである。幅35～40cm、深さ6cm前後を計る。方位は、72号溝跡北端部分とほぼ同様な、N-23°-Eを示す。覆土は、72号溝跡と同じ酸化鉄を含む褐灰色シルト層である。実測可能な遺物は、出土していない。
- 74号溝跡** H-4グリッド、河川跡の上面に位置している。75号溝跡に切断されている。北隅でやや東に屈曲する。長さは短く、2.28mを計るのみである。幅45cm前後、深さ6cm前後を計る。直線部分の方位は、ほぼ南北方向のN-1°-Wを示す。覆土は、72号・73号各溝跡と同じ、酸化鉄を含む褐灰色シルト層である。実測可能な遺物は、出土していない。
- 75号溝跡** H-4からH-6グリッドに亘って、河川跡の上面に位置している。72号・73号・74号各溝跡を切断している。ほぼ直線を成し、総延長27.16m、幅45cm前後、深さ6cm前後を計る。方位は、ほぼ東西方向のN-86°-Wを示す。覆土は、70号溝跡と同じ、多量のオリブ黒色粘土ブロックを含む黄色粘土層である。実測可能な遺物は、出土していない。
- 76号溝跡** H-4からH-7グリッドに亘って、河川跡の上面に位置している。72号溝跡を切断しているが、77号溝跡に切断されている。やや屈折するが、ほぼ直線を成し、総延長27.02



0 20m 1:600



0 L=27.900m 2m 1:60

第31图 A区沟迹·(河川迹)·河川迹土层图(1)



## 河川跡土層

## P — P'

- 1 オリーブ黄色(5Y 6/3)砂質。最下位に酸化鉄を層状に含む。
- 2 赤褐色(2.5YR 4/8)砂質。最下位に酸化鉄を層状に含む。
- 3 灰オリーブ色(5Y 6/2)砂質。最下位に酸化鉄を層状に含む。
- 4 黄灰色(2.5Y 6/1)砂質。部分的にシルトを含む。
- 5 黄灰色(2.5Y 7/2)砂質と黄灰色(2.5Y 6/1)シルトの互層。
- 6 灰オリーブ色(7.5Y 6/2)砂質と黄灰色(2.5Y 6/1)シルトの互層。
- 7 明黄褐色(2.5Y 7/6)砂質と黄灰色(2.5Y 6/1)シルトの互層。
- 8 褐灰色(10YR 6/1)砂質。黄灰色シルトの下位に炭化物層を含む。
- 8' 炭化物層を含まない。
- 9 青灰色(5B 6/1)砂質と灰色(10Y 5/1)シルト(炭化物を多量)の互層。
- 10 褐灰色(10YR 6/1)シルト、黄灰色(2.5Y 6/1)シルトの混在する互層状堆積層。炭を含む。
- 11 青灰色(5B 6/1)砂と青灰色(5B 5/1)粘土(炭化物やや多量)の互層。
- 12 灰オリーブ色(5Y 6/2)シルトと黄灰色(2.5Y 5/1)シルトの互層。
- 13 青灰色(5B 5/1)粘土と黄灰色(2.5Y 5/1)シルトの互層。
- 14 下位に炭化物集積層(5mm厚)を含む。
- 15 褐灰色(10YR 6/1)砂。黄褐色の砂を含む。
- 16 黄褐色(10YR 7/5)砂。ほぼ15層と同質の砂で構成される。下位に層状に酸化鉄を含む。
- 17 褐灰色(7.8YR 6/1)砂。
- 18 褐灰色(7.8YR 6/1)砂。
- 19 褐灰色(10YR 6/1)砂。
- 20 灰オリーブ色(5Y 5/2)砂。
- 21 灰色(5Y 6/1)砂。粘土を含む。
- 22 灰オリーブ色(7.5Y 6/2)砂。
- 23 黄灰色(2.5Y 6/1)粘土。
- 24 灰オリーブ色(5Y 6/2)砂。
- 25 灰白色(2.5Y 7/1)砂と灰黄色(2.5Y 6/2)粘土の互層。下位に炭化物層を含む。
- 26 青灰色(5PB 5/1)粘土と浅黄色(2.5Y 7/3)砂の互層。下位に極微量の炭化物層を含む。
- 27 灰色(7.5Y 6/1)シルトと浅黄色(2.5Y 7/3)粘土の互層。
- 28 黄灰色(2.5Y 6/1)シルトと浅黄色(2.5Y 7/3)粘土の互層。堆積の中心部では砂質層は見られなくなる。
- 29 青灰色(5B 6/1)シルトと青灰色(5PB 5/1)粘土(炭化物少量含む)の互層。
- 30 オリーブ色(2.5GY 6/1)粘土。炭化物粒(細粒)やや多量含む。
- 31 灰色(N 6/0)粘土。
- 32 緑灰色(10GY 6/1)粘土。
- 33 緑灰色(7.5GY 6/1)粘土(シルト質)。
- 34 黄灰色(2.5GY 5/1)砂。
- 35 灰色(5Y 5/1)シルト(砂質)。
- 36 灰色(7.5Y 5/1)砂層。
- 37 灰白色(10YR 7/1)砂。
- 38 灰オリーブ色(7.5Y 6/2)砂、粘土。
- 39 黄灰色(2.5Y 6/1)砂、粘土。
- 40 灰白色(10YR 7/1)砂、粘土。
- 41 灰黄色(2.5Y 7/2)砂。色調はほぼ同一だが、細砂と粗砂の互層になっている。
- 42 オリーブ灰色(2.5Y 6/1)シルト(やや砂質)。
- 43 黄灰色(2.5Y 6/1)砂と黄褐色(7.5YR 7/8)砂(粒子粗い)の互層。
- 44 褐灰色(10YR 6/1)粘土(シルト質)と黄灰色(2.5Y 6/1)シルトの互層。
- 44' 褐灰色(10YR 6/1)粘土(シルト質)と黄灰色(2.5Y 6/1)砂の互層。
- 45 青灰色(5B 6/1)砂。
- 46 緑灰色(5G 5/1)砂と浅黄色(2.5Y 7/4)砂(粒子粗い)の互層。
- 47 青灰色(5BG 5/1)粘土。
- 48 オリーブ灰色(2.5GY 6/1)粘土と青緑灰色(10GY 5/1)シルトの互層。部分的に黄灰色(2.5Y 6/1)砂層(枝、木片等混入)を含む。
- 49 オリーブ灰色(2.5GY 6/1)シルトと緑灰色(10GY 5/1)粘土の互層。黄灰色(2.5Y 6/1)砂層(枝、木片等混入)を部分的に含む。
- 50 緑灰色(5G 5/1)砂とオリーブ灰色(10Y 5/2)粘土の互層。
- 51 黄褐色(2.5Y 5/6)砂層。
- 52 黄褐色(2.5Y 5/6)砂層。
- 53 緑灰色(5G 5/1)砂層(粗粒子大)。緑灰色(10GY5/1)粘土(1~2mm大)を小ブロック状に多量含む。
- 54 15層と同一。
- 55 褐灰色(10YR 6/1)シルト層。
- 56 灰白色(10YR 7/1)砂。
- 57 灰白色(2.5Y 7/1)砂。
- 58 黄褐色(2.5Y 5/6)砂層。ほぼ同一の色調だが細砂と粗砂の互層状堆積層。
- 59 黄褐色(2.5Y 5/6)砂層。ほぼ同一の色調だが細砂と粗砂の互層状堆積層。
- 60 灰オリーブ色(5Y 6/2)砂とシルトの互層。
- 61 灰色(5Y 6/1)砂層。
- 62 にぶい黄色(2.5Y 6/4)砂層。
- 63 灰オリーブ色(5Y 6/2)砂層。粘土(シルト質)。
- 64 にぶい黄色(2.5Y 6/4)シルトと砂の互層。
- 65 灰色(2.5Y 7/1)シルトと砂と粘土の互層。
- 66 にぶい黄色(2.5Y 6/4)砂層。
- 67 灰色(7.5Y 6/1)シルトと砂と粘土の互層。
- 68 オリーブ灰色(2.5GY 6/1)砂と緑灰色(10G 5/1)シルトの互層。
- 69 にぶい黄色(2.5Y 6/4)砂とシルトの互層。
- 70 灰黄色(2.5Y 7/2)砂層。極うすいシルト層が互層状に含まれる。
- 71 16層と同一。
- 72 灰黄色(2.5Y 7/2)砂。極うすい粘土層が互層状に含まれる。
- 73 青灰色(5BG 6/1)砂。酸化鉄なし、粘土含む。
- 74 青灰色(5BG 5/1)粘土。

- 75 1層と同一。
- 76 灰オリーブ色(7.5Y 6/2)砂と粘土の互層。
- 77 73層と同一。
- 78 29層と同一。
- 79 灰色(7.5Y 6/1)砂層。
- 80 にぶい褐色(7.5YR 5/4)粘土。粘土ブロック(1mm大)集中層。
- 81 79層と同一。
- 82 74層と同一。
- 83 灰色(10Y 6/1)砂と青灰色(5B 6/1)砂の互層。
- 84 緑灰色(5G 6/1)粘土(シルト質)。
- 85 黄灰色(2.5Y 6/1)粘土(シルト質)。
- 86 褐灰色(10YR 6/1)粘土(シルト質)。
- 87 青灰色(5B 6/1)粘土(シルト質)。
- 88 28層と同一。
- 89 青灰色(5BG 6/1)粘土。炭化物を含む。
- 90 青灰色(5BG 6/1)粘土。炭化物を含む。
- 91 青灰色(5BG 6/1)粘土。炭化物を含む。
- 92 青灰色(5BG 6/1)粘土。炭化物を層状に含む。弥生式土器包含層。
- 93 褐灰色(10YR 6/1)粘土(シルト質)。

## Q — Q'

- 1 黄褐色(2.5Y 5/4)砂。
- 2 にぶい黄色(2.5Y 6/3)シルト(やや砂質)。
- 3 灰色(5Y 6/1)シルト(粘土質)。
- 4 黄灰色(2.5Y 6/1)粘土(シルト質)。炭化物が少量点在している。
- 4' やや砂質。
- 5 灰オリーブ色(5Y 5/2)粘土(シルト質)。
- 6 緑灰色(10GY 5/1)粘土。
- 7 灰オリーブ色(5Y 6/2)シルト。マンガン粒やや多量含む。
- 8 7層と9層の混在層。
- 8' 9層が多く混じる。
- 9 緑灰色(5G 6/1)粘土。
- 10 灰色(5Y 5/1)シルト。酸化鉄、マンガン粒、炭化物を極めて多量含む。
- 11 褐灰色(10YR 6/1)シルト(やや砂質)。
- 12 黄褐色(2.5Y 5/3)シルト。マンガン粒を多量含む。
- 13 灰色(5Y 5/1)粘土。マンガン粒、酸化鉄粒を多量含む。
- 14 灰黄色(2.5Y 6/2)シルト(砂質)と灰色(10YR 5/1)シルトの互層。
- 15 褐灰色(5YR 5/1)シルト(粘土質)と浅黄色(2.5Y 7/4)粘土の互層。
- 16 褐灰色(5YR 5/1)シルト(粘土質)と青灰色(5B 5/1)粘土の互層。高い部分で青灰色粘土はほとんど見られない。
- 17 暗灰黄色(2.5Y 5/2)シルト(粘土質)とオリーブ灰色(2.5GY 5/1)粘土の互層。最下位に灰色(7.5Y 6/1)シルト層(砂質)が含まれる。
- 18 灰色(7.5Y 6/1)砂、灰色(10Y 5/1)粘土、礫(1~3cm大)の混在層。
- 19 17層と同一。下位の灰色シルト層は見られない。
- 20 灰色(7.5Y 6/1)砂層と灰色(10Y 5/1)粘土層の互層。

## R — R'

- 1 黄褐色(2.5Y 5/4)砂。
- 2 にぶい黄色(2.5Y 6/3)シルト(やや砂質)。
- 3 灰色(7.5Y 5/1)シルト(粘土質)。炭化物を層状に含む。
- 4 灰オリーブ色(5Y 6/2)シルト。マンガン粒をやや多量含む。
- 5 灰色(5Y 6/1)シルト(粘土質)。
- 6 黄灰色(2.5Y 6/1)粘土(シルト質)。炭化物が少量点在している。
- 7 灰オリーブ色(5Y 5/2)粘土(シルト質)。
- 8 緑灰色(10GY 5/1)粘土。
- 9 灰色(5Y 5/1)シルト。酸化鉄、マンガン粒、炭化物を極多量含む。
- 10 褐灰色(10YR 6/1)シルト(やや砂質)。
- 11 灰黄色(2.5Y 6/2)シルト(砂質)と灰色(10Y 5/1)シルトの互層。
- 12 褐灰色(5YR 5/1)シルト(粘土質)と青灰色(5B 5/1)粘土の互層。部分的に、にぶい黄色(2.5Y 6/3)シルト層が含まれる。
- 13 にぶい黄色(2.5Y 6/3)シルト(やや砂質)。
- 14 灰色(5Y 5/1)砂層。下位に浅黄色(5Y 7/3)砂層を含む。
- 15 浅黄色(5Y 7/3)粘土。礫(2~5cm大)を多量含む。
- 16 浅黄色(5Y 7/3)粘土。
- 17 黄褐色(2.5Y 5/3)シルト。マンガン粒を多量含む。
- 18 灰色(5Y 5/1)粘土。マンガン粒、酸化鉄粒を多量含む。
- 19 灰色(5Y 5/1)砂。にぶい黄褐色(10YR 5/4)砂を多量含む。
- 20 にぶい黄色(2.5Y 6/4)砂。マンガン粒を多量含む。
- 21 灰色(10Y 6/1)シルト。マンガン粒、酸化鉄を多量含む。最下位に酸化鉄、層状にマンガン粒が集中している。

## A区 溝跡(河川跡)・河川跡土層説明(2)

mを計る。幅は、1.60m前後であるが、西端部分は狭くなる。深さは10cm前後である。方位は、ほぼ東西方向のN-85°-Wを示す。覆土は、多量のオリブ黒色粘土ブロックを含む黄色粘土層である。実測可能な遺物は、出土していない。

**77号溝跡** H-4からH-6グリッドに亘って、河川跡の上面に位置している。72号・76号・80号各溝跡を切断している。やや屈折するが、ほぼ直線を成し、総延長22.50mを計る。幅60cm前後、深さ12cm前後を計る。方位は、ほぼ東西方向のN-85°-Wを示す。覆土は、70号・75号各溝跡と同じ、少量の黄色粘土ブロックを含むオリブ黒色粘土層である。実測可能な遺物は、出土していない。

**78号溝跡** H-5からH-6グリッドに亘って、河川跡の上面に位置している。長さ4.65m、深さ6~10cmを計る。幅は、40cm前後であるが、西側では広くなる部分もあって、最大80cmに及ぶ。方位は、N-81°-Wを示す。覆土は、酸化鉄を含む暗オリブ褐色シルト層である。実測可能な遺物は、出土していない。

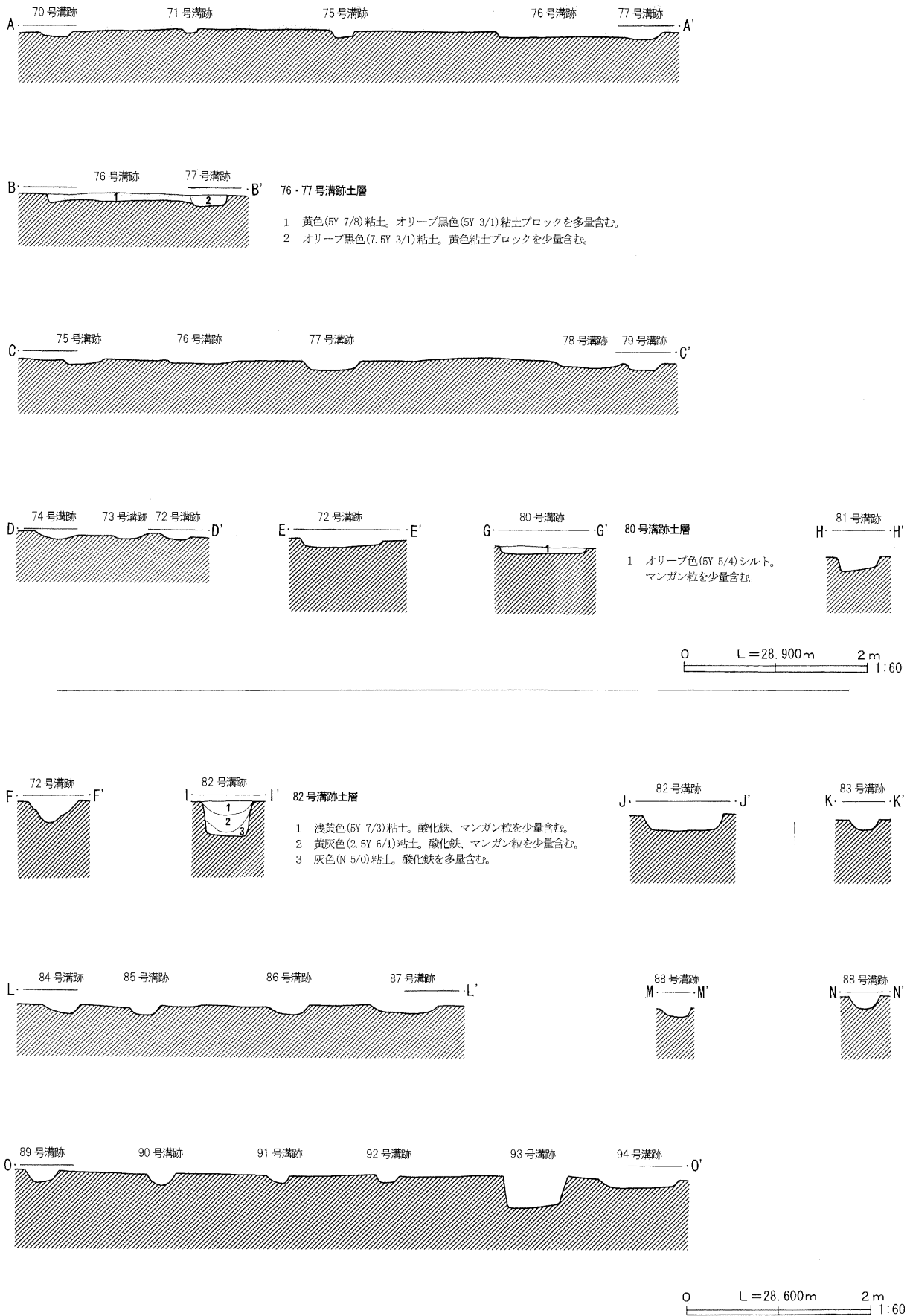
**79号溝跡** H-4からH-6グリッドに亘って、河川跡の上面に位置している。全体でほぼ直線を成し、総延長18.56m、深さ6~10cmを計る。幅は、東側で25cm前後、西側ではやや広くなり40cm前後を計る。方位は、ほぼ東西方向のN-85°-Wを示す。覆土は、黄色粘土ブロックを含むオリブ黒色粘土層である。70号・75号・77号各溝跡覆土と比べて黄色粘土ブロックが大きく、また含有率も高い。実測可能な遺物は、出土していない。

**80号溝跡** G-4からG-5グリッドに亘って、河川跡の上面に位置している。西側に脹らみをもつ弓形を呈する。総延長11m前後、幅1~1.5m前後、深さ8cm前後である。方位は計測できないが、方向性としてはN-25°-Eを示すようである。覆土は、少量のマンガン粒を含むオリブ色シルト層である。実測可能な遺物は、出土していない。

**81号溝跡** I-4グリッド、河川跡の上面に位置している。南端がやや屈折するものの、ほぼ直線を呈し、総延長9.20m、幅45cm前後を計る。断面は、ほぼ矩形を示すが、西側が深く18cm前後、東側が浅く10cm前後を計る。直線部分の方位は、N-15°-Wを示す。覆土は、多量の酸化鉄を含む灰色粘土層であり、82号溝跡の最下層（第3層）に近似している。遺物は、土師器甕（第37図81-1）が出土している。

**82号溝跡** J-4からJ-5グリッドに亘って、河川跡の上面に位置している。72号溝跡を切断している。西端は、83号溝跡に連続している様子である。中央部でやや屈折するものの、ほぼ直線を呈し、総延長13.56mを計る。幅は西側が広く90cm前後、東側が狭く55cm前後を計る。断面は、ほぼ矩形を示すが、広い西側が浅く40cm前後、狭い東側が深く浅く18cm前後を計る。直線部分の方位は、N-70°-Eを示す。覆土は、上位が少量の酸化鉄・マンガン粒を含む浅黄色粘土（第1層）、中位が少量の酸化鉄・マンガン粒を含む黄灰色粘土（第2層）、下位が多量の酸化鉄を含む灰色粘土（第3層）である。実測可能な遺物は、出土していない。

**83号溝跡** J-5グリッド、河川跡の上面に位置している。北側が削平され、全体は知り得ない。現段階の長さ5.60m、幅30cm前後、深さ15cm前後を計る。断面は、ほぼ矩形であるが北側はU字形を呈する。南部で82号溝跡に連続する。方位は、N-22°-Wを示す。覆土は、



第32図 A区溝跡断面図(70号~94号溝跡)

多量の酸化鉄を含む灰色粘土層であり、82号溝跡の最下層（第3層）と同一である。出土していない。

**84号溝跡** J-4からJ-5グリッドに亘って、河川跡の上面に位置している。西側が削平され、全体は知り得ない。中央部で分岐し、二股になっている。現段階の長さ6.50m、幅40cm前後、深さは南側が深く12cmを計り、北側に向けて徐々に浅くなる。覆土は、多量のオリブ黒色粘土ブロックを含む黄色粘土層であり、70号溝跡覆土に近似している。実測可能な遺物は、出土していない。

**85号溝跡** J-4グリッド、河川跡の上面に位置している。西側が72号溝跡に切断され、東側が削平されているため、全体は知り得ない。現段階の長さ1.52m、幅30cm前後、深さは12cm前後を計る。方位は、N-80°-Wを示す。覆土は、酸化鉄を含むオリブ褐色シルト層である。実測可能な遺物は、出土していない。

**86号溝跡** J-4からJ-5グリッドに亘って、河川跡の上面に位置している。東側が72号溝跡に切断されているため、全体は知り得ない。現段階の長さ8.80m、幅40cm前後、深さ10cm前後を計る。やや蛇行するが、全体の方位は、東西方向のN-90°-Wを示す。覆土は、酸化鉄を含む灰褐色シルト層である。実測可能な遺物は、出土していない。

**87号溝跡** K-4からJ-4・J-5グリッドに亘って、河川跡の上面に位置している。東側が72号溝跡に切断され、さらにその東側が削平されているため、全体は知り得ない。現段階の長さ10.50m、幅は、中央部で75cm、その他は55cm前後、深さ8cm前後を計る。中央部でやや屈曲するが、全体の方位は、ほぼ東西方向のN-83°-Wを示す。覆土は、多量のオリブ黒色粘土ブロック及び酸化鉄を含む黄褐色シルト層である。実測可能な遺物は、出土していない。

**88号溝跡** J-6からK-5・6、L-5グリッドに亘って、河川跡の上面に位置している。中央部でやや屈曲しているが、総延長15.55m、幅40cm前後を計る。断面は、ほぼU字形を呈し、深さ15cm前後を計る。全体の方位は、N-9°-Wを示す。覆土は、酸化鉄を含む灰黄褐色シルト層である。実測可能な遺物は、出土していない。

**89号溝跡** L-5からL-6グリッドに亘って、河川跡の上面に位置している。西端でやや南に屈曲するものの、ほぼ直線を成す。西端が削平されており、全体は知り得ないが、現段階の長さ12.70m、幅35cm前後、深さ10cm前後を計る。直線部分の方位は、N-81°-Wを示す。覆土は、酸化鉄を含む灰黄褐色シルト層である。実測可能な遺物は、出土していない。

**90号溝跡** L-5からL-6グリッドに亘って、河川跡の上面に位置している。北に脹らむ弓状を呈し、西側で91号溝跡と接合している。長さ12.20m、幅35cm前後、深さ12cm前後を計る。覆土は、多量の酸化鉄を含む灰黄褐色シルト層である。実測可能な遺物は、出土していない。

**91号溝跡** L-5からL-6グリッドに亘って、河川跡の上面に位置している。ほぼ直線を呈し、西端で90号溝跡と接合している。長さ6.60m、幅30cm前後、深さ15cm前後を計る。覆土は、多量の酸化鉄を含む灰黄褐色シルト層であり、89号溝跡とほぼ同一であるが、やや粘

土質が強い。実測可能な遺物は、出土していない。

**92号溝跡** L-5からL-6グリッドに亘って、河川跡の上面に位置している。西端でやや南に屈曲するものの、ほぼ直線を成す。西端が削平されており、全体は知り得ないが、現段階の長さ9.00m、幅25cm前後、深さ10cm前後を計る。また東側では、一旦終了した溝が、1.10mの間を開けて、連続している。連続部分の長さは、1.75mを計る。直線部分の方位は、 $N-80^{\circ}-W$ を示す。覆土は、酸化鉄を含む灰黄褐色シルト層である。

**93号溝跡** L-5からL-6グリッドに亘って、河川跡の上面に位置している。ほぼ直線を成す。西端が削平されており、全体は知り得ないが、現段階の長さ10.70m、幅70cm前後を計る。断面は矩形を呈し、深さ35cm前後を計る。方位は、ほぼ東西方向の $N-85^{\circ}-W$ を示す。覆土は、酸化鉄及びマンガン粒を含む灰黄褐色シルト層である。実測可能な遺物は、出土していない。

**94号溝跡** M-5からM-6グリッドに亘って、河川跡の上面に位置している。ほぼ直線を成す。東端が削平されており、全体は知り得ないが、現段階の長さ4.60m、幅95~105cm前後、深さ8cm前後を計る。方位は、ほぼ東西方向の $N-76^{\circ}-W$ を示す。覆土は、酸化鉄を含む灰褐色シルト層である。遺物は、土師器高杯（第37図94-1）が出土している。

**河川跡** A区G-4グリッド南西部分から発する河川跡の東岸は、4グリッドをH・Iと南東行（第31図）し、J-4ポイントと接する位置からは、徐々に方位を南西から南寄りに変化させとする（第33図）とともに、幅を狭める。一方、B区・F-7グリッド、8ライン寄りから確認された河川（第34図）跡の西岸は、7グリッドをG・H・Iと南東行し、B区南端では7ライン（I-7グリッド）（第35図）と接するようになる。一旦、B区未調査区を経るが、A区・K-6グリッド中央部付近で再確認され、L-5、M-5グリッド中央付近へと連続する。ここまでの西岸ラインは、ほぼ直線を呈し、 $N-20^{\circ}-W$ の方位を示す。また幅は、20m前後を計り、深さは3m以上（掘り込み面からの深さで、これより下位は未確認）となる。その後、N-5及びO-5両ポイントの中間付近で、方位を $N-8^{\circ}-W$ と変えるものの、さらに南行する本流と、 $N-130^{\circ}-W$ の方位を示し、B区を目指し南西行する支流とに分岐している。この付近の本流部分の幅は、13~14mとなる。

以後、本流西岸は、ほぼ直線を成してZ-3・4ポイントの中間付近へと南行し、ここからAA-3・4グリッドに広がる入り江へと連続していく。東岸は、13~14mの幅を保ってW-2ポイント付近に達している。河川跡本流と住居跡の重複関係は、B区においては、39号・40号・41号各住居跡の一部を切断し、42号・43号・44号各住居跡の上面を削平している。A区内にあつては、6号・9号・11号・86号各住居跡が河川跡埋没後の住居として構築されている。

本流は、少なくとも5回の変遷が認められる。第1次埋没後、西岸側では34・19・21・22各層（第31図P-P'ライン・以下同じ）と、これらの上位に位置する、16・20層との間に酸化鉄層（本来の帰属は上位層）が入り、これを分断している。東岸側でも同様な状況が、82層と上面の79・80・81各層の間で観察される。これらを結んだライン（①ライ

ン) が、第1次埋没後、最初の変遷ラインである。以後、同様な状況が②・③・④・⑤ラインと続く。この間、埋没土層数は、西岸側で多く、東岸側では少ない。そのため、新たな流路の中心は、徐々に東へ移動する結果となっている。さらに、溝幅自体も徐々に狭まり、第6期の流路(%ライン)幅は、当初の半分の10m前後、深さは2m前後(掘り込み面からの深さ)となる。また、西岸側の\$と%ラインの間の1・2・3層中には、特に多量の酸化鉄が層を成し、ここに、もう一面の変遷ラインが存在する可能性がある。しかしこれに対応する東岸側のラインは確認されず、66層上位の%ラインが、これを兼ねている可能性もある。

こうした中、第5期の流路(\$ライン上)覆土、特に48・49・51層の覆土中には、自然木の幹、さらには葉や枝等が多量に含まれている。また、土器等も、各期の覆土中から出土している。

初源・第1期及び第2期の流路覆土中：土師器甕類(12・13・17・18・19・20・23)

第3期の流路覆土中：土師器甕類(15・27)、甌(28)

第4期の流路覆土中：土師器杯(4)

第5期の流路覆土中：土師器杯(2)、甕類(10・11)

第6期の流路覆土中：土師器杯(1)、高杯(5)、甕類(14・21・22・26)

また、本河川跡の基盤層を成している土層のうち、87層・青灰色シルト質粘土層を掘り込んで、炭化物を含む青灰色粘土層・89・90・91・92各層が堆積している。このうち特に92層からは、層状の炭化物及び、弥生式土器(30)が出土している。底面は、やや安定を欠いているが、遺構の存在が想起される。

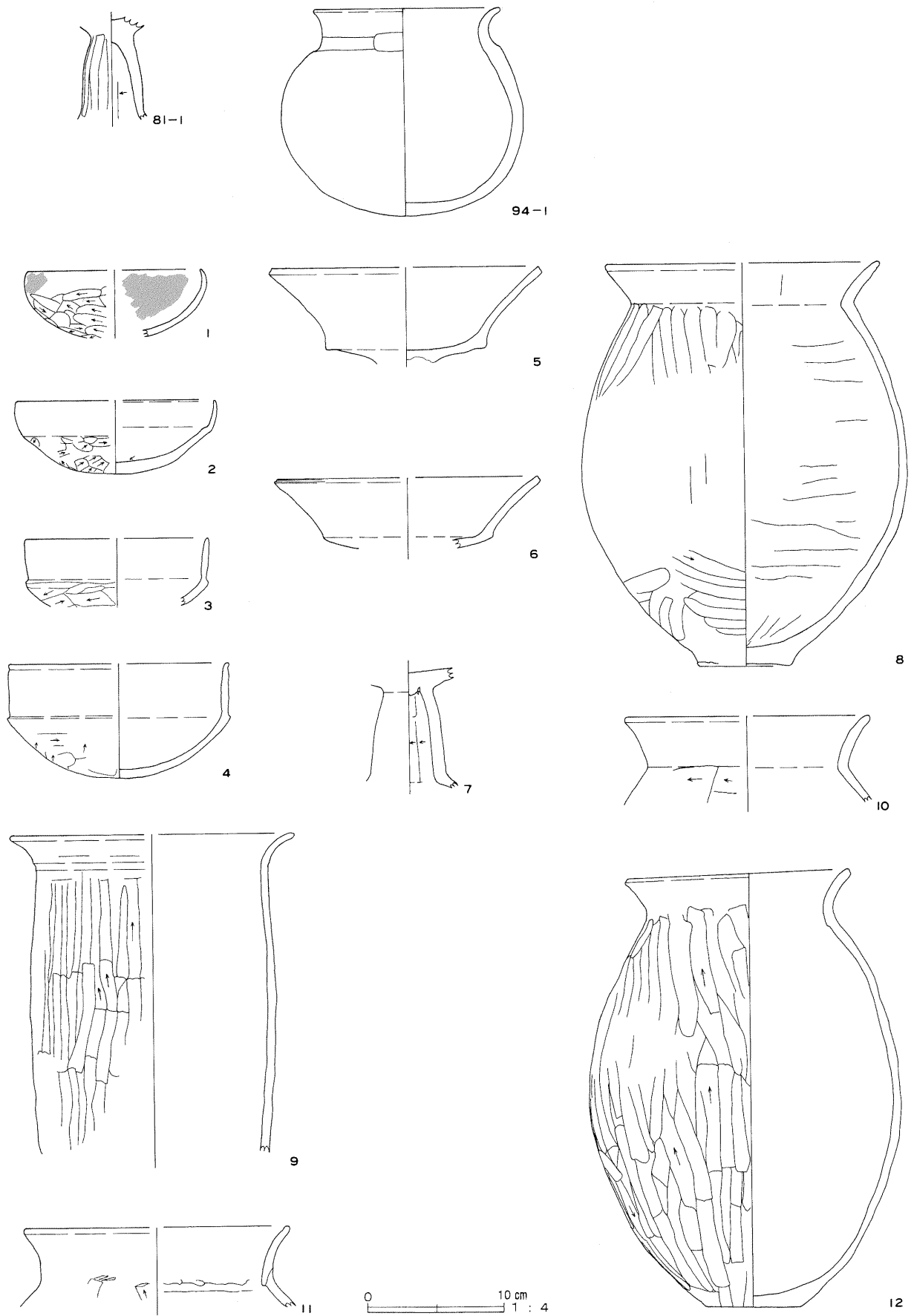
分岐した支流は、P-P'ライン(第31図)で検出されている35層・灰白色シルト層が、Q-Q'ライン(第31図)で検出されている10層、R-R'ライン(第31図)で検出されている9層へと連続し、分岐した後に多量の炭化物・酸化鉄・マンガン粒を含むに至ったと思われるなど、覆土及び底面レベルから、第6期の流路であると判断された。支流の、本流西岸と連続する北岸のラインは、O-6、P-7・8グリッドと南西行し、B区南側調査区へと連続していく。対岸は、P-6からQ-7グリッドで検出されており、幅は、7m前後を計る。A区97号・98号・99号・100号各住居跡の上面を削平している。

第13表 A区81号溝跡出土遺物観察表(第33図)

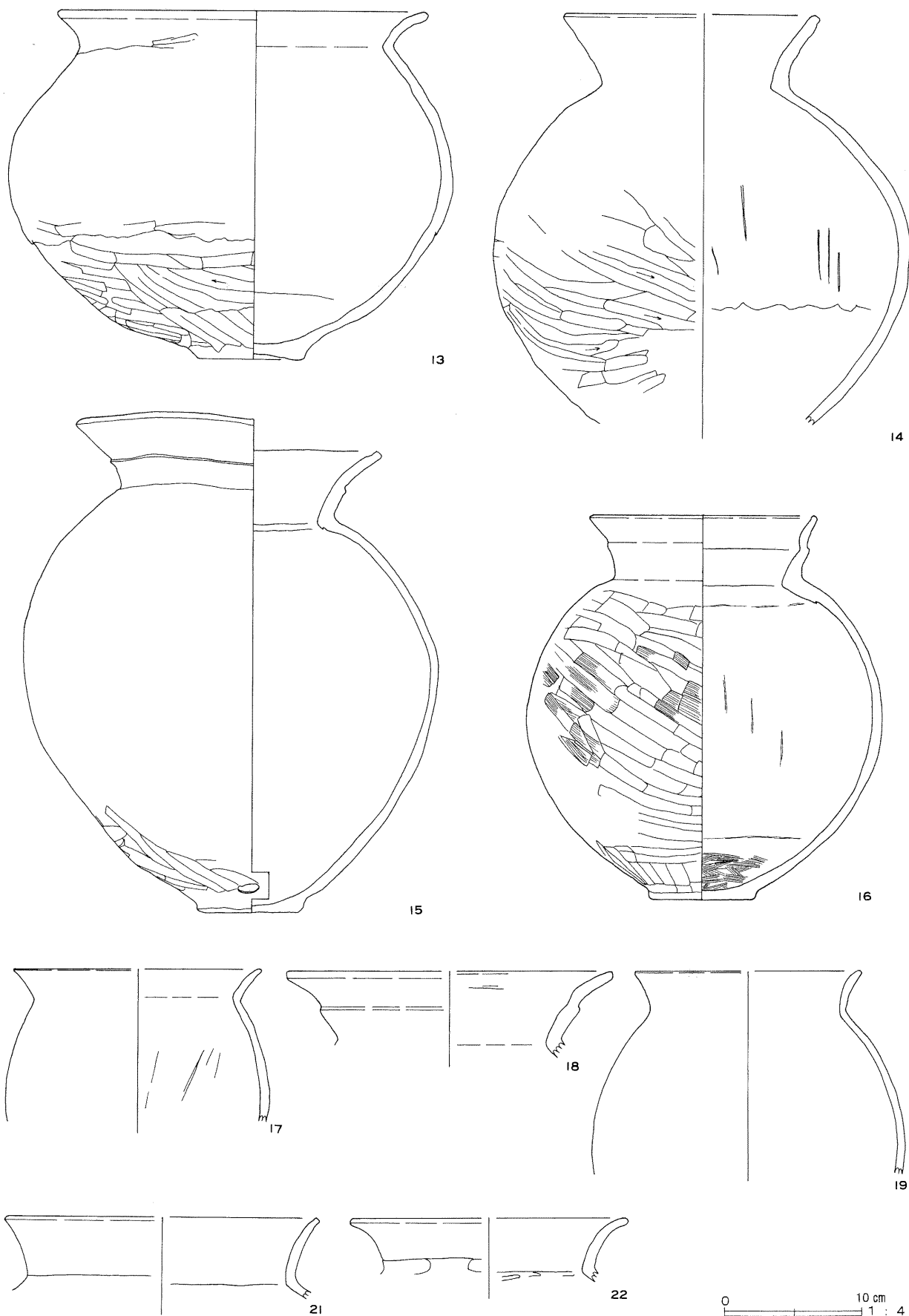
No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・高杯	—	—	—	②③①④	②	橙	脚部のみ(裾欠)	外面縦のケズリの後横のナデ。内面横の連続ケズリ、天井部ナデ。

第14表 A区94号溝跡出土遺物観察表(第33図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・壺	13.6	15.3	—	①②③④⑥	②	橙	一部欠	表面磨滅。頸部指頭による押圧。

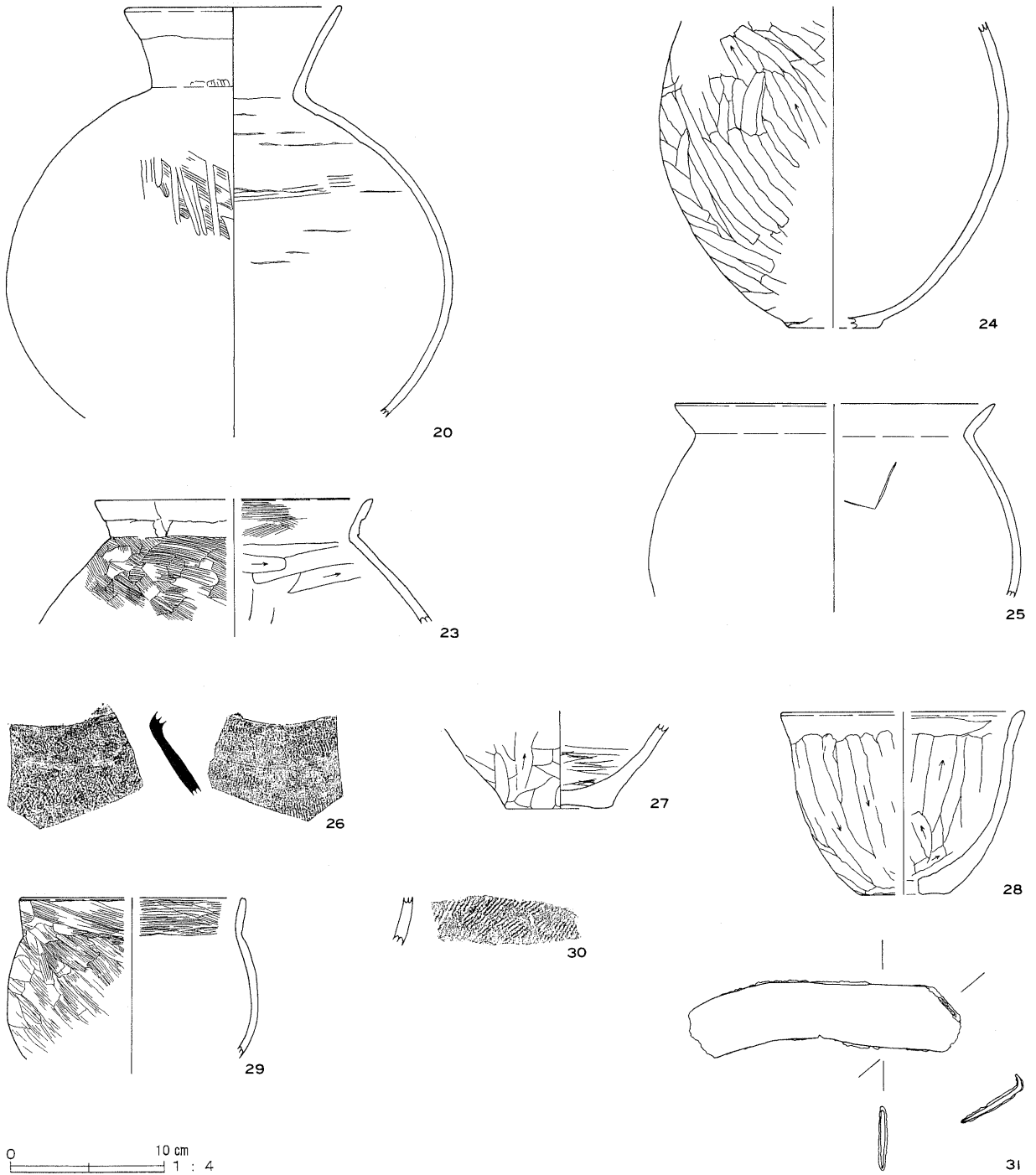


第33図 A区溝跡・河川跡出土遺物(1)



第34图 A区河川跡出土遺物(2)





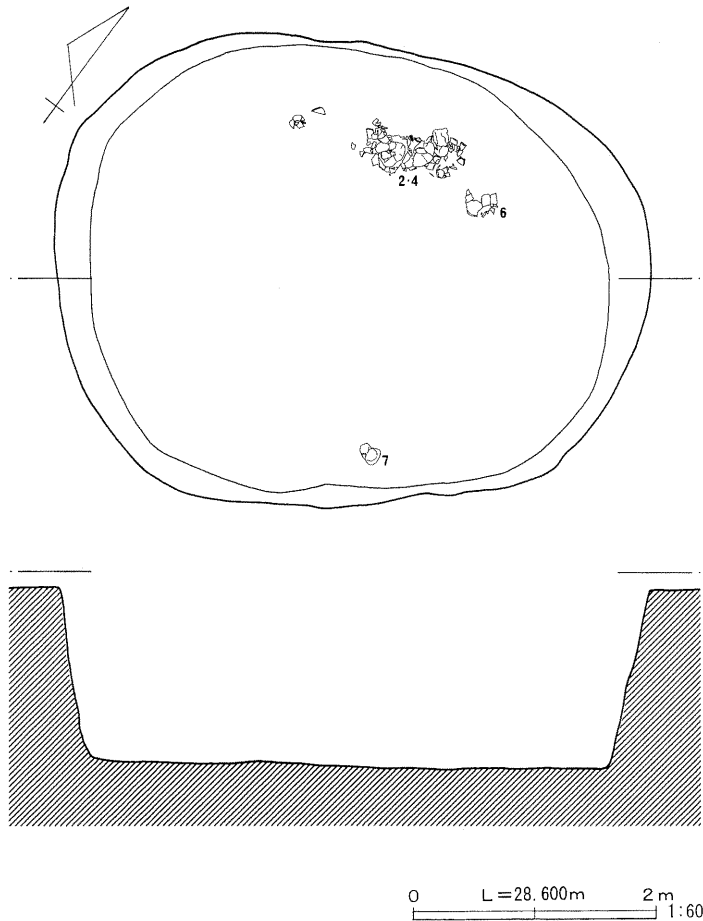
第35図 A区河川跡出土遺物(3)

第15表 A区河川跡出土遺物観察表（第33・34・35図）

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・杯	(12.6)	—	—	①③②④⑥	②	にぶい褐	1/3	体部外面ケズリの後一部ナデ。内外面朱塗。表面剝離した部分多い。
2	土師器・杯	(14.5)	5.4	—	①③②⑥	②	にぶい赤褐	5/6	内面及び口縁部外面吸炭。体部外面中央ナデが加わる。体部内面底面付近ケズリ様ナデ。
3	土師器・杯	(13.2)	—	—	②③①④⑥	①	にぶい橙	1/6	
4	土師器・杯	(15.9)	8.4	—	①②③⑥	②	橙	2/5	体部外面ほぼ全面にナデが加わる。
5	土師器・高杯	(19.4)	—	—	①②③	②	赤	杯部1/3	外面回転のナデ、一部炭化物付着。内面ナデ、全面炭化物付着。二次加熱。
6	土師器・高杯	(18.9)	—	—	②①④	①	橙	杯部2/5	口縁部回転水拭き。体部内外面水拭き。内外面1/2炭化物付着。
7	土師器・高杯	—	—	—	②①④	②	橙	脚部のみ(裾欠)	外面ナデ。内面天井部ヘラ先によるナデツケ。以下横の連続ケズリ。
8	土師器・甕	(20.1)	19.6	6.3	②①③⑥	②	灰白	1/2	外面口縁部横ナデ、胴部縦のケズリ、中央及び底部周辺ナデを加える、煤付着。内面口縁部ヘラナデ、胴部ナデ、吸炭。
9	土師器・甕	(20.6)	—	—	⑥②③①	②	にぶい橙	中位以上1/3	口縁部横ナデ。胴部外面縦のケズリ後、括れ部3段の横ナデ。内面ナデ、吸炭。二次加熱。
10	土師器・甕	(17.7)	—	—	①⑥②③	②	橙	口縁部1/3	口縁部横ナデ。胴部外面横のケズリ、内面ナデ、吸炭。
11	土師器・甕	(19.4)	—	—	⑥①③	②	橙	口縁部1/7	口縁部横ナデ。胴部外面縦のケズリ、内面ナデ、接合痕残す。内外面吸炭、一部赤色化。二次加熱。
12	土師器・甕	16.5	32.0	6.8	⑥③①②④	②	にぶい橙	一部欠	口縁部横ナデ。胴部外面縦のケズリ、中位以下煤付着。内面ヘラナデ。底面ナデ。二次加熱。
13	土師器・甕	27.0	25.7	7.7	②①④	②	にぶい橙	一部欠	口縁部横ナデ。胴部外面中位以上ナデ、以下横のケズリ(粒子の移動は少ない)、全面煤付着、赤色化した部分多い、下位接合部剥離。内面ナデ。底部ナデ、上げ底。二次加熱。
14	土師器・甕	(18.8)	—	—	⑥①②③④	②	にぶい赤褐	底部欠	口縁部横のナデ。胴部外面上位ナデ、中位以下斜～横のケズリ、底部付近ナデ。内面ナデ、中下位の接合痕残す。
15	土師器・甕	22.6	36.7	7.8	⑥②①④③	②	橙	胴部1/2欠	全体に歪みが激しい。口縁部横ナデ、2段、外面に段を拵つ、胴部外面下位のみケズリ、他はナデ、内面ナデ。底部よりわずかに上位に僅1°の孔が穿たれている。(外面より)
16	土師器・甕	(16.8)	28.2	7.6	②①③④	②	橙	口縁部一部欠	口縁部横ナデ(2段)接を作り出す。胴部外面斜、底部周辺縦の刷毛目。磨滅した部分が多い。内面ヘラナデ、底面刷毛目。
17	土師器・甕	(18.0)	—	—	⑥①②③④	②	橙	上位1/4	
18	土師器・壺	(23.8)	—	—	①②③④⑥	②	黄橙	口縁部1/6	
19	土師器・甕	(16.5)	—	—	③⑥②①④	②	橙	上位1/2	口縁部横ナデ。胴部外面上位ナデ、中位スリップ状ナデ、煤付着。内面木口状工具による横のナデ、吸炭。二次加熱。
20	土師器・甕	14.1	—	—	⑥①②④③	②	橙	胴部1/3	外面剝離した部分が多い。口縁部ナデ、下端の一部に縦の刷毛目を残す。胴部外面、斜の刷毛目の後縦を主体としたミガキが加わる。内面ナデ、特に上位に輪痕を残す。
21	土師器・甕	(23.0)	—	—	⑥④①②	②	褐	口縁部1/5	口縁部横ナデ。胴部外面ナデ、内面木口状工具による横のナデ。吸炭した部分が多い。
22	土師器・甕	(24.0)	—	—	⑥①④③②	②	明赤褐	口縁部1/5	口縁部横ナデ。頸部指頭による回転ナデ。胴部内面指頭によるナデツケ。
23	土師器・甕	(18.0)	—	—	①②⑥③	②	明赤褐	上位1/6	口縁部貼り付け後ナデ、内面横の刷毛目。胴部外面横～斜の刷毛目、内面肩部横のケズリ、上位横のヘラナデ。吸炭。二次加熱。
24	土師器・甕	—	—	(5.9)	⑥①	②	浅黄橙	下位1/2	外面縦のケズリ、煤付着。内面横のナデ、吸炭。二次加熱。
25	土師器・甕	(20.6)	—	—	⑥③①④②	②	橙	上位1/3	外面表面磨滅。内面口縁横ナデ、胴部ヘラナデ。
26	須恵器・甕	—	—	—	①②	②	明紫灰	—	
27	土師器・甕	—	—	6.9	⑥④②①	②	にぶい黄橙	底部のみ	外面縦のケズリ、一部ナデが加わる、煤付着。内面ナデ、底面ヘラ先によるナデ、吸炭。二次加熱。
28	土師器・甕	(15.7)	12.0	(5.3)	⑥①③	②	明褐灰	1/2	口縁部横のナデ、他は全面ケズリ。一部吸炭。
29	土師器・甕	(14.7)	—	—	①③⑥	②	浅黄橙	上位1/2	外面斜の刷毛目、胴部の一部にミガキ様ナデが加わる。内面口縁部横の刷毛目、胴部ナデ。内外面一部吸炭。
30	弥生土器	—	—	—	⑥①④	②	褐灰	—	
31	鉄鎌	縦 4.1 横 17.5 厚さ 0.6							

## 5 不明遺構

A区における不明遺構は、平成14年度・第5次調査で、4号から6号までの3基が調査されている。4号・5号が第一確認面、6号が第一確認面下位からの検出である。



第36図 A区4号不明遺構

## 4号不明遺構 (第36図) (第87図)

J-5グリッド、河川跡の上面に位置している。

上面に89号～93溝が位置する。

隅円長方形を呈し、 $4.92 \times 3.45 \sim 3.95\text{m}$ を計る。

土坑4タイプの亜系かと思われる。しかし、最下層に灰青色シルト層、中位に黄褐色シルト層、上位に灰黄褐色シルト層が堆積し、さらに上位の灰黄褐色シルト層は、炭化物層によって3層に分析されていることから、土坑4タイプとは異なり、不明遺構としたものである。

遺物は、最上位の炭化物層上面には、土師器甕(2・3・4)、壺(5)、埴(6)が集中して出土している。土師器埴(7)は、最下層・灰青色シルト層上面からの出土である。また、土師器高杯(1)、土師器杯(8)、土師器甕(9)は、本遺構検出時に出土したものである。

第16表 A区4号不明遺構出土遺物観察表 (第36図)

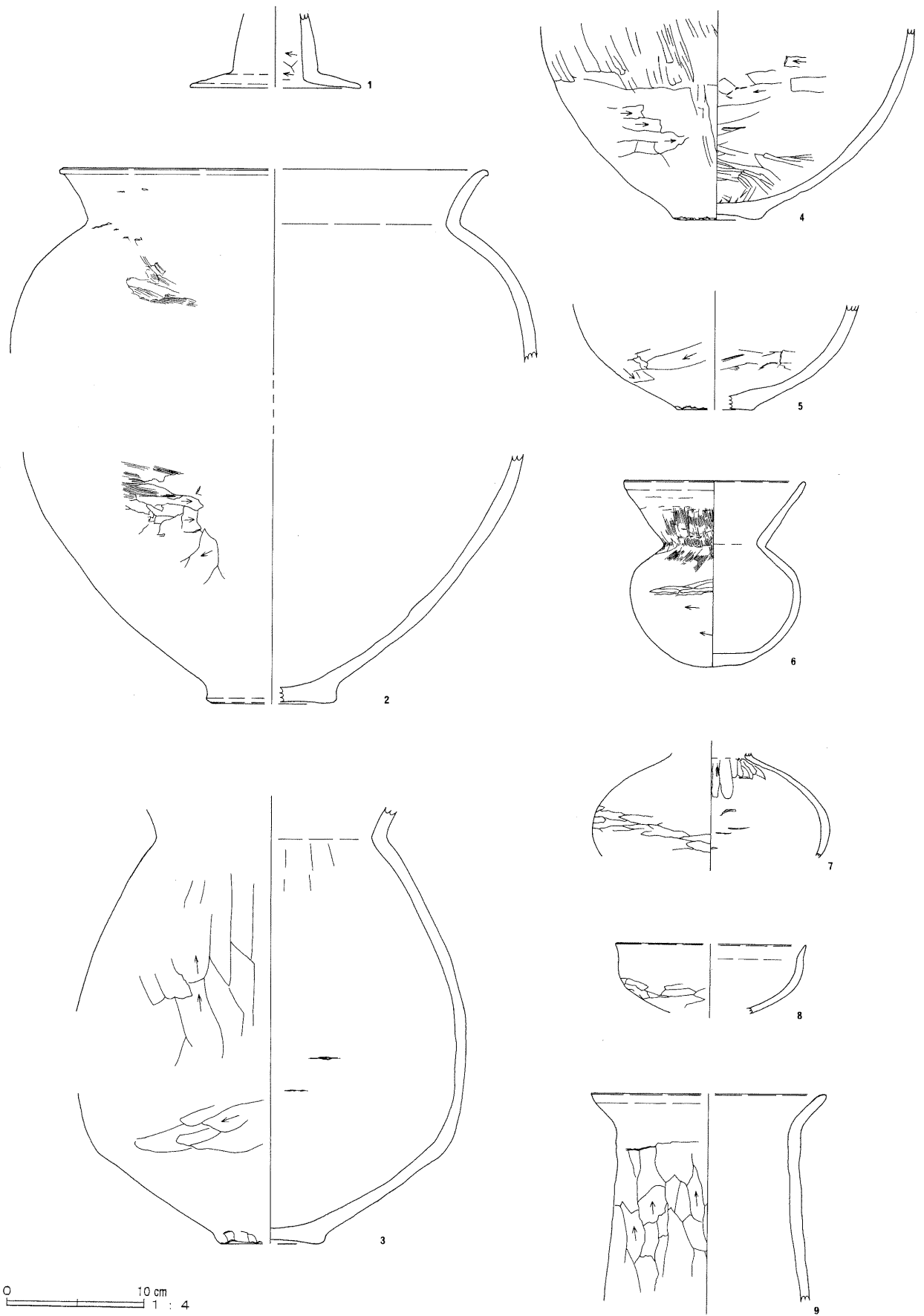
No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・高杯	—	—	(12.5)	③①②④	②	橙	脚部のみ	外表面磨滅した部分多い。内面一部吸炭。二次加熱。
2	土師器・甕	(30.8)	(39.4)	(7.8)	⑥①④	②	赤褐	中央部欠1/2	全面吸炭。外面刷毛目の後全面にナデ。底部付近内外面剥離。
3	土師器・甕	—	—	(7.0)	①②⑥④	②	橙	1/3	胴部外面縦のケズリ、下位張り出し部横のケズリ、底部ナデ。内面上位横のナデ、中位以下縦のナデ。内面表面剥離した部分多い。
4	土師器・甕	—	—	5.7	⑥①④③	②	橙	下半1/2	内面接合部横のケズリ、底面横のミガキ。外面底部付のみ横のケズリを残す。中位は縦のミガキ、底部はナデを加える。煤付着。二次加熱。
5	土師器・甕	—	—	(5.5)	⑥①④	②	明赤褐	下位1/5	外面煤付着。二次加熱。
6	土師器・埴	13.2	13.7	—	①③④⑥	②	明赤褐	一部欠	口縁部～肩縦の刷毛目の後横のナデ。口唇部ヨコナデ。胴部外面中位横のミガキ、下位～底面横のケズリの後ナデ。内面横のナデ。
7	土師器・埴	—	—	—	①④⑥③	②	明赤褐	胴上位1/4	外面肩部縦のナデ。内面指頭による縦のナデ。中位横のミガキ。下位横のナデ。
8	土師器・杯	(13.8)	—	—	①④	②	橙	1/5	内外面吸炭、炭化物付着。体部外面横のケズリの後ナデ。
9	土師器・甕	(17.1)	—	—	⑥①③	②	明褐灰	上位1/5	全面吸炭。口縁部横ナデ。胴部外面縦のケズリ、内面縦のナデ。

5号不明遺構 L-5からM-5グリッドに亘って、河川跡の上面に位置している。

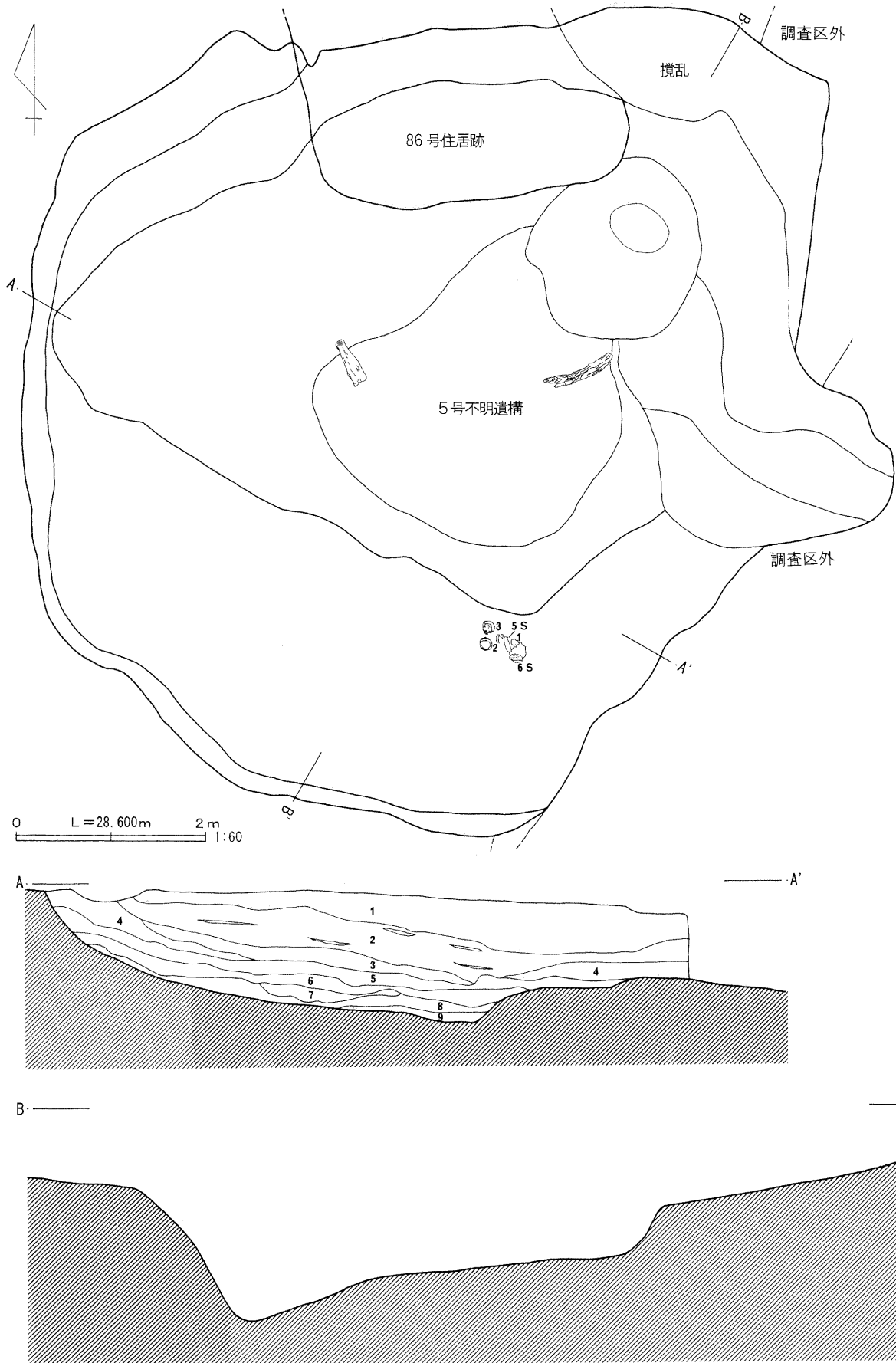
(第38図) 上面に89号～93号溝が位置する。北東隅は攪乱坑に、北部は86号住居跡に切断され

(第39図) ている。また東部は、調査区外に及んでいる。

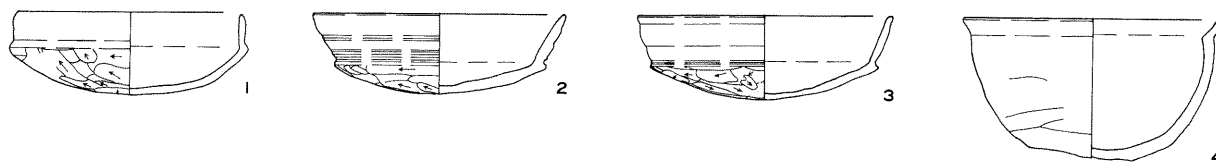
このような状況であり、上端ラインも曲折するため、規模・形態共に不明確ではあるが、上径約9mで、ほぼ円形を呈すると思われる。



第37图 A区4号不明遺構出土遺物



第38図 A区5号不明遺構



第39図 A区5号不明遺構出土遺物

第17表 A区5号不明遺構出土遺物観察表 (第39図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・杯	12.0	4.5	—	⑥①④③	②	にぶい褐	一部欠	全面吸炭(黒色処理)。
2	土師器・杯	13.7	4.4	—	⑥④①③②	②	橙	口縁部一部欠	黒色処理。長面剥離した部分多い。
3	土師器・杯	13.8	4.6	—	④③①②	②	赤灰	完形	黒色処理。表面剥離し、ザラつく。
4	土師器・	13.8	7.7	5.5	③①⑥④	②	赤	?	内外面表面磨滅。内面上位輪上に吸炭。二次加熱。
5	長円磔	"長さ 20.2 幅 8.1 厚さ 6.9 重さ 1,430g"						—	
6	長円磔	長さ 14.2 幅 9.4 厚さ 6.5 重さ 960g						—	
参	粘土塊	—	—	—	—	—	—	—	

南部は、30cm程掘り窪められた後、幅2.70mほどの、緩傾斜を成す平坦面をもつ。中央付近では、さらに60cm程掘り窪められ、再び幅2.70mほどの平坦面を成している。北東隅寄りでは、下段の平坦面からさらに一段掘り込まれ、最深部では、確認面から2.05mの深さをもつこととなる。最深部からは、溝が南東部に向けて掘られている。溝の底面幅は、0.3m~1.1mと安定せず、蛇行もしている。

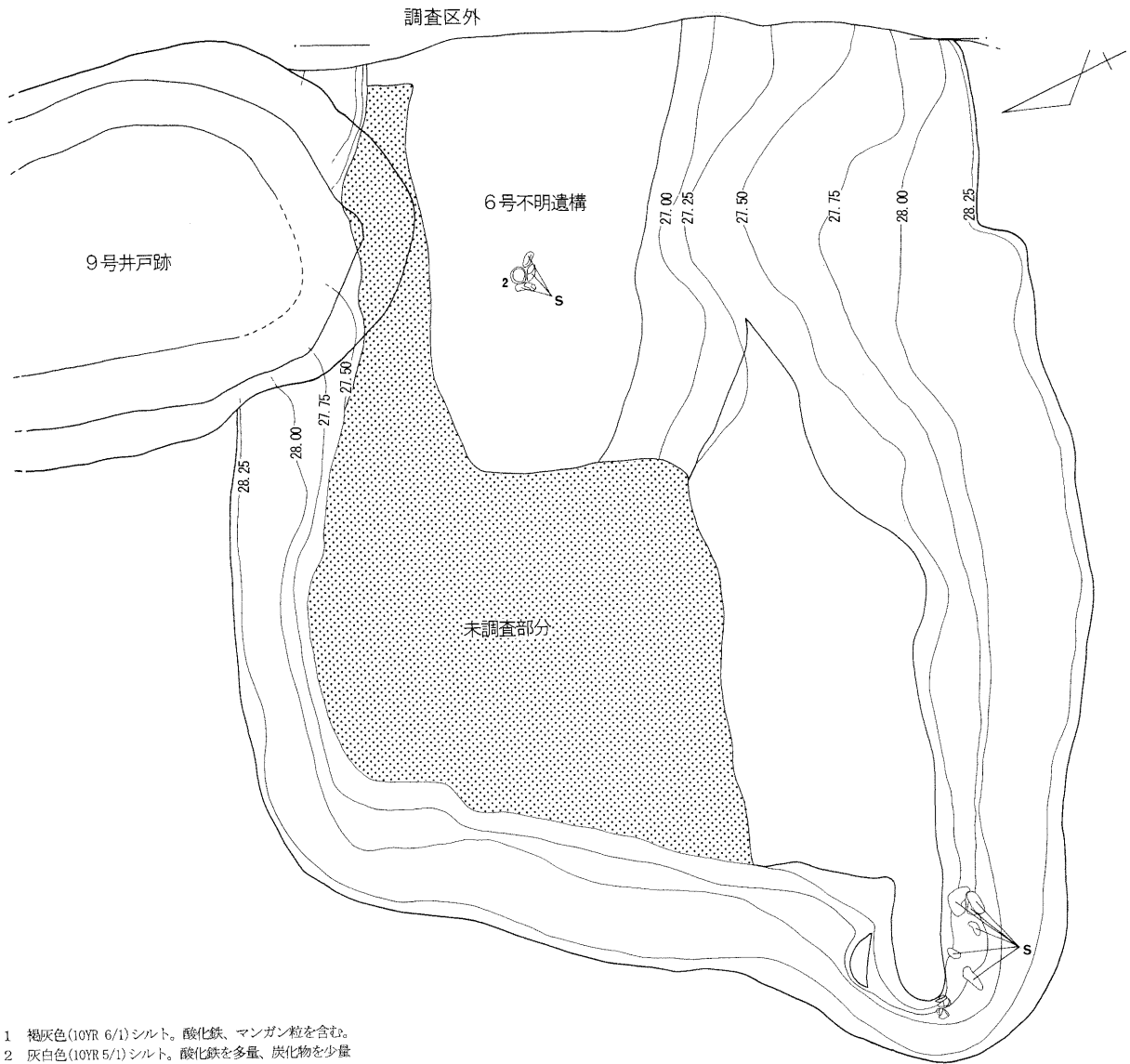
覆土は、上位から、極多量の酸化鉄・マンガン粒を含むにぶい黄橙色シルト(第1層)、部分的に黄褐色砂質シルトを層状に含む明黄褐色砂質シルト(第2層)、やや多量のマンガン粒を含む明黄褐色シルト(第3層)、わずかなマンガン粒を含むにぶい黄褐色シルト(第4層)、多量のマンガン粒を含む褐色シルト(第5層)、自然木の幹・枝等を含み、粘土質とシルト質が混在するにぶい黄橙色粘土質シルト(第6層)、多量の酸化鉄、少量の炭化物を含む浅黄色シルト(第7層)、多量の酸化鉄・マンガン粒を含むにぶい黄色粘土質シルト(第8層)、わずかな炭化物及び少量の酸化鉄を含む灰白色粘土(第9層)が堆積している。このうち第8層の下位は、酸化鉄が層を成している。

遺物は、第1層中から出土している。土師器杯(1・2・3)及び磔(5・6・9)は集中して検出されている。土師器盃(4)は、やはり第1層中からの出土であるが、1点のみ離れて検出されている。

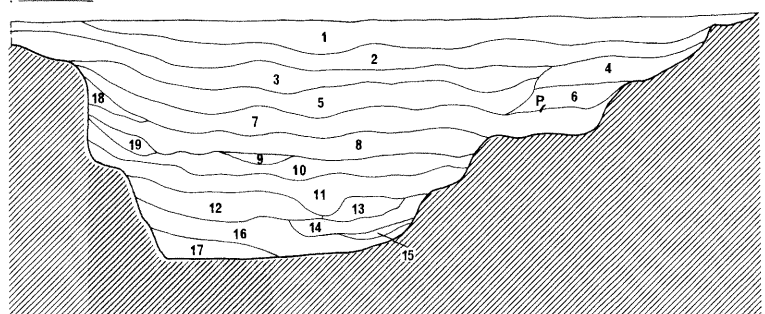
6号不明遺構 M-5からN-6グリッドに亘って位置している。

(第40図) 北東辺の一部が9号井戸跡によって切断され、南東部は調査区外に及んでいる。

(第41図) このため、形態・規模共に不明であるが、現状では幅7.30m前後、長さ9.00m+ $\alpha$ を計る。西隅が径2m前後の半円形に張り出し、長辺側はやや曲折するものの、ほぼ平行して南東方向へ移行する。北西部は、掘り込み面から階段状に2段掘り込まれ、約1m掘り込まれた後平坦面を成している。そして、再び50cm.ほど掘り込まれ、平坦な底面は北東壁側に寄った位置に作り出されている。

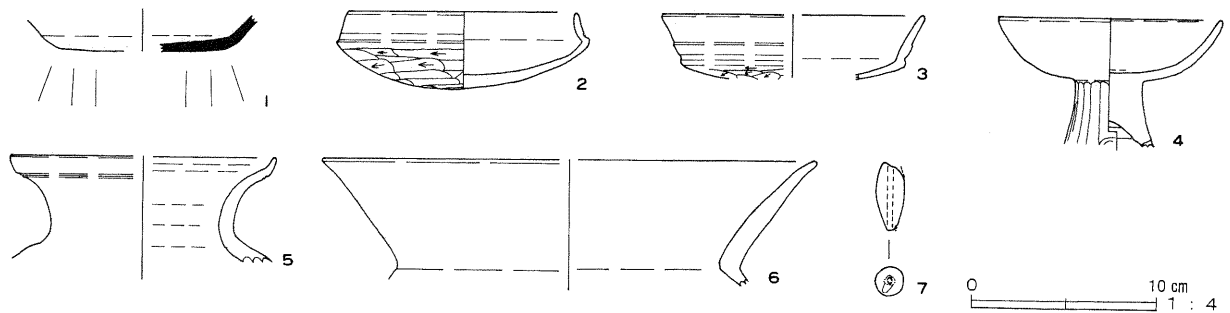


- 1 褐灰色(10YR 6/1)シルト。酸化鉄、マンガン粒を含む。
- 2 灰白色(10YR 5/1)シルト。酸化鉄を多量、炭化物を少量含む。
- 3 黄灰色(2.5Y 6/1)シルト。2層より砂を多量含む。
- 4 灰黄色(2.5Y 7/2)シルト。酸化鉄を多量含む。
- 5 暗灰黄色(2.5Y 5/2)シルト。酸化鉄を含む。
- 6 褐灰色(7.5YR 6/1)シルト。酸化鉄、マンガン粒を多量含む。
- 7 灰色(5Y 6/1)シルト。酸化鉄を多量含む。
- 8 灰黄色(2.5Y 6/2)シルト。酸化鉄をやや多量、炭化物を少量含む。
- 9 灰オリーブ色(7.5Y 6/2)シルト。酸化鉄を多量、炭化物を少量含む。
- 10 灰色(7.5Y 6/1)シルト。酸化鉄、炭化物を極少量含む。
- 11 灰オリーブ色(7.5Y 5/2)粘土。酸化鉄を多量含む。
- 12 暗青灰色(5BG 4/1)粘土。酸化鉄を多量、炭化物を少量含む。
- 13 灰オリーブ色(5Y 5/2)粘土。酸化鉄を含む。
- 14 灰黄色(2.5Y 7/2)砂。酸化鉄を顕に含む。
- 15 にぶい赤褐色(5YR 4/4)粘土。砂利層。河川石が多量混入している。
- 16 暗青灰色(10BG 4/1)粘土。酸化鉄を少量、炭化物を極少量含む。
- 17 緑灰色(10GY 5/1)粘土。酸化鉄を極少量含む。
- 18 にぶい黄色(2.5Y 6/3)シルト(粘土質)。部分的に砂質層のブロックが混入している。
- 19 浅黄色(7.5Y 7/3)シルト。極めて砂質。



0 L = 28.400m 2m 1:60

第40図 A区6号不明遺構



第41図 A区6号不明遺構出土遺物

第18表 A区6号不明遺構出土遺物観察表 (第41図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	須恵器・杯	—	—	(9.0)	①⑤	②	灰	下位2/5	
2	土師器・杯	12.5	4.2	—	④⑥②①③	②	橙	完形	全体に磨滅した部分多い。表面ザラつく。体部外面一部炭化物付着。
3	土師器・杯	(14.2)	—	—	①④	②	橙	1/3	内外面黒色処理。
4	土師器・高杯	12.0	—	—	⑥①④②③	②	橙	3/4	
5	須恵器・甕	(14.4)	—	—	⑥①④③	②	灰	口縁部1/5	
6	土師器・甕	(26.8)	—	—	⑥①③④②	②	橙	口縁部1/8	
7	土錘	長さ 3.7 最大径 1.6 孔径 2.6						一部欠	
8	磔	長さ 15.1 幅 5.8 厚さ 4.3 重さ 590g						—	
9	磔	長さ 17.7 幅 4.7 厚さ 2.6 重さ 410g						—	
10	磔	長さ 13.8 幅 5.8 厚さ 3.0 重さ 330g						—	
11	磔	長さ 13.5 幅 4.9 厚さ 2.7 重さ 270g						—	
12	磔	長さ 11.4 幅 7.2 厚さ 4.0 重さ 460g						—	
13	磔	長さ 15.9 幅 5.9 厚さ 3.6 重さ 550g						—	
14	磔	長さ 17.7 幅 7.1 厚さ 3.1 重さ 260g						—	
15	磔	長さ 15.3 幅 7.6 厚さ 4.1 重さ 710g						—	
16	磔	長さ 22.4 幅 9.5 厚さ 6.0 重さ 1,930g*						—	
17	磔	長さ 19.5 幅 10.3 厚さ 9.6 重さ 2,500g*						—	
18	磔	長さ 23.4 幅 14.2 厚さ 11.8 重さ 4,400g*						—	
19	磔	長さ 25.1 幅 17.9 厚さ 14.9 重さ 6,800g*						—	

覆土は、砂・酸化鉄を含む層が多く、中には砂利層（3・15・18各層）も含まれる。いずれも、河川跡に流入した土層と酷似している。

遺物は、半円形の張り出し部から長円磔が集中して出土しているのを始め、底面からはやはり長円磔と共に、土師器杯（2）が出土している。覆土中からは須恵器杯（1）、土師器杯（3）、土師器高杯（4）、須恵器甕（5）、土師器甕（6）、土錘（7）が出土している。いずれも器面に酸化鉄が強固に付着している。

こうしたことから、本遺構は、河川跡分岐点から西側に引き込まれた入り江となる可能性が高く、さらに土器・磔の出土状況から、西側の南部岸上では1号土器祭祀跡と同様な土器祭祀跡の存在をも想起させるものである。

その他

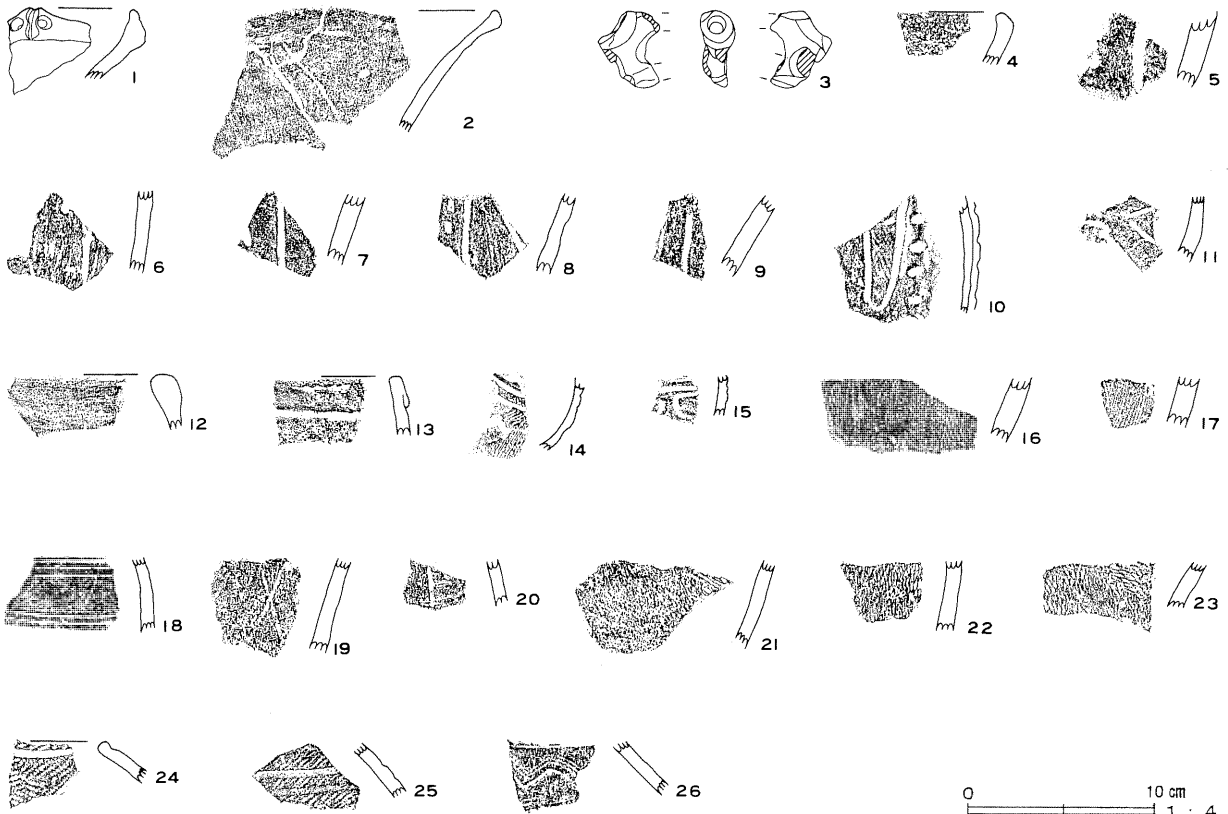
(第42図)

T・U-2グリッド付近の黒褐色シルト層及びその上層（炭化物粒を含むオリーブ黒色シルト）中に含有された遺物群である。



第19表 A区縄文・弥生土器包含層出土遺物観察表 (第42図)

No.	器種	出土部位	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	文様及び特徴
1	縄文・深鉢	口縁部	—	—	—	①④	②	橙	波状口縁突起部。
2	縄文・深鉢	口縁部	(17.8)	—	—	①④	②	にぶい黄橙	沈線文。
3	縄文・—	突起部	—	—	—	②	②	橙	口縁部突起。
4	縄文・—	口縁部	—	—	—	①	②	にぶい黄橙	
5	縄文・—	—	—	—	—	②①	②	にぶい黄橙	沈線文と刺突による列点文。
6	縄文・—	—	—	—	—	⑥①②	②	にぶい黄橙	沈線文と刺突による列点文。
7	縄文・—	—	—	—	—	①⑥	③	明黄橙	沈線文と刺突による列点文。
8	縄文・—	—	—	—	—	②	②	にぶい橙	沈線文と刺突による列点文。
9	縄文・—	—	—	—	—	①⑥	②	明赤褐	沈線文と刺突による列点文。
10	縄文・—	—	—	—	—	⑥	③	にぶい黄橙	沈線文。
11	縄文・深鉢	体部	—	—	—	⑥①②	②	橙	隆帯にそって垂下する沈線文内に縄文を充填。
12	縄文・—	口縁部	—	—	—	⑥①	②	橙	
13	縄文・—	口縁部	—	—	—	⑥	②	にぶい橙	折り返し口縁。
14	縄文・—	—	—	—	—	⑥②	②	明褐	沈線文と条線文。15と同一個体。
15	縄文・—	—	—	—	—	①②	②	明褐	沈線文。14と同一個体。
16	縄文・深鉢?	体部	—	—	—	⑥①	②	橙	交差する条線文。
17	縄文・—	—	—	—	—	①	②	にぶい黄橙	交差する条線文。
18	縄文・—	—	—	—	—	③	③	にぶい橙	平行沈線文。
19	縄文・深鉢?	体部	—	—	—	①⑥	②	橙	沈線文。
20	縄文・—	—	—	—	—	⑥	③	にぶい黄橙	沈線文内に条線文。
21	縄文・—	—	—	—	—	⑥①	②	にぶい橙	
22	縄文・—	—	—	—	—	⑥	②	にぶい橙	
23	縄文・—	—	—	—	—	⑥①	②	にぶい橙	
24	弥生・—	口縁部	—	—	—	⑥②	②	にぶい黄橙	口縁部に沈線文。全面に縄文。
25	弥生・—	—	—	—	—	①	②	にぶい橙	肩部、横位の平行沈線。
26	弥生・—	—	—	—	—	⑥②	②	にぶい黄橙	平行沈線内に4~5本1単位の櫛歯状工具による波状文。



第42図 A区遺構外出土遺物

## V B区の遺構と遺物

B区において、平成14年度・第5次調査で検出された遺構は、住居跡が42軒、畠跡が2ブロック、井戸跡21基、土坑10基、溝跡22条、河川跡1条、不明遺構1基(第43図)である。河川跡は、中央部に南北流する流路であり、東側のA区に広がる流路と合わせて、複雑な様相を生み出している。また、遺構の集中が密であり、重複が激しく、より一層様相を複雑なものとしている(第43図)。

### 1 住居跡

住居跡は、39号から80号の42軒が検出されている。A区に広がる流路の位置する東側部分の、河川西側岸に当たる部分では削除された住居跡が多く、河川の中央部に当たる東隅の部分ではまったくみられなくなる。しかし、この部分以外は密に分布し、住居跡同士の重複も激しい。こうした状況は、南北の調査区外に拡大する様相を呈している。

#### 39号住居跡 (第44図) (第45図)

H-6グリッドに位置する。第一確認面下位からの検出である。

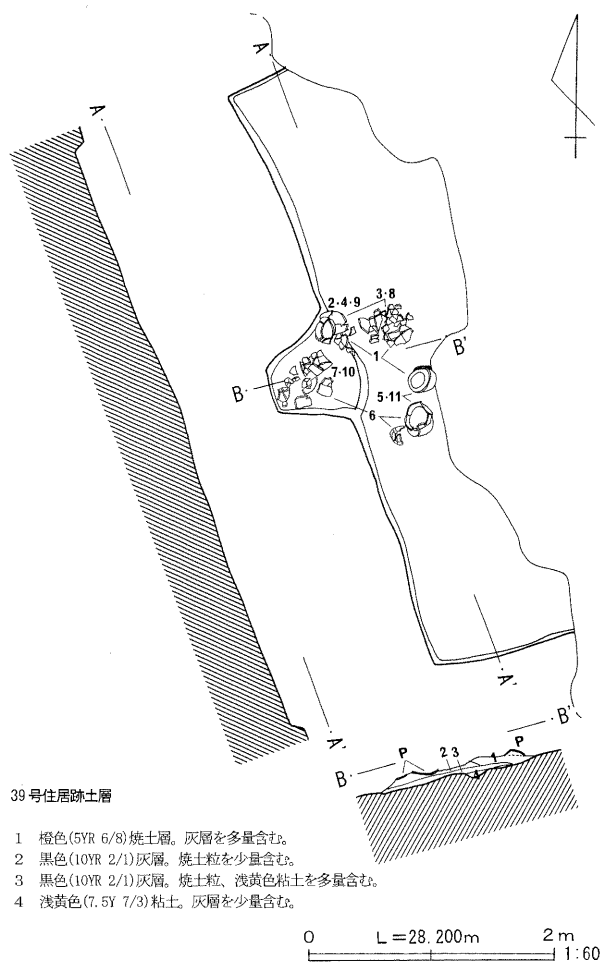
上面及び東側の大半は、A区河川跡によって削除されているが、41号住居跡を切断している。上面にはA区79号溝跡が位置している。

このため、規模・形態共に不明であるが、西辺長は5.00mを計り、北・南辺とも直交していることから、西辺長を一辺とする方形を呈するものと思われる。西辺と直交する主軸方位は、N-107°-Wを示す。

壁は、床面付近が残存するのみで、形状は不明である。壁の残存高は、わずか15cmである。

床面は、カマド前がやや盛り上がり、全体でも凹凸が多く、安定しない。ピット等は、検出されていない。

カマドは、西壁中央に設けられている。火床は竪穴内に残り、燃焼部は竪穴外に張り出す。火床は、床面をわずかに掘り窪め、竪穴ラインよりわずか手前で段を成す。ほぼ半円形を呈し、長さ60cm、壁面での幅83cmを計る。燃焼部は台形を呈し、奥行き65cm、奥面幅40cmを計る。断面は、緩いカーブ



第44図 B区39号住居跡

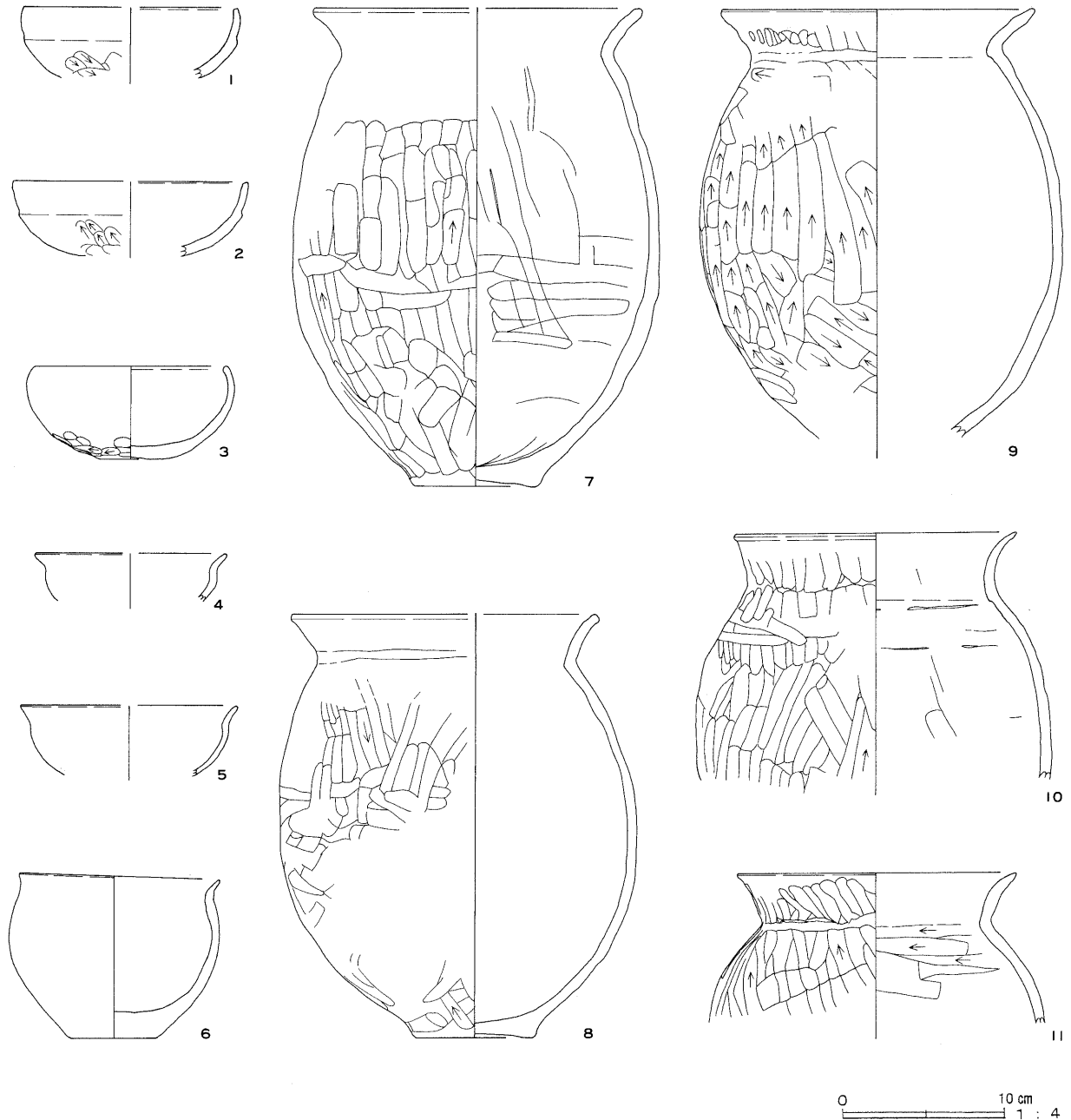


第43图 B区検出遺構配置图

を持って立ち上がる。煙道部分は検出されていない。

覆土は、炭化物を含む褐灰色シルト層である。

遺物は、カマドから集中して出土している。燃烧部内からは土師器甕（7・10）、火床  
 周囲から土師器鉢（6）、甕（8・9・11）、さらに甕類の上面に土師器杯（1～5）が  
 出土している。なお鉢（6）は、両者にまたがって破片が散っていたものである。また、甕  
 （8・9）は、カマド右袖を構成していた可能性が高い



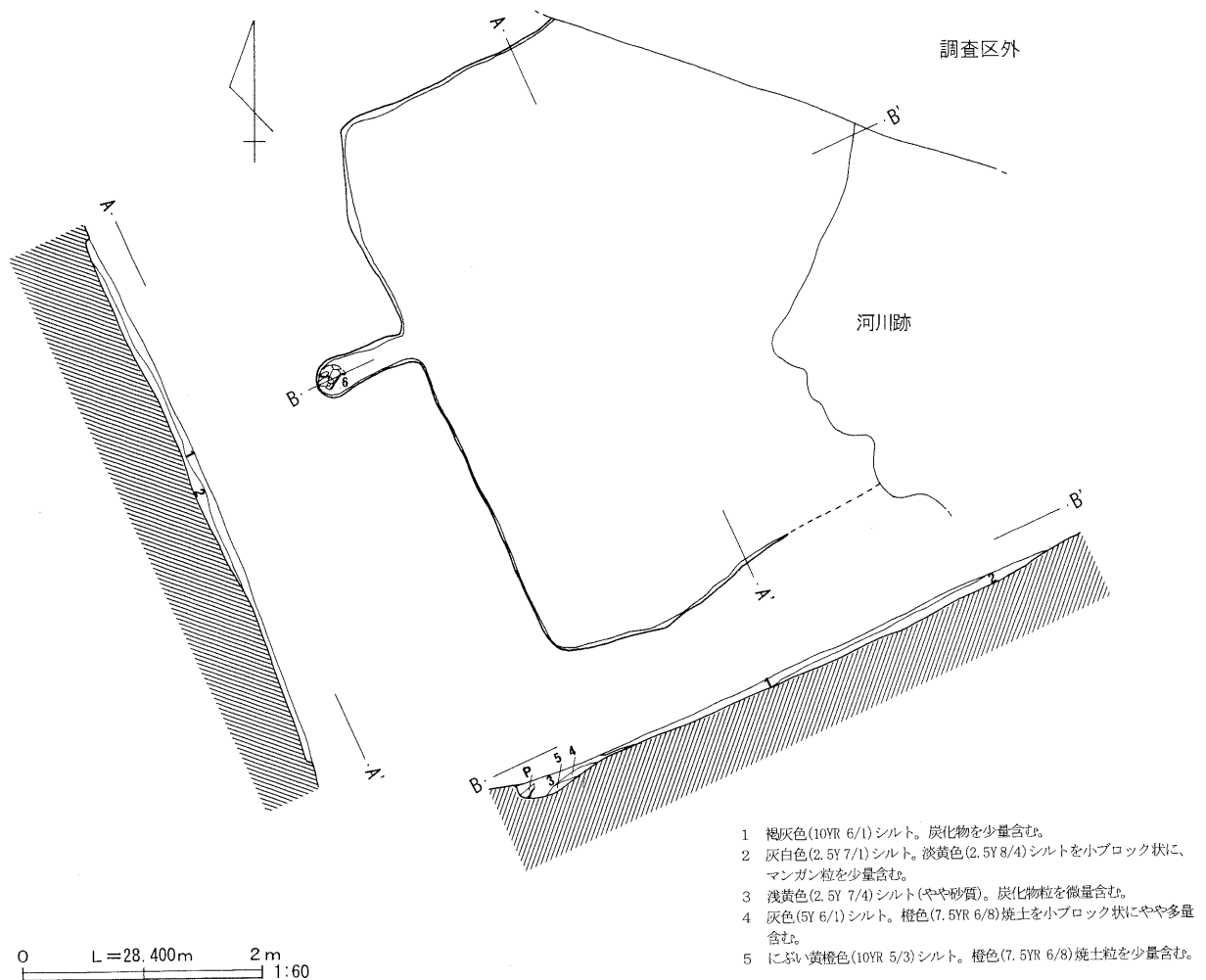
第45図 B区39号住居跡出土遺物

**40号住居跡** F-7からG-7グリッドに亘って位置し、北側は調査区外に及んでいる。第一確認面  
 (第46図) 下位からの検出である。

(第47図) 東半部分はA区河川跡によって削除されている。上面には34号・38号溝跡、60号土坑

第20表 B区39号住居跡出土遺物観察表 (第45図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・杯	(13.4)	—	—	⑥①④	②	橙	口縁部1/8	口縁部横ナデ。体部外面ケズリ、後にナデの加わる部分が多い。内面ナデ。
2	土師器・杯	(14.6)	—	—	⑥③①②	②	明赤褐	口縁部1/8	口縁部横ナデ。体部外面縦のケズリ、中央部ミガキ様ナデ。内面ナデ。
3	土師器・杯	11.9	5.9	—	⑥③①④	②	明褐	一部欠	外面下位～底面にかけては横のケズリを残すが、中位～口縁にかけてはナデが加えられる。内面ナデ。
4	土師器・杯	(12.0)	—	—	③①④	②	橙	口縁部1/8	全面ナデ。
5	土師器・杯	(13.6)	—	—	③①④②	②	橙	口縁部1/8	全面ナデ。
6	土師器・鉢	12.1	10.4	5.8	⑥③①④②	②	明赤褐	一部欠	口縁部横ナデ。胴部内外面共ナデ。内面吸炭。一部炭化物付着。二次加熱。
7	土師器・甕	(20.8)	30.0	7.7	⑥③①②④	②	明赤褐	1/2	口縁部横ナデ。胴部外面肩部以外ケズリ後ナデが加わる、肩部ナデ、底面ケズリ、全面吸炭。内面ナデ、上位～中位縦の指頭、中位横の指頭、底面へらによる放射状。二次加熱。
8	土師器・甕	(19.4)	(26.5)	7.4	⑥①③②	②	赤褐	1/3	口縁部横ナデ。胴部外面縦を主体としたケズリ、後全面にナデが加わる。煤付着。内面ナデ。二次加熱。
9	土師器・甕	19.7	—	—	⑥③①④②	②	にぶい黄橙	底部欠	口縁部横ナデ、外面下半指頭による押圧。胴部外面縦を主体としたケズリ、上下端にナデが加わる、下半赤色化。煤付着。内面横のナデ。全面吸炭。二次加熱。
10	土師器・甕	17.6	—	—	⑥③①②④	②	橙	上位のみ	口縁部横ナデ、外面下位指頭による押圧。胴部外面縦のケズリ、肩部横のケズリ様ナデが加わる。内面へらナデ、輪積み痕を残す。内外面一部吸炭。赤色化。二次加熱。
11	土師器・甕	17.3	—	—	③⑥①②④	②	明赤褐	上位のみ	外面口縁部指頭による押圧の後横のナデ、括れ部横のナデ、胴部縦のケズリ、全面赤色化。内面口縁部横のナデ、括れ～肩横のケズリ、胴部ナデ、括れ部炭化物付着。二次加熱。



第46図 B区40号住居跡

が位置している。

このため、規模・形態共に不明であるが、西辺長は4.80mを計り、北・南辺とも直交していることから、西辺長を一辺とする方形を呈するものと思われる。西辺と直交する主軸方位は、N-114°-Wを示す。

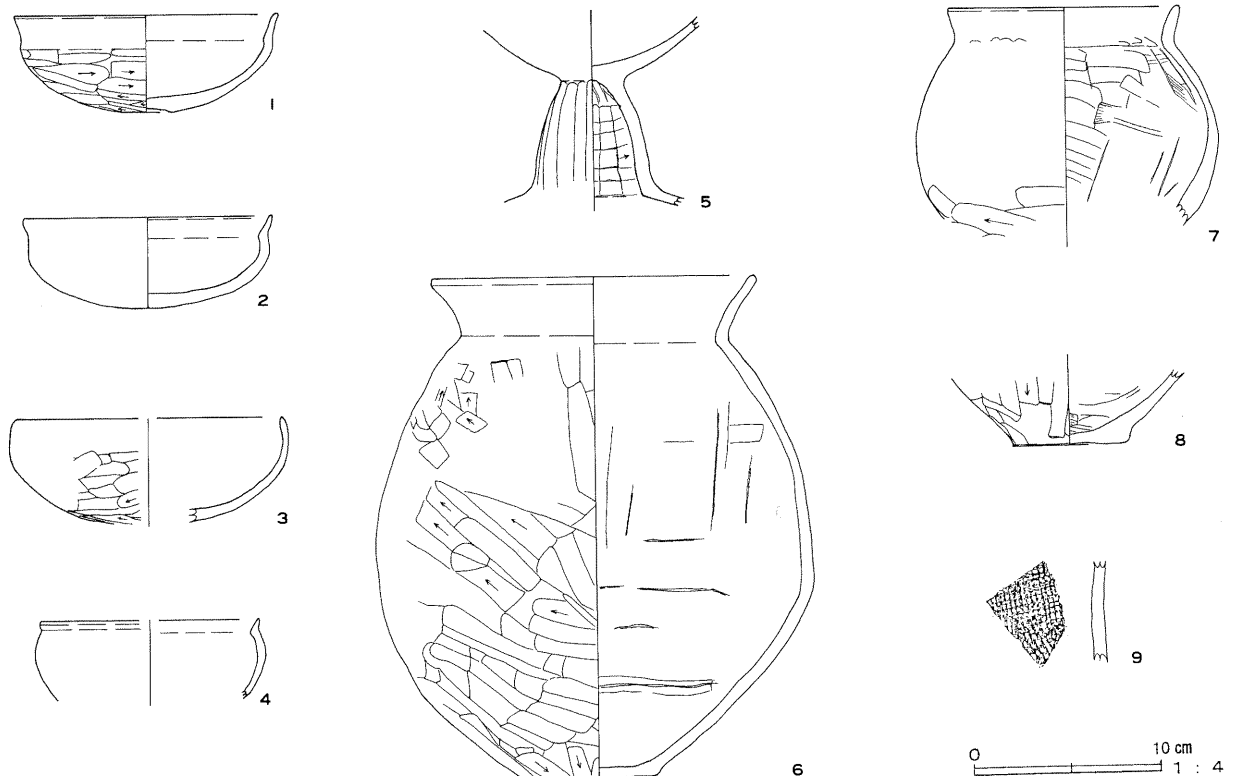
壁は、床面付近が残存するのみで、形状は不明である。壁の残存高は、最高でもわずか10cmである。

床面は、凹凸が多く、安定しない。ピット等は、検出されていない。

カマドは、西壁中央に設けられている。火床は竪穴内に残り、燃烧部は竪穴外に張り出す。火床は、床面を奥に向けて徐々に掘り窪め、ほぼ長円形を呈する。長さ45cm、幅30cmを計る。燃烧部は奥壁が丸くなるものの、ほぼ長方形を呈し、奥行き80cm、幅25cmを計る。断面は、奥に向けて一段と深まり、奥壁部で急カーブをもって立ち上がる。煙道部は検出されていない。

覆土は、上層が少量の炭化物を含む褐灰色シルト層（第1層）、下層が浅黄色シルトブロック及び、少量のマンガン粒を含む灰白色シルト層（第2層）である。

遺物は、カマド燃烧部奥壁近くから土師器甕（6）が出土したのをはじめ、土師器杯（1～4）、高杯（5）、甕（7・8）、須恵器甕（9）が出土している。



第47図 B区40号住居跡出土遺物

第21表 B区40号住居跡出土遺物観察表（第47図）

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・杯	(14.4)	5.3	2.9	②④③①	②	橙	2/3	口縁部横ナデ。体部外面全面横のケズリ、内面ナデ、若干上げ底。
2	土師器・杯	13.5	5.0	—	③①②	②	明赤褐	2/3	
3	土師器・杯	(14.5)	—	—	①④③②	②	明赤褐	1/4	外面口縁部横のナデ、体部横のケズリ、上位はナデが加わる。内面横のナデ、底面炭化物付着。
4	土師器・杯	(11.8)	—	—	④③②①	②	明赤褐	1/8	内外面共ナデ、外面はわずかに横へ砂粒の移動がみられる。
5	土師器・高杯	—	—	—	④②③①	②	明赤褐	口縁・裾欠	杯部内外面共水拭き。脚部外面縦のケズリの後ナデ、裾部横ナデ。内面天井部ヘラ先によるナデツケ、その他横の連続ヘラケズリ。
6	土師器・甕	17.8	27.3	7.3	⑥④①②	②	明赤褐	3/4	口縁部横ナデ。胴部外面上位縦、中～下位斜のケズリ、上位に一部ナデが加わる。内面上～中位ヘラナデ、中～下位ナデ。接合部の一部木口状工具によるナデ。外面中位以下煤付着。赤色化した部分多い。二次加熱。
7	土師器・甕	12.3	—	—	⑥②④①③	②	橙	底部欠2/5	口縁部横ナデ。拵れ部内外面一部指頭による押圧。胴部外面ナデ、下位はケズリのまま。内面上位木口状工具によるナデ、中位以下ヘラナデ。赤色化。二次加熱。
8	土師器・甕	—	—	6.2	⑥②③①④	②	浅黄橙	底部のみ	外面ケズリ、部分的にナデが加わる。内面木口状工具によるナデ。
9	須恵器・甕	—	—	—	①②	②	灰色	一部	

41号住居跡 H-6からH-7グリッドに亘って位置している。第一確認面下位からの検出である。上(第48図)面及び東北隅は、39号住居跡及びA区河川跡によって、南辺中央部は59号土坑によって削(第49図)除されており、逆に45号住居跡を切断している。また上面には、45号溝跡が位置している。

このため、規模・形態共に不明であるといわざるを得ないが、西辺は6.00m、南辺は6.20+ $\alpha$ mを計り、北・南辺ともほぼ直交していることから、北・南辺を長辺とする長方形を呈するものと思われる。主軸方位は、N-70°-Wを示す。

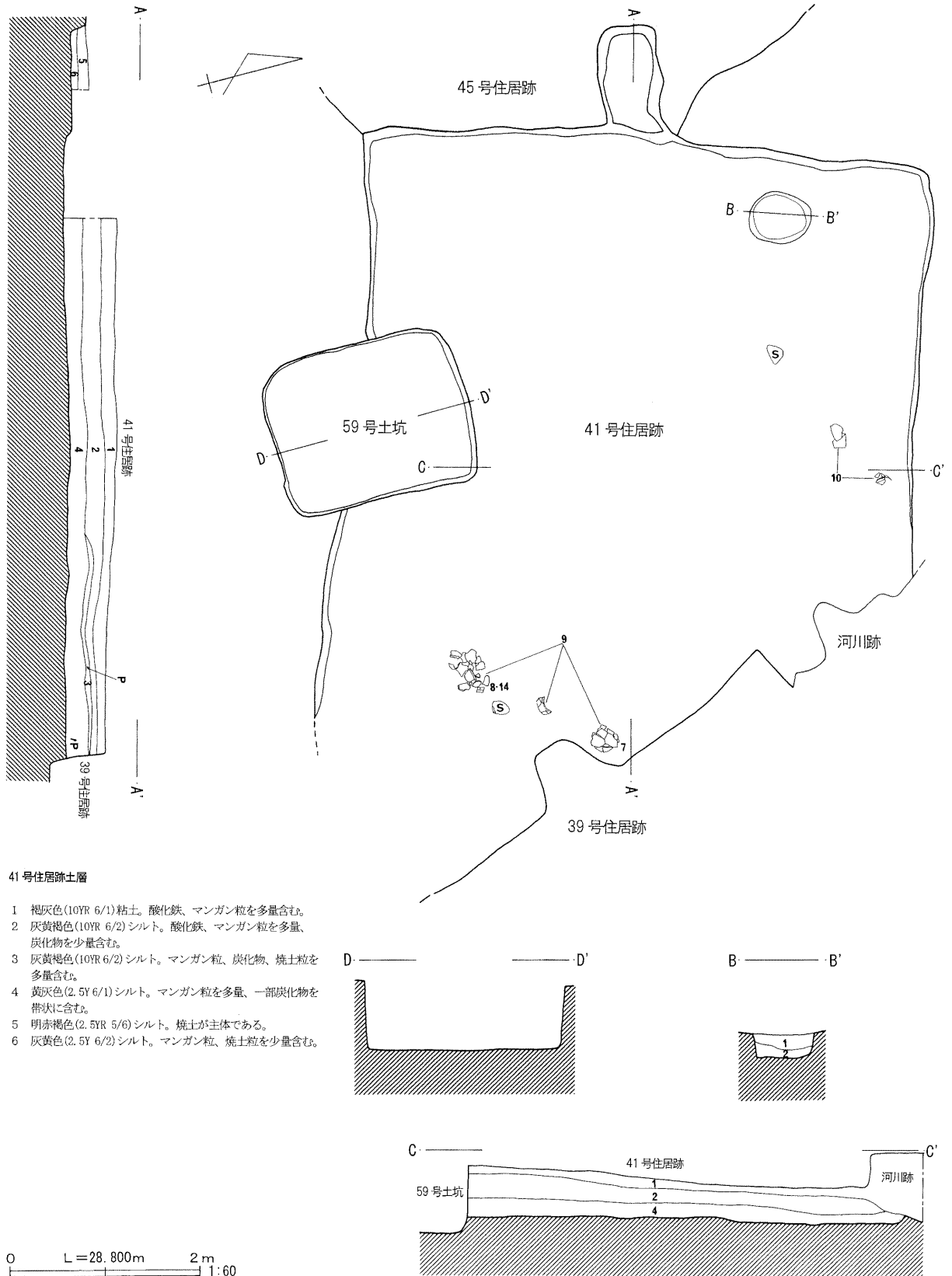
壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。壁の残存高は、ばらつきがあるが、最高の西側では55cmである。

床面は、凹凸が多いが、硬く締まった部分もみられ、安定している。ピットは、カマドと北西隅の間で検出されている。径65×55cmを計り、隅円方形に近い円形を呈する。深さは25cmを計る。

カマドは、西壁中央に設けられている。竪穴内には、焼土化した部分がみられず、全て竪穴外に張り出すと思われる。各部の分離はみられず、全体に焼土層(第5層)が広がり、下位に焼土粒、マンガン粒を含む灰黄色シルト(第6層)が堆積している。張り出しは、奥壁が丸くなるものの、ほぼ長方形を呈し、奥行き100cm、幅65cm前後を計る。底面は、竪穴床面から7cmほど高い位置に設けられ、ほぼ水平面を成している。奥壁部は、急傾斜をもって立ち上がる。煙道部等も検出されていない。

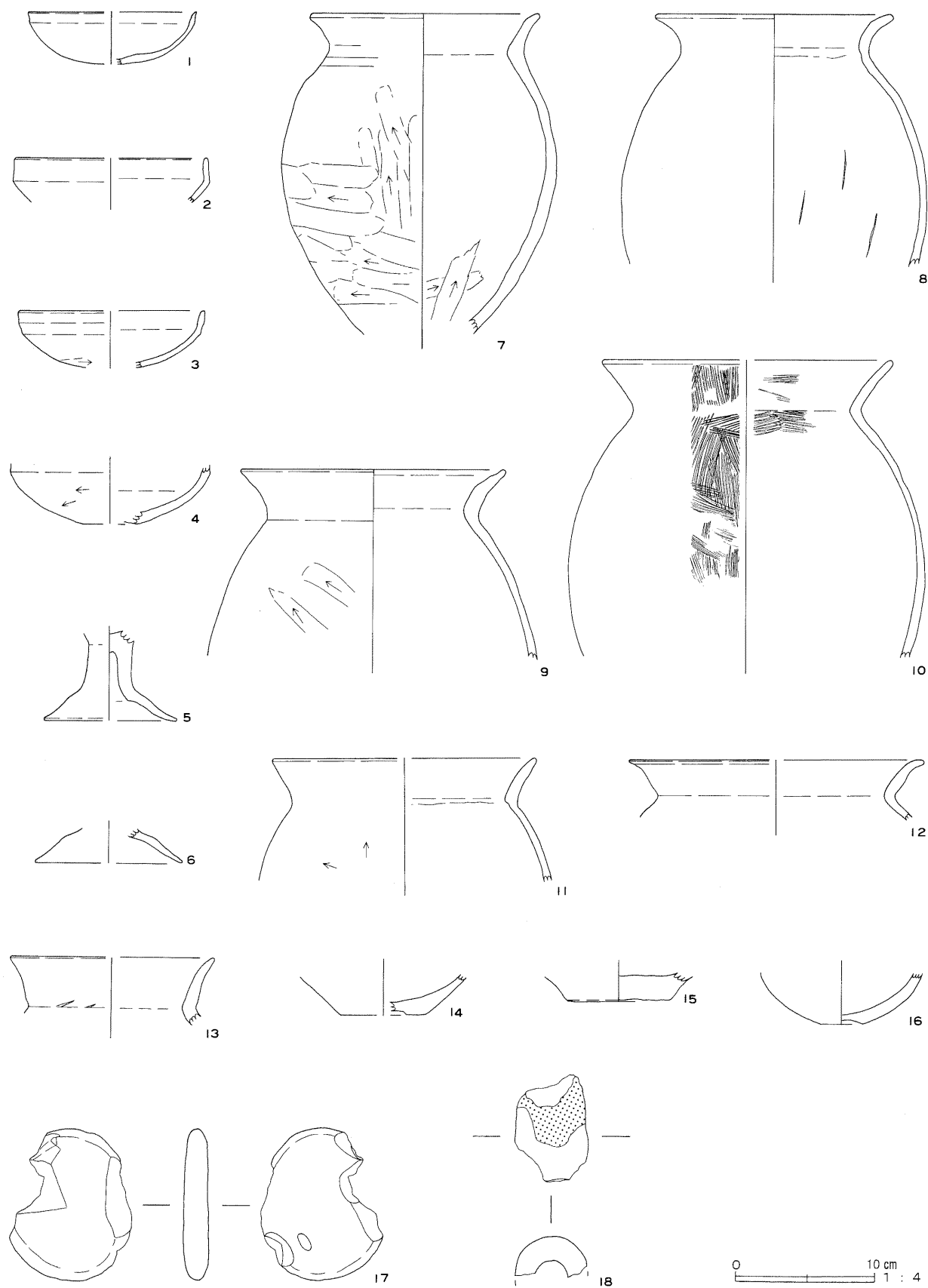
覆土は下層が、多量のマンガン粒、一部炭化物を層状に含む黄灰色シルト層(第4層)、上層が多量のマンガン粒・酸化鉄、少量の炭化物を含む灰黄褐色シルト層(第2層)である。また東半部分では、両層の中間に多量の焼土粒・マンガン粒・炭化物を含む灰黄褐色シルト層(第3層)が堆積している。

遺物は、床面上から土師器甕(7・8・9・14)が出土したのをはじめ、第4層中から土師器杯(1～4)、高杯(5・6)、甕(10～13・15)、埴(16)、石錘(17)、羽口(18)が出土している。



第48図 B区41号住居跡、59号土坑





第49图 B区41号住居迹出土遺物

第22表 B区41号住居跡出土遺物観察表(第49図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・杯	(12.0)	(3.8)	—	①②③	②	橙	1/5	磨滅。体部外面横のケズリ。
2	土師器・杯	(13.7)	—	—	①②③	②	明赤褐	上位1/4	口縁部横ナデ。体部外面横のケズリ、内面ナデ。
3	土師器・杯	(13.2)	—	—	①④	②	橙	1/4	口縁部横ナデ。体部外面底面ケズリのまま、上位ナデが加わる、内面横のナデ。
4	土師器・杯	—	—	(4.0)	①②③	②	橙	1/5	口縁部横ナデ、内面は体部上位まで及ぶ。体部外面横のケズリ、内面ナデ。底面上げ底、ナデ、赤色化。
5	土師器・高杯	—	—	(9.6)	①②	②	橙	脚部の一部	脚部外面のみ回転ナデ、他はナデ。脚内部へうによる横の連続ナデ。吸炭。二次加熱。
6	土師器・高杯	(10.6)	—	—	①	②	橙	脚裾1/5	横ナデ。
7	土師器・甕	16.5	—	—	⑥①③④	②	にぶい橙	口縁部2/3 胴上半2/3 胴下半1/2	口縁部横ナデ、外面括れ部二段の回転ナデ。胴部外面上位～中位縦、中位～下位横のケズリ、上位及び底面付近ナデが加わる。内面大部分横のナデ、底面付近縦横のケズリが加わる部分がある。内外面吸炭。外面一部煤付着。二次加熱。
8	土師器・甕	17.0	—	—	⑥①②③④	②	橙	上位1/2	口縁部横ナデ。胴部外面ナデ、一部縦のスリップ、煤付着、一部赤色化。内面上位ナデ、中位横のヘラナデ、吸炭。二次加熱。
9	土師器・甕	19.0	—	—	⑥①②	②	浅黄橙	上位3/4	口縁部横ナデ。胴部外面ナデ、一部斜のケズリ、一部煤付着。内面横のナデ、炭化物付着。二次加熱。
10	土師器・甕	(20.8)	—	—	⑥①②③④	②	橙	上位1/3	外面縦を主体とした刷毛目、一部横が加わる、中位以下ナデ、括れ部の一部にもナデ、中位以下赤色化。内面口縁～括れ部横の刷毛目、口縁はナデが加わる、胴部横のナデ、一部炭化物付着。二次加熱。
11	土師器・甕	(19.0)	—	—	⑥①②③	②	橙	口縁部破片 胴上半1/4	表面剥離。胴部外面ケズリ痕。内面頸部輪積み痕。
12	土師器・甕	(21.0)	—	—	①②③	②	橙	口縁部の一部	口縁部横ナデ、煤付着。内面及び胴部ナデ。
13	土師器・甕	(14.6)	—	—	①②③⑥	①	橙	口縁部1/4	口縁部横ナデ。口唇部煤付着。胴部外面ケズリ、内面ナデ、括れ部指頭による押圧。二次加熱。
14	土師器・甕	—	—	(6.0)	①②③④⑥	②	にぶい橙	底部の一部	内外面ナデ。外面煤付着。
15	土師器・甕	—	—	(7.4)	⑥①③	①	浅黄橙	底部1/4	胴部ナデ。底部外面ケズリ、内面周辺指頭による押圧。外面一部吸炭。
16	土師器・埴	—	—	3.0	①②③	②	橙	底部の一部	表面磨滅。上げ底。
17	石錘	長さ 11.1 幅 8.4 厚さ 1.8 重さ 210g							
18	羽口	長さ 7.5 幅 5.3 孔径 2.3 重さ 74.5g							

42号住居跡 I-6からI-7グリッドに亘って位置し、南側は調査区外に及んでいる。第一確認面(第50図) 下位からの検出である。

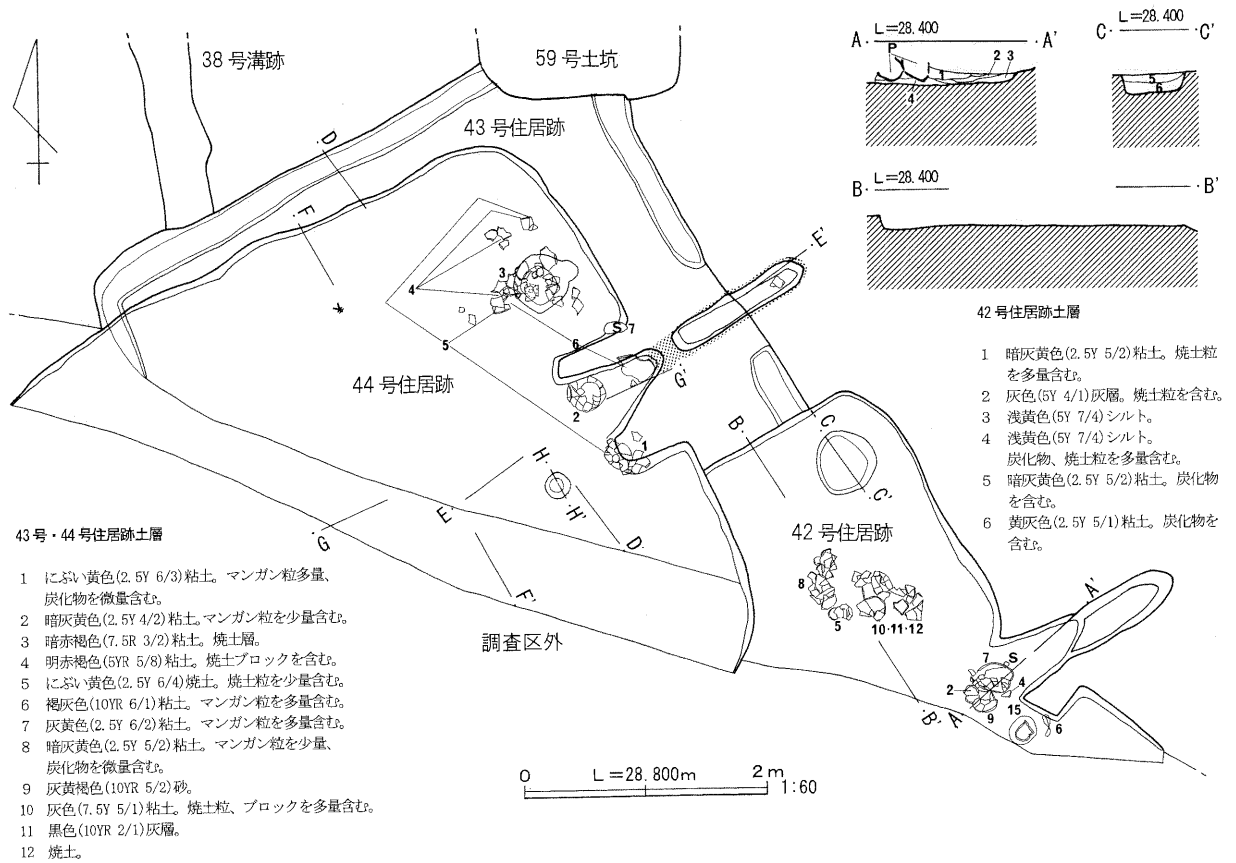
(第51図) 43号住居跡によって削平され、44号住居跡に切断されている。また、上面はA区河川跡によって削平されている。

このため、規模・形態共に不明であるが、現状では、北西辺 $1.45 + \alpha$  m、北東辺 $4.10 + \alpha$  mを計る。両辺は直交しているが、北東辺が蛇行することから、方形を基本とする不整形を呈するものと思われる。カマドの主軸方位は、 $N-60^{\circ}-E$ を示す。

壁は、床面付近が残存するのみであるが、垂直に近い急角度で立ち上がる様子である。壁の残存高は、最高でもわずか12cmである。

床面は、ほぼ水平であり、硬く締まった部分もみられて安定している。ピットは、北隅で検出されている。径 $52 \times 50$ cmを計り、やや崩れた円形を呈する。深さは16cmを計る。

カマドは、北東壁に設置されている。火床は、床面が1～2cm掘り窪められており、全て竪穴内に位置している。台形を呈し、前面幅65cm、奥面幅35cm、長さ75cmを計る。袖は、右が50cmほど残り、先端部に土師器(6)が被せられていた。左袖は、ほとんど残存していない。燃焼部は火床の平面形を継続し、奥に向けて幅を狭めている。奥面幅24cm、長さ40cmを計る。火床から燃焼部にかけて、全体で三角形を呈する。燃焼部奥壁は、 $45^{\circ}$ 前後の傾斜をもち、高さ8cm程の段を成して煙道に移行する。煙道は、わずかに立ち上がりながら奥壁に達し、奥壁も緩傾斜を成す。幅20cm、長さ70cmを計る。

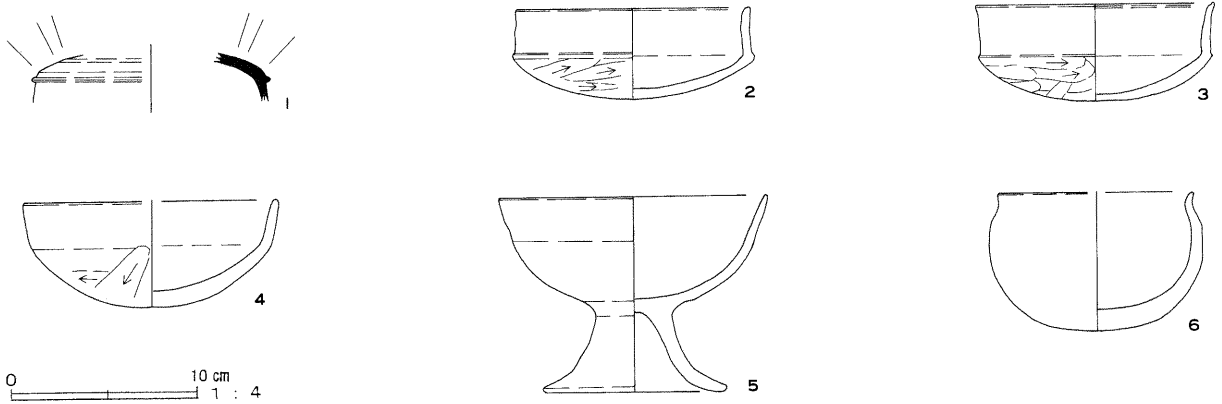
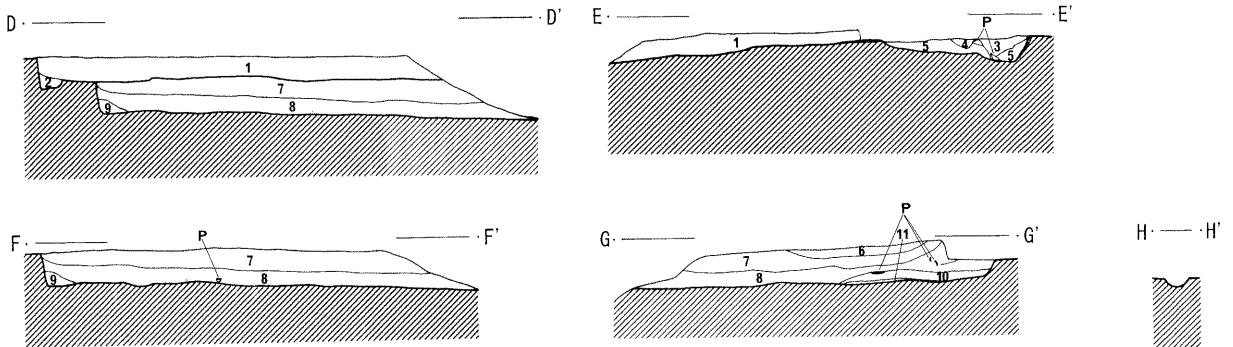


43号・44号住居跡土層

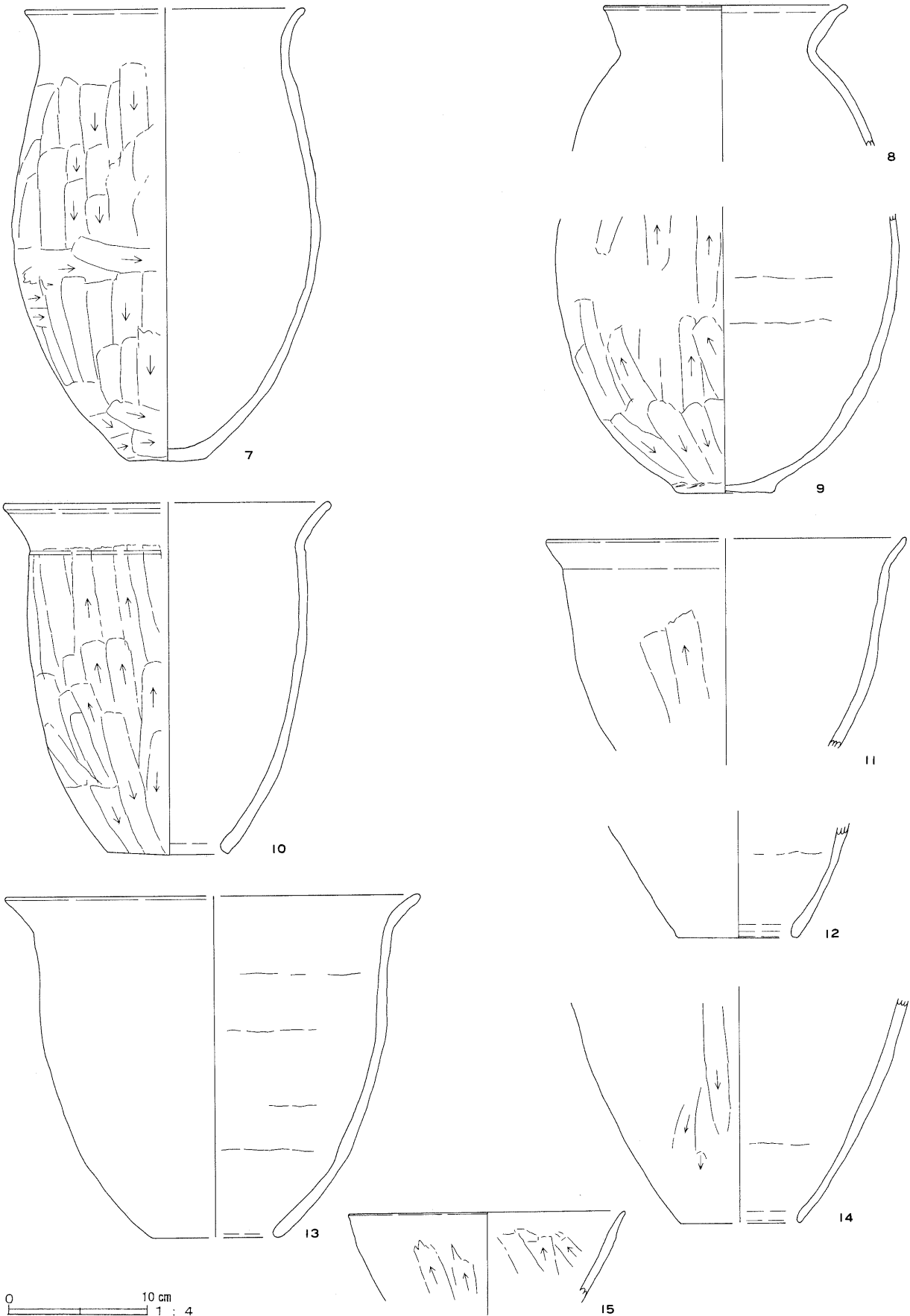
- 1 にぶい黄色(2.5Y 6/3)粘土。マンガング粒多量、炭化物を微量含む。
- 2 暗灰黄色(2.5Y 4/2)粘土。マンガング粒を少量含む。
- 3 暗赤褐色(7.5R 3/2)粘土。焼土層。
- 4 明赤褐色(5YR 5/8)粘土。焼土ブロックを含む。
- 5 にぶい黄色(2.5Y 6/4)焼土。焼土粒を少量含む。
- 6 褐灰色(10YR 6/1)粘土。マンガング粒を多量含む。
- 7 灰黄色(2.5Y 6/2)粘土。マンガング粒を多量含む。
- 8 暗灰黄色(2.5Y 5/2)粘土。マンガング粒を少量、炭化物を微量含む。
- 9 灰黄褐色(10YR 5/2)砂。
- 10 灰色(7.5Y 5/1)粘土。焼土粒、ブロックを多量含む。
- 11 黒色(10YR 2/1)灰層。
- 12 焼土。

42号住居跡土層

- 1 暗灰黄色(2.5Y 5/2)粘土。焼土粒を多量含む。
- 2 灰色(5Y 4/1)灰層。焼土粒を含む。
- 3 浅黄色(5Y 7/4)シルト。
- 4 浅黄色(5Y 7/4)シルト。
- 5 暗灰黄色(2.5Y 5/2)粘土。炭化物を含む。
- 6 黄灰色(2.5Y 5/1)粘土。炭化物を含む。



第50図 B区42号・43号・44号住居跡、42号住居跡出土遺物(1)



第51図 B区42号住居跡出土遺物(2)

覆土は、炭化物をわずかに含む浅黄色シルト層である。

遺物は、カマド右袖から土師器<sub>2</sub> (6)、火床から杯 (2・4)、甕 (7・9)、壺 (15)、カマドとピットの間から、土師器高杯 (5)、甕 (8)、甌 (10・11・12)、覆土中から須恵器蓋杯 (1)、土師器杯 (3)、甌 (13) 等が出土している。

第23表 B区42号住居跡出土遺物観察表 (第50・51図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	須恵器・蓋	—	—	—	①②	①	黄灰	1/8	
2	土師器・杯	12.7	5.0	—	①②③	②	にぶい赤褐	4/5	口縁部横ナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。全面煤付着。
3	土師器・杯	12.9	5.3	—	①②⑥	①	橙	4/5	口縁部横ナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。
4	土師器・杯	(13.8)	5.8	—	①②	②	橙	2/5	口縁部横ナデ。体部外面ケズリとナデ混在。内面ナデ。
5	土師器・高杯	14.6	10.7	10.0	⑥①②③	②	橙	3/5	表面磨滅。
6	土師器 <sub>2</sub>	10.5	7.6	—	⑥③①②	②	橙	1/2	表面磨滅。口縁の一部横ナデ。
7	土師器・甕	(20.4)	(32.5)	5.6	⑥①②	②	暗褐	1/2	口縁部横ナデ。胴部外面縦のケズリ、中位及び底部周辺横のケズリ、中位にはスリップの施される部位も見られる、煤付着。内面ナデ、吸炭。二次加熱。
8	土師器・甕	17.6	(10.4)	—	⑥①②④	②	橙	上位1/6	表面剥離した部分が多い。口縁部横ナデ。胴部外面ケズリ(痕)、内面ナデ、吸炭。
9	土師器・甕	—	(20.3)	7.0	①②③⑥	③	橙	下半1/3	外面縦のケズリ、中位にナデの加わる部分がある、下位は受熱による劣化剥離した部分もある。内面横のナデ、中位に輪積痕残す。炭化物付着。二次加熱。
10	土師器・甌	(23.8)	25.7	8.8	⑥①②③④	②	にぶい橙	2/3	口縁部横ナデ。胴部外面口縁下位から縦のケズリ、揺れ部に回転のナデが加わる。内面横のナデ、吸炭。孔部ナデ仕上げ。
11	土師器・甌	(26.2)	—	—	⑥①③	②	にぶい橙	底部欠1/3	口縁部横ナデ。胴部大部分表面磨滅。外面縦のケズリ痕。内面横のナデ痕。
12	土師器・甌	—	—	(8.8)	⑥①②③	②	にぶい橙	1/5	胴部大部分表面磨滅。内面横のナデ痕。孔部ナデ仕上げ。No.11と同一個体か？
13	土師器・甌	(30.0)	25.0	(9.7)	⑥④①③	②	にぶい褐	1/4	口縁部横ナデ。胴部ナデ、内面に輪積み痕残す。内面吸炭。孔部ナデ仕上げ。
14	土師器・甌	—	(16.3)	—	⑥②①③	②	暗褐	下位1/3	外面ナデ、一部縦のケズリ。内面横のナデ。孔ケズリ仕上げ。
15	土師器・壺	20.2	—	—	③①②	②	橙	口縁のみ4/5	内外面共横のナデの後、一部縦のケズリが加わる。

43号住居跡 H-7からI-7グリッドに亘って位置し、南側は調査区外に及んでいる。第一確認面(第50図) 下位からの検出である。

北隅を59号土坑によって切断されているが、42号・44号両住居跡の上面を削平している。また、A区河川跡によって上面を削平されているが、特に南側は切断された状態である。西隅上面には、38号・43号各溝跡が位置している。

このため、規模・形態共に不明であるが、現状では、北西辺(推定)4.70m、北東辺2.95+ $\alpha$ m、南西辺1.00+ $\alpha$ mを計る。各辺は直交しており、北西辺長を一辺長とする方形を呈するものと思われる。北東辺の軸方位は、N-32°-Wを示す。

壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、検出面からの高さは、最高で20cmを計る。

床面は、やや傾斜し凹凸がみられるものの、硬く締まった部分もみられて安定している。壁直下には、幅20cm、深さ5cm前後の溝が廻る(北東辺の一部では途切れる)。他に炉等の施設は検出されていない。

覆土は、多量のマンガン粒及び炭化物をわずかに含むにぶい黄色粘土層(第1層)である。周溝内には、少量のマンガン粒を含む暗灰黄色粘土(第2層)が堆積している。

遺物は、図示可能なものは出土していない。

44号住居跡 1-7グリッドに位置し、南側は調査区外に及んでいる。第一確認面下位からの検出で(第50図) ある。

(第52図) 南側で42号住居跡を切断している。逆に北側では、43号住居跡とA区河川跡によって上面を削平されている。また西隅上面には、38号・43号各溝跡が位置している。

このため、規模・形態共に不明であるが、現状では、北東辺4.90m、北西辺4.60+ $\alpha$ m、南西辺0.20+ $\alpha$ mを計る。各辺は、隅に丸みをもつものの、ほぼ直交しており、北東辺長を一辺長とする隅円方形を呈するものと思われる。北東辺の軸方位は、N-60°-Eを示す。

壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、検出面からの高さは、最高で30cmを計る。

床面は、やや凹凸がみられるが、硬く締まった部分もみられて安定している。ピットは、カマドと北隅の間で検出されている。径43×45cmを計り、隅円方形を呈する。深さは16cmを計る。

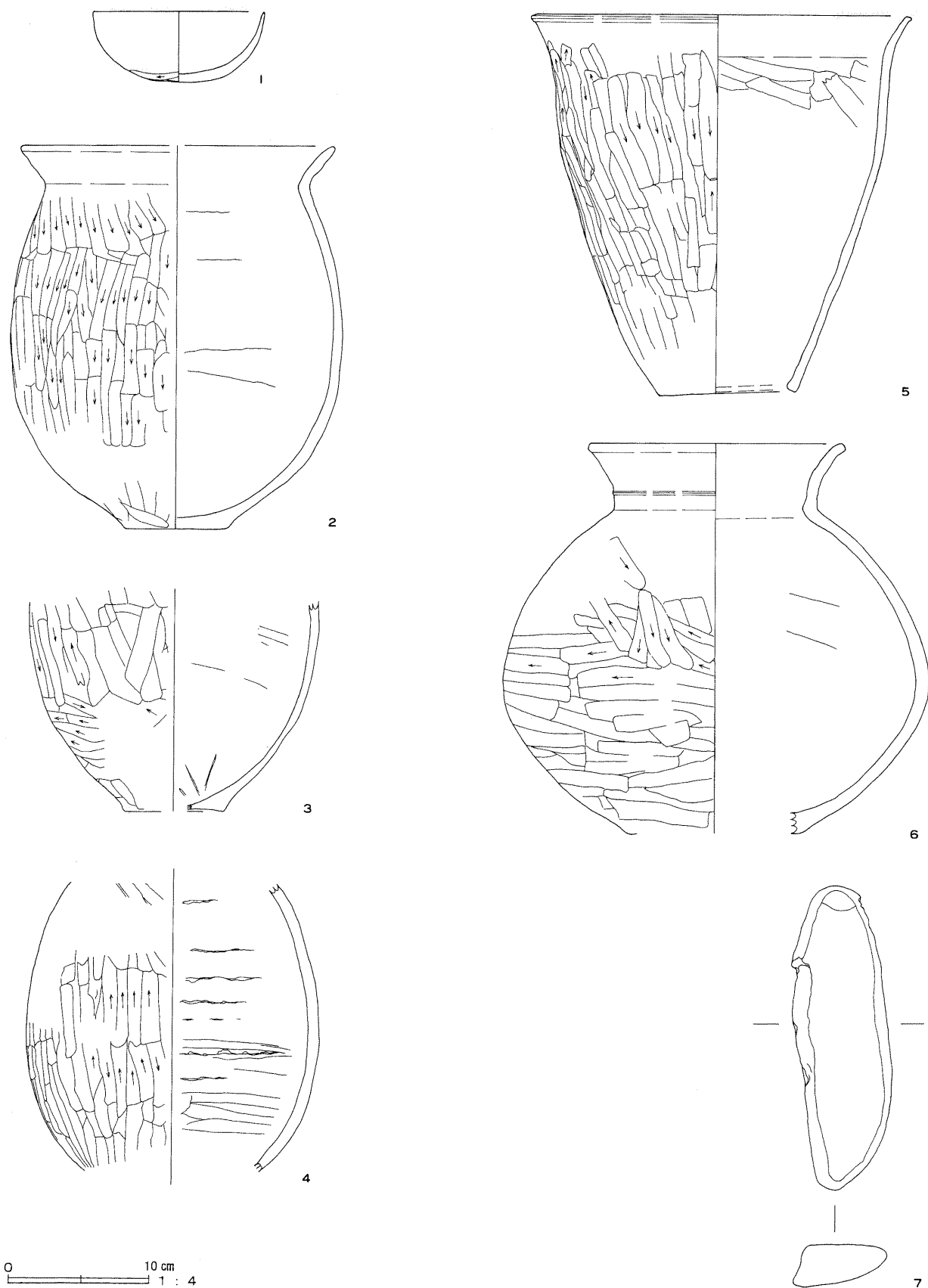
カマドは、北東壁中央部に設置されている。火床は、両袖の前面に半径30cmの半円形に作りだしている。両袖間は焼土が薄くなるが、燃焼部を構成していると思われる。火床と燃焼部の境には、土師器甕(2)が直立して出土している。燃焼部は平面三角形を呈し、前面幅60cm、奥面幅25cm、長さ75cmを計る。袖は、外形が箱型、内面が三角形を呈することとなる。竅穴内への張り出しは、60cmほどであり、右袖の先端部には、土師器杯(1)及び甑(5)が被せられていた。また左袖脇からは、砥石(7)が出土している。火床と燃焼部を合わせた長さは110cmを計り、全て竅穴内に位置することとなる。燃焼部の奥壁は、急傾斜で立ち上がり、高さ15cm程の段を成して煙道に移行する。奥壁斜面からは、土師器壺(6)が出土している。煙道は、一部水平を成すが、奥壁に向けて低くなり、奥壁は急傾斜を成して立ち上がる。幅20cm、長さ137cmを計る。両壁が焼土化している。

覆土は下層が、少量のマンガン粒、微量の炭化物を層状に含む暗灰黄色粘土層(第8層)、上層が多量のマンガン粒を含む灰黄色粘土層(第7層)である。また壁際では最下層として、灰黄褐色砂層(第9層)が堆積している。

カマド以外の遺物は、ピット内から土師器甕(3)、脇から甕(4)、甑(5)等が出土している。このうち甑(5)は、カマド右袖にかぶせられていたものであり、ピット脇の破片と接合されたものである。

第24表 B区44号住居跡出土遺物観察表(第52図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・杯	12.2	5.1	—	①④③②⑥	②	明赤褐	3/4	表面磨滅した部分が多い。外底面ケズリ、他はナデ、内面横のナデ。
2	土師器・甕	(22.4)	27.7	7.2	②①⑥③	②	にぶい橙	1/3	口縁部は横ナデ。胴部外面は縦のケズリ、拵れ部及び下位にナデが加わる。内面ナデ、輪積み痕を残す。内外面共吸炭した部分が多い。二次加熱。
3	土師器・甕	—	—	7.3	②①⑥③	②	橙	底部2/5	外面ケズリ、下位は煤附着、中位赤色化、内面ヘラナデ、吸炭。二次加熱。
4	土師器・甕	—	—	—	②③⑥①	②	橙	胴部	外面ケズリ、上位ナデが加わる。煤附着。内面ヘラナデ、中位木口状工具によるナデ、中位以上輪積み痕を残す、炭化物附着。二次加熱。
5	土師器・甑	26.3	27.7	9.5	②③①⑥	②	にぶい橙	3/5	外面口縁部横ナデの後、拵れ部～胴部縦のケズリ、下端にはナデが加わる。
6	土師器・壺	18.0	29.0	(12.2)	①⑥②③④	②	橙	2/5	口縁部横ナデ、頸部に段を成し、稜線を作り出している。胴部外面中位以下横、中位の一部に縦のケズリ、上位ナデ。内面ナデ、中位接合部木口状工具によるナデ、一部炭化物附着。
7	砥石	長さ21.9	幅16.8	厚さ3.1				—	一面使用。



第52图 B区44号住居跡出土遺物

**45号住居跡** H-7グリッドに位置する。第一確認面下位からの検出である。

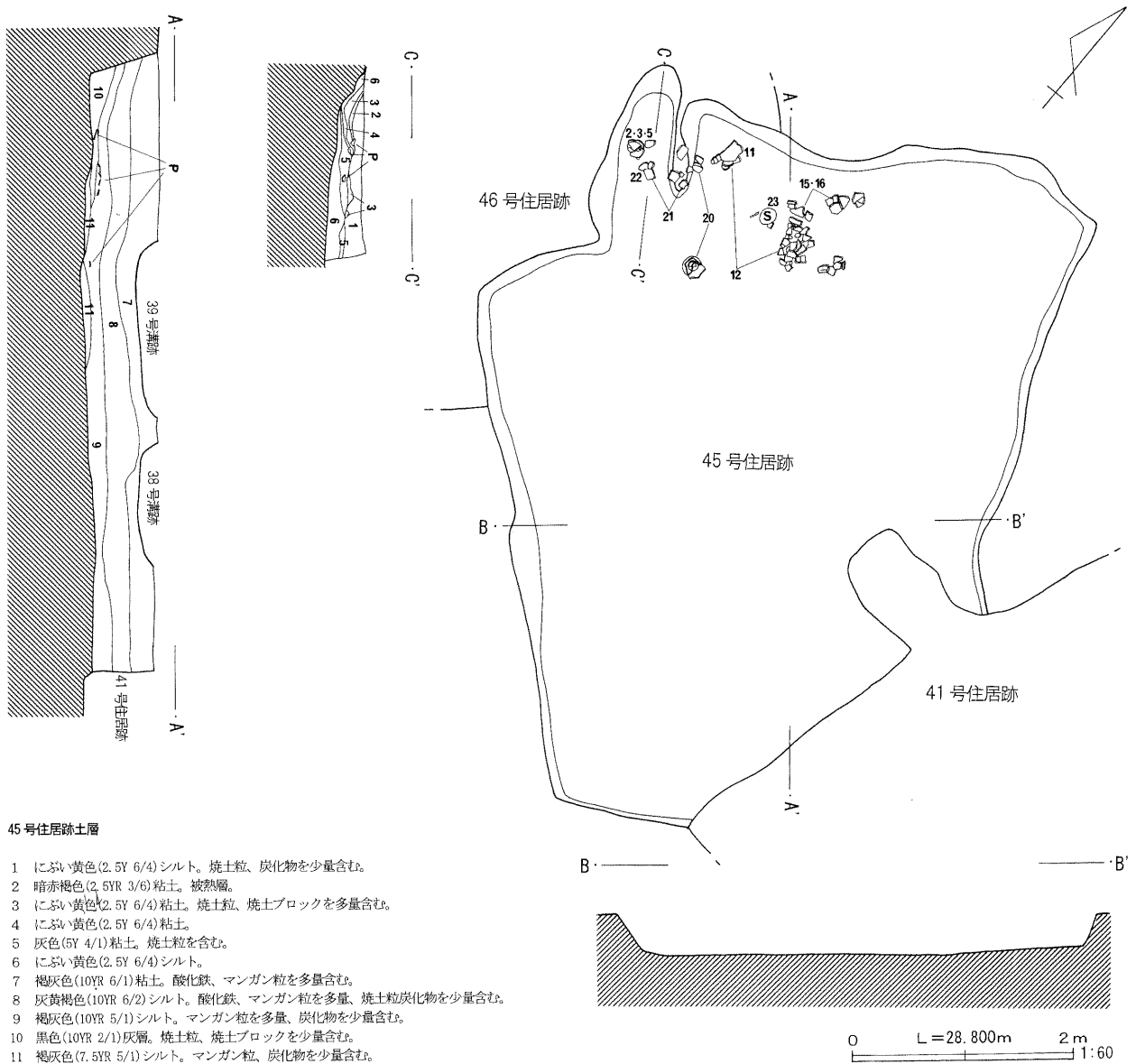
(第53図) 46号住居跡を切断している。東隅は41号住居跡に切断され、中央上面はA区河川跡及

(第54図) び38号・39号溝跡によって削平されている。南西辺上には61号土坑が位置している。

(第55図) このため、規模・形態共に不明であるといわざるを得ないが、現状では北西辺5.62m、南西辺4.75m、北東辺 $3.18 + \alpha$  m、南東辺 $1.20 + \alpha$  mを計る。各辺は、北西辺が蛇行し、他辺がほぼ直線を成す。さらに、各隅が丸みをもち、なおかつ直交していないため、不整形を呈するといわざるを得ない。南西辺の軸方位は、 $N - 48^\circ - W$ を示す。

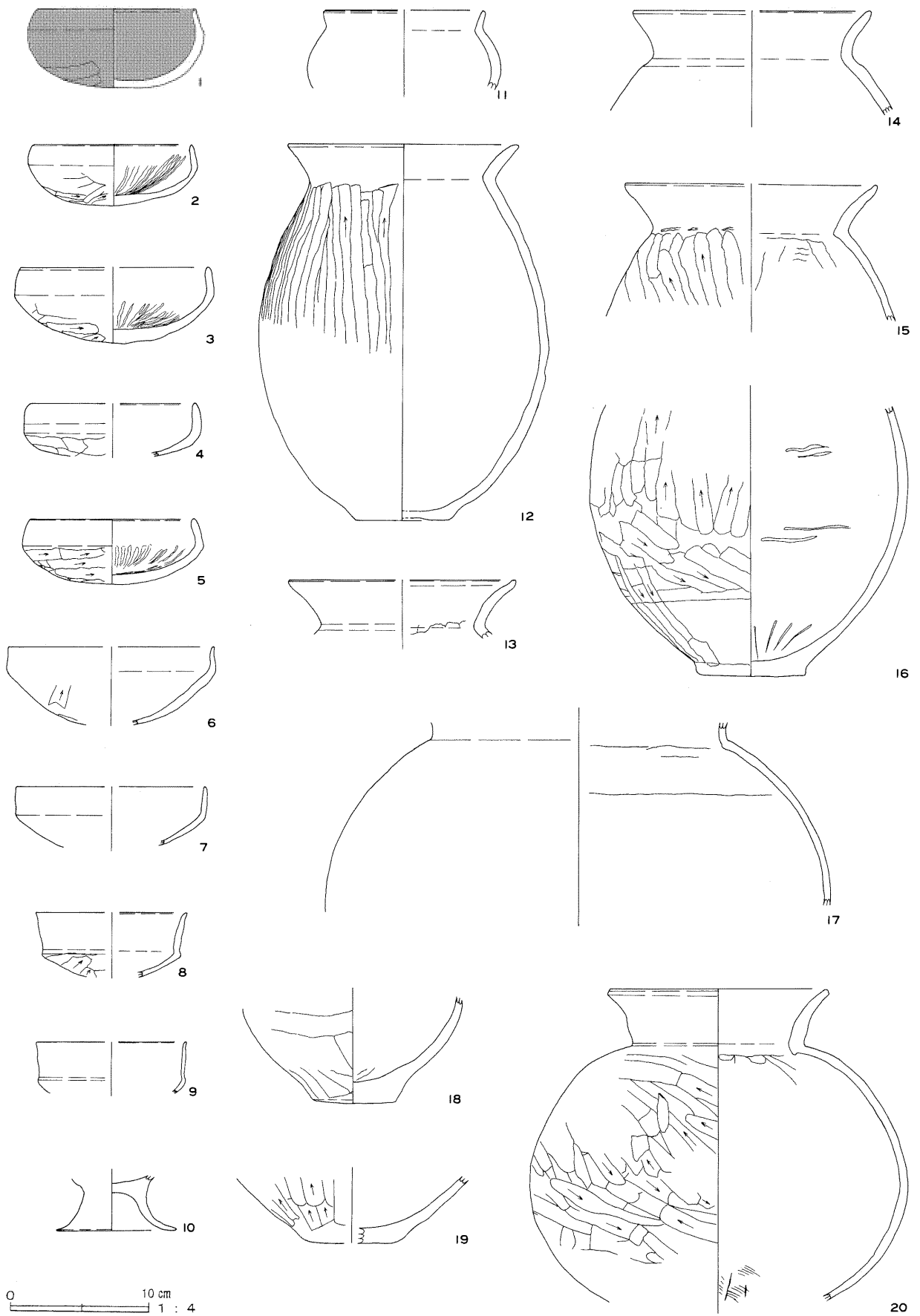
壁は、ほぼ直線を成し、急傾斜で立ち上がる。検出面からの高さは、最高で65cmを計る。

床面は、やや凹凸がみられるが、硬く締まった部分もみられて安定している。ピットは、検出されていない。

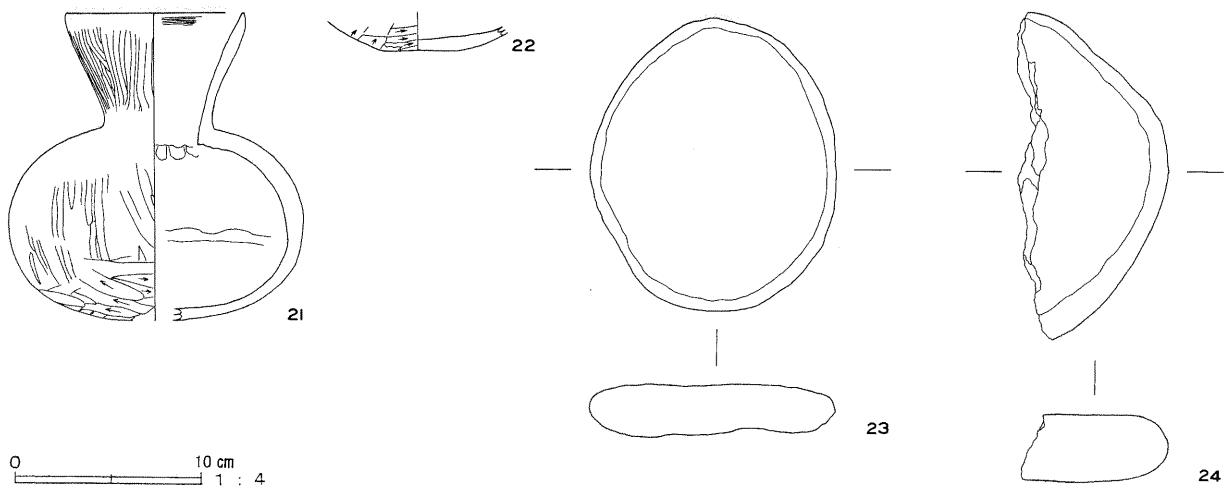


第53図 B区45号住居跡





第54图 B区45号住居跡出土遺物(1)



第55図 B区45号住居跡出土遺物(2)

第25表 B区45号住居跡出土遺物観察表 (第54・55図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・杯	11.4	5.8	—	①④②⑥	②	浅黄橙 赤	口縁部一部欠	大部分表面剥離している。口縁横ナデ。体部整形痕不明、一部ミガキが見られる。外底面以外全面朱塗。
2	土師器・杯	11.5	5.5	—	②①④⑥	②	橙	口縁部・体部一部欠	口縁部横ナデ。体部外面ケズリ、上位にはナデが加わる。内面放射状暗文、一部口縁に達する、底面吸炭。
3	土師器・杯	(13.6)	5.6	—	②④①⑤	②	浅黄橙	1/5	口縁部横ナデ、吸炭。体部外面ケズリ、上位はナデが加わる。内面ナデの後放射状ミガキ。二次加熱。
4	土師器・杯	12.0	—	—	①④②	②	橙	1/6	口縁部横ナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。黒色処理。
5	土師器・杯	11.9	5.8	—	②④⑥①	②	浅黄橙	1/4欠	口縁部横ナデ。体部外面横のケズリ、内面ナデの後放射状ミガキ。
6	土師器・杯	(15.0)	—	—	②①⑥④	②	浅黄橙	1/6	口縁部横ナデ。体部外面ケズリ後ナデ、内面ナデ、内外面共一部吸炭。
7	土師器・杯	(13.7)	—	—	①②	②	橙	1/12	全面磨滅。
8	土師器・杯	(11.0)	—	—	②①④	②	橙	1/5	口縁部横ナデ。体部外面ケズリ、内面磨滅。
9	土師器・杯	(11.0)	—	—	②①④	②	にぶい橙	口縁部1/8	表面磨滅。
10	土師器・高杯	—	—	—	②①④	②	橙	底部、脚部1/2	
11	土師器・椀	(11.5)	—	—	①②④	②	浅黄橙	上位1/8	口縁部及び胴部外面横の回転ナデ。胴部内面ナデ。
12	土師器・甕	16.8	(27.7)	6.9	⑥②①④	②	灰白	1/2	口縁部横ナデ。胴部外面上位縦のケズリ、下位ナデが加わる、赤色化、内面ナデ。二次加熱。
13	土師器・甕	(16.3)	—	—	②①④⑥	②	浅黄橙	口縁部1/3	口縁部横ナデ。拵れ部木口状工具による回転ナデ。胴部ナデ。吸炭。
14	土師器・甕	(17.0)	—	—	⑥①②④	②	明赤褐	上位1/6	口縁部横ナデ、胴部内外面共ナデ。赤色化。
15	土師器・甕	(17.0)	—	—	⑥②①④	②	明赤灰	上位1/2	口縁部横ナデ。胴部外面縦のケズリ、内面横のヘラナデ。一部吸炭。二次加熱。
16	土師器・甕	—	—	7.8	⑥②①④	②	灰白	下半部のみ	外面ケズリ、煤付着、赤色化、二次加熱。内面ヘラナデ、部分的に輪積み痕を残す。
17	土師器・甕	—	—	—	⑥④①②	②	にぶい褐	胴部上位1/2	内外面共ナデ。頸部外面回転ナデ。胴部内面輪積み痕残す。吸炭。
18	土師器・甕	—	—	6.2	⑥①②③	②	明赤褐	底部1/3	外面ナデ、底部周辺ケズリ、赤色化。内面ヘラナデ、炭化物付着。二次加熱。
19	土師器・甕	—	—	(6.9)	①②③⑥④	②	にぶい黄褐	底部1/3	表面磨滅。外面ケズリ痕。煤付着。
20	土師器・甕	(15.9)	—	—	⑥①②③④	②	明赤褐	胴部2/3欠	口縁部横ナデ。胴部外面ケズリ、内面横のナデ、接合部指頭による押圧、底部付近木口状工具による横のナデ。内外面共吸炭。外面煤付着。赤色化。二次加熱。
21	土師器・埴	9.7	(16.9)	—	②①③⑥④	②	橙	胴部1/2欠	口縁部外面縦のミガキ、内面口唇部木口状工具による横のナデ、他はナデ。胴部外面肩磨滅、中位縦のミガキ、下位ケズリ、内面接合部指頭による押圧、他はナデ、中位に接合痕残す。
22	土師器・埴	—	—	3.9	②①③⑥	②	明赤褐	底部のみ	外面ケズリ、内面ナデ、吸炭。
23	磨石	長さ 15.9 幅 13.4 厚さ 2.9 重さ 1,000g						完形	
24	磨石	長さ— 幅— 厚さ 3.7 重さ 700g						—	
25	編物石	長さ 8.9 幅 2.3 厚さ 2.0 重さ 90g						—	

カマドは、北東壁中央及び西隅寄り2ヶ所に、竪穴の壁を掘り込んで設置されている。中央カマドは、前面幅1.10m、奥行き72cmの範囲で三角形に掘り込まれて設置されている。右は掘り込み面の長さ1.40mの範囲がそのまま利用され、左側が袖状となって90cmの長さ

しかないため、袖前面は、段差を成すこととなる。奥から0.80～1.10mの範囲が火床を成していると思われるが、明確なものではない。もしこれが火床であれば、火床は竪穴内に位置することになる。全体に緩い傾斜で奥壁に向けて立ち上がり、30cm前後の段差を成す。

西寄りカマドは、前面幅55cm、奥面幅34cm、奥行き1.80mの範囲で細長い台形に掘り込まれて設置されている。左は掘り込み面の長さ1.80mの範囲がそのまま利用され、右側が袖状となって116cmの長さしかないため、袖前面は、段差を成すこととなる。奥壁から62～96cmの範囲が火床を成していると思われるが、明確なものではない。全体に緩い傾斜で奥壁に向けて立ち上がり、18cmの段差をもって緩い湾曲面へと移行する。湾局面の長さは17cm程である。

これら両カマドの焼土面の下には、灰層（西寄りカマド＝第5層）、あるいは焼土・炭化物混在層（中央カマド＝第10層・11層）を挟んでにぶい黄色シルト（第6層）が共通して堆積しており、本来この第6層は、本竪穴の基盤層を成していたものと考えられる。また、中央カマドの左袖、西寄りカマドの右袖は、共有するものであり、両者の間に差がみられないことから、両カマドが並存した可能性が高い。

覆土は、上層が多量の酸化鉄及びマンガン粒を含む褐灰色粘土層（第7層）、中層が多量の酸化鉄・マンガン粒及び少量の炭化物・焼土粒を含む灰黄褐色シルト層（第8層）、下層が多量のマンガン粒及び少量の炭化物を含む褐灰色シルト層（第9層）である。また北西壁際では最下層として、にぶい黄色シルト層（第6層）が堆積している部分がある。

遺物は、中央カマドからは土師器椀（11）、甕（12・15・16・20）、磨石（23）が出土している。また、西寄りカマドからは、土師器杯（2・3・5）が重なって出土した他、埴（21・22）も出土している。その他、覆土中から土師器杯（1・4・6～9）、高杯（10）、甕（13・14・17～19）、磨石（23）が出土している。

**46号住居跡** H-7からH-8グリッドに亘って位置する。第一確認面下位からの検出である。

(第56図) 東半を45号住居跡に、南隅を47号住居跡に、さらに中央を南北に44号・45号両溝跡に  
(第57図) よって切断されている。また、A区河川跡によって上面を削平されている。

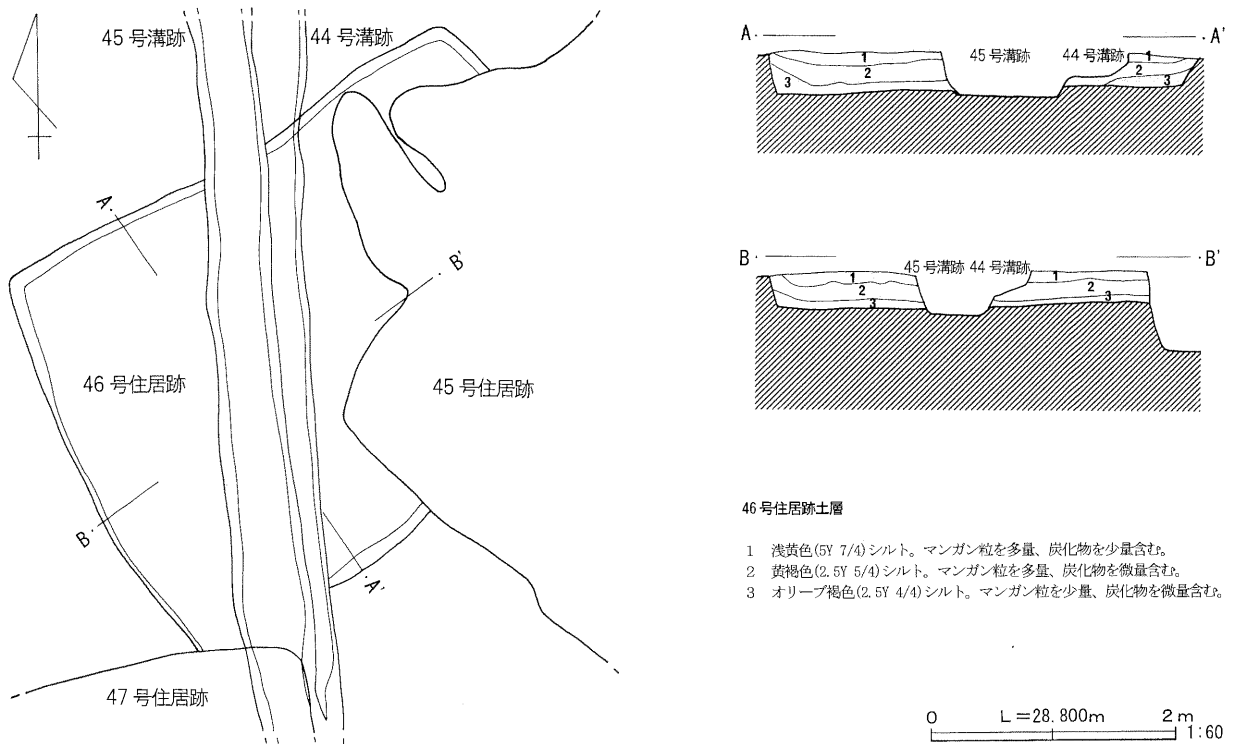
このため、規模・形態共に不明であるといわざるを得ないが、現状では、北西辺4.15m、南西辺 $3.40 + \alpha$  m、北東辺 $0.55 + \alpha$  m、南東辺 $1.05 + \alpha$  mを計る。北西辺と南東辺の間隔が3.45mを計る部分があることから、南西辺の $+\alpha$ はほとんどないと考えられ、これを短辺、北西辺を長辺とした長方形を呈するとすることができよう。長軸方位は、N-53°-Eを示す。

壁は、ほぼ直線を成し、急傾斜で立ち上がる。検出面からの高さは、最高で35cmを計る。

床面は、やや凹凸がみられるが、ほぼ水平面を成し、硬く締まった部分もみられて安定している。ピット等は、検出されていない。

カマド等も検出されていない。

覆土は、上層が多量のマンガン粒及び少量の炭化物を含む浅黄色シルト層（第1層）、中層が多量のマンガン粒及び微量の炭化物を含む黄褐色シルト層（第2層）、下層が少量のマ



第56図 B区46号住居跡

マンガング粒及び微量の炭化物を含むオリーブ褐色シルト層（第3層）である。第3層は、竪穴中央では堆積していない部分もある。

遺物は、覆土中より、土師器杯（1～5）、高杯（6～8）、甕（9～22）、短頸壺（23）等が出土している。

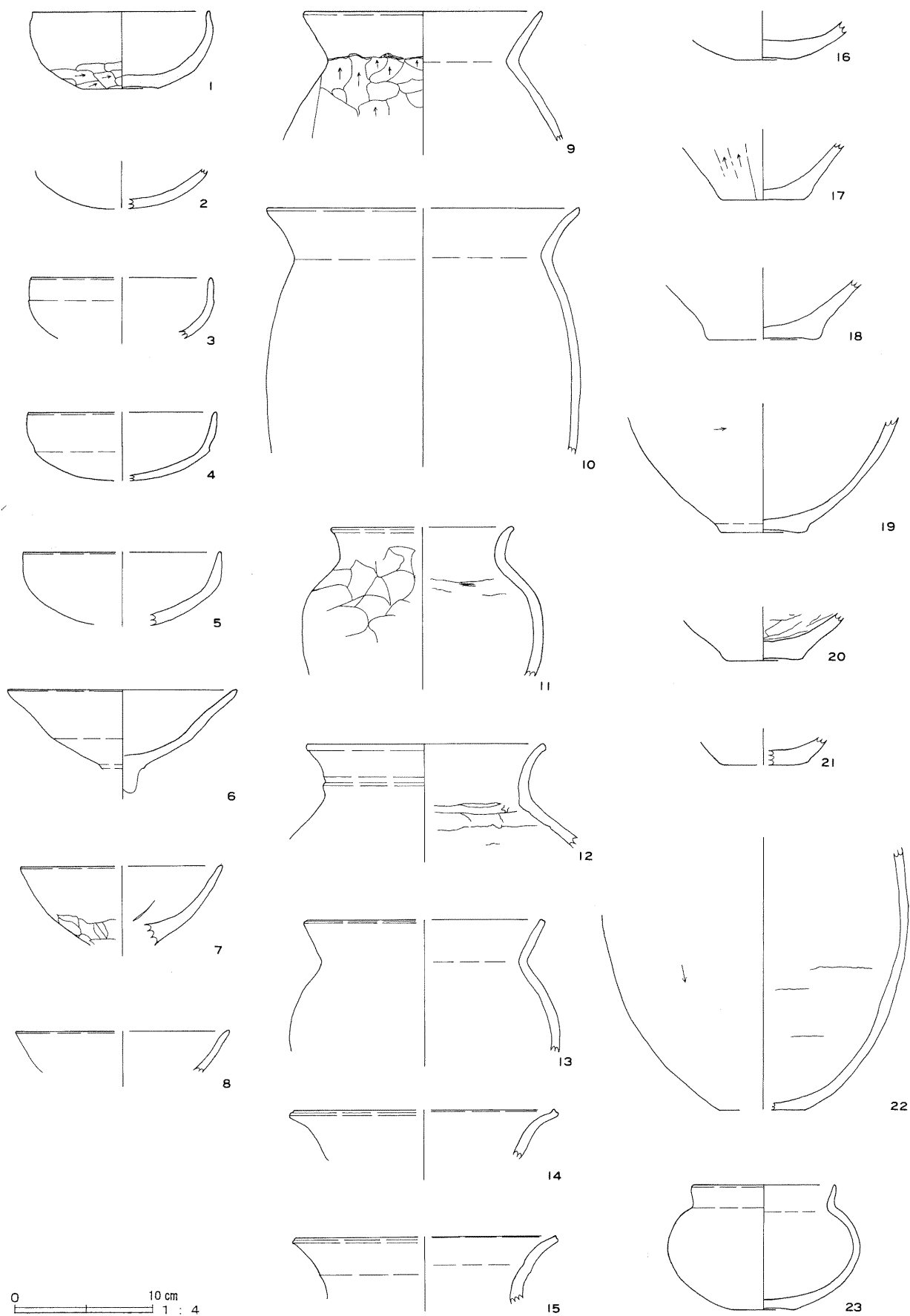
**47号住居跡** H-7・8からI-7・8グリッドに亘って位置し、南側は調査区外に及んでいる。第（第58図）一確認面下位からの検出である。

北東隅で46号住居跡を切断しているが、北西隅は23号井戸跡に切断されている。また東辺側を、44号・45号両溝跡によって切断されている。北西隅の下面には、50号住居跡が位置している。

このため、規模・形態共に不明であるといわざるを得ないが、現状では、北辺 $3.27 + \alpha$  m、東辺 $3.85 + \alpha$  mを計る。北辺は、23号井戸跡の西側に延伸しておらず、東辺がさらに延伸する状況を呈していることから、北辺の $+\alpha$ はほとんどないと考えられ、これを短辺、東辺を長辺とした長方形を呈するとすることができよう。主軸方位は、N-75° - Eを示す。

壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。検出面からの高さは、最高で33cmを計る。

床面は、やや凹凸がみられるが、ほぼ水平面を成し、安定している。ピット等は、検出されていない。



第57图 B区46号住居跡出土遺物

第26表 B区46号住居跡出土遺物観察表 (第57図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・杯	12.8	5.7	5.4	①③②⑥④	②	橙	5/6	体部外面下位～底面ケズリ、他はナデ、炭化物付着。内面ナデ、口唇部煤付着。
2	土師器・杯	—	—	—	①③②⑥	②	橙	下位1/3	内外面共ナデ。外面底部煤付着。
3	土師器・杯	(13.1)	—	—	③①④②⑥	②	橙	1/8	全面ナデ。
4	土師器・杯	(13.8)	5.1	—	①④⑥②③	②	橙	1/3	体部外面ケズリ後ナデ、他全面ナデ。
5	土師器・杯	(14.4)	—	—	①⑥②③	②	橙	1/6	外面ナデ、内面ミガキ様ナデ。
6	土師器・高杯	(16.7)	—	—	③①⑥④②	②	橙	杯部1/2	全面ナデ。
7	土師器・高杯	(14.7)	—	—	①③④⑥②	②	橙	杯部1/3	口縁部横ナデ。体部外面ケズリ後上位にナデが加わる。
8	土師器・高杯	(15.6)	—	—	①④③②	②	橙	杯部上位1/6	口縁部横ナデ。体部ナデ。
9	土師器・甕	17.3	—	—	①②⑥④③	②	灰白	上位のみ	口縁部横ナデ。胴部外面縦のケズリ、内面ナデ。外面吸炭。
10	土師器・甕	(22.8)	—	—	⑥①③②④	②	橙	上位1/2	口縁部横ナデ。胴部外面ケズリの後ナデ、赤色化、内面ナデ、吸炭。二次加熱。
11	土師器・甕	(13.0)	—	—	①④⑥③②	②	明赤褐	上位1/4	口縁部横ナデ。胴部外面縦のケズリの後ナデ、内面肩部輪痕を残す。胴部木口状工具による横ナデ。内外面共吸炭。
12	土師器・甕	17.2	—	—	③②①⑥④	②	橙	上位のみ	口縁部横ナデ、外面下端に稜を作り出す。胴部ナデ、内面に輪積み痕をそのまま残す。
13	土師器・甕	(17.2)	—	—	③②④⑥①	②	浅黄橙	上位1/6	内外面共表面磨滅。
14	土師器・甕	(19.0)	—	—	④①⑥③②	②	橙	口縁のみ1/8	全面横ナデ。
15	土師器・甕	(19.0)	—	—	④②③⑥①	②	にぶい褐	口縁のみ1/6	内外面横ナデ、二度の横ナデで内面に沈線、外面に稜を作り出している。一部吸炭。
16	土師器・甕	—	—	4.2	①⑥②④	②	にぶい褐	底部のみ	内外面共ナデ。上げ底様。内外面吸炭。
17	土師器・甕	—	—	6.0	⑥②④	②	にぶい橙	底部のみ	外面ケズリ。底面付近ナデ。内面ナデ。
18	土師器・甕	—	—	(7.9)	⑥④①	②	灰白	底部1/2	外面ナデ。内面木口状工具によるナデ。赤色化。二次加熱。
19	土師器・甕	—	—	6.2	①②⑥④③	②	灰黄褐	下位1/8	外面ナデ、一部ケズリ、煤付着。内面ナデ、吸炭。底面ケズリ、上げ底状。二次加熱。
20	土師器・甕	—	—	5.4	④②①⑥	②	浅黄橙	底部のみ	外面ナデ、吸炭、赤色化。内面指頭によるナデ。底面ケズリ。二次加熱。
21	土師器・甕	—	—	(6.6)	⑥①②③④	②	橙	底部1/3	内外面ナデ。底面ケズリ。内外面吸炭。内面炭化物付着。外面赤色化。二次加熱。
22	土師器・甕	—	—	6.4	①⑥③②④	②	浅黄橙	下位のみ	外面縦のケズリの後ナデが加わる、煤付着。内面ナデ、輪積み痕を残す。二次加熱。
23	土師器・埴	10.2	9.2	4.4	③②①④	②	橙	1/2	表面剥離。

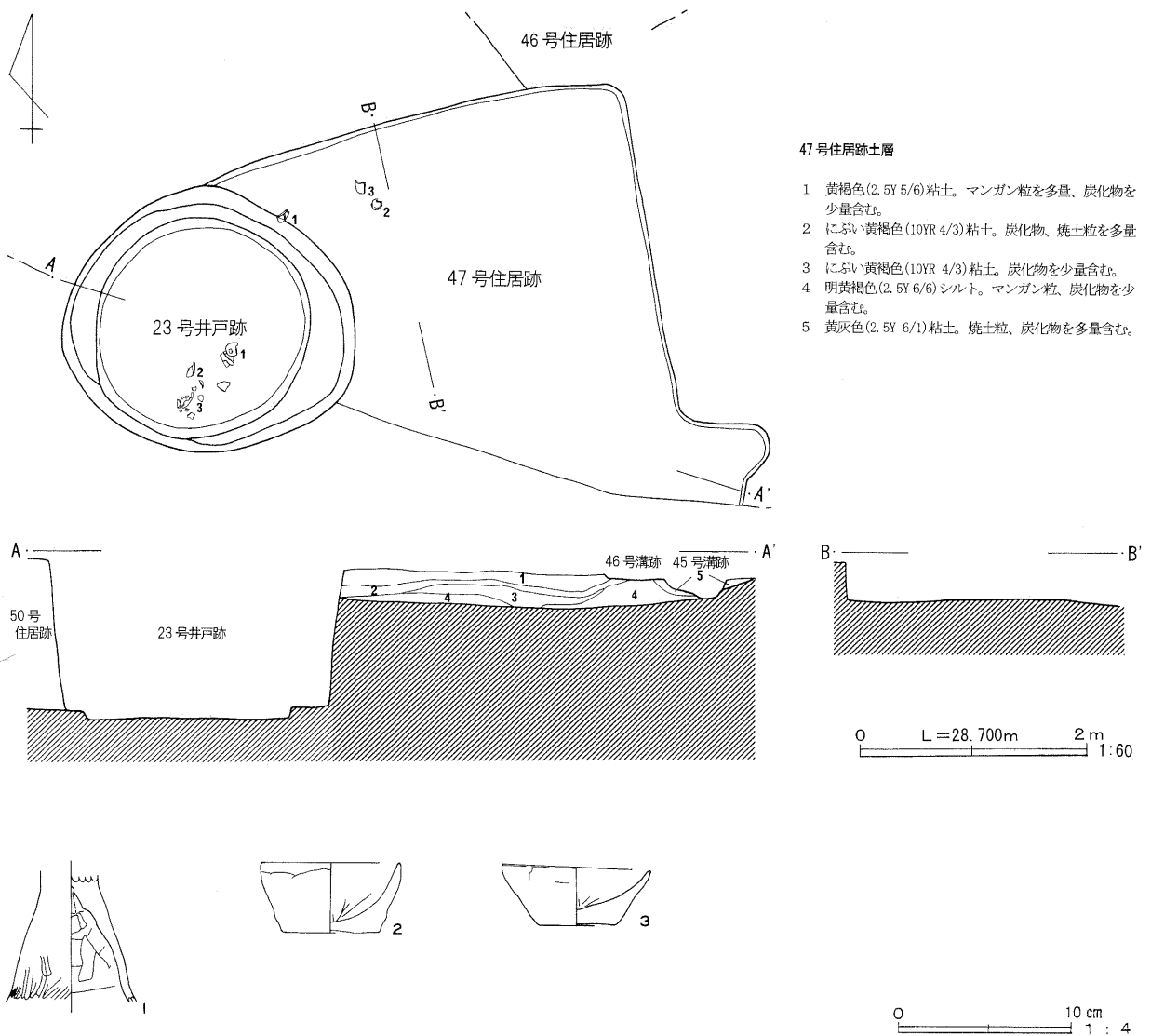
カマドと思われる台形の掘り込みが、東壁にみられる。しかし、44号・45号両溝跡によって切断されているため、詳細は不明である。掘り込みの前面幅 $90 + \alpha$  cm、奥面幅25cm、奥行き56cmを計る。掘り込み内には、多量の炭化物及び焼土粒を含む黄灰色粘土層（第5層）が堆積しているが、安定していない。

覆土は、上層が多量のマンガン粒及び少量の炭化物を含む黄褐色粘土層（第1層）、中層が多量の炭化物及び焼土粒を含むにぶい黄褐色粘土層（第2層）、下層が少量のマンガン粒及び炭化物を含む明黄褐色シルト層（第4層）である。第4層上に、少量の炭化物を含むにぶい黄褐色粘土層（第3層）が堆積している部分もある。

遺物は、床面上から、土師器高杯（1）、手捏ね土器（2・3）等が出土している。

**48号住居跡** G-8からH-8グリッドに亘って位置する。第一確認面下位からの検出である。東辺（第59図）側を45号溝跡に、北西隅を24号井戸跡によって切断されている。また、カマド煙道最奥部（第60図）上面は、A区河川跡によって削平されている。下面には、49号住居跡が位置している。

北辺4.58m、東辺4.20m、南辺3.90m、西辺4.52mを計る。南辺が直角を成さず、各隅の丸みも異なるため不整形ではあるが、ほぼ隅円正方形を呈すといえよう。主軸方位は、N-70°-Eを示す。



第58図 B区47号住居跡、23号井戸跡及び47号住居跡出土遺物

第27表 B区47号住居跡出土遺物観察表 (第58図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・高杯	—	—	—	①④②⑥	②	橙	脚部のみ 裾部欠	外面下端に縦の刷毛目を残す。他はナデ。内面木口状工具によるナデ。天井部指頭によるナデツケ。ほぼ全面吸炭。
2	土師器・手	8.1	4.1	5.7	⑥②③①	②	浅黄橙	一部欠	外面表面剥離。外面ナデ。内面放射状の連続ナデ。
3	土師器・手	8.7	3.6	4.5	②⑥③①	②	浅黄橙	一部欠	外面ナデ、内面放射状ナデ。

壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。検出面からの高さは、最高で46cmを計る。

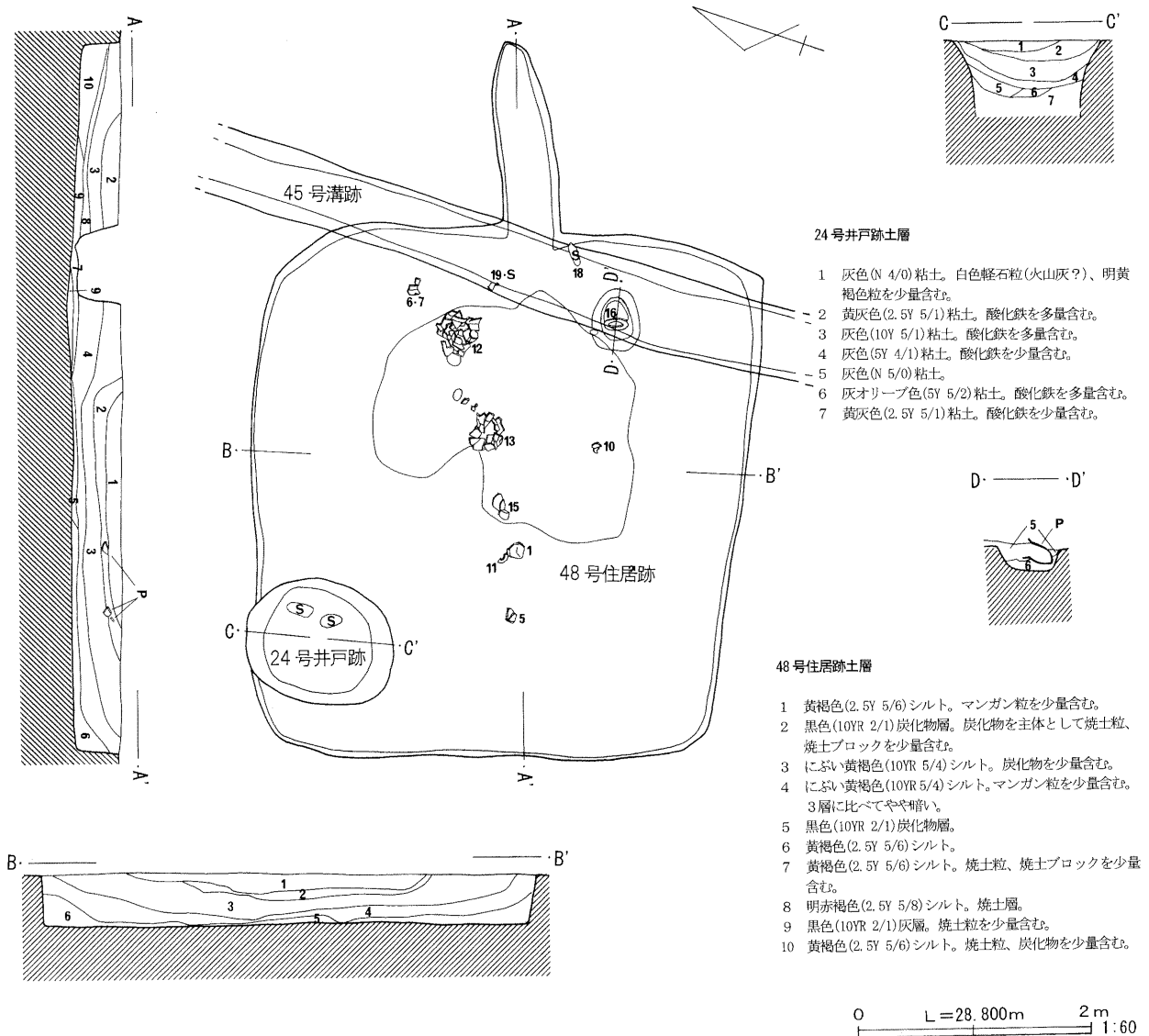
床面は、やや凹凸がみられるが、ほぼ水平面を成し、安定している。特にカマド前面は、強固に踏み固められている。ピットは、カマド右脇から検出されている。径55×45cm、深さ20cmを計り、卵型を呈する。

カマドは、煙道部を竪穴外に掘り込んで設置されている。燃烧部は、竪穴内に位置したと思われるが、45号溝跡によって切断され、詳細は不明である。ただ、竪穴壁から床面上に長さ110cm、幅50cm前後の焼土面がみられる。煙道部は、前面幅40cmを計り、奥に向け

て徐々に幅を狭めながら、奥行き1.70mの長さをもつ。奥面幅は20cmを計る。底面は、堅穴内の焼土面からほぼ水平を成し、奥壁部で直立する。奥壁部の高さは、30cmを計る。

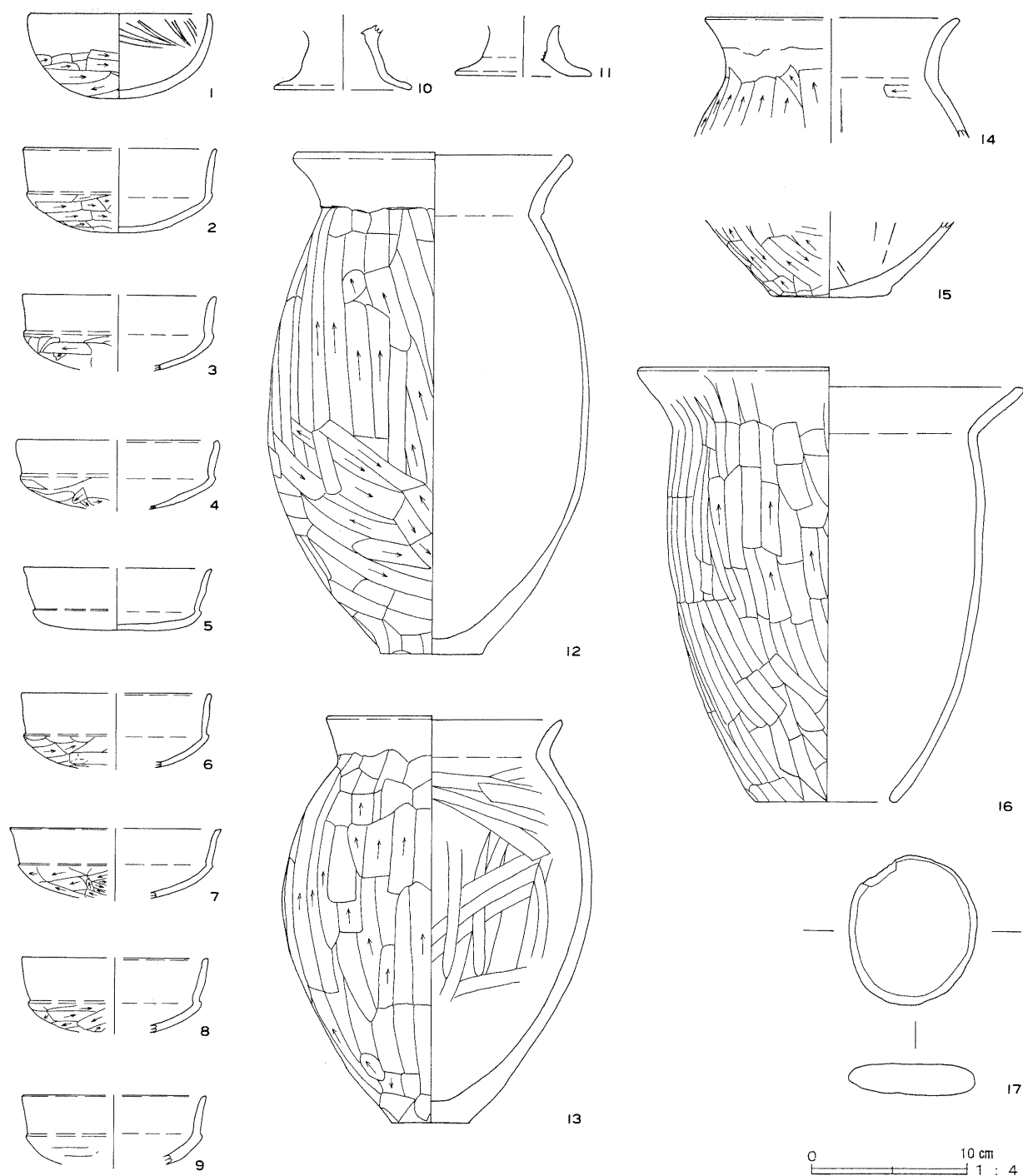
覆土は、最下層が黄褐色シルト層（第6層）であり、上位には少量のマンガン粒を含むにぶい黄褐色シルト層（第4層）、少量の炭化物粒を含むにぶい黄褐色シルト層（第3層）、少量の焼土粒・ブロックを含む黒色炭化物層（第2層）、そして最上層には、少量のマンガン粒を含む黄褐色シルト層（第1層）が堆積している。また堅穴中央部分の床面上には、黒色炭化物層（第5層）が堆積している。

遺物は、強固な踏床面上から、土師器高杯（10）、甕（12・13・15）、踏床面の周囲から、土師器杯（1・5・6・7）、高杯（11）、カマド両脇から編み物石（18～21）が出土している。また、カマド脇ピット内からは、土師器甕（16）が出土している。さらに、堅穴中央に堆積する炭化物層（第5層）上からは、土師器杯（2～4・8・9）、甕（14）、磨石（17）等が出土している。



第59図 B区48号住居跡、24号井戸跡





第60図 B区48号住居跡出土遺物

**49号住居跡** G-8からH-8グリッドに亘って位置する。第二確認面からの検出である。

(第61図) 中央北寄りを24号井戸、北西隅を25号井戸跡によって切断されている。上面には、48号住居跡、51号住居跡、47号・48号・49号各溝跡、63号土坑が位置している。

北辺6.32m、東辺5.90m、南辺6.40m、西辺7.00mを計る。西辺が屈曲し、北辺との間が直角を成さため、不整形ではあるが、ほぼ正方形を基本とした形を呈すといえよう。

第28表 B区48号住居跡出土遺物観察表 (第60図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考	
1	土師器・杯	12.0	5.6	—	②③①④⑥	②	橙	一部欠	外面口縁部横ナデ、体部横のケズリ。内面口縁部横ナデの後斜のミガキ、体部横のナデ。	
2	土師器・杯	(12.6)	5.6	—	②①③④⑥	②	橙	1/3	口縁部横ナデ。体部外面横のケズリ、内面ナデ。全体に吸炭している部分が多い。	
3	土師器・杯	(12.6)	—	—	③②①④⑥	②	橙	1/3	口縁部横ナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。吸炭した部分が多い。	
4	土師器・杯	(13.2)	—	—	③②①④⑥	②	橙	1/4	口縁部横ナデ。体部外面ケズリ、内面水拭き。吸炭した部分が多い。	
5	土師器・杯	(12.2)	4.7	—	③②①④⑥	②	橙	1/4	表面磨滅。	
6	土師器・杯	(12.4)	—	—	③④①②	②	黄橙	1/6	口縁部横ナデ。体部外面横のケズリ、内面ナデ。内外面共吸炭。	
7	土師器・杯	(13.8)	—	—	②①③④⑥	②	黄橙	1/6	口縁部横ナデ、内面煤付着。体部外面ケズリ、内面ナデ。	
8	土師器・杯	(12.2)	—	—	①②③⑥④	②	橙	1/4	口縁部横ナデ。体部外面ケズリ、ナデ。	
9	土師器・杯	(12.0)	—	—	②③①④⑥	②	橙	1/8	口縁部横ナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。	
10	土師器・高杯	—	—	(9.0)	②①③④⑥	②	橙	脚部のみ1/2	外面回転のナデ。内面ナデ。	
11	土師器・高杯	—	—	(8.9)	②①③④⑥	②	橙	脚部のみ1/3	内外面横ナデ。裾部横ナデ、端に段。	
12	土師器・甕	18.4	32.8	6.8	⑥②①③④	②	橙	一部欠	口縁部横ナデ。胴部外面上位縦、下位斜のケズリ、一部吸炭。内面ナデ、上・中位境に炭化物付着。二次加熱。	
13	土師器・甕	15.4	26.6	5.1	②③①④⑥	②	浅黄橙	一部欠	口縁部横ナデ、胴部外面縦のケズリ、中位煤付着、下位赤色化。内面上位横、中位縦のケズリ、下位ナデ。吸炭。炭化物付着。二次加熱。	
14	土師器・甕	(16.5)	—	—	⑥②①③④	②	橙	上位1/3	口縁部横ナデ、外面に輪積み痕を残す。胴部外面縦のケズリ、内面ヘラナデ、一部横のケズリ。外面浅く吸炭。	
15	土師器・甕	—	—	7.8	⑥②①④③	②	浅黄橙	底部のみ	外面ケズリ、内面ヘラナデ。吸炭。	
16	土師器・甕	25.2	28.4	8.1	⑥③①②④	②	浅黄橙	一部欠	口縁部横のナデ、内外面一部吸炭。胴部外面縦のケズリ、一部口縁にかかると。内面縦横のナデ。	
17	磨石	長さ 9.9 幅 8.7 厚さ 2.0 重さ 260g							—	
18	縄物石	長さ 17.5 幅 6.0 厚さ 3.1 重さ 490g							—	
19	縄物石	長さ 7.8 幅 4.0 厚さ 2.8 重さ 160g							—	
20	縄物石	長さ 15.0 幅 3.7 厚さ 3.3 重さ 330g							—	
21	縄物石	長さ 7.7 幅 5.0 厚さ 3.8 重さ 210g							—	

主軸方位は、N-3°-Wを示す。

壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。検出面からの高さは、最高で55cmを計る。

床面は、やや凹凸がみられるが、ほぼ水平面を成し、安定している。ピット・炉等は、検出されていない。

覆土は、最下層が微量の炭化物粒を含む灰白色粘土層（第4層）であり、上位にはやや多量のマンガン粒を含むオリーブ黄色粘土層（第3層）、少量の炭化物粒を含む黄灰色粘土層（第2層）、そして最上層には、極多量のマンガン粒及び少量の炭化物粒を含むぶい黄褐色シルト層（第1層）が堆積している。また第一層の下位には、少量の炭化物を部分的に含む灰色シルト層（第5層）が堆積している部分的にみられる。

遺物は、図示可能なものは、出土していない。

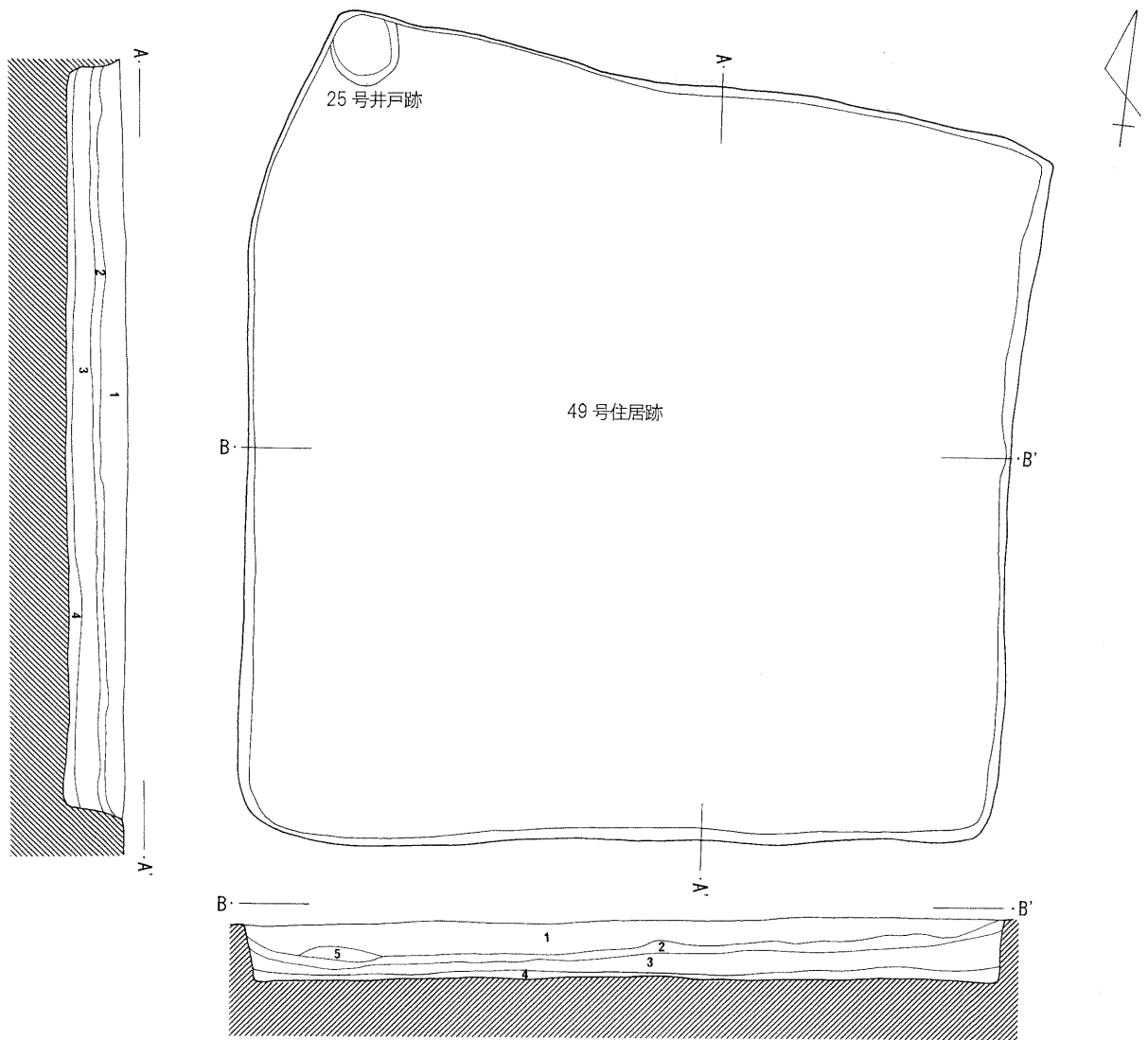
**50号住居跡** H-8からI-8グリッドに亘って位置し、南側は調査区外に及んでいる。第二確認面(第62図)からの検出である。

南辺を23号井戸、北西隅を26号井戸跡によって切断されている。上面には、47号住居跡、51号住居跡、48号溝跡が位置している。

北辺5.50m、東辺5.85m、南辺6.30+αm、西辺5.60+αmを計り、台形を呈する。主軸方位は、N-6°-Wを示す。

壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。検出面からの高さは、最高で38cmを計る。

床面は、やや凹凸がみられるが、ほぼ水平面を成し、安定している。ピット・炉等は、



49号住居跡土層

- 1 にふい黄褐色(10YR 5/4)シルト(やや砂質)。マンガング粒を極多量に、部分的に炭化物を少量含む。
- 2 黄灰色(2.5Y 6/1)粘土。炭化物を少量含む。
- 3 オリーブ黄色(5Y 6/3)粘土。マンガング粒をやや多量含む。
- 4 灰白色(5Y 7/1)粘土。炭化物粒を微量含む。
- 5 灰色(5Y 6/1)シルト。炭化物を部分的に少量含む。

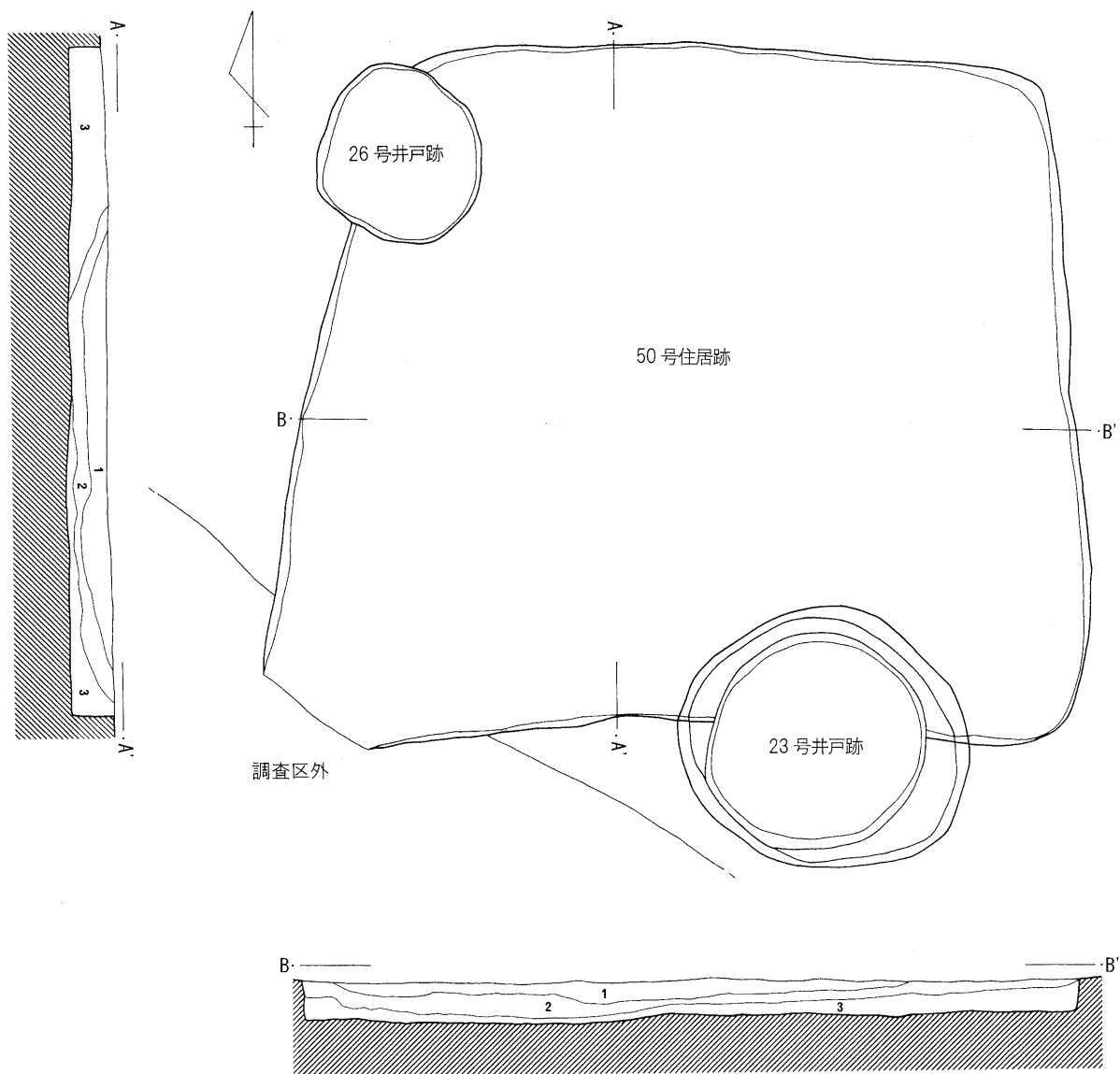
0 L=27.800m 2m 1:60

第61図 B区49号住居跡

検出されていない。

覆土は、最下層が、多量の酸化鉄、少量のマンガング粒、微量の炭化物粒を含む灰色粘土層（第3層）であり、中位は、第3層とほぼ同一であるが、含有物の粒子が細くなる（第2層）、そして最上層には、多量の酸化鉄、少量のマンガング粒、微量の炭化物粒を含む浅黄色シルト層（第1層）が堆積している。

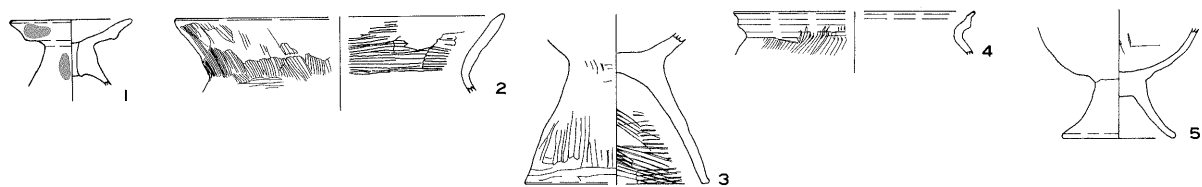
遺物は、第3層中から、土師器器台（1）、台付甕（2～4）、台付椀（5）等が出土している。



50号住居跡土層

- 1 浅黄色(7.5Y 7/3)シルト。酸化鉄を多量、マンガン粒を少量、炭化物を微量含む。
- 2 灰色(7.5Y 6/1)粘土。酸化鉄を多量、マンガン粒少量、炭化物を微量含む。
- 3 灰色(7.5Y 5/1)粘土。酸化鉄を多量、マンガン粒少量、炭化物を微量含む。

0 L=27.700m 2m 1:60



0 10cm 1:4

第62図 B区50号住居跡及び出土遺物

第29表 B区50号住居跡出土遺物観察表（第62図）

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・器台	6.6	—	—	⑥①④③	②	橙	脚部欠	全体に表面剥離。一部に朱塗残存。
2	土師器・台付甕	(17.8)	—	—	⑥①④	②	橙	口縁部1/4	外面縦、肩部横、内面横の刷毛目。全面吸炭。
3	土師器・台付甕	—	—	(10.0)	②④③①⑥	②	浅黄橙	脚部1/3	外面及び胴部内面磨滅した部分多。内面吸炭。二次加熱。
4	土師器・台付甕	(13.1)	—	—	⑥③④①	②	にぶい橙	口縁部1/8	外面煤付着。
5	土師器・台付碗	—	—	6.2	②③④①	①	灰白	碗上位欠	全面ナデ。

51号住居跡 G-8・9からH-8・9グリッドに亘って位置する。第一確認面下位からの検出である（第63図）。

（第64図） 26号～29号、4基の井戸跡に切断されている。また上面は、47号・48号各溝跡に一部（第65図）削平されている。下面には、49号住居跡が位置している。

北辺5.20m、東辺7.30+ $\alpha$ m、南辺3.95+ $\alpha$ m、西辺7.50mを計り、長方形を基本とするが、長辺の東西両辺が脹らむため、不整形を呈するようになる。主軸方位は、N-91°-Eを示す。

壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。検出面からの高さは、最高で60cmを計る。

床面は、ほとんど凹凸がみられず、ほぼ水平面を成し、安定している。ピットは、竪穴対角線上に4ヶ所、北東隅に1ヶ所検出されている。対角線上の4ピットは、円形を基本とし、北東ピットが径75×62cm、深さ35cm、南東ピットが径70×65cm、深さ17cm、南西ピットが径58×56cm、深さ27cm、北西ピットが径59×48cm、深さ34cmを計る。各ピットの芯々間距離は、北辺が3.05m、東辺が4.85m、南辺が3.10m、西辺が4.42mを計る。竪穴各辺に平行しており、柱穴と思われる。北東隅ピットは、円形を基本とし、径70×63cm、深さ20cmを計る。

カマドは、東壁中央及び北東隅寄り2ヶ所に設置されている。

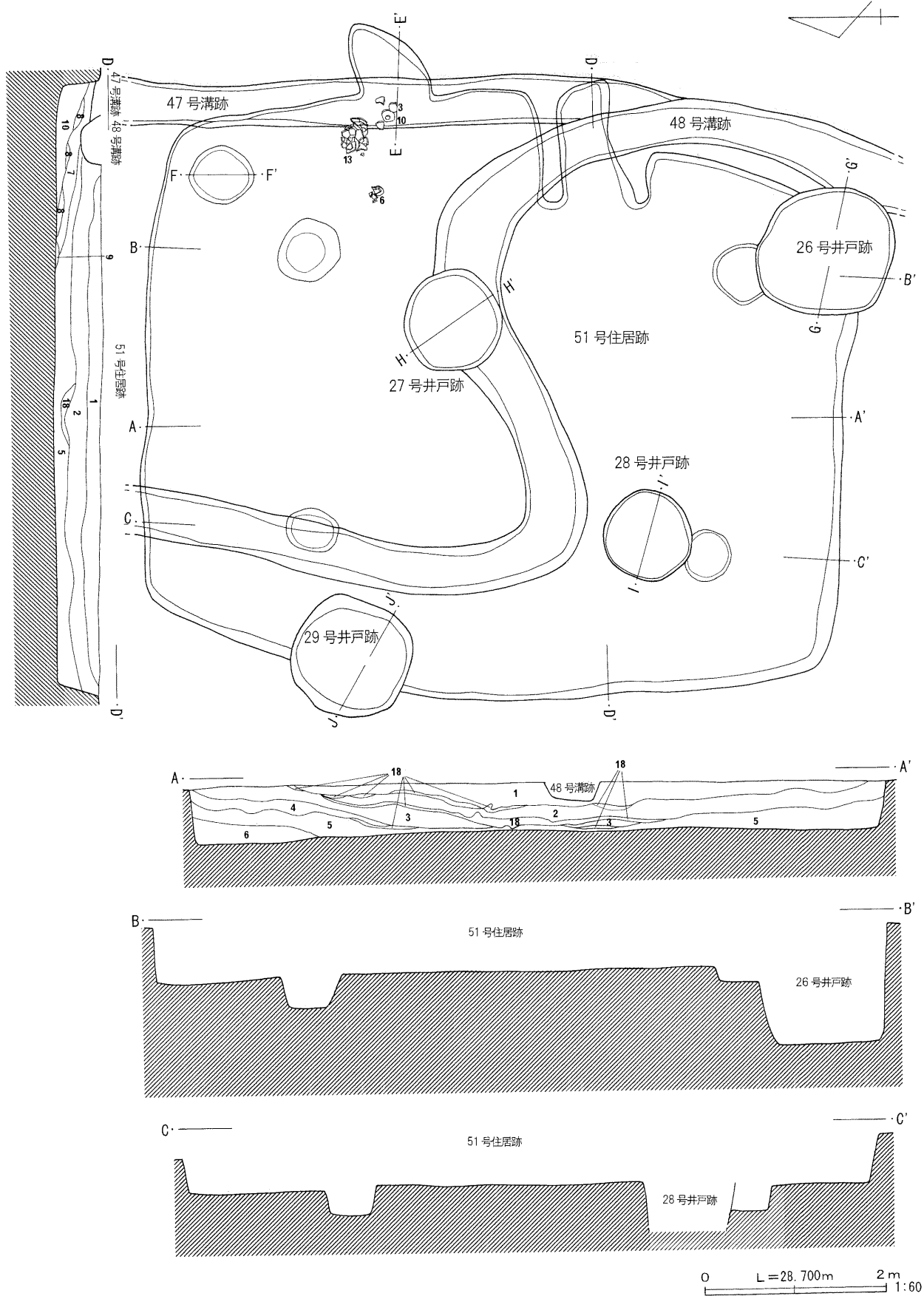
中央カマドは、全て竪穴内に設置され、前面幅60cm、奥面幅40cm、奥行き1.30mの範囲を両袖で囲繞している。右袖の外壁が竪穴内にせり出すため、右袖の外側は、60cmの長さしかないこととなる。焼土面が検出されておらず、明確なものではない。全体に、ほぼ水平面をもって奥壁に向かい、奥壁はほぼ垂直に立ち上がって、38cm前後の段差を成す。

北東隅寄りカマドは、前面幅75cm、奥行き.80cm、北側に偏った三角形に掘り込まれて設置されている。奥壁から70～120cmの範囲が火床を成していると思われるが、明確なものではない。全体に、ほぼ水平面をもって奥壁に向かい、奥壁はほぼ垂直に立ち上がって、50cm前後の段差を成す。

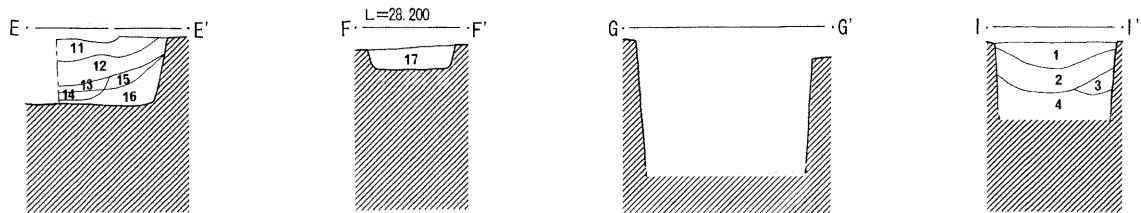
これら両カマド共に機能が明確でないが、土層・遺物出土状況等、両者の間に差がみられないことから、両カマドが並存した可能性が高い。

覆土は、いずれもにぶい黄褐色粘土であり、純層（第4層）、マンガング粒と酸化鉄を含む層（第1層）、第1層に炭化物が加わる層（第2層）、酸化鉄を含まず炭化物とマンガング粒を含む層（第3層・第5層）に区分されるが、いずれも投入土の様相を呈し、各層の間に炭化物純層（第18層）が厚く堆積している。

遺物は、北東隅寄りカマド焼土面上から土師器杯（3）、\_（10）、焼土面北脇から土師

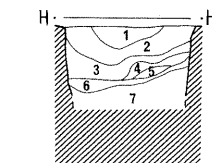


第63図 B区51号住居跡、26～29号井戸跡(1)



#### 51号住居跡土層

- 1 にぶい黄褐色(10YR 5/4)粘土。マンガン粒を多量、酸化鉄を少量含む。
- 2 にぶい黄褐色(10YR 4/3)粘土。マンガン粒を多量、酸化鉄、炭化物を少量含む。
- 3 にぶい黄褐色(10YR 5/4)粘土。マンガン粒、炭化物を少量含む。
- 4 にぶい黄褐色(10YR 5/4)粘土。
- 5 にぶい黄褐色(10YR 5/4)粘土。マンガン粒、炭化物を少量含む。
- 6 にぶい黄褐色(10YR 4/3)粘土。
- 7 にぶい黄褐色(10YR 4/3)粘土。焼土粒、炭化物を少量含む。
- 8 にぶい黄褐色(10YR 4/3)粘土。焼土粒、炭化物を多量含む。
- 9 黒褐色(10YR 3/1)灰層。
- 10 にぶい黄褐色(10YR 4/3)粘土。炭化物、焼土粒を微量含む。
- 11 にぶい黄褐色(10YR 5/3)粘土。マンガン粒を多量含む。
- 12 にぶい黄褐色(10YR 4/3)シルト。マンガン粒を少量含む。
- 13 明赤褐色(2.5YR 5/8)焼土層。炭化物を少量含む。
- 14 黒褐色(2.5Y 3/1)灰層。焼土粒を少量含む。
- 15 明黄褐色(2.5Y 6/6)シルト。炭化物を少量含む。
- 16 にぶい黄褐色(10YR 4/3)シルト。炭化物を少量含む。
- 17 にぶい黄褐色(10YR 4/3)シルト。マンガン粒、炭化物を少量含む。
- 18 炭化物層。

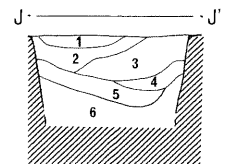


#### 27号井戸跡土層

- 1 灰褐色(7.5YR 5/2)シルト。白色軽石粒(火山灰?)、マンガン粒、緑灰色粘土を少量含む。
- 2 黄灰色(2.5Y 5/1)シルト。明黄褐色粘土を多量に、白色軽石粒(火山灰?)を少量含む。
- 3 灰褐色(7.5YR 4/2)粘土。明黄褐色粘土、炭化物を少量含む。
- 4 明黄褐色(2.5Y 7/6)粘土。灰褐色粘土を少量含む。
- 5 灰褐色(7.5YR 4/2)粘土。
- 6 明黄褐色(2.5Y 7/6)粘土。灰褐色粘土を少量含む。
- 7 灰褐色(7.5YR 4/2)粘土。明黄褐色粘土を少量含む。

#### 28号井戸跡土層

- 1 褐灰色(7.5YR 5/1)粘土。白色軽石粒(火山灰?)、明黄褐色粘土を少量含む。
- 2 褐灰色(7.5YR 5/1)粘土。明黄褐色粘土、炭化物を少量含む。
- 3 明黄褐色(2.5Y 6/8)粘土。褐灰色粘土を少量含む。
- 4 褐色(10YR 4/6)粘土。酸化鉄、明黄褐色粘土、褐灰色粘土を少量含む。



#### 29号井戸跡土層

- 1 黄灰色(2.5Y 6/1)粘土。黒色粘土、酸化鉄を多量含む。
- 2 黄灰色(2.5Y 6/1)粘土。酸化鉄、黒色粘土を少量含む。
- 3 灰オリーブ色(7.5Y 6/2)粘土。黒色粘土を少量含む。
- 4 灰オリーブ色(7.5Y 5/2)粘土。黒色粘土を少量含む。
- 5 灰オリーブ色(5Y 5/2)粘土。酸化鉄を少量含む。
- 6 灰オリーブ色(7.5Y 6/2)粘土。酸化鉄を少量含む。

### 第64図 B区51号住居跡、26～29号井戸跡(2)

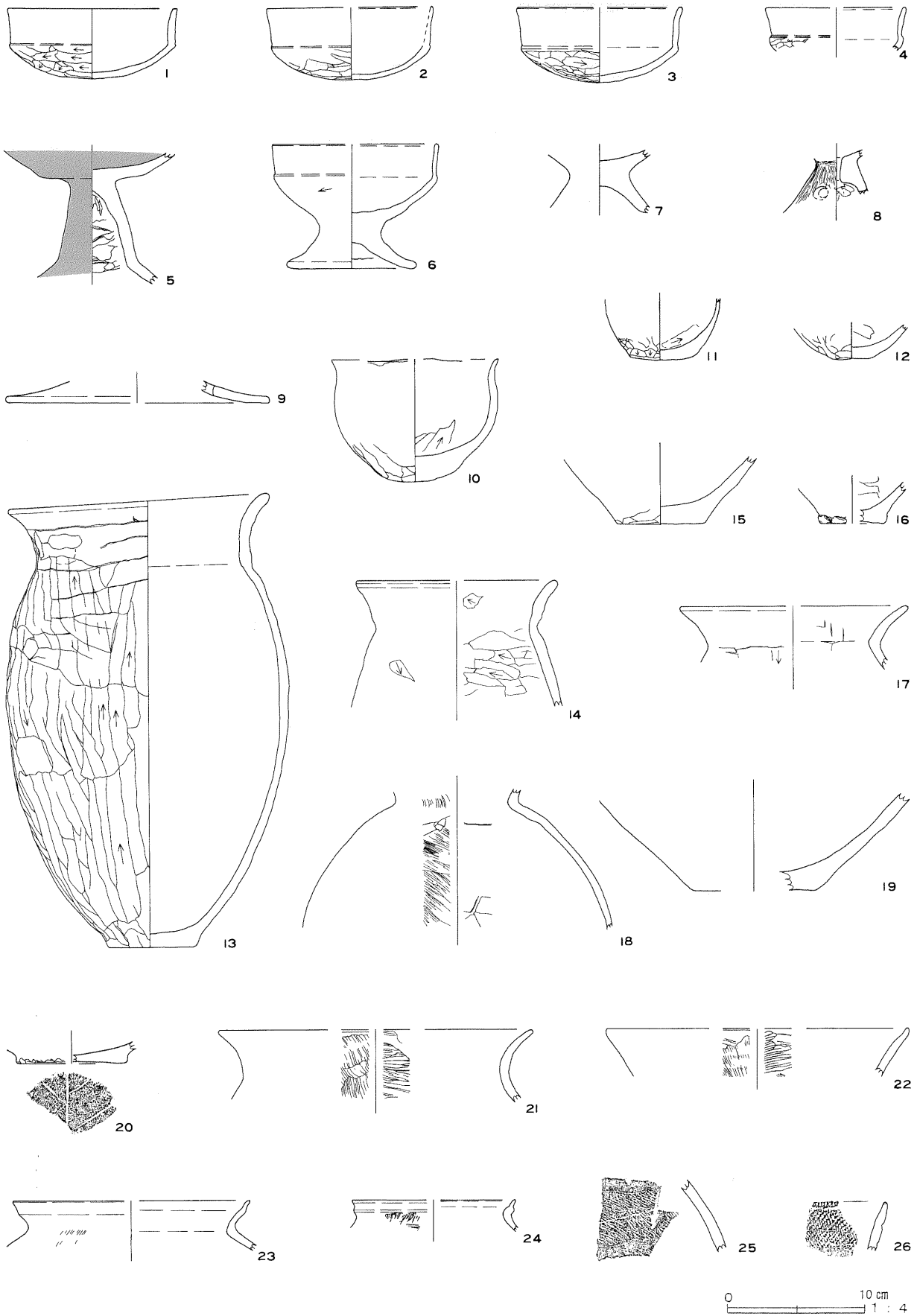
器甕(13)、竪穴中央寄りから土師器高杯(6)が出土している。その他覆土中から、土師器杯(1・2・4)、高杯(5・7)、器台(8・9)、\_(11・12)、甕(14～24)、壺(25)、深鉢(26)、長円礫(編み物石27・28)等が出土している。

**52号住居跡** F-8グリッドに位置し、北側は調査区外に及んでいる。第一確認面下位からの検出で(第66図)ある。

(第67図) 東部を47号溝跡、南部を46号溝跡によって切断されている。南接する53号住居跡も46号溝跡によって切断されており、本住居跡との重複関係は明確ではないが、53号住居跡カマドの北側に確認された本住居跡の床面が、カマド南側には及んでいないこと、53号住居跡のカマド内に本住居跡の立ち上がりが見られなかったことから、53号住居跡に切断されたもの、と判断された。

このため、規模・形態共に不明である。東西両辺間距離が計測可能な部分で6.60mを計るものの、その部分がカマドの設置場所であるため、竪穴そのものの規模とはならない可能性が高い。西辺と直交する主軸方位は、N-97°-Eを示す。

壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。検出面からの高さは、最高で40cmを計る。



第65図 B区51号住居跡出土遺物



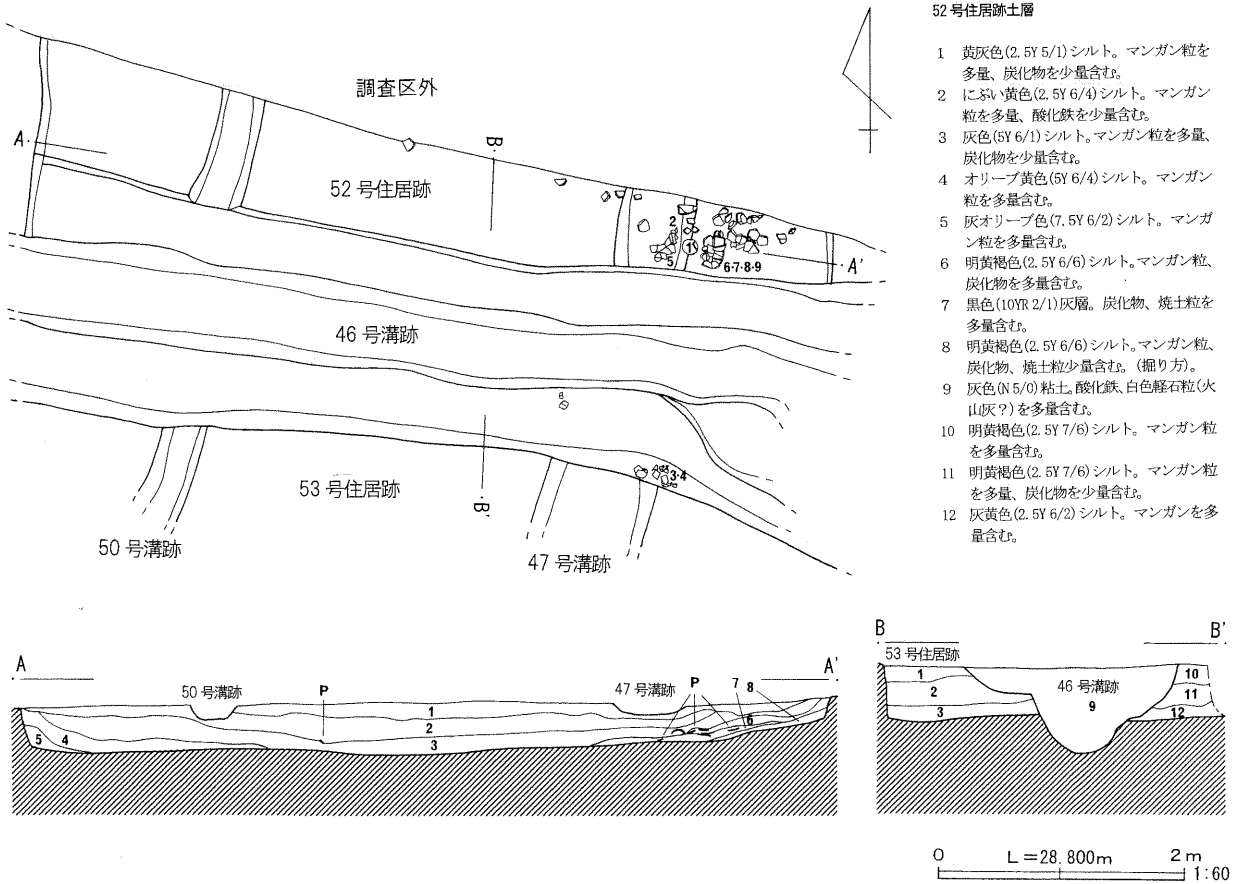
第30表 B区51号住居跡出土遺物観察表 (第65図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・杯	12.3	5.1	—	⑥④①	②	橙	一部欠	口縁部横ナデ。体部外面ケズリ、内面水拭き。内面及び外面口唇部吸炭。
2	土師器・杯	(12.1)	5.3	—	③⑥④①	②	明赤褐	1/4	口縁部横ナデ、内面剥離。体部外面横のケズリ、内面ナデ。
3	土師器・杯	(12.0)	(5.5)	—	⑥③④①	②	明赤褐	1/4	口縁部横ナデ。体部外面横のケズリ、内面ナデ。吸炭した部分が多い。
4	土師器・杯	(10.1)	—	—	③①④	②	明赤褐	口縁部1/4	口縁部横ナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。
5	土師器・高杯	—	—	—	⑥①④	②	黒褐	口縁・脚裾欠	杯部内外面共ナデ。脚部外面縦のミガキ様ナデ、裾部ナデ。内面天井部縦、以下横の木口状工具によるナデ、裾部ナデ。杯部全面、脚外面朱塗。
6	土師器・高杯	(12.1)	9.1	9.5	⑥①③④	②	橙	口縁部1/2欠	杯部口縁横ナデ、体部表面剥離、外面一部ケズリ痕、内面ナデ。脚部全面横ナデ。
7	土師器・高杯	—	—	—	⑥③④①	②	橙	口縁・脚部欠	全面ナデ。
8	土師器・器台	—	—	—	⑥①④③	②	橙	接合部のみ	脚部外面縦のミガキ、三方透かし。内面天井部指頭によるナデツケ、中位以下ナデ。孔は中心がずれ径1.6mmを計る。
9	土師器・器台	—	—	(19.1)	③②⑥①	②	浅黄橙	脚裾1/8	脚部穿孔。内外面共横のナデ。
10	土師器・	(12.2)	(9.0)	—	③①⑥④	②	橙	口縁部3/4欠	口縁部横のナデ。胴部外面上・中位スリップ状のナデ、下位～底面ケズリ、丸底、煤付着。内面上・中位ナデ、底面ケズリ、炭化物付着。一部赤色化。二次加熱。
11	土師器・	—	—	—	①④③⑥	②	にぶい褐	下位のみ	外面底部周辺ケズリ、下端指頭による押圧、下位スリップ状のナデ、底面ナデ、丸底。内面ナデ、一部ケズリが加わる。
12	土師器・	—	—	2.7	④⑥①③	②	橙	下位のみ	全面ナデ。外面下端に面取り部分がみられる。
13	土師器・甕	19.1	33.0	6.5	①③⑥④	②	にぶい橙	一部欠	外面口縁部横ナデ、胴部縦のケズリ、肩以下煤付着。内面口縁～胴部上位木口状工具によるナデ、下位ナデ、一部炭化物付着。二次加熱。
14	土師器・甕	(14.7)	—	—	⑥①③④	②	浅黄橙	上位1/3	口縁部横ナデ、内面一部ケズリが加わる。胴部外面縦のケズリの後ナデ、内面ケズリ様ナデ、一部横のケズリ。内外面吸炭。二次加熱。
15	土師器・甕	—	—	6.4	⑥①④③	②	にぶい赤褐	底部のみ	外面スリップ状のナデ、底部周辺横のケズリ。内面ナデ、内外面吸炭した部分が多い。二次加熱。
16	土師器・甕	—	—	(4.7)	③①⑥④	②	橙	底部1/3	外面ナデ、底部周辺底面よりスリップ、煤付着。内面木口状工具によるナデ。二次加熱。
17	土師器・甕	(16.5)	—	—	⑥④①	②	橙	口縁部1/5	口縁部外面縦のナデ、内面ヘラナデ。胴部外面縦のケズリ、内面ヘラナデ。吸炭。
18	土師器・甕	—	—	—	③⑥①④	②	浅黄橙	上位1/8	外面刷毛目、肩部ナデが加わる、煤付着。内面ナデ、輪積み痕を残す、一部吸炭。二次加熱。
19	土師器・甕	—	—	(9.0)	①⑥③	②	明褐灰	下位1/5	全面ナデ。
20	土師器・甕	—	—	(8.1)	③①②④	②	淡橙	底部1/4	内外面共ナデ。木の葉底。
21	土師器・甕	(22.9)	—	—	①③④⑥	②	明赤褐	口縁部1/10	口縁部外面縦、内面横の刷毛目。胴部外面縦の刷毛目、内面ナデ。全面吸炭。赤色化。二次加熱。
22	土師器・甕	(22.0)	—	—	⑥①④③	②	橙	口縁部1/8	外面縦の刷毛目、一部横のナデが加わる、吸炭。内面横の刷毛目。
23	土師器・甕	(17.2)	—	—	⑥①④	②	橙	口縁部1/4	表面磨滅しており整形痕不詳。胴外面括れ下に刷毛目がわずかに残存。
24	土師器・甕	(11.9)	—	—	③①⑥④	②	橙	口縁部1/8	口縁部横ナデ。胴部外面ナデ、括れ以下一部刷毛目。内面ナデ。
25	土師器・壺	—	—	—	③①④②	②	にぶい橙	—	
26	土師器・深鉢	—	—	—	①⑥②③	②	にぶい橙	—	
27	縄物石	長さ 15.6 幅 5.3 厚さ 1.8 重さ 245g							
28	縄物石	長さ 6.3 幅 2.0 厚さ 1.2 重さ 20g							

床面は、大きく起伏し、安定していない。ピット等は、検出されていない。

カマドは、東壁に設置されていたと思われる。東壁から竪穴内へ1.90mの地点から、多量の炭化物及び焼土粒を含む黒色灰層（第7層）が、東壁から竪穴内へ34cmの地点奥まで確認されている。第7層は、1.56m続くことになるが、竪穴内の開始地点から1.14mまで水平面を成すものが、この地点で緩傾斜をもつようになる。また開始地点から70～80cmの地点に土師器杯（1）が伏せた状態で検出され、支脚に利用されていた様相を呈している。この地点より前が火床、後ろが燃焼部となり、底面の角度変換点より奥が煙道となる。煙道は、一旦10cm程立ち上がった後緩傾斜となり、奥壁へと移行する。奥壁は、ほぼ垂直に22cm程立ち上がる。

覆土は、上層から、多量のマンガン粒及び少量の炭化物を含む黄灰色シルト層（第1層）、多量のマンガン粒及び少量の酸化鉄を含むにぶい黄色シルト層（第2層）、多量のマンガン



第66図 B区52号住居跡

粒及び少量の炭化物を含む灰色シルト層（第3層）、多量のマンガンを含むオリーブ黄色シルト層（第4層）が堆積し、壁際の一部には最下層として、多量のマンガンを含む灰オリーブ色シルト層（第5層）のみられる部分もある。

遺物は、カマド内に集中している。支脚として利用されていた土師器杯（1）を始め、杯（2）甕（5）が火床部分から、燃焼部からは土師器甕（6～9）の底部ばかりが出土している。逆に、53号住居跡カマド北側からは、土師器甕（3・4）の口縁部ばかりが出土している。その他、剣形模造品（15）、磨石（16・17）も出土している。なお、羽釜（11）、灰釉杯（12）、須恵器甕（13）は、46号溝跡に帰属するものである。

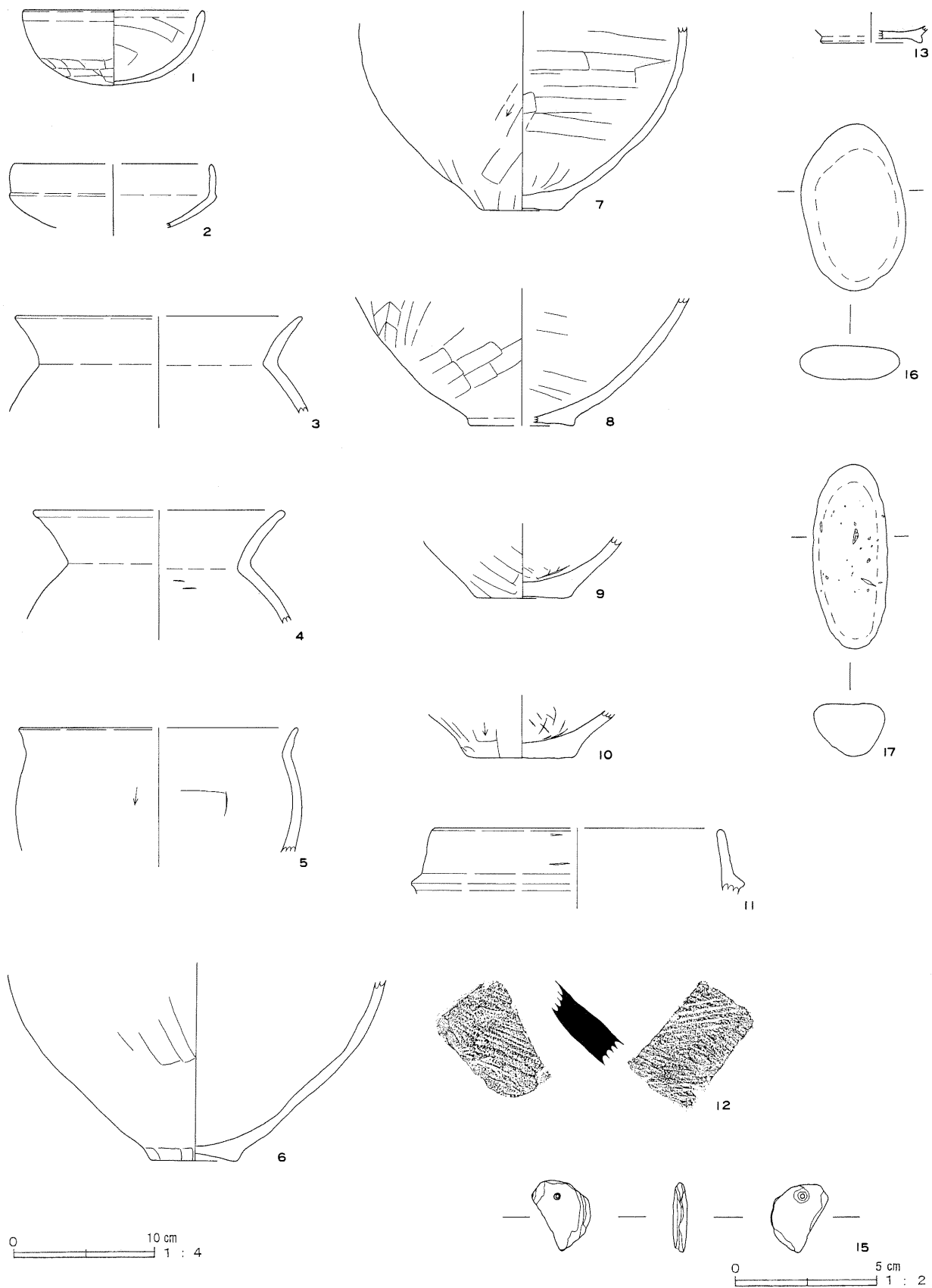
**53号住居跡** F-8・9からG-8グリッドに亘って位置する。第一確認面からの検出である。

(第68図) 52号住居跡を切断していると思われるが、46号溝跡及び1号不明遺構に切断されている。(第69図) さらに上面は、47号・48号・50号各溝跡に削平されている。また下面には、55号住居跡(第70図) 居跡が位置している。

このため、規模・形態共に不明であるが、計測可能な部分では、東西両辺間距離が6.28m、東西両辺間距離が6.95mを計り、やや南北間が長いものの、ほぼ正方形を呈すると思われる。主軸方位は、N-80°-Eを示す。

壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。検出面からの高さは、最高で50cmを計る。

床面は、かなり凹凸がみられるが、踏み固められ面もみられ、安定している。ピット等



第67图 B区52号住居跡出土遺物

第31表 B区52号住居跡出土遺物観察表（第67図）

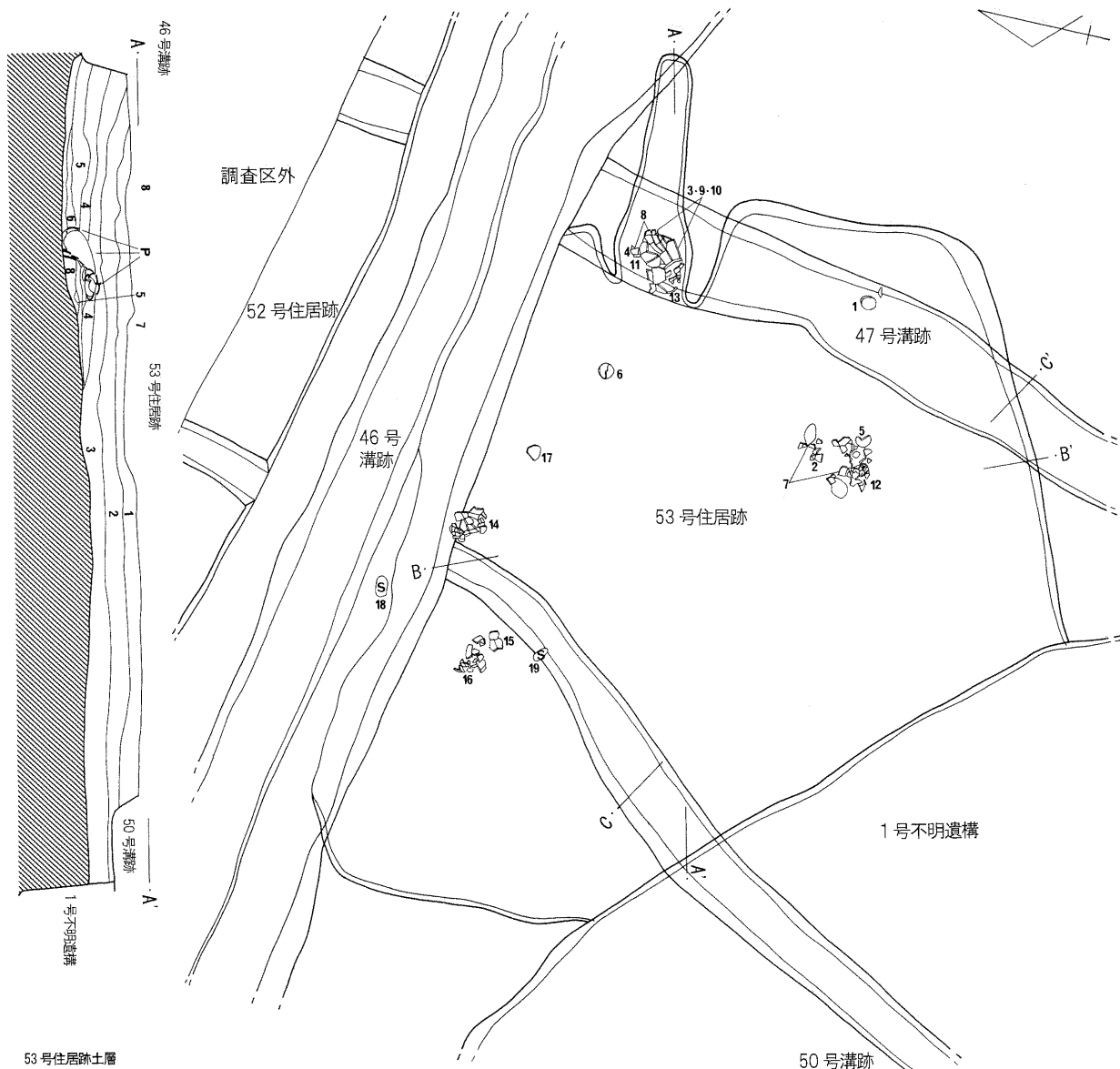
No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・杯	13.0	5.4	—	⑥2①④	②	橙	一部欠	口縁部横ナデ。体部外面上位ナデ、下位ケズリの後ナデ。内面上位木口状工具、下位指頭によるナデ。口縁部内外面共吸炭。
2	土師器・杯	(14.4)	—	—	②①④③	②	橙	1/4	口縁部横ナデ。体部外面ケズリ横ナデ、内面ナデ。内外面黒色化。
3	土師器・甕	(20.6)	—	—	⑥2①	②	橙	上位1/8	内外面全体にナデ。表面磨滅した部分が多い。
4	土師器・甕	(18.0)	—	—	⑥①③④	②	橙	上位1/4	口縁部横ナデの後横のナデ。胴部外面ケズリの後ナデ、内面ナデ、一部輪積み痕。
5	土師器・甕	(20.0)	—	—	⑥2①④	②	橙	上位1/3	口縁部横ナデ。胴部外面ケズリの後ナデ、内面ヘラナデ、炭化物付着。二次加熱。
6	土師器・甕	—	—	(6.2)	⑥2①④	②	橙	下位1/3	内外面共剥離した部分が多い。外面中位斜のケズリ、下位スリップ状のナデ。内面横のナデ。上げ底。全体に赤色化。二次加熱。
7	土師器・甕	—	—	5.6	⑥2①④	②	橙	下位1/3	外面底部付近縦のケズリ、中位ケズリ様ナデ、一部ケズリ。底面ケズリ、煤付着、一部赤色化。内面中位木口状工具による横、底部縦のナデ、炭化物付着。二次加熱。
8	土師器・甕	—	—	(7.6)	⑥2①	②	明赤褐	下位1/3	外面底面までケズリ、吸炭。内面ヘラナデ、炭化物付着。二次加熱。
9	土師器・甕	—	—	(6.2)	⑥2④①	②	明赤褐	下位1/3	外面ケズリ、内面ヘラナデ。吸炭。二次加熱。
10	土師器・甕	—	—	(7.8)	⑥2④①	②	橙	底部1/2	外面縦のケズリの後一部ナデが加わる、赤色化。内面ヘラナデ、吸炭。二次加熱。
11	土師器・羽釜	(21.0)	—	—	⑥2①③	②	橙	口縁部1/8	全面ナデ。
12	須恵器・甕	—	—	—	①⑥	②	灰	—	
13	灰釉陶器・杯	—	—	(7.4)	①②	②	灰白	底部1/4	
14	灰釉陶器・壺	—	—	—	—	—	—	—	図なし。
15	滑石製模造品	—	—	—	—	—	—	—	
16	砥石	長さ 7.2 幅 12.1 厚さ 2.4 重さ 360g							
17	砥石	長さ 5.2 幅 13.3 厚さ 3.8 重さ 390g							

第32表 B区53号住居跡出土遺物観察表（第69・70図）

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・杯	12.3	5.5	—	⑥①②④	②	浅黄橙	一部欠	内面表面剥離。外面口縁横ナデ。体部ケズリ。
2	土師器・杯	12.4	5.3	—	⑥①②④	②	黄橙	4/5	表面磨滅。体部内面底部押圧。
3	土師器・杯	(12.5)	—	—	⑥①④②	②	明赤褐	1/3	口縁部横ナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。吸炭。赤色化した部分が多い。二次加熱。
4	土師器・杯	(14.1)	5.7	—	⑥③①②④	②	橙	2/5	口縁部横ナデ。体部外面ケズリ、内面上位横ナデ、中央部ナデ。
5	土師器・杯	12.7	5.0	—	③⑥①②④	②	橙	一部欠	口縁部横ナデ。体部外面ケズリ、内面中央押圧による窪み。
6	土師器・杯	12.8	6.0	—	③⑥①②④	②	浅黄橙	一部欠	口縁部横ナデ。胴部外面ケズリ、内面回転ナデ。
7	土師器・杯	12.1	—	—	③⑥①④	②	橙	一部欠	口縁部横ナデ。体部外面ケズリ、内面回転のナデ。
8	土師器・杯	(12.4)	—	—	⑥2①③④	②	橙	1/5	外面磨滅。内面剥離。吸炭。体部外面ケズリ痕。
9	土師器・杯	—	—	—	⑥①④③	②	橙	口縁部欠	口縁部横ナデ。体部外面ケズリ、内面磨滅。
10	土師器・高杯	12.3	9.6	9.6	⑥③①④	②	明赤褐	一部欠	杯部内外面共剥離。脚部回転のナデ、内面裾部木口状工具によるナデ。全面吸炭。赤色化。二次加熱。
11	土師器・甕	18.0	37.9	7.5	⑥①②④③	②	浅黄橙	一部欠	外面口縁～胴部上位ナデ、下位縦のケズリ、炭化物付着。内面ナデ、内外面輪積み痕を残す、底面及び上位輪状に炭化物付着。二次加熱。
12	土師器・甕	16.1	39.6	6.0	⑥①④③	②	浅黄橙	4/5	口縁部横ナデ。胴部外面縦のケズリ、肩部ナデが加わる。煤付着。内面ナデ。二次加熱。
13	土師器・甕	17.1	24.6	6.0	⑥①③④	②	にぶい橙	一部欠	口縁部横ナデ。胴部外面斜のケズリ、下位赤色化。内面接合部横のケズリ、他横のナデ。炭化物付着。二次加熱。
14	土師器・甕	(18.2)	—	—	⑥①③④	②	にぶい橙	底部欠4/5	口縁部横ナデ。胴部外面縦のケズリ、吸炭。内面上位横のナデツケ、中位ナデ、中～下位の接合部横のケズリ。炭化物付着。
15	土師器・甕	(19.5)	—	—	⑥①③④	②	にぶい橙	上位1/2	口縁部横ナデ。胴部外面縦～斜のケズリ。内面横のナデ。吸炭。
16	土師器・甕	(16.4)	(14.2)	7.1	⑥③①④	②	にぶい橙	3/5	歪みが大きい。外面ケズリ、口縁の一部ナデ。内面ナデ。吸炭。
17	土師器・甕	—	—	6.6	⑥①③④	②	橙	底部のみ	外面ケズリ。内面ヘラナデ、一部指頭によるナデツケ。
18	砥石	長さ 18.3 幅 12.9 厚さ 4.2 重さ 1,800g							
19	砥石	長さ 16.2 幅 4.5 厚さ 4.6 重さ 640g							
20	砥石	長さ 13.1 幅 5.0 厚さ 5.0 重さ 580g							

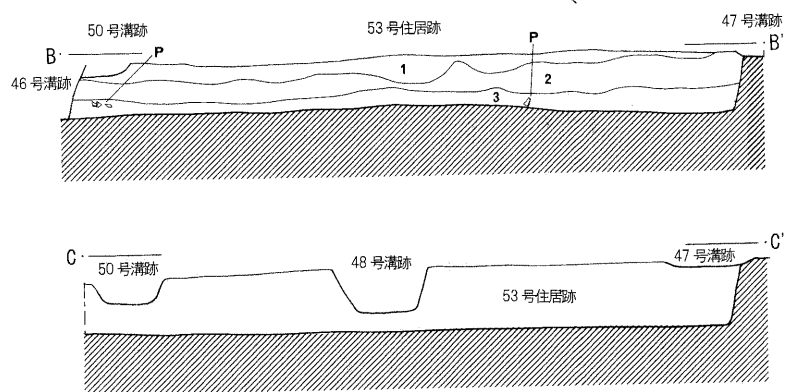
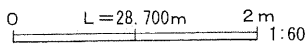
は、検出されていない。

カマドは、東壁に設置されている。両袖は、竪穴内に内側へ折り込むように設けられ、長さは不揃いであり、左（北）が60cm、右（南）が100センチを計る。両袖間の幅は、前面55cm、中央65cm、奥面45cm、この間の奥行き75cmを計る。火床・燃焼部の区別は明確

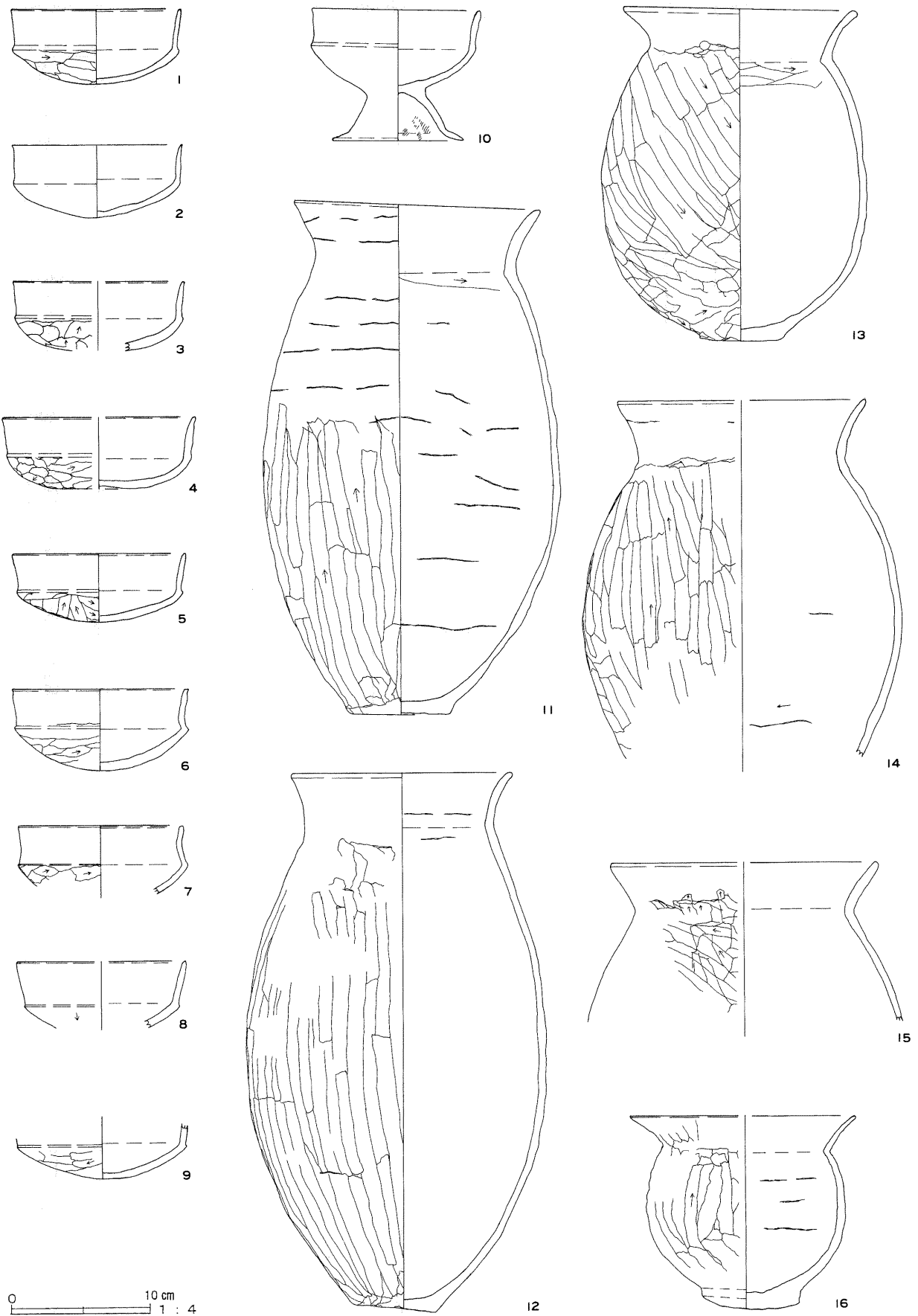


53号住居跡土層

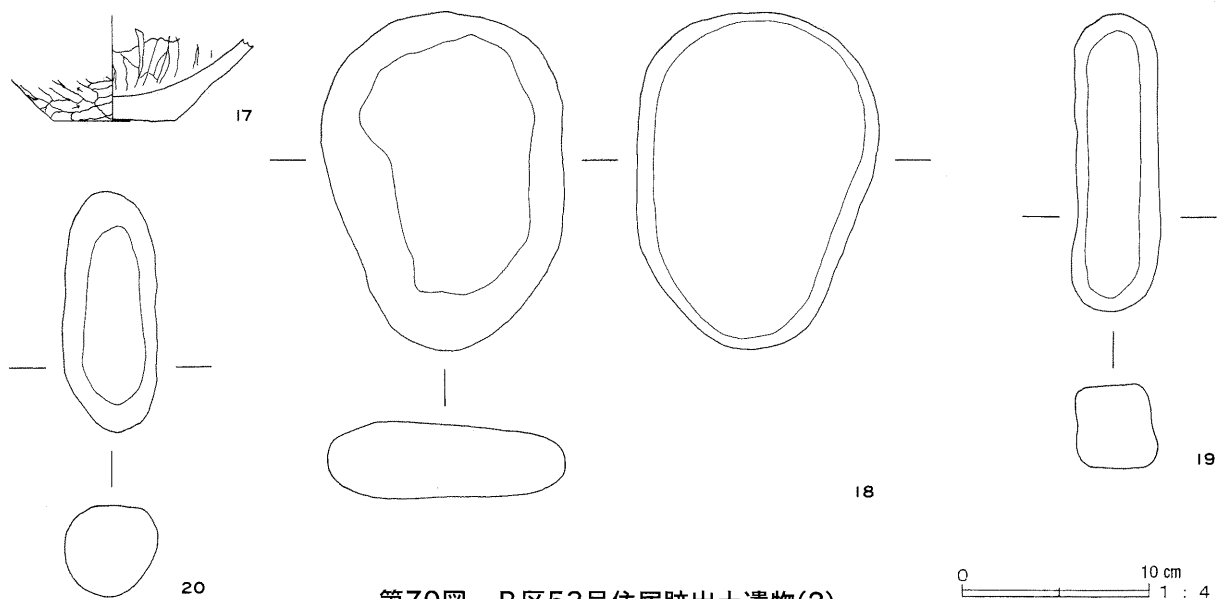
- 1 灰色(5Y 6/1)粘土。酸化鉄を多量、白色軽石粒(火山灰?)を少量含む。
- 2 明黄褐色(2.5Y 6/6)シルト。マンガン粒、炭化物を少量含む。
- 3 暗灰黄色(2.5Y 4/2)シルト。マンガン粒、炭化物を少量含む。
- 4 暗灰黄色(2.5Y 4/2)シルト。3層より暗い。マンガン粒、焼土粒、炭化物を少量含む。
- 5 灰色(5Y 4/1)シルト。焼土粒を多量、炭化物を少量含む。
- 6 暗灰色(N 3/0)灰層。焼土粒を多量含む。
- 7 暗赤褐色(5YR 3/3)焼土層。
- 8 灰オリーブ色(7.5Y 6/2)シルト。炭化物を少量含む。



第68図 B区53号住居跡



第69図 B区53号住居跡出土遺物(1)



第70図 B区53号住居跡出土遺物(2)

ではない。焼土・炭化物混在層（第4・5層）は、さらに竪穴内に65cm程延びて堆積している。底面は、袖より竪穴内では、わずかな傾斜であるが、袖内に入って湾曲する。両袖前面ラインより25cm入った地点を中心に焼土（第7層）、土師器高杯（10）を中心にして杯4点（3・4・8・9）が重なり、さらに上面に甕2点（11・13）が並置されている。両壁は、屈曲し、その後、徐々に幅を狭めながら奥壁に至る。底面は、緩傾斜で立ち上がり、奥壁もカーブを描いて立ち上がる。屈曲点より奥は煙道であると思われる。奥行き143cmを計る。

覆土は、上位から、多量の酸化鉄及び少量の白色軽石粒（FA）を含む灰色粘土層（第1層）、少量の炭化物・マンガン粒を含む明黄褐色シルト層（第2層）、少量の炭化物・マンガン粒を含む暗灰黄色シルト層（第3層）が堆積している。

遺物は、カマド内の他、床面上から土師器杯（1・2・5・6・7）、甕（12・14・15・16）、砥石（18・19）、第2層中から、土師器甕（17）、砥石（20）が出土している。

**54号住居跡** F-8からF-9グリッドに亘って位置し、北側は調査区外に及んでいる。第二確認面（第71図）からの検出である。

（第72図） 上面に52号・53号両住居跡、46号・50号両溝跡が位置している。

規模は、不明であるが、南西辺4.80+ $\alpha$ m、南東辺4.25mを計り、長方形を基本としているが、各辺が直交せず、不整形といわざるを得ない。南西辺軸方位は、N-20°-Wを示す。

壁は、ほぼ垂直に立ち上がるが、一部段を成す部分もみられる。検出面からの高さは、最高で66cmを計る。

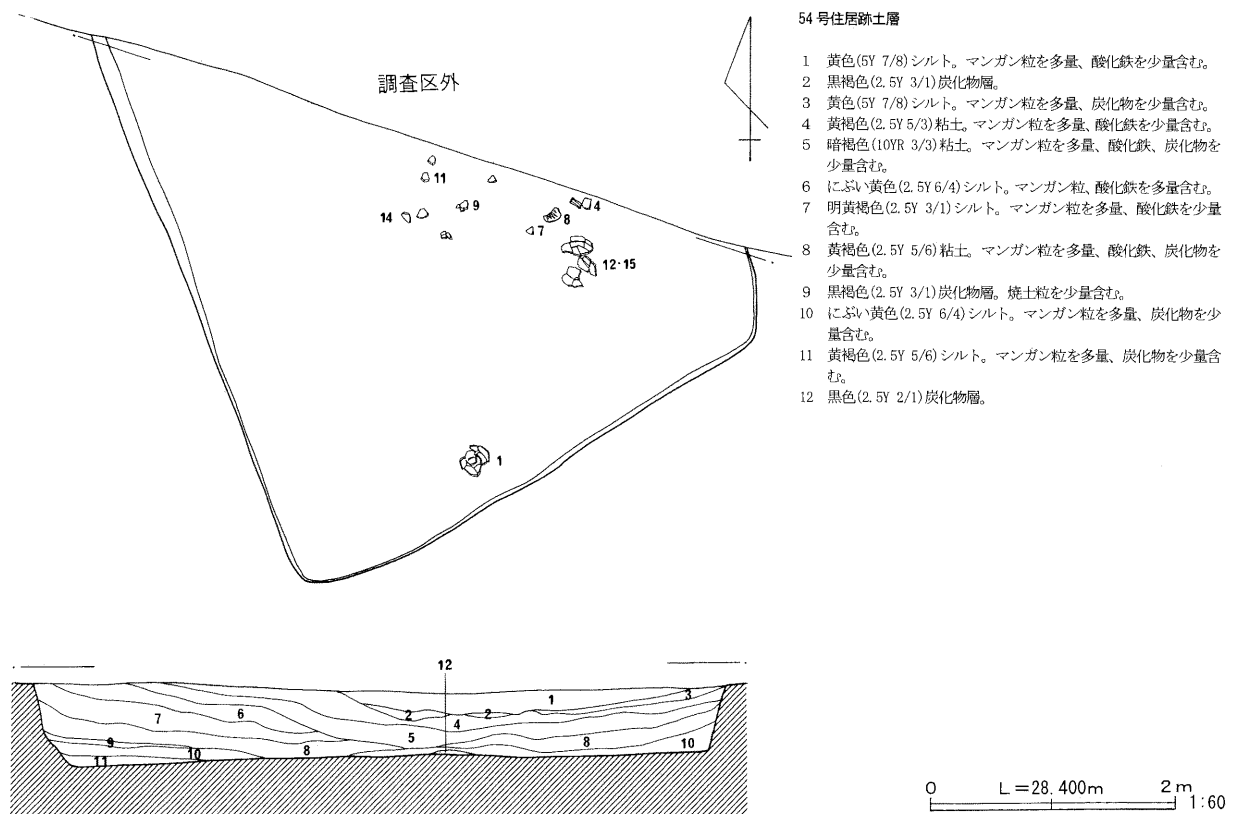
床面は、やや凹凸がみられるが、ほぼ水平面を成し、硬く締まった部分もみられて安定している。ピット・炉等は、検出されていない。

覆土は、最上層が、多量のマンガン粒及び少量の酸化鉄を含む黄色シルト層（第1層）であり、以下、多量のマンガン粒及び少量の炭化物粒を含む黄色シルト層（第3層）、多量のマンガン粒及び少量の酸化鉄を含む黄褐色粘土層（第4層）、多量のマンガン粒及び少量の酸化鉄・炭化物粒を含む暗褐色粘土層（第5層）、多量のマンガン粒・酸化鉄を含むにぶい黄色シルト層（第6層）、多量のマンガン粒及び少量の酸化鉄を含む明黄褐色シルト層（第7層）、多量のマンガン粒及び少量の酸化鉄・炭化物粒を含む黄褐色粘土層（第8層）と続き、最下層には、多量のマンガン粒及び少量の炭化物粒を含むにぶい黄色シルト層（第10層）が堆積している。しかし西側では、第10層の下位に、多量のマンガン粒及び少量の炭化物粒を含むにぶい黄褐色シルト層（第11層）の堆積している部分もみられる。また、第4層・第10層の上位には炭化物層の厚い堆積もみられる。第4層の上位は炭化物の純層（第2層）であり、第10層の上位は少量の焼土粒を含んでいる（第9層）。さらに、炭化物層は竪穴中央部の床面上にも堆積している。

遺物は、床面上の炭化物層に集中している。土師器高杯（1）、受台にも△窓を開けた特殊器台（2）、台付甕（3～13）、壺（14・15）等が出土している。

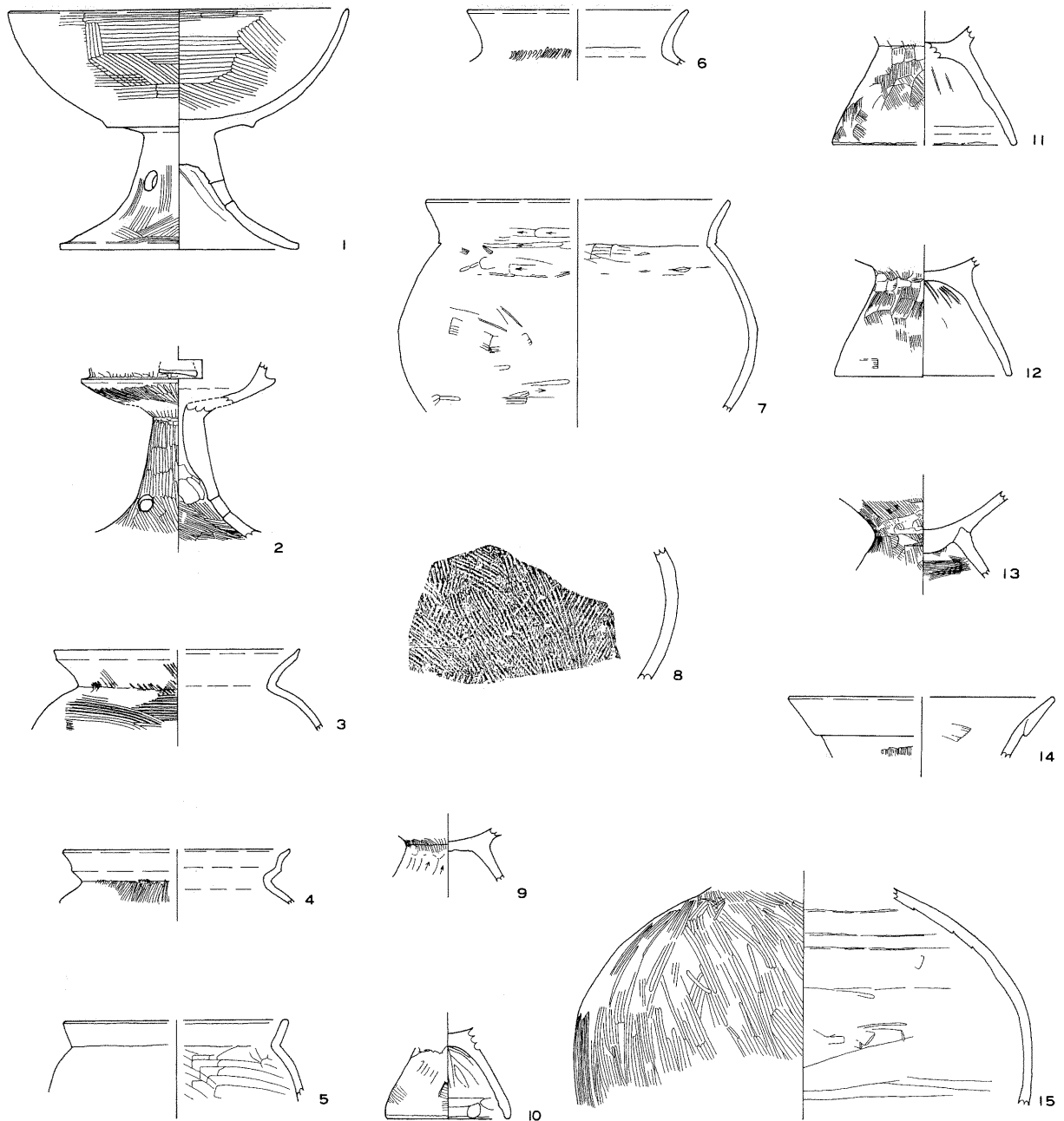
**55号住居跡** F-8からG-8グリッドに亘って位置する。第二確認面からの検出である。

（第73図） 南西部上面を1号不明遺構に削平されている。また上面には、53号両住居跡、47号・（第74図） 48号両溝跡が位置している。



第71図 B区54号住居跡





第72図 B区54号住居跡出土遺物

北東辺4.06m、南東辺5.60m、南西辺4.52m、北西辺5.38mを計り、長方形を基本とするが、各隅が丸みをもち、直角を成さないため、不整形を呈するようになる。主軸方位は、 $N-68^{\circ}-E$ を示す。

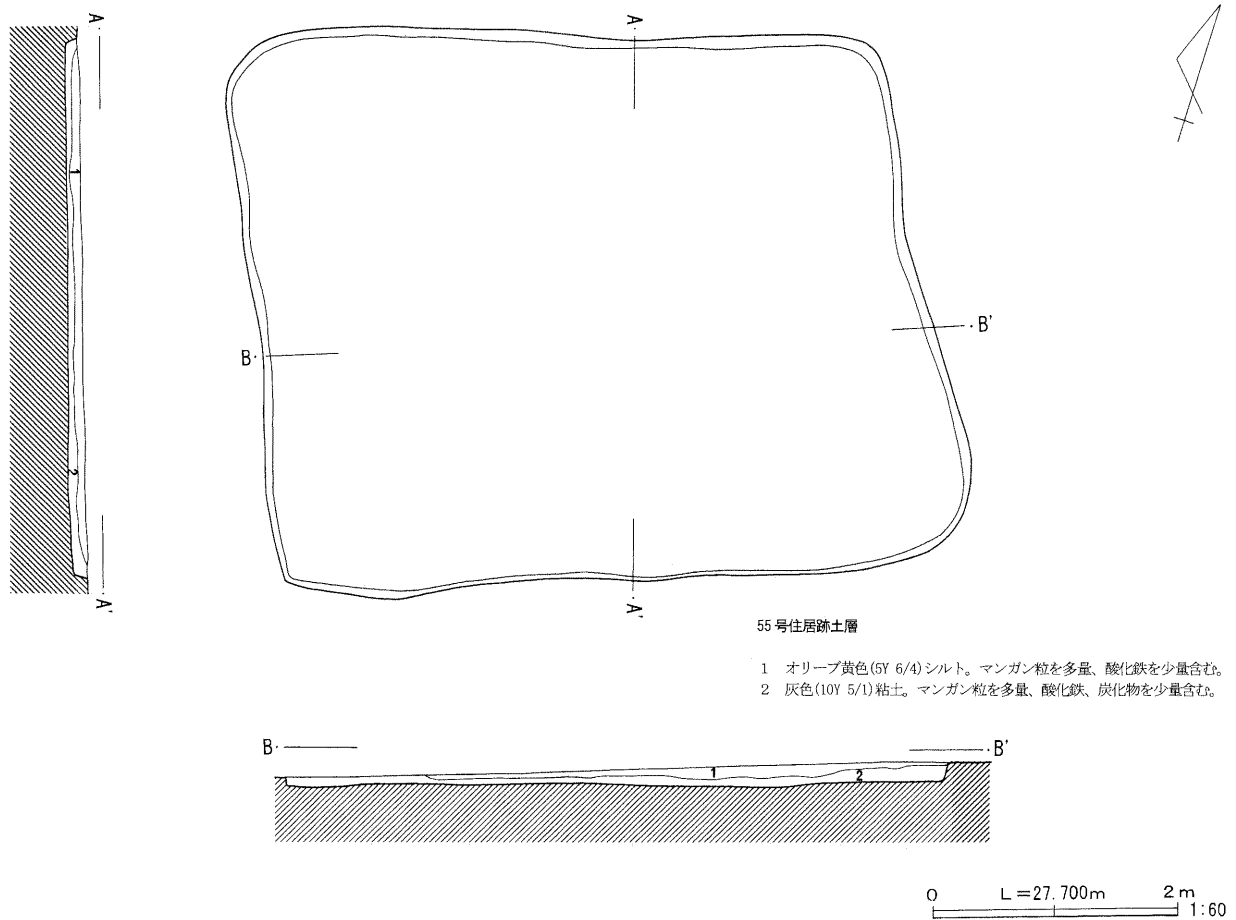
壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。検出面からの高さは、最高で16cmを計る。

床面は、ほとんど凹凸がみられず、ほぼ水平面を成し、硬く締まった部分もみられて安定している。ピット・炉等は、検出されていない。

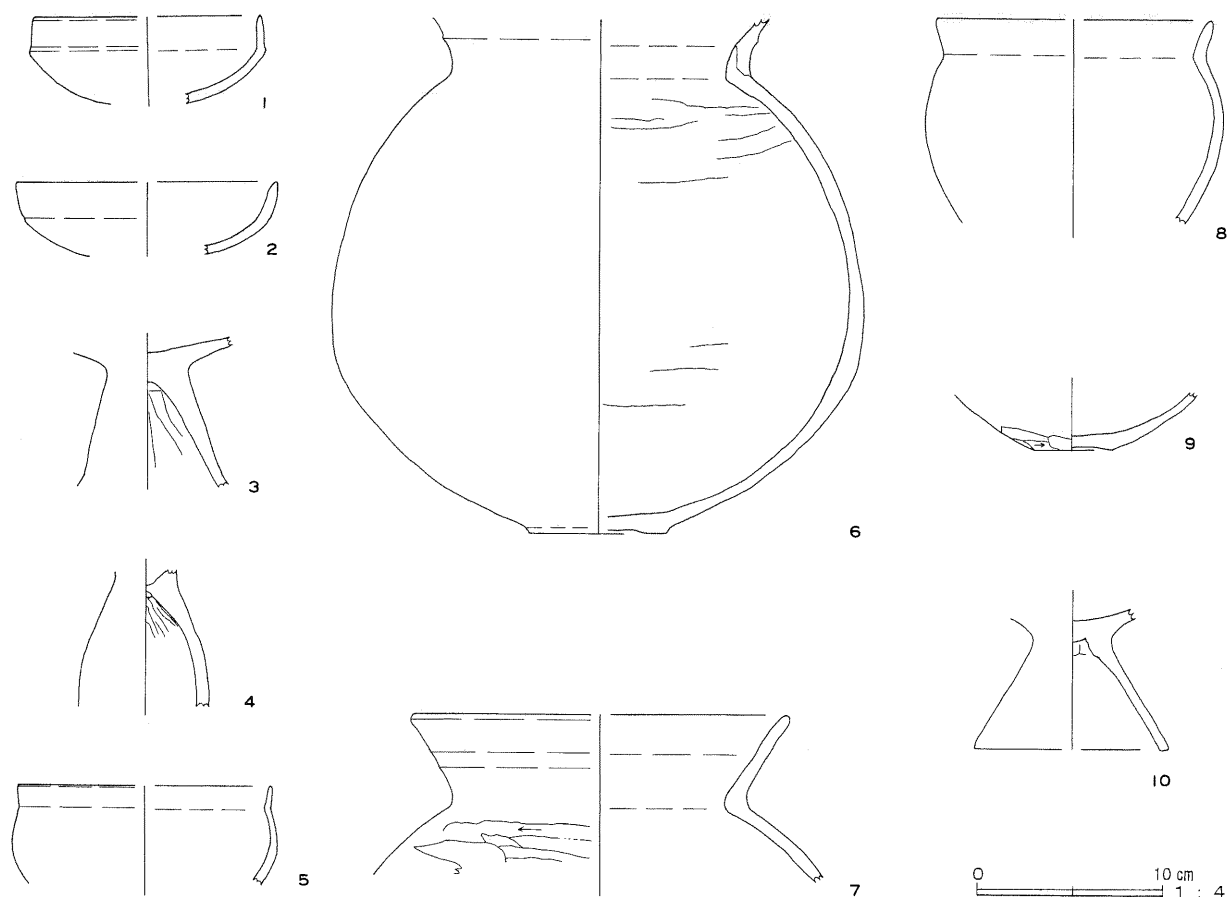
覆土は、上層が、多量のマンガン粒及び少量の酸化鉄を含むオリーブ黄色シルト層（第

第33表 B区54号住居跡出土遺物観察表 (第72図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・高杯	21.2	15.2	14.9	⑥②③①	②	浅黄橙	脚部一部欠	脚部内面以外全面朱塗。体部内外面、脚外面ミガキ。脚内面状意指頭によるナデ。下位横のナデ。
2	土師器・器台	—	—	—	④③②⑥①	②	橙	両端部欠	内面接合穿孔部横のケズリの後、縦のナデ。受台部ナデ。脚上位指頭によるナデツケ。下位刷毛目。外面全面ミガキ。受台部三角形(四方か)脚部遠景三方透かし。
3	土師器・甕	(15.7)	—	—	①⑥③②	②	にぶい褐	口縁部1/8	剥落した部分多い。内面ナデ。外面煤付着。二次加熱。
4	土師器・台付甕	(14.2)	—	—	⑥④②	②	橙	口縁部1/8	全面煤付着。二次加熱。
5	土師器・甕	(14.0)	—	—	②④③	③	にぶい橙	口縁部1/8	内面横の木口状工具によるナデ。外面口縁部横のナデ。胴部大部分表面剥落。吸炭一部にケズリ様ナデ。
6	土師器・甕	(13.8)	—	—	⑥②④③①	②	にぶい橙	口縁部1/6	口縁部横のナデ。外面頸部縦にミガキ、内面指頭による横のナデ。
7	土師器・甕	(19.0)	—	—	⑥④②①③	②	にぶい褐	1/8	外面括れ横のケズリ様ナデ。胴部は横のケズリの後ナデ。前面吸炭。煤付着。二次加熱。
8	土師器・甕	—	—	—	②④①⑥③	②	にぶい橙	胴部のみ	
9	土師器・台付甕	—	—	—	⑥②①③④	②	にぶい橙	胴・脚接合部のみ	外面胴下端～括れ部縦の刷毛目。脚部縦の刷毛目の後縦のケズリ。内面胴部木口状工具によるナデ。脚天井部指頭によるナデツケ。脚内面以外吸炭。二次加熱。
10	土師器・台付甕	—	—	(7.9)	④①②⑥③	②	橙	脚部のみ	内外面共磨滅した部分が多い。外面斜の刷毛目、内面ナデツケの痕跡がみられる。二次加熱。
11	土師器・台付甕	—	—	(11.5)	④②③①	②	浅黄橙	脚部のみ	外面縦及び斜の刷毛目。裾部一部ナデ。内面上位ナデツケ、下位横のナデツケ。二次加熱。
12	土師器・台付甕	—	—	11.0	②①③	②	浅黄橙	脚部2/3	外面縦の刷毛目、内面縦のミガキ様ナデツケ。表面磨滅した部分が多い。
13	土師器・台付甕	—	—	—	②③④①	②	にぶい橙	胴・脚接合部のみ	外面縦の刷毛目、底部ナデツケ。脚内面上位へらによるナデツケ、中位横の刷毛目。外面煤、内面炭化物付着。二次加熱。
14	羽口	(16.6)	—	—	③②①⑥	②	浅黄橙	口縁部1/8	外面口縁横のナデ、頸部縦の刷毛目、口縁下横のナデ。内面口縁横の刷毛目、頸部ナデ。
15	土師器・壺	—	—	—	②④③①	②	橙	胴部のみ	外面縦の刷毛目、内面横のナデ。



第73図 B区55号住居跡



第74図 B区55号住居跡出土遺物

第34表 B区55号住居跡出土遺物観察表 (第74図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・杯	(12.2)	—	—	③②①④⑥	②	にぶい橙	1/3	表面磨滅。
2	土師器・杯	(14.0)	—	—	①④③⑥②	②	赤橙	1/5	外面磨滅。内面口縁横ナデ、体部横のナデ。
3	土師器・高杯	—	—	—	③①④	②	浅黄橙	脚部2/3	表面磨滅。脚部内面縦のナデツケ。
4	土師器・高杯	—	—	—	④①③②	②	橙	脚部1/2	内外面共磨滅。脚内面天井ヘラ先によるナデツケ。
5	土師器・	(13.1)	—	—	③①④②⑥	②	橙	1/5	口縁部横ナデ。体部内外面共横のナデ。
6	土師器・甕	—	—	(7.5)	⑥①④②③	②	橙	1/2	内外面共表面磨滅、内面輪積み痕残す。内面及び外面下層吸炭。外面上位赤色化。二次加熱。
7	土師器・甕	(20.0)	—	—	⑥①③②④	②	橙	口縁部1/8	口縁部横ナデ。胴部外面横のケズリ、内面横のナデ。
8	土師器・甕	(14.8)	—	—	⑥①③②④	②	浅黄橙	上位1/8	内外面共ナデ、表面磨滅した部分が多い。外面煤付着。
9	土師器・甕	—	—	4.1	⑥①③②	②	橙	底部のみ	外面ナデ、一部ミガキ様ナデ、底部周辺横のケズリ、煤付着。内面ナデ。
10	土師器・台付甕	—	—	(10.4)	②③④①	②	橙	脚部1/3	胴部内外面ナデ。脚部外面ナデ、内面縦のナデツケ、裾部横ナデ。外面吸炭。内面赤色化。二次加熱。

1層) であり、下層が、多量のマンガン粒及び少量の酸化鉄・炭化物粒を含む灰色粘土層 (第2層) である。

遺物は、第2層中から検出されたのは土師器台付甕 (10) のみであり、土師器杯 (1・2)、高杯 (3・4)、 (5)、甕 (6~9) はいずれも、本住居跡検出作業中、本住居跡上位面から検出されたものである。

**56号住居跡** F-9からG-8・9グリッドに亘って位置する。第二確認面からの検出である。

(第75図) 2号不明遺構に削平されている。また上面には、50号溝跡が位置している。

北東辺3.52m、南東辺4.05m、南西辺3.90m、北西辺3.56mを計り、長方形を基本とするが、各隅が丸みをもち、直角を成さないため、不整形を呈するようになる。主軸方位は、N-153°-Eを示す。

壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。検出面からの高さは、最高で10cmを計る。

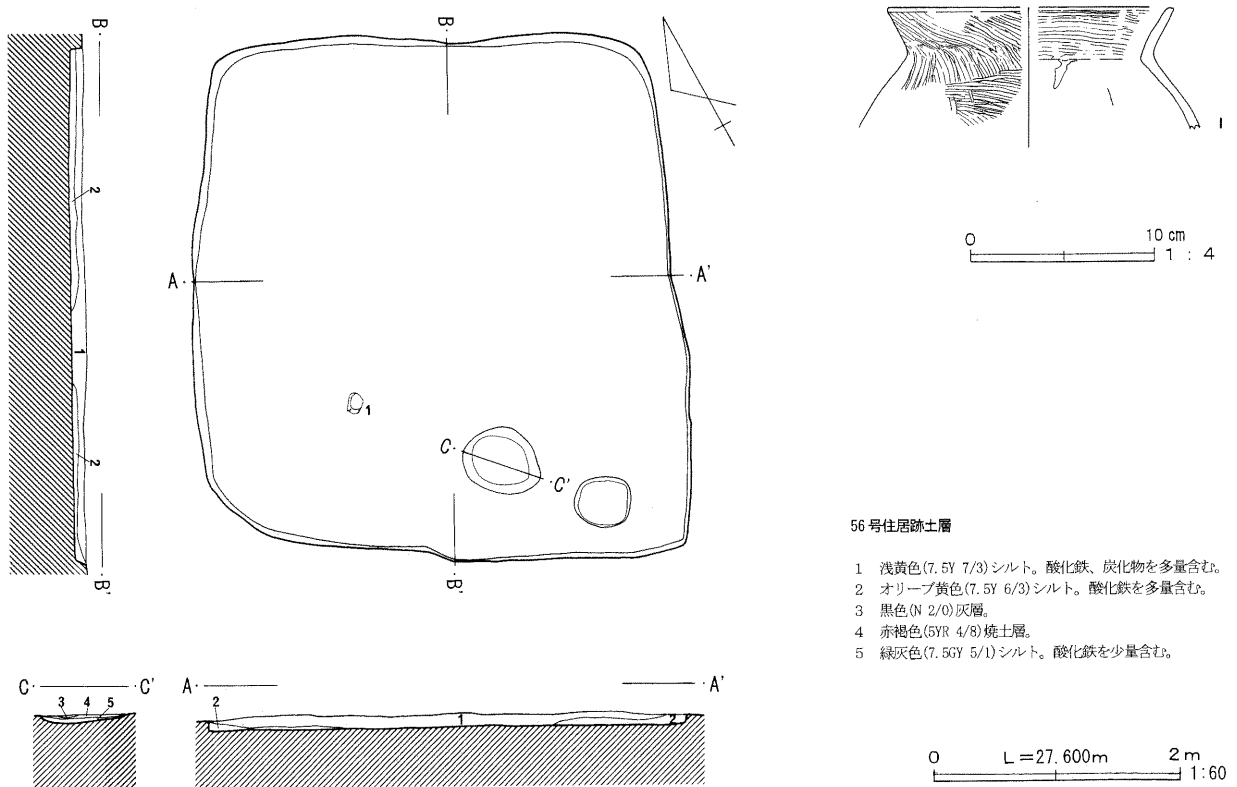
床面は、ほとんど凹凸がみられず、ほぼ水平面を成し、硬く締まった部分もみられて安定している。

ピットは、南隅に穿たれている。径45×40cm、深さ5cmを計る。

また、ピットからわずかに中央寄りに、炉が設けられている。径75×52cmで、卵形を呈する。

覆土は、上層が、多量の炭化物・酸化鉄を含む浅黄色シルト層（第1層）であり、下層が、多量の酸化鉄を含むオリブ黄色シルト層（第2層）である。第2層は、壁際のみであり、中央部には堆積していない。

遺物は、床面上から土師器甕（1）が出土している。



第75図 B区56号住居跡及び出土遺物

第35表 B区56号住居跡出土遺物観察表（第75図）

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・甕	(15.1)	—	—	②①⑥③	②	明赤褐	口縁部1/3	口縁部外面縦の斜、内面横、胴部上位横の刷毛目。胴部内面木口状工具による横のナデ。吸炭。一部炭化物付着。

**57号住居跡** H-9からH-10グリッドに亘って位置し、南側は調査区外に及んでいる。第二確認面(第76図)からの検出である。

(第77図) 31号井戸跡に切断され、上面には50号・51号両溝跡、また西端上面には、河川跡が位置している。

規模は不明であるが、現状では北辺7.00m、東辺 $6.70 + \alpha$  m、西辺 $0.70 + \alpha$  mを計る。方形を基本とするが、東辺が大きく膨らむため、不整形を呈するようになる。主軸方位は、 $N-70^{\circ}-E$ を示す。

壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。検出面からの高さは、最高で48cmを計る。

床面は、ほとんど凹凸がみられず、ほぼ水平面を成し、硬く締まった部分もみられて安定している。ピットは、穿たれていない。

炉は、中央やや北壁よりに設けられている。径 $75 \times 62$ cmで、ほぼ円形を呈する。炉の周囲には、炭化材が拡がって検出されている。

覆土は、上層が、多量のマンガン粒及び少量の酸化鉄を含む褐灰色シルト層(第1層)、中位層が少量の酸化鉄・マンガン粒・炭化物を含む灰色粘土層(第2層)、下層が、少量の酸化鉄・炭化物を含む暗灰色粘土層(第3層)である。しかし東壁部分では、第3層の下に、多量の焼土粒・ブロックを含む炭化物層(第4層)、少量の酸化鉄・マンガン粒・炭化物を含む灰色シルト層(第5層)、少量の酸化鉄・マンガン粒・炭化物を含み、第5層よりやや暗い灰色シルト層(第6層)、多量の酸化鉄及び少量のマンガン粒を含むオリーブ黄色シルト層(第7層)が堆積している部分もある。

遺物は、第3層中から、土師器高杯(1)、器台(2~6)、甕類(7~14)、壺(15~19)、手捏ね(21・22)、土錘(23)が出土している。灰釉陶器(20)は、31号井戸跡に帰属するものである。

**58号住居跡** G-9・10からH-9・10グリッドに亘って位置する。第二確認面からの検出である。

(第78図) 西隅は、河川跡によって削除されている他、33号・35号・37号各井戸跡によって削除(第79図)されている。上面には、49号溝跡が位置している。

このため、規模・形態共に不明であるが、計測可能な部分では、東西両辺間距離が4.70m、東辺 $5.25 + \alpha$  mを計ることから、南北間が長軸となる、長方形を呈すると思われる。長軸方位は、 $N-23^{\circ}-W$ を示す。

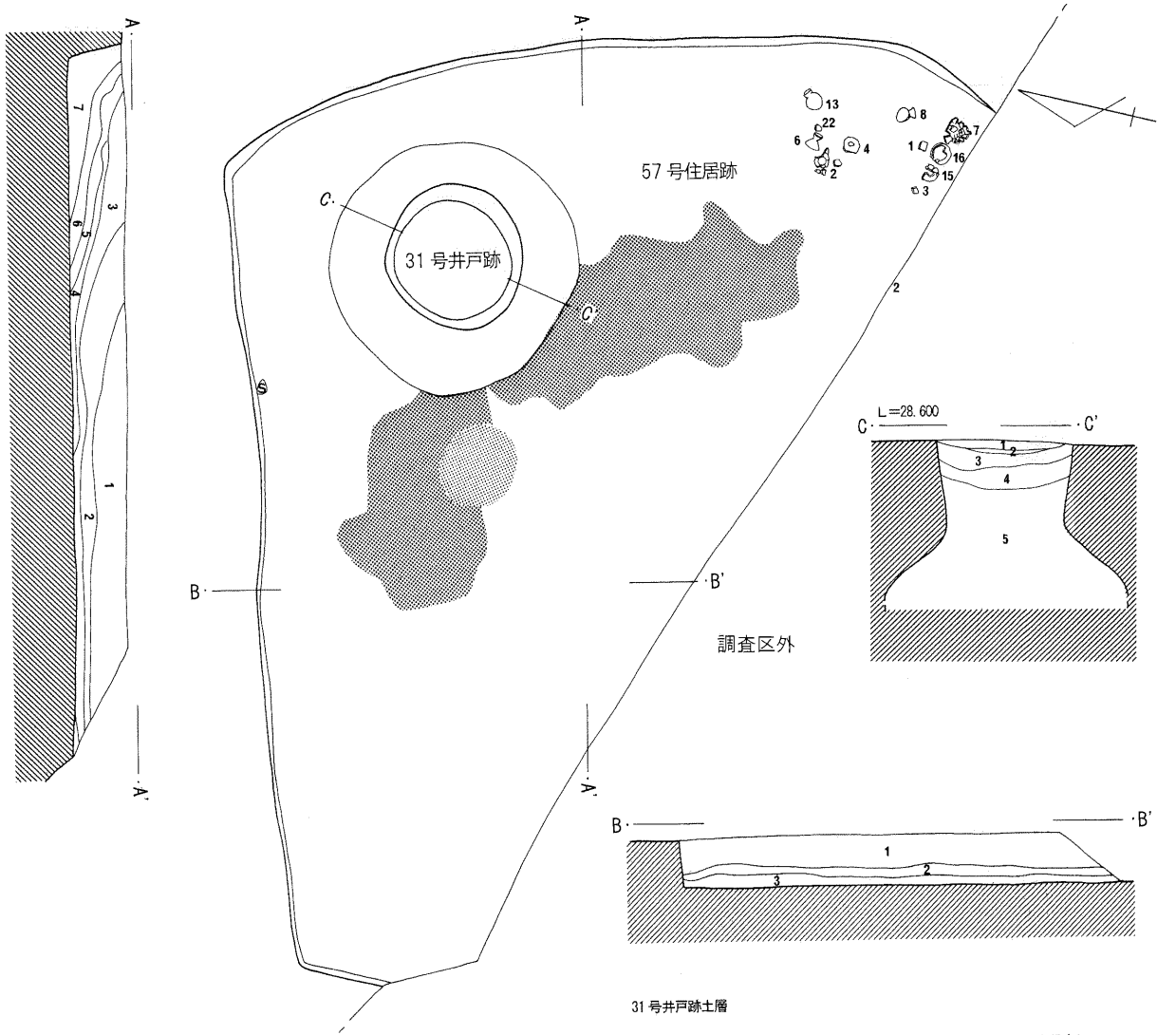
壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。検出面からの高さは、最高で26cmを計る。

床面は、やや凹凸がみられるが、全体ではほぼ水平面を成し、安定している。ピットは、穿たれていない。

カマド等も検出されていない。

覆土は、上層が、少量のマンガン粒・酸化鉄を含む黄褐色粘土層(第1層)、下層が、少量の酸化鉄・マンガン粒・炭化物を含む灰色粘土層(第2層)である。壁際には、最下層として、多量の酸化鉄を含むオリーブ灰色粘土層(第3層)のみられる部分もある。

遺物は、床面上から土師器甕(3・4・5)、礫(8)、覆土第2層上から土師器高杯



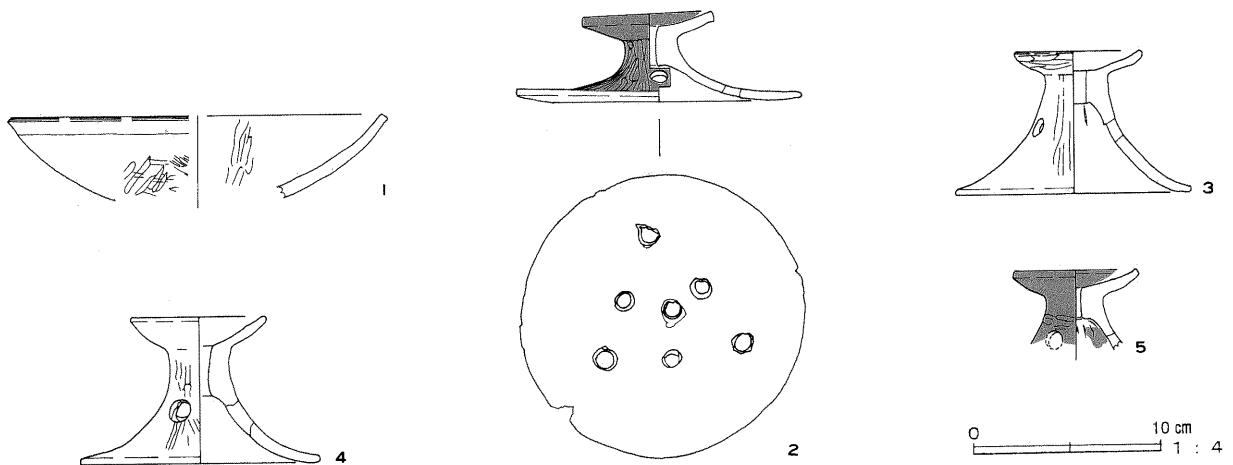
57号住居跡土層

- 1 褐灰色(7.5YR 5/1)シルト。マンガン粒を多量、酸化鉄を少量含む。
- 2 灰色(7.5Y 4/1)粘土。酸化鉄、マンガン粒、炭化物を少量含む。
- 3 暗灰色(N 3/0)粘土。酸化鉄、炭化物を少量含む。
- 4 黒色(N 2/0)炭化物層。焼土粒、焼土ブロックを多量含む。
- 5 灰色(5Y 6/1)シルト。酸化鉄、マンガン粒、炭化物を少量含む。
- 6 灰色(10Y 5/1)シルト。酸化鉄、マンガン粒、炭化物を少量含む。
- 7 オリーブ黄色(7.5Y 6/3)シルト。酸化鉄を多量、マンガン粒を少量含む。

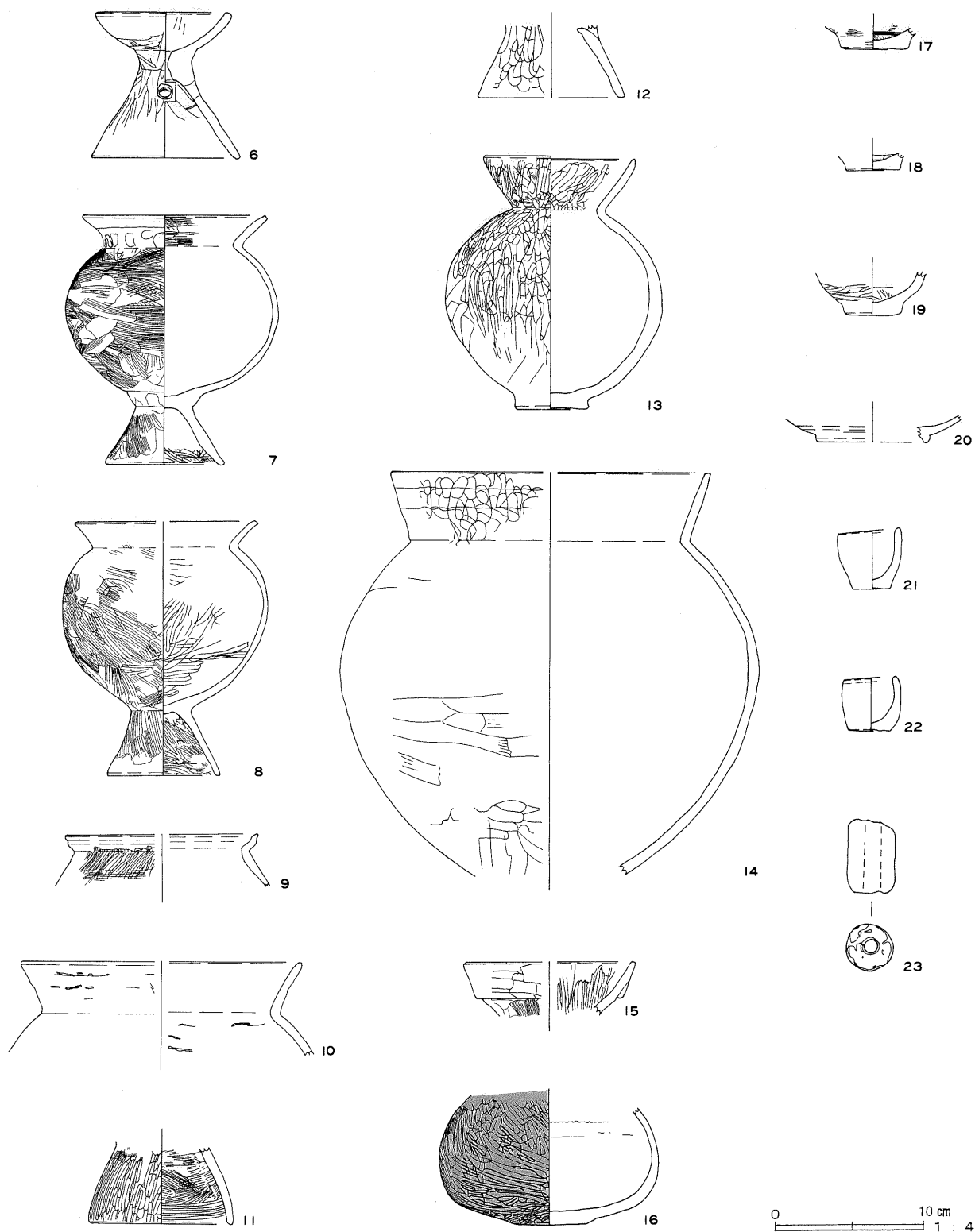
31号井戸跡土層

- 1 黒褐色(7.5YR 3/1)粘土。酸化鉄を多量、浅黄色(5Y 7/3)粘土を少量含む。
- 2 黒褐色(7.5YR 3/1)粘土。酸化鉄、浅黄色(5Y 7/3)粘土を多量含む。
- 3 灰オリーブ色(5Y 6/2)粘土。酸化鉄を少量含む。
- 4 灰オリーブ色(5Y 6/2)粘土。酸化鉄を多量、黒褐色(7.5YR 3/1)粘土を帯状に含む。
- 5 灰オリーブ色(5Y 6/2)粘土。酸化鉄を多量、黒褐色(7.5YR 3/1)粘土を少量含む。

0 L=27.700m 2m 1:60



第76図 B区57号住居跡、31号井戸跡及び57号住居跡出土遺物(1)



第77图 B区57号住居跡出土遺物(2)

第36表 B区57号住居跡出土遺物観察表 (第76・77図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・高杯	(20.6)	—	—	②①④③⑥	②	にぶい橙	口縁部1/6	口縁部横のナデ、矩形仕上げ。外面刷毛目、ケズリ、ミガキ混在。内面縦のミガキ。
2	土師器・器台	7.0	4.9	15.5	②①⑥④③	②	灰白	ほぼ完形	脚部穿孔3孔二段。受台部内面横のミガキ、外面ナデ、端部矩形仕上げ。脚部内面ナデ、端部矩形仕上げ。脚部内面以外全面朱塗。
3	土師器・器台	6.9	7.8	12.7	②④③①⑥	②	浅黄橙	ほぼ完形	脚部穿孔3孔一段。全体に表面剥離した部分が多い。受台部内面ナデ、外面横のミガキ。脚部外面縦のミガキ、多くの部分にナデが加わる。内面横のナデ、端部矩形。
4	土師器・器台	7.2	8.0	12.1	④②①③⑥	②	浅黄橙	一部欠	脚部穿孔3孔一段。受台部ナデ。脚部外面縦のミガキ、裾部横のナデ。内面ナデ。全体に磨滅した部分が多い。
5	土師器・器台	6.5	—	—	②④①③⑥	②	浅黄橙	脚下半欠	脚部穿孔3孔。ほぼ全面朱塗、表面剥離した部分多い。受台部ナデ。脚部内面ナデツケ、外面一部横のミガキ。
6	土師器・器台	8.1	10.0	9.8	④②③⑥①	②	淡橙	完形	脚部穿孔4孔一段。受台部口縁部横ナデ。体部内面放射状を基本としたミガキ、外面横のミガキ。脚部外面縦のミガキ、裾部横ナデ、内面ナデツケ。
7	土師器・台付甕	12.2	17.1	7.3	②④①⑥	②	橙	一部欠	口縁部外面下位指頭による押圧の後、内面横の刷毛目の後全体に横ナデ。胴部外面横、一部斜の刷毛目。脚との接合部指頭による押圧。脚外面縦の刷毛目、内面上位ナデ、裾部横の刷毛目。外面煤付着。二次加熱。
8	土師器・台付甕	(12.1)	17.5	7.5	④①②⑥③	②	浅黄橙	3/5	外面口縁部及び脚裾部横ナデ、他は縦の刷毛目。内面口縁部横ナデ、胴部ミガキ様ナデ。脚部天井部ナデツケ、上位～中位斜、裾部横の刷毛目。大部分炭化、黒色化。
9	土師器・台付甕	(13.0)	—	—	④②①⑥③	②	にぶい橙	口縁部1/8	
10	土師器・甕	(19.0)	—	—	④②①⑥③	②	にぶい黄橙	口縁部1/3	
11	土師器・台付甕	—	—	9.5	①②④⑥③	②	浅黄	台部のみ	外面接合部縦の刷毛目の後、脚全体に縦のミガキ。内面横の刷毛目、裾部横のナデが加わる。内外面炭化物付着。二次加熱。
12	土師器・台付甕	—	—	(9.2)	②④①③⑥	②	橙	脚部のみ 1/2	外面縦のケズリ。内面天井部ナデツケ、他は縦のナデ、裾部横ナデ。一部吸炭。二次加熱。
13	土師器・壺	10.2	17.5	4.6	④②③①⑥	②	浅黄	完形	外面口縁部横ナデの後縦のミガキ、胴部中位以上縦のミガキ、中位以下斜のケズリ様ナデ。内面口縁縦のミガキ、胴部ミガキ様ナデ。
14	土師器・甕	(21.8)	—	—	④②①③⑥	②	浅黄	底部欠1/8	外面口縁部横ナデの後指頭に押圧、輪積み痕を残す。胴部上位横のナデ、中位横の木口状工具によるナデ、煤付着、下位縦を主体とした木口状工具によるナデ。内面全面横のナデ、下位炭化物付着。二次加熱。
15	土師器・壺	(11.4)	—	—	②④①③⑥	②	にぶい黄橙	口縁部1/8	外面口縁部木口状工具による横のナデ、頸部縦の刷毛目。内面横のナデの後縦のミガキ。
16	土師器・壺	—	—	5.1	④①②⑥③	②	浅黄	上部欠	外面中位縦、下位横のミガキ、全面朱塗。底面ナデツケ。内面横の連続ナデ。
17	土師器・壺	—	—	4.0	④②①⑥	②	浅黄橙	底部のみ	外面横の刷毛目の後ナデ。底面ミガキ様ナデ。煤付着。内面底部横の連続刷毛目、下位ナデ、炭化物付着。
18	土師器・壺	—	—	3.3	④①②③⑥	②	黒褐	底部のみ	外面ナデ。内面木口状工具による横のナデ。黒色処理。
19	土師器・壺	—	—	3.4	①⑥②④③	②	黄灰	底部のみ	外面中位ナデ、下位横のミガキ、底部ミガキ様ナデ。内面横のナデ、底部ヘラ先によるナデツケ。接合痕。全面吸炭。
20	灰釉・皿	—	—	(7.5)	—	①	灰白	底部1/6	
21	土師器・手	4.1	4.2	2.0	⑥②①④③	②	灰白	完形	一部吸炭。
22	土師器・手	3.4	3.8	2.8	⑥②①④③	②	灰白	完形	
23	土錘	長さ— 径3.2 孔径1.2						一部欠	
24	礫	長さ17.0 幅7.5 重さ730g							

(1・2)、甕(6・7)、大礫(9)、馬歯等が出土している。

59号住居跡 F-10からG-10グリッドに亘って位置している。第一確認面からの検出である。

(第80図) 64号住居跡を削除しているが、東側は、河川跡によって削除されている他、上面を66号

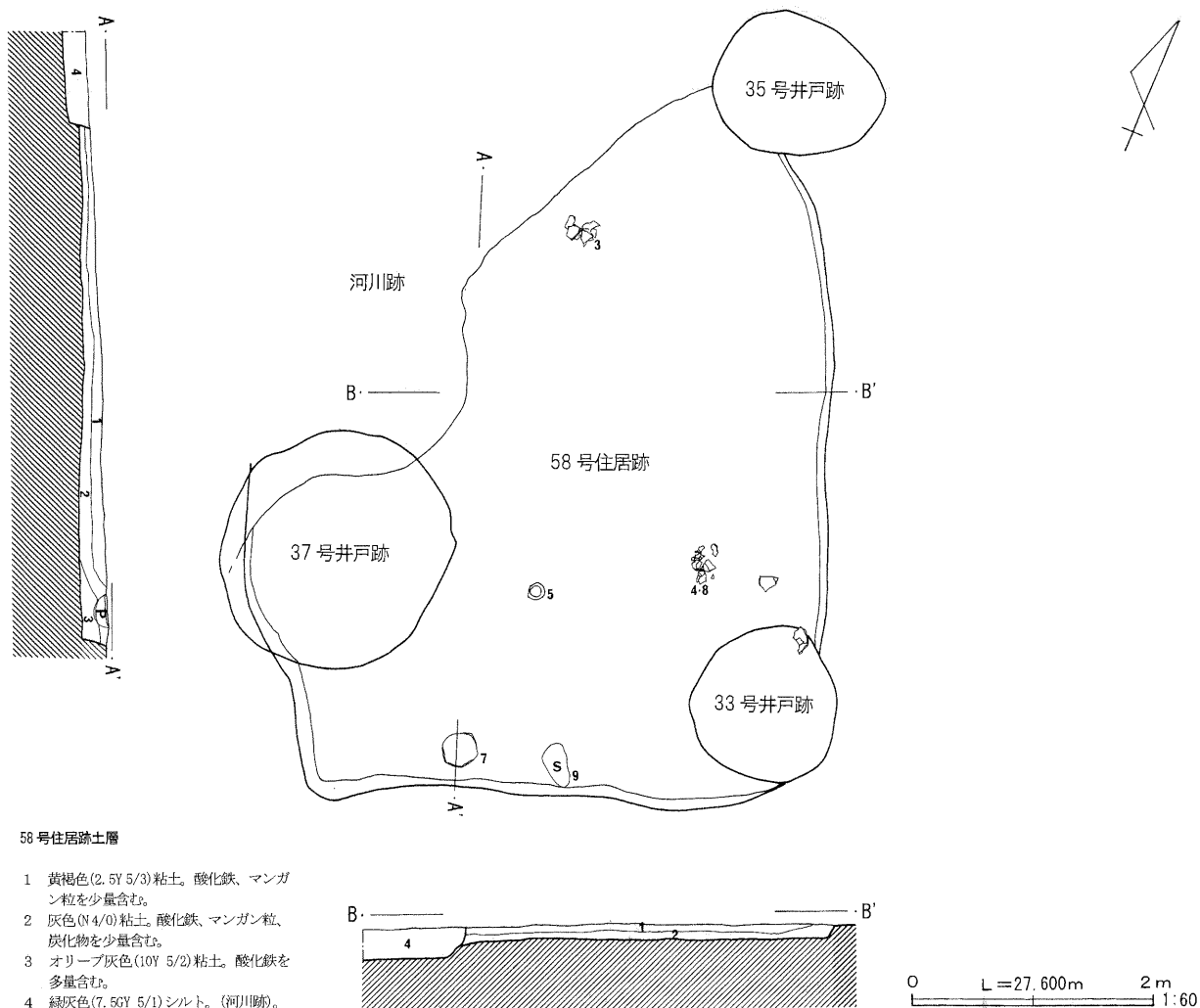
(第81図) 住居跡によって削平されている。上面には、66号土坑、49号・53号各溝跡が位置している。また下面には63号住居跡が位置している。

このため、規模・形態共に不明であるが、計測可能な部分では、北東・南西両辺間距離が7.10mを計り、北西辺両隅が直角を成さないものの、北東・南西両辺が平行していることから、平行四辺形を呈すると思われる。北西辺の軸方位は、N-35°-Eを示す。

壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。検出面からの高さは、最高で70cmを計る。

床面は、ほとんど凹凸がみられず、ほぼ水平面を成して、安定している。中央北東寄り





第78図 B区58号住居跡

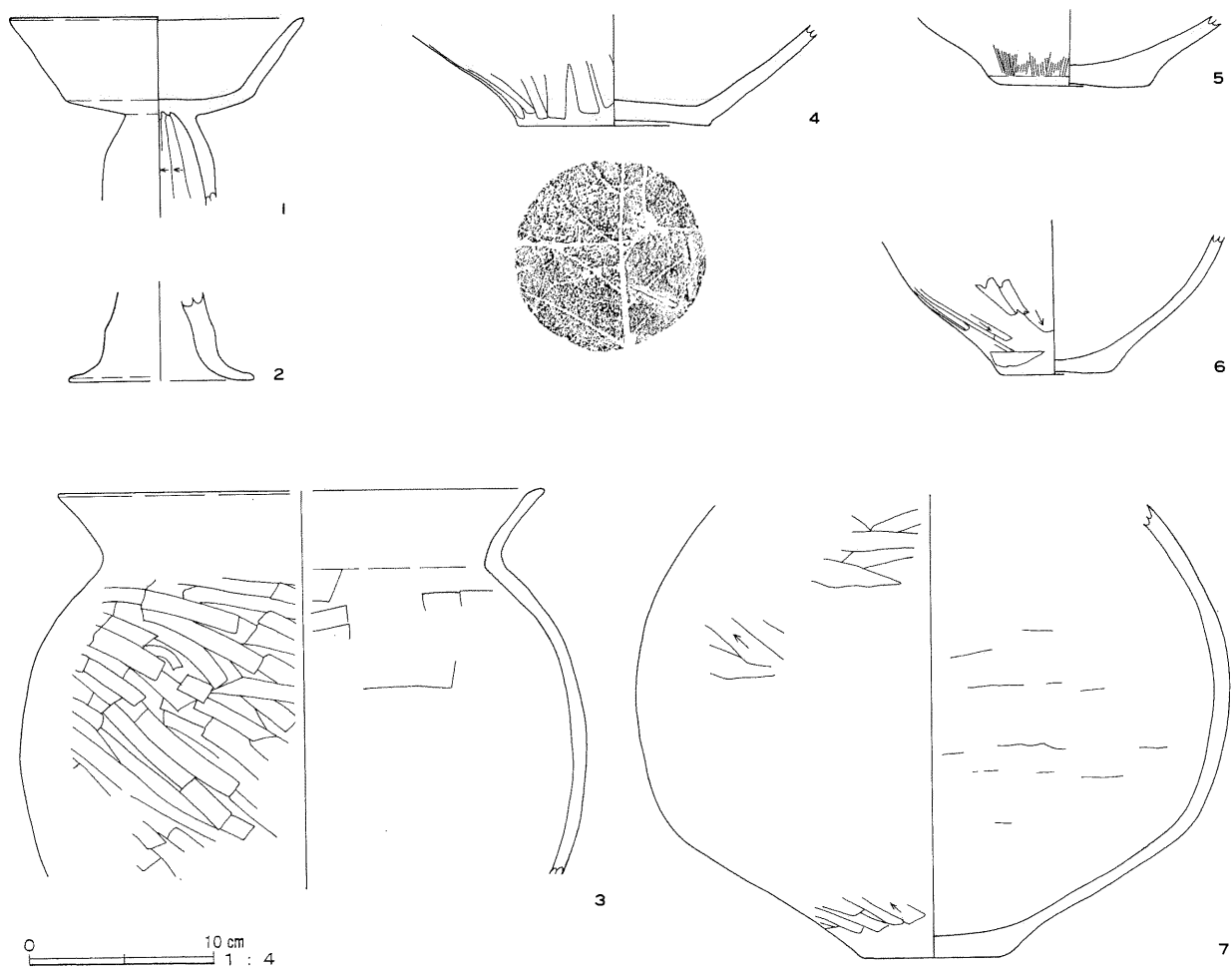
第37表 B区58号住居跡出土遺物観察表 (第79図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・高杯	15.8	—	—	③②④①⑥	②	橙	脚部欠	外面磨滅。脚部内面横の連続ケズリ。
2	土師器・高杯	—	—	(10.0)	③①②④	②	橙	脚部のみ1/4	脚部ナデ、裾部横のナデ。外面一部煤付着。
3	土師器・甕	(26.4)	—	—	②③①④⑥	②	橙	上位1/2	口縁部横ナデ。胴部外面斜のケズリ、煤付着。内面横のヘラナデ。
4	土師器・甕	—	—	10.5	①⑥③②④	②	明赤褐	底部のみ	外面スリップ。内面剥離。木の葉底。
5	土師器・甕	—	—	8.6	②③①④⑥	②	浅黄橙	底部のみ	外面底部周辺縦の刷毛目、ナデが加わる、煤付着。内面ナデ。
6	土師器・甕	—	—	6.2	⑥①②③④	②	橙	底部のみ	外面ケズリ、ナデ、スリップ混在、赤色化、煤付着。内面木口状工具によるナデ、炭化物付着。二次加熱。
7	土師器・甕	—	—	8.0	⑥②③①④	②	灰白	口縁欠1/2	内面表面剥離した部分が多い、木口状工具による横のナデ、輪積み痕残す。外面は大部分酸化鉄で覆われる、一部ケズリ痕、煤付着。
8	礫	長さ 17.5	幅 11.2	厚さ 7.5	重さ 2,300g	—	—	—	—
9	礫	長さ 37.6	幅 15.8	厚さ 12.0	重さ 8,400g	—	—	—	—

では、一部段を成す部分もある。ピットは、穿たれていない。

カマド等も検出されていない。

覆土は、上層が、多量のマンガン粒・少量の白色軽石粒 (FA) を含む灰褐色粘土層 (第1層)、中位には、多量のマンガン粒・少量の白色軽石粒 (FA) ・炭化物を含む黄褐色粘



第79図 B区58号住居跡出土遺物

土層（第2層）、下層が、少量のマンガング粒・炭化物を含む灰褐色粘土層（第3層）である。

遺物は、床面上から、土師器杯（1）壺（16）が出土し、第2層及び第3層中から、土師器杯（2～4）、高杯（5）、甕（6～11・17）、甌（12）、手捏ね土器（13）、台付甕（14）、壺（15・18）、磨石（19）、石皿（20）等が出土している。

**60号住居跡** E-10からF-10グリッドに亘って位置し、北側は調査区外に及んでいる。第一確認面（第82図）からの検出である。

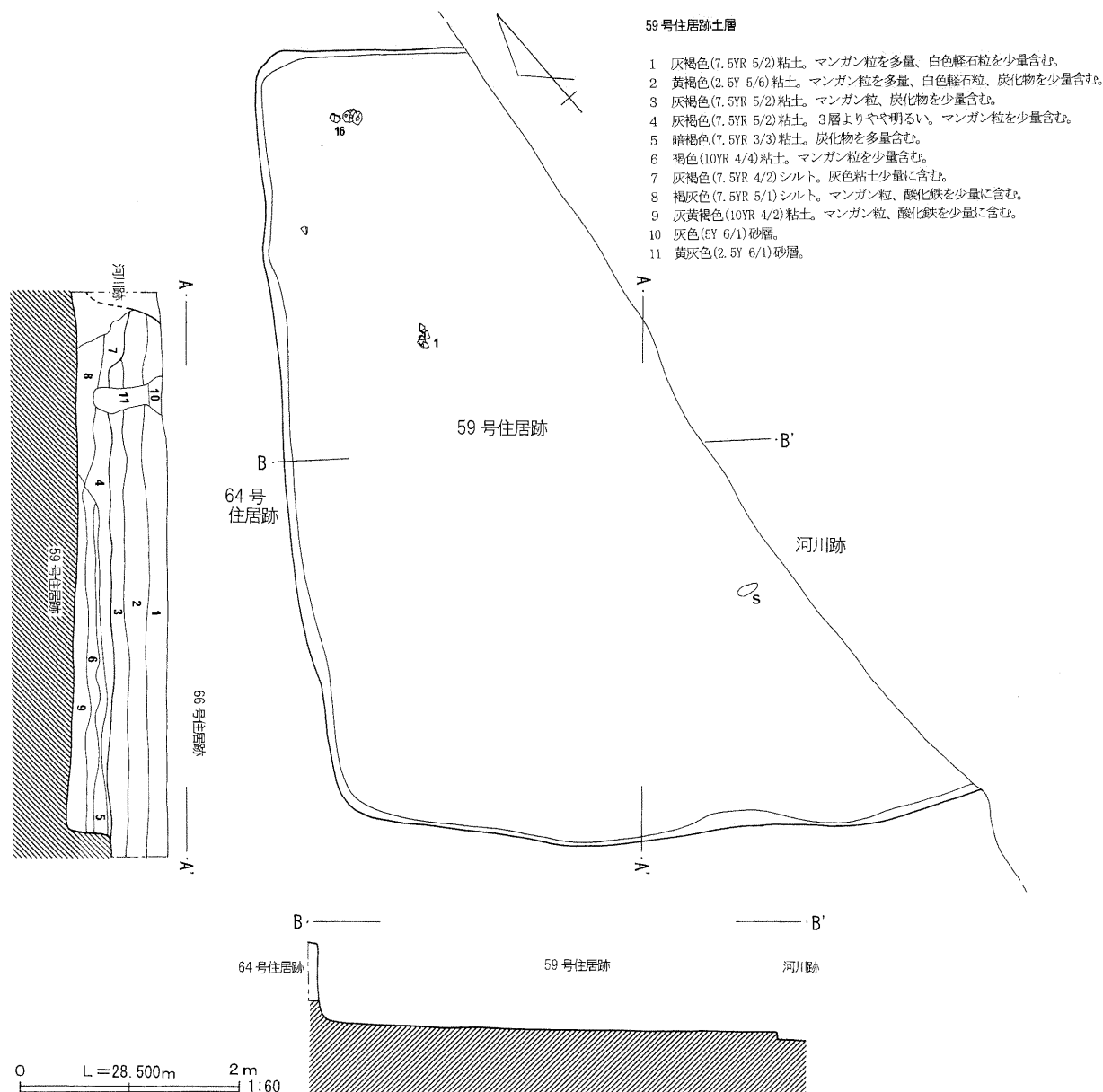
（第83図） 61号住居跡及び13号畠跡を削平している。

（第84図） 規模は不明であるが、現状では南辺5.10mを計り、西辺が $5.80 + \alpha$ mであり、その北端が北辺に連続する様相を示すことから、南北を長辺とする、長方形を呈すると思われる。主軸方位は、 $N-81^\circ-E$ を示す。

壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。検出面からの高さは、最高で55cmを計る。

床面は、やや凹凸がみられ、壁際がやや窪む部分が多いが、特にカマド前から北東隅にかけては強く踏み固められ、かなり安定している。

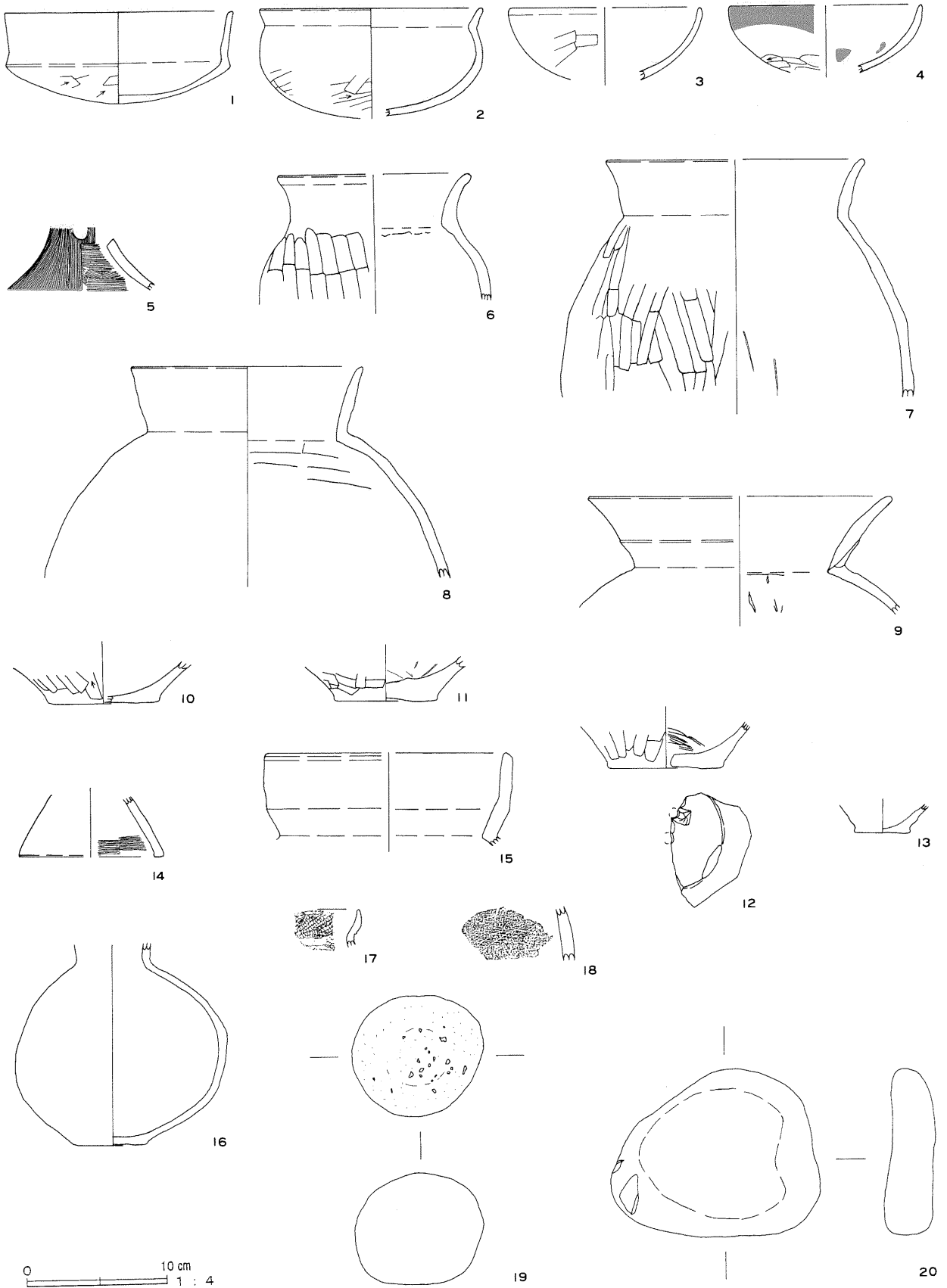
ピットは、カマド右（南）脇及び、南壁下中央からやや東寄り2ヶ所に穿たれている。



第80図 B区59号住居跡

第38表 B区59号住居跡出土遺物観察表 (第81図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・杯	(16.2)	(6.5)	—	③②①⑥④	②	橙	1/4	表面磨滅した部分多い。口縁部横ナデ。体部外面ケズリ。
2	土師器・碗	(16.0)	—	—	⑥②①	②	橙	3/4	口縁部横ナデ。体部外面上位ナデ、下位ケズリ。内面ナデ、底部押圧。全体に吸炭。
3	土師器・杯	(13.8)	—	—	①②③④⑥	②	橙	1/4	口唇部横ナデ。体部外面ナデ、一部ケズリ。内面上位回転のナデ、下位ヘラナデ。
4	土師器・杯	(13.8)	—	—	①②⑥	②	橙	1/4	外面口縁部横ナデ、朱塗、体部ナデ、底面周辺ケズリ。内面ナデ、朱塗。
5	土師器・高杯	—	—	—	⑥①②	②	赤褐	脚部1/4	穿孔(四孔?)。外面縦のミガキ、内面横の刷毛目。外面朱塗。
6	土師器・甕	(14.0)	—	—	⑥①②③④	②	橙	上位1/3	外面剥離した部分が多い。口縁部横ナデ。胴部外面縦のケズリ、内面横のナデ、接合痕の越す。全面吸炭。炭化物付着。二次加熱。
7	土師器・甕	(18.4)	—	—	⑥②①③④	②	橙	上位1/4	口縁部横ナデ。胴部内外面ケズリの後ナデ。内面炭化物付着。二次加熱。
8	土師器・甕	(16.5)	—	—	⑥①②③④	②	橙	上位1/3	口縁部横ナデ。胴部外面ナデ、内面木口状工具によるナデ、中位ナデ。
9	土師器・甕	(21.6)	—	—	①②④⑥	②	橙	口縁部6/1	口縁部横ナデ、二段、下段は補強帯の役割をもつ。胴部外面ナデ、内面横のヘラナデ。
10	土師器・甕	—	—	(8.0)	⑥②③④	②	橙	底部1/2	外面ケズリ、内面ケズリ様ナデ。外面吸炭。内面炭化物付着。
11	土師器・甕	—	—	(7.4)	⑥①②③④	②	橙	底部1/2	外面ナデツケ、煤付着。内面ヘラによるナデ、ナデツケ。上げ底気味。



第81図 B区59号住居跡出土遺物

12	土師器・甌	—	—	(8.4)	②③①⑥④	②	橙	底部1/2	底面穿孔(三孔か)。外面ケズリ、ナアツケ。内面ヘラ先によるナア。
13	土師器・手	—	—	(4.0)	⑥②①④	②	褐灰	底部のみ	黒色処理。
14	土師器・台付甕	—	—	(10.4)	②①⑥	②	浅黄橙	台部1/2	外面ナア。内面裾部横の刷毛目後全面にナア。
15	土師器・壺	(17.7)	—	—	⑥②①④	②	明赤褐	口縁部1/8	口縁部横ナア。全面吸炭。二次加熱。
16	土師器・壺	—	—	(4.8)	⑥②①③④	②	橙	口縁部欠	外面磨滅、下位ケズリ痕。上げ底。内面ナア、下位炭化物付着。
17	土師器・甕	—	—	—	②①⑥④	②	にぶい褐	—	—
18	土師器・壺	—	—	—	⑥②①③④	②	にぶい橙	—	—
19	磨石	長さ 8.8 幅 9.2 厚さ 8.0 重さ 850g			—		—	—	—
20	石皿	長さ 15.0 幅 12.0 厚さ 4.0 重さ 1,050g			—		—	—	—
21	磔	長さ 17.5 幅 5.0 厚さ 2.8 重さ 350g			—		—	—	—
22	磔	長さ 12.5 幅 8.5 厚さ 7.1 重さ 1,040g			—		—	—	—
23	磔	長さ 7.4 幅 4.7 厚さ 3.0 重さ 150g			—		—	—	—
24	磔	長さ 16.0 幅 5.0 厚さ 4.0 重さ 530g			—		—	—	—
25	磔	長さ 11.0 幅 4.5 厚さ 3.8 重さ 270g			—		—	—	—
26	磔	長さ 7.8 幅 5.8 厚さ 1.5 重さ 110g			—		—	—	—

いずれも長円形を呈し、前者は径76×65cm、深さはカマド側が一段深く15cmを計る。また後者は、径40×30cm、深さ12cmを計る。

カマドは、東壁中央部に設置されている。火床・燃焼部の区別は不明確であるが、全て竪穴内に位置し、奥壁の下端ラインは、竪穴壁ラインに一致している。底面の窪みは150cmの奥行きをもつが、奥壁の下端ラインから左袖が75cmの長さ（右は65cm）しか付けられていないため、奥壁からの窪みの半分は、袖からはみ出していることになる。両袖間の幅は、前面が55cm、奥面が35cmを計り、台形を呈する。奥壁は、高さ15cm程の段を成し、煙道へ移行する。煙道の底面は、奥壁に向けてわずかな傾斜をもって立ち上がる。奥壁の立ち上がりは、湾曲する。煙道の幅30cm前後、奥行き1.35mを計る。

覆土は、上層が、多量のマンガン粒・少量の炭化物を含むにぶい黄褐色粘土層（第1層）、中位には、多量のマンガン粒・少量の炭化物を含む明黄褐色粘土層（第2層）、下層が、少量のマンガン粒・炭化物を含むにぶい黄褐色粘土層（第3層）である。

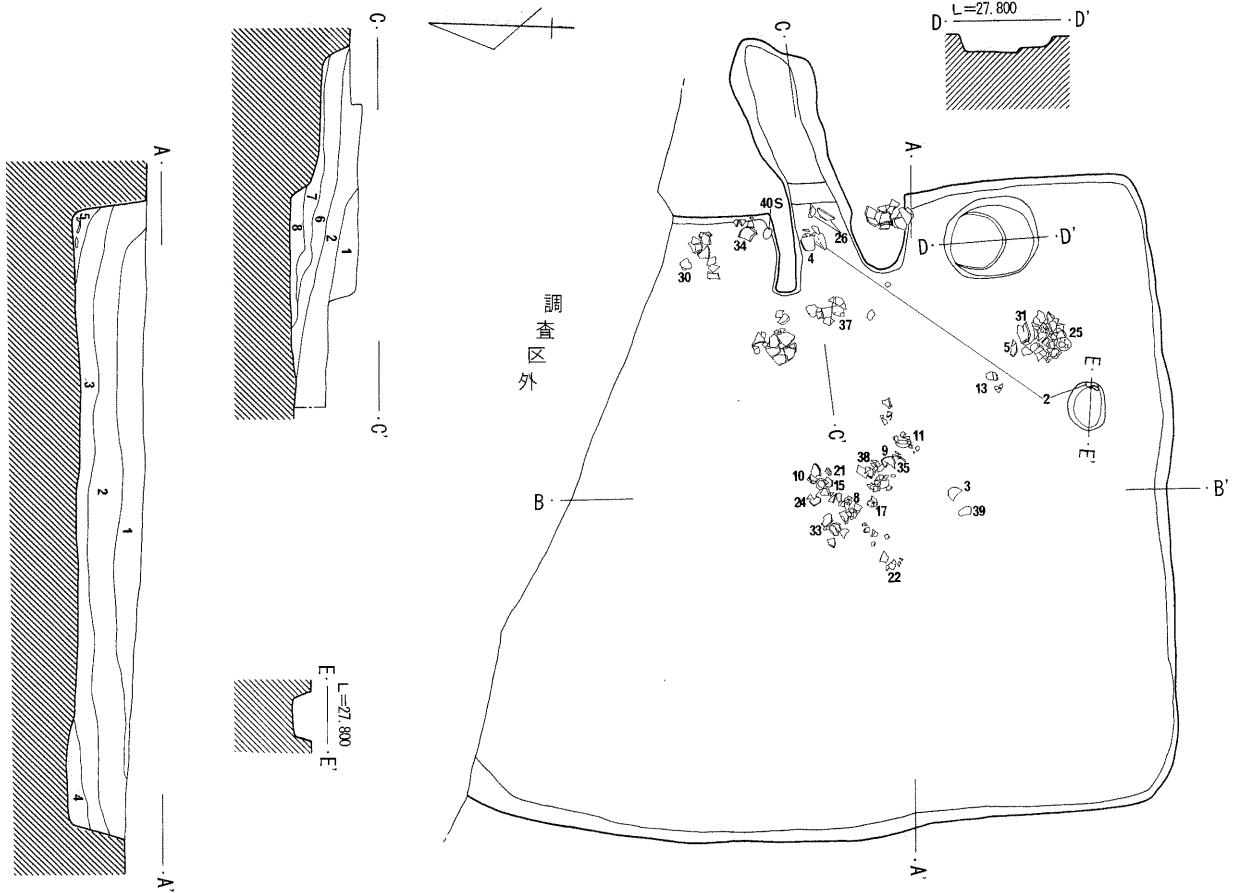
遺物は、カマド周辺、南東隅床面上、竪穴中央部第2層中の3ヶ所に集中している。カマド周辺では、カマド内からは、土師器杯（2・4）、甕（26・37）、右袖内から甕（27）、カマド左脇から甕（30・34）、磨石（40）が、また南東隅床面上からは、土師器杯（5・13）、甕（25・31）が出土している。一方、竪穴中央部第2層中からは、土師器杯（3・8・9・10・11）、高杯（1517）、椀（21）、盃（22）、鉢（24）、甕（33・35）、壺（38）甗（39）のほか、骨が出土している。

**61号住居跡** E-10・11からF-10・11グリッドに亘って位置し、北側は調査区外に及んでいる。

(第85図) 第二確認面からの検出である。

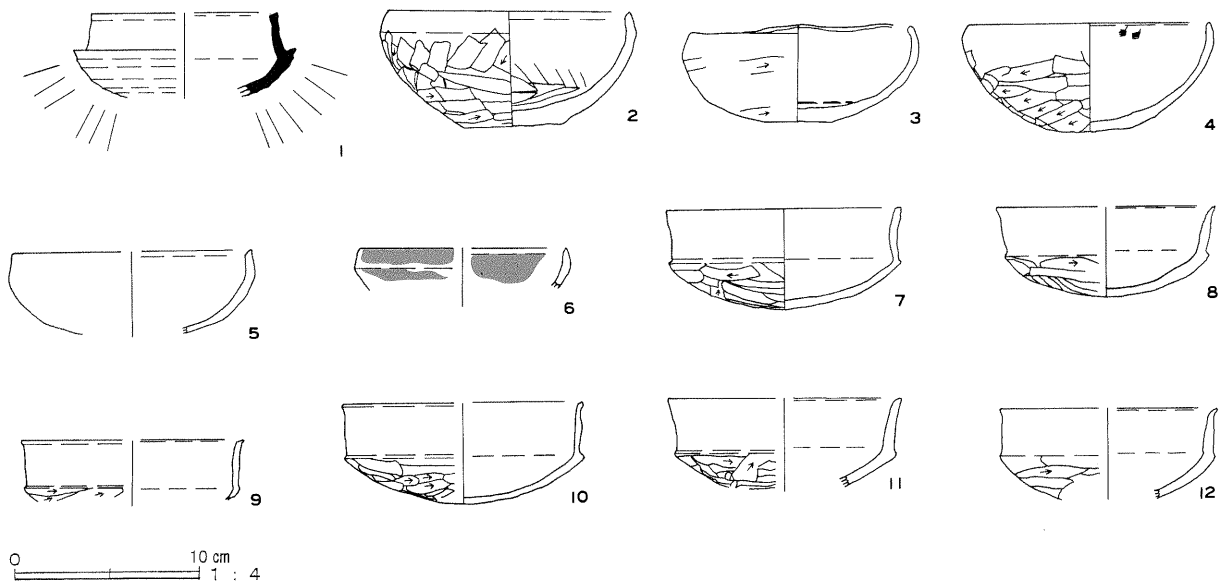
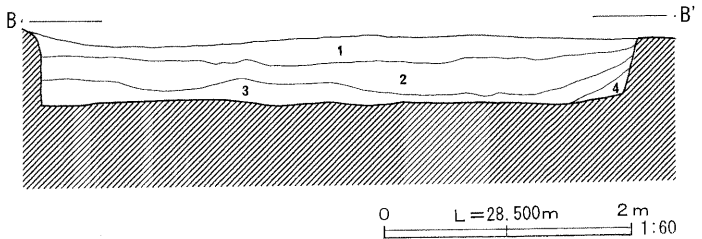
(第86図) 62号住居跡を切断し、79号住居跡の上面及び、13号畠跡を削平している。逆に、60号住居跡に削平されている。

規模は不明であるが、現状では西辺7.00+ $\alpha$ m、南辺8.15m、東辺2.30+ $\alpha$ mを計る。方形を基本とするが、各角が直角を成さず、一部で丸みをもつため、不整形を呈するようになる。西辺軸方位は、N-6°-Wを示す。

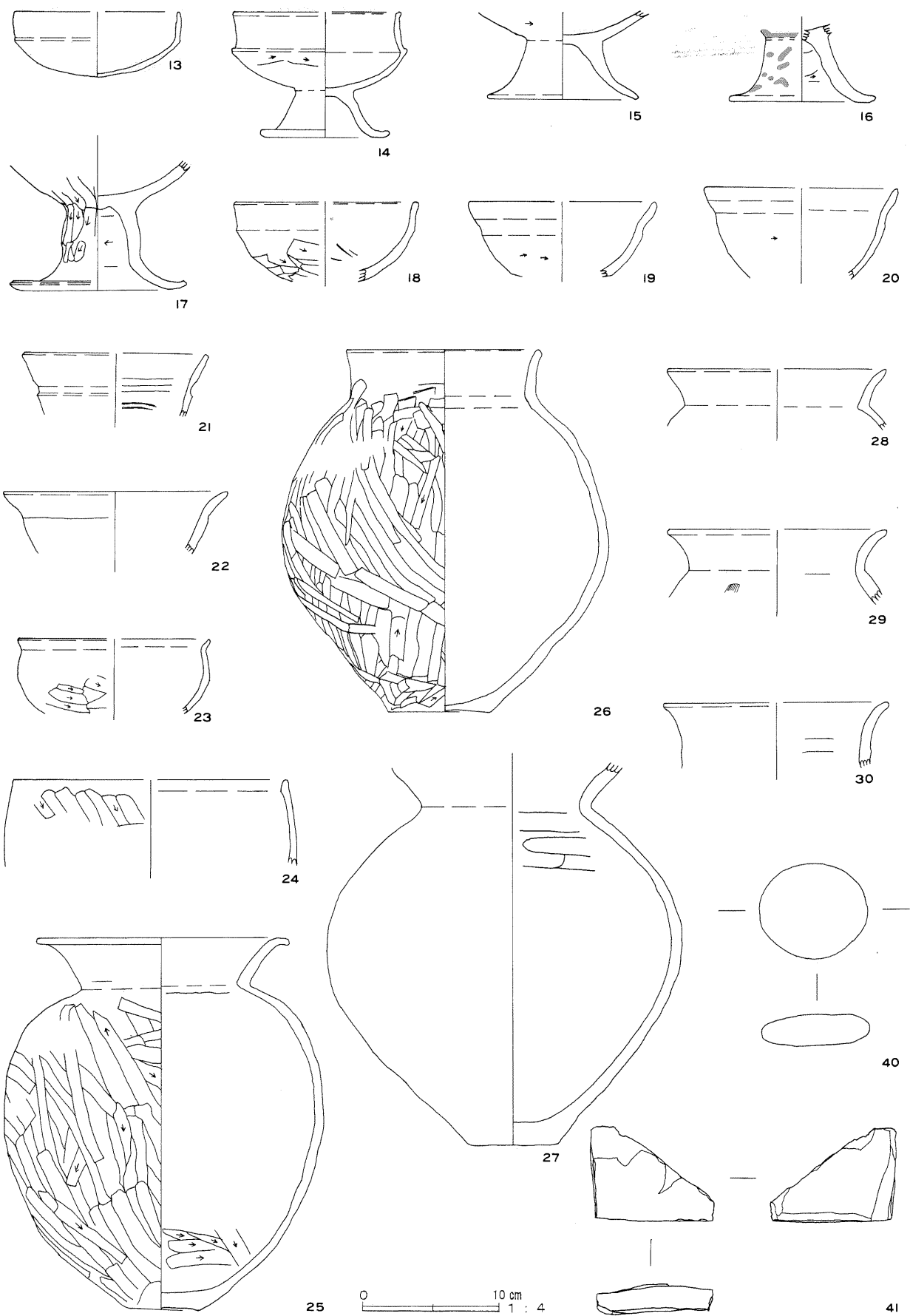


60号住居跡土層

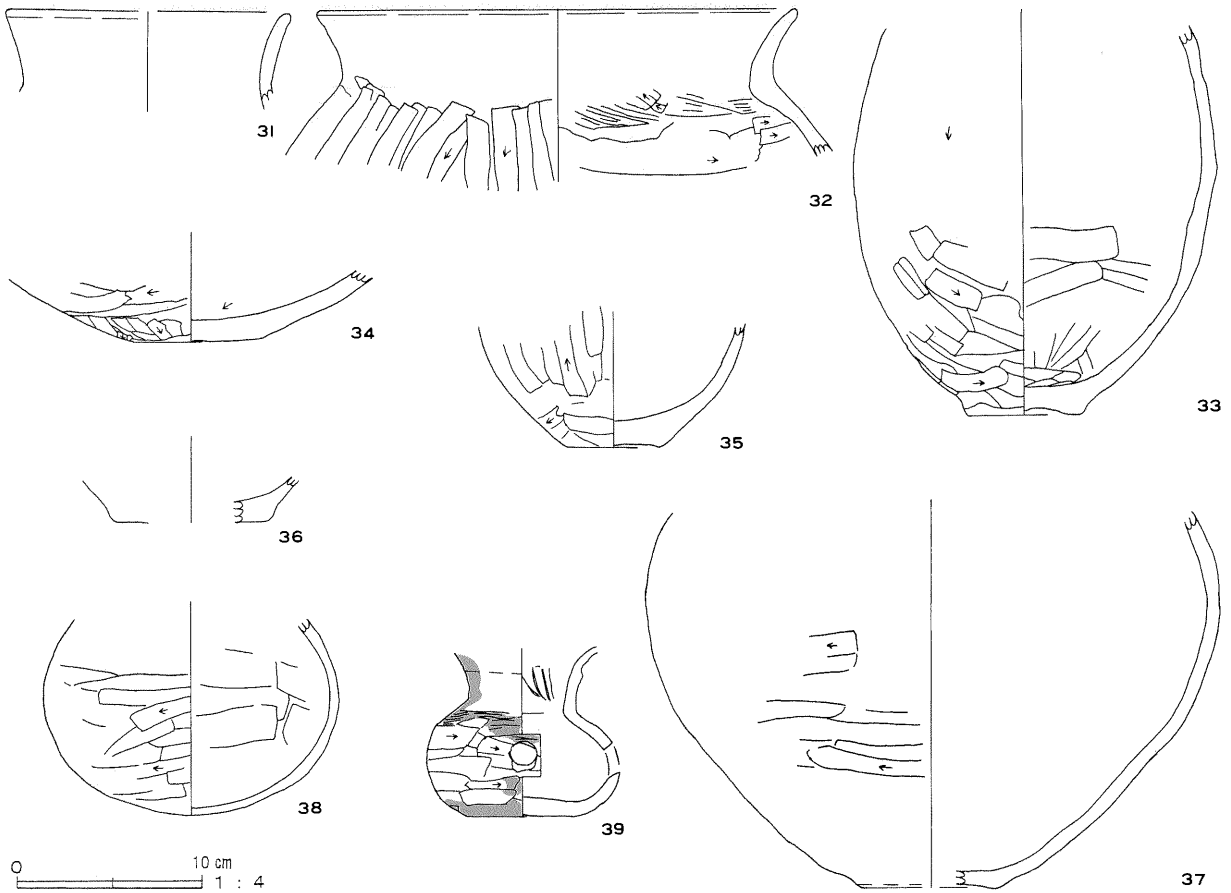
- 1 にぶい黄褐色(10YR 4/3)粘土。マンガン粒を多量、炭化物を少量含む。
- 2 明黄褐色(2.5Y 6/6)粘土。マンガン粒を多量、炭化物を少量含む。
- 3 にぶい黄褐色(10YR 5/3)粘土。マンガン粒、炭化物を少量含む。
- 4 にぶい黄褐色(10YR 5/4)粘土。マンガン粒を少量含む。
- 5 にぶい黄褐色(10YR 5/4)粘土。炭化物を多量含む。
- 6 にぶい黄褐色(10YR 4/3)粘土。炭化物を多量、マンガン粒を少量含む。
- 7 暗褐色(10YR 3/4)粘土。焼土粒、焼土ブロックを多量含む。被褥層。
- 8 灰色(N 4/0)灰層。焼土粒を少量含む。



第82図 B区60号住居跡及び出土遺物(1)



第83图 B区60号住居迹出土遗物(2)



第84図 B区60号住居跡出土遺物(3)

第39表 B区60号住居跡出土遺物観察表 (第82・83・84図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	須恵器・杯	(10.0)	—	—	⑥①	①	青灰	1/3	
2	土師器・杯	13.9	6.1	5.4	⑥④③①②	②	明赤褐	完形	口縁部横ナデ。体部外面ケズリ、内面上位横のナデ、下位ヘラ先によるナデ。内面1/2、外面口縁一部煤付着。
3	土師器・杯	12.0	5.3	3.6	⑥③④①	②	赤	完形	外面大部分ナデ、中位及び底部周辺ケズリ、底面ナデ。内面横のナデ、底面ミガキ様ナデ、中央部押圧。
4	土師器・杯	13.0	5.9	4.4	②④③①	②	橙	一部欠	外面口縁横のナデ、体部ケズリ、底面ケズリ、1/4吸炭。内面口縁木口状工具による横のナデ、体部ナデ、中央押圧、1/4に煤付着。全面赤色化。二次加熱。
5	土師器・杯	(13.0)	—	—	⑥③①④	②	にぶい橙	1/3	表面磨滅。口縁部横ナデ。
6	土師器・杯	(11.2)	—	—	⑥③①④	②	にぶい橙	口縁部1/8	全体横ナデ。朱塗。
7	土師器・杯	12.7	5.5	—	③⑥②①④	②	橙	2/3	口縁部横ナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。
8	土師器・杯	(11.8)	4.9	—	①②④	②	橙	1/4	口縁部横ナデ。体部外面ケズリ、内面回転ナデ。
9	土師器・杯	(12.0)	—	—	③②④①	②	橙	口縁部1/3	口縁部横ナデ。体部外面ケズリ。
10	土師器・杯	(13.1)	5.5	—	⑥③②①④	②	明赤褐	1/2	口縁部横ナデ。体部外面ケズリ、内面磨滅。
11	土師器・杯	(10.6)	—	—	③②①④	②	淡赤橙	1/5	口縁部横ナデ。体部外面ケズリ、内面回転ナデ。
12	土師器・杯	(11.6)	—	—	②③①④	②	浅黄橙	1/4	口縁部横ナデ。体部外面ケズリ、内面磨滅。
13	土師器・杯	(12.0)	4.8	—	③⑥①②	②	橙	1/2	表面磨滅。
14	土師器・高杯	(12.3)	9.3	9.4	③②①④	②	橙	杯口縁一部欠	口縁部及び脚部横ナデ。杯体部外面ケズリ、内面回転のナデ。
15	土師器・高杯	—	—	11.0	③②①④	②	橙	杯口縁欠	体部外面ケズリ、内面回転ナデ。脚部横ナデ。
16	土師器・高杯	—	—	10.7	③②⑥①④	②	淡橙	脚部のみ	外面磨滅、一部朱塗。内面上位横のケズリ、下位横ナデ。
17	土師器・高杯	—	—	(12.5)	②①⑥④	②	橙	杯部1/5 脚部1/5	外面杯部～脚にかけて縦のケズリ、脚部横ナデ。内面杯部ナデ、脚部天井ナデツケ、中位横の連続ケズリ、握部横ナデ。
18	土師器・椀	(13.5)	—	—	⑥③①②	②	明褐	底部欠1/3	口縁部横ナデ。体部外面上位ナデ、下位ケズリ。内面ヘラナデ。赤色化。二次加熱。
19	土師器・椀	(13.8)	—	—	⑥③①④	②	橙	底部欠1/8	表面磨滅。体部外面ケズリ痕。



20	土師器・椀	(14.1)	—	—	⑥③①④	②	橙	底部欠1/8	表面磨滅。体部外面ケズリ痕。
21	土師器・椀	(13.7)	—	—	③②①④	②	明赤褐	口縁部1/8	内外面横ナデ。
22	土師器・	(8.4)	—	—	②⑥③①④	②	橙	上半部1/8	表面剥離。内面横ナデ痕。
23	土師器・	(14.0)	—	—	⑥③②④①	②	にぶい橙	底部欠1/8	内面及び外面上位磨滅。外面下位横のケズリ。
24	土師器・鉢	(20.2)	—	—	⑥③①②④	②	橙	口縁部1/8	口唇部横ナデ。外面上位ケズリ、中位ナデ。内面ミガキ様ナデ。
25	土師器・甕	18.5	27.3	5.2	②①⑥④	②	浅黄橙	3/4	口縁部横ナデ。胴部外面ケズリ、肩部のみナデが加わる。煤付着。内面ナデ、底部のみ木口状工具によるナデ、炭化物付着。二次加熱。
26	土師器・甕	14.3	26.8	(7.6)	⑥③①	②	にぶい赤褐	1/2	口縁部横ナデ。胴部外面ケズリ、一部スリップ、下位煤付着。内面木口状工具による横のナデ、底部指頭によるナデツケ。二次加熱。
27	土師器・甕	—	—	6.6	⑥③①④	②	にぶい橙	上位1/2欠	外面ナデ、スリップ。内面接合部～胴上位横のケズリ、他ナデ。二次加熱。
28	土師器・甕	(16.0)	—	—	⑥①②③④	②	灰白	口縁部1/4	口縁部横ナデ。胴部内外面共ナデ。吸炭。
29	土師器・甕	(16.0)	—	—	⑥③①②④	②	淡橙	口縁部1/8	口縁部横ナデ。胴部外面縦の刷毛目の後ナデ、内面ナデ。
30	土師器・甕	(16.4)	—	—	③⑥①④②	②	にぶい橙	口縁部1/4	口縁部横ナデ。内面横のナデが加わる。
31	土師器・甕	(15.3)	—	—	③⑥①④	②	明赤褐	口縁部1/6	表面磨滅。
32	土師器・甕	(26.1)	—	—	①④②	②	褐灰	上位1/5	口縁部横ナデ。胴部外面ケズリ、内面括れ部ケズリ、肩部木口状工具によるナデ。内外面吸炭。
33	土師器・甕	—	—	6.2	⑥③②①④	②	にぶい黄橙	口縁欠1/8	外面ケズリ、中位以上ナデが加わる。煤付着。内面ナデ、中・下位接点及び底面指頭によるナデツケ。
34	土師器・甕	—	—	7.0	②⑥①④	②	にぶい橙	底部のみ	外面ケズリ、煤付着。内面ナデ、底部ナデツケ、炭化物付着。二次加熱。
35	土師器・甕	—	—	4.9	⑥③①②④	②	にぶい褐	底部のみ	外面ケズリ、内面ナデ、上げ底風。吸炭。
36	土師器・甕	—	—	(8.1)	①②④⑥	②	褐灰	下位1/5	全面ナデ。吸炭。
37	土師器・甕	—	—	(7.0)	③⑥①④	②	明赤褐	上位1/4欠	外面表面剥離した部分多い、中位～下位横のケズリ、下位ナデ。内面ナデ、内外面共煤付着、赤色化、二次加熱。
38	土師器・壺	—	—	—	③②①④	②	橙	底部1/3	外面肩部回転のナデ、中位以下横のケズリ。内面中位接合部木口状工具による横のナデ、他はナデ。
39	土師器・甕	—	—	5.8	⑥③②①	②	灰白	一部欠	外面全面朱塗(底部も含む)。外面口縁部横ナデ2段、胴部横のケズリ、肩部及び底部周辺ナデ、穿孔部ケズリ、底面ナデ。内面口縁部横のヘラナデ、胴部ナデ、一部炭化物付着。
40	磨石	長さ 7.9 最大径 7.0 厚さ 2.4						完形	
41	瓦	長さ - 幅 - 厚さ 2.1						—	左端部裏面砥石に転用。

壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。検出面からの高さは、最高で35cmを計る。

床面は、ほとんど凹凸がみられず、ほぼ水平面を成し、安定している。ピットは、穿たれていない。

炉等は、検出されていない。

覆土は、上層が、少量のマンガン粒及び炭化物を含むにぶい黄褐色粘土層（第1層）、下層が少量の酸化鉄・マンガン粒を含む黄色粘土層（第2層）である。土層からは、第2層堆積後、13号畠跡が築かれていることが分る。

遺物は、土師器高杯（1）、器台（2・3）、鉢（4）、甕類（5～8）、壺（9）、埴（10）等が出土している。なお台付甕（8）は、底面に穿孔された可能性がある。土師器杯（11・12）は、遺構検出時に出土したものである。

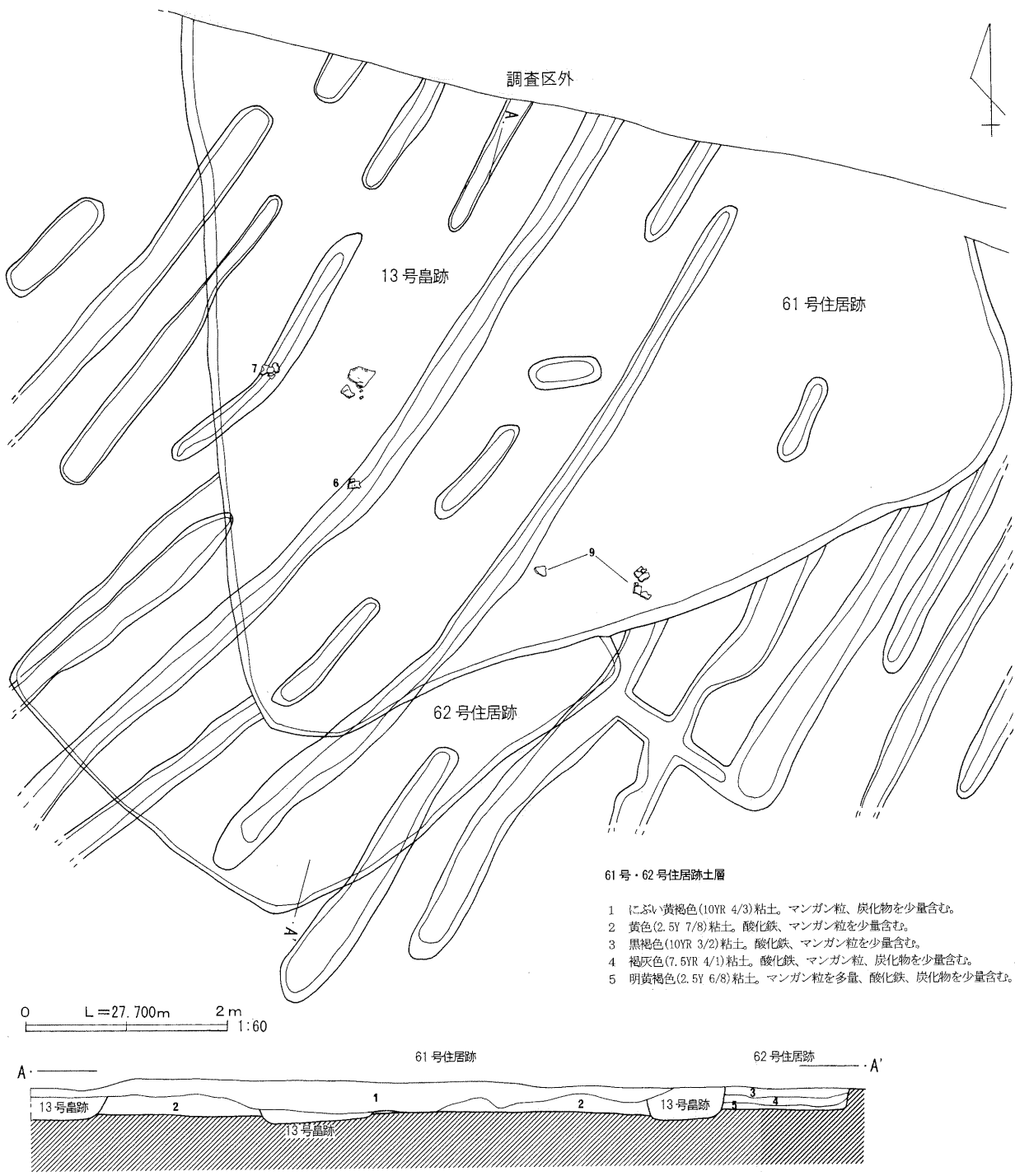
**62号住居跡** F-10からF-11グリッドに亘って位置している。第二確認面からの検出である。

(第85図) 61号住居跡及び13号畠跡に切断されている。

北西辺2.98+ $\alpha$ m、北東辺0.40+ $\alpha$ m、南東辺4.35m、南西辺3.65mを計る。各角が直角を成さないため、不整形を呈するようになるが、南西辺を短辺、南東辺を長辺とした長方形を基本とした形態をすと思われる。長軸方位は、N-40°-Eを示す。

壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。検出面からの高さは、最高で20cmを計る。

床面は、ほとんど凹凸がみられず、ほぼ水平面を成し、安定している。ピットは、穿たれていない。

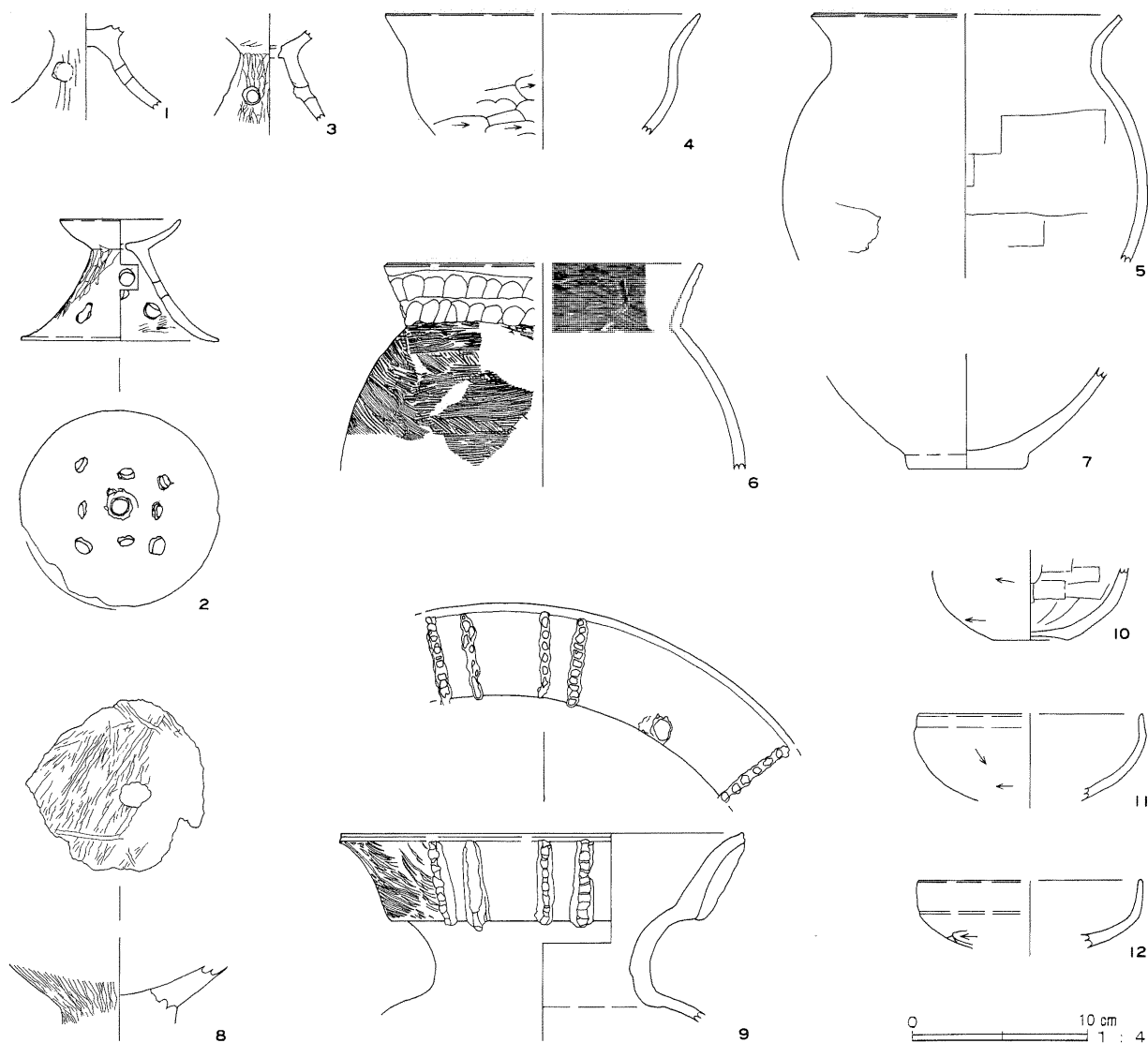


第85図 B区61号・62号住居跡

炉等は、検出されていない。

覆土は、上位が、少量のマンガング粒及び酸化鉄を含むにぶい黒褐色粘土層（第3層）、中位が、少量のマンガング粒及び炭化物を含むにぶい褐灰色粘土層（第4層）、下位が多量のマンガング粒及び少量の酸化鉄・炭化物を含む明黄色粘土層（第5層）である。土層からは、本住居跡内が埋没完了後に、13号島跡が築かれていることが分る。

遺物は、図示可能なものは、出土していない。



第86図 B区61号住居跡出土遺物

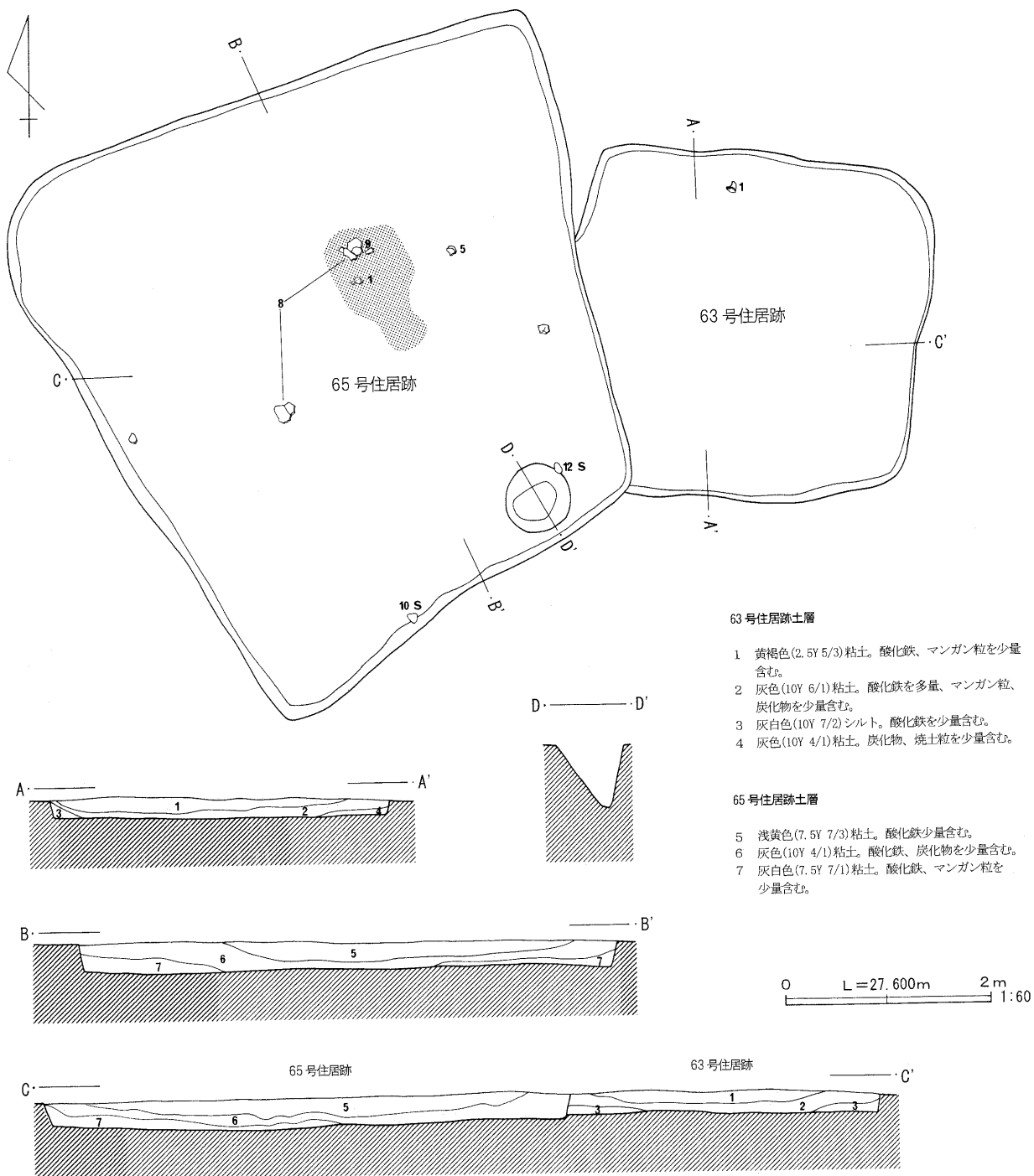
第40表 B区61号住居跡出土遺物観察表 (第86図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・高杯	—	—	—	②③①⑥	②	浅黄橙	脚部1/6	外面縦のミガキ。内面縦のナデ。表面剥離した部分が多い。
2	土師器・器台	(7.3)	7.1	11.8	②⑥③①	②	浅黄橙	受台部3/4欠	受台部表面磨滅。脚部内面上位横のナデ、下位横のミガキ。外面縦のミガキ、裾部横のナデ。
3	土師器・器台	—	—	—	②⑥③①	②	にぶい黄橙	脚部1/5	受台部外面斜のミガキ、内面ナデ、一部煤付着。脚部外面縦のミガキ、内面ナデツケ。
4	土師器・鉢	(18.2)	—	—	①③②⑥④	②	明赤褐	上位1/8	口縁部横ナデ。胴部外面横のケズリの後ナデ、内面ナデ。
5	土師器・甕	(17.6)	—	—	④⑥①③②	②	橙	上位1/6	内面口縁部横ナデ、胴部横のナデ、全面吸炭。外面口縁部横ナデ、胴部横のナデ。煤付着。二次加熱。
6	土師器・甕	(18.0)	—	—	③②①④	②	浅黄橙	上位1/3	口縁部外面輪積み痕を残し、指頭により押圧を加える。内面横の刷毛目。口唇部矩形。胴部外面横もしくは斜の刷毛目、内面ナデ。
7	土師器・甕	—	—	6.5	⑥③②①④	②	橙	底部のみ	表面磨滅した部分多い。内外面共ナデ。内面吸炭。
8	土師器・台付甕	—	—	—	⑥③①	②	浅黄橙	底部のみ	外面縦のミガキ、内面ナデ。底面穿孔。吸炭。
9	土師器・壺	23.3	—	—	③②④①⑥	②	浅黄橙	口縁部のみ	口縁部外面斜の刷毛目後棒状付文釘付け足し、内面木口状工具による横のナデ。胴部内面ナデ。吸炭。
10	土師器・柑	—	—	4.3	①③⑥④	②	橙	?	外面横のケズリの後ナデ。内面木口状工具によるナデ、中位横、底面縦。
11	土師器・柑	(12.8)	—	—	①⑥③④	②	橙	底部1/2欠	表面磨滅。体部外面ケズリ痕。
12	土師器・杯	(12.8)	—	—	③④①	②	橙	1/6	内面口縁部吸炭。

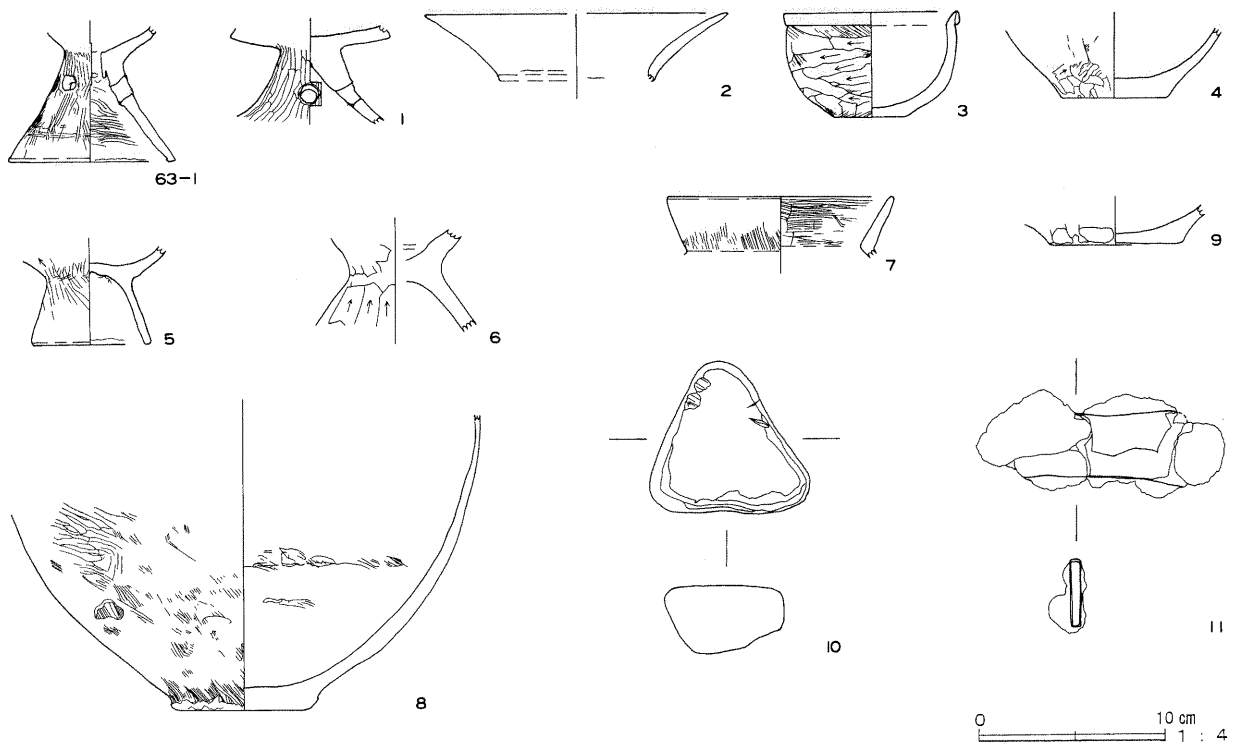
63号住居跡 F-10グリッドに位置している。第二確認面からの検出である。

(第87図) 西隅は65号住居跡によって切断されている。上面には、59号住居跡及び64号住居跡、  
(第88図) さらに上面には、52号溝跡が位置している。

北辺3.35m、東辺3.06m、南辺2.60+ $\alpha$ m、西辺0.95+ $\alpha$ mを計る。各辺がやや蛇行するため、不整形を呈するようになるが、ほぼ正方形呈すると思われる。東辺軸方位は、N-9°-Eを示す。



第87図 B区63号・65号住居跡



第88図 B区63号・65号住居跡出土遺物

第41表 B区63号住居跡出土遺物観察表 (第88図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・器台	—	—	9.1	①②③⑥	②	にぶい黄橙	脚部のみ	外面受台部及び脚裾横ナデの後縦刷毛目。内面上位縦のナデツケ、下位横の刷毛目、裾部横ナデ。

第42表 B区65号住居跡出土遺物観察表 (第88図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・高杯	—	—	—	②⑥④⑤	②	橙	脚部3/4	
2	土師器・高杯	(16.4)	—	—	②⑥①③	②	浅黄橙	口縁部のみ	外面ナデ、内面ミガキ様ナデ。一部吸炭。
3	土師器・	9.6	6.8	3.9	②③①	②	にぶい橙	3/4	内面口縁部横ナデ、ミガキ様ナデ。胴部外面斜の横刷毛目の後横のケズリ。口縁部内外面一部炭化物付着。
4	土師器・甕	—	—	5.3	⑥②③①	②	にぶい橙	底部のみ	胴部外面ナデ。底部横～斜のケズリ、内面ナデツケ。
5	土師器・台付甕	—	—	6.3	⑥①②③	②	橙	台部のみ	底面全面剥離。胴部から脚部にかけて縦の刷毛目。胴部下位縦のケズリが加わる。内面上位ナデツケ、下位横のナデ。二次加熱。
6	土師器・台付甕	—	—	—	⑥①②③	②	橙	台部1/3	内面底部有段、脚部ナデ。外面縦のケズリ。吸炭。二次加熱。
7	土師器・甕	12.1	—	—	⑥③②①	②	にぶい黄橙	口縁部5/6	口縁部上位横ナデ。下位外面縦の刷毛目、内面横の木口状工具によるナデ。
8	土師器・甕	—	—	7.3	②③⑥①	②	にぶい黄橙	下位3/5	外面斜の刷毛目の後中位粘土貼り付け後斜のミガキ。内面ナデ、接合部斜の刷毛目。外面一部炭化物付着。
9	土師器・甕	—	—	6.8	②③①	②	浅黄橙	底部のみ	外面底部横のケズリ及び縦のナデツケ。内面ナデ。
10	砥石	長さ 8.1 幅 8.7 厚さ 3.7						—	一面使用。
11	鉄鎌	長さ — 幅 3.7 厚さ 0.6						—	
12	編物石	長さ 13.0 幅 5.9 厚さ 4.6 重さ 590g						—	

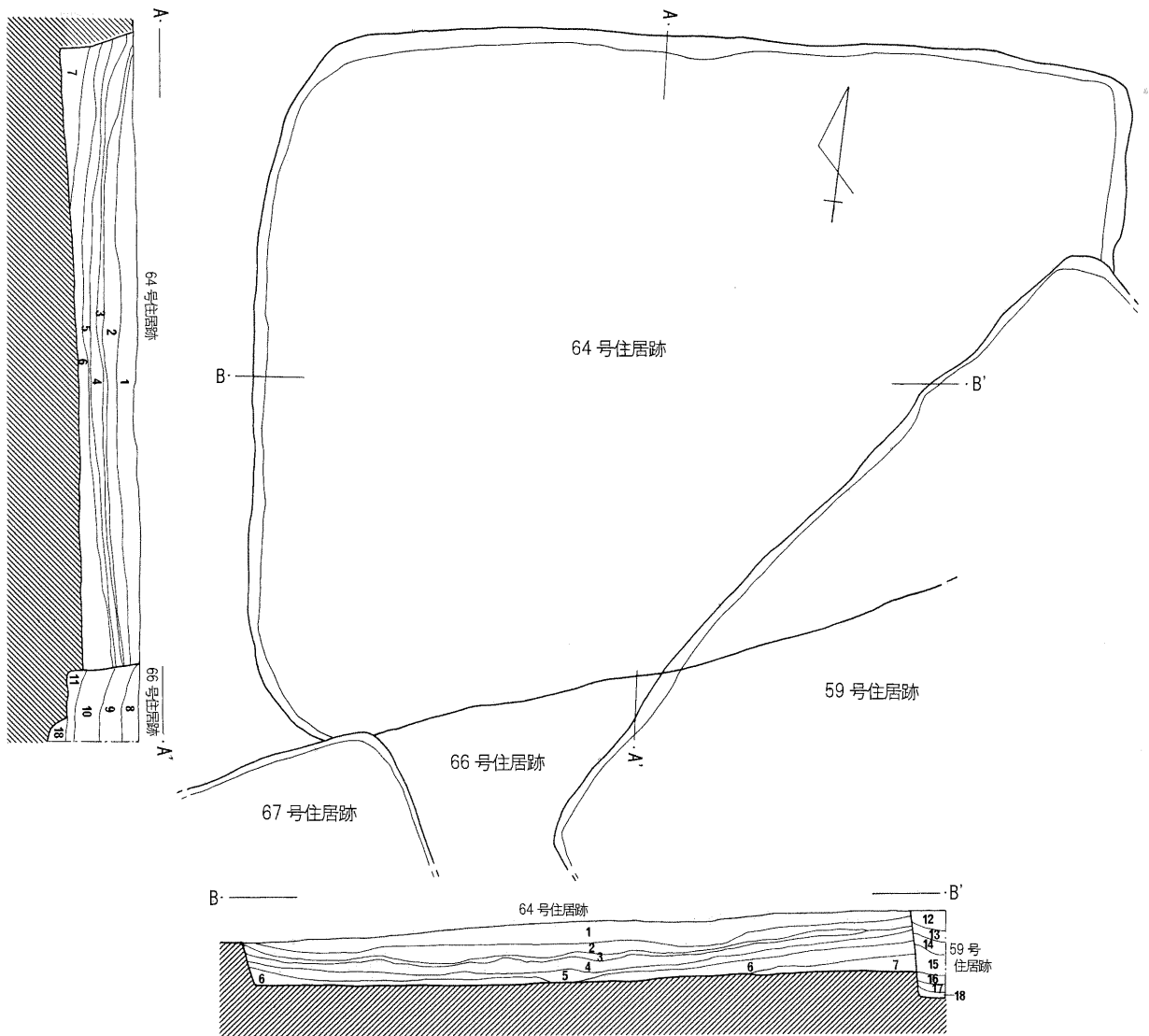
壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。検出面からの高さは、最高で20cmを計る。

床面は、ほとんど凹凸がみられず、ほぼ水平面を成し、安定している。ピットは、穿たれていない。

炉等は、検出されていない。

覆土は、上層が少量の酸化鉄を含む浅黄色粘土層（第1層）、下層が多量の酸化鉄及び少量のマンガン粒・炭化物を含む灰色粘土層（第2層）であり、壁際には、第2層の下に少量の酸化鉄を含む灰白色シルト層（第3層）あるいは、少量の炭化物・焼土粒を含む灰色粘土の堆積している部分もある。

遺物は、床面上から、土師器器台（63-1）が出土している。



64号住居跡土層

- 1 にぶい黄褐色(10YR 5/3)粘土。マンガン粒を多量、炭化物を少量含む。
- 2 褐色(10YR 4/4)粘土。マンガン粒を多量、炭化物を少量含む。
- 3 黄色(5Y 8/8)粘土。マンガン粒を少量含む。
- 4 暗灰黄色(2.5Y 5/2)粘土。マンガン粒を少量含む。
- 5 黒褐色(2.5Y 3/1)粘土。炭化物を多量、マンガン粒を少量含む。
- 6 黄褐色(2.5Y 5/3)シルト。マンガン粒、炭化物を少量含む。
- 7 オリーブ褐色(2.5Y 4/6)シルト。マンガン粒を少量含む。
- 8 黄褐色(2.5Y 5/4)粘土。マンガン粒を少量含む。

- 9 にぶい黄色(2.5Y 6/3)粘土。
- 10 オリーブ色(GY 5/4)粘土。マンガン粒、炭化物を少量含む。
- 11 オリーブ黄色(5Y 6/4)シルト。マンガン粒、炭化物を少量含む。
- 12 灰褐色(7.5YR 5/2)粘土。マンガン粒を多量、白色軽石粒を少量含む。
- 13 黄褐色(2.5Y 5/6)粘土。マンガン粒を多量、白色軽石粒、炭化物を少量含む。
- 14 灰褐色(7.5YR 5/2)粘土。マンガン粒、炭化物を少量含む。
- 15 灰褐色(7.5YR 5/2)粘土。14層よりやや明るい。マンガン粒を少量含む。
- 16 暗褐色(7.5YR 3/3)粘土。炭化物を多量含む。
- 17 褐色(10YR 4/4)粘土。マンガン粒を少量含む。
- 18 灰黄褐色(10YR 4/2)粘土。マンガン粒、炭化物を少量含む。

0 L=28.500m 2m 1:60

第89図 B区64号住居跡

**64号住居跡** F-10からG-10グリッドに亘って位置している。第一確認面からの検出である。

(第89図) 南東部を59号住居跡に、南部を66号・67号各住居跡によって切断されている。上面には、52号溝跡が位置し、下面には63号・65号各住居跡及び、14号畠跡が位置している。

北辺7.10m、東辺 $1.20 + \alpha$  m、南辺 $0.70 + \alpha$  m、西辺6.20mを計る。西辺を短辺、北辺を長辺とする長方形を呈すると思われる。長軸方位は、N-87°-Wを示す。

壁は、一部段を成す部分もみられるが、ほぼ垂直に立ち上がる。検出面からの高さは、最高で66cmを計る。

床面は、やや凹凸がみられるものの、ほぼ水平面を成し、安定している。ピットは、穿たれていない。

カマド等は、検出されていない。

覆土は、上位から、多量のマンガン粒及び少量の炭化物を含むいぶい黄褐色粘土層（第1層）、多量のマンガン粒及び少量の炭化物を含む褐色粘土層（第2層）、少量のマンガン粒を含む黄色粘土層（第3層）、少量のマンガン粒を含む暗灰黄色粘土層（第4層）、多量の炭化物及び少量のマンガン粒を含む黒褐色粘土層（第5層）、少量のマンガン粒・炭化物を含む黄褐色シルト層（第6層）が堆積し、最下層が、少量のマンガン粒を含むオリーブ褐色シルト層（第7層）である。

遺物は、図示可能なものは、出土していない。

**65号住居跡** F-10・11からG-10グリッドに亘って位置している。第二確認面からの検出である。

(第87図) 63号住居跡を切断している。上面には、59号住居跡及び64号住居跡、さらに上面には、

(第88図) 52号溝跡が位置している。

北辺5.20m、東辺4.75m、南辺4.10m、西辺5.85mを計る。不整形ではあるが、ほぼ台形を呈すると思われる。東辺軸方位は、N-155°-Eを示す。

壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。検出面からの高さは、最高で30cmを計る。

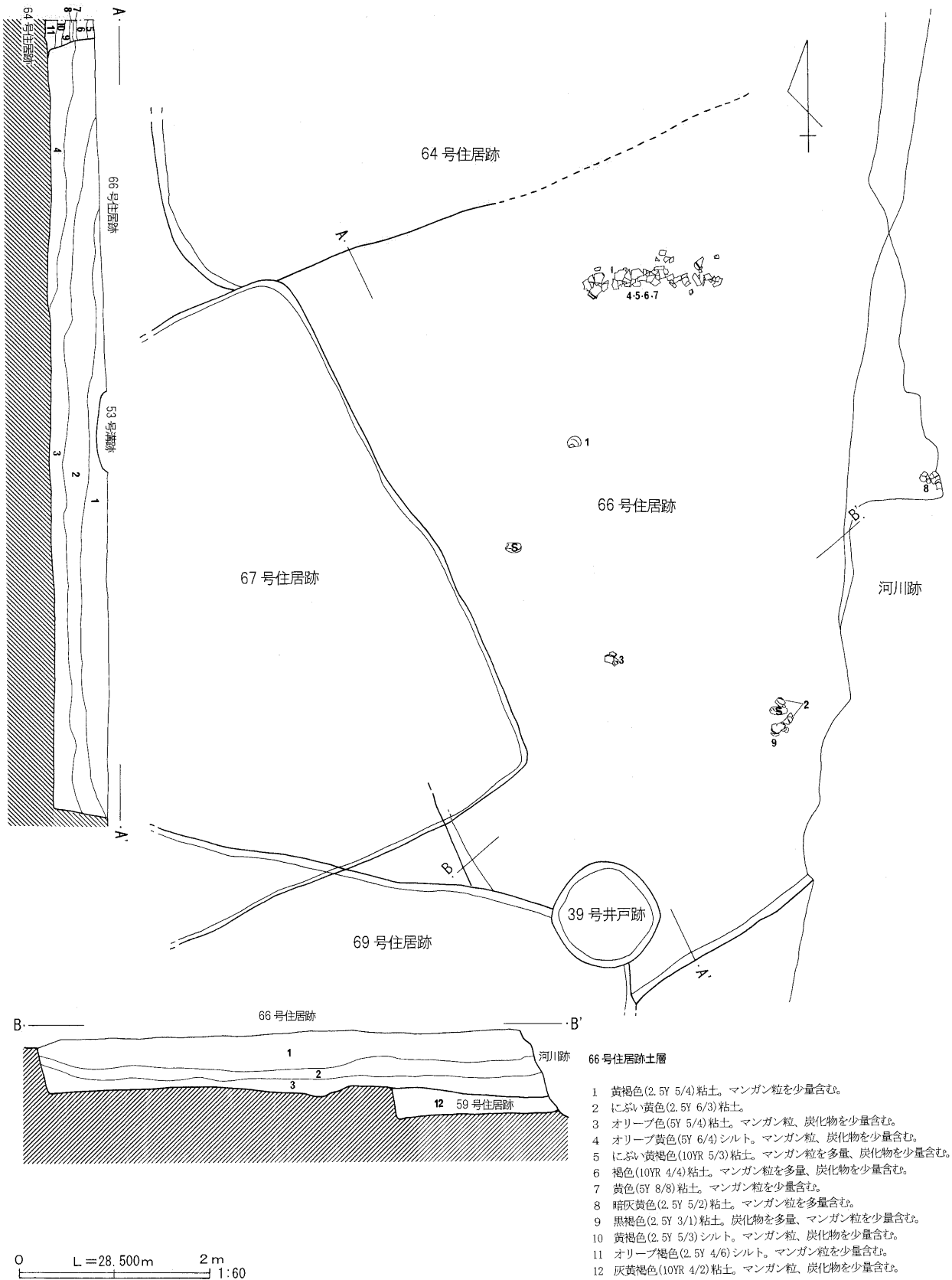
床面は、やや凹凸がみられるが、踏み固められた面もあって、安定している。

ピットは、南壁下・南東隅寄りに穿たれている。円形を呈し、径66×67cm、深さ63cmを計る。壁の傾斜は、竪穴壁よりが急である。

竪穴中央やや北寄りの床面上には、炭化材が集中して検出されている。全体で瓢箪形を呈するが、丸まりの小さい部分（南側）の下面がやや焼土化している。しかし、炉址とするには焼土化が進んでいない状況を呈しているものである。

覆土は、上位から、少量の酸化鉄を含む浅黄色粘土層（第5層）、少量の酸化鉄・炭化物を含む灰色粘土層（第6層）、少量の酸化鉄・マンガン粒を含む灰白色粘土層（第7層）が堆積している。

遺物は、土師器高杯（1・2）、    （3）、甕類（4～9）、砥石（10）、鉄鎌（11）等が出土している。



第90図 B区66号住居跡



**66号住居跡** G-10グリッドに位置している。第一確認面からの検出である。

(第90図) 59号住居跡の上面を削平し、64号住居跡を切断しているが、東側は河川跡によって、

(第91図) 西側は67号・69号両住居跡及び39号井戸跡によって切断されている。上面には、53号溝跡が位置している。

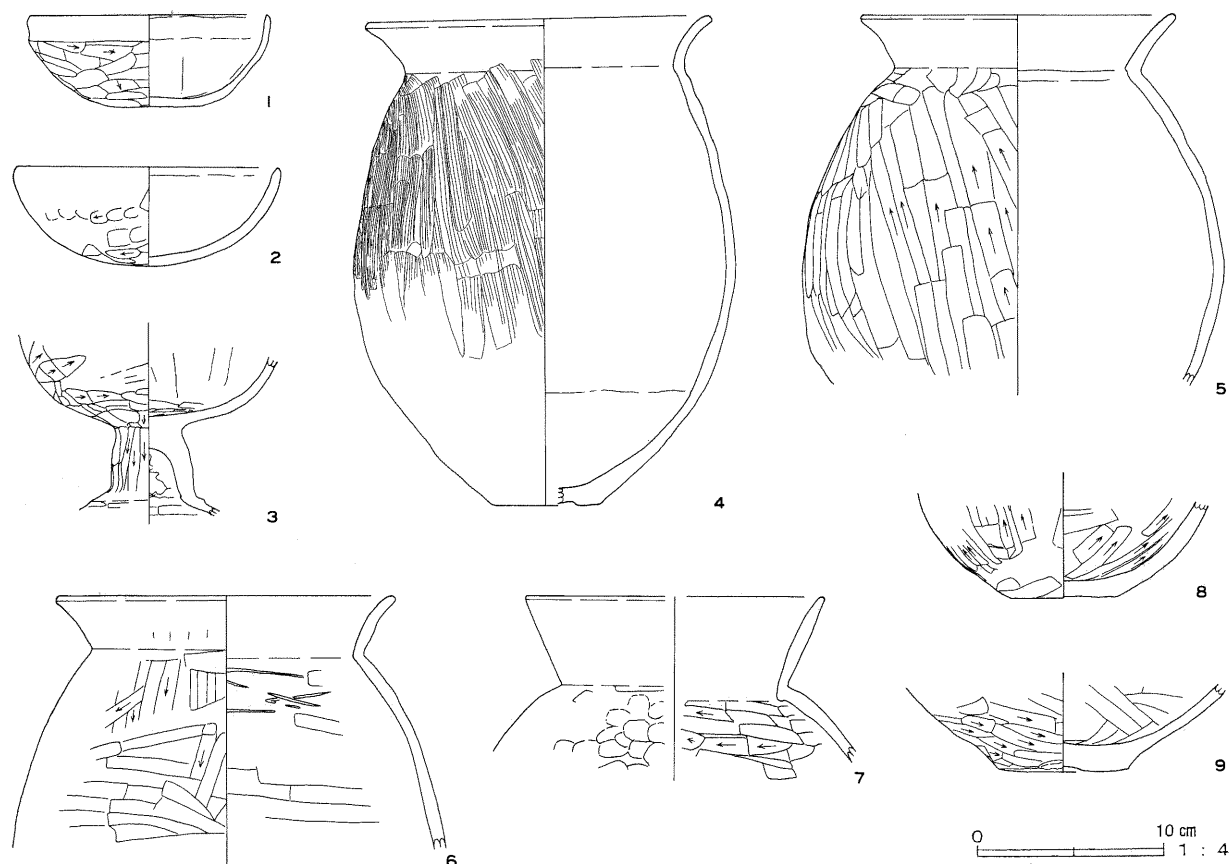
これらのことから、各辺共計測不可能であり、形態・規模ともに不明ではあるが、北西辺と南東辺の間が、西端では8.50mを計るものの、東へ移行するに従って幅を狭める様相を呈していることから、南西辺を底辺とした台形を呈すると思われる。北西辺と南東辺の中間線の示す方位は、N-65°-Eである。

壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。検出面からの高さは、最高で58cmを計る。

床面は、やや凹凸がみられるが、踏み固められた面もあって、安定している。ピット等は、検出されていない。カマド等も検出されていない。

覆土は、上位から、少量のマンガン粒を含む黄褐色粘土層（第1層）、にぶい黄色粘土層（第2層）、少量のマンガン粒・炭化物を含むオリーブ色粘土層（第3層）が堆積し、壁際には第3層下に、少量の炭化物・マンガン粒を含むオリーブ黄色シルト層（第4層）がみられる部分もある。

遺物は、全て第2層上からの出土である。土師器杯（1・2）、高杯（3）、甕（4～9）の他、礫が3点みられた。なお甕のうち4～7は、並置された状況で検出されている。



第91図 B区66号住居跡出土遺物

第43表 B区66号住居跡出土遺物観察表(第91図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・杯	13.0	5.1	—	①②④③	②	明赤褐	3/4	口縁部横ナデ。体部外面ケズリ、内面横のナデ。
2	土師器・杯	14.2	5.6	—	④③②①	②	明赤褐	4/5	全体に横のナデ。体部外面一部ケズリ。
3	土師器・台付椀	—	—	—	⑥①②④③	②	明赤褐	口縁・裾欠	腕部外面ケズリ、上位ナデ、煤付着。内面へらによる横のナデ、底面木口状工具によるナデ、吸炭、黒色化。脚部外面縦のケズリ、内面指頭によるナデツケ。裾部二段、横ナデ。
4	土師器・甕	19.0	26.6	6.0	⑥②③④①	②	橙	4/5	口縁部横ナデ。胴部外面下位ナデの後上位～中位縦の刷毛目、下位赤色化、底部上げ底。内面ナデ、下位炭化物付着。二次加熱。
5	土師器・甕	17.0	—	—	⑥②①④③	②	明赤褐	上位1/2	口縁部横ナデ。胴部外面ケズリ、煤付着。内面横のナデ。二次加熱。
6	土師器・甕	18.4	—	—	⑥②①③④	②	にぶい赤褐	上位1/4	口縁部横ナデ。胴部外面ケズリ、肩一部ナデが加わる、煤付着。内面上位へらナデ、中位横のケズリ。赤色化。二次加熱。
7	土師器・甕	(16.2)	—	—	⑥②④①③	②	明赤褐	口縁部のみ1/4	口縁部横ナデ。胴部外面ナデ、一部短いケズリの加わる部分がある。内面ケズリ及びびケズリ様ナデ。吸炭。
8	土師器・甕	—	—	5.6	①③②⑥④	②	にぶい橙	底部100%	内外面共スリップとケズリ併用。吸炭。赤色化。二次加熱。
9	土師器・甕	—	—	7.0	⑥②④①	②	にぶい橙	底部100%	外面ケズリ。底面ケズリ、上げ底。内面へらナデ、一部ナデツケ。
10	磔	長さ 18.6 幅 7.7 厚さ 5.6 重さ 1,180g							
11	磔	長さ 15.7 幅 8.6 厚さ 5.7 重さ 1,200g							
12	磔	長さ 17.3 幅 8.1 厚さ 5.7 重さ 1,130g							
13	磔	長さ 8.1 幅 3.5 厚さ 2.5 重さ 110g							

67号住居跡 G-10からG-11グリッドに亘って位置している。第一確認面からの検出である。

(第92図) 68号・69号各住居跡の上面を削平し、64号・66号各住居跡を切断しているが、40号・(第93図) 42号各井戸跡によって削除されている。またカマド煙出し部分を、71号住居跡カマドに(第94図) 削平されている。下面には14号畠跡が位置し、上面には、53号溝跡が位置している。

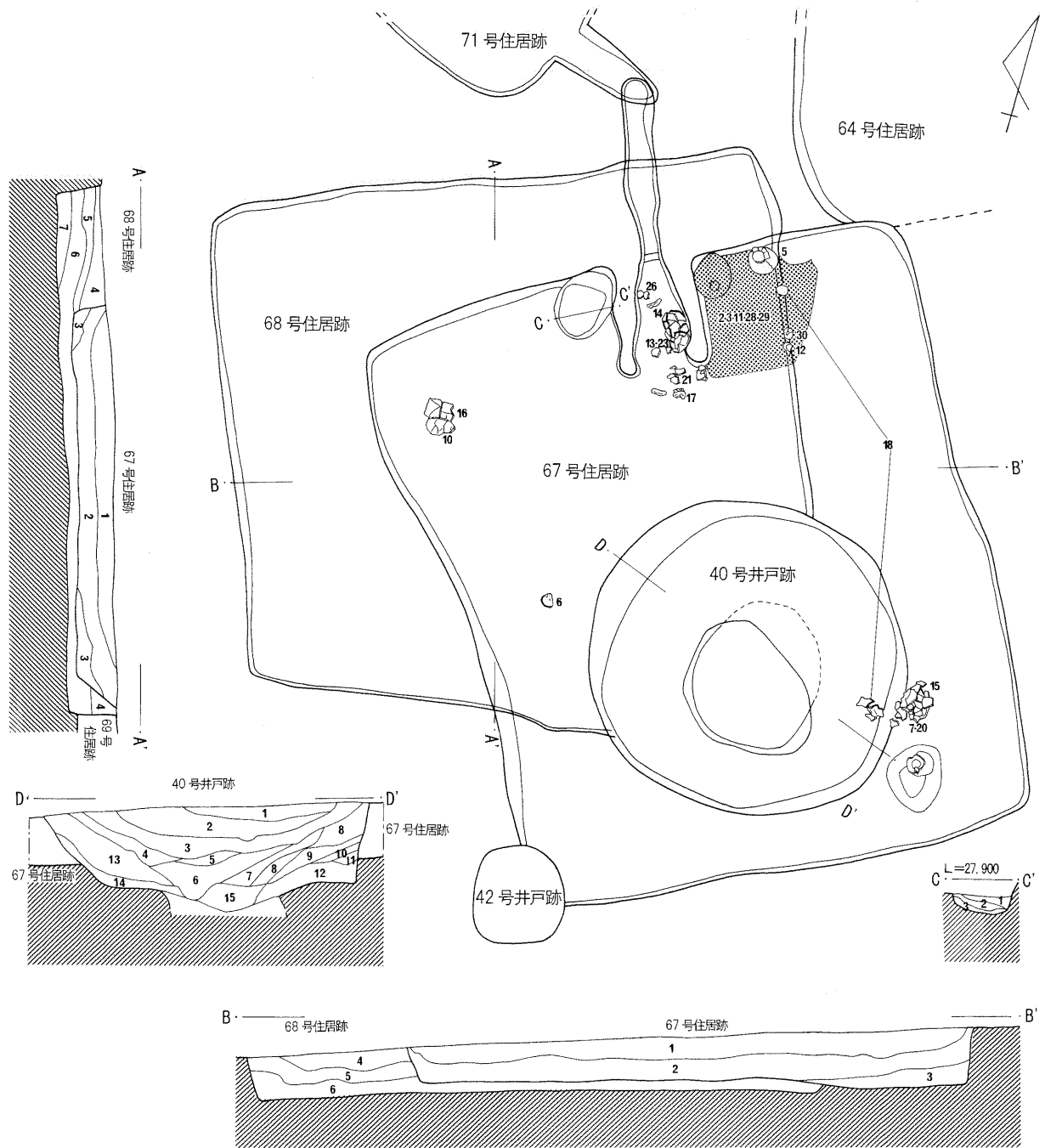
北西辺5.25m、北東辺5.84m、南東辺4.58+ $\alpha$ m、南西辺5.00+ $\alpha$ mを計る。各角が直角を成すものの、各辺が曲折して不整形を呈するようになるが、北西辺を短辺、北東辺を長辺とした長方形を呈すると思われる。主軸方位は、N-29°-Wを示す。

壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。検出面からの高さは、最高で55cmを計る。

床面は、かなり凹凸がみられ、安定していない。ピットは、竪穴南東辺下・東隅寄りと、カマド両脇の3ヶ所に穿たれている。東隅寄りピットは、不整形円形を呈し、径65×55cm、深さ10cmを計る。カマド左脇ピットは、長円形を呈し、径75×52cm、深さ18cmを計る。カマド右脇ピットは、長円形を呈し、径45×36cm、深さ33cmを計る。

カマドは、北西壁中央に設置されている。竪穴内に長さ110～120cmの袖が作り付けられ、火床・燃焼部が設けられている。左右の袖前面が包み込むように作られているため、火床は箱型を呈し、幅45cm、奥行き50cmを計る。燃焼部は、奥に向けて幅を狭め、台形を呈する。奥面幅18cm、奥行き55cmを計る。燃焼部奥壁は、高さ13cm程の段を成し、煙道へと移行する。煙道は、長さ1.68m、幅16cm前後を計る。底面は、70cm程奥まで水平面を成すが、その後奥壁に向けて緩やかなカーブを描いて下降する。奥壁部は、急カーブで立ち上がっている。また、右袖脇には、南北1.20m、東西1.00mの方形範囲には、厚さ5cm前後に灰が堆積している。

覆土は、上層が、多量のマンガン粒及び少量の炭化物を含むにぶい黄褐色粘土層(第1層)、下層が、少量のマンガン粒・炭化物・焼土粒を含む明黄褐色粘土層(第3層)が堆積し、壁際には第2層下に、少量の炭化物・マンガン粒を含むオリーブ黄色粘土層(第3層)がみられる部分もある。



67号・68号住居跡土層

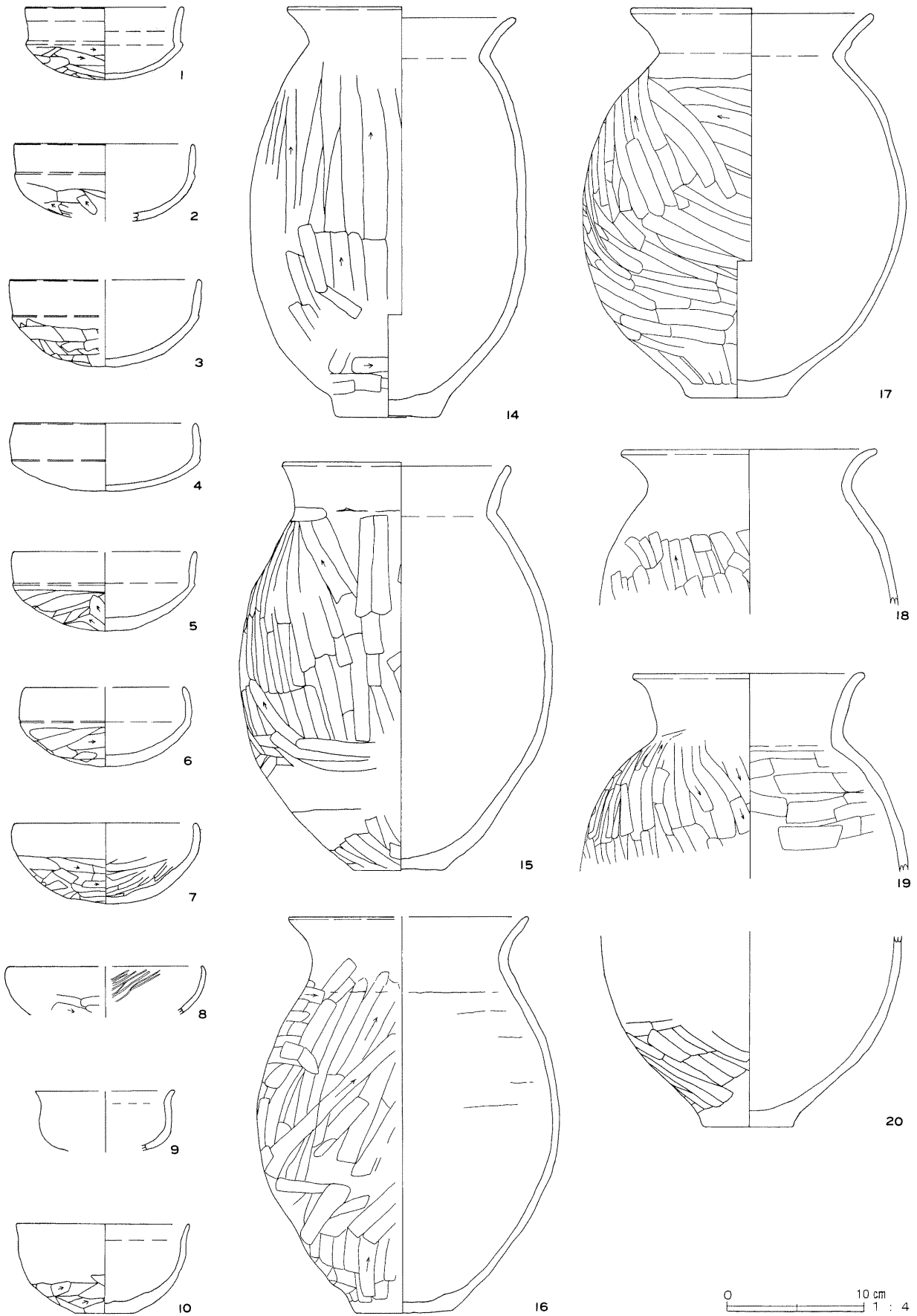
- 1 にぶい黄褐色(10YR 5/4)粘土。マンガン粒多量、炭化物少量含む。
- 2 明黄褐色(2.5Y 6/6)粘土。マンガン粒、炭化物、焼土粒少量含む。
- 3 オリーブ褐色(2.5Y 4/6)粘土。マンガン粒、炭化物少量含む。
- 4 浅黄色(5Y 7/4)粘土。酸化鉄、マンガン粒を多量含む。
- 5 黒色(7.5YR 2/1)粘土。炭化物を少量含む。
- 6 灰色(5Y 6/1)粘土。炭化物少量含む。
- 7 灰色(7.5Y 5/1)粘土。
- 8 灰色(N 4/0)粘土。焼土粒、焼土ブロックを多量、炭化物を少量含む。
- 9 暗灰黄色(2.5Y 4/2)粘土。焼土粒、焼土ブロックを多量、マンガン粒を少量含む。
- 10 暗灰黄色(2.5Y 4/2)粘土。焼土粒を少量含む。

40号井戸跡土層

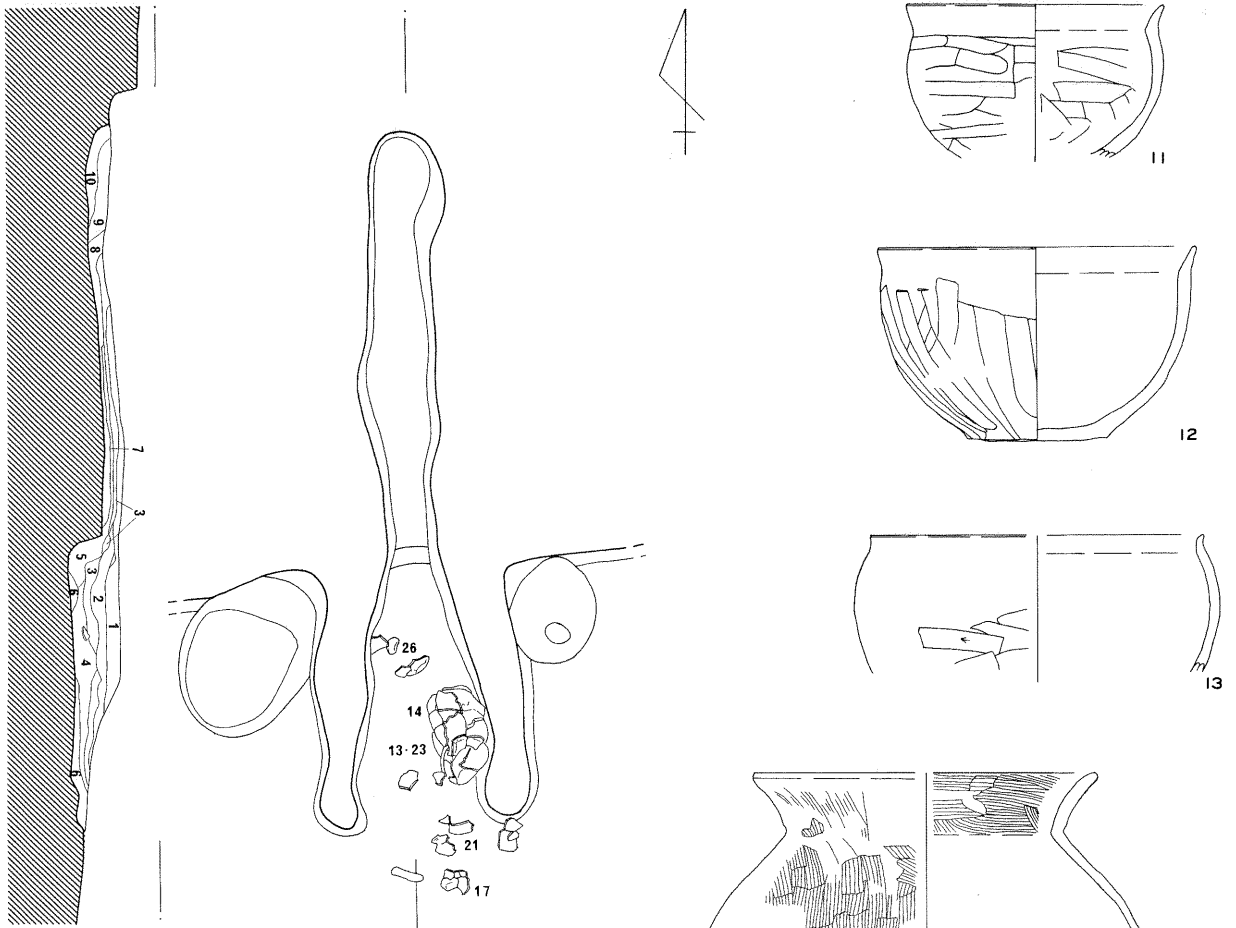
- 1 暗褐色(10YR 3/3)粘土。白色軽石粒(火山灰?)、マンガン粒、酸化鉄を少量含む。
- 2 黄灰色(2.5Y 5/1)粘土。白色軽石粒(火山灰?)、マンガン粒、酸化鉄を少量含む。
- 3 暗褐色(10YR 3/3)粘土。酸化鉄を多量、白色軽石粒(火山灰?)、マンガン粒を少量含む。
- 4 暗褐色(10YR 3/3)粘土。白色軽石粒(火山灰?)を少量含む。
- 5 黒褐色(10YR 3/2)粘土。白色軽石粒(火山灰?)、酸化鉄を少量含む。
- 6 黒褐色(10YR 3/1)粘土。白色軽石粒(火山灰?)、酸化鉄、炭化物を少量含む。
- 7 黒色(10YR 2/1)粘土。酸化鉄を多量含む。
- 8 黒褐色(10YR 3/2)粘土。白色軽石粒(火山灰?)を少量含む。
- 9 黒褐色(10YR 3/2)粘土。酸化鉄を多量、白色軽石粒(火山灰?)を少量含む。
- 10 黒褐色(10YR 3/2)粘土。白色軽石粒(火山灰?)を少量含む。
- 11 褐灰色(10YR 4/1)粘土。白色軽石粒(火山灰?)、褐灰色粘土を少量含む。
- 12 にぶい黄褐色(10YR 4/3)粘土。マンガン粒を少量含む。
- 13 黒褐色(10YR 3/1)粘土。白色軽石粒(火山灰?)、酸化鉄を少量含む。
- 14 黄褐色(2.5Y 5/6)粘土。酸化鉄を多量、白色軽石粒(火山灰?)を少量含む。
- 15 灰色(N 4/0)粘土。灰白色粘土を少量含む。

0 L = 28.400m 2m  
1:60

第92図 B区67号・68号住居跡、40号井戸跡

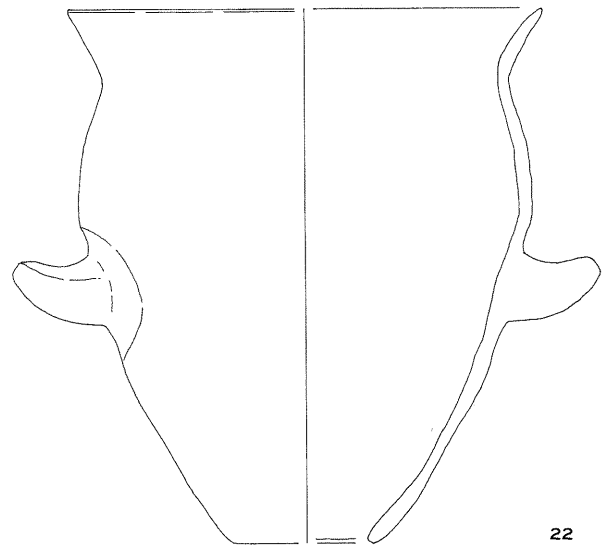
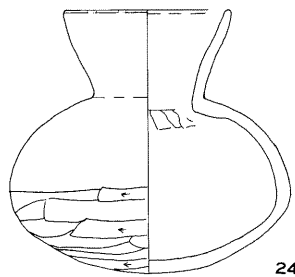
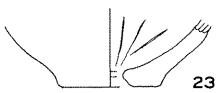


第93図 B区67号住居跡出土遺物(1)



- 1 にぶい黄褐色(2.5Y 6/3)粘土。マンガン粒少量含む。
- 2 にぶい黄褐色(2.5Y 6/3)粘土。マンガン粒、焼土粒少量含む。
- 3 明赤褐色(5YR 5/8)焼土層。
- 4 灰色(5Y 5/1)灰層。焼土粒多量含む。
- 5 にぶい赤褐色(5YR 5/4)焼土層。被熱層。
- 6 にぶい黄色(2.5Y 6/4)粘土。焼土粒少量含む。
- 7 灰色(5Y 5/1)灰層。
- 8 6層と同様。
- 9 暗褐色(10YR 3/4)粘土。焼土粒少量含む。
- 10 暗褐色(10YR 3/4)粘土。焼土粒、炭化物を少量含む。

0 L = 28.100m 1m 1:30



0 10 cm 1:4

第94図 B区67号住居跡カマド及び出土遺物(2)

第44表 B区67号住居跡出土遺物観察表 (第93・94図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・杯	11.6	5.3	—	②③①④	②	黄橙	1/2	口縁部横ナデ。体部外面ケズリ、内面ミガキ様ナデ。
2	土師器・杯	13.2	—	—	③②①④	②	橙	2/3	口縁部横ナデ。体部外面ケズリ、内面回転ナデ。一部吸炭。
3	土師器・杯	(14.0)	6.4	—	③①②④⑥	②	橙	1/2	口縁部横ナデ。体部外面ケズリの後ナデ、内面回転ナデ。
4	土師器・杯	(13.3)	5.0	—	③②①④	②	橙	一部欠	内外面共表面磨滅。
5	土師器・杯	(13.5)	5.8	—	①③④②⑥	②	橙	口縁部1/2欠	口縁部横ナデ。体部外面上位ケズリの後ナデ、下位ケズリ。内面回転ナデ。
6	土師器・杯	(11.8)	5.8	—	③①②④	②	黄橙	2/3	口縁部横ナデ。体部外面ケズリ、内面回転ナデ。
7	土師器・杯	13.7	5.9	—	①②④③⑥	②	浅黄橙	一部欠	口縁部横ナデ。体部内面ヘラナデ、底面押圧、外面ケズリ。二次加熱。
8	土師器・杯	(14.1)	—	—	③②①	②	橙	1/10	口縁部横ナデ。体部外面ケズリ、内面ミガキが加わる。
9	土師器・ <sub>—</sub>	(10.2)	—	—	③①②④	②	橙	1/6	外面ナデ。内面回転ナデ。
10	土師器・ <sub>—</sub>	12.5	6.5	4.4	①③②④⑥	②	橙	一部欠	外面ナデ、下位のみケズリ。内面口縁水拭き、体部ケズリ、ヘラナデ、ミガキ、ナデ、木口状工具によるナデが混在している。中央部指頭による押圧。
11	土師器・ <sub>—</sub>	13.9	—	—	①②③④⑥	②	橙	底部欠	口縁部横ナデ。体部外面ケズリの後ナデが加わる。内面木口状工具による横のナデ。全面煤付着。外面底部赤色化。二次加熱。
12	土師器・鉢	17.1	10.6	7.5	⑥①②③④	②	橙	3/4	外面口縁部無調整、胴部ケズリ、底面ケズリ。内面口縁部横ナデ、胴部ナデ、底面押圧。
13	土師器・鉢	(18.0)	—	—	⑥②①③④	②	橙	上位1/8	外面上位磨滅、中位横のケズリ。内面横のナデ。下位吸炭。赤色化。二次加熱。
14	土師器・甕	16.8	30.0	7.5	①②⑥③④	②	橙	一部欠	口縁部横ナデ。胴部外面ケズリ、一部スリップ、煤付着、赤色化。内面ナデ、下半炭化物付着。二次加熱。
15	土師器・甕	16.8	29.9	6.5	⑥①②③④	②	橙	一部欠	口縁部横ナデ。胴部外面ケズリ、下位剥離した部分が多い。内面横のナデ。赤色化。二次加熱。
16	土師器・甕	(17.7)	29.0	7.1	⑥②③①④	②	淡橙	口縁部1/2欠	口縁部横ナデ。胴部外面ケズリ、煤付着。内面横のナデ、輪積み痕残す、下位吸炭。二次加熱。
17	土師器・甕	17.8	28.5	7.6	⑥②①③④	②	浅黄橙	一部欠	口縁部横ナデ。胴部外面ケズリ、底部周辺縦のナデツケ、下半赤色化。内面ナデ、炭化物付着。二次加熱。
18	土師器・甕	18.6	—	—	⑥①②③④	②	にぶい橙	上位のみ	口縁部横ナデ。胴部外面ケズリ、後肩部ナデが加わる。内面ナデ、吸炭、二次加熱。
19	土師器・甕	16.9	—	—	⑥②①③④	②	橙	上位のみ	口縁部横ナデ。胴部外面ケズリ、煤付着。内面指頭による押圧ナデ。
20	土師器・甕	—	—	6.6	②①⑥③④	②	浅黄橙	下位1/2	外面中位ナデ、下位ナデツケ。煤付着。内面ナデ。
21	土師器・甕	(18.6)	—	—	①②⑥④③	②	灰白	上位1/4	外面縦の刷毛目、口縁部横のナデが加わる、煤付着。内面口縁横の刷毛目、胴部ナデ、吸炭。
22	土師器・甕	(25.7)	29.2	(7.7)	⑥①②③④	②	橙	1/2	全面表面剥離。
23	土師器・甕	—	—	5.4	②①⑥③④	②	にぶい橙	底部のみ	外面ナデツケ、内面ヘラナデ。底部焼成後穿孔。
24	土師器・埴	9.1	14.4	—	①②③④⑥	②	橙	2/3	口縁部内外面及び胴部中位以上朱塗。口縁部横ナデ。胴部外面上半ナデ、下半～底部横のケズリ、内面肩部指頭による押圧、他ナデ。

遺物は、カマド内をはじめ、全て床面上からの出土である。カマド内からは、土師器鉢 (13)、甕 (14・17・21・23・26) が、カマド右脇の灰層からは、土師器杯 (2・3・5)、(11)、鉢 (12)、甕 (28)、甕 (29・30) が出土している。西隅からは、土師器<sub>—</sub> (10)、甕 (16) が、中央南西壁寄りからは土師器杯 (6) が、東隅寄りからは、土師器杯 (7)、甕 (15・20) が出土している。また、土師器甕 (18) は、カマド右脇の灰層及び東隅寄りから出土した破片が接合されたものである。

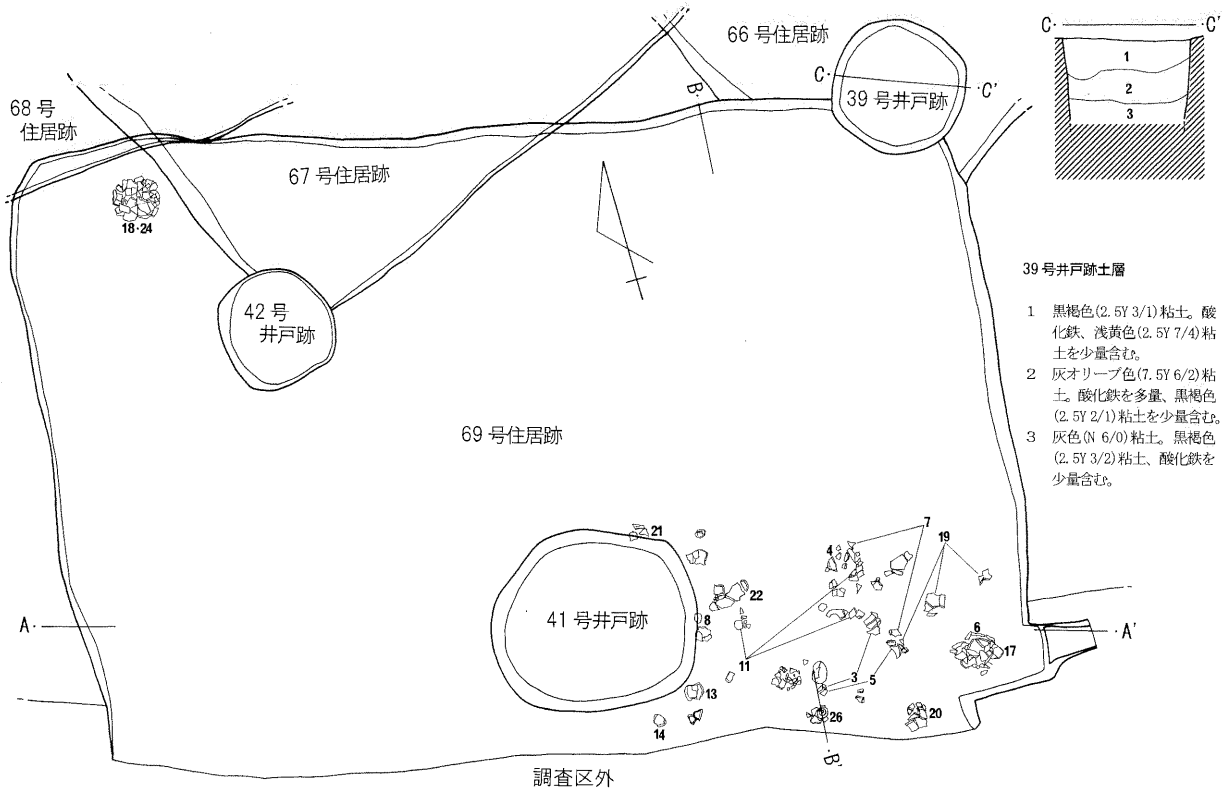
**68号住居跡** G-10からG-11グリッドに亘って位置している。第一確認面からの検出である。

(第92図) 74号住居跡を切断しているが、67号・69号両住居跡に上面を削平され、東隅を40号井戸跡に切断されている。下面には72号住居跡及び14号畠跡が位置し、上面には、53号溝跡が位置している。

北西辺5.30m、北東辺3.60+ $\alpha$ m、南東辺3.50+ $\alpha$ m、南西辺4.34mを計る。各角が直角を成さず、南西辺が短いことから、南西辺を短辺、北東辺を長辺とした台形を呈すると思われる。主軸方位は、N-120°-Wを示す。

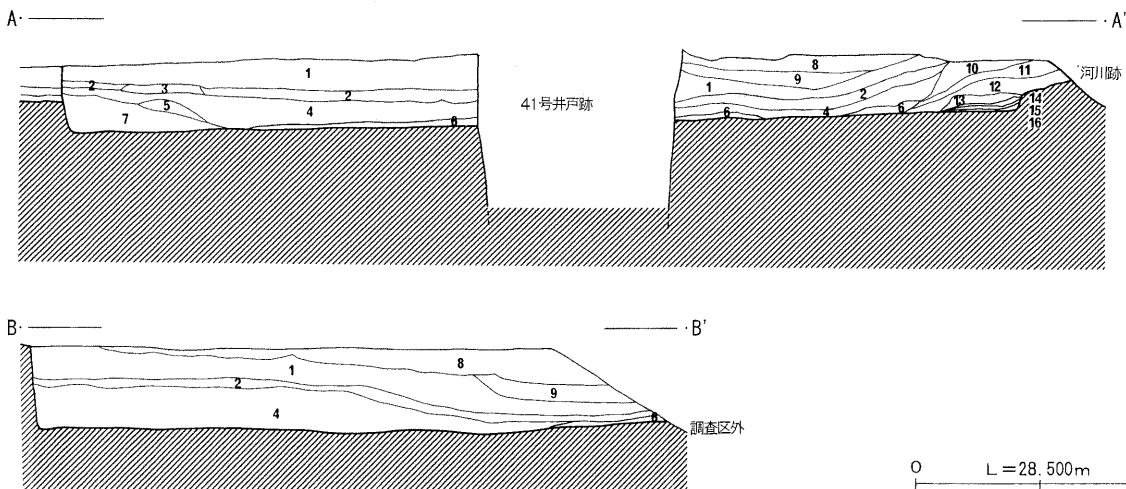
壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。検出面からの高さは、最高で55cmを計る。

床面は、かなり凹凸がみられ、安定していない。ピットは、検出されていない。



39号井戸跡土層

- 1 黒褐色(2.5Y 3/1)粘土。酸化鉄、浅黄色(2.5Y 7/4)粘土を少量含む。
- 2 灰オリーブ色(7.5Y 6/2)粘土。酸化鉄を多量、黒褐色(2.5Y 2/1)粘土を少量含む。
- 3 灰色(N 6/0)粘土。黒褐色(2.5Y 3/2)粘土、酸化鉄を少量含む。



- 1 灰黄褐色(10YR 5/2)粘土。マンガン粒を多量、炭化物を少量含む。
- 2 にぶい黄褐色(10YR 4/3)粘土。マンガン粒を多量、炭化物を少量含む。
- 3 褐色(10YR 5/1)粘土。マンガン粒、酸化鉄を多量含む。
- 4 灰黄褐色(10YR 4/2)シルト。マンガン粒を多量、炭化物を微量含む。
- 5 灰白色(5Y 7/1)シルト。マンガン粒、酸化鉄を少量含む。
- 6 灰色(5Y 4/1)粘土。
- 7 黄灰色(2.5Y 5/1)シルト。酸化鉄を少量含む。
- 8 灰黄褐色(10YR 5/2)粘土。マンガン粒を多量、焼土粒を微量含む。
- 9 灰黄褐色(10YR 4/2)粘土。マンガン粒、焼土粒を多量含む。
- 10 暗黄褐色(2.5Y 5/2)粘土。マンガン粒、焼土粒を多量、炭化物を少量含む。
- 11 暗黄褐色(2.5Y 5/2)シルト。10層よりやや暗い。マンガン粒を多量、焼土粒、炭化物を少量含む。
- 12 黄褐色(2.5Y 5/3)シルト。マンガン粒、炭化物を少量含む。
- 13 暗褐色(2.5YR 3/3)粘土。焼土粒を少量含む。
- 14 暗褐色(7.5YR 5/3)粘土。焼土粒、灰を多量含む。
- 15 暗赤褐色(5YR 3/2)焼土層。
- 16 暗灰色(N 3/0)灰層。焼土粒を少量含む。
- 17 灰黄褐色(10YR 5/2)粘土。マンガン粒を少量含む。
- 18 暗黄褐色(2.5Y 4/2)粘土。マンガン粒、炭化物を少量含む。
- 19 黄褐色(2.5Y 5/4)粘土。マンガン粒を少量含む。

第95図 B区69号住居跡、39号・41号井戸跡

また、カマド等も検出されていない。

覆土は、上層から、多量のマンガン粒・酸化鉄を含むにぶい浅黄色粘土層（第4層）、少

量の炭化物を含む黒色粘土層（第5層）、少量の炭化物を含む灰色粘土層（6）が堆積し、壁際には第6層下に、灰色粘土層（第7層）がみられる部分もある。

遺物は、図示可能なものは、出土していない。

**69号住居跡** G-10・11からH-10・11グリッドに亘って位置し、南側は調査区外に及んでいる。

(第95図) 第一確認面からの検出である。

(第96図) 68号住居跡を削平し、66号住居跡を切断している。逆に、67号に削平され、39号・41

(第97図) 号・42号各井戸跡に切断されている。またカマド煙道部は、河川跡に切断されている。下面には、70号住居跡及び14号畠跡が、上面には53号溝跡が位置している。

形態・規模共に不明であるが、東西両辺間が7.90m前後を計り、各角がほぼ直角を成すことから、一辺7.90m前後の方形を呈するものと思われる。北辺の軸方位は、N-120°-Wを示す。

壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。検出面からの高さは、最高で55cmを計る。

床面は、かなり凹凸がみられ、安定していない。ピットは、検出されていない。

カマドは、東壁に設置されている。袖は、右袖のみであり、左袖は確認されなかった。しかしながら、焼土面は竪穴内に確認され、ほぼ台形を呈している。前面幅60cm、奥面幅35cm、奥行き70cmを計る。奥面部分は、竪穴壁を12~13cm掘り込んでいる。底面は、ほぼ水平であり、奥壁は垂直に立ち上がり、高さ14cmの段を成す。煙道は、緩い傾斜をもって立ち上がり、河川跡に切断されている部分まで、40cmの長さが確認されている。幅は、前面が35cmを計るが、奥部では20cmと狭くなる。

覆土は、上層から、多量のマンガン粒及び少量の炭化物を含む灰黄褐色粘土層（第1層）、多量のマンガン粒及び少量の炭化物を含むにぶい黄褐色粘土層（第2層）、多量のマンガン粒及び微量の炭化物を含む灰黄褐色シルト層（第4層）が堆積し、壁際の第4層下には、少量の酸化鉄を含む黄灰色シルト層（第7層）のみられる部分もある。また床上には、灰色粘土層（第6層）が堆積している部分もある。

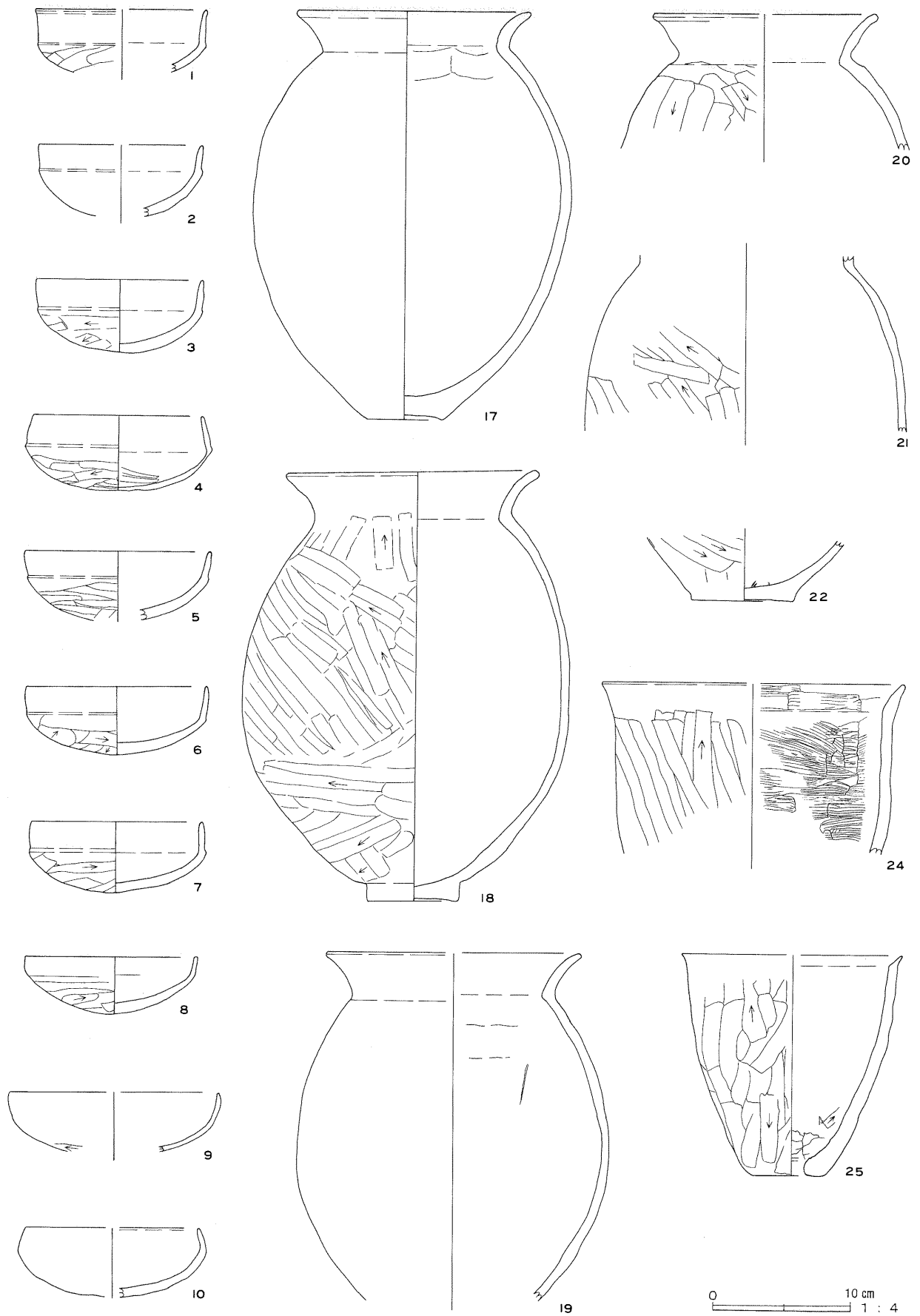
遺物は、特に、カマド前に集中している。カマド内からは、土師器杯（6）、甕（17）、カマド前から竪穴中央にかけては、土師器杯（3・4・5・7・8・11・13・14）、甕（19・20・21・22）、甌（26）が出土しており、また北西隅からも、土師器甕（18）、甌（24）が出土している。いずれも床面直情もしくは最下層中からの出土である。

**70号住居跡** H-10からH-11グリッドに亘って位置し、南側は調査区外に及んでいる。第一確認面（第98図）からの検出である。

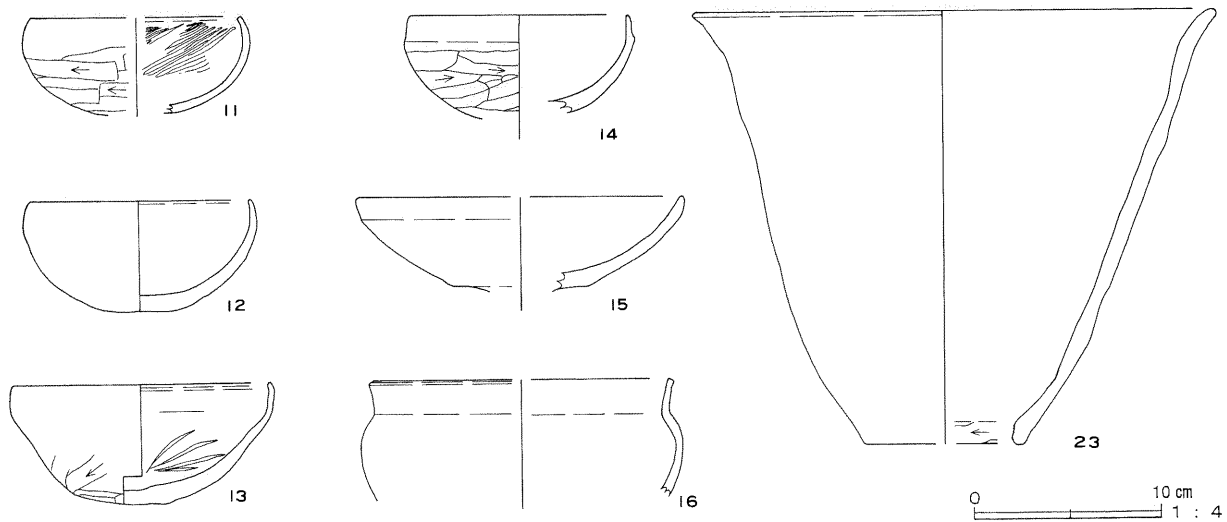
(第99図) 14号畠跡・41号井戸跡・54号溝跡に部分的に切断され、東側は河川跡によって削除されている。上面に69号・74号両住居跡が位置している。

形態・規模共に不明であるが、東西両辺間が9.85m前後を計り、各角がほぼ直角を成すことから、一辺9.85m前後の方形を呈するものと思われる。北辺の軸方位は、N-87°-Eを示す。





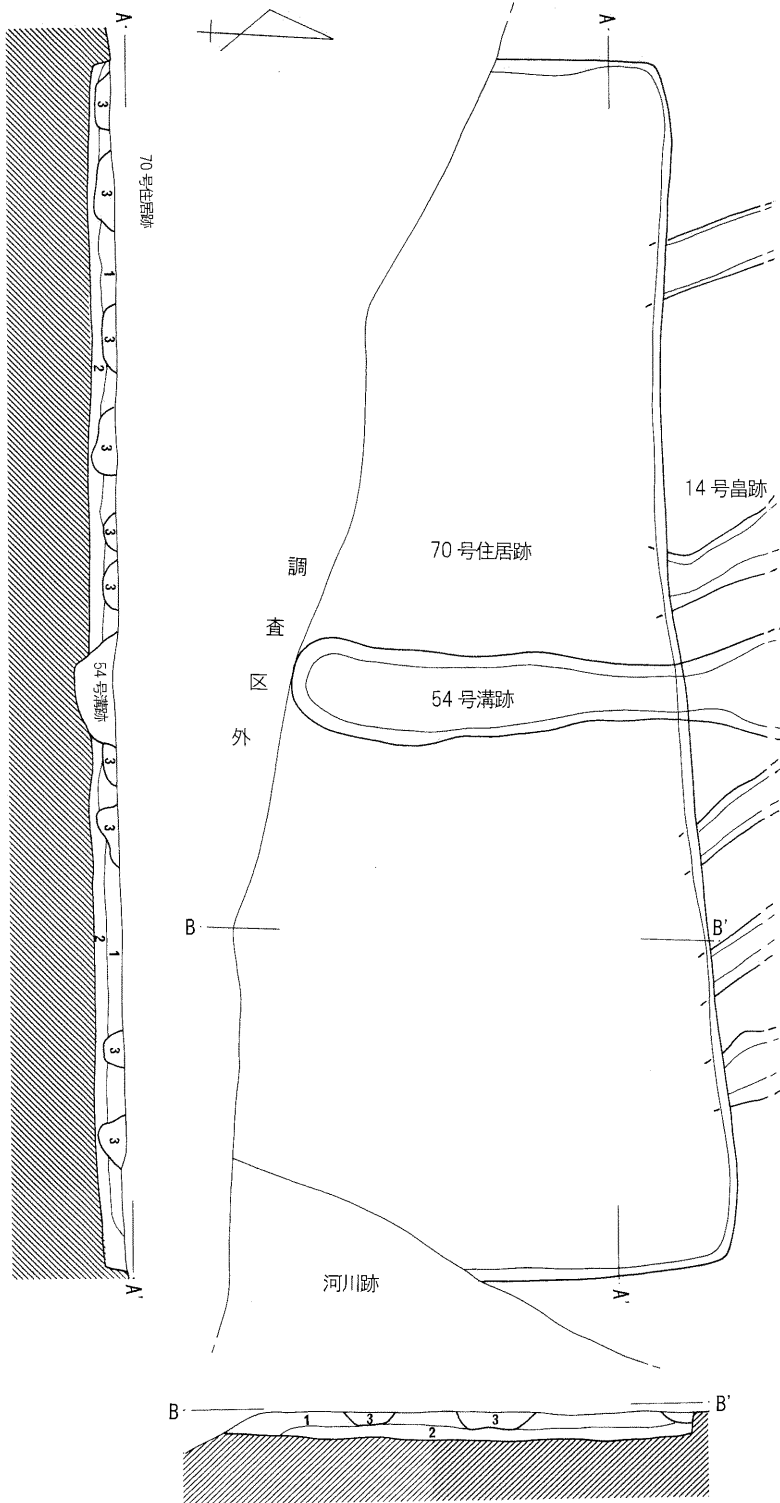
第96图 B区69号住居跡出土遺物(1)



第97図 B区69号住居跡出土遺物(2)

第45表 B区69号住居跡出土遺物観察表 (第96・97図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・杯	(12.4)	—	—	①④②③⑥	②	橙	1/4	口縁部横ナデ。体部外面ケズリ、内面回転ナデ。
2	土師器・杯	(12.0)	—	—	②③④	②	浅黄橙	1/3	口縁部横ナデ。体部内外面共ナデ。
3	土師器・杯	12.0	5.4	—	②③④①	②	橙	完形	口縁部横ナデ。体部外面ケズリ後ナデ、内面ナデ。
4	土師器・杯	12.3	5.5	3.9	③②④①	②	橙	5/6	口縁部横ナデ。ン体部外面ケズリ、内面ナデ、一部ミガキ様。
5	土師器・杯	13.5	—	—	③②①④	②	橙	5/6	口縁部横ナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。
6	土師器・杯	13.2	5.1	—	②③①④	②	橙	ほぼ完形	口縁部横ナデ。体部外面ケズリ、内面回転ナデ。
7	土師器・杯	12.4	5.3	—	②③④①	②	橙	ほぼ完形	口縁部横ナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。
8	土師器・杯	12.6	4.2	—	②①③④	②	橙	5/6	口縁部横ナデ。体部外面ケズリ、内面回転ナデ。
9	土師器・杯	(15.3)	—	—	②③①④	②	橙	1/3	外面底面ケズリの他ナデ。内面ミガキ様ナデ。
10	土師器・杯	(12.1)	—	—	④②③	②	橙	2/3	表面剥離した部分が多い。
11	土師器・杯	(11.3)	—	—	②④③①	②	橙	2/3	外面口縁部横のミガキ様ナデ、体部横のケズリ。内面上位斜のミガキ(暗文様)、底面ミガキ様ナデ。
12	土師器・杯	11.9	6.0	3.5	①⑥④②	②	橙	3/4	外面全面ナデ、底部を作り出している。内面口縁部横のナデ、体部ナデ。
13	土師器・杯	13.9	6.5	5.0	④②①③⑥	②	橙	4/5	外面上位ナデ、下位ケズリにより底面作り出し。内面口縁部横、ナデ、体部ナデの後放射状のミガキ。底面押圧。
14	土師器・高杯	11.8	—	—	⑥④①②	②	浅黄橙	3/5	口縁部横ナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。
15	土師器・高杯	(17.5)	—	—	⑥①②④	②	橙	受台部1/4	内外面共ナデ、朱泥使用。
16	土師器・	(16.0)	—	—	①②④	②	浅黄橙	1/5	体部上位～口縁横ナデ。体部中位ナデ。
17	土師器・甕	17.1	30.2	5.6	②①③⑥④	②	にぶい橙	完形	口縁部横ナデ。胴部外面ナデ、下位の一部スリップ、底面ケズリによる上げ底、煤付着、赤色化、二次加熱。内面ナデ、口縁との接合部のみ木口状工具による。
18	土師器・甕	18.4	31.6	6.8	⑥①④③②	②	浅黄橙	一部欠	口縁部横ナデ。胴部外面ケズリ、頸部～肩部ナデが加わる。肩以下煤付着。二次加熱。内面ナデ。下位吸炭。
19	土師器・甕	(18.5)	—	—	⑥①④②③	②	橙	1/4	口縁部横ナデ。胴部外面縦のナデ、下位ケズリ様ナデ、一部スリップ、煤付着。内面上位ヘラナデ、輪積み痕残す、中位以下ナデ、一部炭化物付着。
20	土師器・甕	(16.0)	—	—	⑥④①②	②	にぶい橙	上位1/3	口縁部横ナデ。胴部外面ケズリ、内面横のナデ、吸炭。二次加熱。
21	土師器・甕	—	—	—	⑥①③④②	②	橙	胴上位1/3	外面ケズリ、肩部ナデが加わる。内面ナデ。
22	土師器・甕	—	—	7.4	⑥①②④③	②	にぶい橙	底部のみ	外面ケズリ、底部周辺ナデツケ、上げ底風、赤色化。内面ヘラナデ、吸炭。
23	土師器・甕	28.2	23.8	(8.4)	②①③⑥	②	にぶい橙	3/4	口縁部横ナデ。胴部外面ナデ、ナデツケ、水拭き、木口状工具によるナデ混在。孔はケズリによって調整、吸炭。
24	土師器・甕	(21.0)	—	—	⑥③①②	②	橙	上位1/3	外面口縁横のナデ、胴部ケズリの後ナデ。内面横の刷毛目。
25	土師器・甕	(16.0)	16.3	5.1	⑥②④①③	②	浅黄橙	一部欠	口縁部横ナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ、下位一部ケズリ、孔付近ナデツケ。
26	磔	長さ 5.0 幅 3.4 厚さ 1.6 重さ 40g						—	
27	磔	長さ 5.6 幅 2.9 厚さ 1.8 重さ 50g						—	
28	磔	長さ 8.7 幅 6.6 厚さ 2.5 重さ 200g						—	
29	磔	長さ 19.0 幅 10.1 厚さ 8.4 重さ 2,315g						—	
30	磔	長さ 17.8 幅 11.6 厚さ 11.3 重さ 2,750g						—	



70号住居跡土層

- 1 黄褐色(2.5Y 5/3)シルト。マンガン粒を多量、炭化物を少量含む。
  - 2 黄色(5Y 7/8)シルト。マンガン粒を多量、酸化鉄を少量含む。
  - 3 暗灰黄色(2.5Y 4/2)粘土。酸化鉄、マンガン粒を少量含む。
- 14号畠跡。

0 L=27.500m 2m 1:60

第98図 B区70号住居跡

壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。検出面からの高さは、最高で25cmを計る。

床面は、かなり凹凸がみられるが、踏み固められた部分もあって、安定している。ピットは、検出されていない。

炉等は、検出されていない。

覆土は、上層が、多量のマンガン粒及び少量の炭化物を含む黄褐色シルト層(第1層)、下層が、多量のマンガン粒及び少量の酸化鉄を含む黄色シルト層(第2層)である。

遺物は、土師器高杯(1~4)、甕類(5~8)、壺(9)、小型短頸壺(10)である。なお、短頸壺の胴部には穿孔があるが、外面から塞がれている。

#### 71号住居跡 (第100図)

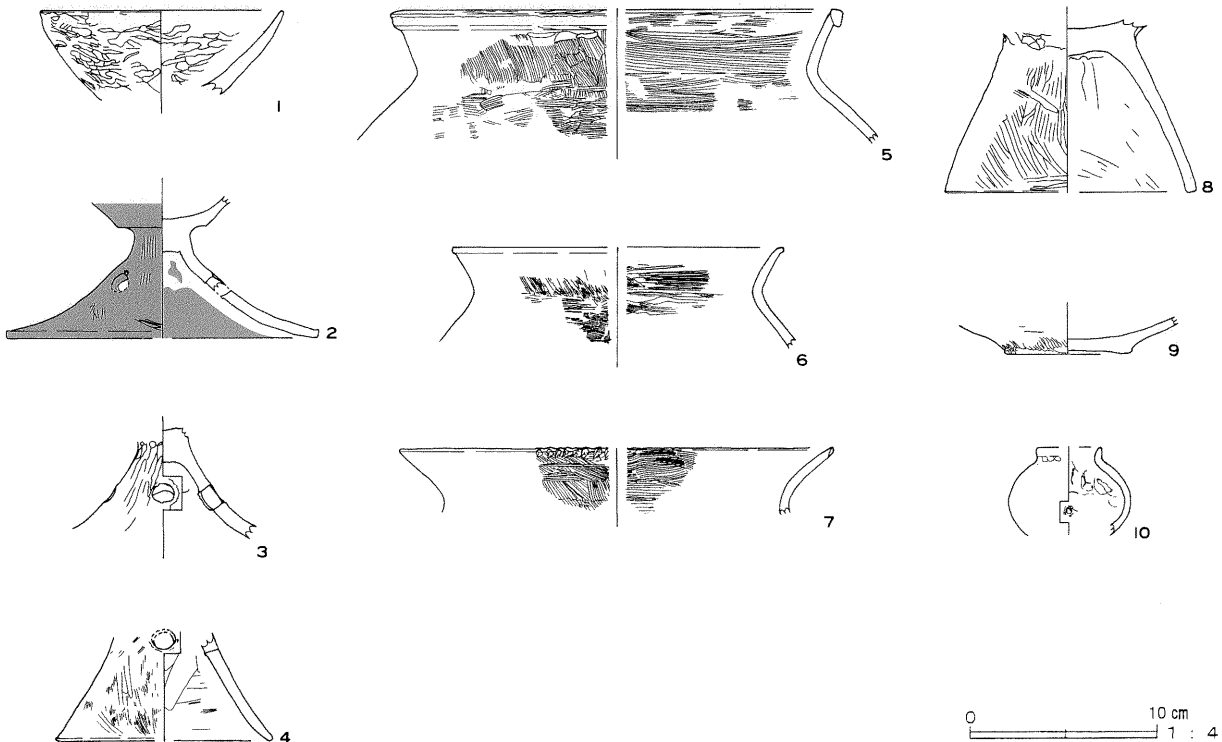
F-11からG-11グリッドに亘って位置している。第一確認面からの検出である。

67号住居跡のカマド煙出し部分を削平している。下面には、72号住居跡及び14号畠跡が位置している。

北西辺3.75m、北東辺5.33m、南東辺3.58m、南西辺5.50mを計る。隅門長方形を呈する。主軸方位は、N-115°-Eを示す。

壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。検出面からの高さは、最高で53cmを計る。

床面は、かなり凹凸がみられ、全体に播鉢状を呈して安定していない。ピットは、検出されていない。



第99図 B区70号住居跡出土遺物

第46表 B区70号住居跡出土遺物観察表 (第99図)

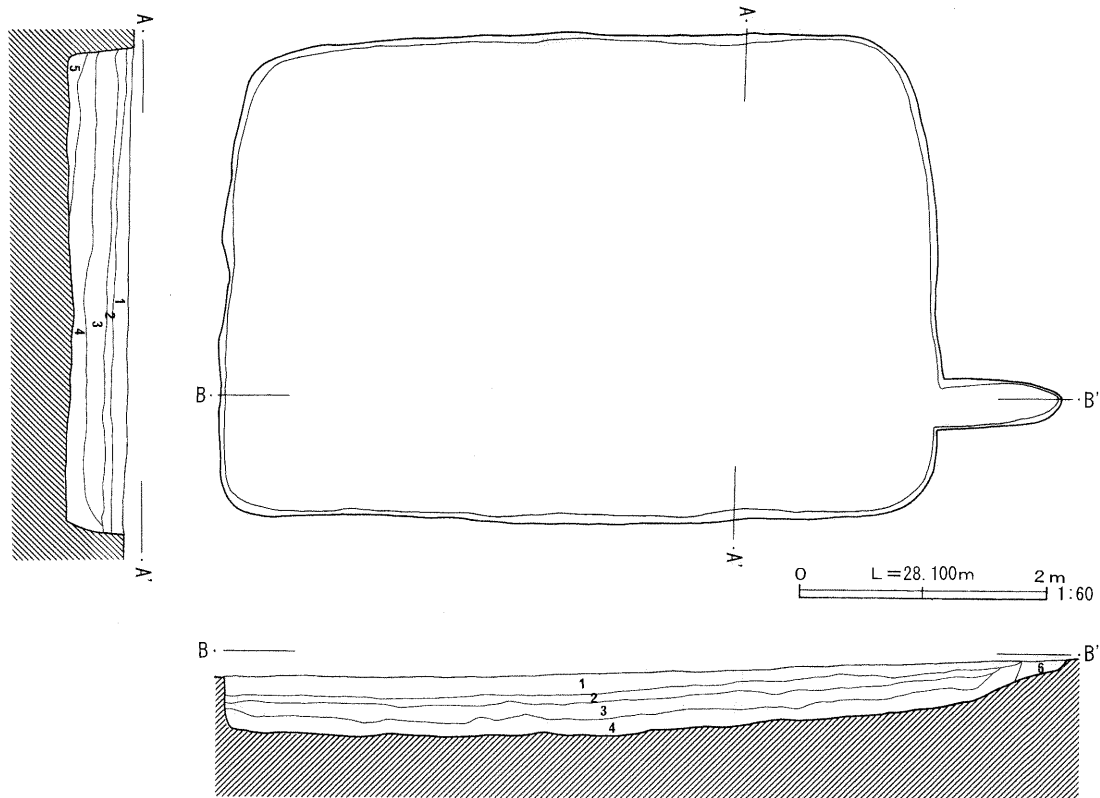
No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・高杯	13.1	—	—	②①③④	①	浅黄橙	杯部のみ	内面は丁寧なナデの後、一部横のミガキ。内面は横を主体としたミガキ。口唇ミガキにより矩形に造り出す。
2	土師器・高杯	—	—	(16.8)	③②①⑥	②	にぶい橙	杯部1/8欠	脚天井部位外全面朱塗。杯部全面ナデ。脚外面縦のミガキ、下位斜のナデ。内面ナデ。端部矩形仕上げ。
3	土師器・高杯	—	—	—	③②①⑥	②	にぶい黄橙	脚部1/5	外面上位縦のミガキ、下位ナデが加わる。内面縦横のナデツケ。
4	土師器・高杯	—	—	(11.4)	⑥①③②	①	橙	脚部1/2	外面縦の刷毛目の後ミガキ様ナデ。内面上位は指頭による縦、下位は横のナデ。吸炭。二次加熱。
5	土師器・台付甕	(23.4)	—	—	①③⑥②	②	浅黄橙	口縁部1/4	外面口唇部貼り付け前に縦の刷毛目。内面口縁部から括れ部横の刷毛目。吸炭。二次加熱。
6	土師器・台付甕	(17.8)	—	—	①②③	②	にぶい褐	口縁部1/6	外面口縁部斜の刷毛目、口唇部横のナデ。内面横のナデの後括れにかけて横の細刷毛目。胴肩部外面横の細刷毛目、内面横のナデ。全面吸炭。外面煤付着。
7	土師器・台付甕	(23.4)	—	—	①②⑥③	②	橙	口縁部	口唇部横刷毛目の後斜の刻み。外面口縁下位～括れ、内面口唇部～括れ、横を主体とした刷毛目。外面一部煤付着。
8	土師器・台付甕	—	—	(13.5)	②⑥①③	②	にぶい黄橙	脚部1/3	内面底部ナデツケ。外面浅い刷毛目(縦)、吸炭、二次加熱。内面天井部ナデツケ、上位縦のナデツケ、下位ナデ。
9	土師器・甕	—	—	6.4	⑥②①	②	橙	底部2/3	外面縦の刷毛目の後ナデ。内面ナデ。外面一部吸炭。
10	土師器・小型無頸壺	(3.3)	—	—	③⑥①②	②	にぶい黄橙	1/3	外面丁寧なナデ。内面ナデ。外面一部朱塗の痕跡。

カマドは、北東壁南隅寄りに検出されている。しかし、検出されたのは竪穴外に掘り込まれた煙道部のみである。煙道部は、竪穴内から10cmの段をもち、全長1.00mに及ぶ。前面の幅は32cmであるが、徐々に幅を狭め、奥では丸みをもって閉じている。断面は、脹らみをもって傾斜し、奥部10cmの間は水平面を成す。壁面がわずかに吸炭している。

覆土は、上位から、多量のマンガン粒及び少量の炭化物を含むにぶい黄褐色粘土層（第1層）、多量のマンガン粒・炭化物を含む灰黄褐色粘土層（第2層）、多量のマンガン粒及び少量の炭化物を含む明黄褐色粘土層（第3層）、多量のマンガン粒及び少量の炭化物を含む

黄褐色粘土層（第4層）が堆積しており、壁際の一部で第4層下に、少酸化鉄・炭化物を含む暗灰黄色粘土層（第5層）のみられる部分もある。

遺物は、土師器甕（1）の口縁部がわずかに出土したのみである。



- 1 にぶい黄褐色(10YR 5/4)粘土。マンガング粒を多量、炭化物を少量含む。
- 2 灰黄褐色(10YR 4/2)粘土。マンガング粒、炭化物を多量含む。
- 3 明黄褐色(2.5Y 6/6)粘土。マンガング粒を多量、炭化物を少量含む。
- 4 黄褐色(2.5Y 5/4)粘土。マンガング粒を多量、炭化物を少量含む。
- 5 暗灰黄色(2.5Y 5/2)粘土。酸化鉄、炭化物を少量含む。
- 6 暗灰黄色(2.5Y 5/2)粘土。酸化鉄、炭化物、マンガング粒を少量含む。



第100図 B区71号住居跡及び出土遺物

第47表 B区71号住居跡出土遺物観察表（第100図）

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・甕	17.5	—	—	②①③⑥	②	にぶい橙	口縁部1/8	横ナテ。

72号住居跡 F-11・12からG-11・12グリッドに亘って位置している。第二確認面からの検出で（第101図）ある。

73号住居跡を切断しているが、13号・14号両畠跡に切断されている。上面には、71号住居跡及び、55号溝跡が位置している。

北辺6.65m、東辺6.88m、南辺7.30m、西辺6.90mを計る。北辺が短く南辺がやや長い、ため、不整形ではあるが、ほぼ正方形を呈すると思われる。主軸方位は、N-6°-W

を示す。

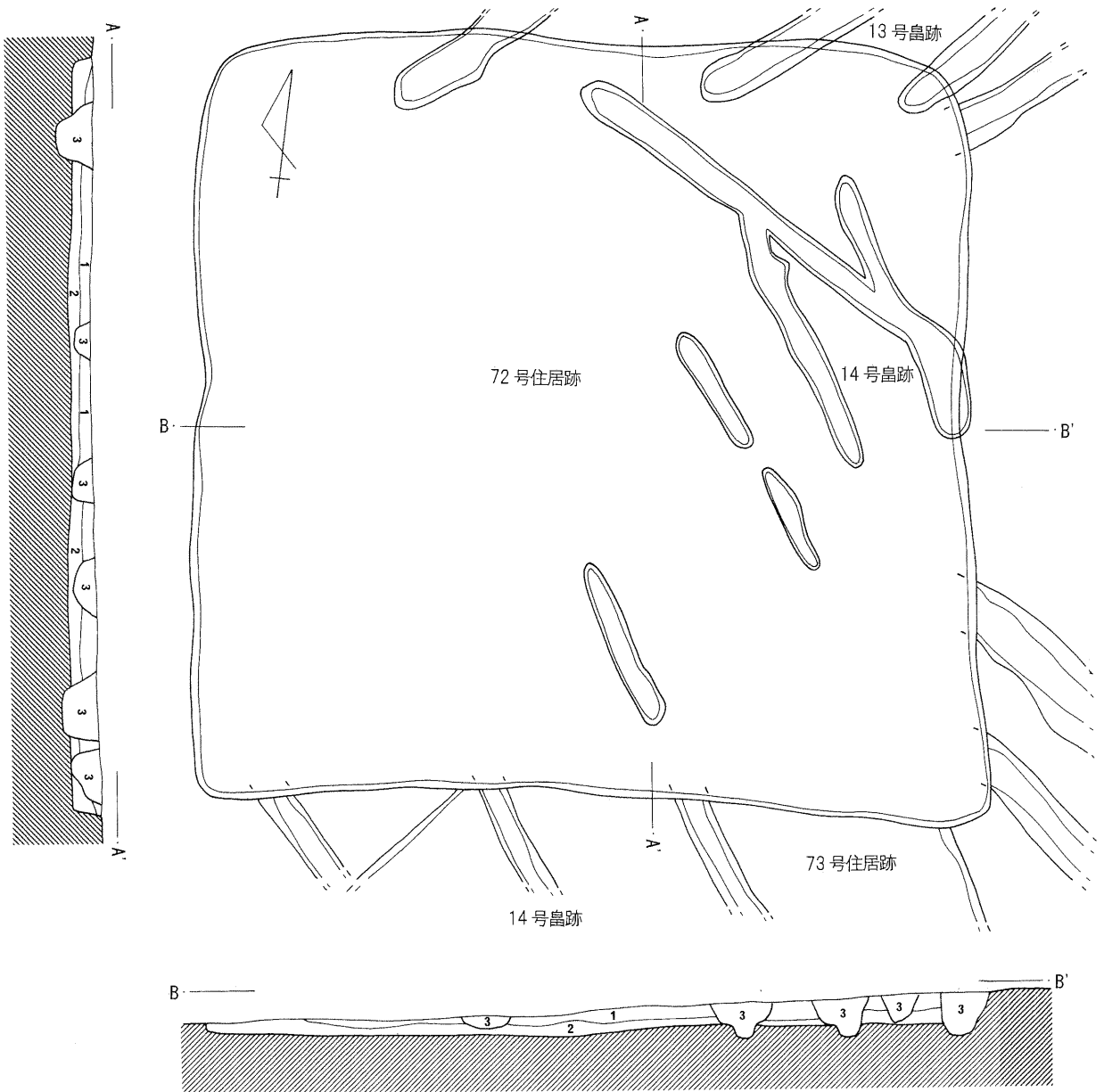
壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。検出面からの高さは、最高で30cmを計る。

床面は、やや凹凸がみられるが、踏み固められた面もあって、安定している。

ピット・炉等は、検出されていない。

覆土は、上層が、少量の酸化鉄・マンガン粒・炭化物を含む灰黄褐色粘土層（第1層）、下層が、少量のマンガン粒・酸化鉄を含む褐灰色粘土層（第2層）が堆積している。

遺物は、図示可能なものは、出土していない。

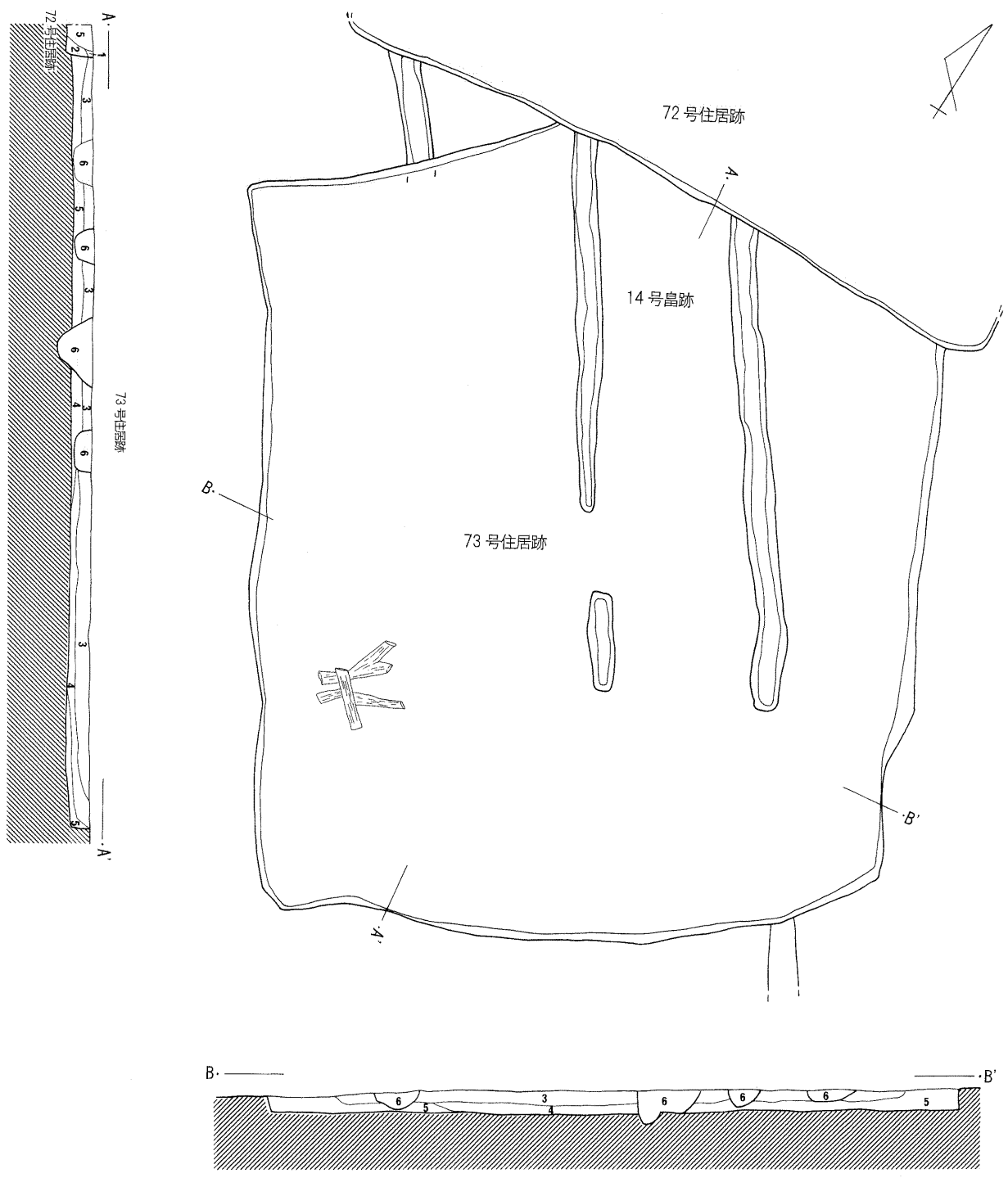


72号住居跡土層

- 1 灰黄褐色(10YR 5/2)粘土。酸化鉄、マンガン粒、炭化物を少量含む。
- 2 褐灰色(10YR 6/1)粘土。酸化鉄、マンガン粒を少量含む。
- 3 畠跡。

0 L = 27.500m 2m 1:60

第101図 B区72号住居跡



- 1 灰黄褐色(10YR 5/2)粘土。酸化鉄、マンガン粒、炭化物を多量含む。
- 2 褐灰色(10YR 6/1)粘土。酸化鉄、マンガン粒を多量含む。
- 3 黄灰色(2.5Y 6/1)粘土。酸化鉄を多量含む。
- 4 灰色(5Y 5/1)粘土。炭化物を多量、酸化鉄、マンガン粒を少量含む。
- 5 浅黄色(5Y 7/4)シルト。酸化鉄、マンガン粒を少量含む。
- 6 畠跡。

0 L=27.500m 2m 1:60

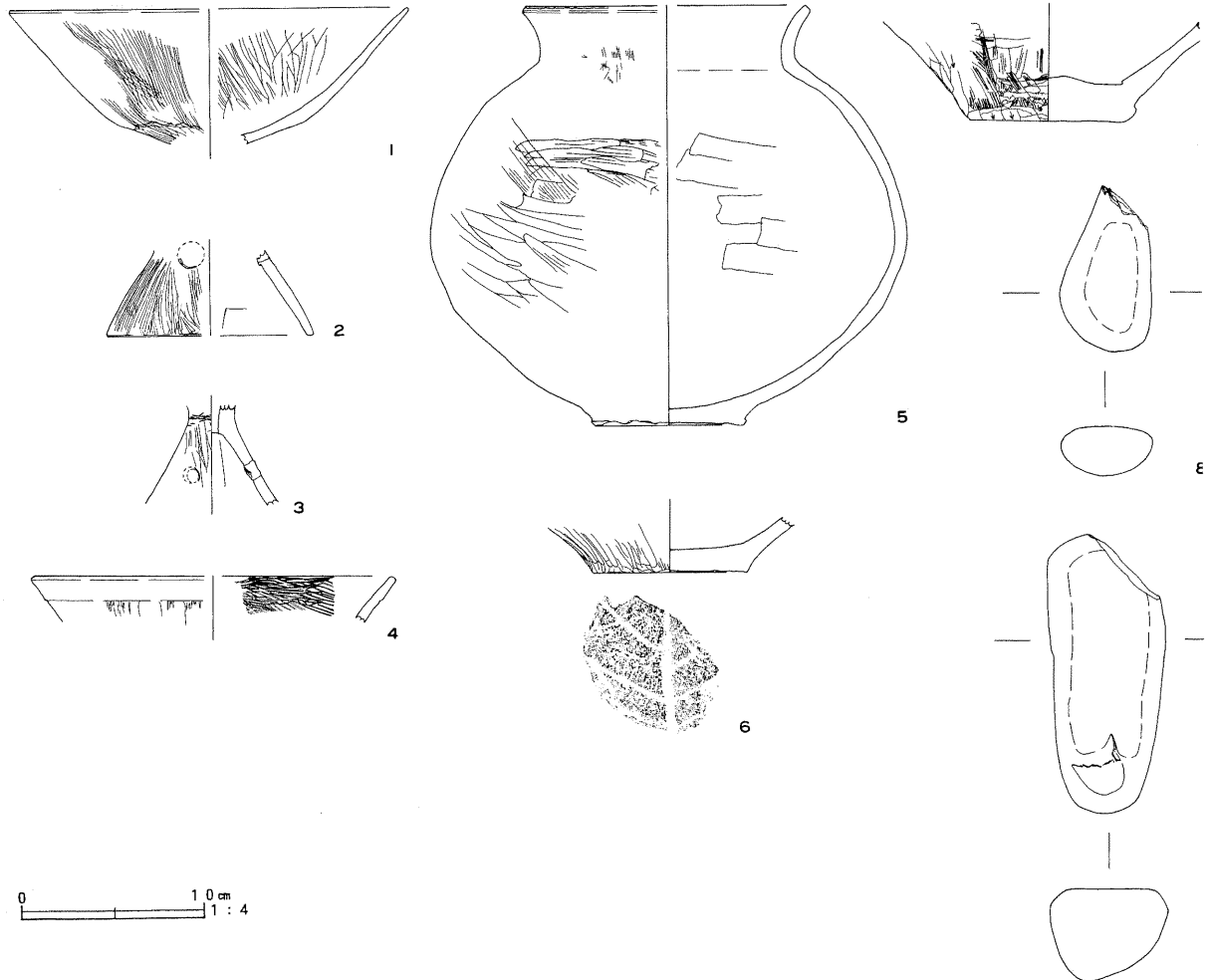
第102図 B区73号住居跡

**73号住居跡** G-11からG-12グリッドに亘って位置している。第二確認面からの検出である。  
 (第102図) 72号住居跡及び14号畠跡に切断されている。上面には、68号住居跡が位置している。

(第103図) 北西辺3.25+ $\alpha$ m、北東辺5.42+ $\alpha$ m、南東辺6.20m、南西辺7.25mを計る。各辺が蛇行するため、不整形ではあるが、南東辺を短辺、南西辺を長辺とする長方形を呈すると思われる。主軸方位は、N-32°-Wを示す。

壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。検出面からの高さは、最高で20cmを計る。

床面は、ほとんど凹凸がみられず、安定している。炭化木材を中心に炭化材が出土している。ピット・炉等は、検出されていない。



第103図 B区73号住居跡出土遺物

第48表 B区73号住居跡出土遺物観察表 (第103図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・高杯	(21.7)	—	—	②③①④	②	浅黄橙	杯部1/3	内外面縦のミガキ。表面一部剥離。
2	土師器・器台	—	—	(11.2)	④②③①	②	橙	脚部1/5	内面横のナデ、後穿孔。
3	土師器・器台	—	—	—	①②④⑥	②	にぶい橙	脚部1/3	外面縦のミガキ、内面縦のナデツケ。全面吸炭。二次加熱。
4	土師器・甕	(19.8)	—	—	①④③②⑥	②	にぶい橙	口縁部1/8	外面刷毛目の後、指頭による縦のナデ、後口唇部調整。内面横もしくは斜の刷毛目。吸炭。
5	土師器・甕	(15.2)	23.0	7.9	④②①⑥	②	明褐灰	1/3	表面剥落した部分多い。外面括れ部細刷毛目、胴部中央上位横の刷毛目、中位横のケズリ、下位斜の刷毛目。肩部および底部ナデ。内面胴部中位以上、木口状工具によるナデ、括れ部以上横のナデ、底部ナデ、肩部以下炭化物付着。二次加熱。
6	土師器・甕	—	—	(8.4)	①④⑥	②	浅黄橙	底部1/2	外面縦のミガキ。内面ナデ。内外面共吸炭。木の葉底。
7	土師器・甕	—	—	8.4	⑥①④③	②	浅黄橙	底部のみ	外面縦の刷毛目後底面にかけての縦のケズリ。内面ナデツケ。
8	磨石	長さ(9.1) 幅4.9 厚さ2.8 重さ186g			—				
9	砥石	長さ(15.3) 幅6.3 厚さ5.0 重さ735g			—				



覆土は、上層が多量の酸化鉄を含む黄灰色粘土層（第3層）、下層が多量の炭化物及び少量の酸化鉄・マンガン粒を含む灰色粘土層（第4層）であり、壁際を中心として、最下層に少量の酸化鉄・マンガン粒を含む浅黄色シルト層（第5層）が堆積している。

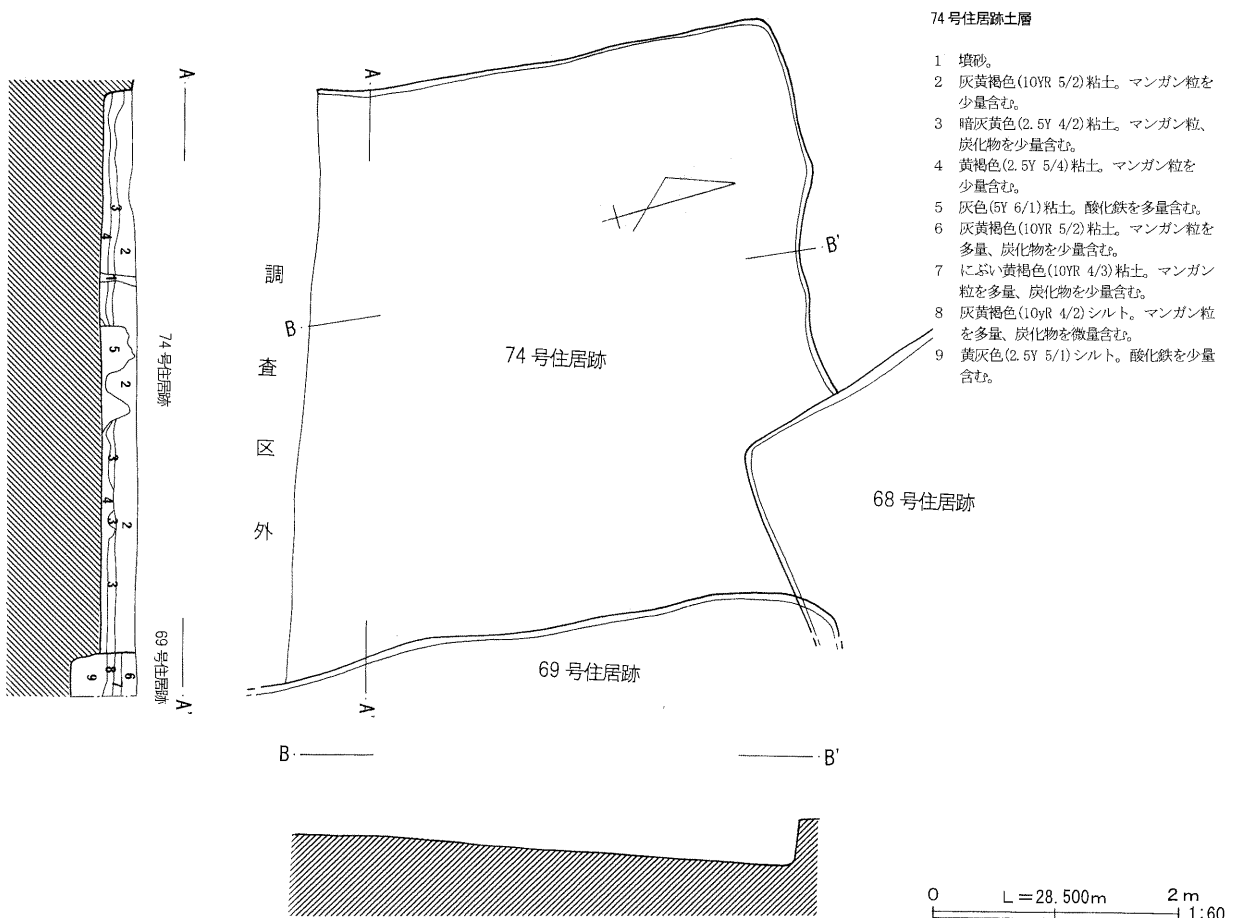
遺物は、土師器高杯（1・2）、器台（3）、甕類（4～7）、砥石（8・9）が出土している。

**74号住居跡** G-11からH-11グリッドに亘って位置し、南側は調査区外に及んでいる。第一確認面（第104図）からの検出である。68号・69号住居跡に切断されている。下面に、14号畝跡が位置している。

このため、規模・形態共に不明である。現状では西辺 $3.80 + \alpha$  m、北辺 $3.00 + \alpha$  mを計る。角は直角を成しているが、北辺が蛇行しているため、方形を基本とした不整形を呈していると思われる。西辺軸方位は、 $N - 0^\circ - W$ を示す。

壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。検出面からの高さは、最浅部分で24cm、最深部分で36cmを計る。

床面は、ほとんど凹凸がみられないが、全体に北へ傾斜している。踏み固められた面もなく、不安定である。



第104図 B区74号住居跡

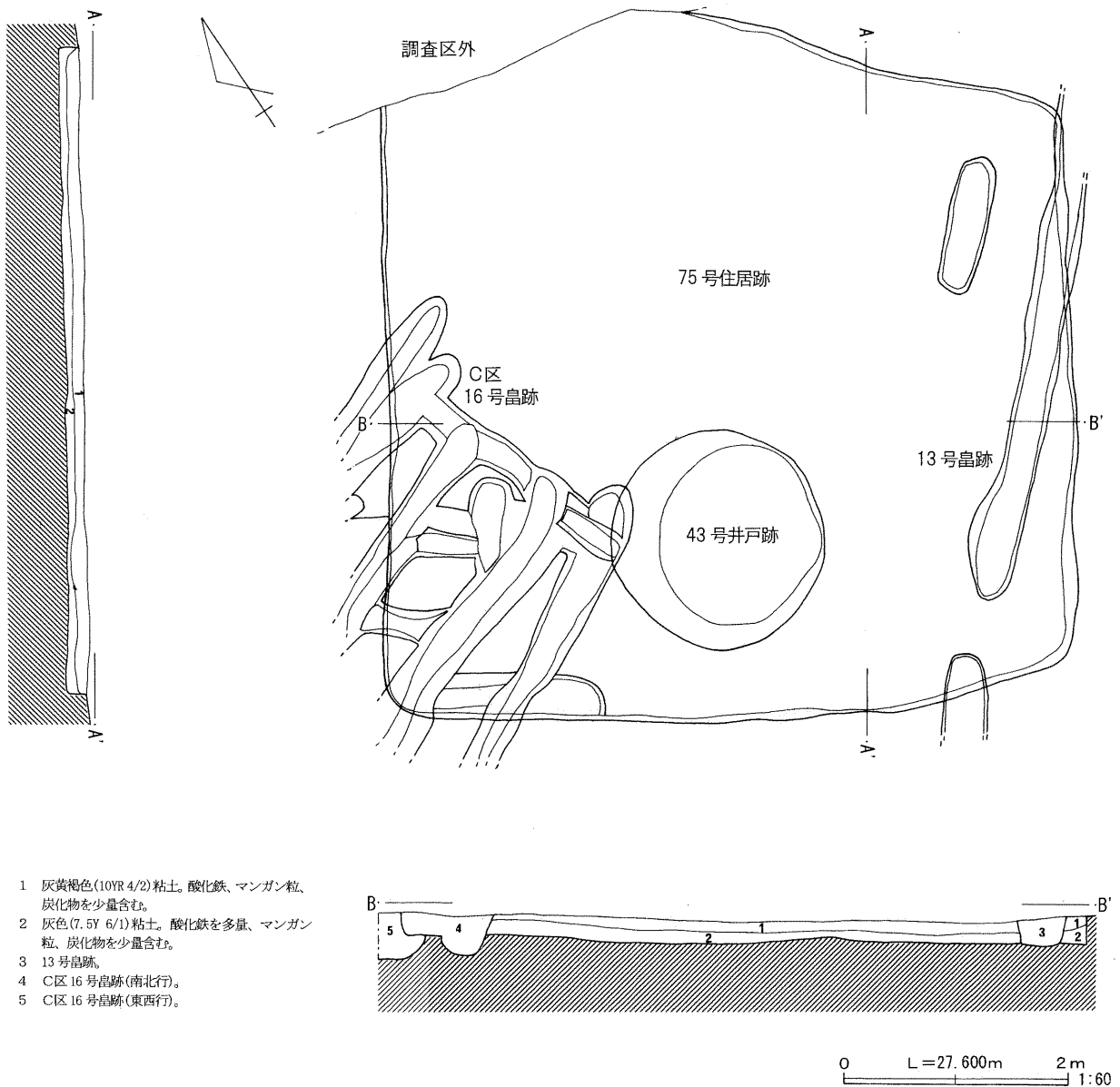
ピット、カマド等は検出されていない。

覆土は、上層から、少量のマンガン粒を含む灰黄褐色粘土層（第2層）、少量のマンガン粒・炭化物を含む暗灰黄色粘土層（第3層）、少量のマンガン粒を含む黄褐色粘土層（第4層）が堆積している。また、竪穴中央床面上には、多量の酸化鉄を含む灰色粘土が80×90cmの範囲に堆積していた。

遺物は、図示可能なものは、出土していない。

**75号住居跡** E-11・12からF-11グリッドに亘って位置し、北側は調査区外に及んでいる。第二(第105図) 確認面からの検出である。

80号住居跡を削平しているが、76号住居跡に削平され、13号畠跡・C区16号畠跡及び43号井戸跡によって切断されている。



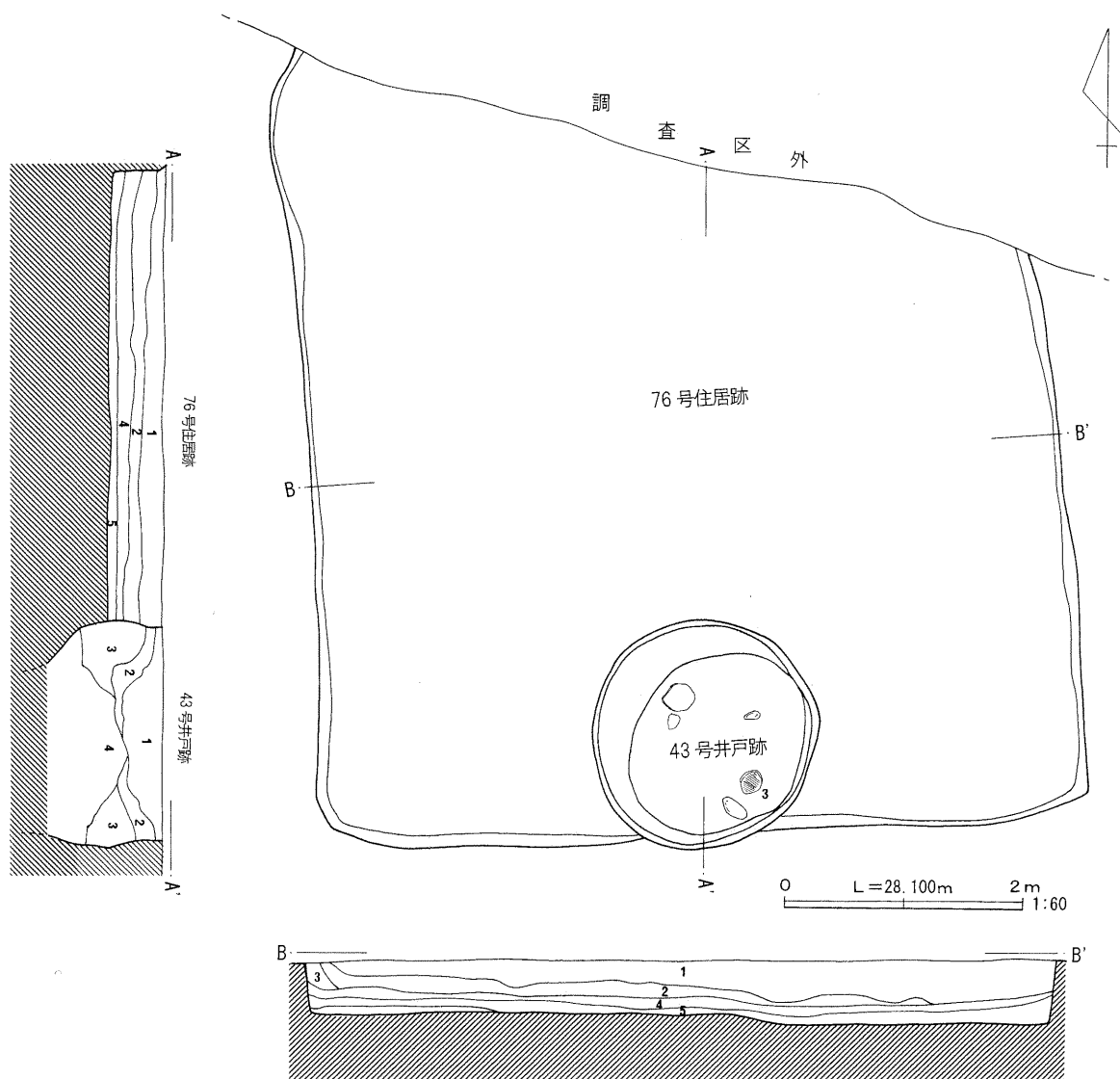
第105図 B区75号住居跡

北西辺 $5.95 + \alpha$  m、北東辺 $3.50 + \alpha$  m、南東辺 $4.95$  m、南西辺 $6.15$  mを計る。西角は直角を成しているが、他は成して折らず、北西辺を底辺とした台形を呈していると思われる。北西辺軸方位は、 $N - 34^\circ - E$ を示す。

壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。検出面からの高さは、最高で $25$  cmを計る。

床面は、凹凸がみられ、踏み固められた面もなく、不安定である。

ピット、カマド等は検出されていない。

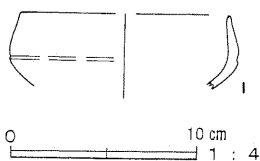


76号住居跡土層

- 1 明黄褐色(2.5Y 6/6)シルト。マンガン粒を多量、炭化物を少量含む。
- 2 灰色(5Y 6/1)粘土。酸化鉄を少量含む。
- 3 明黄褐色(2.5Y 6/6)シルト。マンガン粒を多量含む。
- 4 灰色(5Y 5/1)粘土。炭化物を多量、マンガン粒を少量含む。
- 5 灰オリーブ色(5Y 6/2)粘土。酸化鉄、炭化物を少量含む。

43号井戸跡土層

- 1 黄灰色(2.5Y 6/1)粘土。酸化鉄、マンガン粒、黄色粘土を多量含む。
- 2 黄褐色(2.5Y 5/6)粘土。マンガン粒を多量、酸化鉄を少量含む。
- 3 明黄褐色(2.5Y 6/6)粘土。マンガン粒を少量含む。
- 4 灰色(10Y 5/1)粘土。酸化鉄を多量含む。



第106図 B区76号住居跡、43号井戸跡及び76号住居跡出土遺物

第49表 B区76号住居跡出土遺物観察表（第106図）

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・杯	(11.3)	—	—	③①②	②	橙	1/8	外面磨滅。内面回転ナデ。

覆土は、上層が、少量の酸化鉄・マンガン粒・炭化物を含む灰黄褐色粘土層（第1層）、下層が、多量の酸化鉄及び少量のマンガン粒・炭化物を含む灰色粘土層（第2層）が堆積している。

遺物は、図示可能なものは、出土していない。

**76号住居跡** E-11からE-12グリッドに亘って位置し、北側は調査区外に及んでいる。第一確認面（第106図）からの検出である。

75号住居跡を削平しているが、43号井戸跡に切断されている。下面には、80号住居跡、13号畠跡・C区16号畠跡が位置している。

規模・形態共に不明であるが、南辺が6.60m、西辺が6.60m +  $\alpha$ を計るが、西辺の北端が北辺へ連続する様相を示していることから、やや不整形ではあるが、ほぼ正方形を呈すると思われる。長軸方位は、N-5°-Wを示す。

壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。検出面からの高さは、最高で55cmを計る。

床面は、凹凸がみられ、踏み固められた面もなく、特に、東側が一段下がるなど、不安定である。

ピット、カマド等は検出されていない。

覆土は、上位から、多量のマンガン粒及び少量の炭化物を含む明黄褐色シルト層（第1層）、少量の酸化鉄を含む灰色粘土層（第2層）、多量の炭化物及び少量のマンガン粒を含む灰色粘土層（第4層）、少量の酸化鉄・炭化物を含む灰オリーブ色粘土層（第5層）、が堆積している。また壁際の一部には、第2層と第4層の間に、多量のマンガン粒を含む明黄褐色シルト層（第3層）のみられる部分もある。

遺物は、土師器杯（1）が、1点出土したのみである。

**77号住居跡** G-11からG-12グリッドに亘って位置し、南側は調査区外に及んでいる。第二確認面（第107図）からの検出である。

上面を78号住居跡に削平されている。

北西辺5.15m、北東辺3.20m、南東辺1.15 +  $\alpha$  m、南西辺1.75 +  $\alpha$  mを計る。若干不整形であるが、北西辺を長辺、北東辺を短辺とした長方形を呈していると思われる。北西辺軸方位は、N-41°-Eを示す。

壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。検出面からの高さは、最高で10cmを計る。

床面は、凹凸がみられ、踏み固められた面もなく、不安定である。

ピット等は、検出されていない。

炉は、北隅寄りに設けられている。円形を呈し、径36cmを計る。厚さ3cmの焼土がみら

れる。

覆土は、上層が、多量の炭化物及び少量の酸化鉄を含む灰色粘土層（第1層）、下層が、少量の酸化鉄を含む青灰色粘土層（第2層）が堆積している。

遺物は、図示可能なものは、出土していない。

### 78号住居跡（第108図）（第109図）

G-12・13からH-12グリッドに亘って位置し、南側は調査区外に及んでいる。また西隅は、C区に及んでいる。第二確認面からの検出である。

77号住居跡を削平しているが、C区67号土坑に切断され、C区55号住居跡に削平されている。

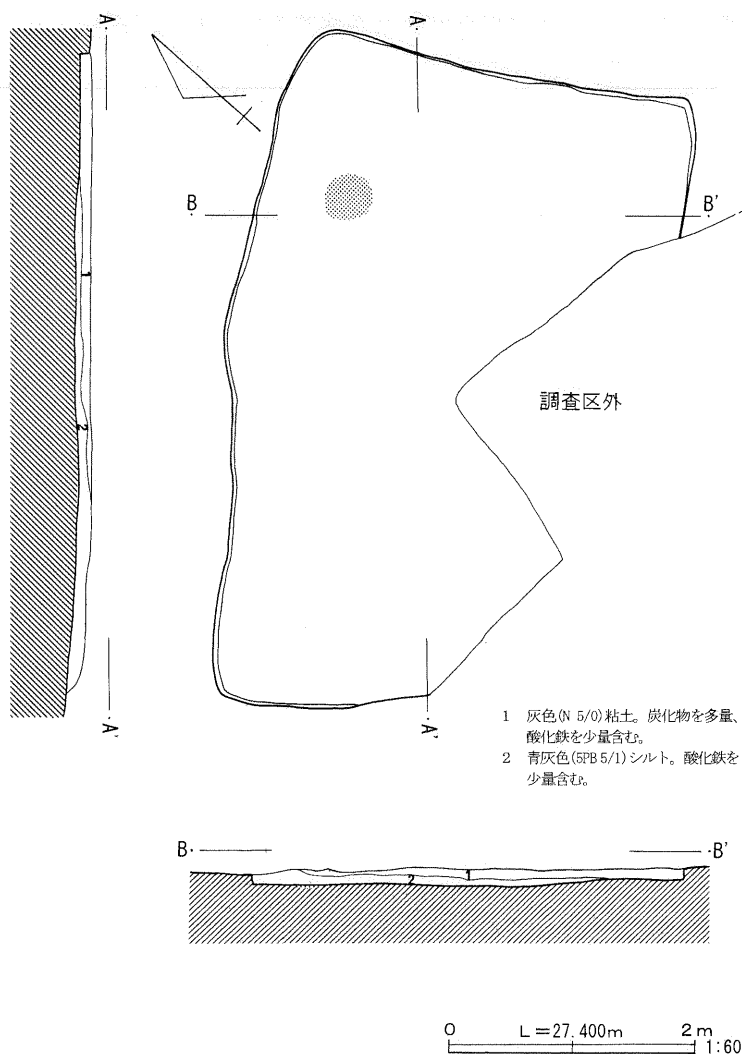
北西辺7.90m、北東辺6.00m、南東辺0.90+

$\alpha$  m、南西辺 $3.50 + \alpha$  mを計る。北西辺を長辺、北東辺を短辺とした長方形を呈していると思われる。主軸方位は、N-140°-Wを示す。

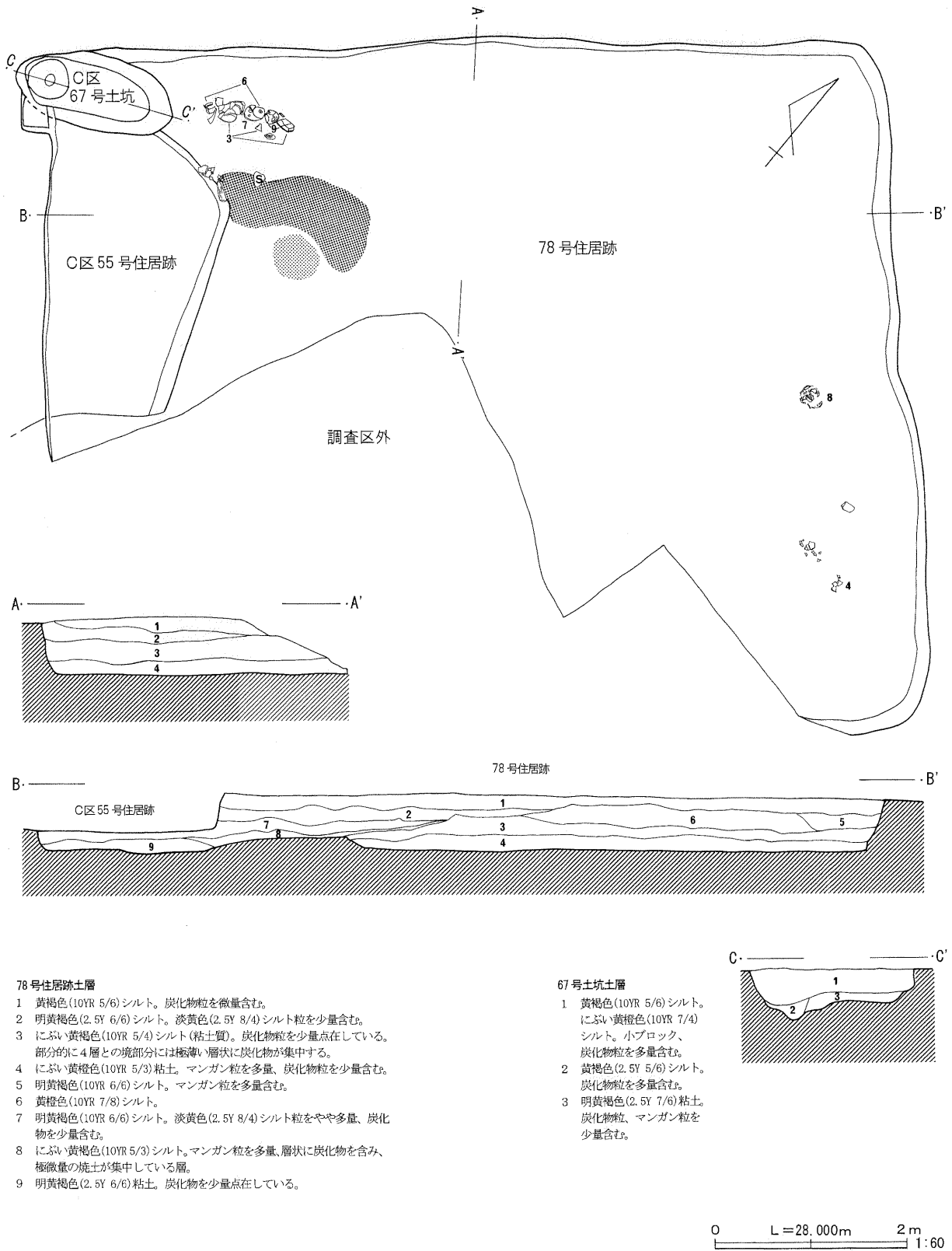
壁は、急な傾斜をもつが、部分的に段を成す。検出面からの高さは、最高で53cmを計る。

床面は、大部分が水平面を成し、安定しているが、西隅寄りの径1.30mの円形範囲が10cm程盛り上がり、盛り上がりの南隅に炉が設けられており、炉以外の高まり部分には、炭化物が堆積している。炉は、ほぼ円形を呈し、径40cmを計る。厚さ4cmの焼土がみられる。ピット等は、検出されていない。

覆土は、東西で異なった様相を呈している。西側では、上位から、微量の炭化物を含む黄褐色シルト層（第1層）、少量の淡黄色シルト粒を含む明黄褐色シルト層（第2層）、多量の淡黄色シルト粒及び少量の炭化物を含む明黄褐色シルト層（第7層）、層状の炭化物、多量のマンガン粒及び微量の焼土を含むにぶい黄褐色シルト層（第8層）、少量の炭化物を含む明黄褐色粘土層（第9層）が堆積しているのに対し、東側では、第1層の下位に、多量



第107図 B区77号住居跡



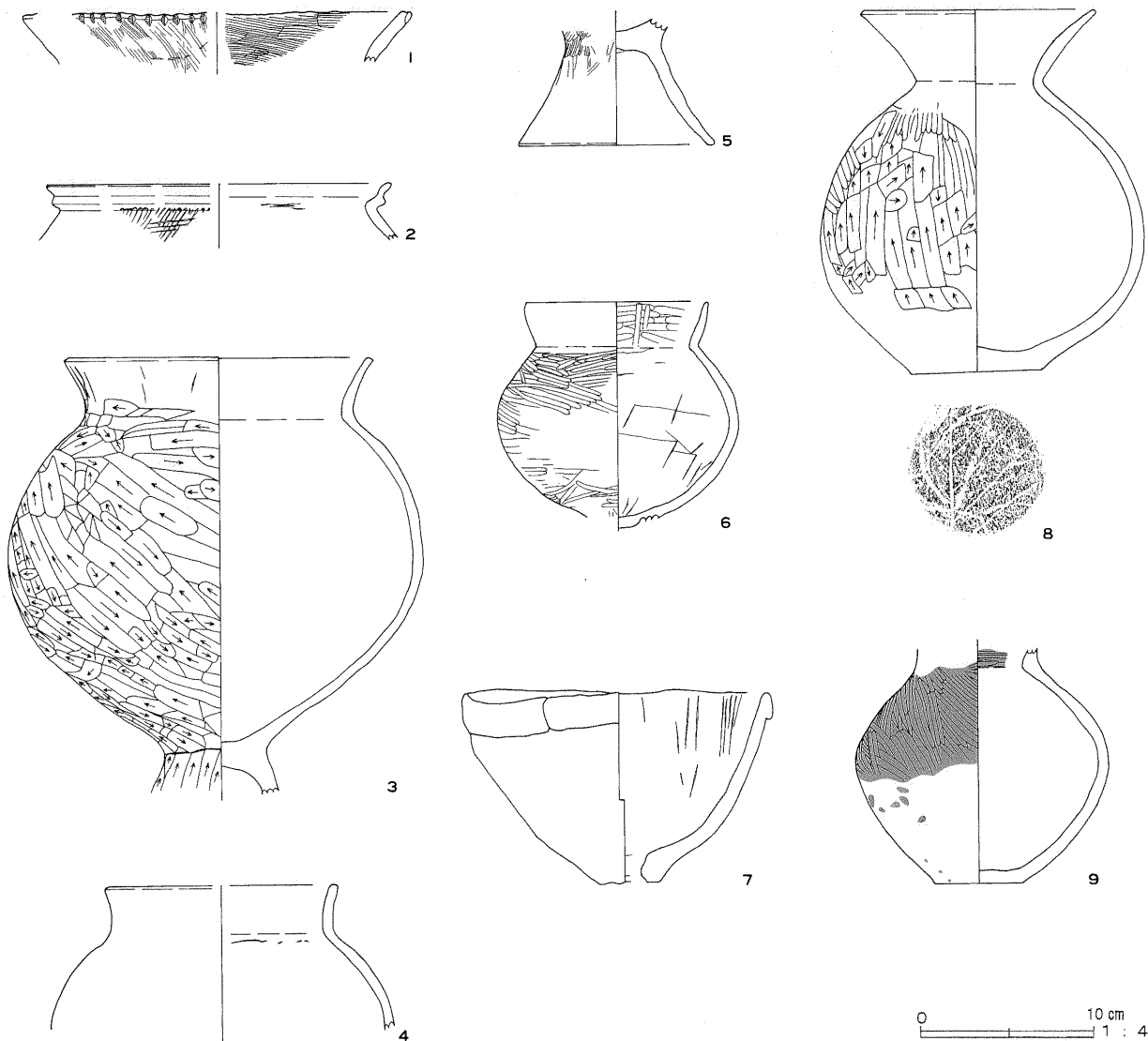
78号住居跡土層

- 1 黄褐色(10YR 5/6)シルト。炭化物粒を微量含む。
- 2 明黄褐色(2.5Y 6/6)シルト。淡黄色(2.5Y 8/4)シルト粒を少量含む。
- 3 におい黄褐色(10YR 5/4)シルト(粘土質)。炭化物粒を少量点在している。部分的に4層との境部分には極薄い層状に炭化物が集中する。
- 4 におい黄褐色(10YR 5/3)粘土。マンガン粒を多量、炭化物粒を少量含む。
- 5 明黄褐色(10YR 6/6)シルト。マンガン粒を多量含む。
- 6 黄褐色(10YR 7/8)シルト。
- 7 明黄褐色(10YR 6/6)シルト。淡黄色(2.5Y 8/4)シルト粒をやや多量、炭化物を少量含む。
- 8 におい黄褐色(10YR 5/3)シルト。マンガン粒を多量、層状に炭化物を含み、極微量の焼土が集中している層。
- 9 明黄褐色(2.5Y 6/6)粘土。炭化物を少量点在している。

67号土坑土層

- 1 黄褐色(10YR 5/6)シルト。におい黄褐色(10YR 7/4)シルト。小ブロック、炭化物粒を多量含む。
- 2 黄褐色(2.5Y 5/6)シルト。炭化物粒を多量含む。
- 3 明黄褐色(2.5Y 7/6)粘土。炭化物粒、マンガン粒を少量含む。

第108図 B区78号住居跡、67号土坑



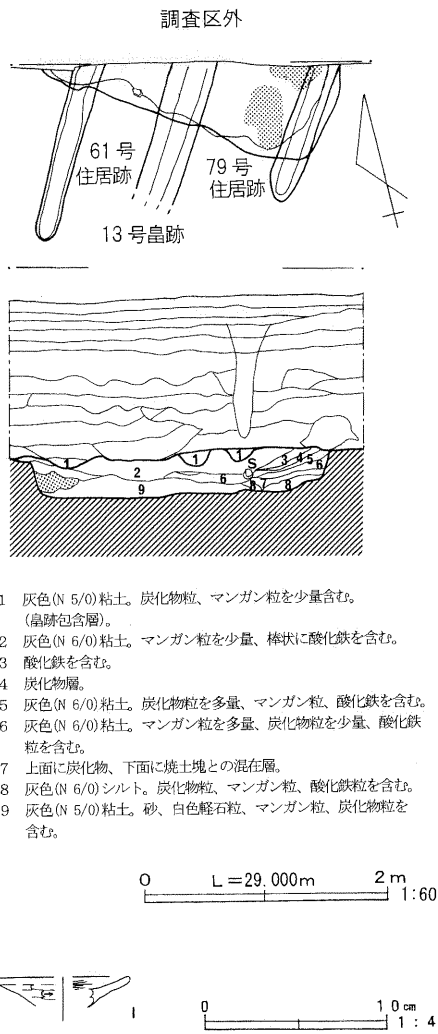
第109図 B区78号住居跡出土遺物

第50表 B区78号住居跡出土遺物観察表 (第109図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・甕	(21.5)	—	—	②①⑥③	②	浅黄橙	口縁部1/8	吸炭。二次加熱
2	土師器・甕	(20.0)	—	—	②③①④	②	橙	口縁部1/8	内面括れ部横の刷毛目。
3	土師器・台付甕	17.8	—	—	②①③④⑥	②	橙	胴部1/2	口縁部横ナデ。胴部外面横又は斜のケズリ、上位煤付着。内面ナデ、下半炭化物付着。脚部外面縦のケズリ、内面ナデツケ。二次加熱。
4	土師器・甕	(13.4)	—	—	①②③④	②	浅黄橙	上位1/4	全面表面磨滅。二次加熱。全面赤色化。
5	土師器・台付甕	—	—	11.4	②①④③	②	橙	脚部3/4	胴部外面縦の刷毛目、内面ナデツケ吸炭。脚部外面上位に刷毛目残、大部分ナデ、内面天井ナデツケ、他はナデ。
6	土師器・台付甕	10.6	—	—	②①④③	②	にぶい橙	上部1/2	口縁部外面横のナデ、内面横、一部縦のミガキ。胴部外面横のミガキ、内面横のナデ、中位横の木口状工具によるナデ。底面ケズリ様ナデ。全面吸炭。内面炭化物、外面肩部タール状炭化物付着。二次加熱。
7	土師器・甕	19.0	11.5	3.5	②③①	②	浅黄橙	完形	口縁貼り付け。外面ナデ。内面ヘラナデ。
8	土師器・壺	13.2	21.1	7.5	①⑥③②④	②	橙	胴部1/6欠	口縁部横ナデ。胴部外面肩部横のナデ、上位縦のミガキ、中位縦のケズリ、下位剥落のため不詳。内面ナデ。木の葉底。
9	土師器・壺	—	—	5.0	①②⑥③	②	橙	口縁部欠	外面頸部及び胴部下位表面剥落。胴部中位より上斜のミガキ。内面頸部横のミガキ、胴部横のヘラナデ。外面全体、内面頸部朱塗。

のマンガン粒を含む明黄褐色シルト層（第5層）、黄橙色シルト層（第6層）が同位で堆積し、この下位に少量の炭化物を含むにぶい黄褐色シルト層（第3層・下位に炭化物層を伴う）、多量のマンガン粒及び少量の炭化物を含むにぶい黄橙色シルト層（第4層）が堆積している。第1層は両者に共通しているが、西側の第2～第9層が、第5～第4層を掘り込むような様相を呈しているため、別遺構の重複している可能性もある。

遺物は、炉・炭化物の載る高まりの東脇に、西から土師器台付甕（6）の一部、台付甕（3）、甑（7）、甑の中に台付甕（6）の大部分、壺（9）、台付甕（3）の一部が列を成して検出されている。また、北東壁下からは、土師器甕（4）、壺（8）、覆土中からは台付甕口縁部（1・2）台付甕台部（5）等が出土している。



79号住居跡（第110図）

E-10グリッドに位置し、北側は調査区外に及んでいる。第二確認面の検出である。

埋没完了に掘削された13号畠跡と共に、上面を61号住居跡に削平されている。

南隅部が検出されたのみであり、形態・規模共に不明である。現状では、南西辺が $2.30 + \alpha$  m、南東辺が $1.00 + \alpha$  mを計り、角は直角を成す。南西辺軸方位は、N-57° - Wを示す。

壁は、急な傾斜をもつが、床面との境に段を成す部分もあって、明瞭ではない。検出面からの高さは、最高で35 cmを計る。

床面は、凹凸がみられ、安定していない。ピット、炉等は検出されていない。

覆土は、上層が棒状の酸化鉄及び少量のマンガン粒を含む灰色粘土層（第2層）、下層が砂・白色軽石粒・マンガン粒・炭化物粒を含む灰色粘土層（第9層）が堆積している。両層の間には、焼土層あるいは炭化物層（第4層）、炭化物・焼土混在層（第7層）、灰色シルト層（第8層）・灰色粘土層（第3・5・6層）が部分的に挟まっている部分もみられる。第2層が掘り込まれて13号畠跡が築かれている。

遺物は土師器器台（1）、骨粉が出土している。

第110図 B区79号住居跡及び出土遺物

第51表 B区79号住居跡出土遺物観察表（第110図）

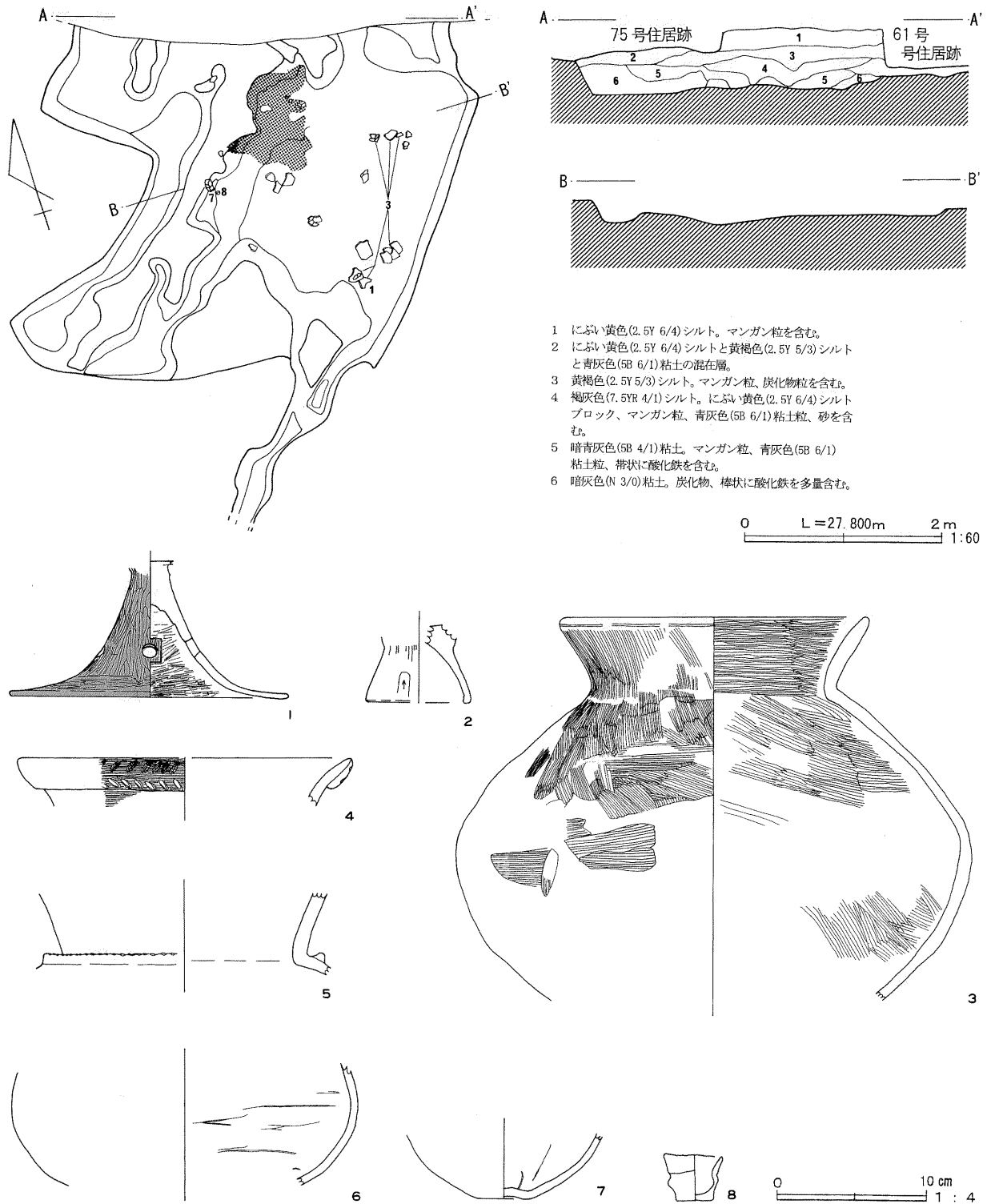
No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・器台	(7.2)	—	—	②④③①	①	赤	上部1/8	全面吸炭。外面横のケズリ。内面横を主体としたミガキ。
2	骨	—	—	—	—	—	—	—	写真のみ。



80号住居跡 E-10グリッドに位置し、北側は調査区外に及んでいる。 第二確認面の検出である。

(第111図) 75号住居跡及び13号・C区16号両畝跡に削平され、上位には76号住居跡が位置している。

西隅部分及び南東辺の一部が検出されたのみであり、規模・形態共に不明である。現状



第111図 B区80号住居跡及び出土遺物

では北西辺・南東辺間が4.15mであるのを知るのみである。さらに、南東辺が、西角及び南西辺の想定延長線より大きく南西に張り出すため、形態は不明といわざるを得ない。南東辺軸方位は、N-57°-Wを示す。

壁は、急な傾斜をもつ。検出面からの高さは、最高で35cmを計る。

床面は、東部では凹凸もなく、ほぼ水平面を成して安定しているが、西部及び南部はC区16号畠跡に削除された部分が多く、明確でない。

ピット、炉等は検出されていない。

覆土は、上位から、マンガン粒を含むにぶい黄色シルト層（第1層）、にぶい黄色シルトと黄褐色シルトさらには青灰色粘土混在層（第2層）、マンガン粒・炭化物を含む黄褐色シルト層（第3層）、にぶい黄色シルトブロックと青灰色粘土粒、さらにはマンガン粒・砂を混在する褐灰色シルト層（第4層）、帯状の酸化鉄さらには青灰色粘土粒・マンガン粒を含む暗青灰色粘土層（第5層）、炭化物及び棒状の酸化鉄を含む暗灰色粘土層（第6層）が堆積している。投入土の様相を呈している。また、南西壁下床面上には炭化物が堆積している。

遺物は、土師器高杯（1）、甕類（2・3）、壺類（4～7）が床面上から出土している。なお、床面に堆積している炭化物層中から、ミニチュア土器（8）が出土している。

第52表 B区80号住居跡出土遺物観察表（第111図）

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・高杯	—	—	(18.9)	②①④	②	にぶい橙	脚部5/8	外面縦、裾部横のミガキ。内面上位ナアツケ、中位以下横のミガキ。内面天井部以外全面朱塗。
2	土師器・台付甕	—	—	(7.2)	⑥②①④	②	にぶい黄橙	脚部1/4	外面接合部縦の刷毛目、脚部ナア、一部縦のケズリ。内面ナア。吸炭。
3	土師器・壺	(21.0)	—	—	②③①④⑥	②	浅黄橙	2/3	外面口縁～肩部縦の刷毛目、上位～中位横を主体とした刷毛目、下位ナア。内面口縁横、胴上位斜、下位斜の刷毛目、中位全面、下位一部ナアが加わる。内面ほぼ全面炭化物付着。外面一部吸炭。
4	土師器・壺	(22.5)	—	—	②①③④⑥	①	橙	口縁部1/8	外面横ナア(刷毛目状)。内面横ナア。全面吸炭。凸帯上位押圧文、下位刺突文。
5	土師器・壺	—	—	—	①②④⑥	?	橙	頸部1/8	口縁部横のナア。二次加熱。
6	土師器・壺	—	—	—	②③⑥①④	②	にぶい橙	胴中部1/3	外面中位以上ナア、以下横のケズリ、剥落した部分多い。内面ナア。
7	土師器・壺	—	—	3.5	⑥②①④	②	橙	底部のみ	外面横の木口状工具によるナア。内面ヘラナア。吸炭。
8	土師器・手	4.0	3.2	2.5	④①	②	黒褐	完形	黒色処理。

## 2 土坑

B区における土坑は、平成14年度・第5次調査で、57号から66号までの10基が調査されている。第一確認面及び第一確認面上位からの検出である。住居跡の上面に位置し、溝跡には切断競れている場合が多い。また、遺物の出土が少なく、時期の不明瞭なものが多い。

遺跡全体では、その形態から以下の五つのタイプに分類されるが、本調査区第5次調査分では、小型で浅く、長方形を呈するタイプ（2タイプ）及び、大型で深く、方形もしくは長方形を呈するタイプ（4タイプ）の中の、大型で深く、正方形もしくは長方形を呈し、底面の中央に小ピットをもつ第二グループについては、検出されていない。

**1タイプ** 小型で浅く、概ね円形を呈するタイプである。58号、61号、63号の各土坑が含まれる。

**58号土坑** (第112図) は、I-6グリッドに位置する。第一確認面上位からの検出である。A区河川跡埋没後に穿たれている。円形を呈し、径0.75×0.80m、深さ18cmを計る。底面はほぼ水平を成す。覆土は、酸化鉄及びマンガン粒を含む黄褐色粘土である。遺物は、出土していない。

**61号土坑** (第112図) は、H-7グリッドに位置する。第一確認面上位からの検出である。上面には43号溝跡が位置し、下面には45号住居跡が位置している。円形を呈し、径0.95×0.93m、深さ31cmを計る。底面は楕円状を呈している。覆土は、多量の酸化鉄を含む褐色粘土であり、底面は大部分酸化鉄で覆われている。遺物は、出土していない。

**63号土坑** (第112図) は、G-8グリッドに位置する。第一確認面上位からの検出である。下面には48号・49号両住居跡が位置している。ほぼ円形を呈し、径1.28×1.22m、深さ42cmを計る。底面は楕円状を呈している。覆土は、上位から、白色軽石粒 (浅間B軽石) を含む灰黄褐色粘土層 (第1層)、多量のマンガン粒を含む褐色粘土層 (第2層)、黄褐色粘土粒及び白色軽石粒 (浅間B軽石) を含む灰色粘土層 (第3層) が堆積している。遺物は、出土していない。

**3タイプ** 小型で深く、円形を呈するタイプである。64号土坑が含まれる。

**64号土坑** (第112図) は、G-9グリッドに位置する。第一確認面上位からの検出である。49号溝跡に切断されている。ほぼ長円形を呈し、径1.27×0.96m、深さ68cmを計る。底面はほぼ水平を成す。覆土は、酸化鉄及びマンガン粒を含む黄褐色粘土である。遺物は、出土していない。

**4タイプ** 大型で深く、方形もしくは長方形を呈するタイプである。57号、59号の各土坑が含まれる。

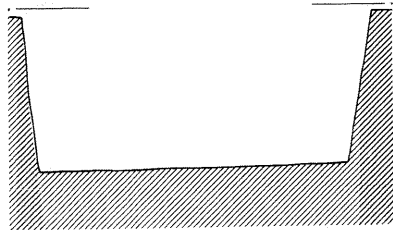
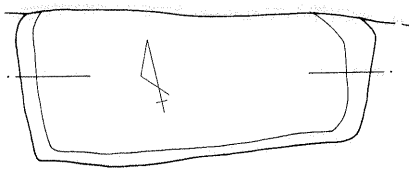
第一グループは、大型で深く、正方形もしくは正方形に近い長方形を呈するタイプである。59号土坑が含まれる。

**59号土坑** (第48図) は、I-6グリッドに位置する。第一確認面上位からの検出である。41号住居跡を切断している。正方形に近い長方形を呈し、2.10×1.66m、深さ0.73mを計る。覆土は、多量の酸化鉄を含む灰褐色粘土層である。遺物は出土していない。

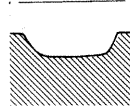
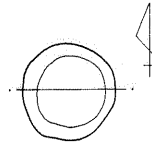
第三グループは、大型で深く、長方形を呈するタイプである。57号土坑が含まれる。

**57号土坑** (第112図) は、G-6グリッドに位置する。第一確認面上位からの検出である。34号溝に削平されている。A区河川跡埋没後に穿たれている。北側が調査区外に及ぶ。

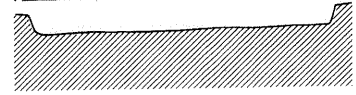
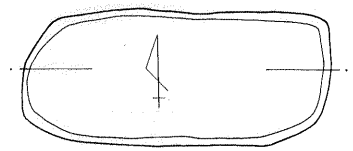
V B区の遺構と遺物



57号土坑

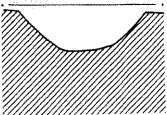
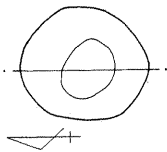


58号土坑

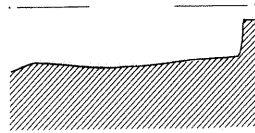
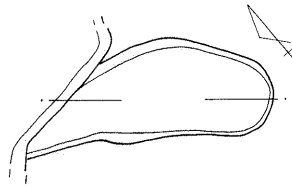


60号土坑

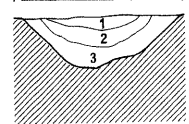
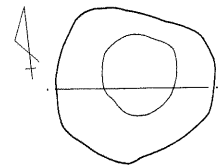
1 黄灰色(2.5Y 5/1)粘土。酸化鉄、マンガン粒を少量含む。



61号土坑

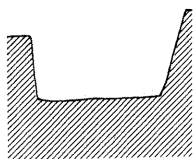
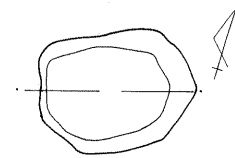


62号土坑

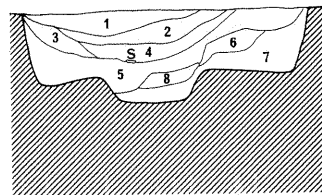
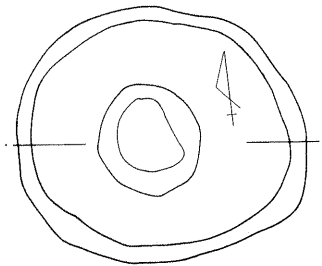


63号土坑

- 1 灰黄褐色(10YR 5/2)粘土。白色軽石粒(火山灰?)を少量含む。
- 2 褐色(10YR 4/4)粘土。マンガン粒を少量含む。
- 3 灰色(N 5/0)粘土。黄褐色粘土粒、白色軽石粒(火山灰?)を少量含む。

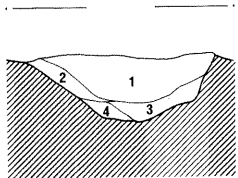
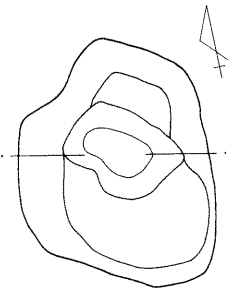


64号土坑



65号土坑

- 1 黄灰色(2.5Y 6/7)粘土。マンガン粒、褐灰色粘土を少量含む。
- 2 オリーブ黒色(7.5Y 3/2)粘土。火山灰粒、褐灰色粘土、明黄褐色粘土、炭化物を含む。
- 3 灰色(5Y 6/1)粘土。明黄褐色粘土を少量含む。
- 4 明黄褐色(2.5Y 6/8)粘土。マンガン粒を少量含む。
- 5 褐灰色(10Y 5/1)粘土。明黄褐色粘土を少量含む。
- 6 明黄褐色(2.5Y 6/6)粘土。灰色粘土を少量含む。
- 7 明黄褐色(2.5Y 6/6)粘土。灰色粘土、褐灰色粘土を少量含む。
- 8 褐灰色(10YR 6/1)粘土。酸化鉄を少量含む。



66号土坑

- 1 褐灰色(10YR 6/1)粘土。酸化鉄を多量、帯状に灰色砂を含む。
- 2 灰黄褐色(10YR 5/2)粘土。酸化鉄、少量白色軽石粒、帯状に灰色砂を含む。
- 3 暗褐色(10YR 3/3)砂層。灰色粘土を多量含む。
- 4 灰白色(2.5Y 7/1)粘土。炭化物を少量含む。

0 L=28.800m 2m 1:60

第112図 B区土坑 (57号・58号・60号・61号・62号・63号・64号・65号・66号)

ため不明確であるが、ほぼ長方形を呈し、 $2.95 \times 1.25\text{m}$ 、深さ $1.25\text{m}$ を計る。底面は水平を成す。覆土は、多量のマンガン粒を含む黄褐色粘土である。遺物は、図示できないが、土師器杯が出土している。

**5タイプ** 以上の、どれにも属さないタイプである。60号、62号、65号、66号の各土坑が含まれる。

**60号土坑** (第112図) は、G-7グリッドに位置する。第一確認面上位からの検出である。A区河川跡埋没後に穿たれており、38号・39号両溝跡に切断されている。また下面には、40号住居跡が位置している。隅が丸みをもつものの、ほぼ長方形を呈し、 $2.50 \times 1.08\text{m}$ 、深さ $15\text{cm}$ を計る。覆土は、少量の酸化鉄・マンガン粒を含む黄灰色粘土である。遺物は、出土していない。

**62号土坑** (第112図) は、F-7・8グリッドに位置する。第一確認面上位からの検出である。41号溝跡を切断しているが、46号溝跡によって切断されている。全体にくの字型におれるが、ほぼ長方形を呈し、 $(1.80 + \alpha) \times 0.80\text{m}$ 、深さ $28\text{cm}$ を計る。覆土は、酸化鉄・マンガン粒を含む黄褐色粘土である。遺物は、出土していない。

60号・62号両土坑は、浅く、形態が不整形なため、本タイプに入れたが、本来は、形態的に、4タイプ・第三グループに属すると思われる。

**65号土坑** (第112図) は、G-9・10グリッドに位置する。第一確認面上位からの検出である。B区河川跡埋没後に穿たれている。円形を呈し、 $2.40 \times 2.10\text{m}$ 計る。深さ $50\text{cm}$ のところ、中央が脹らむような平坦面をもち、中央は、円形の落ち込みをもつ。落ち込みは、径 $85 \times 92\text{cm}$ 、深さ $25\text{cm}$ を計る。覆土は、上位から、少量の褐灰色粘土・マンガン粒を含む黄灰色粘土層 (第1層)、褐灰色粘土・明黄褐色粘土・白色軽石粒 (浅間B軽石)・炭化物オリーブ黒色粘土層 (第2層)、少量のマンガン粒を含む明黄褐色粘土層 (第4層)、少量の明黄褐色粘土を含む灰色粘土層 (第3層)、少量の明黄褐色粘土を含む褐灰色粘土層 (第5層)、少量の灰色粘土を含む明黄褐粘土層 (第6層)、少量の酸化鉄を含む褐灰色粘土層 (第8層)、少量の褐灰色粘土・灰色粘土を含む明黄褐粘土層 (第7層) が堆積している。遺物は、出土していない。

**66号土坑** (第112図) は、F・G-10グリッドに位置する。第一確認面上位からの検出である。B区河川跡埋没後に穿たれている。下面には59号住居跡が位置している。北西隅がかかるが、全体的には隅円長方形を呈し、 $1.95 \times 1.56\text{m}$ 計る。深さ $35\text{cm}$ のところ、中央が窪むような平坦面をもち、中央には、長方形の落ち込みをもつ。落ち込みは、 $83 \times 68\text{cm}$ 、深さ $15\text{cm}$ を計る。覆土は、多量の酸化鉄及び帯状の灰色砂を含む褐灰色粘土層 (第1層) が上位に堆積し、下位には、少量の白色軽石粒 (浅間B軽石)・酸化鉄及び帯状の灰色砂を含む灰黄褐色粘土層 (第2層)、多量の灰色粘土を含む暗褐色砂層 (第3層)、少量の炭化物を含む灰白色粘土層 (第4層) が堆積している。遺物は、出土していない。

### 3 井戸跡

B区における井戸跡は、平成14年度・第5次調査で、23号から43号までの21基が調査されている。第一確認面及び第一確認面上位からの検出である。住居跡を切断し、溝跡には切断されている場合が多い。また、遺物の出土が少なく、時期の不明瞭なものが多い。しかし、白色軽石粒（浅間B軽石）の検出される場合が多く、時期的な指標となろう。

**23号井戸跡** H・I-7グリッドに位置する。第一確認面上位からの検出である。

(第58図) 47号・50号両住居跡を切断している。

(第115図) 上縁は、円形を呈し、径2.55×2.24mを計る。壁は、ほぼ垂直であるが、わずかずつ径を狭めながら降下し、検出面から下へ1.20m前後で、南壁以外では、幅15～35cm前後の、段を成す。段の下は、深さ10cm前後で平坦面を成す。

覆土は、多量の灰褐色粘土ブロック・マンガン粒。酸化鉄を含む黄褐色粘土層であり、ブロックの偏る部分もあって、投入土の様相を呈している。

遺物は、下段上面から、土師器高杯（23-1・2）、土師器甕（23-3～5）、磨石（23-6）が出土しているが、流れ込みであると思われる。本遺構に帰属する遺物は、底面から検出された木製の櫛（23-7）1点のみである。

**第53表 B区23号井戸跡出土遺物観察表（第115図）**

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・高杯	(17.6)	14.2	13.0	②①③⑥④	②	明赤褐	2/3	杯部全体にナデ。脚部外面ナデ、裾部ナデの後縁のミガキ、底外面輪積み痕。内面指頭によるナデ、裾部横ナデ。赤色化。二次加熱。
2	土師器・高杯	(19.3)	—	—	①⑥②③	②	橙	杯部1/3	表面磨滅。
3	土師器・甕	(15.3)	—	—	①②⑥④	②	明赤褐	上位1/4	口縁部横ナデ。胴部外面肩及び下位ケズリ、内面ナデ、炭化物付着。内外面吸炭および赤色化が激しい。二次加熱。
4	土師器・甕	(14.9)	28.1	6.0	②③①⑥	①	にぶい橙	上位1/2欠	口縁部横ナデ。胴部外面刷毛目(木口状工具)もしくはナデ。内面木口状工具によるナデ。
5	土師器・甕	(18.5)	—	—	②③①⑥	②	浅黄橙	上位1/4	外面口縁部及び肩縦胴部横の刷毛目、接合部横の刷毛目、吸炭。内面口縁部横の刷毛目、胴部横のケズリ様ナデ。接合痕残す。吸炭。
6	砥石	長さ7.7 幅8.4 厚さ6.2						—	
7	櫛	長さ3.4 幅1.7 厚さ1.0							

**24号井戸跡** G-8グリッドに位置する。第一確認面上位からの検出である。

(第59図) 48号・49号両住居跡を切断している。

上縁は、長円形を呈し、径1.30×1.06mを計る。壁は、弓状を呈し、径を狭めながら降下する。全体の深さ、0.65mまで確認されたが、それ以下に連続していることが確認されている。

覆土は、上位から、多量の白色軽石粒（浅間B軽石）及び少量の明黄褐色粘土を含む灰色粘土層（第1層）、多量の酸化鉄を含む黄灰色粘土層（第2層）、多量の酸化鉄を含む灰色粘土層（第3層）、少量の酸化鉄を含む灰色粘土層（第4層）、灰色粘土層（第5層）、多量の酸化鉄を含む灰オリーブ色粘土層（第6層）、少量の酸化鉄を含む黄灰色粘土層（第7層）が堆積している。

遺物は、出土していない。

**25号井戸跡** H・I-8グリッドに位置する。第一確認面上位からの検出である。

(第113図) 49号住居跡を切断しているが、49号溝に削平されている。

上面は、49号溝に削平されているため、規模・形態共に不明であるが、確認面では不整の円形を呈し、径1.00×0.88mを計る。確認面からの深さ、0.80mまで確認されたが、それ以下に連続していることが確認されている。

覆土は、少量の酸化鉄を含む灰色粘土層である。

遺物は、出土していない。

**26号井戸跡** H-8グリッドに位置する。第一確認面上位からの検出である。

(第63図) 50号・51号両住居跡を切断しているが、48号溝に削平されている。

(第64図) 上縁は、ほぼ円形を呈し、径1.42×1.30mを計る。壁は、径をわずかに狭めながら直線的に降下する。全体の深さ、0.95mまで確認されたが、それ以下に連続していることが確認されている。

覆土は、上層に、多量の白色軽石粒（浅間B軽石）及び少量の明黄褐色粘土を含む灰褐色粘土層、下に、少量の酸化鉄を含む灰色粘土層が堆積している。

遺物は、出土していない。

**27号井戸跡** H-8グリッドに位置する。第一確認面上位からの検出である。

(第63図) 51号住居跡を切断しているが、48号溝に削平されている。

(第64図) 上縁は、円形を呈し、径1.12×1.09mを計る。壁は、径をわずかに狭めながら直線的に降下する。全体の深さ、0.65mまで確認されたが、それ以下に連続していることが確認されている。

覆土は、上位から、多量の白色軽石粒（浅間B軽石）及び少量のマンガン粒・緑灰色粘土を含む灰褐色シルト層（第1層）、多量の明黄褐色粘土及び少量の白色軽石粒（浅間B軽石）を含む黄灰色シルト層（第2層）、少量の明黄褐色粘土・炭化物を含む灰褐色粘土層（第3層）、少量の灰褐色粘土を含む明黄褐色粘土層（第4層）、灰褐色粘土層（第5層）、少量の灰褐色粘土を含む明黄褐色粘土層（第6層）、少量の明黄褐色粘土を含む灰褐色粘土層（第7層）が堆積している。

遺物は、出土していない。

**28号井戸跡** H-9グリッドに位置する。第一確認面上位からの検出である。

(第63図) 51号住居跡を切断している。

(第64図) 上縁は、円形を呈し、径1.02×0.98mを計る。壁は、径をわずかに狭めながら直線的に降下する。全体の深さ、0.65mまで確認されたが、それ以下に連続していることが確認されている。

覆土は、上位から、白色軽石粒（浅間B軽石）及び少量の明黄褐色粘土を含む褐色灰色粘土層（第1層）、少量の明黄褐色粘土・炭化物を含む褐色灰色粘土層（第2層）、少量の明黄褐色

第54表 B区28号井戸跡出土遺物観察表 (第115図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	弥生土器	—	—	—	②	②	灰	肩部	

色粘土・褐灰色粘土・酸化鉄を含む褐色粘土層（第4層）が堆積しており、壁際の第4層上面には、少量の褐灰色粘土を含む明黄褐色粘土層（第3層）のみられる部分もある。

遺物は、弥生式土器片（28-1）、礫（28-2～5）が出土している。礫のうち2は、被熱している。

**29号井戸跡** H-9グリッドに位置する。第一確認面上位からの検出である。

(第63図) 51号住居跡を切断しているが、50号溝に削平されている。

(第64図) 上縁は、円形を呈し、径1.31×1.30mを計る。壁は、径をわずかに狭めながら直線的に降下する。全体の深さ、0.75mまで確認されたが、それ以下に連続していることが確認されている。

覆土は、上位から、多量の黒色粘土・酸化鉄を含む黄灰色粘土層（第1層）、少多量の黒色粘土・酸化鉄を含む黄灰色粘土層（第2層）、少量の黒色粘土を含む灰オリーブ色粘土層（第3層）、第3層と同様であるが、やや暗いオリーブ色粘土層（第4層）、少量の酸化鉄を含む灰オリーブ色粘土層（第5層）、第5層と同様であるが、やや明るいオリーブ色粘土層（第6層）が堆積している。

遺物は、出土していない。

**30号井戸跡** G-9グリッドに位置する。第一確認面からの検出である。B区河川跡埋没後の構築で（第113図）ある。

上縁は、円形を呈し、径92×80cmを計る。わずかずつ径を狭めながら降下し、検出面から下へ0.90～1.35mの範囲では逆に脹らみをもつ。脹らみの最大径は、上縁径にほぼ一致する。その後、さらに下へ、わずかずつ径を狭めながら、掘り下げられている。全体の深さ、1.45mまで確認されたが、それ以下に連続していることが確認されている。

覆土は、上位から、多量の白色軽石粒（浅間B軽石）及び少量の浅黄色粘土ブロックを含む黒色粘土層（第1層）、酸化鉄及び少量の浅黄色粘土ブロックを含む黄灰色粘土層（第2層）、多量の酸化鉄を含む灰色粘土層（第3層）、多量の黒色粘土ブロック・浅黄色粘土ブロックを含む灰色粘土層（第4層）、多量の酸化鉄及び浅黄色粘土ブロックを含む黄灰色粘土層（第5層）、多量の酸化鉄を含む灰色粘土層（第6層）が堆積している。いずれも、投入土の様相を呈している。

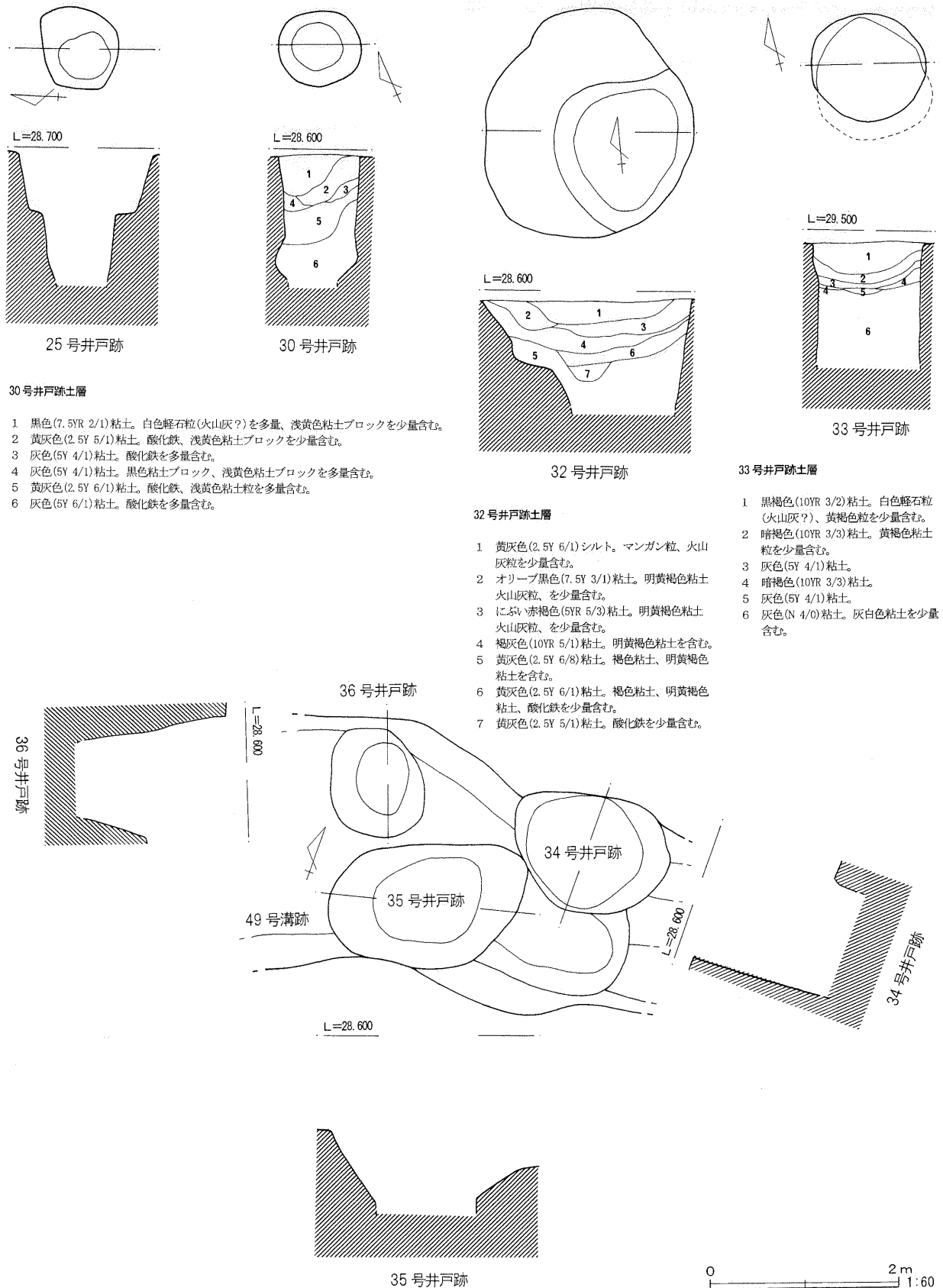
遺物は、出土していない。

**31号井戸跡** H-9グリッドに位置する。第一確認面上位からの検出である。

(第76図) 57号住居跡を切断している。

上縁は、円形を呈し、径1.18×1.14mを計る。壁は、全体に急傾斜で直線を成し、わず





第113図 B区井戸跡(1) (25号・30号・32号・33号・34号・35号・36号)

かずつ径を狭めて、掘り下げられている。しかし、深さ0.80m付近で、外側に大きく広がり、最大径は2.16mを計ることとなる。その後再度、徐々に幅を狭めながらさらにそれ以下に連続していることが確認されている。全体の深さ、1.48mまで確認されている。

覆土は、上位から、多量の酸化鉄及び少量の浅黄色粘土を含む黒褐色粘土層（第1層）、多量の酸化鉄・浅黄色粘土を含む黒褐色粘土層（第2層）、少量の酸化鉄を含む灰オリーブ色粘土層（第3層）、多量の酸化鉄及び帯状の黒褐色粘土を含む灰オリーブ色粘土層（第4層）、多量の酸化鉄及び少量の黒褐色粘土を含む灰オリーブ色粘土層（第5層）が堆積している。

遺物は、出土していない。

**32号井戸跡** F・G-9グリッドに位置する。第一確認面上位からの検出である。B区河川跡埋没後(第113図)の構築である。

上縁は、円形を呈し、径2.47×2.22mを計る。西側は、漏斗状を呈して、深さ70cm前後で平坦面を成す。その後、さらに下へ、湾曲しながら、わずかずつ径を狭めて、掘り下げられている。東壁は、全体が急傾斜で直線を成す。全体の深さ、1.28mまで確認されたが、それ以下に連続していることが確認されている。

覆土は、上位から、少量の白色軽石粒（浅間B軽石）及びマンガン粒を含む黒褐色粘土層（第1層）、少量の明黄褐色粘土・白色軽石粒（浅間B軽石）を含むにぶいオリーブ褐色粘土層（第2層）、少量の明黄褐色粘土・白色軽石粒（浅間B軽石）を含むにぶい赤褐色粘土層（第3層）、明黄褐色粘土を含む褐灰色粘土層（第4層）、明黄褐色粘土・褐色粘土を含む黄灰色粘土層（第5層）、少量の酸化鉄及び明黄褐色粘土・褐色粘土を含む黄灰色粘土層（第6層）、少量の酸化鉄を含む黄灰色粘土層（第7層）が堆積している。

遺物は、出土していない。

**33号井戸跡** G・H-9グリッドに位置する。第一確認面上位からの検出である。

(第113図) 58号住居跡を切断しているが、51号溝に削平されている。

上縁は、円形を呈し、径1.31×1.16mを計る。全体に、わずかに漏斗状を呈し、南に向けて掘り下げられている。全体の深さ、1.32mまで確認されたが、それ以下に連続していることが確認されている。

覆土は、上位から、少量の白色軽石粒（浅間B軽石）・明黄褐色粘土を含む黒褐色粘土層（第1層）、少量の黄褐色粘土を含むにぶい暗褐色粘土層（第2層）、灰色粘土層（第3層）、暗褐色粘土層（第4層）、灰色粘土層（第5層）、灰白色粘土を含む灰色粘土層（第6層）が堆積している。

遺物は、出土していない。

**34号井戸跡** G-9グリッドに位置する。第一確認面上位からの検出である。B区河川跡埋没後の構築(第113図)である。

49号溝に削平されている。

このため、上面形は明確ではないが、壁は直立し、残存面の形態は、長円形を呈する。径1.75×1.25mを計り、確認面からの深さ、1.50mまで確認されたが、それ以下に連続していることが確認されている。覆土は、少量の灰白色粘土及び酸化鉄を含む灰色粘土層である。

遺物は、出土していない。

**35号井戸跡** G-9・10グリッドに位置する。第一確認面上位からの検出である。B区河川跡埋没後(第113図)の構築である。

58号住居跡を切断しているが、49号溝に削平されている。

このため、上面形は明確ではないが、残存面の形態は、長円形を呈する。壁は上位が斜面、下位が直立し、全体で漏斗上を呈する。上面径2.12×1.36mを計り、確認面からの深さ、0.95mまで確認されたが、それ以下に連続していることが確認されている。覆土は、少量の灰白色粘土及び多量の酸化鉄を含む灰褐色粘土層である。

遺物は、出土していない。

**36号井戸跡** G-9・10グリッドに位置する。第一確認面上位からの検出である。B区河川跡埋没後(第113図)の構築である。

49号溝に削平されている。

このため、上面形は明確ではないが、残存面の形態は、長円形を呈する。壁は斜面を成すが、上位がわずかに緩く、全体では漏斗上を呈する。上面径1.12×1.00mを計り、確認面からの深さ、1.70mまで確認されたが、それ以下に連続していることが確認されている。覆土は、少量の酸化鉄を含む灰色粘土層である。

遺物は、出土していない。

**37号井戸跡** G・H-10グリッドに位置する。第一確認面上位からの検出である。B区河川跡埋没後(第114図)の構築である。

58号住居跡を切断している。

上縁は、円形を呈し、径2.04×1.80mを計る。東壁は、S字を呈すものの急傾斜であるが、他の壁は緩斜面となるため、全体が東に寄せて掘り下げられている感を呈する。全体の深さ、1.20mを計る。底面は、平坦である。

覆土は、上位から、多量の酸化鉄・白色軽石粒(浅間B軽石)及び少量の淡黄色粘土を含む黒褐色粘土層(第1層)、多量の淡黄色粘土及び少量の酸化鉄を含む灰色粘土層(第2層)、淡黄色粘土及び酸化鉄を含む灰色粘土層(第3層)、少量の酸化鉄を含む灰色粘土層(第4層)、多量の淡黄色粘土及び少量の酸化鉄を含む灰色粘土層(第5層)、多量の酸化鉄を含む灰オリーブ色粘土層(第6層)、多量の灰色粘土及び少量の酸化鉄を含む灰色粘土層(第7層)が堆積している。

遺物は、出土していない。

**38号井戸跡** F-10グリッドに位置する。第一確認面上位からの検出である。

(第114図) 52号溝を切断している。

(第115図) 上縁は、長円形を呈し、径1.22×1.03mを計る。わずかずつ径を狭めながら降下し、検出面から下へ0.50～1.05mの範囲では逆に脹らみをもつ。脹らみの最大径は、1.48mを計り、上縁径を上回る。その後、さらに下へ、わずかずつ径を狭めながら、掘り下げられている。全体の深さ、1.15mまで確認されたが、それ以下に連続していることが確認されている。

覆土は、上位から、多量の酸化鉄を含む黒色粘土層（第1層）、多量の酸化鉄を含む褐灰色粘土層（第2層）、多量の酸化鉄を含む褐灰色粘土層（第3層）、が堆積している。

第3層の上位・西半部分・径80×65cm範囲では、12～25cm大の礫（煤の付着したもの4個、緑泥片岩の板石を中心に21個）が集中して検出されている。礫群の北端からは内耳鍋（38-1）が出土している。

**第55表 B区38号井戸跡出土遺物観察表（第115図）**

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	内耳鍋	(36.0)	6.6	(32.0)	—	②	灰	1/8	在地産。胴部内外面吸炭。外面被焼。内耳3ヶ所残存。
2	礫	長さ19.0 幅15.0 厚さ5.8 重さ2,100g							被熱
3	礫	長さ15.4 幅11.0 厚さ4.3 重さ995g							被熱
4	礫	長さ16.5 幅12.8 厚さ7.0 重さ1,670g							被熱
5	礫	長さ25.5 幅14.3 厚さ14.8 重さ5,300g							被熱

**39号井戸跡** G-10グリッドに位置する。第一確認面上位からの検出である。

(第95図) 66号・69号両住居跡を切断している。

上縁は、円形を呈し、径1.10×1.08mを計る。壁は、急傾斜を成し、やや幅を狭めながら降下する。全体の深さ、0.70mまで確認されたが、それ以下に連続していることが確認されている。

覆土は、上位から、少量の酸化鉄及び浅黄色粘土粒を含む黒褐色粘土層（第1層）、多量の酸化鉄及び少量の黒褐色粘土を含む灰オリーブ色粘土層（第2層）、少量の酸化鉄・黒褐色粘土を含む灰色粘土層（第3層）が堆積している。

遺物は、出土していない。

**40号井戸跡** G-11グリッドに位置する第一確認面上位からの検出である。

(第92図) 67号・68号両住居跡及び14号畝跡を切断している。

上縁は、円形を呈し、径3.20×3.08mを計る。壁は、西側がやや緩傾斜である他は、急傾斜を成し、わずかずつ径を狭めながら降下し、検出面から下へ0.75～0.85mのところ、平坦面を作り出している。平坦面中央やや南寄りからは、長円形を呈し、径1.45×1.05mの範囲で、さらに下へ、わずかずつ径を狭めながら、北へ向けて掘り下げられている。全

体の深さ、1.05mまで確認されたが、それ以下に連続していることが確認されている。

覆土は、全て粘土層であり、白色軽石粒（浅間B軽石）を含む層と、含まない層に分けられる。白色軽石粒（浅間B軽石）を含む層には、第1～第6、第8～第11、第13、第14層が、含まない層には、第7、第12、第15層がある。

遺物は、出土していない。

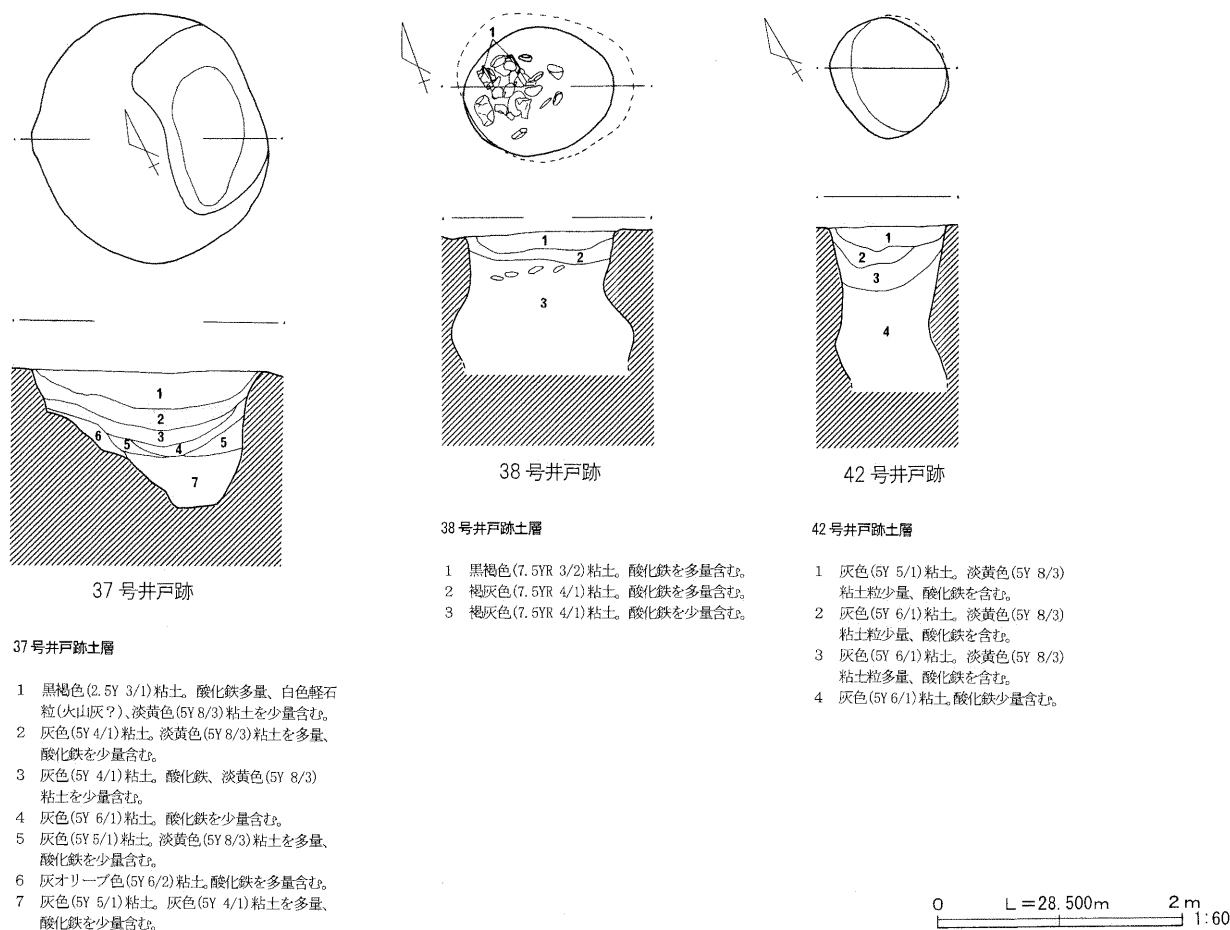
**41号井戸跡** H-10グリッドに位置する。第一確認面上位からの検出である。

(第95図) 70号住居跡を切断しているが、53号・54号両溝跡に削平されている。

(第115図) 上縁は、長円形を呈し、径1.70×1.48mを計る。壁は、急傾斜を成し、やや幅を狭めながら降下する。全体の深さ、1.30mまで確認されたが、それ以下に連続していることが確認されている。

覆土は、上層が、多量のマンガン粒・酸化鉄を含む暗褐色粘土層であり、下層が多量の酸化鉄を含む黒褐色土層である。

遺物は、常滑鉢（41-1）が出土している。



第114図 B区井戸跡(2) (37号・38号・42号)

第56表 B区41号井戸跡出土遺物観察表 (第115図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	陶器・鉢	(38.8)	11.9	(24.0)	—	①	灰赤	1/8	常滑産。鉢

**42号井戸跡** G-10・11グリッドに位置する。第一確認面上位からの検出である。

(第114図) 67号・69号両住居跡及び14号畠跡を切断している。

上縁は、長円形を呈し、径1.23×1.15mを計る。壁は、やや幅を狭めながら降下し、深さ0.90～1.00の地点で、東に屈曲する。全体の深さ、1.35mまで確認されたが、それ以下に連続していることが確認されている。また、周囲を一周し、南に伸びる54号溝跡は、下位から検出されているものの、本井戸跡に付属する溝跡である可能性が高い。

覆土は、上位から、少量の酸化鉄及び淡黄色粘土粒を含む灰色粘土層（第1層）、少量の酸化鉄及び淡黄色粘土粒を含む灰色粘土層（第2層）、少量の酸化鉄及び淡黄色粘土粒を含む灰色粘土層（第3層）、少量の酸化鉄を含む灰色粘土層（第4層）が堆積している。

遺物は、出土していない。

**43号井戸跡** E-11グリッドに位置する。第一確認面上位からの検出である。

(第106図) 75号・76号両住居跡を切断している。

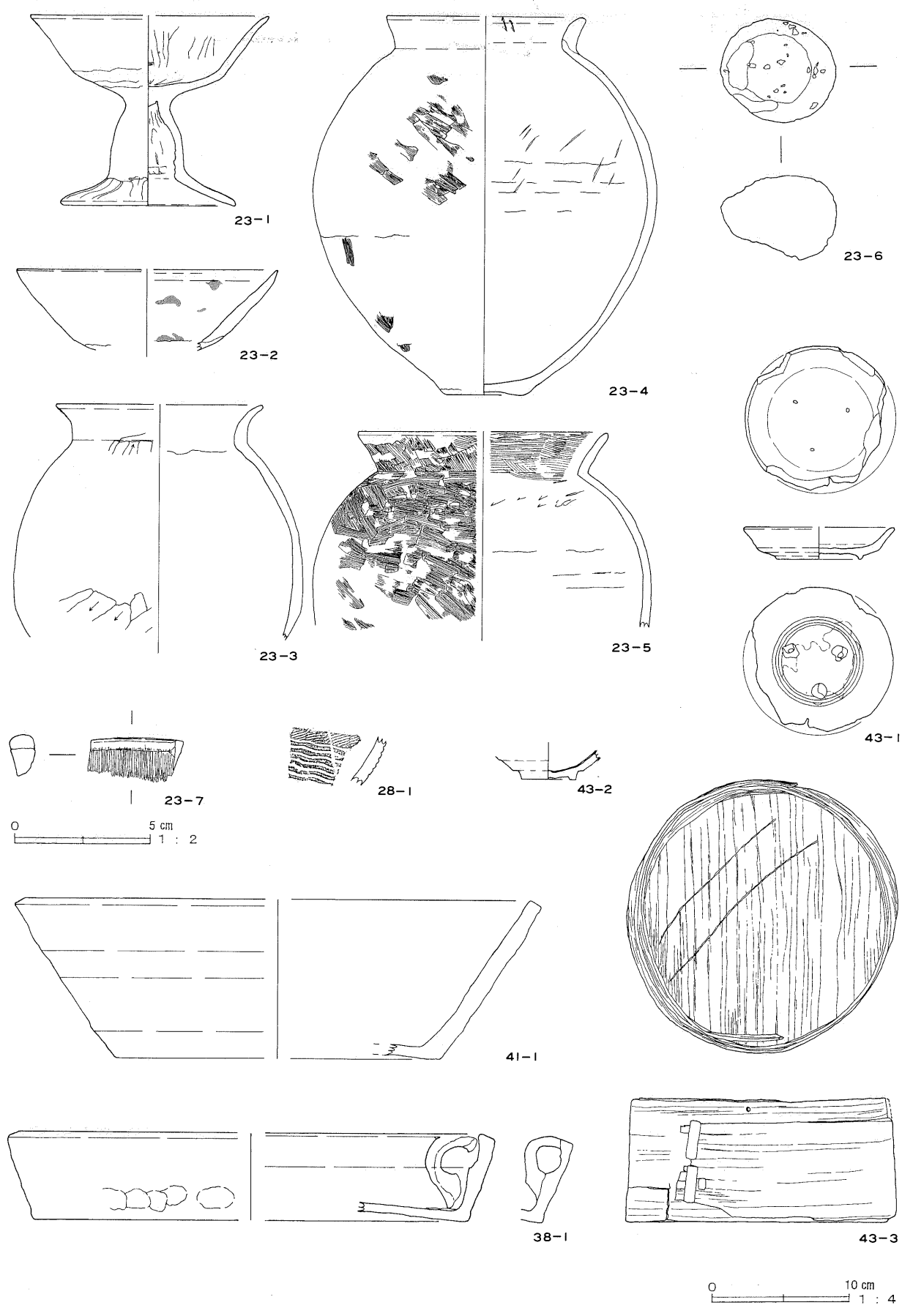
上縁は、円形を呈し、径1.80mを計る。壁は、脹らみをもって掘り下げられている。脹らみの最大径は1.94mである。全体の深さ、1.35mまで確認されたが、それ以下に連続していることが確認されている。

覆土は、上層が、多量の酸化鉄・マンガン粒・黄色粘土を含む黄灰色粘土層（第1層）であり、下層が、多量の酸化鉄を含む灰色粘土層（第4層）である。壁際では、両層の間に、多量のマンガン粒及び少量の酸化鉄を含む黄褐色粘土層（第2層）、少量のマンガン粒を含む明黄褐色粘土層（第3層）が堆積している。

遺物は、瀬戸灰釉皿（43-1）、瀬戸天目茶碗（43-2）、曲げ物（43-3）が出土している。

第57表 B区43号井戸跡出土遺物観察表 (第115図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	陶器・皿	(11.1)	2.4	6.5	—	①	灰オリーブ	4/5	瀬戸産。灰釉丸皿。トチン跡あり(内外面3点)。高台部削り出し。
2	陶器・天目茶碗	—	—	4.0	—	①	黒	底部	瀬戸産。鉄釉。
3	曲物・わっぱ	20.0	9.0	20.0	—	—	—	—	底板径18.5cm。底板(一枚板)はめ込み。側板内側に成形時の縦方向のキザミ目あり。



第115图 B区井戸跡出土遺物

## 4 畠跡

B区における畠跡は、平成14年度・第5次調査で、13号から14号までの2ブロックが調査されている。第二確認面及び第一確認面下位からの検出である。住居跡には切断されている場合が多い。また、遺物の出土が少ない。

**13号畠跡** E-10・11、F-9・10・11グリッドに亘って位置し、北側は調査区外に及んでいる。(第116図) 第二確認面からの検出である。

現状では、東西12.50m、南北5.50mの範囲に及ぶ。畠間の底面レベルは、北が高く、南が低いという特徴を示す。しかし、平均レベルL=27.7m前後の東側(上段)と、L=27.4m前後の西側(下段)では、大きく異なり、上下2段の畠跡に区分して考えるべきであろう。

下段の畠間は、東西幅3.5mの間に、寸断されているものを流れの中で1条ととらえると、8条が確認される。中央部付近で曲折し、南部はN-49°-E、北部はN-35°-Eを示す。長さは、49cmから5.9mと、大きな差がみられるが、分断されながらも連続するため、全体として畠間を成すものである。畠間幅は、10~20cmを計るが、大部分が20cmに近い幅をもつ。畠間の間隔は、概ね30cm前後であるが、18~55cmまでの幅がある。また南端は、東に移行するに従って北へずれるため、全体では、平行四辺形に近い範囲形態を示すと思われる。

79号住居跡(古墳時代前期)埋没完了後に、62号住居跡(古墳時代前期)をはじめ、72号・75号両住居跡(ともに古墳時代前期)をも切断して掘削したものが、61号住居跡(古墳時代前期)には削平されている。上面には、76号住居跡(古墳時代後期)が位置している。

61号住居跡の項では、61号住居跡の下層覆土が堆積した後、本畠跡が構築されたとの判断を記載しているが、再精査の結果、本畠跡の覆土とした土層(第85図)は、上下2層に分離され、下層が、炭化物粒及び少量のマンガン粒を含む灰色粘土層(第116図-第1層)であり、上層が、第116図中a層~e層としたマンガン粒を含む灰色シルト層であると判断された。a層~e層の区別は、 $a \cdot e > b \cdot d > c$ という、マンガン粒の含有量の差である。精査の時点で、第116図中a層~e層を61号住居跡覆土最下層と判断の訂正をしたため、重複関係も、本畠跡下段は、61号住居跡には削平されていると、訂正するものである。

いずれにしても、これらのことから、本畠跡下段は、古墳時代前期に属する可能性は高いものと考えられる。

一方、上段の畠間は、東西幅7.5mの間に、寸断されているものを流れの中で1条ととらえると、13条が確認される。わずかに北側が狭く、南側が広いものの、全体の畠間の方位は、N-30°-Eを示す。長さは、1.82mから $3.20 + \alpha$ mと、大きな差がみられるが、短いものは1条のみで、他は北側調査区外に及んで長くなる様相を示している。畠間幅18



～30cmを計る。いずれにしても、全体の様相は、うかがい知れないのが現状である。畝間の間隔は、概ね30cm前後であるが、20～40cmまでの幅がある。また東端では、N-79°-Eを示し、交差する3条の畝間がみられる。いずれも西端が南北行の畝間と交差する位置で終結している。長さは、1.00mから2.95m、畝間幅13～20cm、畝間の間隔は、15～30cmまでの幅がある。

上段の畝間は、60号住居跡に削平されており、覆土は、褐灰色粘土を主体として、周辺部が酸化した灰色粘土ブロック及びマンガン粒の混在層（第116図-\*印層）である。この上面に、60号住居跡覆土・最下層の、少量のマンガン粒・炭化物を含むにぶい黄褐色粘土層（第82図-第3層）が堆積しているものである。また、61号住居跡掘り込み確認基盤層となっている、マンガン粒・オリブ褐色シルトを含む青灰色粘土層（第116図-#印層）を掘り込んでいることから、61号住居跡と相前後した構築時期が考えられるものである。

遺物は、土師器甕（1）、手捏ね土器（2）が出土している。

第58表 B区13号畝跡出土遺物観察表（第116図）

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・甕	—	—	(4.8)	②①③⑥④	②	にぶい褐	底部1/2	外面ナデツケ。内面ヘラナデ。穿孔部横のケズリ。吸炭。
2	土師器・手捏	(4.2)	2.1	3.6	②③⑥	②	灰白	底部のみ	

14号畝跡 F-11、G-10・11、H-10・11グリッドに亘って位置し、北側は調査区外に及んでい（第117図）る。第二確認面からの検出である。

覆土は、少量のマンガン粒・酸化鉄を含む暗灰黄色粘土である。現状では、東西5.30m、南北12.15mの範囲に及ぶ。しかし、畝間底面の、平均レベルL=27.2m前後の北西側（下段）と、L=27.4m前後の南東部側（上段）では、大きく異なり、覆土は共通するものの、上下2段の畝跡に区分して考えるべきであろう。

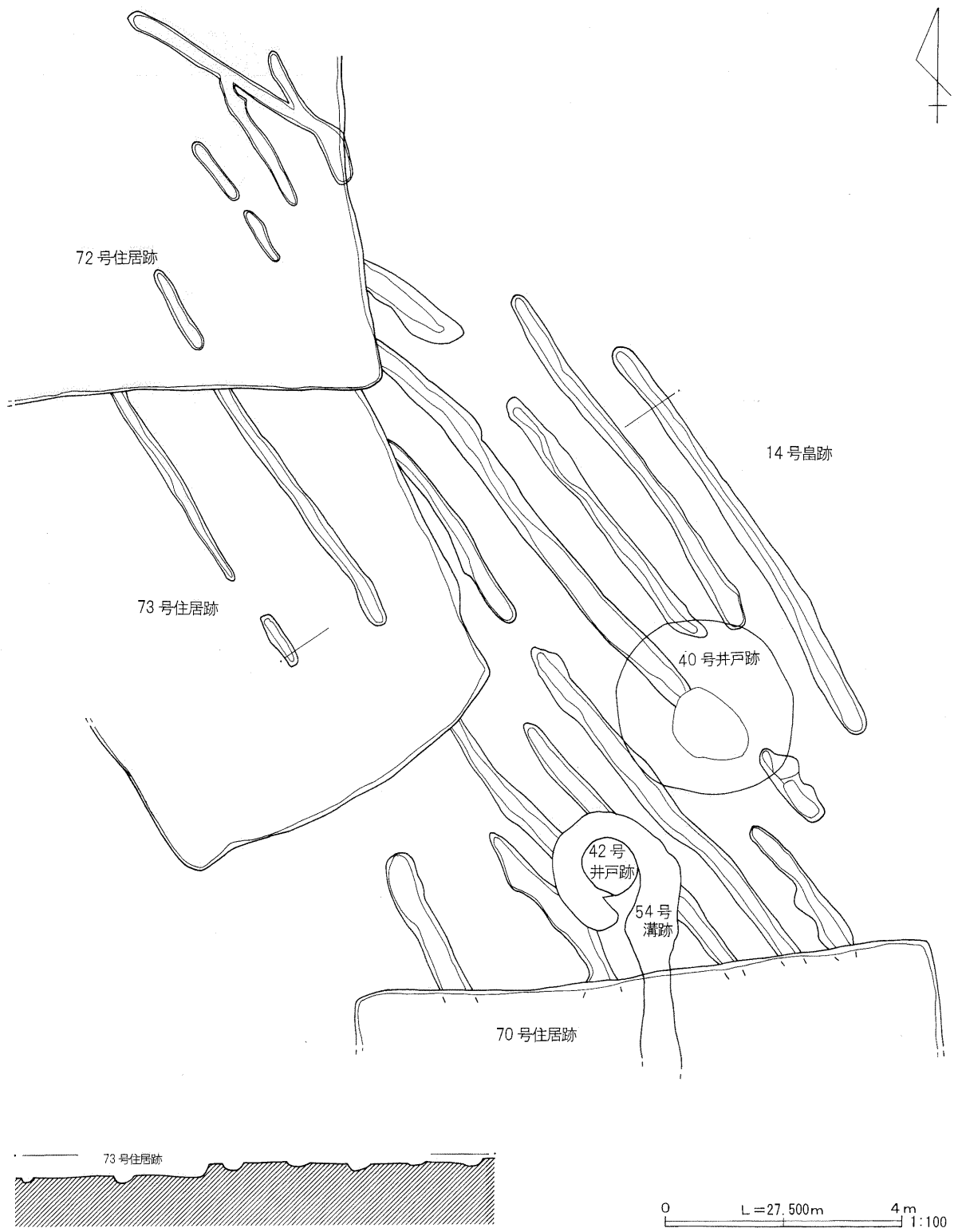
下段の畝間は、東西幅3.3mの間に、寸断されているものを流れの中で1条ととらえると、5条が確認される。全体の畝間の方位は、N-34°-Wを示す。長さは、49cmから5.9mと、大きな差がみられるが、分断されながらも連続するため、全体として畝間を成すものである。畝間幅は、12～18cmを計り、全体に細いことを特色とする。畝間の間隔は、75～90cm前後であるが、北東側で1条が間に入るため、35～40cm前後となる。また南端は、東に移行するに従って南へずれ、北端は東に移行するに従って北へずれるため、全体では、台形に近い範囲形態を示している。

72号・73号両住居跡（古墳時代前期）を切断し、上面には68号・71号・74号各住居跡（古墳時代後期）が位置している。

上段の畝間は、東西幅5.3m、南北8.8mの間に、寸断されているものを流れの中で1条ととらえると、9条が確認される。全体の畝間の方位は、N-42°-Wを示す。唯一切断されていない畝間の長さは、4.68mである。この長さが基準となり、分断されながらも連続するため、全体として、10mに及ぶ長さの畝間を成すものと思われる。畝間幅は、15～



第116図 B区13号畠跡及び出土遺物



第117図 B区14号畠跡

30cmを計り、25cm前後の部分が多い。下段に比してやや太いことを特色とする。畝間の間隔は、35cm前後の部分が多い。

70号住居跡（古墳時代前期）を切断しているが、72号・73号両住居跡（古墳時代前期）

との重複関係は確認されていない。また、40号・42号両井戸跡及び、54号溝跡にも切断されている。上面には64号・67号・68号・69号・71号・74号各住居跡（古墳時代後期）が位置している。

遺物は、検出されていない。

## 5 溝跡（河川跡）

B区における溝跡は、平成14年度・第5次調査で、34号から55号までの22条が調査されている（第118図）。大部分が第一確認面上位からの検出である。住居跡等、他遺構の上面に位置している場合が多いが、一部では他遺構を削平もしくは、切断している場合もある。また、遺物の出土が少ない。

F・G・H-9・10グリッドに亘っては、北々西から南々西行する河川跡がみられる。

河川跡は、そこに位置する住居跡を切断しており、埋没後に構築された住居跡はみられない。

- 34号溝跡** G-6からG-7グリッドに亘って、A区河川跡の上面に位置する。北側が調査区外に及ぶ。57号土坑を削平している。東から7.60mのところ南北に分岐し、全体の総延長は、南側12.4m、北側10.02mを計る。幅は、東端で0.50m、合流部分の最大幅1.98m、分岐した南側0.95m、北側が0.80mを計る。深さは、ほぼ均一で5cm前後と、浅い。全体でほぼ直線を成し、方位は、南側がN-90°-W、北側がN-80°-Wを示す。覆土は、褐色粘土層である。実測可能な遺物は出土していない。
- 35号溝跡** G-5からG-7グリッドに亘って、A区河川跡の上面に位置する。やや曲折はあるもののほぼ直線を成し、総延長は、10.6mを計る。幅は、0.60m前後、深さは、ほぼ均一で6~8cm前後と、浅い。方位は、N-87°-Wを示す。覆土は、オリーブ黒色粘土粒を含む黄色粘土層である。実測可能な遺物は出土していない。
- 36号溝跡** G-5からG-7グリッドに亘って、A区河川跡の上面に位置する。やや曲折はあるもののほぼ直線を成し、総延長は、13.8mを計る。幅は、0.45~0.60m前後、深さは、ほぼ均一で5cm前後と、浅い。方位は、N-87°-Wを示す。覆土は、オリーブ黒色粘土粒を含む黄色粘土層である。実測可能な遺物は出土していない。
- 37号溝跡** I-6グリッド、A区河川跡の上面に位置する。やや曲折はあるもののほぼ直線を成し、総延長は、4.4mを計る。幅は、0.40m前後、深さは、ほぼ均一で6cm前後と、浅い。方位は、N-24°-Wを示す。覆土は、酸化鉄を含む灰黄褐色シルト層である。実測可能な遺物は出土していない。
- 38号溝跡** F-7からI-7グリッドに亘って、A区河川跡の上面に位置する。南北両側が調査区外に及ぶ。南部で39号溝跡と合流する。合流地点よりやや北で、西に脹らみをもち、総延長は、現状で23.4mを計る。幅は、南側が細く0.45m、北側では太くなって1.40m前後、

最大1.8mを計る。深さは、ほぼ均一で25cm前後であるが、底面レベルは南側が低くなる。方位は、南側がN-4°-W、北側がN-4°-Wを示す。覆土は、青灰色粘土ブロックを中心に、多量の酸化鉄及び少量のマンガン粒を含む土層である。底面が酸化鉄層を成す。実測可能な遺物は出土していない。

**39号溝跡** F-7からI-7グリッドに亘って、A区河川跡の上面に位置する。南北両側が調査区外に及ぶ。南部で38号溝跡と合流する。合流地点よりやや北で、西に屈曲し、総延長は、現状で23.4mを計る。幅は、合流部分北側が太く1.3m前後、南北両側では細くなって0.40m前後、最小0.26mを計る。深さは、北側で40cm前後、南側で25cm前後であるが、底面レベルは南側がわずかに低くなる。方位は、南側がN-12°-W、北側がN-4°-Wを示す。覆土は、青灰色粘土ブロックを中心に、多量の酸化鉄及び少量のマンガン粒を含む土層である。底面が酸化鉄層を成す。実測可能な遺物は出土していない。

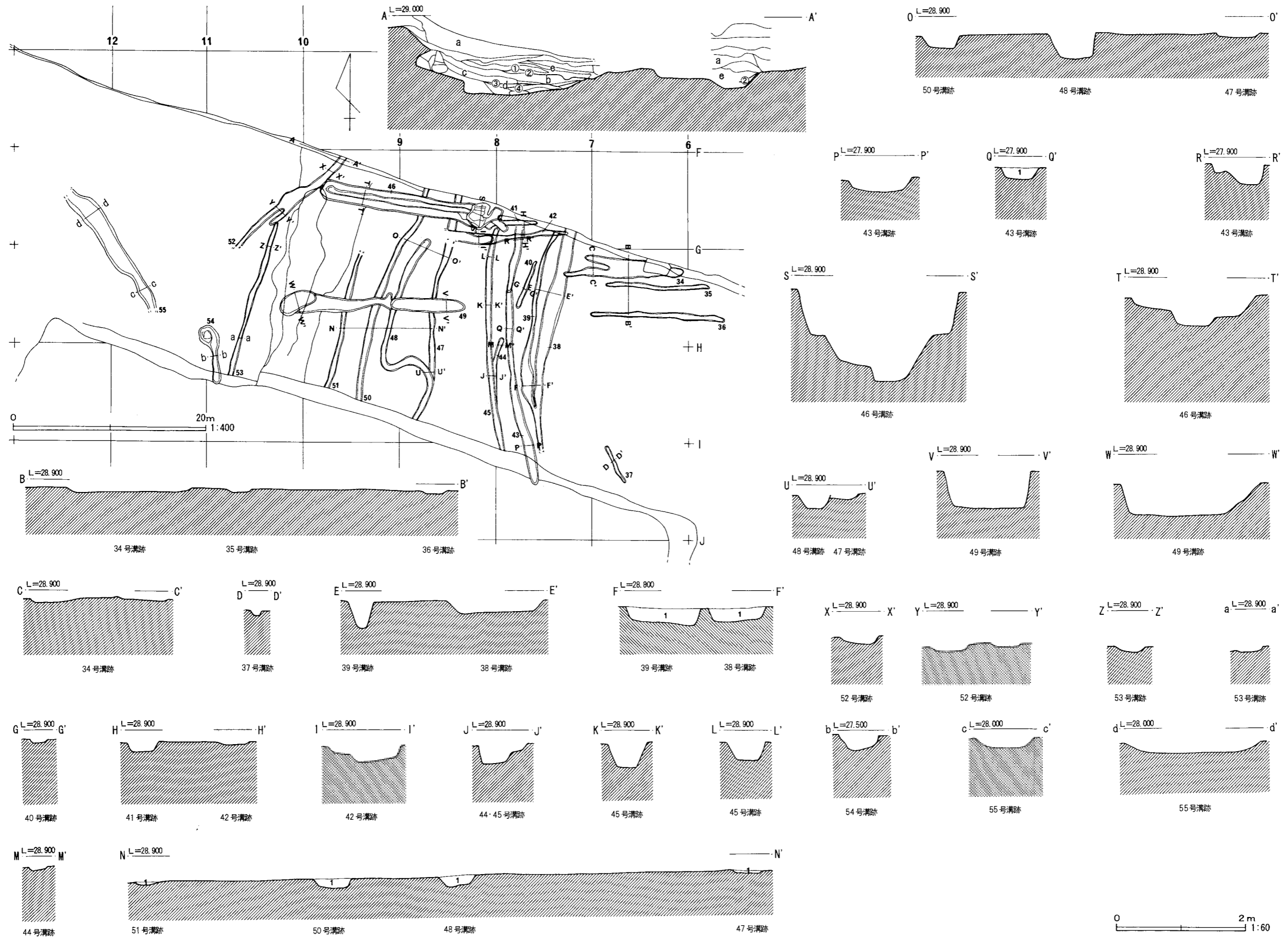
**40号溝跡** G-7グリッド、A区河川跡の上面に位置する。やや曲折はあるもののほぼ直線を成し、総延長は、5.3mを計る。幅は、南側が0.40m前後、北側が0.30m前後、深さは、ほぼ均一で5cm前後と、浅い。方位は、N-20°-Eを示す。覆土は、酸化鉄・マンガン粒を含むオリーブ褐色粘土層である。44号溝跡と一連の溝を構成していた可能性が高い。実測可能な遺物は出土していない。

**41号溝跡** F-7グリッド、A区河川跡の上面に位置する。43号溝跡を切断しているが、46号溝跡に切断されている。ほぼ直線を成し、総延長は、現状では3.7mを計る。幅はほぼ均一で、0.50m前後、深さもほぼ均一で15cm前後を計る。方位は、N-90°-Wを示す。覆土は、酸化鉄・マンガン粒を含む褐色粘土層である。実測可能な遺物は出土していない。

**42号溝跡** F-7からF-8グリッドに亘って、A区河川跡の上面に位置する。南北流する、38号・39号・43号・45号各溝跡を切断している。ただし、西端で重複している47号溝跡との前後関係は不明で、連続している可能性もある。やや蛇行するが、総延長は、現状では12.7mを計る。幅もやや増減するが、ほぼ0.50m前後で推移し、45号溝跡と重複するあたりから、一気に1.05mに拡大する。幅が拡大した部分は、2段となるが、深さは、ほぼ均一で、25cm前後を計る。方位は概ね、N-90°-Wを示す。覆土は、多量の酸化鉄・マンガン粒を含む黄褐色粘土層である。実測可能な遺物は出土していない。

**43号溝跡** F-7からI-7グリッドに亘って、A区河川跡の上面に位置する。第一確認面下位からの検出である。41号・42号両溝跡に切断されている。北側が調査区外に及ぶ。南側は、一応収束するものと判断されたが、さらに延伸する可能性もある。総延長は、現状では28.2mを計る。西側に屈曲している。屈曲部分では、北側の深さ30cm（幅80cm前後）であったものが、17cm（幅60cm前後）と、一旦浅くなる。そして、南へ移行するに従って深さを増し、25cm前後（幅100cm前後）となる。方位は、北側がN-10°-E、南側がN-10°-Wを示す。覆土は、多量の棒状酸化鉄・マンガン粒及び少量の炭化物を含む灰色粘土層である。実測可能な遺物は出土していない。

**44号溝跡** G-7からI-7グリッドに亘って位置する。45号溝跡に切断されている。やや西に膨らみをもつ。総延長は、現状では7.2mを計る。幅は、45cm前後～50cm前後、深さは、ほ



第118图 B区沟迹·河川迹

ほぼ均一で5cm前後と、浅い。方位は、北半が $N-20^{\circ}-E$ 、南半が $N-2^{\circ}-W$ を示す。覆土は、酸化鉄・マンガン粒を含むオリーブ褐色粘土層である。実測可能な遺物は出土していない。40号溝跡と一連の溝を構成していた可能性が高い。実測可能な遺物は出土していない。

**45号溝跡** F-7・8からI-7・8グリッドに亘って位置する。南側が調査区外に及ぶ。44号溝跡を切断しているが、42号溝跡に切断されている。43号溝跡とほぼ平行する。総延長は、現状では23.2mを計る。幅・深さともに大きな変化がなく、幅60~70cm前後、深さ28~35cmで推移している。方位は、北側が $N-10^{\circ}-E$ 、南側が $N-10^{\circ}-W$ を示す。覆土は、多量の酸化鉄及び少量のマンガン粒を含む青灰色粘土層である。底面が酸化鉄層を成す部分もみられる。実測可能な遺物は出土していない。

**46号溝跡** F-7からF-9グリッドに亘って、B区河川跡の上面に位置する。41号・47号・50号・52号各溝跡を切断している。ほぼ直線を成し、総延長は、20.0mを計る。幅は、1.90~2.00m前後、全体の深さは45cm前後であるが、2段となり、上段の深さは10~30cm前後となる。方位は、 $N-80^{\circ}-W$ を示す。東端は、3mほどの範囲で3段となる。深さも1.37mと深くなり、別遺構の感も呈したが、覆土が同一であるため、一遺構とした。覆土は、白色軽石粒・酸化鉄を多量に含む灰色粘土層である。実測可能な遺物は出土していない。

**47号溝跡** F-8からH-8グリッドに亘って位置する。北側が調査区外に及ぶ。42号・46号・49号各溝跡に切断されている。また南端は、48号溝跡に切断されている。やや蛇行し、総延長は、現状では19.95mを計る。幅は、40~80cm前後と狭広が激しい。深さは、7cm前後と浅い。覆土は、多量の酸化鉄及び少量のマンガン粒を含む灰白色粘土層である。底面が酸化鉄層を成す。実測可能な遺物は出土していない。

**48号溝跡** F-8からH-8・9グリッドに亘って位置する。南側が調査区外に及ぶ。49号溝跡に切断されている。また南部では、47号溝跡を切断している。S字状に蛇行し、総延長は、現状では24.00m前後を計る。幅は、50~80cm前後を計るが、75cm前後が大部分である。深さは、全体に20cm前後である。覆土は、多量の酸化鉄及び少量のマンガン粒を含む灰白色粘土層である。底面が酸化鉄層を成す。実測可能な遺物は出土していない。

**49号溝跡** G-8からG-10グリッドに亘って、B区河川跡の上面に位置する。47号・48号・50号・51号各溝跡を切断している。ほぼ直線を成し、総延長は、19.3mを計る。東側7.60m、及び西側3.9mの地点で段差をもつが、覆土が共通するため、一遺構とした。幅は、0.70~1.90m前後までと幅があるが、西側が太く、中央が狭い。深さは東側で60cm前後、西側で45cm前後、中央部で15cm前後である。中央部の方位は、 $N-90^{\circ}-W$ を示す。覆土は、白色軽石粒・酸化鉄を多量に含む灰色粘土層である。46号溝跡覆土に近似している。実測可能な遺物は出土していない。

**50号溝跡** F-8からH-9グリッドに亘って位置する。南北両側が調査区外に及ぶ。46号・49号両溝跡に切断されている。蛇行し、総延長は、現状では23.40mを計る。幅は、0.55~0.60m前後と一定している。深さは、15cm前後である。覆土は、多量の酸化鉄及び少量の

マンガン粒を含む青灰色粘土層である。底面が酸化鉄層（2層）を成す。実測可能な遺物は出土していない。

**51号溝跡** G-9からH-9グリッドに亘って位置する。南側が調査区外に及ぶ。49号溝跡に切断されている。ほぼ直線を成す。総延長は、北側部分も1号不明遺構の上面で不明確になるが、さらに北側への延伸がみられないため、現状では、14.6mを計るものである。幅は、50～60cm前後、全体の深さは7cmと、浅い。方位は、N-14°-Eを示す。覆土は、多量の酸化鉄及び少量のマンガン粒を含む青灰色粘土層である。底面が酸化鉄層を成す。実測可能な遺物は出土していない。

**52号溝跡** F-9からG-10グリッドに亘って位置する。北東側が調査区外に及ぶ。38号井戸跡及び46号溝跡に切断されている。ほぼ直線を成すが、南西部では、2条の溝が結合した形態を示している。総延長は、南東側溝が10.6m、北西側溝は、南西側部分が64号住居跡の上面で不明確になるものの、さらに南側への延伸がみられないため、現状では、10.0mを計るものである。幅は、南東側溝が80cm前後、北西側溝が40cm前後を計る。全体の深さは15cm前後である。全体方位は、N-38°-Eを示す。覆土は、多量の酸化鉄・マンガン粒を含む灰黄色粘土層である。実測可能な遺物は出土していない。

**53号溝跡** F-10からH-10グリッドに亘って位置する。南側が調査区外に及ぶ。ほぼ直線を成す。総延長は、現状では、16.4mを計る。幅は、40～60cm前後、全体の深さは7cmと、浅い。方位は、N-15°-Eを示す。覆土は、多量の酸化鉄及び少量のマンガン粒を含む青灰色粘土層である。底面が酸化鉄層を成す部分もみられる。実測可能な遺物は出土していない。

**54号溝跡** G-10・11からH-10グリッドに亘って位置する。南側が調査区外に及ぶ。第一確認面下位からの検出である。42号井戸跡の南側から始まり、西・北・東と周囲を一周し、再び南に戻ったところから、南側へ3.8m延伸している。42号井戸跡と同一遺構を構成しているものと思われる。幅は、南西側が狭く50cm、他は80cm前後である。深さは25cm前後である。延伸部分の方位は、N-5°-Wを示す。覆土は、多量の酸化鉄を含む灰色粘土層であり、42号井戸跡覆土第4層（第114図）に近似している。実測可能な遺物は出土していない。

**55号溝跡** F-12からG-11グリッドに亘って位置する。両端の終結部分が不明瞭であり、正確ではないが、総延長は、現状では、14.9mを計る。幅は、南東部で狭く80～90cm前後、中央部から北西部では1.8～2.2mを計る。全体の深さは15cm前後である。方位は、N-35°-Wを示す。覆土は、多量の酸化鉄及び少量のマンガン粒を含む青灰色粘土層である。底面が酸化鉄層を成す部分もみられる。覆土は、多量の酸化鉄・マンガン粒を含む黄褐色粘土層である。実測可能な遺物は出土していない。

**河川跡** F-9・10、G-9・10、H-9・10グリッドに亘って位置する。  
57号・58号・59号・66号・69号・70号各住居跡を切断している。  
上面幅は10m前後を計り、深さは、1m前後である。流行方位は、N-11°-Eを示す。



古墳時代後期遺物包含層（第118図・A—A'ライン土層図基盤層L=28.40～28.70mの間）上面からの掘り込みである。酸化鉄の成層が!・"・#・\$（第118図・A—A'ライン土層図中太線部分）の4面確認され、最低面を加えて、少なくとも5回の流行があったとされる。大部分が砂・礫・砂礫層であるが、面として確認される土層も、a層—灰色粘土・砂混在層、b層—黒褐色粘土・細砂混在層、c層—黒褐色シルト、d層—砂礫（3～5cm大礫）、e層—炭化物を含む細砂（いずれも第118図・A—A'ライン土層図中）の5層が確認されている。

切断されている住居跡の時期は、古墳時代前期（57号・70号両住居跡）、古墳時代後期の模倣杯出現以前の時期は66号住居跡）、古墳時代後期の模倣杯出現時期（58号・59号・69号各住居跡）であり、古墳時代後期の模倣杯全盛期以前である。

遺物は、小片のみであるが、切断されている住居跡と同時期に比定されるものである。

## 6 不明遺構

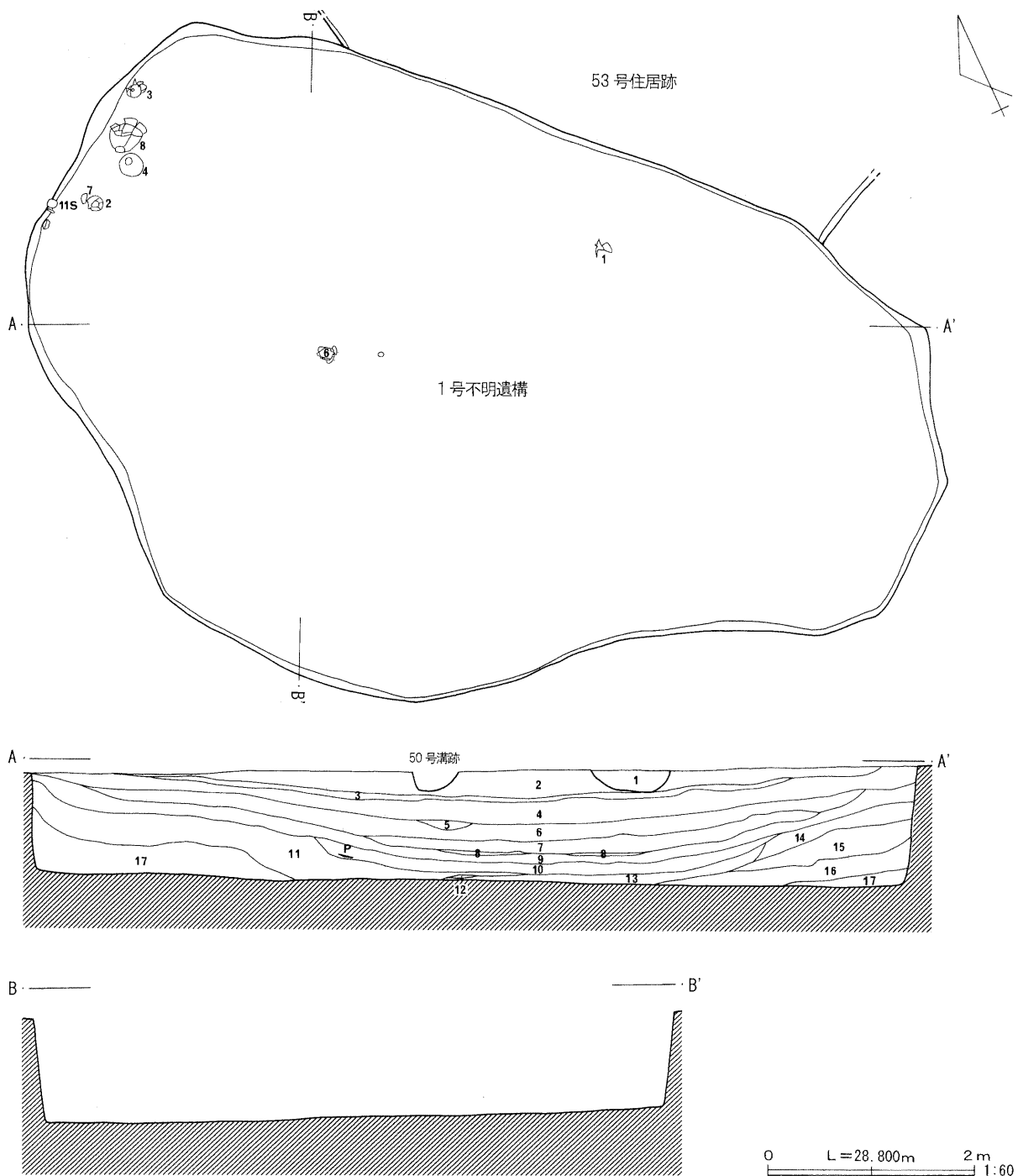
B区における不明遺構は、平成14年度・第5次調査で、1号が唯一調査されている。

**1号不明遺構** F—8・9、G—8・9グリッドに亘って位置している。

（第119図） 53号住居跡を切断し、55号住居跡を削平しているが、48号・49号・50号・51号各溝跡（第120図）によって削平されている。

形態は、隅円長方形を基本にしているが、南西辺が大きく張り出すため、不整形といわざるを得ない。長辺9.06m、短辺2.75m、張り出し部幅55.75mを計る。形態は不整であるものの、壁は、各辺共ほぼ垂直に落ち込み、底面も凹凸がほとんどみられず、直線を成している。ただし底面は、西隅を頂点として南東にむかて徐々に深まり、確認面からの深さは、西隅で0.95m、東南隅で1.25mを計る。

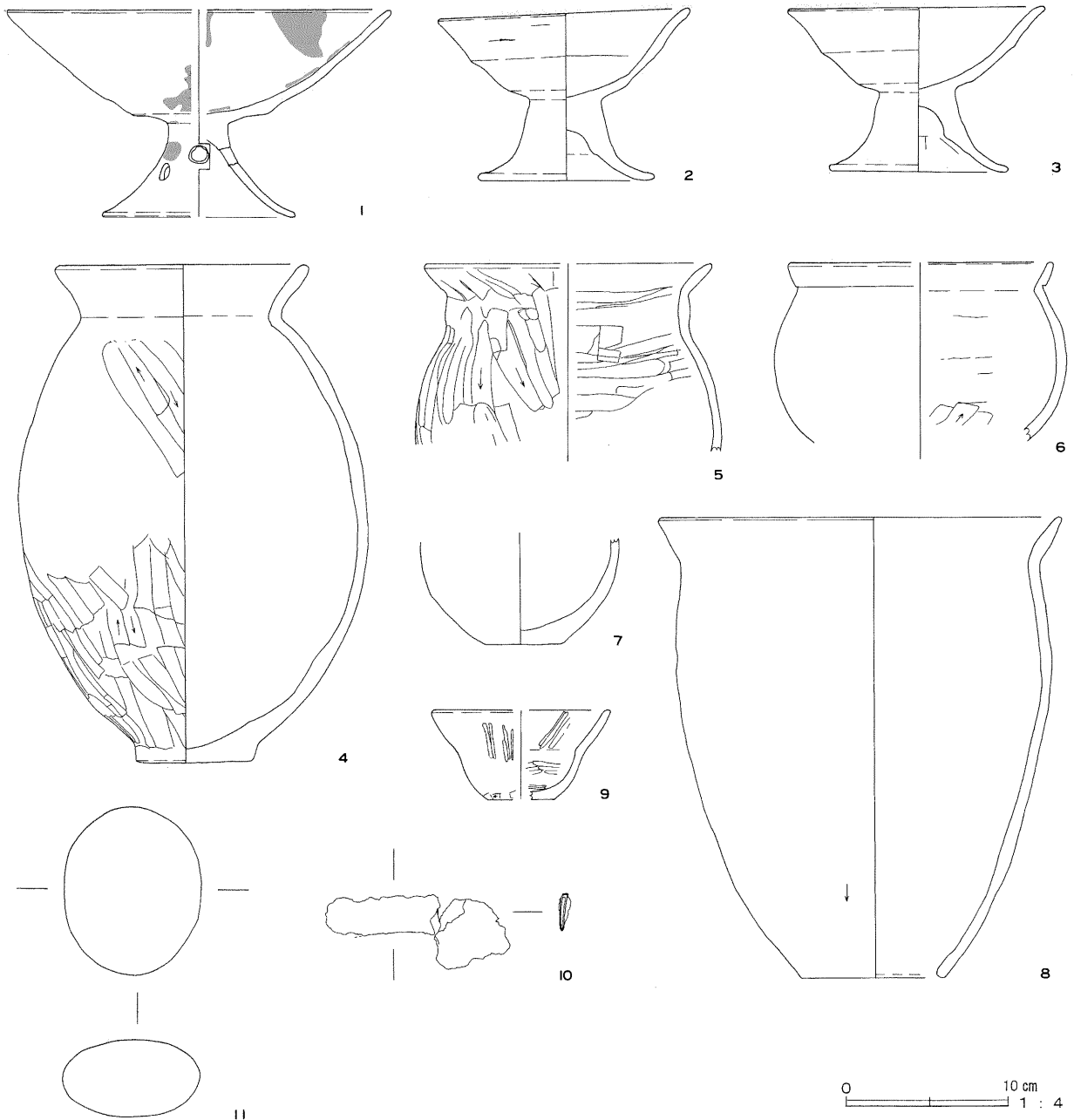
覆土は、上位から、多量のマンガン粒を含むにぶい黄褐色粘土層（第2層）、褐灰色粘土層（第3層）、多量の灰白色砂・マンガン粒を含む明黄褐色シルト層（第4層）、多量のマンガン粒及び少量の炭化物を含む黄褐色粘土層（第6層）、多量のマンガン粒を含むにぶい黄色粘土層（第7層）、多量の酸化鉄・炭化物を含む灰色粘土層（第9層）、多量のマンガン・粒酸化鉄・炭化物を含む灰色粘土層（第10層）、多量のマンガン粒・酸化鉄を含む灰色粘土層（第13層）が堆積している。また間層として、第4—6層間に多量の酸化鉄を含む黄灰色シルト層（第5層）、第7—9層間に上位に炭化物層をもつ灰白色粘土層（第8層）がみられる部分もある。また南東部の壁際では、下位から多量の酸化鉄及び少量の炭化物を含む暗灰色粘土層（第17層）、多量のマンガン粒を含む灰黄褐色粘土層（第16層）、少量のマンガン粒を含むにぶい黄色シルト層（第15層）、多量のマンガン粒及び少量の酸化鉄を含む暗灰黄色シルト層（第14層）が堆積し、北西側の壁際では、下位から多量の酸化鉄及び少量の炭化物を含む暗灰色粘土層（第17層）、多量のマンガン粒及び少量の炭化物を



- 1 灰白色(5Y 7/1)粘土。酸化鉄を多量、マンガン粒を少量含む。(48号溝跡)。
- 2 にぶい黄褐色(10YR 5/3)粘土。マンガン粒を多量含む。
- 3 褐色(7.5YR 4/1)粘土。
- 4 明黄褐色(2.5Y 6/0)シルト。マンガン粒、灰白色砂を多量含む。
- 5 黄灰色(2.5Y 6/1)シルト。酸化鉄を多量含む。
- 6 黄褐色(2.5Y 5/3)粘土。マンガン粒を多量、炭化物を少量含む。
- 7 にぶい黄色(2.5Y 6/4)粘土。マンガン粒を多量含む。
- 8 灰白色(7.5Y 7/2)粘土。上層は帯状に炭化物層。
- 9 灰色(7.5Y 5/1)粘土。酸化鉄、炭化物を多量含む。

- 10 灰色(N 6/0)粘土。マンガン粒、酸化鉄、炭化物を多量含む。
- 11 灰黄褐色(10YR 4/2)粘土。マンガン粒を多量、炭化物を少量含む。
- 12 黒色(10YR 2/1)粘土。炭化物層。
- 13 灰色(10Y 6/1)粘土。マンガン粒、酸化鉄を多量含む。
- 14 暗灰黄色(2.5Y 5/2)シルト。マンガン粒を多量、炭化物を少量含む。
- 15 にぶい黄色(2.5Y 6/4)シルト。マンガン粒を少量含む。
- 16 灰黄褐色(10YR 5/2)シルト。マンガン粒を多量含む。
- 17 暗灰色(N 3/0)粘土。マンガン粒、酸化鉄を多量、炭化物を少量含む。

第119図 B区1号不明遺構



第120図 B区1号不明遺構出土遺物

含む灰黄褐色粘土層（第11層）が堆積している。

遺物は、北西隅から、土師器高杯（2・3）、甕（4・7）、甗（8）、磨石（11）と集中し、中央付近からは、土師器高杯（1）、埴（9）、鉄鎌（10）等が、いずれも覆土中から出土している。

第59表 B区1号不明遺構出土遺物観察表(第120図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・高杯	(23.6)	(13.0)	(11.7)	②①⑥④③	②	にぶい黄橙	1/4	脚部穿孔(3孔2段)。脚内面天井部指頭によるナデツケの他全面ナデ。脚内面以外朱塗。
2	土師器・高杯	15.4	10.8	10.3	①②③⑥④	②	にぶい橙	一部欠	杯口縁部横ナデ、体部外面ナデ、内面指頭によるナデ、底面押圧、脚部全面ナデ。
3	土師器・高杯	15.6	10.5	10.7	①②③⑥④	②	にぶい橙	一部欠	全面ナデ。脚裾内面のみヘラナデ。
4	土師器・甕	15.3	31.4	7.1	①②④⑥③	②	にぶい橙	完形	口縁部横ナデ。胴部外面ケズリ、上位の大部分にナデが加わる、下位煤付着。内面ナデ、下位炭化物付着。二次加熱。
5	土師器・甕	(17.8)	—	—	①②⑥④③	②	浅黄	口縁部1/4	外面口縁部ヘラナデ、胴部ケズリ、一部ナデが加わる。内面口縁部ヘラナデ、肩部木口状工具によるナデ、中位横のナデ。
6	土師器・甕	(16.0)	—	—	②④①⑥③	②	浅黄	上位1/3	外面口縁部木口状工具によるナデ、胴部ナデ、全面吸炭、赤色化、剥離した部分多い。内面木口状工具によるナデ、下位ケズリ、一部吸炭、二次加熱。
7	土師器・甕	—	—	4.5	⑥①②③	②	にぶい橙	底部のみ	外面ナデツケ、煤付着。内面ナデ、中位炭化物付着。
8	土師器・甕	24.6	29.0	8.5	②③④①⑥	②	浅黄	ほぼ完形	
9	土師器・埴	(10.8)	(5.6)	(4.0)	①⑥②④③	②	橙	1/3	外面ナデの後口縁～括れ部にかけてミガキ、底部周辺ケズリ。内面ナデの後口縁体部中位、底面の三ヶ所にミガキ。
10	鉄鎌	長さ— 幅2.3 厚さ—						—	
11	磨石	長さ10.5 幅8.6 厚さ4.3						—	



第121图 C区检出遺構配置图

## IV C区の遺構と遺物

C区において、平成14年度・第5次調査で検出された遺構は、住居跡が57軒、畠跡が2ブロック、土坑40基、井戸跡1基、1号溝跡である。遺構の分布は、B区に接する調査区東半地域では密な分布をみせるものの、西は地域では疎となる。本調査区より西側への遺構の拡がり、薄いものと思われる（第121図）。

### 1 住居跡

住居跡は、28号から83号の56軒が検出されている。また、S-19グリッドでは、炭化物とともに、遺物の集中がみられた。遺構の様相は不明であるが、住居跡であった可能性もあるため、一応この項でとりあげることとする（84号・本跡を加えて57軒となる）。分布状況は、特にB区に接する北東隅区域では、全ての住居跡が重複し、密な状況を呈している。また、B区に接する東側中・南部区域では、住居跡数は多いものの、重複している住居跡は少ない。さらに西の地域では、住居跡数そのものが減少している。おおよそ、本調査区をもって、住居跡群の西限となるものと思われる。

**28号住居跡** E-12グリッドに位置する。第二確認面からの検出である。

(第122図) 29号住居跡を切断しているが、31号住居跡及び16号畠跡に切断されている。

北辺6.30m、東辺6.05m、南辺 $1.30 + \alpha$ m、西辺 $2.65 + \alpha$ mを計る。各角が直角を成さず、北辺が大きく膨らみ、さらに東西両辺が南側で狭まる様相を呈することから、不整形ではあるが、北辺を底辺とした台形を基本としていると思われる。主軸方位は、 $N-15^{\circ}-E$ を示す。

壁は、ほぼ垂直的に立ち上がり、掘り込み確認面から床面までの深さは、40cm前後である。床面は、わずかに凹凸がみられるものの安定している。床面上にピット、炉等は検出されていない。

覆土は、酸化鉄・マンガン粒を含むオリーブ褐色シルト層である。

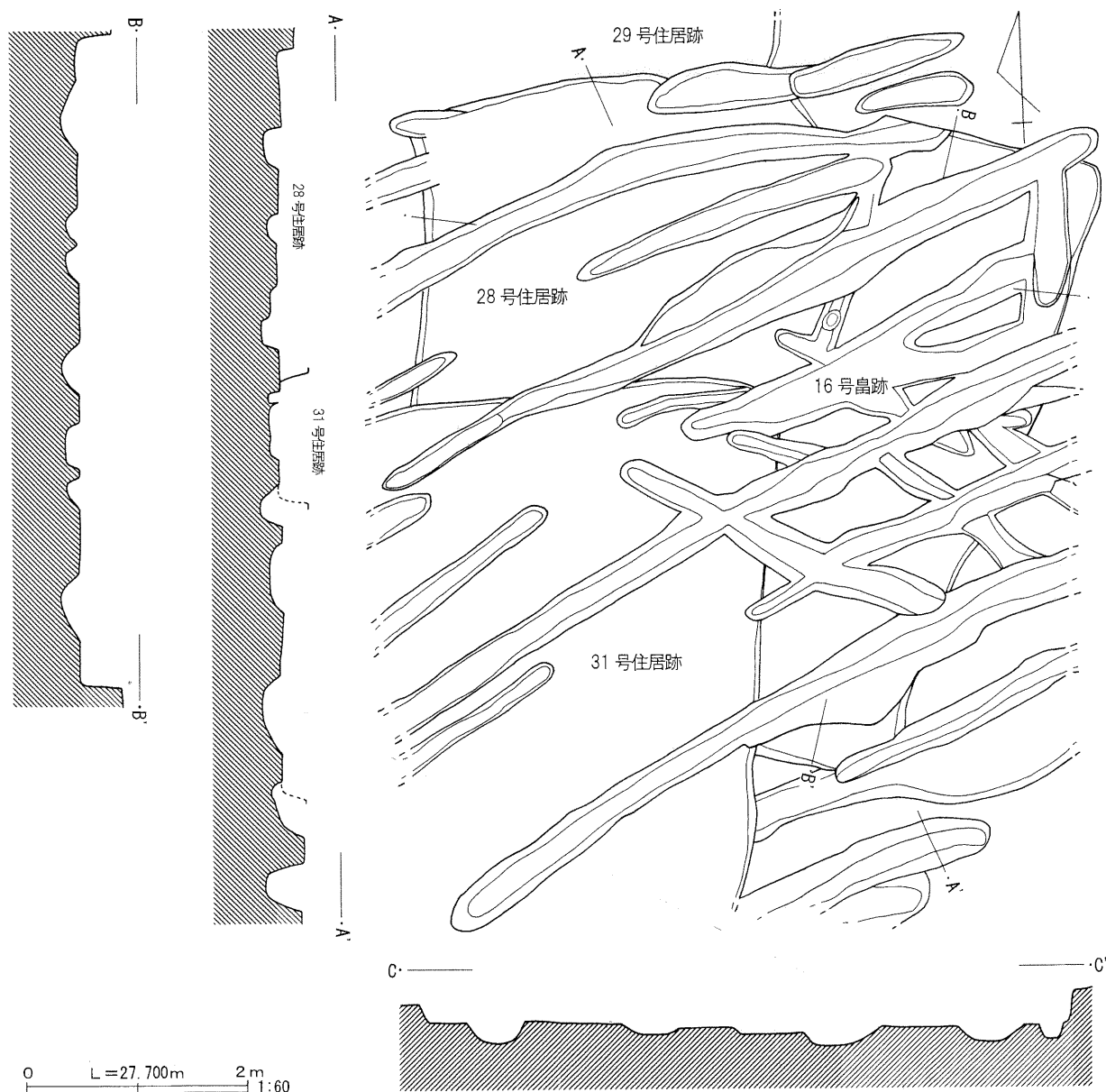
遺物は、磨耗した土師器小片が出土したのみで、図示可能なものはない。

**29号住居跡** E-12グリッドに位置し、北側は調査区外に及んでいる。第二確認面からの検出である。  
(第123図) 。

28号・31号両住居跡及び16号畠跡に切断され、30号住居跡に上面を削平されている。

いずれの辺も計測不能であるが、現状では、北辺 $4.90 + \alpha$ m、東辺 $1.20 + \alpha$ m、南辺 $0.90 + \alpha$ m、西辺のみほぼ計測可能で $6.40 + \alpha$ mを計る。各角が直角を成さず、東西両辺が南側で狭まる様相を呈することから、不整形ではあるが、北辺を底辺とした台形を基本としていると思われる。主軸方位は、 $N-0^{\circ}-E$ を示す。

壁は、ほぼ垂直的に立ち上がり、掘り込み確認面から床面までの深さは、20cm前後で



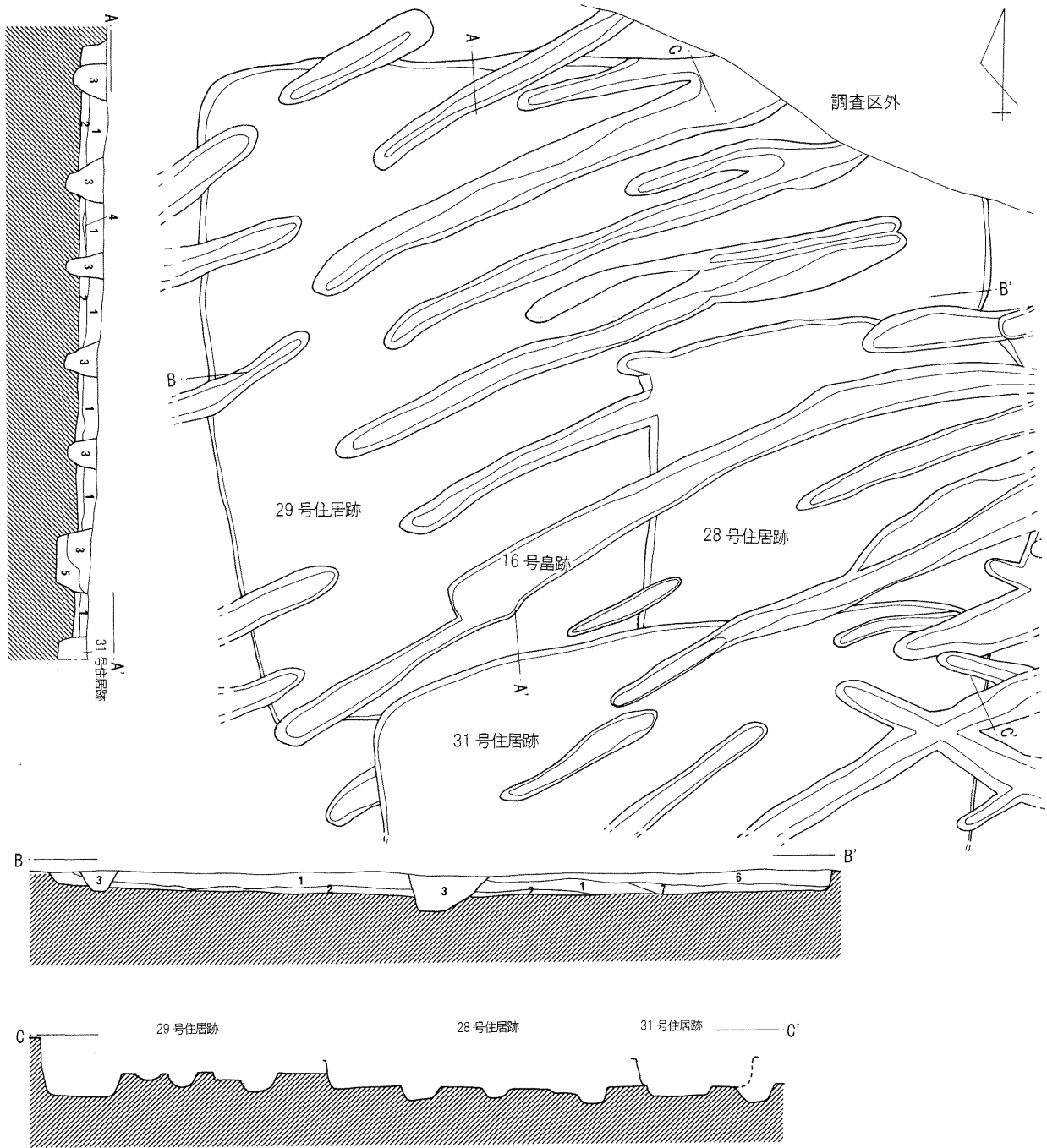
第122図 C区28号住居跡

ある。床面は、わずかに凹凸がみられるものの安定している。床面上にピット、炉等は検出されていない。

覆土は、上層が、多量の酸化鉄を含む浅黄色粘土層（第1層）であり、下層が、第1層をブロック状に含むオリブ黄色粘土層（第2層）である。なお、両層の間には、灰黄褐色粘土層（第4層）の堆積している部分もみられる。

遺物は、磨耗した土師器小片が出土したのみで、図示可能なものはない。

**30号住居跡** E-12グリッドに位置し、北側は調査区外に及んでいる。第一確認面からの検出である（第124図）。



- 1 浅黄色(7.5Y 7/3)粘土。酸化鉄を多量含む。
- 2 オリーブ黄色(5Y 6/3)粘土。1層の土が混在する。
- 3 黄灰色(2.5Y6/1)粘土。酸化鉄を多量含む。
- 4 灰黄褐色(10YR 6/2)粘土(やや砂質)。
- 5 オリーブ黄色(5Y 6/3)粘土。砂質土、酸化鉄を多量含む。
- 6 灰黄色(2.5Y 6/2)シルト。マンガン粒を少量含む。
- 7 1層と6層が混在する。

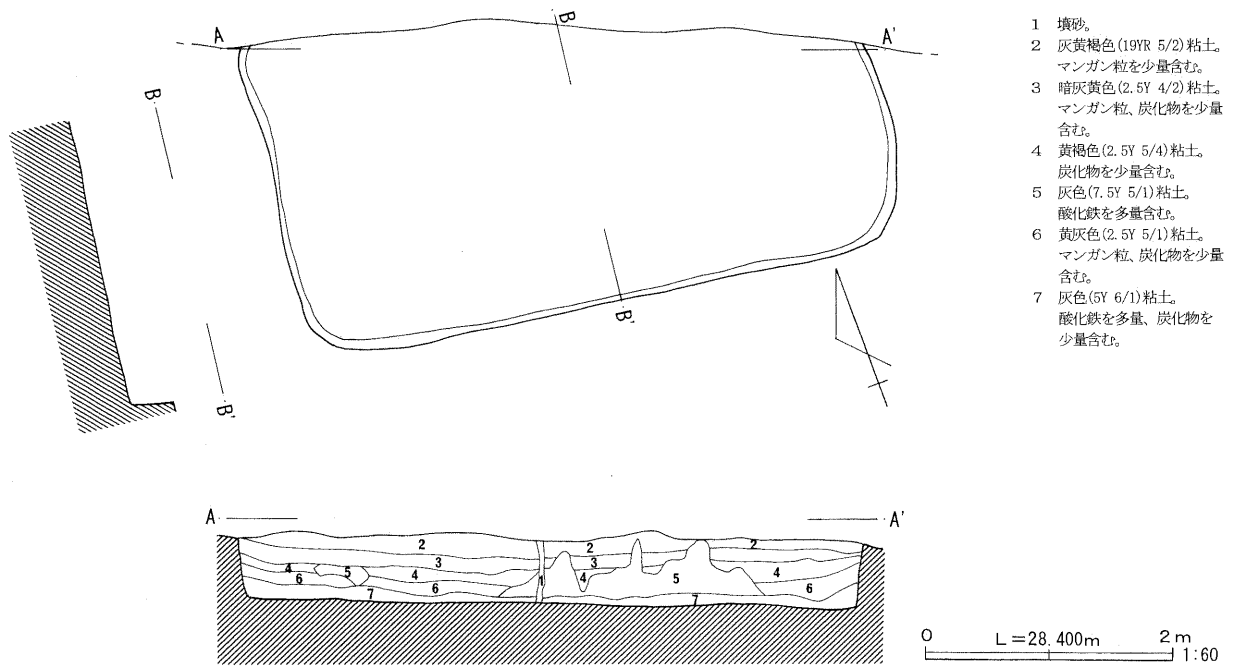
0 L=27.700m 2m 1:60

第123図 C区29号住居跡

29号住居跡及び16号畠跡の上面を削平している。

規模・形態共に不明であるが、現状では、東辺 $1.65 + \alpha$  m、南辺4.80m、西辺 $2.10 + \alpha$  mを計る。各角がほぼ直角を成し、西辺が北辺へと直角に連続する様相を呈することから、





第124図 C区30号住居跡

南辺を長辺、西辺を短辺とした長方形を呈していると思われる。長軸方位は、N-80°-Wを示す。

壁は、ほぼ垂直的に立ち上がり、掘り込み確認面から床面までの深さは、55cm前後である。床面は、わずかに凹凸がみられるものの、踏み固められた面もあって、安定している。床面上にピット、カマド等は検出されていない。

覆土は、上位から、少量のマンガン粒を含む肺黄褐色粘土層（第2層）、少量のマンガン粒・炭化物を含む暗灰黄色粘土層（第3層）、少量の炭化物を含む黄褐色粘土層（第4層）、少量のマンガン粒・炭化物を含む黄灰色粘土層（第6層）、多量の酸化鉄及び少量の炭化物を含む灰色粘土層（第7層）が堆積している。なお、第7層上には、投入土の様相を呈する、多量の酸化鉄を含む灰色粘土層（第4層）が、かなりの量堆積している。

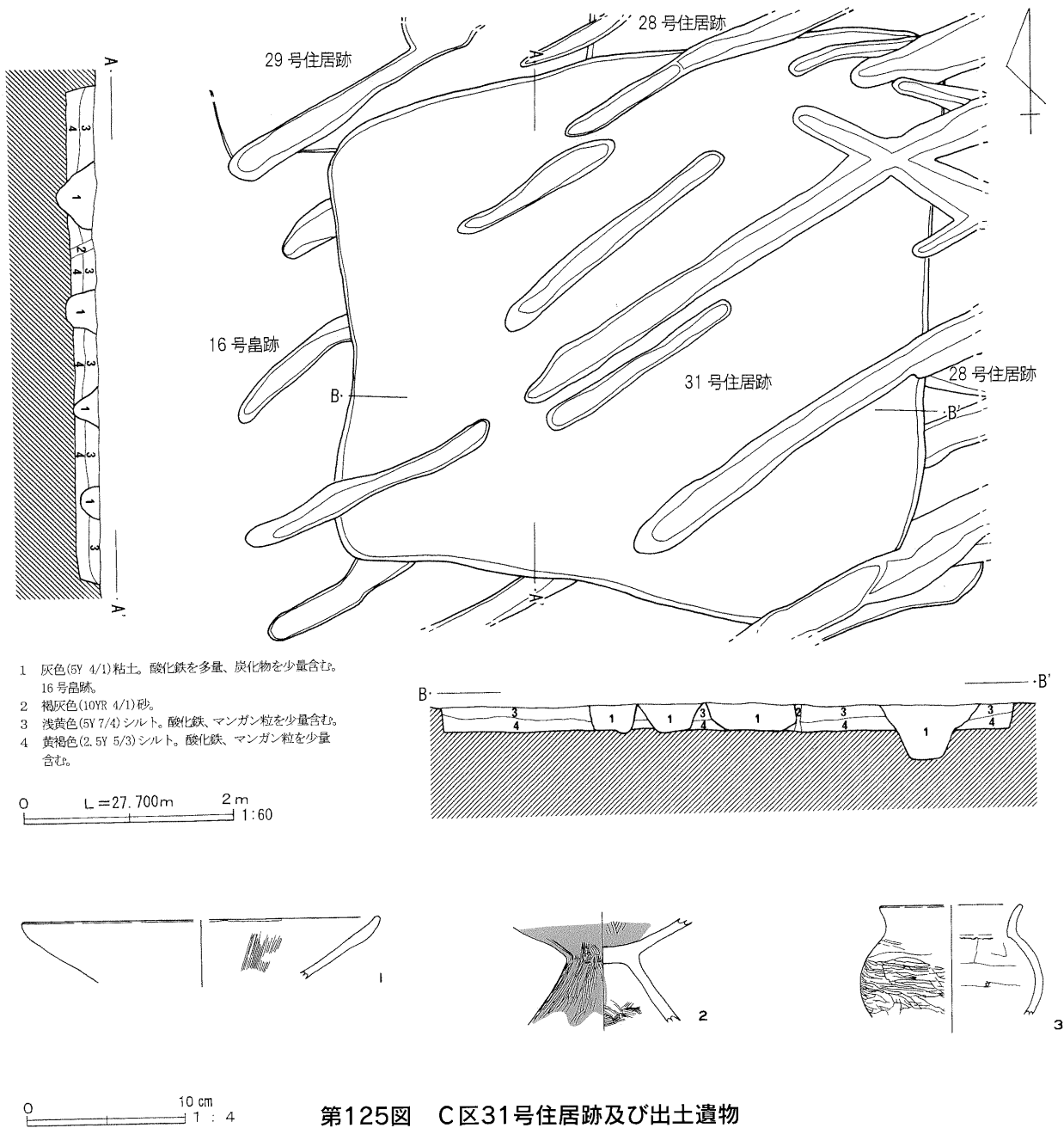
遺物は、磨耗した土師器小片が出土したのみで、図示可能なものはない。

**31号住居跡** E-12からF-12グリッドに亘って位置する。第二確認面からの検出である。

(第125図) 28号・29号両住居跡を切断しているが、16号畠跡に切断されている。

切断された箇所が多く、規模・形態共に不明であるが、現状では、北辺5.60+αm、東辺4.55+αm、南辺3.80+αm、西辺4.00mを計る。東辺を底辺とした台形を呈していると思われる。主軸方位は、N-88°-Wを示す。

壁は、ほぼ垂直的に立ち上がり、掘り込み確認面から床面までの深さは、24cm前後である。床面は、わずかに凹凸がみられるものの、踏み固められた面もあって、安定している。床面上にピット、カマド等は検出されていない。



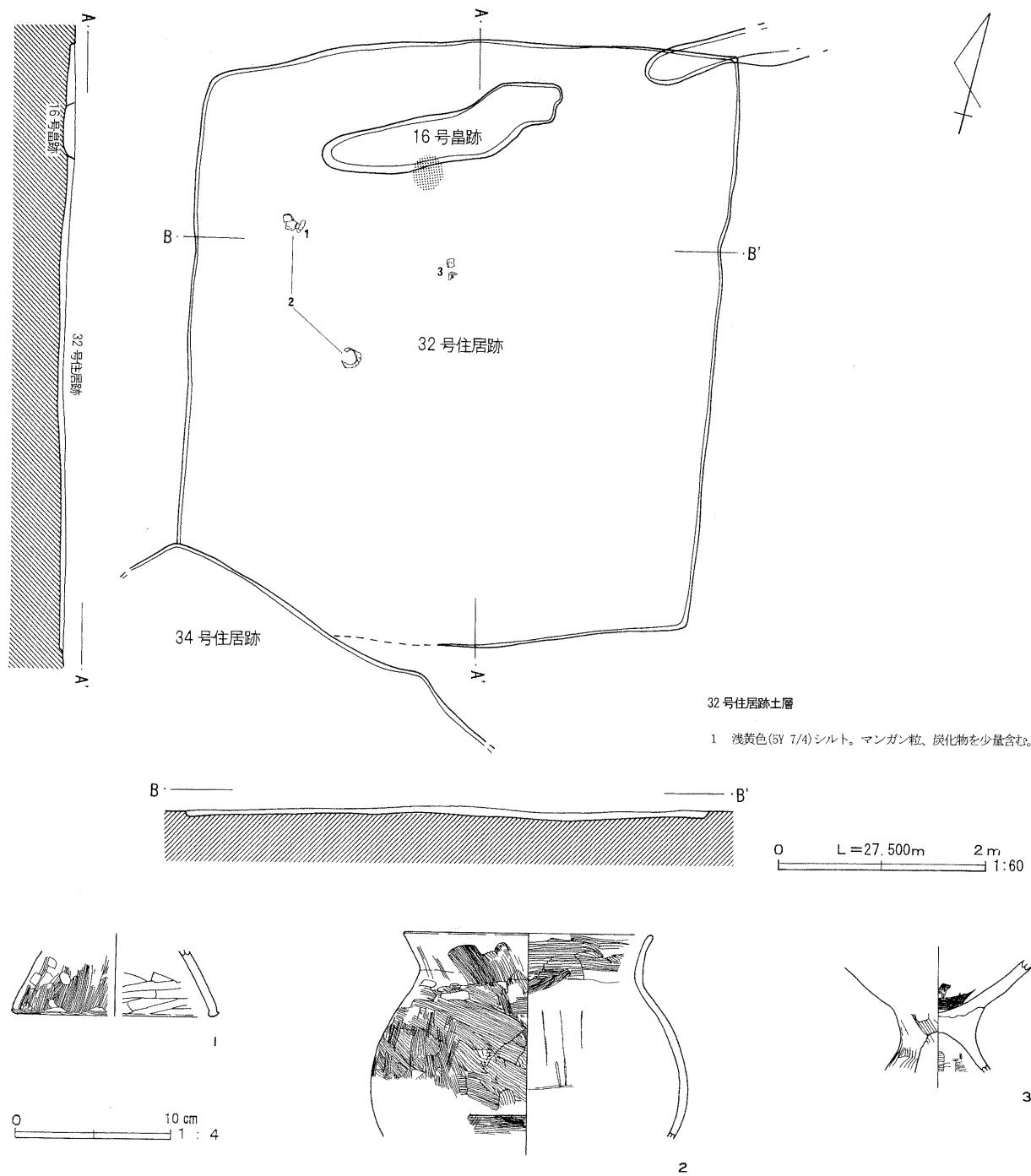
第125図 C区31号住居跡及び出土遺物

覆土は、上層に、少量のマンガン粒・酸化鉄を含む浅黄色シルト層（第3層）、下層に、少量のマンガン粒・酸化鉄を含む黄褐色シルト層（第4層）が堆積している。

遺物は、床面上から、土師器高杯（1・2）、甕（3）が出土している。

第60表 C区31号住居跡出土遺物観察表（第125図）

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・高杯	(22.5)	—	—	①④②⑥	②	橙	口縁部 1/5	内面放射状のミガキ。内外面大部分表面磨滅。内面吸炭。
2	土師器・高杯	—	—	—	④①②	②	にぶい黄橙	接合部のみ	外面通しの縦ミガキ。内面ミガキ後一部ナデ。脚部内面以外朱塗。剥落した部分が多い。
3	土師器・甕	(9.0)	—	—	②③④①	②	浅黄橙	1/3	口縁部横ナデ。胴部外面横のミガキ、内面上位木口状工具のナデ、下位ナデツケ様ナデ。内面全面炭化物付着。



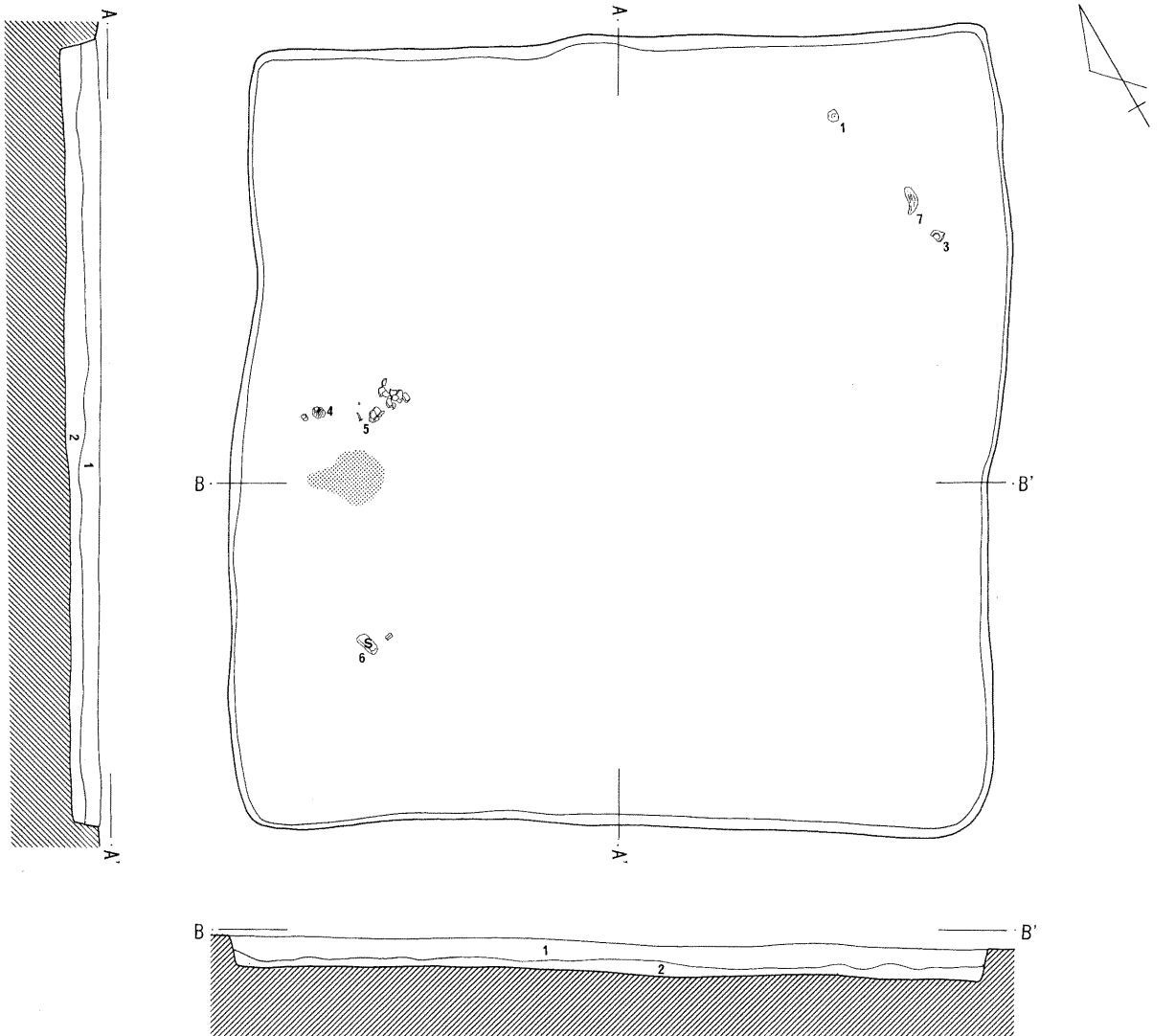
第126図 C区32号住居跡及び出土遺物

第61表 C区32号住居跡出土遺物観察表 (第126図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・高杯	—	—	(13.2)	②③④①	②	にぶい橙	脚部下位のみ	外面縦の刷毛目の後一部横のナデ。内面上位斜のナデ、下位木口状工具によるナデ。端部矩形、平坦面に刷毛目。一部吸炭。内面炭化物付着。
2	土師器・台付甕	16.0	—	—	⑥②①③④	②	橙	上位のみ	口唇部横ナデ。外面口縁～括れ部にかけて縦、上位斜め又は縦、下位横の刷毛目。内面口縁～括れ部横の刷毛目、胴部横の木口状工具によるナデ。吸炭。外面煤付着。
3	土師器・台付甕	—	—	—	⑥①③④	②	明赤褐	胴底部のみ	胴部外面ナデ、内面ナデツケ、底面のみ横の連続刷毛目。内面全面吸炭。炭化物付着。二次加熱。脚部外面縦の刷毛目の後縦のケズリ様ナデ。内面上位ナデツケ、下位横の連続刷毛目。

**32号住居跡** F-12グリッドに位置する。第二確認面からの検出である。  
 (第126図) 34号住居跡及び16号畠跡に切断され、43号住居跡に削平されている。上面に33号住居跡が位置している。

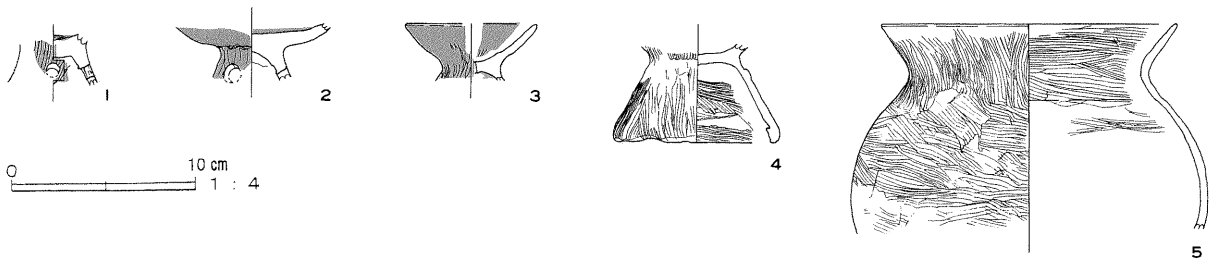
北辺5.15m、東辺5.45m、南辺3.35+ $\alpha$ m、西辺4.50+ $\alpha$ mを計る。各角がほぼ直角を成すことから、正方形に近い長方形を呈していると思われる。主軸方位は、N-



33号住居跡土層

- 1 黄褐色(10YR 5/8)粘土。マンガング粒をやや多量、炭化物を少量、褐灰色粘土粒を含む。
- 2 にぶい黄褐色(10YR 5/4)粘土。マンガング粒をやや多量、炭化物、焼土、褐灰色粘土粒を含む。

0 L=28.000m 2m 1:60



第127図 C区33号住居跡及び出土遺物

第62表 C区33号住居跡出土遺物観察表 (第127図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・高杯	—	—	—	①②③⑥	②	にぶい黄橙	脚上位のみ	脚部四方透かし。杯部内面及び脚部外面磨滅した部分多い。外面縦のミガキ、内面ナデ。杯部内外面、脚部外面朱塗。
2	土師器・高杯	—	—	—	③⑥①④	②	橙	接合部のみ	杯部大部分磨滅。脚部外面縦のミガキ、内面ナデツケ。杯部全面及び脚部外面朱塗。
3	土師器・器台	(7.2)	—	—	⑥③①④	②	にぶい赤	上位1/5	受台部外面ナデ、内面口唇部ナデ、底面ミガキ。接合部外面縦の刷毛目、内面ナデ。全面朱塗。
4	土師器・台付甕	—	—	9.0	①②③④	②	明赤褐	台部のみ	底面吸炭。外面縦、内面横の刷毛目。二次加熱。
5	土師器・台付椀	16.0	—	—	⑥①②③④	②	橙	上位3/4	外面口唇部～括れ部縦、胴部上位横の刷毛目、口唇部横ナデ。内面口縁部～括れ部(一部肩まで)横の刷毛目、胴部横のナデ。外面一部炭化物付着。二次加熱。
6	砥石	長さ 19.6 幅 9.0 厚さ 7.2 重さ 1,880g						—	
7	鉄滓	写真のみにて未計測						—	
8	砥石	長 17.1 幅 6.1 厚さ 6.2 重さ 1,083g						—	

14° -Wを示す。

壁は、床上5cm程が残存しているのみであり詳細は不明である。床面は、わずかに凹凸がみられるものの安定している。床面上に、ピットは検出されていない。

炉は、中央と北壁の間に設置されている。卵形を呈し、径40×30cmを計る。

覆土は、少量のマンガン粒・炭化物を含む浅黄色シルト層が堆積している。

遺物は、土師器台杯甕（1～3）、礫等が出土している。

**33号住居跡** F-12・13からG-12・13グリッドに亘って位置する。第一確認面下位からの検で(第127図) ある。

34号・43号・48住居跡を削平しており、下面に32号住居跡が位置する。

北東辺6.30m、南東辺6.90m、南西辺6.25m、北西辺6.65mを計る。各角がほぼ直角を成し、正方形を呈する。主軸方位は、N-60° -Wを示す。

壁は、ほぼ垂直的に立ち上がり、掘り込み確認面から床面までの深さは、27cm前後である。床面は、わずかに凹凸がみられるものの、踏み固められた面もあって、安定している。床面上に、ピットは検出されていない。

炉は、中央と北西壁の中間、やや壁寄りに設置されている。洋梨形を呈し、長さ75cm、球部は径45cmを計る。焼土の厚さは、1cm以下である。

覆土は、上層には、マンガン粒・炭化物・褐灰色粘土粒を含む黄褐色粘土層（第1層）、下層には、マンガン粒・炭化物・焼土・褐灰色粘土粒を含む黄褐色粘土層（第2層）が堆積している。

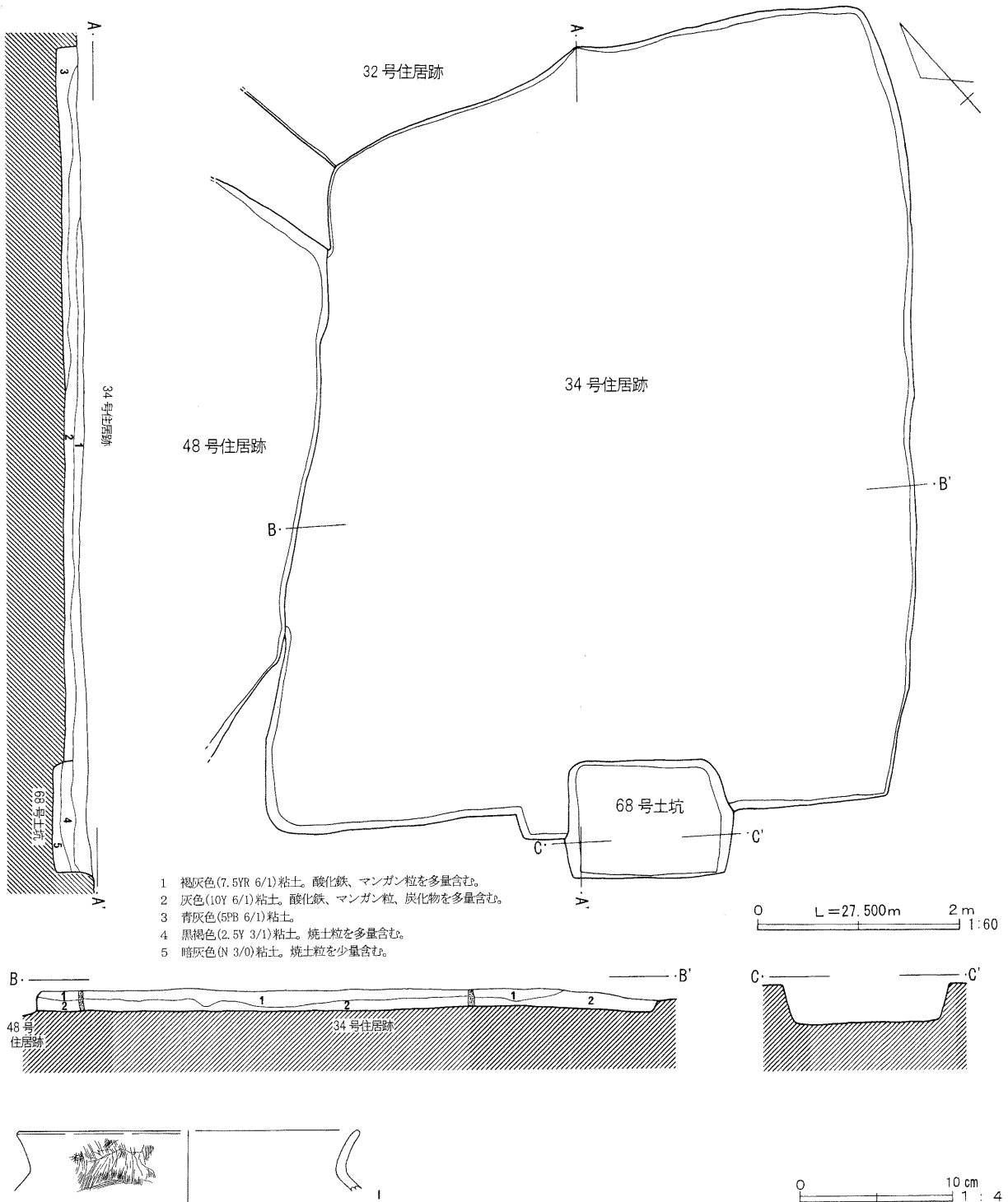
遺物は、炉脇から、土師器台杯甕（4・5）、砥石と思われるが擦痕の不明瞭な礫（6）が、また東隅からは、土師器高杯（1・2）、器台（3）、礫（7）等が出土している。

第63表 C区34号住居跡出土遺物観察表 (第128図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・甕	(22.5)	—	—	①⑥③④	②	浅黄橙	口縁一部のみ	口縁外面縦の刷毛目の後一部ナデ、括れ～肩部横の刷毛目。口縁内面水拭き。内外面共吸炭。

**34号住居跡** F-12・13からG-12・13グリッドに亘って位置する。第二確認面からの検出である。  
 (第128図) 32号住居跡を切断しているが、48号住居跡及び68号土坑に切断されている。また、  
 33号住居跡に削平されている。

北東辺5.50m、南東辺7.82m、南西辺6.15m、北西辺6.65mを計る。各辺長が異な



第128図 C区34号住居跡、68号土坑及び34号住居跡出土遺物

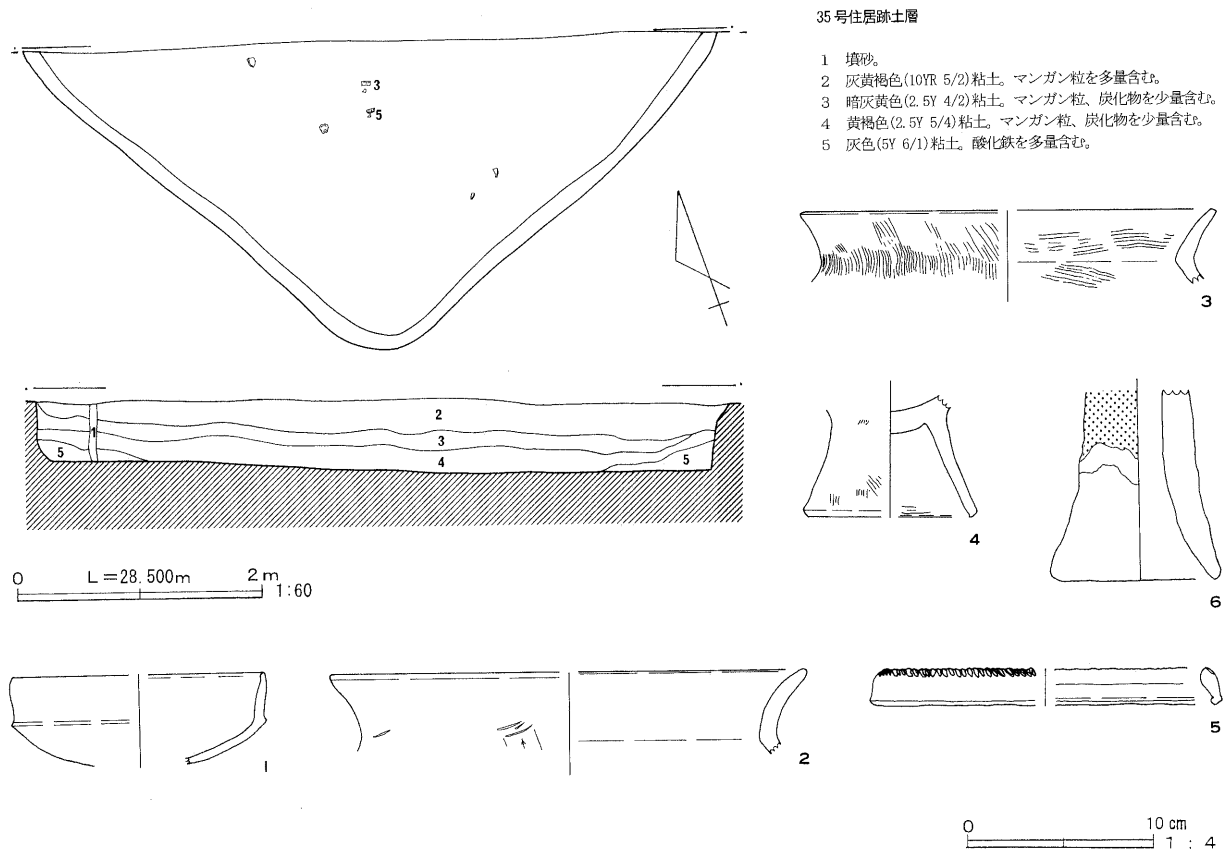
り不整形であるが、南西辺に伴う角がほぼ直角を成し、長方形を基本としていると思われる。主軸方位は、N-33°-Wを示す。

壁は、ほぼ垂直的に立ち上がり、掘り込み確認面から床面までの深さは、22cm前後である。床面は、凹凸が激しく、踏み固められた面もなく、不安定である。床面上に、ピット、炉等は検出されていない。

覆土は、上層には、多量のマンガン粒・酸化鉄を含む褐灰色粘土層（第1層）、下層には、多量のマンガン粒・炭化物・酸化鉄を含む灰色粘土層（第2層）が堆積している。また北西壁下には、最下層として、青灰色粘土層（第3層）が堆積している。

遺物は、覆土中から、わずかに土師器甕口縁部（1）が出土したのみである。

**35号住居跡** D-13からE-13グリッドに亘って位置し、北側は調査区外に及んでいる。第一確認（第129図）面からの検出である。



第129図 C区35号住居跡及び出土遺物

第64表 C区35号住居跡出土遺物観察表（第129図）

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・杯	(13.5)	—	—	③①②	②	橙	1/3	全面にナデが加わる。
2	土師器・甕	(25.8)	—	—	③⑥①④	②	にぶい橙	口縁部1/5のみ	一部吸炭。
3	土師器・甕	(22.4)	—	—	⑥③①④	②	橙	口縁部1/5のみ	外面口縁～肩部にかけて縦刷毛目後口唇部横ナデ。内面磨滅しており詳細不明、横刷毛目の痕跡。
4	土師器・台付甕	—	—	(9.5)	③②①	②	にぶい橙	脚部1/4のみ	全体に磨滅し整形不詳であるが外面縦、内面裾横の刷毛目、上位ナデツケ。
5	環状土製品	(17.2)	2.0	(18.2)	③①②⑥④	②	明赤褐	1/7	
6	羽口	—	—	(8.3)	②①③④	②	褐灰	1/2	

36号・37号両住居跡を削平している。また、下位には16号畠跡が位置している。

南隅部が検出されたのみであり、規模・形態共に不明である。現状では、南東辺・南西辺共に $4.00 + \alpha$  mを計る。角が直角を成し、正方形を基本とした形態を呈するものと思われる。

壁は、ほぼ垂直的に立ち上がり、掘り込み確認面から床面までの深さは、55cm前後である。床面は、やや凹凸がみられるものの、安定している。床面上に、ピット等は検出されていない。

カマドも検出されていない。

覆土は、上層から、多量のマンガン粒を含む灰黄褐色粘土層（第2層）、少量のマンガン粒・炭化物を含む暗灰黄色粘土層（第3層）、少量のマンガン粒・炭化物を含む黄褐色粘土層（第4層）、壁際には多量の酸化鉄を含む灰色粘土層（第5層）が堆積している。

遺物は、第4層中から土師器杯（1）、甕（2）、環状土製品（5）、羽口（6）が出土し、第3層中からは、土師器台杯甕（3・4）が出土している。

**36号住居跡** D-13からE-13グリッドに亘って位置し、北側は調査区外に及んでいる。第二確認面からの検出である。

37号住居跡に切断され、35号住居跡に削平されている。16号畠跡との重複関係は、つかめていない。

北東辺 $2.75 + \alpha$  m、南東辺4.90m、南西辺2.50mを計る。南東辺に伴う角が直角を成さないため、不整形であると言わざるを得ない。北東辺軸方位は、N-27° -Wを示す。

壁は、ほぼ垂直的に立ち上がり、掘り込み確認面から床面までの深さは、18cm前後である。床面は、凹凸が激しく、踏み固められた面もなく、不安定である。床面上に、ピット、炉等は検出されていない。

覆土は、上層には、多量のマンガン粒・酸化鉄を含む灰黄褐色粘土層（第5層）、下層には、少量のマンガン粒・炭化物・酸化鉄を含む灰色粘土層（第6層）が堆積している。

遺物は、磨耗した土師器小片が出土したのみで、図示可能なものはない。

**37号住居跡** D-13・14からE-13・14グリッドに亘って位置し、北側は調査区外に及んでいる。第二確認面からの検出である。

36号・38号両住居跡を切断しているが、35号住居跡に削平されている。

東辺 $2.20 + \alpha$  m、南辺7.08m、南西辺4.05mを計る。南辺に伴う角がほぼ直角を成すため、方形を基本とした形態を呈するものと思われる。東辺の軸方位はN-10° -Eを示す。

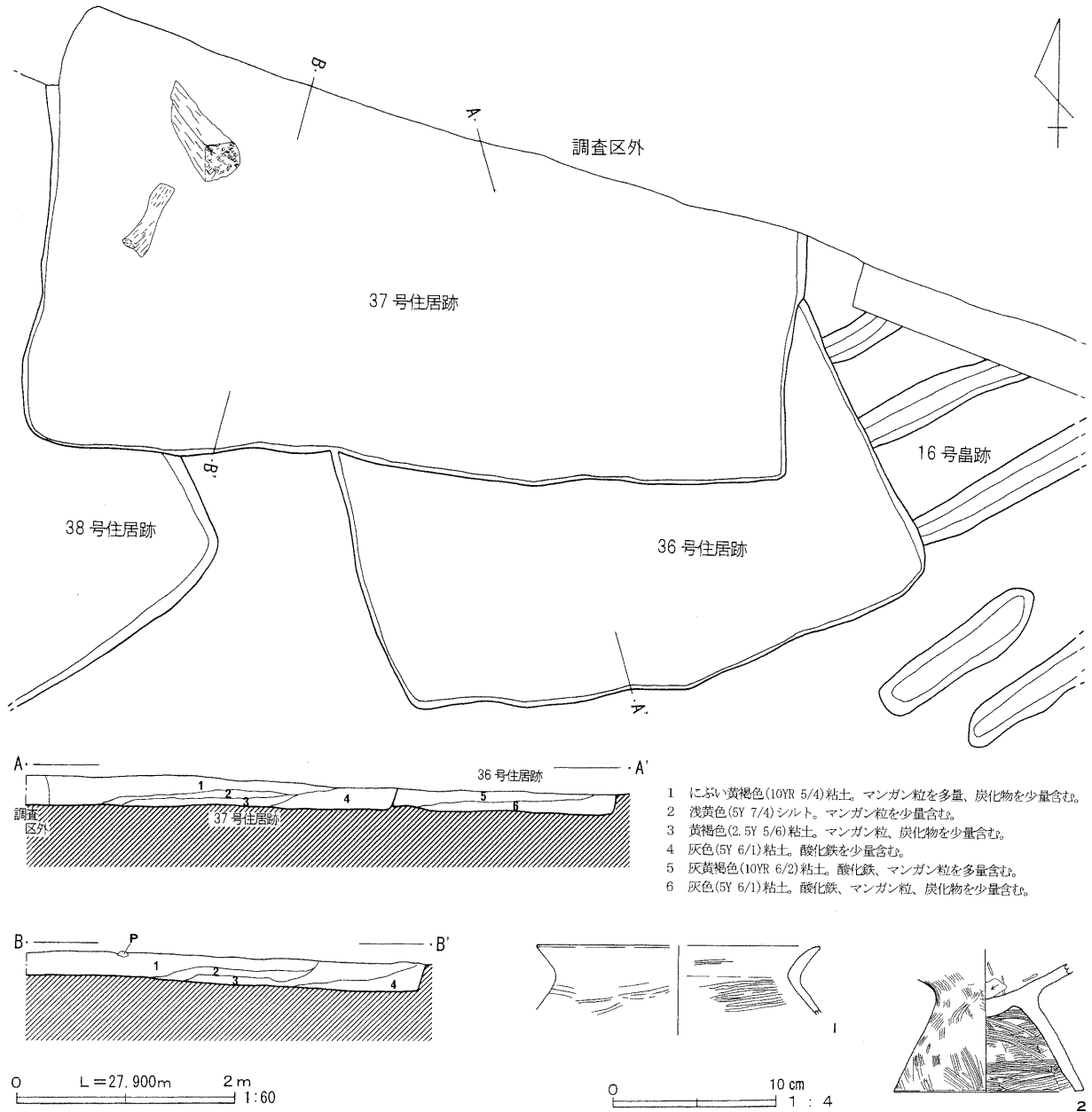
壁は、ほぼ垂直的に立ち上がり、掘り込み確認面から床面までの深さは、25cm前後である。床面は、凹凸が激しく、南に傾斜するなど、不安定である。床面上に、ピット、炉等は検出されていない。

覆土は、上位から、多量のマンガン粒及び少量の炭化物含むにぶい黄褐色粘土層（第1層）、少量のマンガン粒を含む浅黄色シルト層（第2層）、少量のマンガン粒・炭化物



を含む黄褐色シルト層（第3層）、壁際に最下層として、少量の酸化鉄を含む灰色粘土（第4層）が堆積している。

遺物は、第3層中から、土師器台付甕（1・2）が出土し、西壁下の床面上には、炭化した木材が出土している。



第130図 C区36号・37号住居跡及び37号住居跡出土遺物

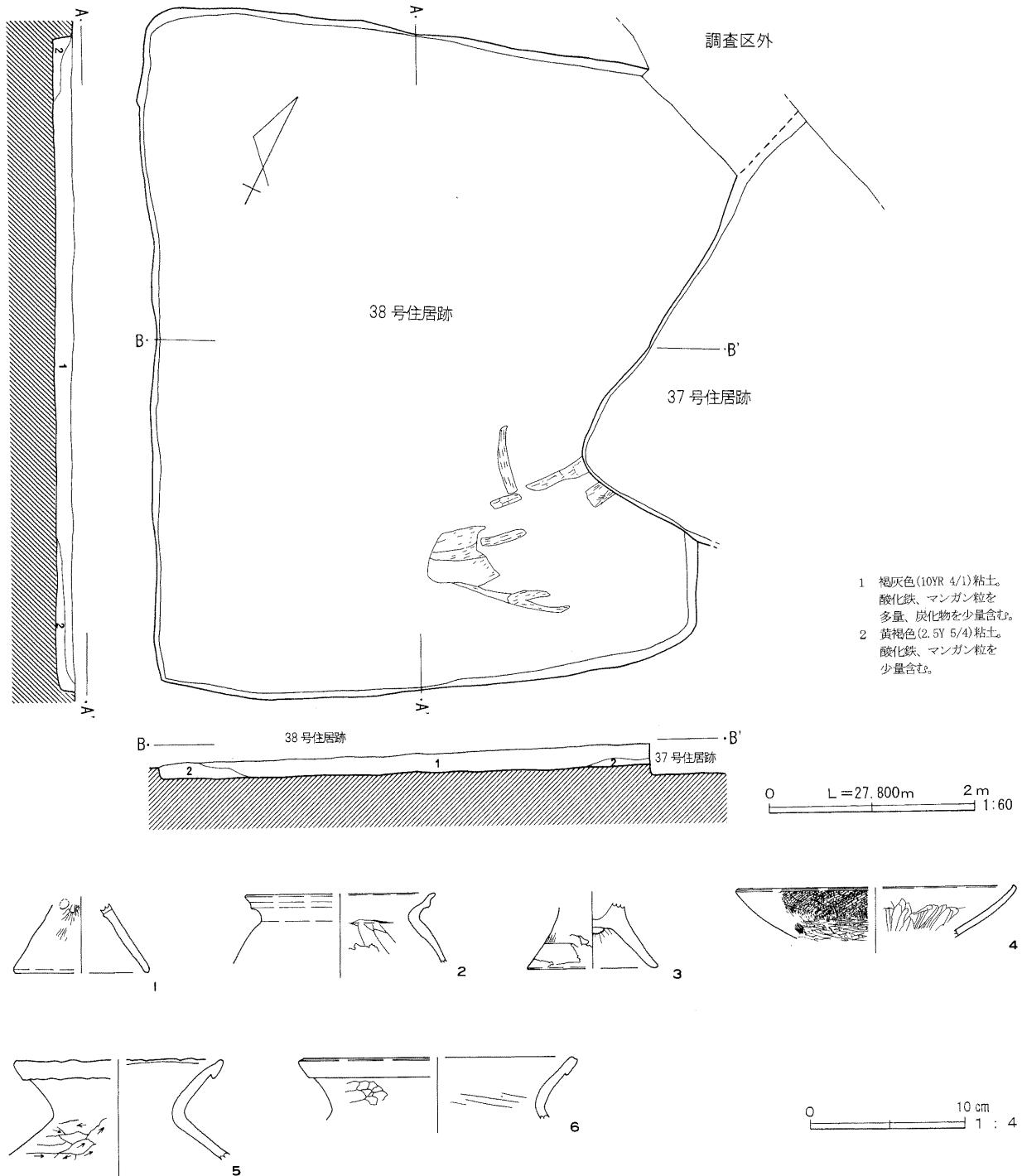
第65表 C区37号住居跡出土遺物観察表（第130図）

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・甕	(17.4)	—	—	①⑥④	②	橙	口縁部1/6のみ	表面大部分磨滅。内外面刷毛目。
2	土師器・台付甕	—	—	11.5	②①③④⑤	②	赤橙	脚部のみ	外面脚部下位から括れ部にかけて縦の刷毛目。脚部縦の刷毛目の後ナデ。内面脚部横の刷毛目。胴底部木口上によるナデツケ。吸炭。二次加熱。

**38号住居跡** D-14からE-14グリッドに亘って位置する。北隅は調査区外に及んでいる。第二確(第131図) 認面からの検出である。

37号住居跡に切断されている

北東辺 $1.10 + \alpha$  m、南東辺5.35 m、南西辺6.62 m、北西辺 $5.05 + \alpha$  mを計る。角が直角を成さず、北東辺・南西辺の長さが異なるため、南西辺を底辺とした台形を呈する



第131図 C区38号住居跡及び出土遺物

第66表 C区38号住居跡出土遺物観察表 (第131図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・器台	—	—	(8.7)	②④①③	②	橙	台部 1/5	外面縦の刷毛目、裾部横のナデが加わる。全面朱塗。内面縦のナデツケ、裾部横のナデ。
2	土師器・台付甕	(12.5)	—	—	②③④⑥	②	浅黄橙	口縁部 1/5	外面大部分表面剥落、残存部横のナデ、煤付着。内面括れ指頭によるナデツケの後、口縁部から横のナデ。胴部縦横のナデ、炭化物付着。二次加熱。
3	土師器・台付甕	—	—	(8.5)	①③④②	②	にぶい橙	台部 1/3	外面縦の刷毛目の後ナデ。内面上位ナデツケ、下位横のナデ。全面吸炭。
4	土師器・浅鉢	(18.0)	—	—	④①	②	オリーブ黒	口縁部 1/6	外面口唇部斜縄文の後中位にかけて縦の刷毛目、さらに横のミガキ。内面ナデの後放射状のミガキ。黒色処理。
5	土師器・壺	(13.6)	—	—	⑥①④	②	にぶい橙	上位 1/4	口縁部ナデ。胴部外面ケズリ。内面ナデ。表面ザラつく。
6	土師器・壺	(18.2)	—	—	⑥①④③②	②	浅黄橙	口縁部 1/8	外面ナデ、一部指頭による押圧。内面ナデ、括れ部横のミガキ様ナデ。

と思われる。主軸方位は、N-64° - Eを示す。

壁は、ほぼ垂直的に立ち上がり、掘り込み確認面から床面までの深さは、16cm前後である。床面は、ほとんど凹凸がなく水平面を成して、安定している。床面上に、ピット、炉等は検出されていない。

覆土は、上層には、多量のマンガン粒・酸化鉄及び少量の炭化物を含む褐灰色粘土層（第1層）、下層には、少量のマンガン粒・酸化鉄を含む黄褐色粘土層（第2層）が堆積している。

遺物は、床面上から、土師器器台（1）、台付甕（2・3）、外面の口唇部に縄文を施し、黒色処理された浅鉢（4）、壺（5・6）が出土し、東隅の床面上には、炭化した木材が出土している。

**39号住居跡** C-16・17からD-16・17グリッドに亘って位置する。第一確認面下位からの検出（第132図）である。

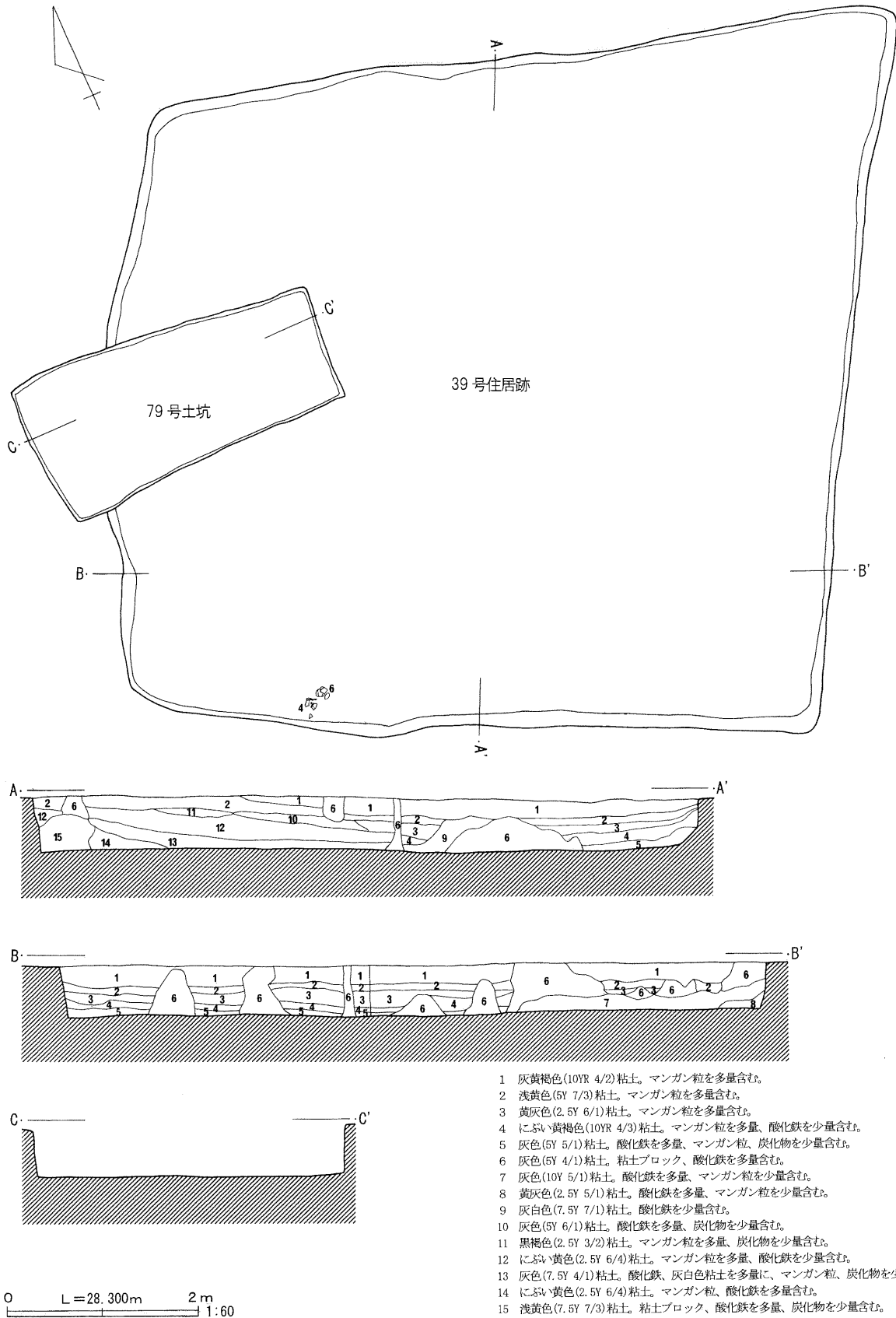
（第133図） 79号土坑に切断されている。

北東辺7.88m、南東辺7.65m、南西辺7.22m、北西辺6.05を計る。南西辺に伴う角が直角を成し、他が直角を成さず、北西辺のみが短いため、南東辺を底辺とした台形を呈するといわざるを得ない。主軸方位は、N-75° - Wを示す。

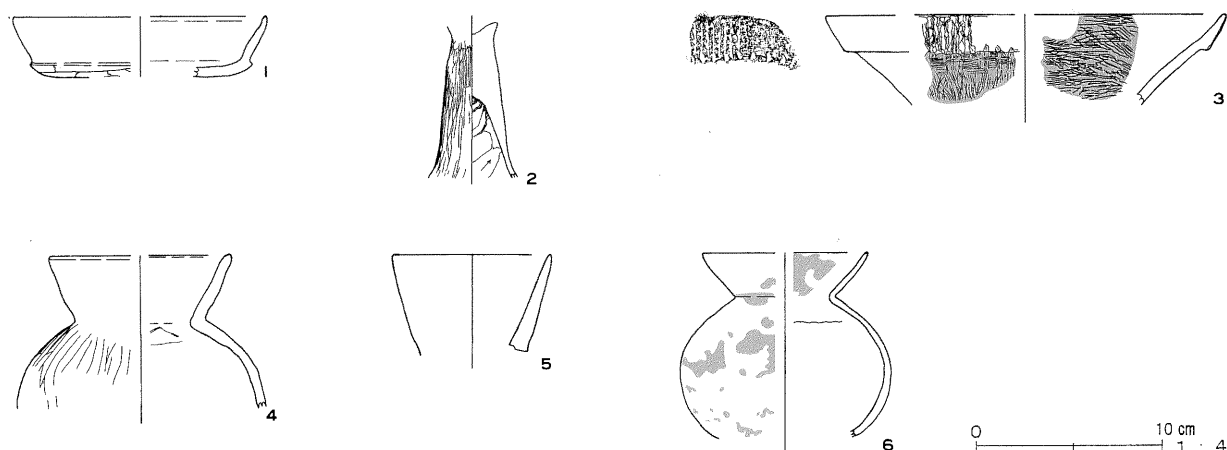
壁は、ほぼ垂直的に立ち上がり、掘り込み確認面から床面までの深さは、55cm前後である。床面は、ほとんど凹凸がなく水平面を成して、安定している。床面上に、ピット、炉等は検出されていない。

覆土は、自然流入土と思われる土層が、上位から、多量のマンガン粒を含む灰黄褐色粘土層（第1層）、多量のマンガン粒を含む浅黄色粘土層（第2層）、多量のマンガン粒を含む黄灰色粘土層（第3層）、多量のマンガン粒及び少量の酸化鉄を含むにぶい黄褐色粘土層（第4層）、多量の酸化鉄及び少量のマンガン粒・炭化物を含む灰色粘土層（第5層）の5層が堆積しているが、他の10層は、入り乱れ、投入土の様相を呈している。

遺物は、第5層中から、土師器高杯（1）、壺・埴類（3～6）が出土している。土師器杯（1）は、遺構検出時に出土したものである。



第132図 C区39号住居跡、79号土坑



第133図 C区39号住居跡出土遺物

第67表 C区39号住居跡出土遺物観察表 (第133図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・杯	(13.7)	(3.3)	—	①③⑥	②	橙	1/8	口縁部一部内外面炭化物付着。体部外面ケズリ様ナデ。
2	土師器・高杯	—	—	—	①④③⑥	②	浅黄橙	脚部のみ(裾欠)	外面縦のミガキ。内面斜のケズリ。吸炭。ヘソ接合。
3	土師器・壺	(21.6)	—	—	①③	②	灰白	口縁部 1/8	口縁凸帯以外朱塗。
4	土師器・壺	(9.9)	—	—	⑥①④	②	橙	上位 1/4	口縁部横のナデ。胴部外面縦のミガキ、内面括れ部横のナデツケ、以下横のナデ。
5	土師器・埴	8.7	—	—	①③	②	橙	口縁部のみ	表面剥離。
6	土師器・埴	(8.9)	—	—	①④⑥③	②	橙	1/3	口縁部及び胴部外面磨滅した部分が多い。この部分残存部に朱塗。全面ナデ。

**40号住居跡** C-19からD-19グリッドに亘って位置する。第一確認面下位からの検出である。

(第134図) 上面に1号溝跡が位置している。

北辺5.68m、東辺6.90m、南辺5.10m、西辺6.30mを計る。南辺に伴う角が直角を成さず、やや台形に近いが、基本的には長方形を呈すると思われる。主軸方位は、N-16°-Eを示す。

壁は、急傾斜を成して立ち上がり、掘り込み確認面から床面までの深さは、60cm前後である。床面は、ほとんど凹凸がなく水平面を成して、安定している。床面上に、ピット、炉等は検出されていない。

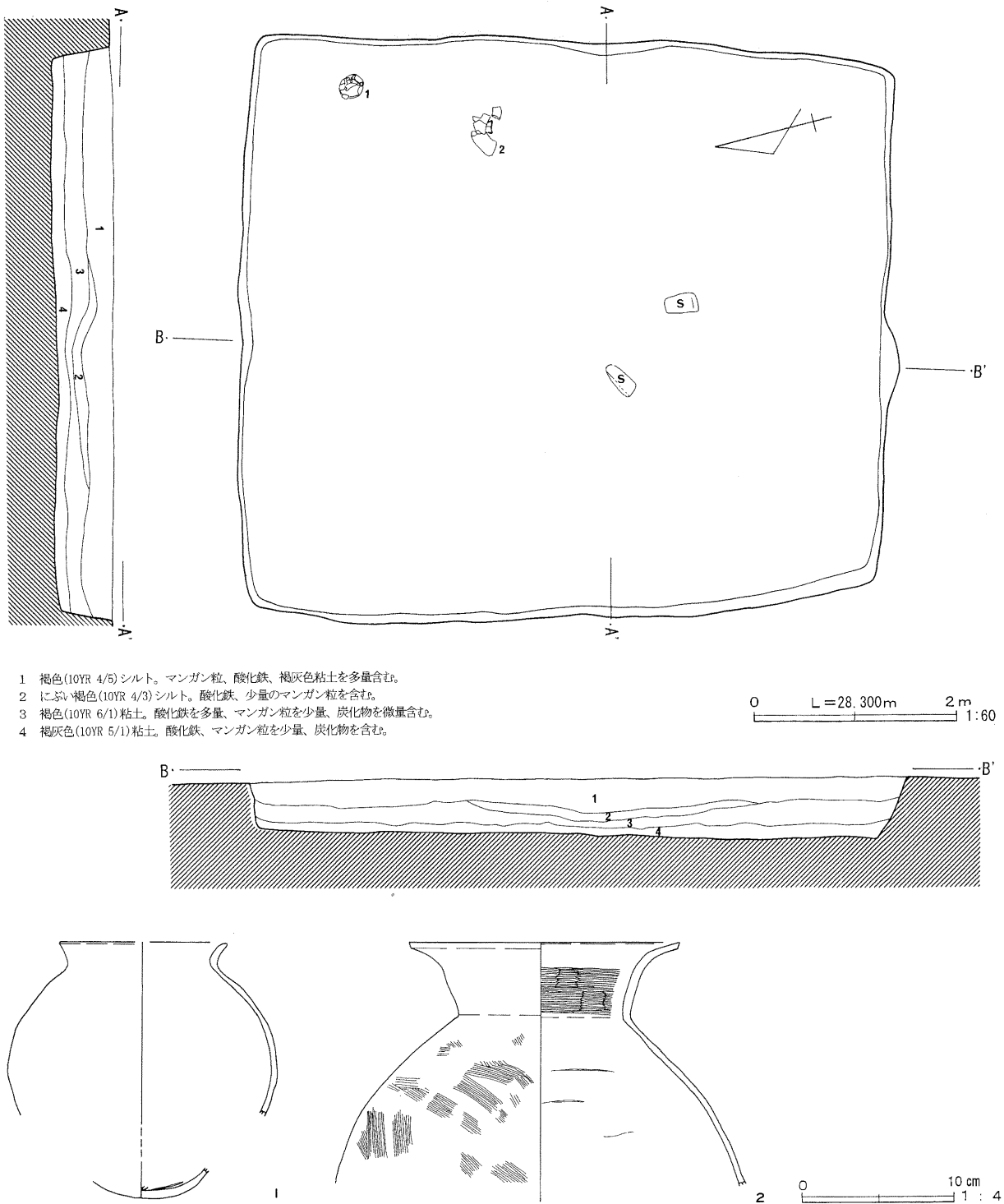
覆土は、上位から、多量のマンガン粒・酸化鉄・褐灰色粘土を含む褐色シルト層 (第1層)、酸化鉄及び少量のマンガン粒を含むにぶい褐色シルト層 (第2層)、多量の酸化鉄、少量のマンガン粒及び微量の炭化物を含む褐色粘土層 (第3層)、少量の酸化鉄・マンガン粒及び炭化物を含む褐灰色粘土層 (第4層) が堆積している。

遺物は、第4層上面から、土師器甕 (1)、壺 (2) が出土している。

**41号住居跡** C-17・18からD-17・18グリッドに亘って位置する。第一確認面下位からの検出 (第135図) である。

(第136図) 92号~95号各土坑によって切断されている。

北辺6.35m、東辺5.77m、南辺6.70m、西辺6.05mを計る。東西両辺が短い。北



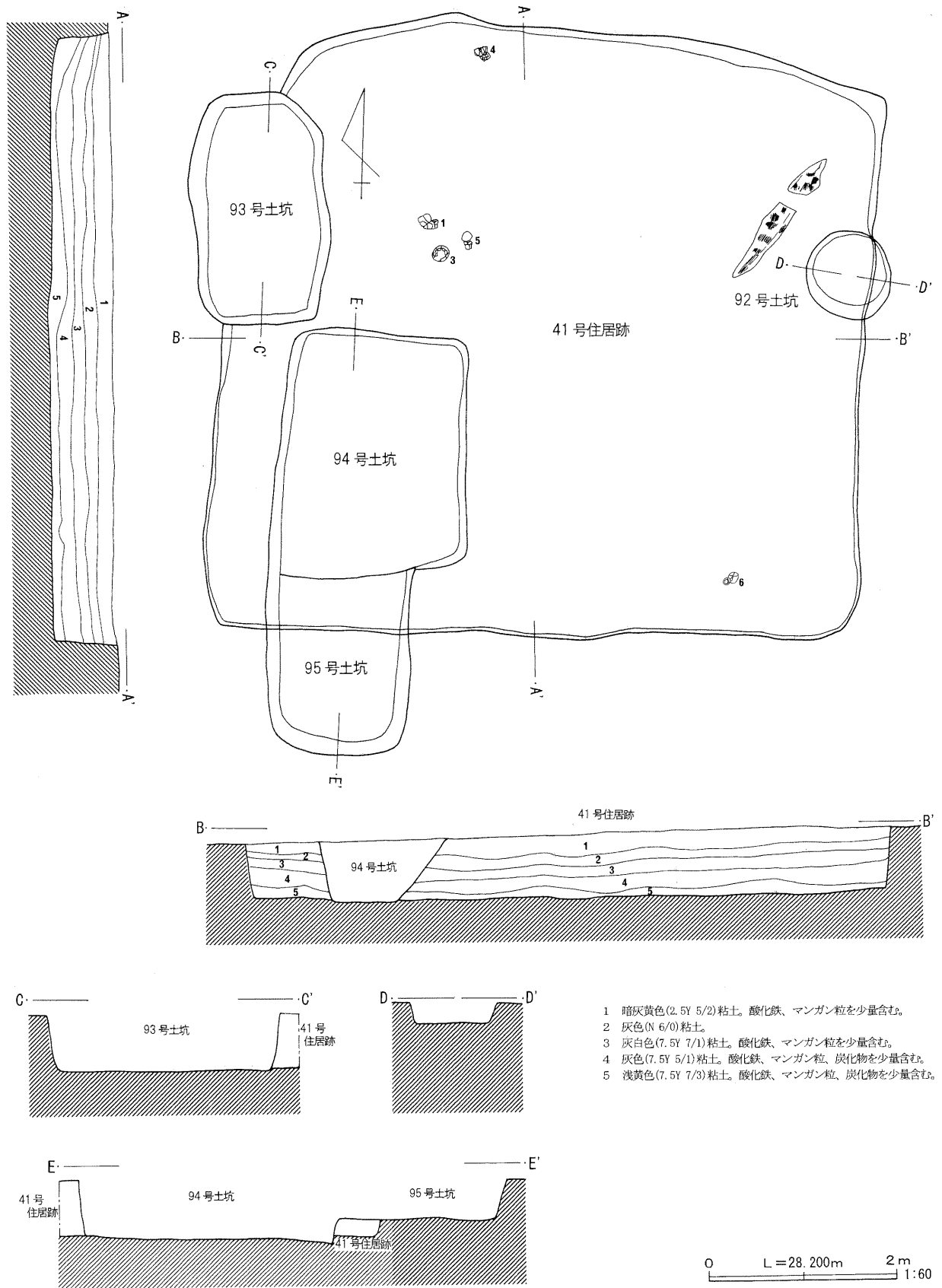
- 1 褐色(10YR 4/5)シルト。マンガング粒、酸化鉄、褐灰色粘土を多量含む。
- 2 にぶい褐色(10YR 4/3)シルト。酸化鉄、少量のマンガング粒を含む。
- 3 褐色(10YR 6/1)粘土。酸化鉄を多量、マンガング粒を少量、炭化物を微量含む。
- 4 褐灰色(10YR 5/1)粘土。酸化鉄、マンガング粒を少量、炭化物を含む。

0 L=28.300m 2m 1:60

第134図 C区40号住居跡及び出土遺物

第68表 C区40号住居跡出土遺物観察表 (第134図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・甕	(11.1)	—	—	②③①④	②	橙	1/3	内外面ナデ。内面底部放射状ナデツケ。吸炭。二次加熱。
2	土師器・壺	(17.8)	—	—	⑥①②④	②	橙	上部1/2	内面口縁下位横の刷毛目、上位横のナデ、胴部横のナデ。外面口縁横のナデ、口唇矩形に造り出す。胴部上位斜、中位縦の刷毛目、磨滅した部分多い。



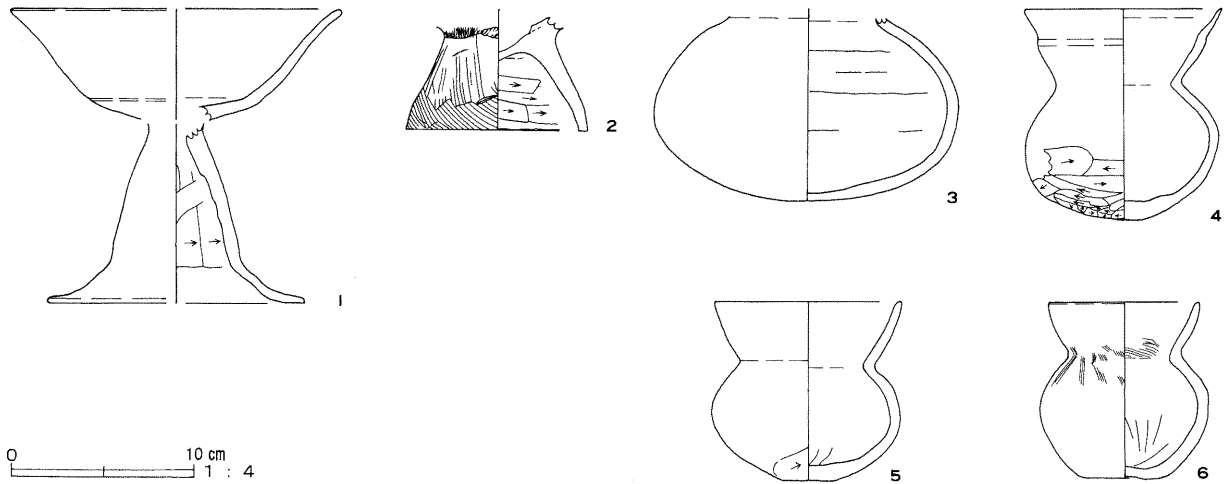
第135图 C区41号住居跡、92号·93号·94号·95号土坑

辺が脹らみをもつため、ほぼ正方形を呈すると様に思われる。主軸方位は、N-5°-Eを示す。

壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、掘り込み確認面から床面までの深さは、72cm前後である。床面は、ほとんど凹凸がなく水平面を成して、安定している。床面上に、ピット、炉等は検出されていない。

覆土は、上位から、少量のマンガン粒・酸化鉄を含む暗灰黄色粘土層（第1層）、灰色粘土層（第2層）、少量のマンガン粒・酸化鉄を含む灰白色粘土層（第3層）、少量の酸化鉄・マンガン粒・炭化物を含む灰色粘土層（第4層）、少量の酸化鉄・マンガン粒・炭化物を含む浅黄色粘土層（第5層）が堆積している。

遺物は、第2層上面から、土師器高杯（1）、台付甕（2）、壺・罎類（3～6）が出土している。また、北東隅の床面上から、炭化した木材が出土している。



第136図 C区41号住居跡出土遺物

第69表 C区41号住居跡出土遺物観察表（第136図）

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・高杯	(17.9)	—	(14.0)	①②③④	②	橙	1/3	杯部全面横のナデ。脚部外面縦、裾部横のナデ。内面上位指頭によるナデツケ、中位横の連続ケズリ、裾部横のナデ。吸炭。
2	土師器・台付甕	—	—	9.9	②③①④⑥	②	橙	脚部のみ	内面上位ナデツケ、中位以下横のケズリ。二次加熱。
3	土師器・罎	—	—	—	③②①④	②	黄橙	口縁部欠	全面ナデ。
4	土師器・罎	10.6	11.5	2.6	②①③④	②	橙	一部欠	口縁部縦横のナデ、上位横ナデにより段。胴部外面上位縦のナデ、下位横のケズリ、内面横のナデ。
5	土師器・罎	10.2	9.8	2.7	③⑥①②④	②	浅黄橙	一部欠	口縁部横ナデ。胴部外面縦のナデ、底辺部斜のケズリ、剥離した部分多い。内面上位ナデ、底部ナデツケ。
6	土師器・罎	8.1	9.7	4.3	①②④③	②	橙	一部欠	外面口縁横のナデ、括れ部～肩縦の刷毛目の後全面ナデ。内面括れ部上位横の刷毛目、胴部上位ナデ、下位ナデツケ。一部吸炭。内面炭化物付着。

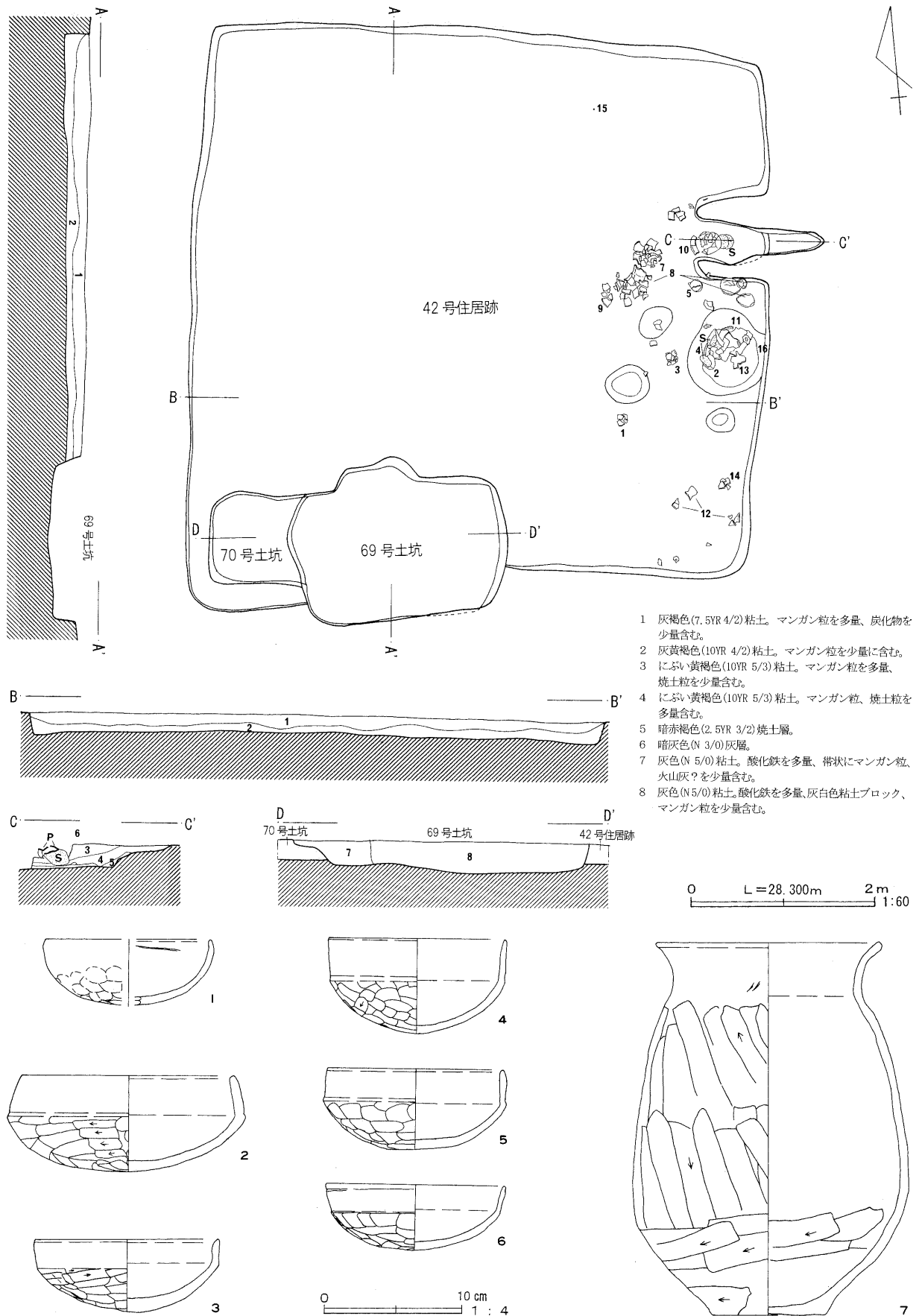
42号住居跡 E-13グリッドに位置する。第一確認面からの検出である。

(第137図) 43号・44号両住居跡の上面を削平しているが、69号・70号両土坑に切断されている。

(第138図) 下面には、16号畠跡が位置している。

北辺6.05m、東辺5.52m、南辺6.10m、西辺6.30mを計る。やや台形に近いが、基





第137図 C区42号住居跡、69号・70号土坑及び42号住居跡出土遺物(1)

本的には正方形を呈すると思われる。主軸方位は、N-97°-Eを示す。

壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、掘り込み確認面から床面までの深さは、28cm前後である。床面は、ほとんど凹凸がなく水平面を成して、安定しているが、壁際はわずかに窪む様相を呈している。ピットは、カマド右(南)脇に1ヶ所、さらにその南側に2ヶ所、計3ヶ所に穿たれている。カマド右脇ピットは、やや崩れた円形を呈し、92×85cm、深さ14cmを計る。東壁は、竪穴の東壁に直結している。貯蔵穴と思われる。南側の2ピットは、共にやや崩れた円形を呈し、東が32×25cm、深さ5cm、西が50×40cm、深さ5cmを計る。

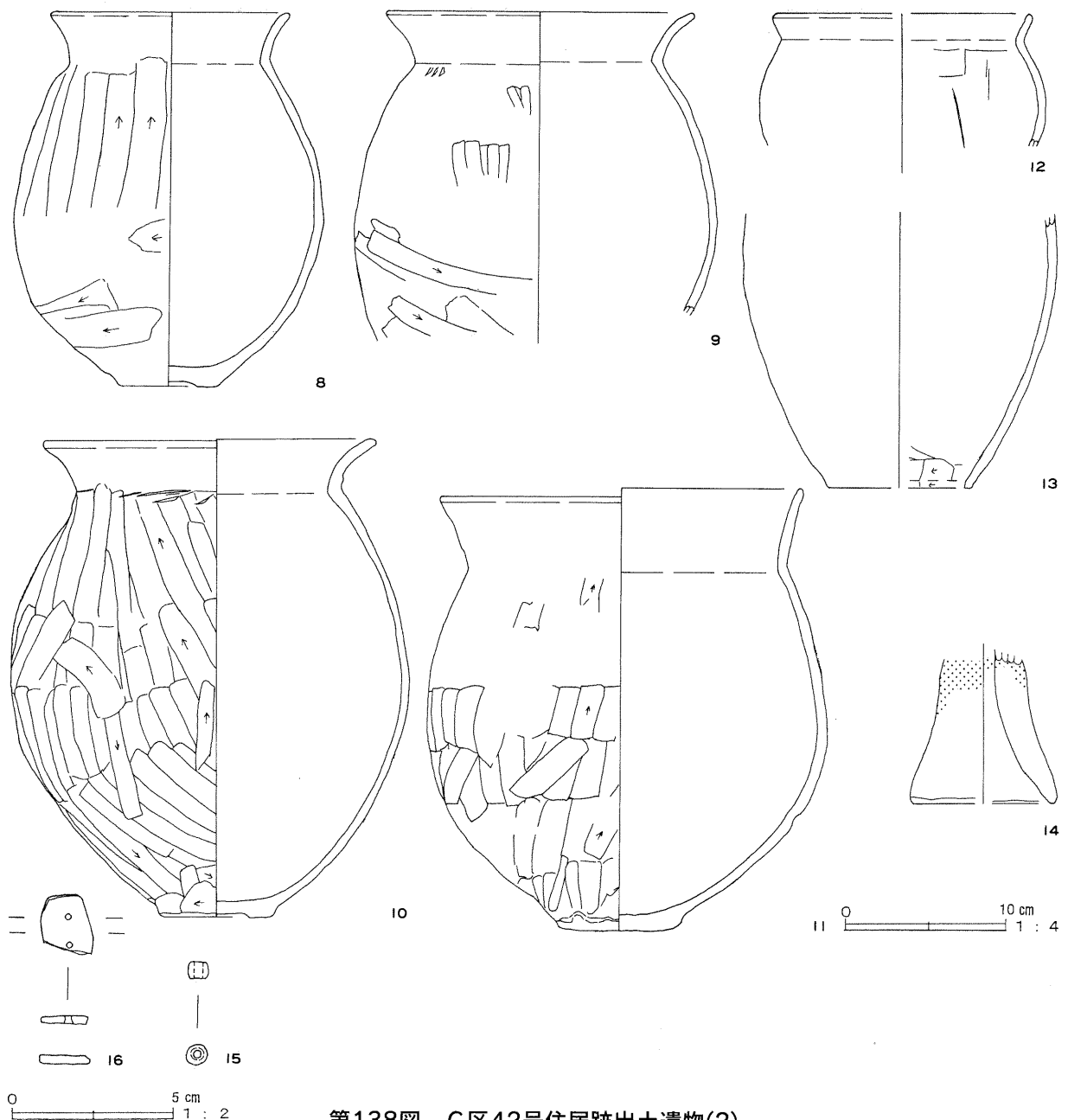
カマドは、東壁中央から北東隅寄りに設置されている。袖は、竪穴内に作り付けられ、長さは、左(北)が78cm、右(南)が80cmを計る。左袖内面は、竪穴壁に対して斜めに築かれ、右袖内面も、奥行き40cmの範囲で、これに平行させている。袖々間も40cmを計るため、平面矩形を呈する。この最奥部中央に礫が立てられ、支脚とされている。支脚より前面は火床となり、支脚より奥は、燃焼部となる。左袖はそのまま直線を成すが、右袖が内側に曲折し、奥部の幅が20cm(奥行き50cm)と半減するため、燃焼部の平面形は、台形を成すこととなる。火床の底面及び燃焼部の底面・奥壁は、厚さ3cm程の焼土面が連続している。燃焼部の奥壁は、竪穴壁の下部を切り残し、高さ10cmの段を成して、煙道部へ移行する。煙道部の底面はわずかに傾斜をもち、奥壁部で急に立ち上がる。奥行きは60cmを計る。幅は、徐々に狭め、奥壁部で鋭角的に閉じている。

覆土は、上層が、多量のマンガン粒及び少量の炭化物を含む灰褐色粘土層(第1層)、下層が、少量のマンガン粒を含む灰黄褐色粘土層(第2層)が堆積している。

遺物は、竪穴東半部分に集中して出土している。カマド内支脚礫の前面から土師器甕(10)、カマド前から土師器甕(7~9)、カマド右脇から土師器杯(5)及び甕(8)の一部、貯蔵穴内から土師器杯(2・4)、甕(11)、甌(12)、貯蔵穴上の竪穴東壁に刺さった状態で滑石製模造品(双孔・16)、貯蔵穴西脇からは土師器杯(1・3)、竪穴南東隅では土師器甕(12)、羽口(14)、竪穴北壁下北東隅寄りからはガラス製白玉(15)が、貯蔵穴以外、全て床面直上から出土している。また羽口(14)は、49号住居跡出土破片と接合されている。

第70表 C区42号住居跡出土遺物観察表(第137・138図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・杯	(12.1)	4.8	—	③①②	②	橙	1/4	口縁部横ナデ。体部外面ケズリの後ナデ。内面剥離。
2	土師器・杯	15.6	7.0	—	⑥②①③	②	にぶい橙	口縁部 1/2 欠	口縁部横ナデ。体部外面ケズリ、煤付着、赤色化、一部剥離。内面ナデ、一部指頭による押圧、口唇部煤付着。二次加熱。
3	土師器・杯	(13.4)	5.3	—	⑥①②③④	②	明赤褐	2/3	口縁部横ナデ。体部外面ケズリ、内面指によるナデ。
4	土師器・杯	(13.0)	7.0	—	③①②	②	橙	3/4	口縁部横ナデ、内面煤付着、外面吸炭。体部外面ケズリ、後ナデが加わる、煤付着、内面ナデ。
5	土師器・杯	12.8	6.0	—	③②①④	②	橙	口縁部一部欠	口縁部横ナデ。体部外面ケズリ後ナデ、内面ナデ、炭化物付着。
6	土師器・杯	13.1	4.8	—	⑥①②④③	②	橙	口縁部一部欠	口縁部横ナデ。体部外面ケズリの後ナデ。内面ナデ、剥離した部分多い。
7	土師器・甕	16.5	27.2	8.4	⑥②①③	②	にぶい橙	5/6	口縁部横ナデ。胴部外面ケズリ、部分的にナデが加わる。内面ナデ、中・下位の接合部ケズリ、底面吸炭。
8	土師器・甕	15.1	23.5	6.3	⑥①②④	②	橙	ほぼ完形	口縁部横ナデ。胴部外面ケズリ、頸部及び中位にナデが加わる。底部周辺ナデ、上げ底、中位煤付着、下位赤色化。内面ナデ。二次加熱。
9	土師器・甕	19.4	—	—	⑥②③①	②	橙	上位 2/3	口縁部横ナデ。胴部外面上位ナデ、一部指頭による押圧、中位以下ケズリ、一部ナデが加わる、中位以下煤付着。内面ナデ。
10	土師器・甕	20.8	30.3	7.2	⑥②③④①	②	にぶい橙	口縁部 1/3 欠	口縁部横ナデ。胴部外面ケズリ、上げ底、上位下部まで煤付着。内面ナデ、上位下部に炭化物が輪状に付着。



第138図 C区42号住居跡出土遺物(2)

11	土師器・甕	22.8	28.1	7.7	⑥③②①	②	にぶい橙	一部欠	口縁部横ナデ。胴部外面ケズリ、上位の大部分、中位以下も多くの箇所にナデが加わる。中位以下煤付着。内面全体に横のナデ、下位吸炭、剥離した部分多い。
12	土師器・甕	(16.1)	—	—	③②④①	②	にぶい橙	上位 2/5	口縁部横ナデ。胴部内面ヘラナデ、外面ナデ。
13	土師器・甕	—	—	(8.9)	⑥④①③②	②	にぶい褐	下位 1/4	外面ケズリの後ナデ、煤付着。内面ナデ、円孔部横のケズリ。
14	羽口	—	—	(9.2)	⑥①②④③	②	橙・青灰	2/5	
15	白玉	長さ 0.6 幅 0.7 孔径 0.3			—	—	—	—	ガラス製。
16	剣形模造品	長さ — 幅 1.6 厚さ 0.3			—	—	—	—	石製。
17	礫	長さ 20.6 幅 20.4 厚さ 12.8 重さ 6,000g			—	—	—	—	
18	礫	長さ 19.2 幅 14.8 厚さ 6.5 重さ 2,500g			—	—	—	—	
19	礫	長さ 17.2 幅 9.4 厚さ 6.1 重さ 1,500g			—	—	—	—	

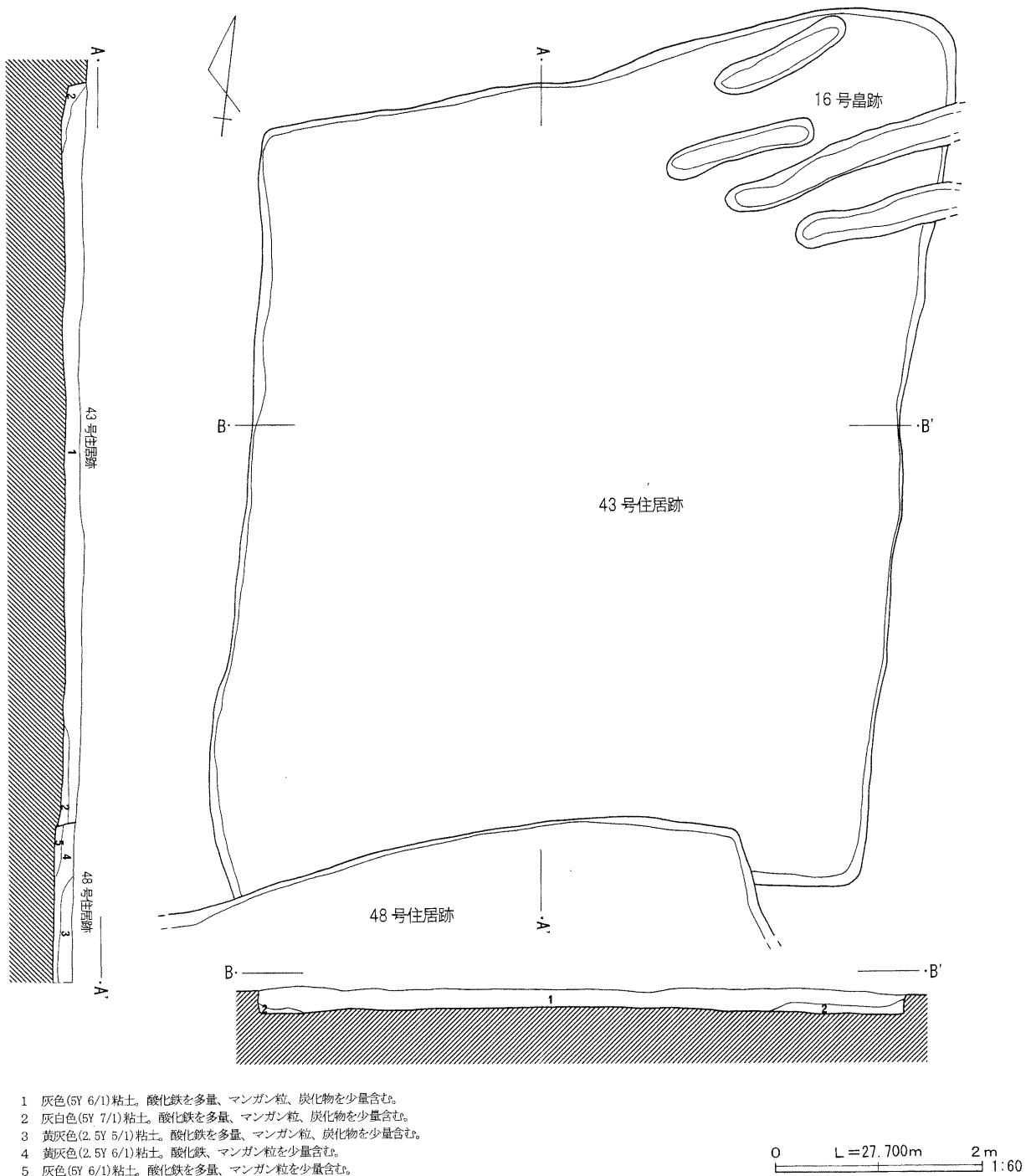
43号住居跡 E-13からF-13グリッドに亘って位置する。第二確認面からの検出である。

(第139図) 33号・42号両住居跡及び69号土坑に削平され、48号住居跡及び16号畠跡に切断されている。

北辺6.90m、東辺8.52m、南辺0.95+ $\alpha$ m、西辺7.56+ $\alpha$ mを計る。平行四辺形を呈する。長軸方位は、N-0°-Eを示す。

壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、掘り込み確認面から床面までの深さは、20cm前後である。床面は、ほとんど凹凸がなく水平面を成して、安定しているが、壁際はわずかに窪む様相を呈している。床面に、ピットは、穿たれていない。炉も設置されていない。

覆土は、多量の酸化鉄及び少量のマンガン粒・炭化物を含む灰色粘土層（第1層）、壁



第139図 C区43号住居跡

際に、多量の酸化鉄及び少量のマンガン粒・炭化物を含む灰白色粘土層（第2層）が堆積している。

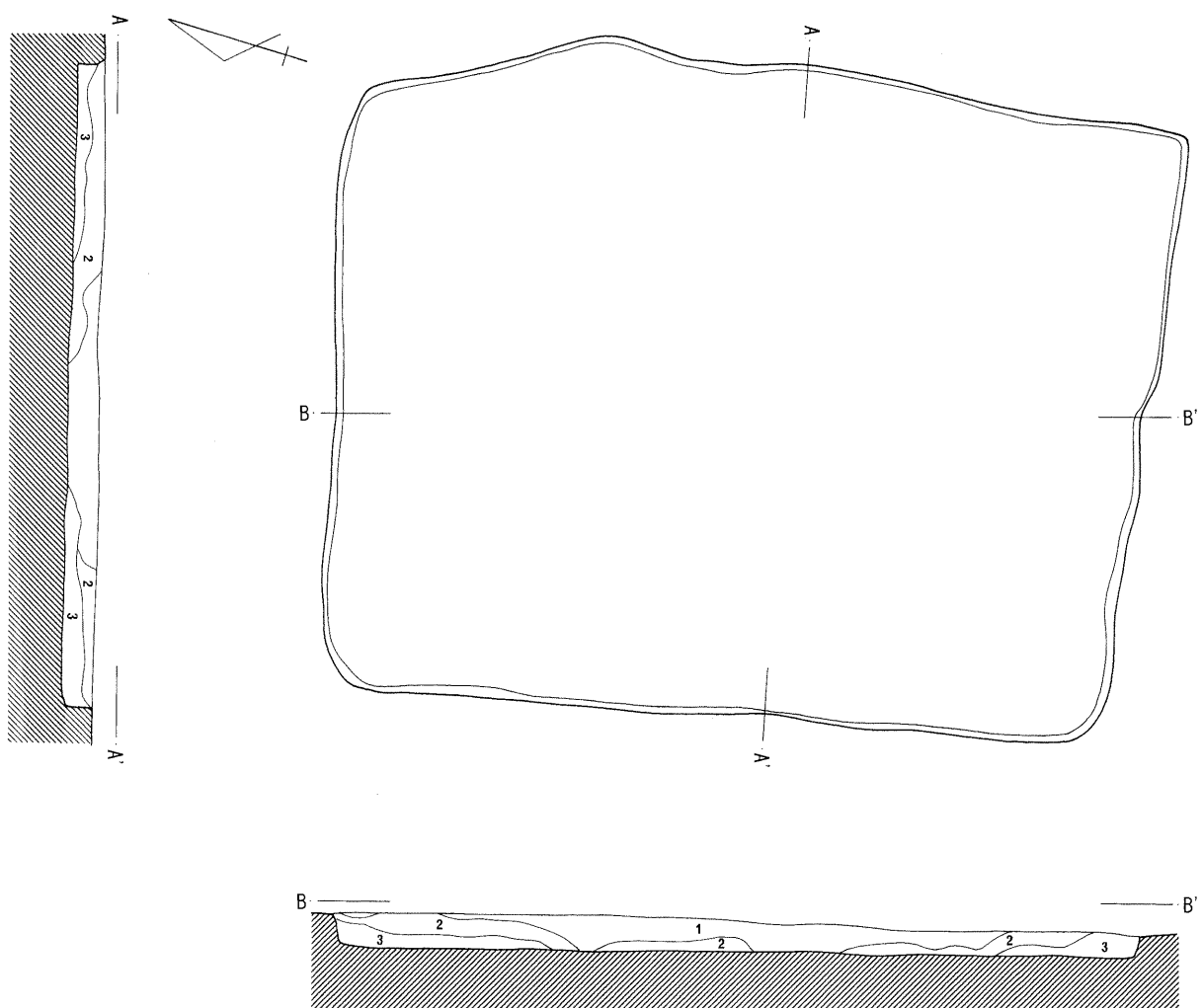
遺物は、磨耗した土師器小片が出土したのみで、図示可能なものはない。

**44号住居跡** E-13からE-14グリッドに亘って位置する。第二確認面からの検出である。

(第140図) 42号・45号両住居跡及び、70号土坑に削平されている。

北辺4.95m、東辺6.90m、南辺5.10m、西辺6.55mを計る。不整形であるが、ほぼ長方形を呈する。長軸方位は、N-13°-Wを示す。

壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、掘り込み確認面から床面までの深さは、20cm前後である。床面は、ほとんど凹凸がなく水平面を成し、踏み固められた面もあって、安定している。床面に、ピットは、穿たれていない。炉も設置されていない。



- 1 黄褐色(2.5Y 5/3)粘土。マンガン粒を多量含む。
- 2 灰色(5Y 5/1)粘土。酸化鉄を多量、マンガン粒、炭化物を少量含む。
- 3 灰色(7.5Y 5/1)粘土。酸化鉄、マンガン粒、炭化物を少量含む。

0 L = 27.800m 2m 1:60

第140図 C区44号住居跡

覆土は、上層が、多量のマンガン粒を含む黄褐色粘土層（第1層）、多量の酸化鉄及び少量のマンガン粒・炭化物を含む灰色粘土層（第2層）、壁際に、少量の酸化鉄・マンガン粒・炭化物を含む灰色粘土層（第3層）が堆積している。

遺物は、磨耗した土師器小片が出土したのみで、図示可能なものはない。

**45号住居跡** E-13からE-14グリッドに亘って位置する。第一確認面からの検出である。  
(第141図) 44号住居跡を削平している。

北辺5.30m、東辺4.40m、南辺5.40m、西辺4.20mを計る。やや不整形であるが、ほぼ長方形を呈する。主軸方位は、N-84°-Eを示す。

壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、掘り込み確認面から床面までの深さは、30cm前後である。床面は、やや凹凸がみられるが、踏み固められた面もあって、安定している。

ピットは、カマド右脇とその中央寄りの2ヶ所に穿たれている。カマド脇ピットは、隅円方形を呈し、径66×56cm、深さ15cmを計る。貯蔵穴と思われる。中央寄りピットは、隅円方形を呈し、径38×35cm、深さ23cmを計る。

カマドは、東壁中央に設けられている。袖は、竪穴内に作り付けられ、長さは、左右共に85cmを計る。袖は、竪穴壁に対して直角に築かれ、奥行き55cmの範囲で、両袖は50～55cmの幅でほぼ平行している。この間、平面矩形を呈する。この奥は、徐々に幅を狭め、壁部分では、幅30cm（奥行き30cm）となる。奥壁の前面中央には、焼土塊（第13層）上に土師器杯（1）が被せられ、支脚とされている。この支脚より前面が火床となり、支脚より奥は、燃焼部となっていたと思われる。しかし、火床の底面及び燃焼部の底面・奥壁は、厚さ3～4cm程の焼土面が連続しており、この区別は明確ではない。火床の焼土は、袖前面よりさらに35cm程、竪穴内に張り出す。燃焼部の奥壁は、竪穴壁の下部を切り残し、高さ22cmの段を成して、煙道部へ移行する。煙道部の底面はわずかに傾斜をもち、奥壁部では径20cmの範囲で窪みをもつ。奥行きは103cmを計る。幅は、徐々に狭め、奥壁部で丸く閉じている。

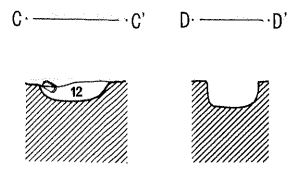
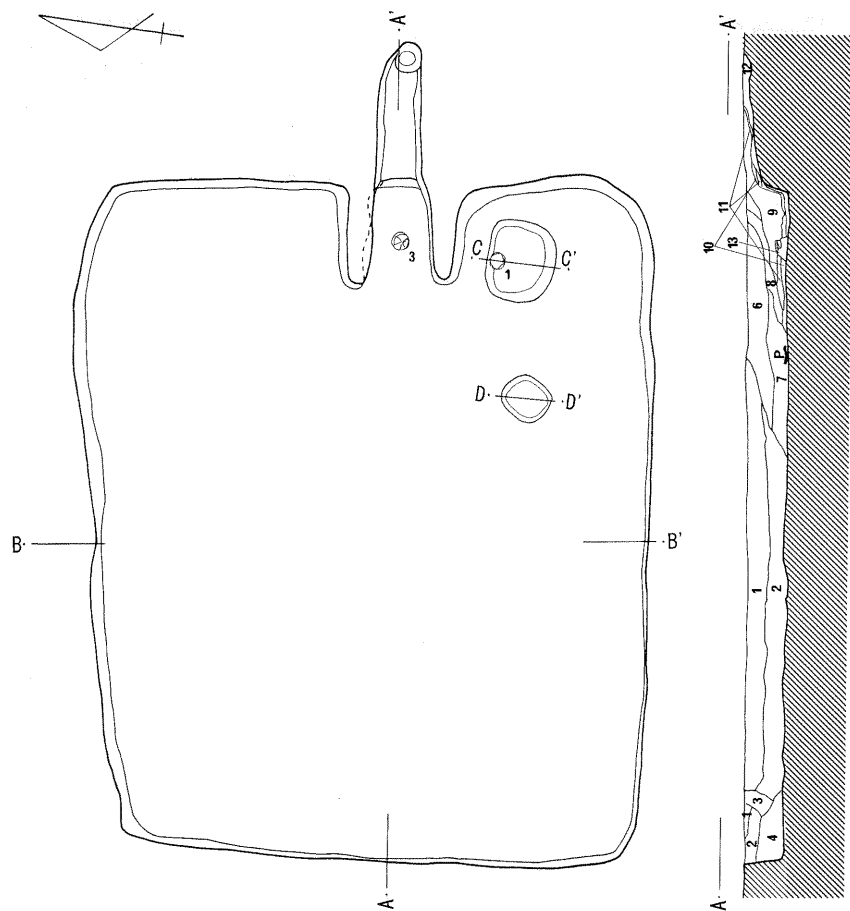
覆土は、上層が、多量のマンガン粒及び少量の炭化物を含むいぶい黄色粘土層（第1層）、多量のマンガン粒及び少量の炭化物を含む灰黄褐色粘土層（第2層）、壁際に、多量の酸化鉄及び少量のマンガン粒を含む灰色粘土層（第4層）が堆積している。

遺物は、カマド周囲に集中して土師器杯が5点出土している。支脚として利用された（3）、カマド脇から貯蔵穴に落ちかけた状態の（1）、カマドと貯蔵穴の間からの（2・4・5）である。その他、土師器甕（6）、砥石（7）、礫（9・10）等が出土している。

**46号住居跡** E-17からF-17グリッドに亘って位置する。第一確認面下位からの検出である。  
(第142図) 47号住居跡を切断している。

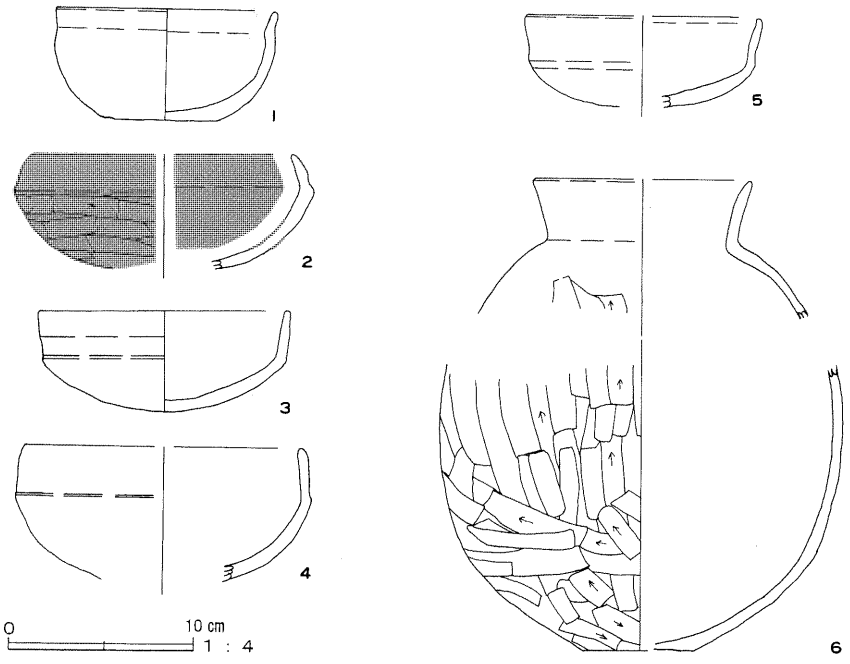
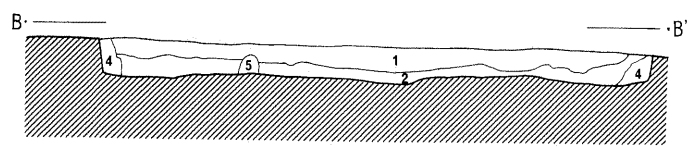
北辺5.65m、東辺5.60m、南辺5.50m、西辺5.95mを計る。やや不整形であるが、ほぼ平行四辺形を呈する。主軸方位は、N-14°-Eを示す。

壁は、垂直に立ち上がり、掘り込み確認面から床面までの深さは、50cm前後である。



- 1 におい黄色(2.5Y 6/4)粘土。マンガンを多量、炭化物を少量含む。
- 2 灰黄褐色(10YR 4/2)粘土。マンガンを多量、炭化物を少量含む。
- 3 黄灰色(2.5Y 6/1)粘土。酸化鉄を多量含む。
- 4 灰色(7.5Y 6/1)粘土。酸化鉄を多量、マンガンを少量含む。
- 5 灰色(7.5Y 6/1)粘土。酸化鉄、マンガンを少量含む。
- 6 灰黄褐色(10YR 5/2)粘土。マンガンを多量、炭化物を少量含む。
- 7 黄褐色(2.5Y 5/4)粘土。マンガンを多量、炭化物を少量含む。
- 8 におい黄色(2.5Y 6/3)粘土。マンガンを多量、炭化物を少量含む。
- 9 灰黄褐色(2.5Y 4/2)粘土。焼土粒、炭化物を少量含む。
- 10 明赤褐色(5YR 5/8)焼土層。
- 11 暗灰色(N 3/0)灰層。焼土粒を多量含む。
- 12 におい黄色(2.5Y 6/4)粘土。マンガンを多量、炭化物、焼土粒を少量含む。
- 13 焼土塊。

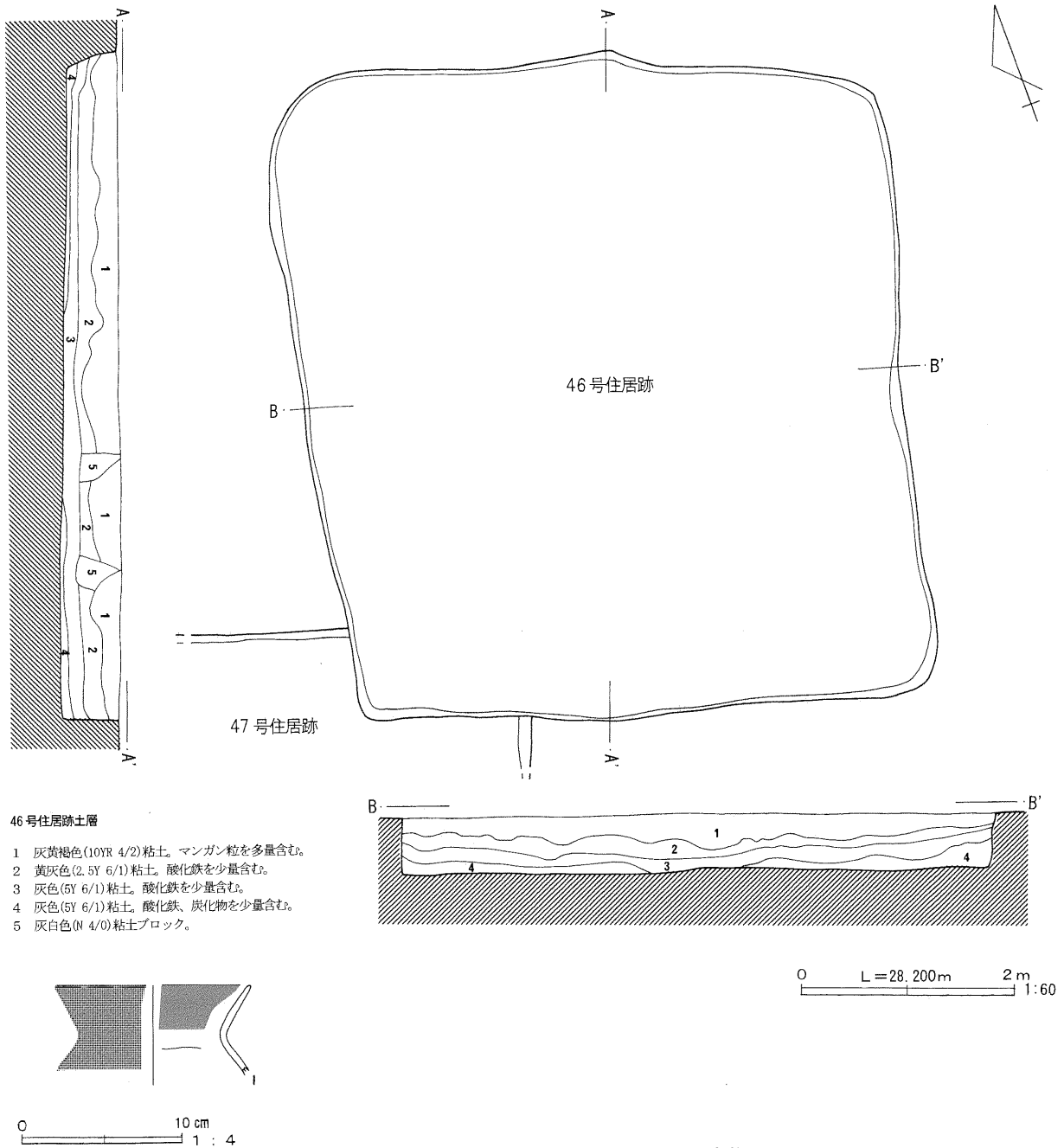
0 L = 28.300m 2 m 1:60



第141図 C区45号住居跡及び出土遺物

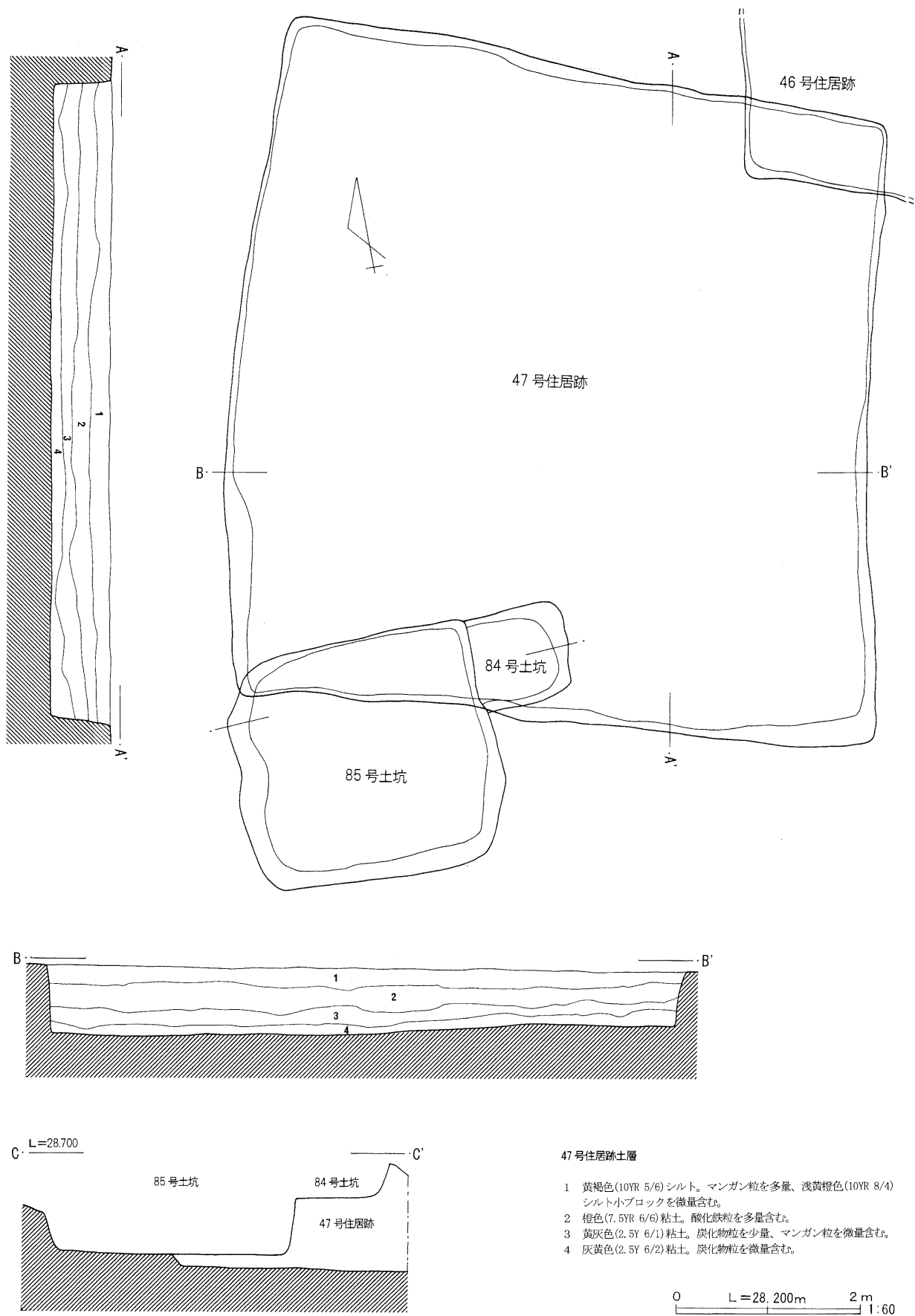
第71表 C区45号住居跡出土遺物観察表(第141図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考	
1	土師器・甃	12.0	6.0	6.0	⑥①②③④	②	橙	一部欠	全体に表面磨滅。	
2	土師器・杯	(14.0)	—	—	②①③⑥④	②	にぶい橙	1/2	口縁部横ナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。外面底部以外朱塗。	
3	土師器・杯	(13.0)	5.5	—	⑥①②④	②	橙	口縁部1/2欠	口縁部横ナデ。体部外面磨滅、ケズリ痕。内面回転のナデ、底面指頭による押圧。体部内面煤付着。	
4	土師器・杯	(15.0)	—	—	③②①⑥④	②	橙	1/2	表面磨滅。	
5	土師器・杯	(12.3)	—	—	①②③⑥④	②	橙	1/2	口縁部横ナデ。体部内外面共ナデ、内面底部指頭による押圧。	
6	土師器・甕	(12.0)	—	(6.0)	⑥②①③④	②	にぶい橙	胴一部欠1/3	口縁部横ナデ。胴部外面～底部ケズリ、肩部にはナデが加わる、煤付着、赤色化。内面ナデ、炭化物付着。二次加熱。	
7	砥石	長さ 12.6 幅 5.2 厚さ 3.1			—					4面使用。
8	砥石	長さ 8.8 幅 4.7 厚さ 3.9			—					4面使用。
9	編物石	長さ 14.3 幅 5.0 厚さ 3.5 重さ 420g			—					
10	編物石	長さ 16.5 幅 5.1 厚さ 3.1 重さ 400g			—					



第142図 C区46号住居跡及び出土遺物





第143図 C区47号住居跡、84号・85号土坑

第72表 C区46号住居跡出土遺物観察表 (第142図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
I	土師器・甕	(12.2)	—	—	⑥①②④	②	橙	口縁部 1/8	全面横のナデ(ケズリ様であり砂礫移動)。外面及び口縁の一部朱塗。

床面は、やや凹凸がみられるが、踏み固められた面もあって、安定している。

ピット、炉等は、検出されていない。

覆土は、上位から、多量のマンガン粒を含むにぶい灰黄褐色粘土層 (第1層)、少量の酸化鉄を含む黄灰色粘土層 (第2層)、少量の酸化鉄を含む灰色粘土層 (第3層) が堆積し、壁際には最下層として、酸化鉄及び少量の炭化物を含む灰色粘土がみられる。また、第3層上には、灰白色粘土ブロックがみられる部分もある。

遺物は、土師器甕 (1) が出土したのみである。

**47号住居跡** E-18からF-17・18グリッドに亘って位置する。第一確認面下位からの検出である。  
(第143図) 46号住居跡及び84号・85号両土坑に切断されている。

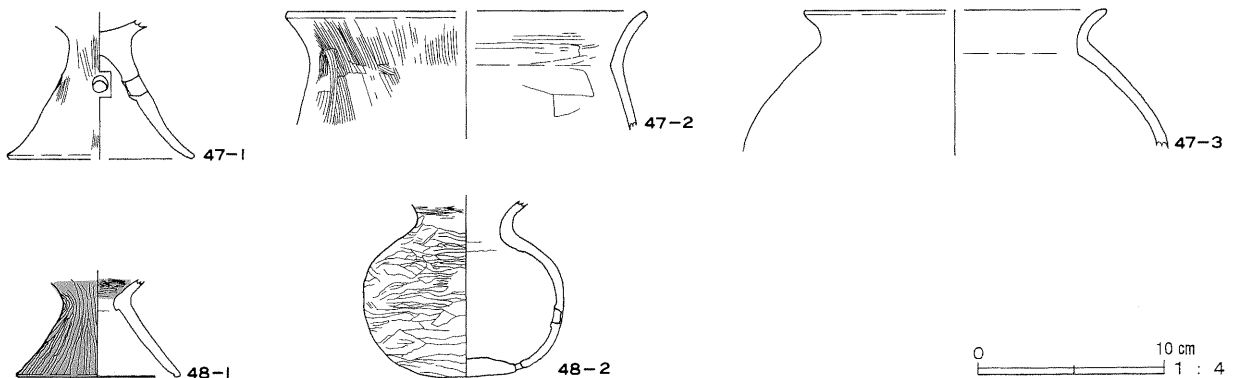
(第144図) 北辺6.18m、東辺6.80m、南辺7.05m、西辺7.45mを計る。やや不整形であるが、ほぼ正方形を基本とした形態を呈すると思われる。西辺の軸方位は、N-14°-Eを示す。  
壁は、垂直に立ち上がり、掘り込み確認面から床面までの深さは、60cm前後である。  
床面は、やや凹凸がみられるが、踏み固められた面もあって、安定している。

ピット、炉等は、検出されていない。

覆土は、上位から、多量のマンガン粒及び微量の浅黄橙色シルト小ブロックを含む黄褐色シルト層 (第1層)、多量の酸化鉄を含む橙色粘土層 (第2層)、少量の炭化物及び微量のマンガン粒を含む黄灰色粘土層 (第3層)、微量の炭化物を含む灰黄色粘土層 (第4層) が堆積している。

遺物は、第3層および第4層中から、土師器高杯 (1)、甕 (2・3) が出土している。

**48号住居跡** F-12・13からG-12・13グリッドに亘って位置する。第二確認面からの検出である。  
(第145図) 34号・43号両住居跡を切断しているが、33号・51号両住居跡に削平されている。ま



第144図 C区47号・48号住居跡出土遺物

第73表 C区47号住居跡出土遺物観察表（第144図）

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・高杯	—	—	(10.2)	⑥①②③④	②	橙	脚部1/3のみ	杯部底面ナデ。外面縦のミガキ、表面剥離した部分多い。内面ナデ。
2	土師器・甕	(19.6)	—	—	②①⑥④	②	橙	口縁部1/6	外面縦の刷毛目。内面口唇部横のナデ、括れ部横の木口状工具によるナデ。胴部内面ナデ、一部炭化物付着。二次加熱。
3	土師器・甕	(16.3)	—	—	②①④③⑥	②	橙	上位1/8	口縁部～括れ部横のナデ。胴部外面ナデ、内面ケズリ様ナデ。口縁及び胴部外面煤付着。二次加熱。

第74表 C区48号住居跡出土遺物観察表（第144図）

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・器台	—	—	8.6	⑥②①④	②	赤	脚部のみ	外面縦のミガキ。内面受台部横のミガキ、脚部横のナデ。外面及び受台部内面朱塗。
2	土師器・小型壺	—	—	4.5	⑥②④①	②	橙	1/2 (口唇部欠)	外面頸部及び胴部横のミガキ、括れ部横のナデ。内面全面ナデ。胴部中位穿孔後外面より閉塞、底部との境に穿孔。

(第144図) た、上面には、49号住居跡が位置している。

北辺6.82m、東辺5.40m、南辺7.75m、西辺7.15mを計る。南辺が屈曲し、不整5角形を呈すると思われる。西辺の軸方位は、N-20°-Wを示す。

壁は、垂直に立ち上がり、掘り込み確認面から床面までの深さは、50cm前後である。床面は、やや凹凸がみられるが、踏み固められた面もあって、安定している。

ピット、炉等は、検出されていない。

覆土は、上層が、多量の酸化鉄及び少量のマンガン粒・炭化物を含む黄灰色粘土層（第2層）、下層が、少量の酸化鉄・マンガン粒を含む黄灰色粘土層（第3層）が堆積している。また壁際には、最下層として、多量の酸化鉄及び少量のマンガン粒を含む灰色粘土層（第4層）が堆積している部分もみられる。

遺物は、第3層中から、土師器器台（1）、小型壺（2）が出土している。

49号住居跡 F-13・14からG-13・14グリッドに亘って位置する。第一確認面からの検出である。

(第146図) 48号・50号・51号各住居跡を削平しているが、71号土坑によって削平され、北辺中

(第147図) 央から東辺東隅寄りにかけては、攪乱坑によって切断されている。

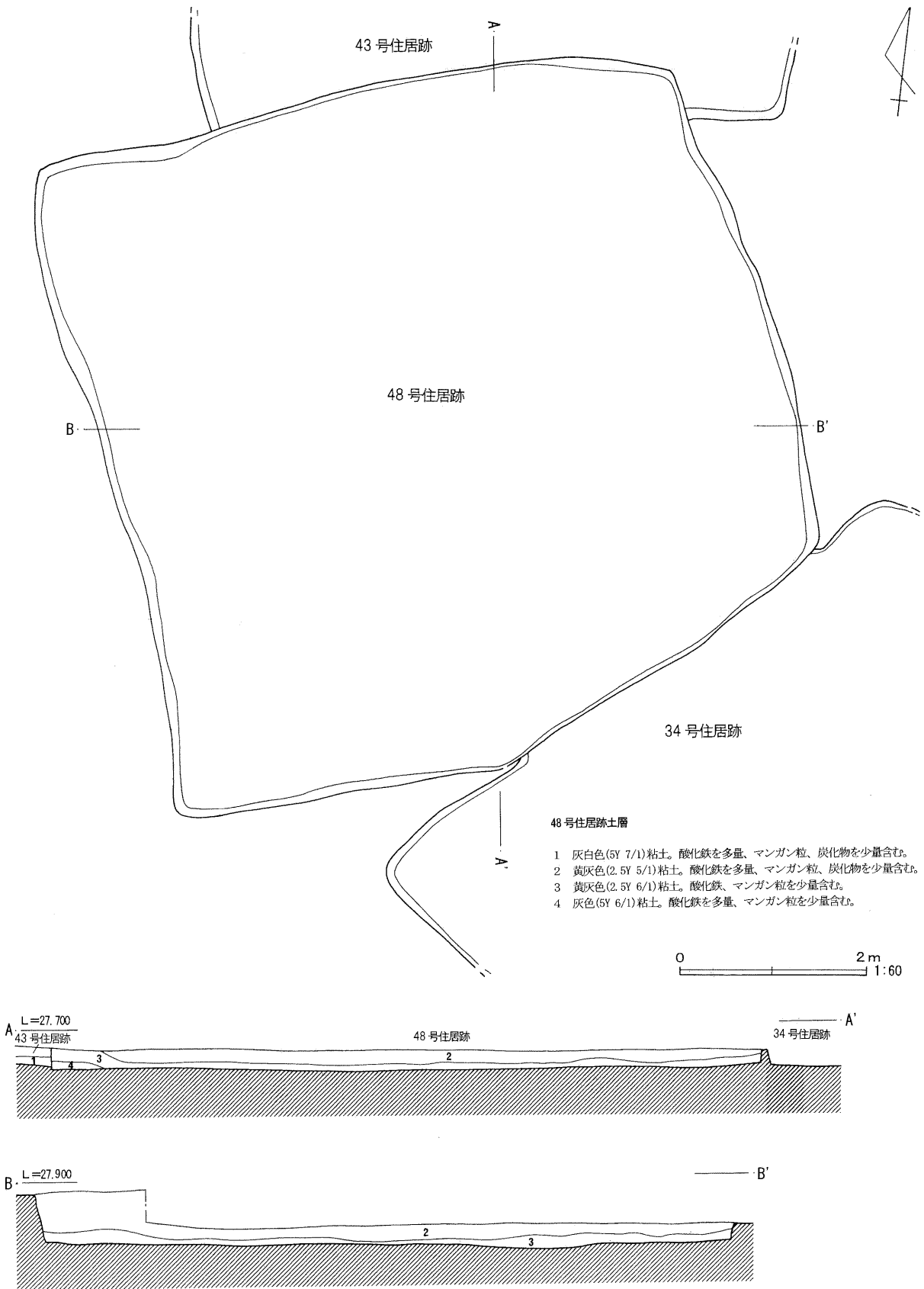
(第148図) 北辺6.22m、東辺8.90m、南辺6.46m、西辺6.50mを計る。北辺が脹らみをもつため、不整であるが、長方形を呈する。主軸方位は、N-80°-Eを示す。

壁は、垂直に立ち上がり、掘り込み確認面から床面までの深さは、25cm前後である。

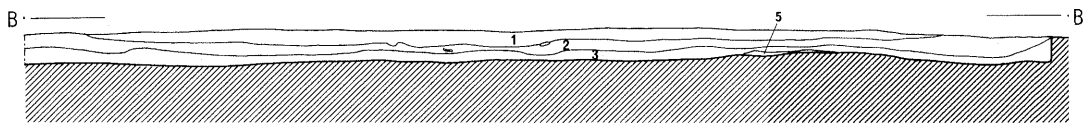
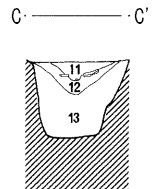
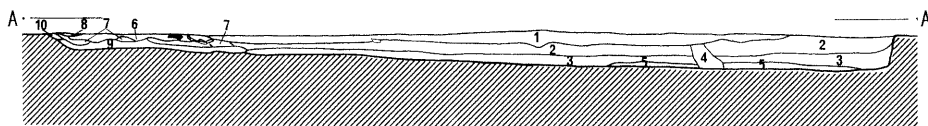
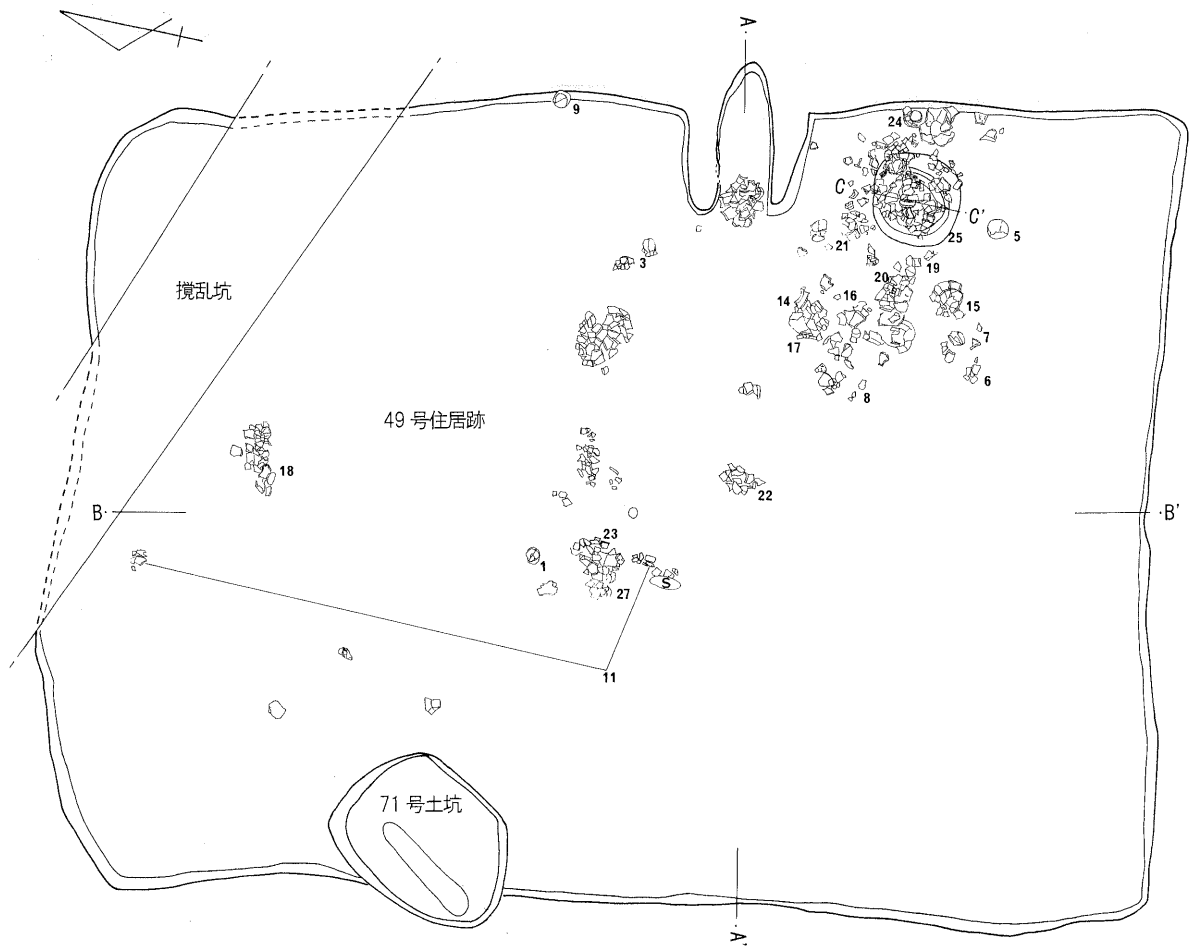
床面は、踏み固められた面もあって、安定しているが、やや凹凸が多く、西に向けて傾傾斜している。

ピットは、カマド右（南）に穿たれている。隅円方形を呈し、径72×75cm、深さ61cmを計る。貯蔵穴と思われる

カマドは、東壁中央から南東隅寄りに設置されている。袖は、竪穴内に作り付けられ、長さ95cm（左）、80cm（右）、両袖間は41cmを計る。火床・燃焼部は、区分できないが、両袖前面よりさらに25cm程竪穴内に延伸している。焼土面は、全体で68cmの奥行きをもち、奥に向けてわずかに立ち上がりながら移行していく。焼土面の直上には土師器甕が出土しているが、強烈な被熱によって、粉状に変化していた。焼土面の奥は、60cmの間



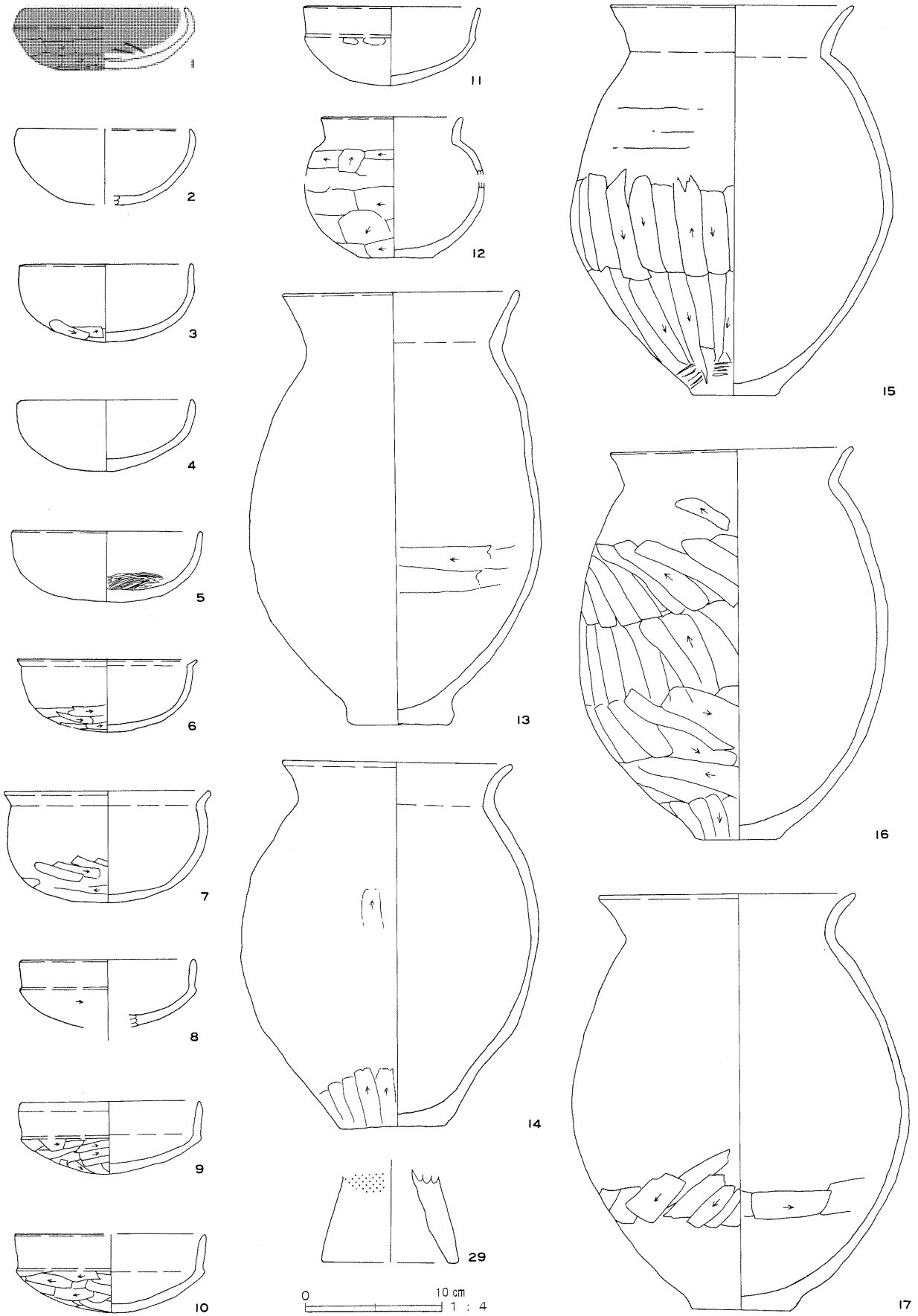
第145図 C区48号住居跡



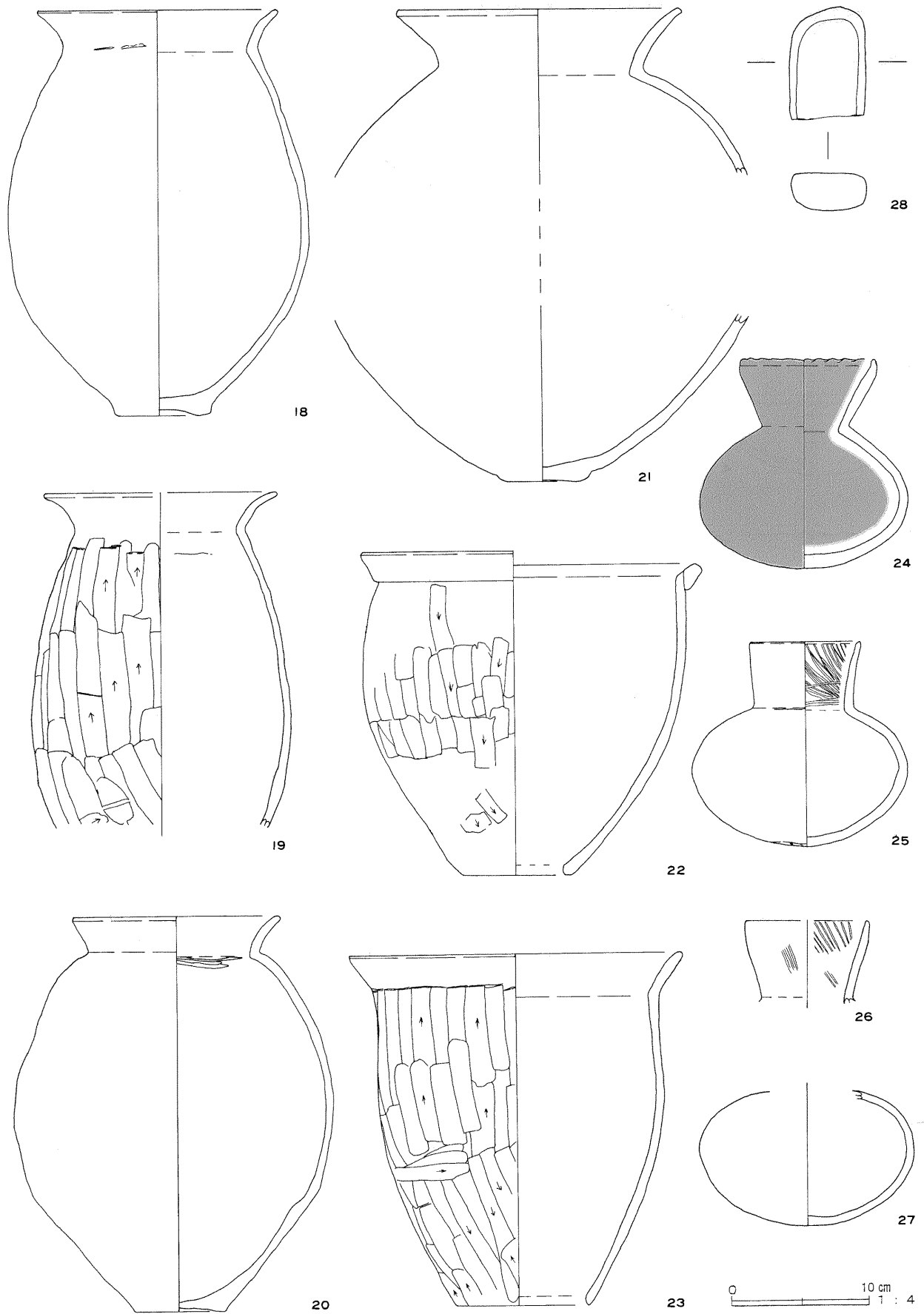
- 1 暗灰黄色(2.5Y 4/2)粘土。マンガン粒を多量、炭化物を少量含む。
- 2 暗灰黄色(2.5Y 5/2)粘土。マンガン粒を多量、炭化物、焼土粒を少量含む。
- 3 暗灰黄色(2.5Y 4/2)粘土。マンガン粒を多量、炭化物、焼土粒を少量含む。
- 4 灰色(7.5Y 5/1)粘土。酸化鉄、炭化物を少量含む。
- 5 黄灰色(2.5Y 4/1)粘土。マンガン粒を少量含む。
- 6 暗灰黄色(2.5Y 4/2)粘土。マンガン粒、焼土粒を少量含む。
- 7 暗赤褐色(5YR 3/2)焼土層。被熱層。
- 8 橙色(5YR 6/8)焼土層。
- 9 灰色(N 4/0)灰層。焼土ブロックを多量含む。
- 10 暗赤褐色(5YR 3/2)焼土層。7層との間に灰層が含まれる。
- 11 にぶい黄褐色(10YR 5/4)シルト。褐灰色(10YR 5/1)粘土小ブロック、炭化物を少量含む。
- 12 橙色(5YR 6/8~7/8)粘土。焼土塊と炭化物の混在層。
- 13 明黄褐色(10YR 6/8)シルト。橙色(5YR 6/8)焼土、炭化物粒を微量含む。

0 L = 28.200m 2m 1:60

第146図 C区49号住居跡



第147図 C区49号住居跡出土遺物(1)



第148图 C区49号住居跡出土遺物(2)

第75表 C区49号住居跡出土遺物観察表(第147・148図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・杯	11.6	4.4	—	⑥①②④	②	にぶい橙	一部欠	口縁部横ナデ。体部外面上位ナデ、中位以下～底面ケズリ。内面上位ナデ、中位～底面ヘラナデ。外面底部以外全面朱塗。
2	土師器・杯	(12.5)	—	—	③①⑥④②	②	橙	1/2	内外面磨滅。口縁内面横ナデ。
3	土師器・杯	(12.6)	5.6	—	⑥②①④	②	橙	1/3	外面口縁～体部中位横のナデ、下位ケズリ。内面磨滅。
4	土師器・杯	(12.6)	5.2	—	⑥②③①④	②	橙	1/2	内外面共表面磨滅。
5	土師器・杯	13.3	5.2	—	⑥②①③④	②	にぶい橙	一部欠	外面磨滅。内面口縁～体部上位横ナデ、中位以下ミガキ。
6	土師器・杯	13.0	5.3	—	②①③④⑥	②	橙	2/3	口縁部横ナデ。体部外面上位ナデ、下位ケズリ。内面ミガキ様ナデ。内外面煤附着。
7	土師器・杯	15.0	8.1	—	②③①⑥④	②	橙		口縁部横ナデ。体部外面上位ナデ、下位ケズリ、一部ナデが加わる、底部ナデ。内面ナデ。
8	土師器・杯	12.8	—	—	⑥②①④	②	明赤褐	2/3	内面全面磨滅。外面口縁部横ナデ、体部ケズリ痕。
9	土師器・杯	13.0	5.3	—	①②③④⑥	②	橙	ほぼ完形	口縁部横ナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。
10	土師器・杯	(14.0)	5.8	—	①②③④⑥	②	橙	2/3	内面全面磨滅。口縁部横ナデ。体部外面ケズリ。
11	土師器・杯	12.8	5.8	—	⑥③①②④	②	橙	口縁部1/2欠	口縁部横ナデ。体部外面ケズリの後ナデ、内面ナデ。磨滅・剥離した部分多い。
12	土師器・短頸壺	(10.2)	—	5.2	⑥②①③④	②	橙	中位欠1/2	外面口縁～肩横のナデ、胴部～底面ケズリ。内面横のナデ、胴部中位の木口状工具による横のナデ。
13	土師器・甕	17.4	31.5	6.9	⑥④②③①	②	浅黄橙	2/3	口縁部外面横のナデ、内面木口状工具による横のナデ。胴部外面木口状工具による縦のナデ、下位斜のナデ。一部ナデが加わる。煤附着。赤色化。上げ底。内面ナデ、中・下位接合部横のケズリ、吸炭。二次加熱。
14	土師器・甕	16.8	26.9	7.7	⑥①④②	②	橙	3/4	口縁部横ナデ。胴部外面ナデ、ナデツケ混在、一部ケズリ、底面ケズリ、赤色化。内面ナデ。
15	土師器・甕	17.8	28.4	6.2	⑥②①③④	②	浅黄橙	2/3	口縁部横ナデ。胴部外面上位ナデ、輪積み痕残す。中位以下ケズリ、底面ケズリ、吸炭、煤附着、赤色化。内面上位木口状工具によるナデ、中位以下ナデ、一部炭化物附着。
16	土師器・甕	17.8	28.7	6.2	⑥②③①④	②	黄橙	一部欠	口縁～胴部肩、外面縦、内面横の木口状工具によるナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ、吸炭、赤色化、二次加熱。
17	土師器・甕	18.8	30.4	7.3	②⑥①③④	②	浅橙	一部欠	口縁部横ナデ。胴部内外面共、中・下位接合部のみケズリ、他はナデ。外面下位吸炭。赤色化。剥落した部分多い。内面下位吸炭。二次加熱。
18	土師器・甕	17.6	29.7	7.1	⑥①②③	②	灰白	4/5	口縁部横ナデ。胴部外面ケズリの後ナデが加わる。下位赤色化し剥落した部分多い。上げ底。内面ナデ。二次加熱。
19	土師器・甕	(17.1)	—	—	⑥③①④	②	浅黄橙	3/5	口縁部横ナデ。胴部外面ケズリ、中位以下煤附着。内面ナデ、吸炭。
20	土師器・甕	15.3	29.0	6.7	⑥①④	②	明赤褐	一部欠	口縁部横のナデ。胴部外面ナデ、赤色化、下位～底部表面剥落。内面ナデ、接合部のみヘラ先によるナデ、下位炭化物附着。二次加熱。
21	土師器・甕	20.9	—	6.7	③①②④⑥	②	橙	中位欠	口縁～胴部上位、胴部内面横のナデ、他全面磨滅。胴部下位～底部外面、木口状工具によるナデ。上げ底。内面横のナデ、磨滅した部分多い。
22	土師器・甕	25.0	24.0	8.0	②③①④⑥	②	橙	上位1/2欠	口縁部横ナデ。胴部外面縦のケズリ、上・下位はナデが加わる。内面ナデ、円孔部ケズリの後ナデで調整。
23	土師器・甕	24.6	25.8	9.8	⑥②①③④	②	浅黄橙	3/4	口縁部横ナデ、赤色化。胴部外面ケズリ、内面ヘラナデ。円孔部ケズリ後ナデで調整。
24	土師器・罎	9.7	15.5	—	①③②④	②	灰白	一部欠	羽状口縁。口縁部及び胴部外面朱塗。口縁部・口唇部横ナデ、以下ナデ。外面のみ後にミガキが加わる。胴部外面ナデ、中・下位接合部ケズリ、内面ナデ。
25	土師器・小型壺	8.0	15.2	—	②①③⑥④	②	橙	ほぼ完形	外面ミガキ様ナデ、胴部中位及び底面ケズリ。内面口縁ミガキ後、下位のみ回転のヘラナデ。
26	土師器・小型壺	9.0	—	—	②③①④	②	橙	口縁1/4	内外面共口唇部横ナデ、以下ナデ斜のミガキ。
27	土師器・小型壺	—	—	—	③②①⑥④	②	橙	口縁欠	内外面共ナデ。
28	砥石	長さ 8.1 幅 5.5 厚さ 2.8 重さ 230g						—	
29	羽口	(10.0)	—	—	①②③④⑥	②	橙	—	
30	礫	長さ 26.2 幅 10.3 厚さ 10.0 重さ 4,000g						—	
31	礫	長さ 16.5 幅 6.5 厚さ 4.1 重さ 640g						—	
32	礫	長さ 8.3 幅 6.0 厚さ 2.9 重さ 250g						—	
33	礫	長さ 8.7 幅 8.9 厚さ 2.1 重さ 250g						—	

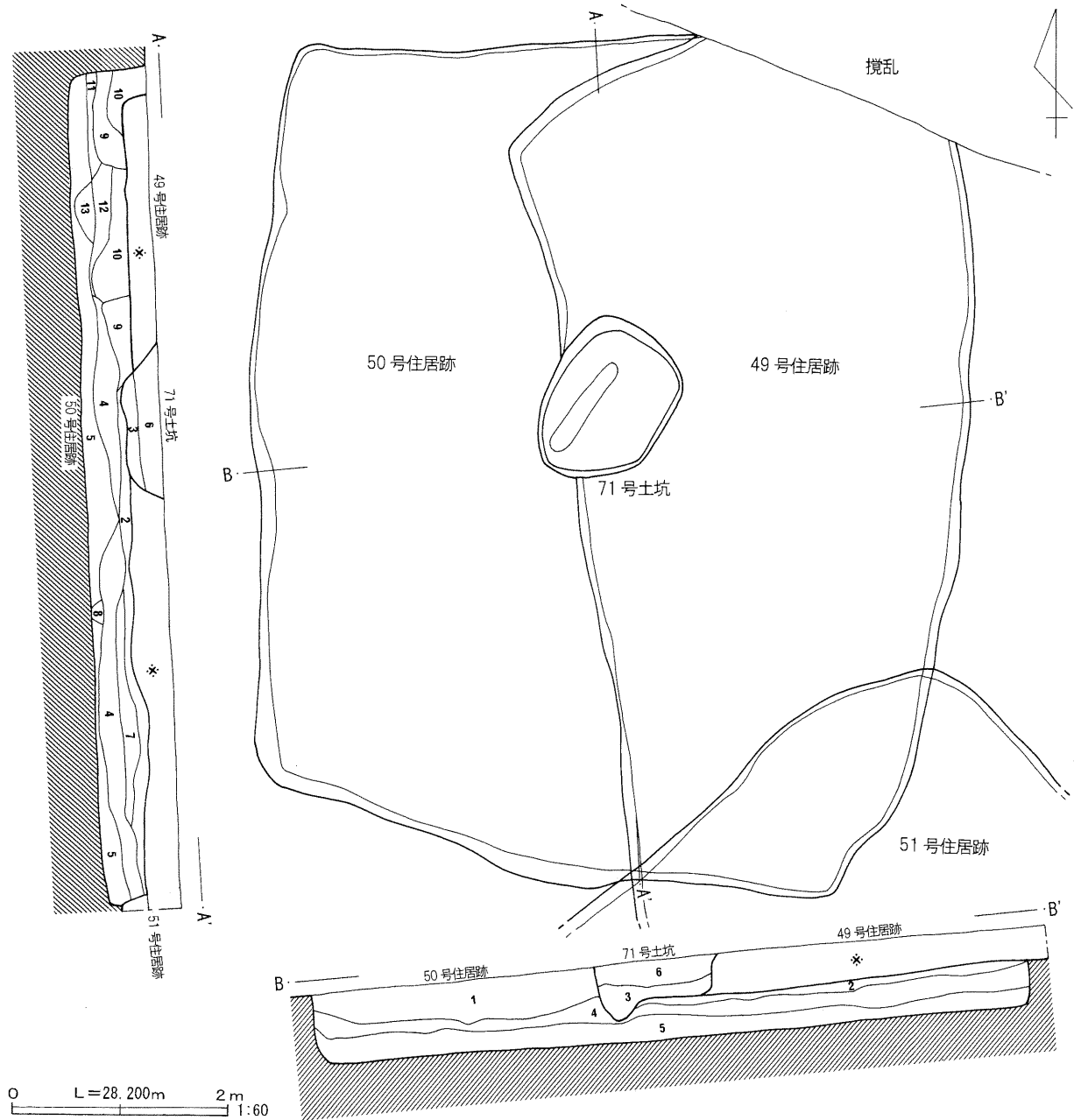
ほぼ水平面を成し、湾曲して立ち上がる。奥壁は、堅穴外へ張り出している。

覆土は、多量のマンガング粒を含む暗灰黄色粘土であり、少量の炭化物を含む第1層、少量の炭化物・焼土粒を含む第2・3層に区分される。また一部床面上には、少量のマンガング粒を含む黄灰色粘土層(第5層)、少量の酸化鉄・炭化物を含む灰色粘土(第4層)の堆積している部分もみられる。

遺物は、全て第3層上から出土している。土器は土師器のみである。北壁中央下から東



壁中央下にかけて、甕（18）、杯（9）が分離している以外は、2ヶ所に集中している。カマド前及び貯蔵穴前では、杯類の3から、8、6、7、貯蔵穴脇の5までが矩形に並び、その内側に甕類が、17、14、16、20、21、15、19、そして小型壺25、東壁直下の埴24が配されている。竪穴中央部では、杯（1・11）、甕（22・23）、小型壺（27）、礫（30～33）が集中している。その他、砥石（28）、羽口（29）も出土している。



50号住居跡土層

- |  |  |
|--|--|
| 1 明黄褐色(2.5Y 6/6)シルト。マンガン粒を多量、炭化物を少量含む。       | 8 明黄褐色(7.5YR 5/8)シルト。マンガン粒、粘土粒を多量、炭化物を少量、焼土含む。 |
| 2 にぶい黄褐色(10Y 5/4)シルト。マンガン粒を多量、炭化物を少量含む。      | 9 褐灰色(10YR 6/1)粘土。酸化鉄を含む。                      |
| 3 黄褐色(2.5Y 5/6)シルト。マンガン粒を多量、炭化物を少量含む。        | 10 褐色(10YR 4/4)シルト。マンガン粒、粘土粒、炭化物、焼土少量を含む。      |
| 4 明黄褐色(10YR 6/8)シルト。マンガン粒、粘土粒を多量、炭化物を少量含む。   | 11 黄灰色(2.5Y 6/1)シルト。酸化鉄を多量含む。                  |
| 5 明黄褐色(2.5Y 6/8)シルト。マンガン粒、粘土粒を多量、炭化物を少量含む。   | 12 黄褐色(10YR 6/8)シルト。マンガン粒、粘土粒を多量含む。            |
| 6 オリーブ褐色(2.5Y 4/4)シルト。マンガン粒、粘土粒を多量、炭化物を少量含む。 | 13 にぶい赤褐色(5YR 4/4)シルト。マンガン粒、粘土粒を多量含む。          |
| 7 明黄褐色(2.5Y 6/8)シルト。マンガン粒、粘土粒を多量、炭化物を少量含む。   | ※ 49号住居跡覆土。                                    |

第149図 C区50号住居跡、71号土坑

**50号住居跡** F-13からF-14グリッドに亘って位置する。第一確認面下位からの検出である。

(第149図) 49号・51号両住居跡及び71号土坑によって削平され、北東隅は、攪乱坑によって切断されている。

北辺 $3.85 + \alpha$  m、東辺 $7.20 + \alpha$  m、南辺5.36m、西辺6.90mを計る。東辺が湾曲し、南辺の両隅も直角を成さないことから、不整形であるが、長方形を基本としていると思われる。西辺の軸方位は、 $N-4^{\circ}-E$ を示す。

壁は、垂直に立ち上がり、掘り込み確認面から床面までの深さは、70cm前後である。床面は、やや凹凸がみられるが、踏み固められた面もあって、安定している。

ピット、炉等は、検出されていない。

覆土は、上位から、多量のマンガン粒及び少量の炭化物を含む明黄褐色シルト層（第1層）、多量のマンガン粒及び少量の炭化物を含むにぶい黄褐色シルト層（第2層）、多量のマンガン粒・粘土粒及び少量の炭化物を含む明黄褐色シルト層（第4層）、多量のマンガン粒・粘土粒及び少量の炭化物を含む明黄褐色シルト層（第5層・第4層より黄味が強い）が堆積している。第2層は、堆積していない部分もみられ、第2層と第4層の間には、第5層とほぼ同様な、多量のマンガン粒・粘土粒及び少量の炭化物を含む明黄褐色シルト層（第7層）が堆積している部分もみられる。また北部では、第4層以上がみられず、代わって、酸化鉄を含む褐灰色粘土層（第9層）、マンガン粒・粘土粒・炭化物及び少量の焼土粒を含む褐色シルト層（第10層）、多量の酸化鉄を含む黄灰色シルト層（第11層）、多量のマンガン粒・粘土粒を含む黄褐色シルト層（第12層）、多量のマンガン粒・粘土粒を含むにぶい赤褐色シルト層（第13層）が堆積している。第9層から第13層は、いずれも投入土の様相を呈している。

遺物は、磨耗した土師器小片が出土したのみで、図示可能なものはない。

**51号住居跡** F-13・14からG-13・14グリッドに亘って位置する。第一確認面下位からの検出（第150図）である。

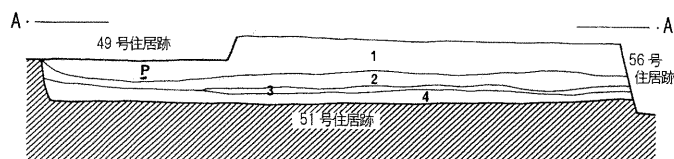
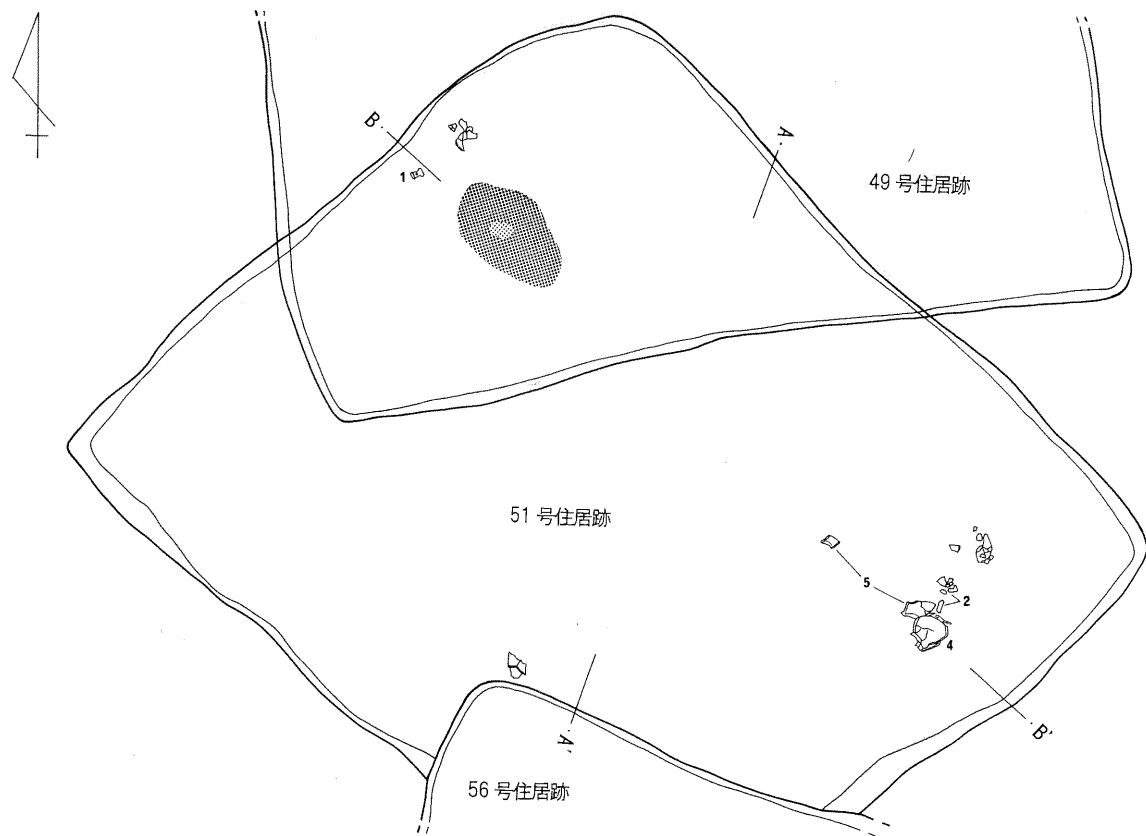
(第151図) 48号・50号両住居跡を削平しているが、49号住居跡によって削平され、56号住居跡によって切断されている。

北西辺5.75m、北東辺6.25m、南東辺 $3.48 + \alpha$  m、北西辺 $4.05 + \alpha$  mを計る。北西・南東辺が曲折し、北隅も直角を成さないことから、不整形であるが、長方形を基本としていると思われる。北東辺の軸方位は、 $N-45^{\circ}-W$ を示す。

壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、掘り込み確認面から床面までの深さは、55cm前後である。床面は、やや凹凸がみられるが、踏み固められた面もあって、安定している。また、北西半部分は、全体に3~5cm盛り上がっている。

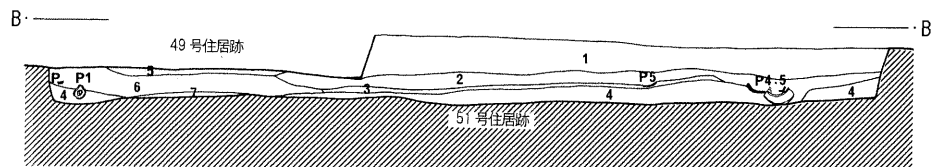
ピット、炉等は、検出されていないが、床面の盛り上がった北西端部分では、 $110 \times 65$ cmの範囲で炭化物が堆積し、そのやや北西寄りに、径15cmの範囲で、ほとんど厚みをもたない焼土面が検出されている。炉とするには、弱い焼土である。

覆土は、上位から、少量の炭化物お呼び微量の焼土を含む黄褐色シルト層（第1層）、



51号住居跡土層

- 1 黄褐色(2.5Y 5/4)シルト。炭化物を少量、橙色(5YR 7/8)焼土粒を微量含む。
- 2 明黄褐色(2.5Y 7/6)シルト。マンガン粒を多量含む。
- 3 灰白色(2.5Y 7/1)粘土。炭化物を微量含む。
- 4 浅黄色(2.5Y 7/4)粘土。炭化物を少量含む。
- 5 1層と同様。
- 6 黄褐色(2.5Y 5/6)シルト。炭化物粒をやや多量、淡黄色(2.5Y 8/3)シルト粒を小ブロック状に少量点在している。
- 7 炭化物層。

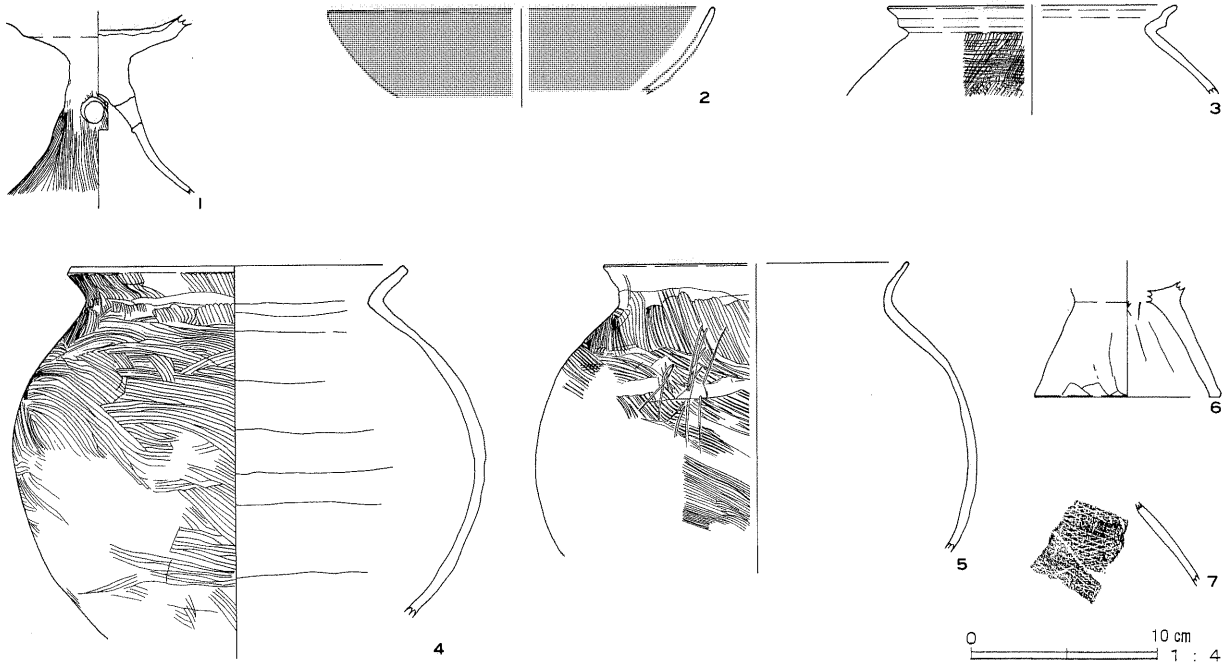


0 L=28.100m 2m 1:60

第150図 C区51号住居跡

第76表 C区51号住居跡出土遺物観察表 (第151図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・高杯	—	—	—	⑥①③②④	②	橙	杯上位及び脚裾部欠	脚部四方透かし(円孔)。外面杯部～脚部上位(穿孔部位)ナデ、下半縦の刷毛目。内面上位縦のナデツケ、下位ナデ。
2	土師器・鉢	(11.0)	—	—	③①④②	②	赤	口縁部 1/8	全面ナデ。内外面朱塗。
3	土師器・台付甕	(15.6)	—	—	⑥②①④③	②	にぶい橙	口縁部 1/8	口縁部横のナデ。胴部外面縦後横の刷毛目、内面縦横のナデ。外面煤付着。二次加熱。
4	土師器・台付甕	18.5	—	—	⑥②①③④	②	灰白	底部欠	外面口縁～括れ部縦の刷毛目、括れ部には横のナデが加わる。胴部横～斜の刷毛目、中位以下にナデが加わる、下半赤化、上位煤付着。内面全面ナデ、輪積み痕を残す。二次加熱。
5	土師器・台付甕	(16.6)	—	—	⑥①④②	②	にぶい橙	上位 1/2	口縁部横ナデ。胴部外面括れ～肩縦、上位～中位斜の刷毛目、煤付着、一部ヘラ先による条痕、下半赤化し表面剥離。内面横のナデ、炭化物付着。
6	土師器・台付甕	—	—	10.0	③①②④	②	橙	台部 1/2	外面縦のナデ。内面斜のナデツケ。二次加熱。
7	土師器・壺	—	—	—	③①④	②	にぶい橙	—	



第151図 C区51号住居跡出土遺物

多量のマンガン粒を含むにぶい明黄褐色シルト層（第2層）、微量の炭化物を含む灰白色粘土層（第3層）、少量の炭化物を含む浅黄色粘土層（第4層）が堆積している。また、北隅部分では、第2・3層が堆積せず、代わって多量の炭化物及び少量の淡黄色シルト小ブロックを含む黄褐色シルト層（第6層）がみられる。なお、第6層上の第5層は、第1層と同一である。

遺物は、第4層上から、北西壁下では土師器高杯（1）が、東隅寄りでは土師器鉢（2）、甕（4・5）が出土している。また第2層中から、土師器台付甕（3・6）、壺（7）が出土している。）

**52号住居跡** F-15からG-14・15グリッドに亘って位置する。第一確認面下位からの検出である。

(第152図) 54号住居跡を削平しているが、53号住居跡に切断されている。

(第153図) 北辺6.15m、東辺6.22m、南辺1.85+ $\alpha$ mを計る。西辺が削除されているため明確

(第154図) ではないが、ほぼ正方形を呈すると思われる。主軸方位は、N-92°-Eを示す。

(第155図) 壁は、垂直に立ち上がり、掘り込み確認面から床面までの深さは、45cm前後である。

(第156図) 床面は、やや凹凸がみられるが、踏み固められた面もあって、安定している。

ピットは、カマド右（南）脇に1ヶ所穿たれている。崩れた隅円方形を呈し、径90×82cmを計る。深さは40cm以上になる。

カマドは、東壁中央からやや北東隅寄りに、煙道の一部までが竪穴内に位置するように設置されている。袖は、竪穴内に作り付けられ、長さ100cm（左）、92cm（右）、両袖間は42cmを計る。焼土面が残存しておらず、火床・燃烧部は、区分できない。左袖部では、奥行き55cmから幅を狭めてくる。この左袖の変換点から矩形を成して、高さ12cm前後で斜面を成す壁が存在する。右袖も、この壁の部分で幅を狭めてくるため、ここまで

が燃焼部であったと思われる。底面は、竪穴床面から変化は見られない。壁の奥は、一旦湾曲し、凹凸を繰り返し、135cmの長さをもって、やや湾曲して立ち上がる。煙道の幅は、18cm前後である。

覆土は、上位から、多量のマンガン粒及び、少量の炭化物を含む灰黄褐色粘土層(B-B'ライン第6層)、多量のマンガン粒を含む灰褐色粘土層(B-B'ライン第7層)、多量のマンガン粒を含むにぶい褐色粘土層(B-B'ライン第8層)である。

遺物は、いずれも床面からの出土であり、カマドから貯蔵穴周辺にかけて集中している。カマド内から土師器甕(20)、カマド前から土師器杯(6・11)、甕(12・13・15・16)、壺(26)、カマド右脇から貯蔵穴と竪穴の壁の間に亘って、土師器甕(17・21・22・19・24・23)、甕(29)、一番南東隅寄りに杯類(4・3・7・5・10・8)が出土している。また貯蔵穴内からは、須恵器坏(1)、土師器甕(18)、礫(36・38)、貯蔵穴上面からは、土師器杯(2)、壺(25)、埴(27)等が出土している。その他、砥石(30)、羽口(31)、スラグ(32)等も検出されている。

**53号住居跡** F-15からG-15グリッドに亘って位置する。第一確認面下位からの検出である。

54号住居跡を削平し、52号住居跡を切断している。

(第152図) 北辺5.80m、東辺6.80m、南辺5.22m、西辺7.10mを計る。北辺が屈曲しているため

(第153図) 不整形ではあるが、ほぼ長方形を呈すると思われる。主軸方位は、N-160°-Eを示す。

(第157図) 壁は、垂直に立ち上がり、掘り込み確認面から床面までの深さは、50cm前後である。

(第158図) 床面は、やや凹凸がみられるが、踏み固められた面もあって、ほぼ水平面を成して、安定している。

ピットは、中央から南西隅寄りに1ヶ所穿たれている。円形を呈し、径65×54cm、深さ7cmを計る。

カマドは設置されていないが、南壁中央部の上面が幅32cm、奥行き43cmの範囲が、深さ12cm(壁部分)で掘り込まれている。底面は、奥に向けて弓状に立ち上がっている。焼土層(C-C'ライン第11層)及び灰層(C-C'ライン第12層)がたいせきしており、煙道を構成していた可能性がある。

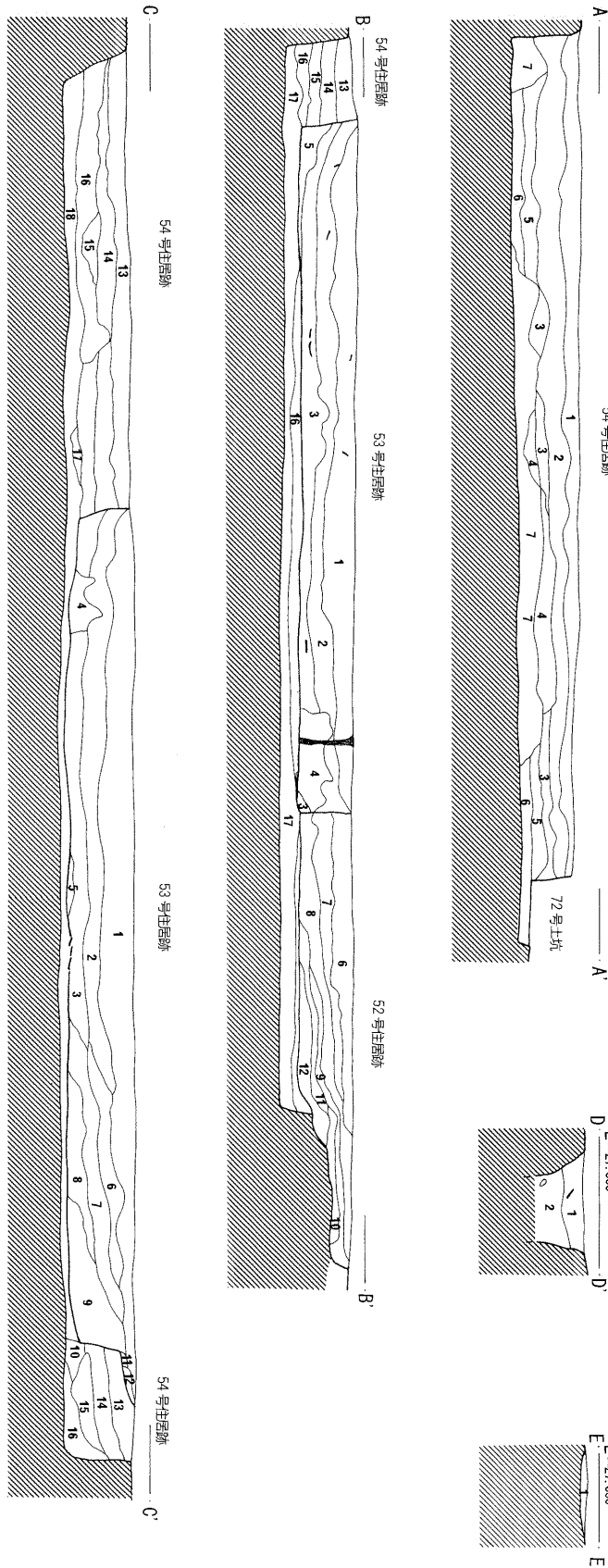
覆土は、上位から、多量のマンガン粒及び、少量の炭化物を含む灰黄褐色粘土層(B-B' C-C'ライン第1層)、多量のマンガン粒及び少量の炭化物を含む暗灰黄色粘土層(B-B' C-C'ライン第2層)、少量のマンガン粒を含む黄褐色粘土層(B-B' C-C'ライン第3層)である。また、南側部分には、上位から、多量のマンガン粒及び、少量の焼土粒を含む暗灰黄色粘土層(C-C'ライン第6層)、多量のマンガン粒・焼土粒及び、少量の炭化物を含む暗灰黄色粘土層(C-C'ライン第7層)、多量のマンガン粒及び、少量の焼土粒を含む暗灰黄色粘土層(C-C'ライン第8層)、多量のマンガン粒・焼土粒・灰を含む褐灰色粘土層(C-C'ライン第9層)が堆積している。

遺物は、全て第1次埋没土から出土している。土師器甕(9)が北壁下から出土した以外は、南西部に集中している。いずれも土師器であり、杯(1~4)、甕(5~8・10)、



第152図 C区52号・53号住居跡(1)

52号・53号・54号住居跡土層



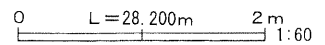
- A — A'
- 1 明黄褐色(10YR 6/8)粘土。マンガン粒を多量、褐灰色粘土粒を含む。
  - 2 明黄褐色(10YR 6/6)粘土。マンガン粒を多量、褐灰色粘土、炭化物、焼土を少量含む。
  - 3 黄褐色(2.5Y 5/6)粘土。マンガン粒を多量、褐灰色粘土、炭化物、焼土を少量含む。
  - 4 褐灰色(10YR 6/1)粘土。酸化鉄を多量に含む。
  - 5 明黄褐色(2.5Y 6/8)粘土。マンガン粒を多量、褐灰色粘土、炭化物を少量含む。
  - 6 におい 褐色(7.5Y 5/4)粘土。マンガン粒を多量に含む。
  - 7 褐灰色(10Y 6/1)粘土。酸化鉄を多量、黄褐色粘土を含む。

- B — B'
- 1 明黄褐色(2.5Y 6/6)粘土。マンガン粒を多量、炭化物を少量含む。
  - 2 暗灰黄色(2.5Y 4/2)粘土。マンガン粒を多量、炭化物を少量含む。
  - 3 黄褐色(2.5Y 5/4)粘土。マンガン粒を少量含む。
  - 4 灰色(7.5Y 4/1)粘土。酸化鉄を多量、炭化物を少量含む。
  - 5 灰色(5Y 5/1)粘土。酸化鉄を少量含む。
  - 6 灰黄褐色(10YR 4/2)粘土。マンガン粒を多量、炭化物を少量含む。
  - 7 灰褐色(7.5YR 4/2)粘土。マンガン粒を多量含む。
  - 8 におい 褐色(7.5YR 4/3)粘土。マンガン粒を多量含む。
  - 9 におい 褐色(7.5YR 4/3)粘土。焼土粒を多量、マンガン粒を少量含む。
  - 10 黄褐色(2.5Y 5/6)粘土。
  - 11 明黄褐色(2.5Y 5/6)粘土。焼土粒を少量含む。
  - 12 黄褐色(2.5Y 5/6)粘土。焼土粒を少量含む。
  - 13 明黄褐色(10YR 6/8)粘土。マンガン粒を多量、褐灰色粘土粒を含む。
  - 14 明黄褐色(10YR 6/6)粘土。マンガン粒を多量、褐灰色粘土粒、炭化物、焼土粒を少量含む。
  - 15 黄褐色(2.5Y 5/6)粘土。マンガン粒を多量、褐灰色粘土粒、炭化物、焼土粒を少量含む。
  - 16 明黄褐色(2.5Y 6/8)粘土。マンガン粒を多量、褐灰色粘土粒、炭化物を少量含む。
  - 17 灰色(10Y 6/1)粘土。酸化鉄を多量、黄褐色粘土を含む。

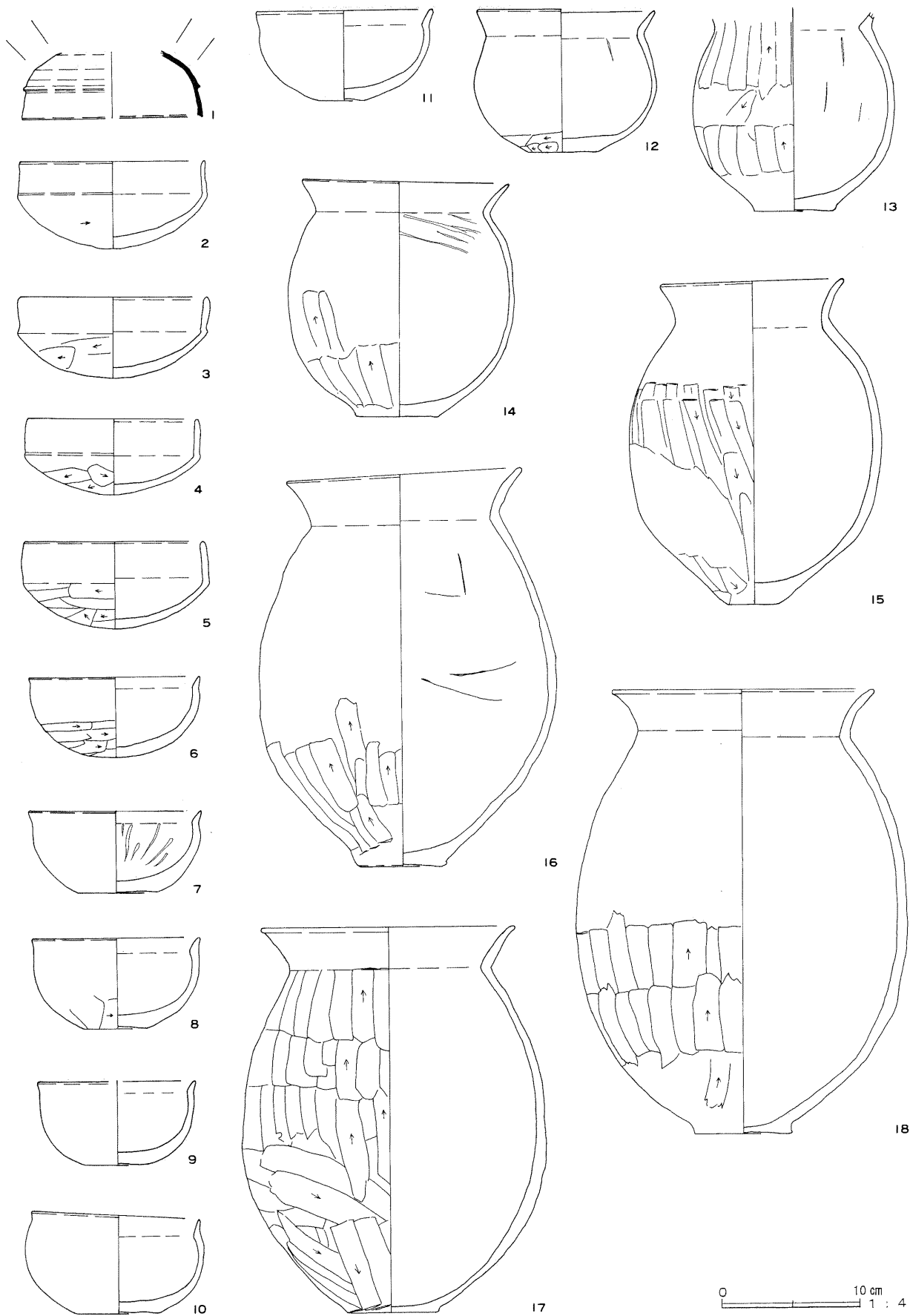
- C — C'
- 1 明黄褐色(2.5Y 6/6)粘土。マンガン粒を多量、炭化物を少量含む。
  - 2 暗灰黄色(2.5Y 4/2)粘土。マンガン粒を多量、炭化物を少量含む。
  - 3 黄褐色(2.5Y 5/4)粘土。マンガン粒を少量含む。
  - 4 灰色(7.5Y 4/1)粘土。酸化鉄を多量、炭化物を少量含む。
  - 5 におい 褐色(10YR 4/3)粘土。焼土を多量含む。
  - 6 暗灰黄色(2.5Y 5/2)粘土。マンガン粒を多量、焼土粒を少量含む。
  - 7 暗灰黄色(2.5Y 4/2)粘土。マンガン粒、焼土粒を多量、炭化物を少量含む。
  - 8 暗灰黄色(2.5Y 5/2)粘土。マンガン粒を多量、焼土粒を少量含む。
  - 9 褐灰色(10YR 4/1)粘土。マンガン粒、焼土粒、灰を多量含む。
  - 10 灰色(2.5Y 6/1)粘土。酸化鉄を多量含む。
  - 11 明黄褐色(5YR 5/8)焼土層。
  - 12 灰色(N 4/0)灰層。焼土粒を少量含む。
  - 13 明黄褐色(10YR 6/8)粘土。マンガン粒を多量、褐灰色粘土粒を含む。
  - 14 明黄褐色(10YR 6/6)粘土。マンガン粒を多量、褐灰色粘土粒、炭化物、焼土を少量含む。
  - 15 黄褐色(2.5Y 5/6)粘土。マンガン粒を多量、褐灰色粘土粒、炭化物、焼土を少量含む。
  - 16 褐灰色(10YR 6/1)粘土。酸化鉄を多量含む。
  - 17 明黄褐色(2.5Y 6/8)粘土。マンガン粒を多量、褐灰色粘土粒、炭化物を少量含む。
  - 18 褐灰色(10Y 6/1)粘土。酸化鉄を多量、黄褐色粘土を含む。

- D — D'
- 1 灰色(5Y 6/1)粘土。マンガン粒、炭化物を多量、橙色(7.5YR 7/8)焼土小ブロックを少量含む。
  - 2 褐灰色(7.5YR 5/1)粘土。炭化物粒を多量含む。

- E — E'
- 1 明褐色(2.5Y 6/8)粘土。マンガン粒を多量、褐灰色粘土粒、炭化物を少量含む。

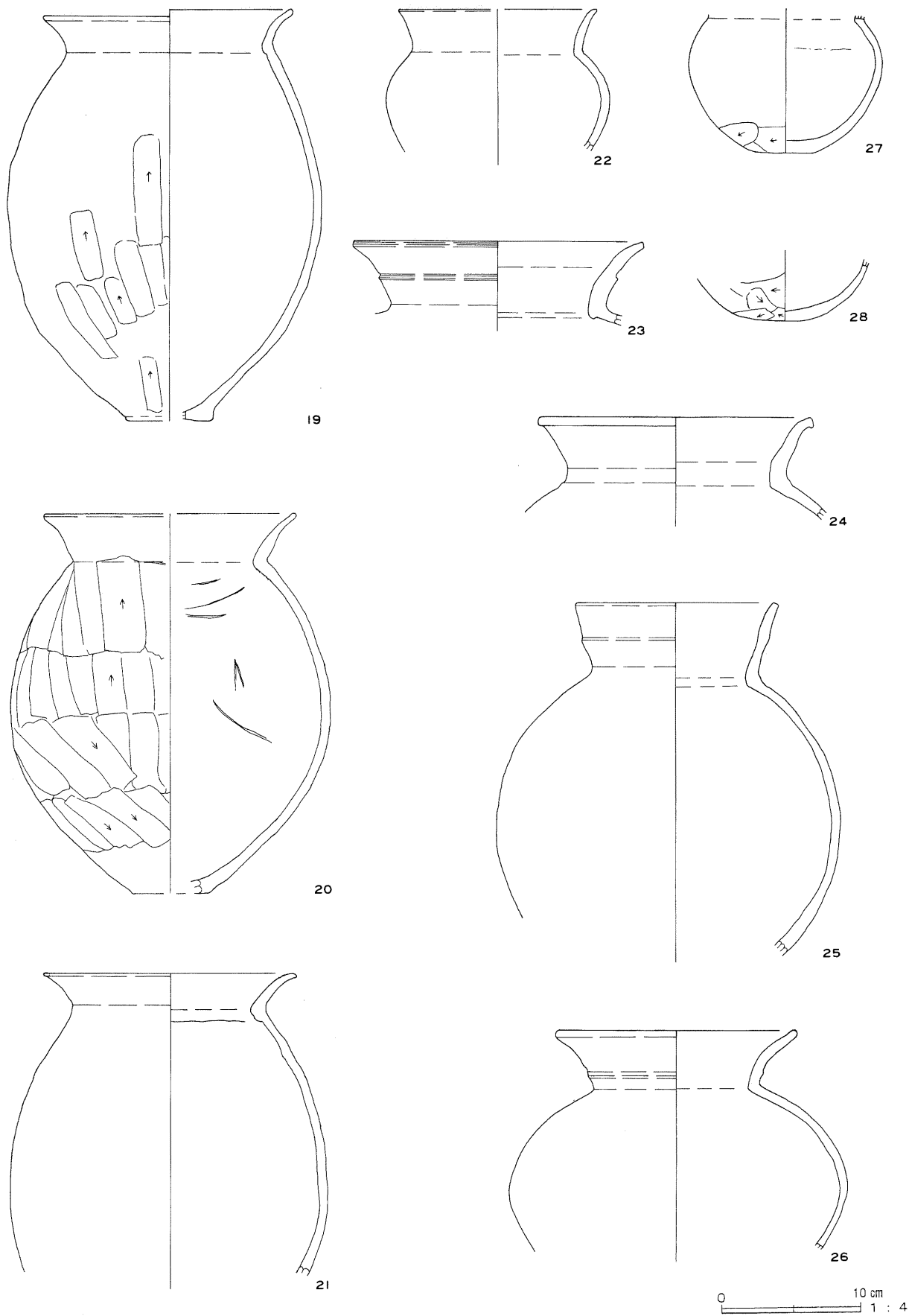


第153図 C区52号・53号・54号住居跡(2)

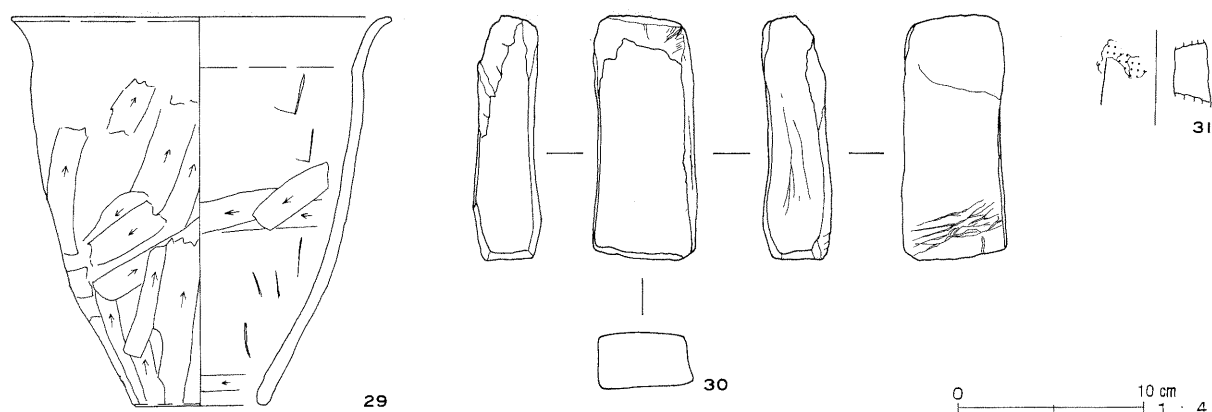


第154図 C区52号住居跡出土遺物(1)





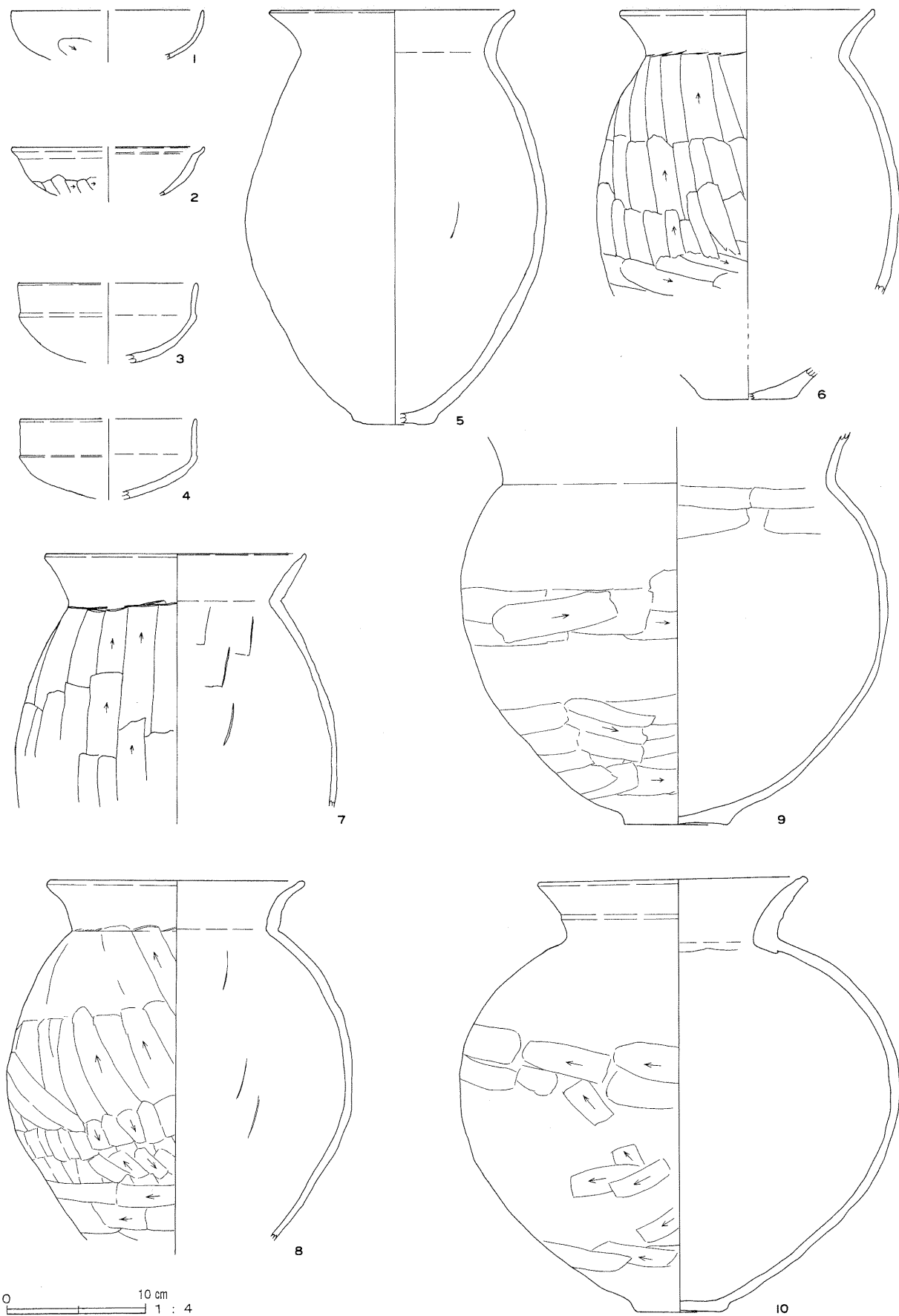
第155图 C区52号住居跡出土遺物(2)



第156図 C区52号住居跡出土遺物(3)

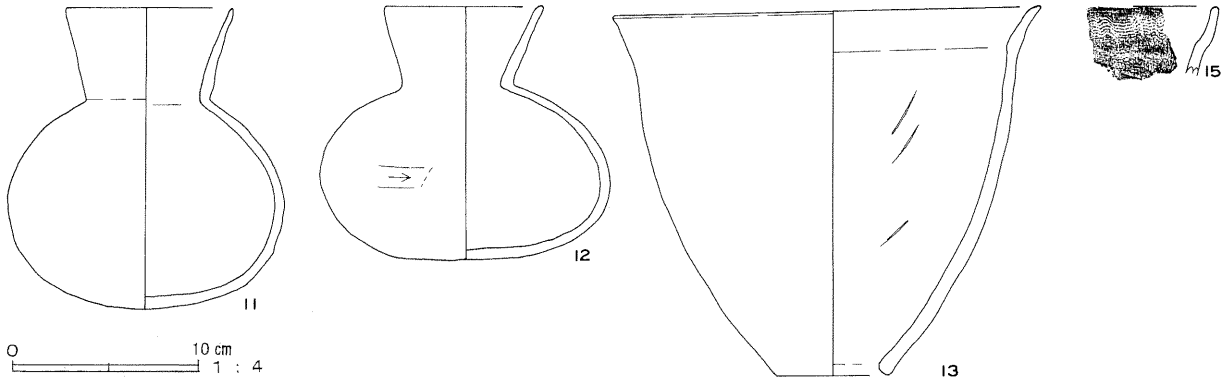
第77表 C区52号住居跡出土遺物観察表 (第154・155・156図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	須恵器・蓋杯	(13.1)	—	—	①⑥	①	青灰	底部欠2/3	
2	土師器・杯	13.4	6.4	—	①④⑥③②	②	橙	口縁部一部欠	口縁部横ナデ。体部内外面共磨滅、外面ケズリ痕。
3	土師器・杯	13.6	6.0	—	①②④⑥②	②	橙	ほぼ完形	口縁部横ナデ。体部外面ケズリ後ナデ、内面ナデ。
4	土師器・杯	12.2	5.5	—	①②③⑥④	②	橙	4/5	口縁部横ナデ。体部外面上位ナデ、他ケズリ、内面ナデ。
5	土師器・杯	13.0	6.4	—	①③②⑥④	②	橙	一部欠	外面口縁部横ナデ、体部ケズリ、上位に一部ナデが加わる。内面口縁～体部上位横ナデ、下位ナデ。
6	土師器・杯	12.5	5.9	—	⑥①④③②	②	橙	ほぼ完形	口縁部及び体部上位横ナデ。体部外面中位以下ケズリ、内面ナデ、底部押圧。
7	土師器・杯	12.6	6.0	5.7	③⑥①④②	②	橙	ほぼ完形	外面口縁部横ナデ、体部ナデ。内面口縁～体部上位横ナデ、以下ナデ、放射状のミガキ。
8	土師器・杯	12.1	6.1	4.5	③⑥①④②	②	橙	2/3	口縁部横ナデ。体部外面上位ナデ、下位ケズリ、底面ナデ、内面水拭き。
9	土師器・杯	(11.5)	6.2	4.6	③⑥①④②	②	橙	2/3	内外面共表面剥離。口唇部横ナデ、炭化物付着、胴部外面ナデ、煤付着、外面ケズリ。全体に赤色化。二次加熱。
10	土師器・杯	12.2	7.5	6.0	③⑥②①④	②	橙	ほぼ完形	口縁部及び体部内面上位横ナデ。体部外面剥離、内面指頭によるナデ。内外面一部吸炭。
11	土師器・杯	12.8	6.7	3.3	③②①⑥④	②	橙	ほぼ完形	外面口縁部横ナデ、体部ナデ、底面ケズリ後周辺ナデ。内面口縁～体部中位まで横ナデ、下位ナデ。内外面煤付着。赤色化。二次加熱。
12	土師器・甕	13.1	10.6	5.1	③②①	②	明赤褐	4/5	口縁部横ナデ。胴部外面ナデ、底部周辺のみケズリ。内面上位ヘラナデ、以下ナデ。
13	土師器・甕	—	—	6.0	⑥①④②③	②	橙	口縁部欠	外面ケズリの後、中位及び底部周辺にナデが加わる。底面ケズリ中央部ナデで調整、吸炭、赤色化。内面上位ヘラナデ、下位水拭き。二次加熱。
14	土師器・甕	15.2	17.3	6.1	⑥①④②③	②	にぶい橙	口縁部一部欠	口縁部横ナデ。胴部外面ケズリの後、中位以上ナデが加わる、底面ケズリ、外面1/2吸炭。内面肩部ヘラ先によるナデ、他ナデ。
15	土師器・甕	13.2	23.8	3.5	⑥②①③④	②	灰白	一部欠	口縁部横ナデ。胴部外面上位ナデ、以下ケズリ、下位の一部スリップ、下位赤色化。内面上位木口状工具によるナデ、下位ナデ、吸炭。二次加熱。
16	土師器・甕	17.2	29.2	5.9	①②⑥④③	②	橙	一部欠	口縁部横ナデ。胴部外面上～中位ナデ、中位～下位ケズリ、スリップ、底部周辺ナデ、下位煤付着。内面ヘラナデ。
17	土師器・甕	18.6	28.1	6.2	⑥①②③	②	にぶい橙	一部欠	口縁部横ナデ。胴部外面ケズリ、底面ケズリ、中位以下煤付着、赤色化。内面ナデ、一部炭化物付着。二次加熱。
18	土師器・甕	19.3	32.6	7.2	⑥①③②	②	にぶい橙	一部欠	口縁部横ナデ。胴部外面ケズリ後中位以上及び底部周辺ナデが加わる、底面ナデにより上げ底、内面ナデ。外面一部煤、内面炭化物付着。二次加熱。
19	土師器・甕	18.2	30.3	(6.5)	⑥①②③	②	にぶい橙	一部欠	口縁部横ナデ。胴部外面ナデ、木口状工具によるナデ、中位、一部底部周辺ケズリ、中位以下赤色化、煤付着。内面ナデ、中位以下吸炭。二次加熱。
20	土師器・甕	(18.1)	(27.7)	—	⑥②①④③	②	灰白	1/2	口縁部横ナデ。胴部外面ケズリ、底部周辺ナデ、中位以下煤付着、底面ケズリ。内面上位ヘラナデ、下位ナデ、中位に炭化物付着。
21	土師器・甕	18.5	—	—	⑥①③②	②	橙	底部欠	表面磨滅した部分が多い。口縁部横ナデ。胴部内外面共ナデ。外面赤色化。内面吸炭。二次加熱。
22	土師器・甕	(14.3)	—	—	①⑥③④②	②	橙	上位1/2	口縁部横ナデ。胴部外面ナデ、剥離した部分多い。内面ナデ。
23	土師器・甕	21.0	—	—	⑥①④③②	②	橙	口縁部のみ	全面磨滅。
24	土師器・甕	19.6	—	—	⑥①④③②	②	橙	口縁部のみ	ほぼ全面磨滅。胴部内面ナデ。
25	土師器・甕	14.9	—	—	⑥③②①	②	橙	上位2/3	口縁部及び胴部内面剥離した部分多い。胴部内面ヘラナデ。赤色化。二次加熱。
26	土師器・甕	17.7	—	—	①②③⑥④	②	明赤褐	上位1/3	口縁部横ナデ。胴部外面剥離、赤色化。内面ナデ、吸炭。二次加熱。
27	土師器・埴	—	—	4.2	①③②⑥	②	橙	胴部2/3	外面ナデ、底部及び底部周辺ケズリ。内面ナデ、輪積み痕を残す、上位煤付着。
28	土師器・埴	—	—	—	①②⑥③④	②	にぶい橙	底部のみ	外面ケズリ、赤色化。内面ナデ、吸炭。二次加熱。



第157图 C区53号住居跡出土遺物(1)

29	土師器・甌	20.6	21.2	7.3	②①③⑥	②	にぶい橙	完形	口縁部横ナデ。胴部外面ケズリを主体にナデ混在、内面ヘラナデ、中位接合部のみケズリ。円孔部ケズリの後ヘラナデ、下位吸炭。
30	砥石	長さ(13.4) 幅 5.2 厚さ 3.1						—	4面使用。
31	羽口	—	—	—	①②③	②	にぶい褐	一部のみ	
32	鉄滓	—	—	—	—	—	—	—	写真のみ。図なし。
33	磔	長さ 15.0 幅 5.9 厚さ 4.7 重さ 440g						—	
34	磔	長さ 13.6 幅 5.3 厚さ 4.0 重さ 430g						—	
35	磔	長さ 11.0 幅 4.2 厚さ 4.5 重さ 260g						—	
36	磔	長さ 6.3 幅 3.5 厚さ 2.6 重さ 80g						—	
37	磔	長さ 6.1 幅 4.5 厚さ 2.3 重さ 70g						—	
38	磔	長さ 4.0 幅 3.4 厚さ 0.8 重さ 20g						—	



第158図 C区53号住居跡出土遺物(2)

第78表 C区53号住居跡出土遺物観察表 (第157・158図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・杯	(14.0)	—	—	③⑥②①④	②	橙	1/8	表面磨滅した部分が多い。体部外面ケズリ。
2	土師器・杯	(14.0)	—	—	②①④	②	にぶい橙	1/8	口縁部横ナデ。体部外面上位ナデ、下位ケズリ。内面ナデ。
3	土師器・杯	(13.1)	—	—	③②④①	②	橙	1/3	口縁部横ナデ。体部外面磨滅、内面剥落。
4	土師器・杯	(12.9)	—	—	③①②④	②	明赤褐	1/6	外面口縁部横ナデ、体部ナデ。内面口縁～体部上位横ナデ、以下ナデ。
5	土師器・甕	18.1	(30.1)	(6.1)	②①⑥④	②	明赤灰	2/3	ほぼ全面表面磨滅。上げ底。内面一部ヘラナデ。外面下位赤色化、二次加熱。
6	土師器・甕	18.5	—	(7.0)	⑥①③②④	②	淡赤橙	下位欠	口縁部横ナデ。胴部外面ケズリ、底部周辺ナデツケ、煤付着、赤色化。内面全面磨滅、赤色化。二次加熱。
7	土師器・甕	19.0	—	—	⑥①③④	②	にぶい橙	上位	口縁部横ナデ。胴部外面ケズリ、内面ヘラナデ、炭化物付着。
8	土師器・甕	19.0	—	—	⑥①③②④	②	にぶい橙	底部欠	口縁部横ナデ。胴部外面ケズリ、肩部一部ナデが加わる、中位以下煤付着。内面ヘラナデ、下位炭化物付着。二次加熱。
9	土師器・甕	—	—	7.6	③⑥②①④	②	にぶい黄橙	3/4	口縁部横ナデ。胴部外面中位上部及び、下位ケズリ、他はナデ、底面ケズリにより上げ底風、煤付着。内面接合部木口状工具によるナデ、他はナデ。
10	土師器・甕	19.8	32.0	6.4	①②⑥④	②	橙	ほぼ完形	口縁部横ナデ(2段)。胴部外面ナデ、部分的にケズリ、下半赤色化。内面ナデ、全面吸炭、ナデ、二次加熱。
11	土師器・埴	9.0	16.4	—	⑥③①④②	②	にぶい橙	完形	全面磨滅。内面吸炭。
12	土師器・埴	8.6	13.9	—	③②①④	②	灰白	ほぼ完形	口縁部横ナデ。胴部外面ナデ、中位横のケズリ。
13	土師器・甌	22.4	20.2	6.1	③②①	②	にぶい橙	4/5	内外面共ほぼ磨滅。一部外面ナデ、内面ヘラナデ。全体赤色化、二次加熱。
14	石製模造品	—	—	—	—	—	—	—	円孔1。写真のみ。
15	弥生土器・甕	—	—	—	①④	②	黒	—	
16	編物石	長さ 17.4 幅 6.5 厚さ 5.0 重さ 850g						—	
17	編物石	長さ 30.3 幅 17.5 厚さ 8.0 重さ 4,500g						—	
18	編物石	長さ 17.2 幅 8.1 厚さ 5.3 重さ 1,060g						—	
19	編物石	長さ 18.1 幅 6.2 厚さ 5.2 重さ 850g						—	
20	編物石	長さ 19.0 幅 6.8 厚さ 3.5 重さ 700g						—	
21	編物石	長さ 18.0 幅 6.6 厚さ 4.0 重さ 765g						—	
22	編物石	長さ 16.3 幅 6.5 厚さ 4.4 重さ 765g						—	
23	編物石	長さ 17.1 幅 6.1 厚さ 4.5 重さ 610g						—	
24	編物石	長さ 17.1 幅 5.8 厚さ 3.4 重さ 500g						—	

25	編物石	長さ 16.9 幅 6.2 厚さ 5.2 重さ 745g	—	
26	編物石	長さ 16.2 幅 5.4 厚さ 4.6 重さ 700g	—	
27	編物石	長さ 15.7 幅 4.8 厚さ 5.4 重さ 540g	—	
28	編物石	長さ 16.6 幅 4.9 厚さ 3.5 重さ 430g	—	
29	編物石	長さ 15.2 幅 5.6 厚さ 3.5 重さ 510g	—	
30	編物石	長さ 15.4 幅 6.0 厚さ 4.2 重さ 590g	—	
31	編物石	長さ 15.4 幅 4.9 厚さ 5.2 重さ 510g	—	
32	編物石	長さ 15.6 幅 4.9 厚さ 2.9 重さ 370g	—	
33	編物石	長さ 14.2 幅 5.2 厚さ 3.6 重さ 405g	—	
34	編物石	長さ 13.4 幅 6.2 厚さ 3.6 重さ 480g	—	
35	編物石	長さ 13.4 幅 6.4 厚さ 3.9 重さ 555g	—	
36	編物石	長さ 14.2 幅 4.6 厚さ 3.0 重さ 410g	—	
37	編物石	長さ 13.7 幅 5.8 厚さ 4.0 重さ 450g	—	
38	編物石	長さ 7.3 幅 5.3 厚さ 3.2 重さ 180g	—	
39	編物石	長さ 7.8 幅 4.6 厚さ 3.6 重さ 195g	—	
40	編物石	長さ 10.3 幅 4.1 厚さ 1.5 重さ 110g	—	
41	編物石	長さ 10.6 幅 3.2 厚さ 1.1 重さ 85g	—	

埴 (11・12)、甗 (13)、石製模造品 (14) の他、長円形編み石が26点 (16~41) 出土している。

**54号住居跡** F-15・16からG-15・16グリッドに亘って位置する。第一確認面下位からの検出である。

(第153図) 53号・54号両住居跡及び72号土坑に削平されている。

(第159図) 西辺12.32m、南辺6.36mを計るが、北辺は4.05mから大きく東に弧を描いて脹らみ、

(第160図) そのまま南下して南辺と結合する。西辺の軸方位は、N-2°-Wを示す。

壁は、垂直に立ち上がり、掘り込み確認面から床面までの深さは、60cm前後である。床面は、やや凹凸がみられるが、踏み固められた面もあって、安定している。

竪穴南隅では、東西4.60m、南北3.00mの範囲で床面が焼土化し、特に西端・径78×36cm範囲が、厚さ4cm前後で強く焼けている。また周囲には、いずれも、径25~30cmの、同じように焼土化した部分が3ヶ所みられる。複数の炉が集中していた可能性がある。

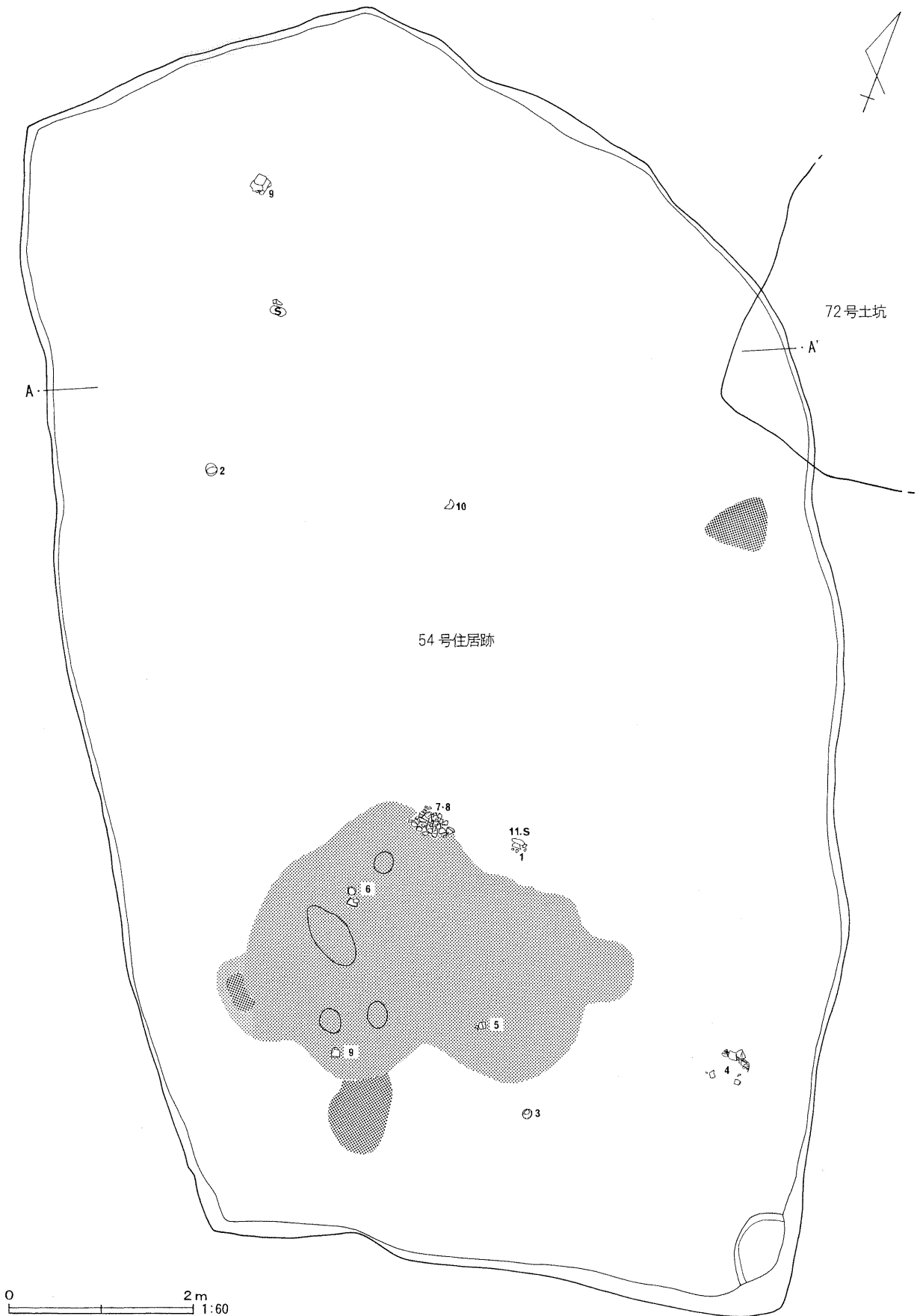
覆土は、いずれも投入土の様相をみせ、複雑に入り込んでいる。

遺物は、炉の周囲の床面上に集中し、土師器蓋 (1)、杯 (3)、高杯 (4)、鉢 (5)、甕 (6)、台付甕 (7・8)、礫 (11・12) が出土している。また、竪穴の北側床面上では、土師器杯 (2)、台付甕 (9) がみられる他、中央付近の床面上からは、土師器台付甕 (10) が出土している。

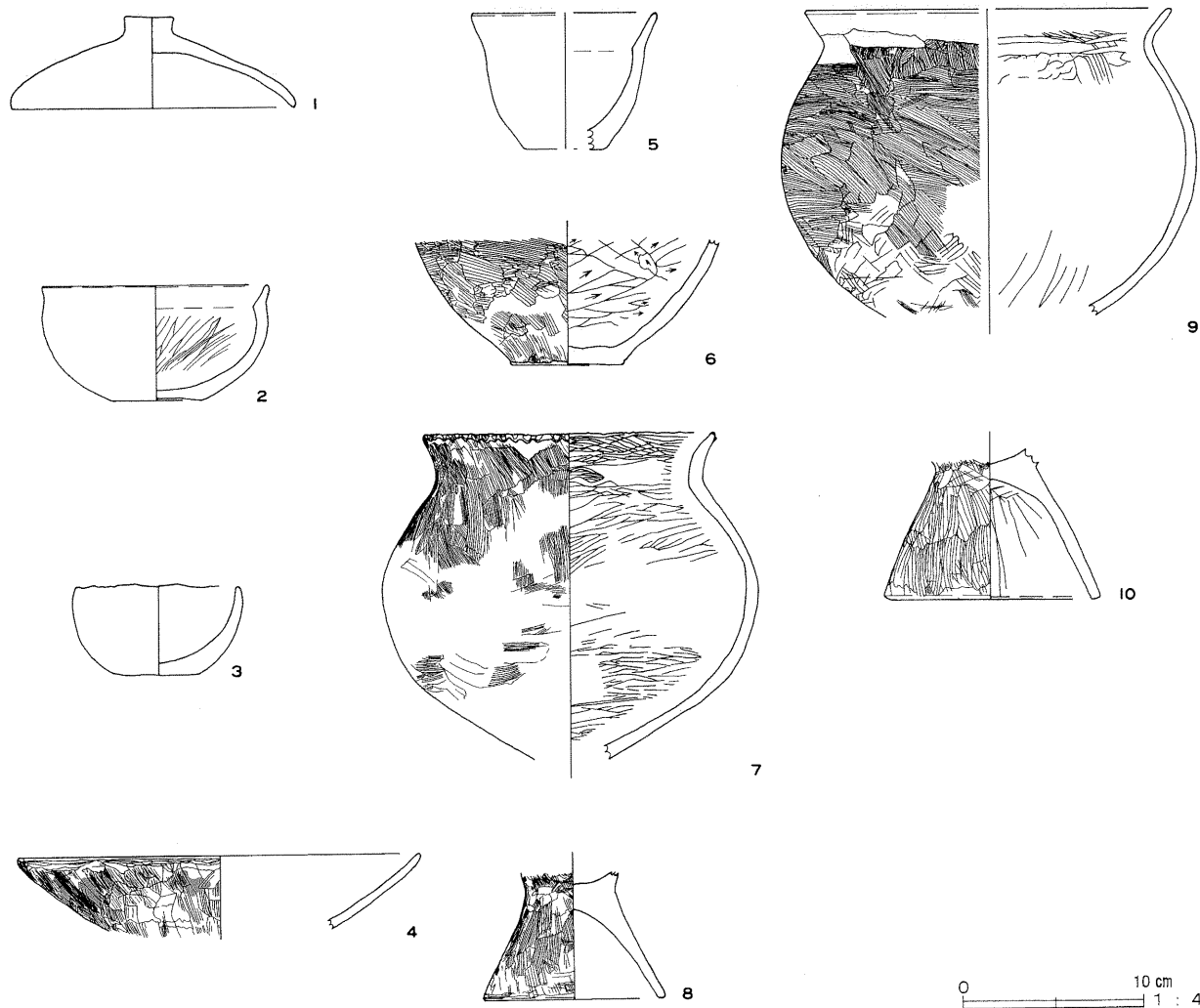
**55号住居跡** G-12・13からH-12・13グリッドに亘って位置し、東隅は調査区外に及んでいる。第一確認面下位からの検出である。

(第161図) 67号土坑に切断され、60号住居跡に上面を削平されている。

北西辺6.88m、北東辺2.10+ $\alpha$ m、南東辺4.10+ $\alpha$ m、北西辺4.00mを計る。南西辺が曲折し、北西・南東辺も蛇行することから、不整形ではあるが、長方形を基本としていると思われる。北西辺の軸方位は、N-64°-Eを示す。



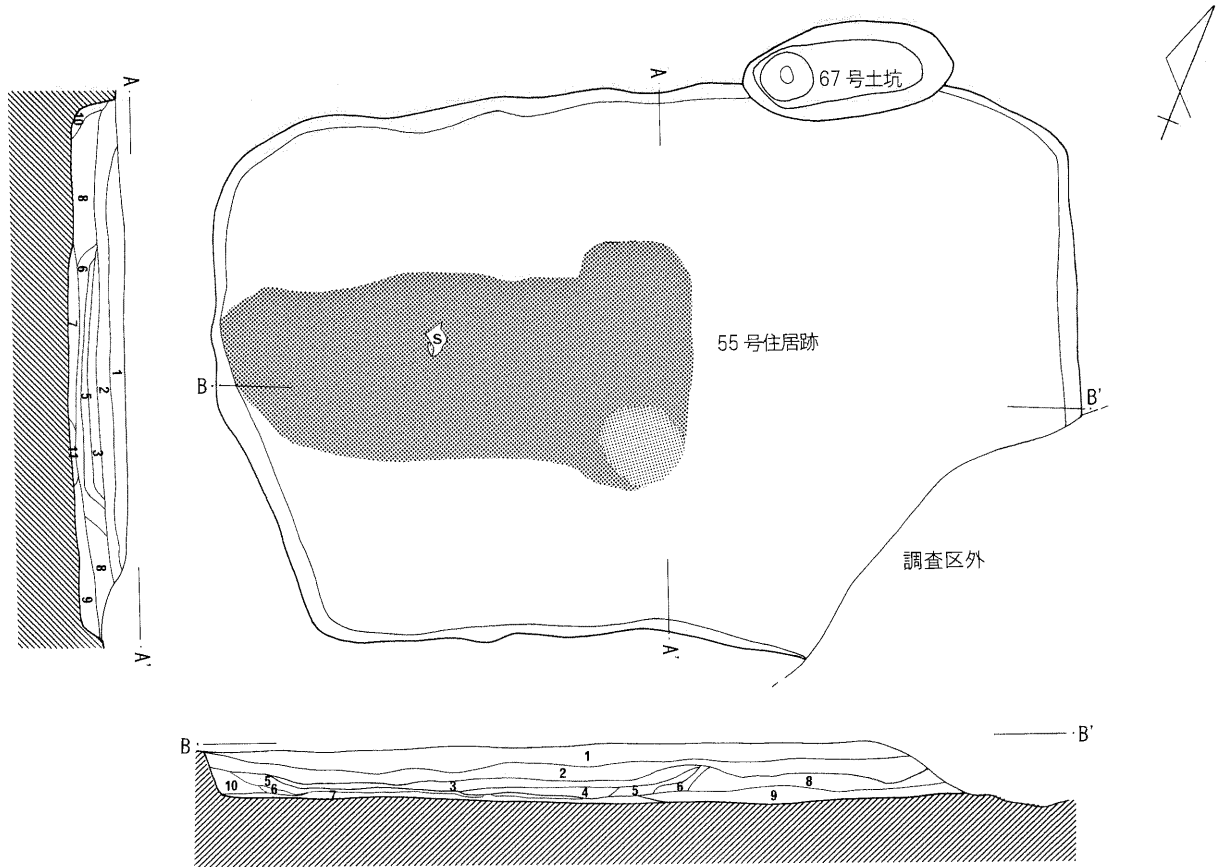
第159図 C区54号住居跡



第160図 C区54号住居跡出土遺物

第79表 C区54号住居跡出土遺物観察表 (第160図)

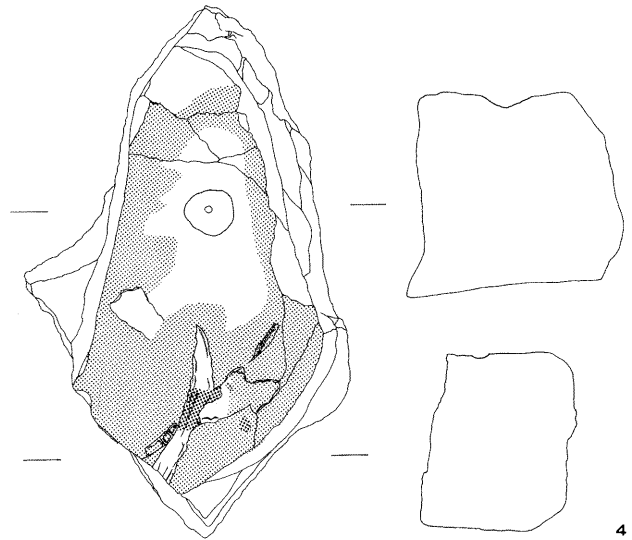
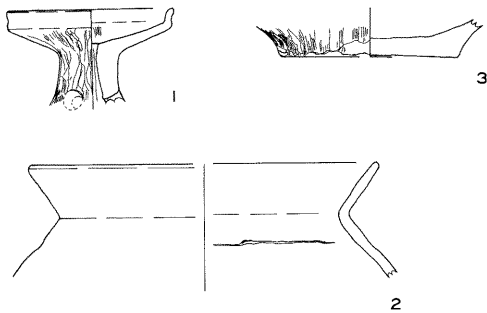
No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・蓋	つまみ2.7	5.1	—	⑥①③④	②	橙	1/2	全面ナデ。磨滅した部分多い。
2	土師器・杯	12.6	6.4	4.8	③①④	②	明赤褐	一部欠	外面全面ナデ。内面口縁部横ナデ、体部放射状ミガキ。
3	土師器・杯	9.0	5.0	4.8	①③⑥④	②	赤褐	一部欠	全体にナデ。手捏様。表面ザラつく。
4	土師器・高杯	22.4	—	—	⑥②③①④	②	浅黄橙	杯部1/5	外面縦の刷毛目、口唇部横ナデ。内面横のナデ。内外面一部朱塗の痕跡。
5	土師器・鉢	(10.3)	7.6	(4.3)	③①④⑥	②	灰白	1/3	口縁部横ナデ。胴部内外面ナデ。内面ミガキ様ナデ。
6	土師器・甕	—	—	6.3	③①②④⑥	②	橙	下位のみ	外面横～底部に移行するにつれて縦の刷毛目、底部上位ナデが加わる、底面ケズリ。内面横のケズリ、底部ナデツケ。外面煤付着。二次加熱。
7	土師器・台付甕	(16.2)	—	—	①④③②	②	橙	台部欠3/4	外面口唇部縦の刷毛目後ナデ後押捺、口縁部～胴上部縦の刷毛目、煤付着、中位横の刷毛目、ナデ、ケズリ混用、赤化、下位縦のナデ、赤化。内面中位ナデ、他前面横のミガキ、ほぼ全面炭化物。二次加熱。
8	土師器・台付甕	—	—	10.1	③①④	②	橙	台部のみ	外面縦の刷毛目、裾部一部横のナデ。内面横のナデ。
9	土師器・台付甕	(20.2)	—	—	①④③⑥	②	赤褐	台部欠1/4	口縁部横ナデ。外面括れ縦、上位横、中位斜の刷毛目、下位縦の刷毛目の後ナデ、外面全面煤付着。内面括れ横のケズリ様ナデ、括れ下位指頭によるおさえ、中位にかけてナデ、下位縦の木口状工具によるナデ。炭化物付着。二次加熱。
10	土師器・台付甕	—	—	12.0	⑥①②④	②	明褐	台部のみ	外面縦の刷毛目。内面縦のナデツケ。煤付着。二次加熱。
11	礫	長さ 18.0 幅 6.2 厚さ 4.7 重さ 725g						—	
12	礫	長さ 4.5 幅 3.6 厚さ 1.0 重さ 25g						—	



55号住居跡土層

- 1 明黄褐色(10YR 7/6)シルト(粘土質)。マンガン粒を多量含む。
- 2 明黄褐色(2.5Y 6/6)粘土。炭化物を少量含む。
- 3 黄褐色(10YR 5/6)粘土。
- 4 明黄褐色(10YR 6/6)シルト。マンガン粒、炭化物を少量含む。
- 5 橙色(5YR 6/8)焼土層。明黄褐色(10YR 6/6)シルト層の中に焼土が層状に混入している。上位に炭化物が層状に含まれる。
- 6 明黄褐色(2.5Y 7/6)シルト。炭化物粒を少量含む。
- 7 炭化物集積層。
- 8 黄橙色(10YR 7/8)粘土。炭化物粒を少量、マンガン粒を微量含む。
- 9 明黄褐色(10YR 6/8)粘土。
- 10 黄褐色(10YR 5/6)粘土。炭化物粒を少量含む。
- 11 焼土。

0 L=28.000m 2m 1:60



0 10 cm 1:4

第161図 C区55号住居跡及び出土遺物



第80表 C区55号住居跡出土遺物観察表 (第161図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・器台	9.1	—	—	⑥④③②	②	橙	1/2	脚部三方透かし(円孔)。受け台部口縁横ナデ、体部内面表面剥離した部分多い、一部に放射状ミガキ、全面吸炭。体部外面～脚外面縦のミガキ。脚部外面横の連続ケズリ。
2	土師器・甕	(19.0)	—	—	①④⑥③	②	明赤褐	上位 1/6	全面ナデ。二次加熱。
3	土師器・壺	—	—	(9.7)	①⑥④③	②	橙	底部 1/4	内面底部木口状工具によるナデツケ。吸炭。
4	砥石	長さ 28.8 幅 17.6 厚さ 9.6						—	

壁は、急斜面を成して立ち上がり、掘り込み確認面から床面までの深さは、45cm前後である。

床面は、やや凹凸がみられるが、踏み固められた面もあって、安定している。また、南西半中央部分は、全体に3～5cm窪みをもっている。窪みの中は、ほぼ炭化物で埋まっている(第7層)。ピットは、検出されていない。

窪みの東端・竪穴中央やや南西寄りに、炉が設けられている。円形を呈し、径70×65cmを計り、厚さ5cmの焼土層をもつ。

覆土は、上位から、多量のマンガン粒を含む明黄褐色シルト層(第1層)、少量の炭化物を含む明黄褐色粘土層(第2層)、黄褐色粘土層(第3層)、少量のマンガン粒・炭化物を含む明黄褐色シルト層(第4層)、上位に炭化物層、下位に焼土層を挟む明黄褐色シルト層(第5層)、少量の炭化物を含む明黄褐色シルト層(第6層)、炭化物層(第7層)、少量の炭化物及び微量のマンガン粒を含む黄橙色粘土層(第8層)、明黄褐色粘土層(第9層)が堆積し、壁際の最下層には、少量の炭化物を含む黄褐色粘土層(第10層)のみられる部分もある。

遺物は、第7層上から、土師器器台(1)、甕(2)、壺(3)、径28×24の円錐孔及び刃先の研ぎ跡が残る砥石(4)が出土している。砥石の使用面は、被熱している。

**56号住居跡** G-13・14からH-13・14グリッドに亘って位置する。第一確認面下位からの検出である。

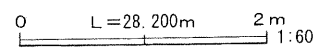
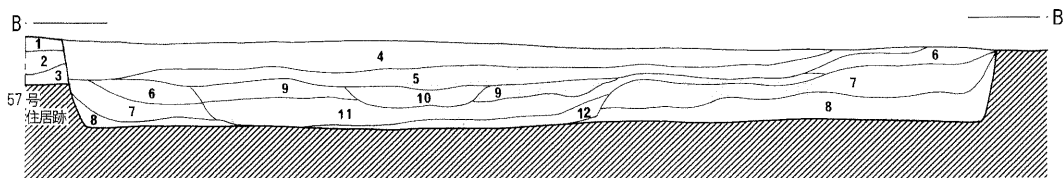
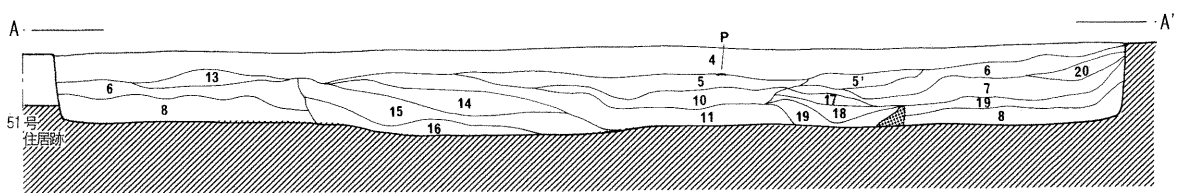
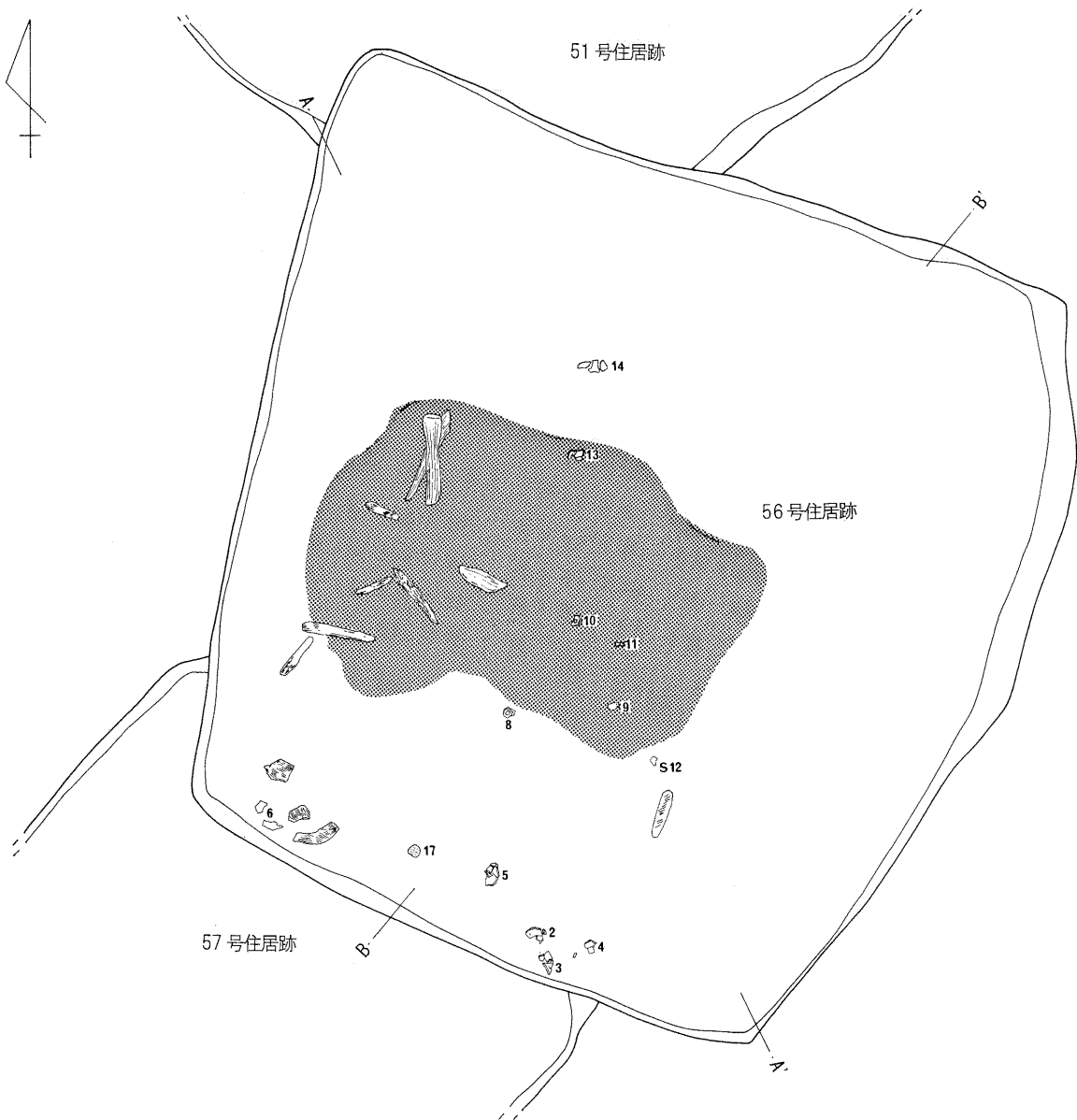
(第162図) 51号・57号両住居跡を切断している。

(第163図) 北辺6.50m、東辺7.06m、南辺5.40m、西辺6.75mを計る。東辺が大きく脹らみをもつことから、不整形ではあるが、台形を基本としていると思われる。主軸方位は、N-155°-Wを示す。

壁は、急斜面を成して立ち上がり、掘り込み確認面から床面までの深さは、65cm前後である。

床面は、やや凹凸がみられるが、踏み固められた面もあって、安定している。ピットは、検出されていない。

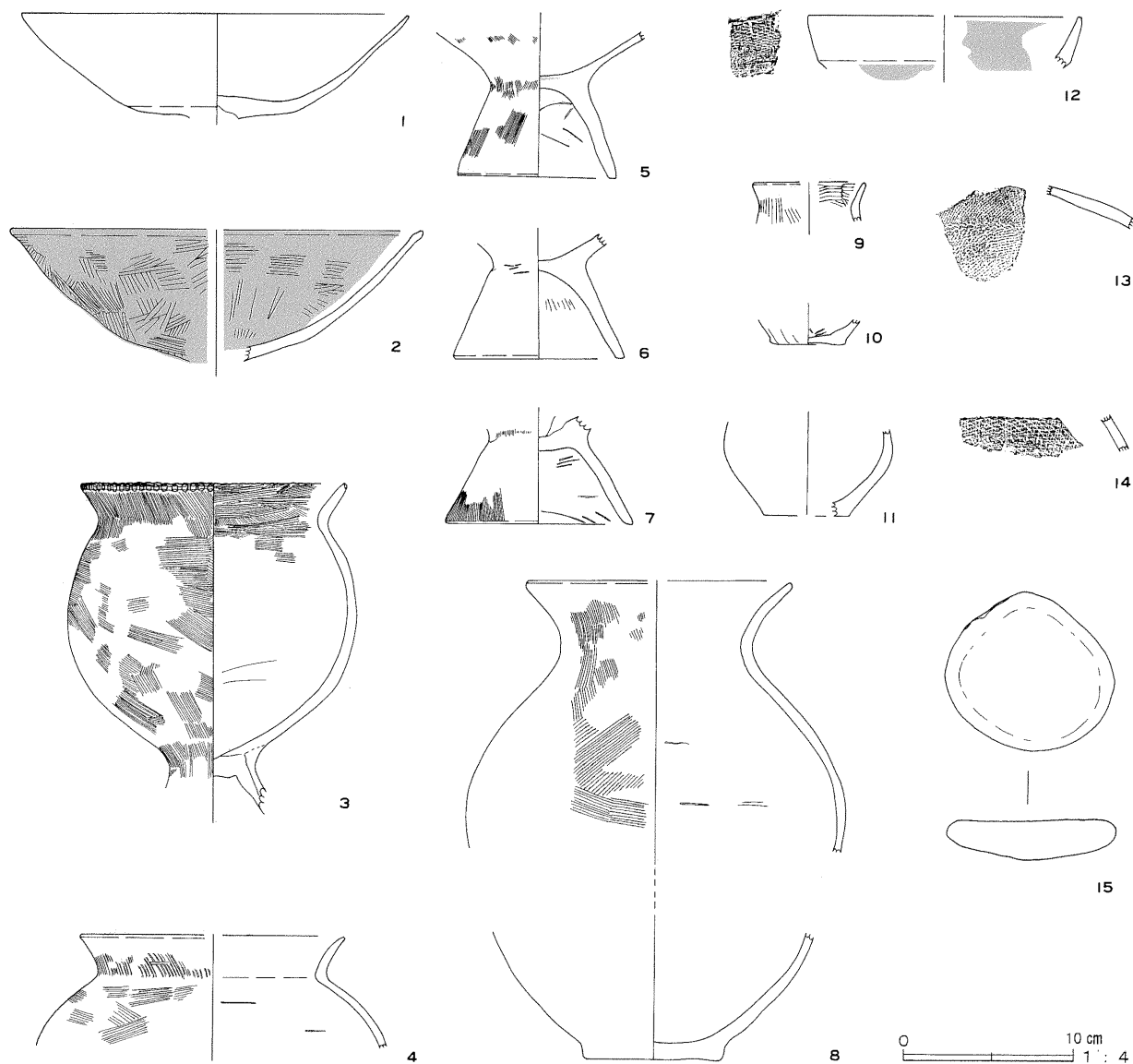
覆土は、上層から、多量の炭化物・マンガン粒を含む橙色シルト層(第4層)、多量の炭化物を層状に、焼土を部分的に含む明黄褐色シルト層(第5層)、浅黄色シルトをブロック状に含む黄褐色粘土層(第6層)、下位に炭化物を層状に、また微量の焼土粒・マンガン粒を含む明黄褐色粘土層(第7層)、微量の炭化物を含むにぶい黄褐色粘土層(第8層)



第162図 C区56号住居跡

が堆積し、各層の間には、大半が炭化物を含む土層が入り込む。全て投入土の様相を呈している。また、床面上中央から西壁にかけて、炭化物が堆積し、上面に炭化材がみられる。炭化材は、壁際にも斜めの状態で検出されている。火災に伴う土砂の投入と、炭化木材の出土状態であると判断されたものである。

遺物は、覆土（大部分が第8層）中から検出され、土師器高杯（1・2）、台付甕（3～7）、甕（8～11）、壺（12～14）、磨石（15）、編石（16・17）等がみられる。



第163図 C区56号住居跡出土遺物

第81表 C区56号住居跡出土遺物観察表（第163図）

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・高杯	22.3	—	—	⑥②①③④	②	橙	杯部 1/2	表面磨滅。整形不詳。
2	土師器・高杯	(24.0)	—	—	②⑥①④③	①	にぶい橙	杯部 1/4	内外面ミガキ。朱塗。煤付着。

3	土師器・台付甕	15.5	—	—	⑥①②④	②	黄橙	4/5	外面口縁部縦の刷毛目、口唇部一部ナデの後刻み、胴肩～中位横、中位～下位斜、底～脚縦の刷毛目、煤付着、赤化。内面括れ部横、後口縁横の刷毛目。胴部上位横のナデ、中位横のケズリ、底位縦のナデツケ、炭化物付着、脚天井ナデツケ、以下横の刷毛目。二次加熱。
4	土師器・甕	(15.4)	—	—	⑥②①③④	②	橙	口縁部 1/5	外面口縁部上位横ナデ、下位縦の刷毛目、胴上位横の刷毛目。内面ナデ、全体に剥離した部分多い。二次加熱。
5	土師器・台付甕	—	—	(9.4)	⑥①②④	②	橙	下部のみ	胴部底外面斜の刷毛目の後縦のナデ、内面ナデツケ、炭化物付着。台部外面縦の刷毛目の後一部ナデ、内面木口状工具によるナデ。端部矩形仕上げ。吸炭。二次加熱。
6	土師器・台付甕	—	—	10.0	⑥①②④	②	橙	台部のみ	外面縦のナデ、内面縦の刷毛目の後ナデ。全面吸炭。底面炭化物付着。二次加熱。
7	土師器・台付甕	—	—	11.0	⑥③①②④	②	橙	台部のみ	外面縦の刷毛目。底部ナデツケ。脚内面上位ナデツケ。中位～裾部横のケズリ様ナデ。表面剥離した部分多い。二次加熱。
8	土師器・甕	(15.7)	—	8.2	⑥②③①④	②	浅黄橙	1/4	外面口縁～胴部中位縦～斜、中位横の刷毛目、下位ナデ、全体に磨滅した部分多い。内面ナデ、部分的に輪痕残す。一部吸炭。赤色化。二次加熱。
9	土師器・甕	(6.6)	—	—	②⑥③①④	②	橙	口縁部 1/6	外面口縁部横ナデ、胴部縦の刷毛目。内面口縁部横の刷毛目、胴部横のナデ。吸炭。煤付着。二次加熱。No.10と同一の可能性。
10	土師器・甕	—	—	4.5	⑥②①④	②	褐	底部のみ	外面縦のナデツケ。内面ヘラナデ。全面吸炭。煤付着。二次加熱。
11	土師器・甕	—	—	—	②⑥①④	②	明赤褐	下位 1/6	外面中位ナデ、下位縦のミガキ様ナデ。内面横のナデ。吸炭。二次加熱。
12	土師器・壺	(15.8)	—	—	②①⑥④	②	にぶい橙	—	
13	土師器・壺	—	—	—	⑥②①④	②	暗褐	—	
14	土師器・壺	—	—	—	②③①⑥	②	浅黄橙	—	
15	磨石	長さ 9.4 幅 9.8 厚さ 2.3 重さ 310g			—				
16	編物石	長さ 10.0 幅 3.0 厚さ 3.0 重さ 150g			—				
17	編物石	長さ 10.5 幅 4.0 厚さ 2.7 重さ 120g			—				

57号住居跡 G-14からH-13・14グリッドに亘って位置する。第一確認面下位からの検出である。(第164図) 56号住居跡によって切断されている。

北東辺は計測不能であるが、南東辺5.85m、南西辺4.60m、北西辺5.95mを計る。長方形を呈している。主軸方位は、N-39°-Eを示す。

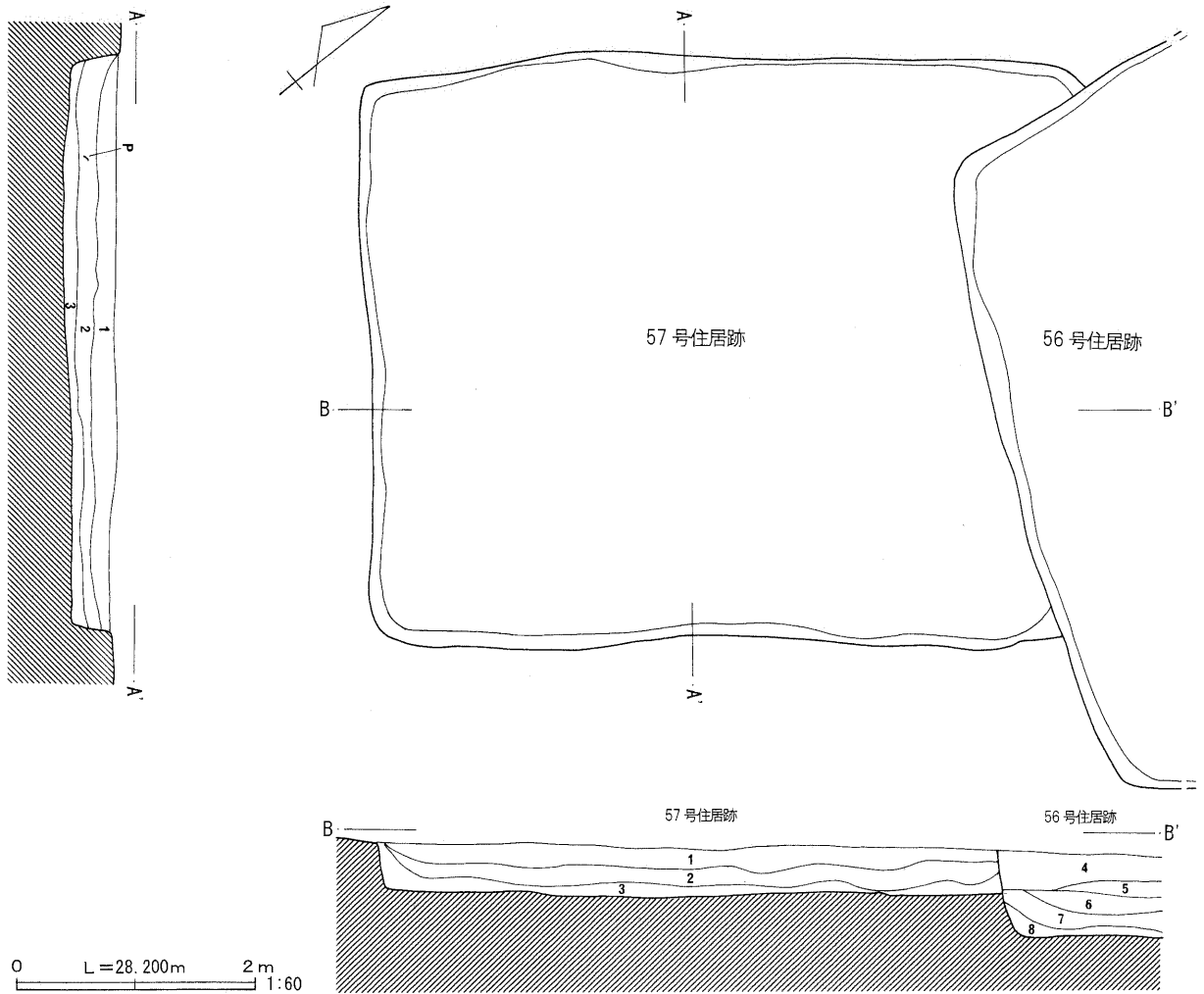
壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、掘り込み確認面から床面までの深さは、35cm前後である。床面は、やや凹凸がみられるが、踏み固められた面もあって、安定している。ピットは、検出されていない。

覆土は、上層から、多量のマンガン粒及び酸化鉄、少量の炭化物を含むにぶい黄褐色シルト層（第1層）、黄色シルトブロック及び少量の炭化物を含む明黄褐色シルト層（第2層）、微量の炭化物を含む明黄褐色シルト層（第3層）が堆積している。

遺物は、第2層中から、土師器器台（1）、小型甕（2）、甕（3）、台付甕（4）、翡翠製勾玉（5）が出土している。

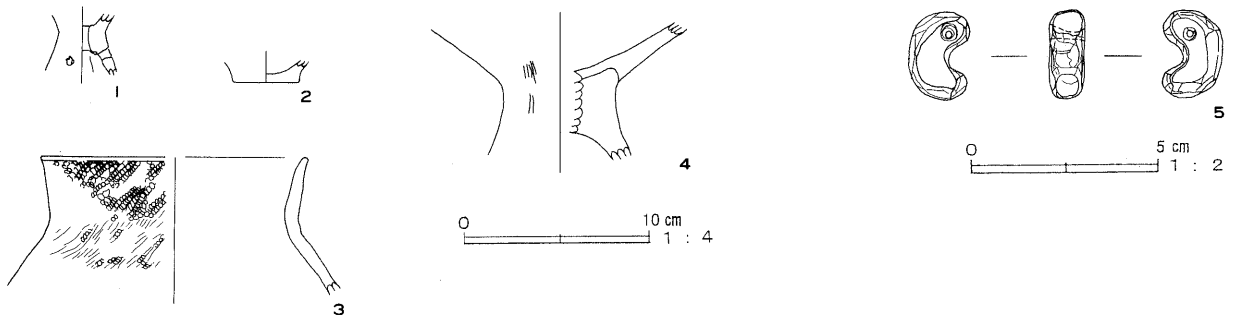
第82表 C区57号住居跡出土遺物観察表（第164図）

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・器台	—	—	—	⑥②④①	②	浅黄橙	接合部のみ	脚部三方透かし。外面ナデ。脚部内面縦のナデツケ。
2	土師器・小型壺	—	—	(3.4)	①②④③⑥	②	橙	底部のみ	外面縦のナデ。内面ナデ。二次加熱。
3	土師器・甕	(14.1)	—	—	②⑥③①④	②	明黄褐	上位 1/4	口唇部及び外面縄文。内面ナデ。
4	土師器・台付甕	—	—	—	⑥③②	②	浅黄橙	接合部のみ	全体に磨滅した部分多い。内面ナデ、吸炭。外面一部縦の刷毛目残存。二次加熱。
5	勾玉	長さ 2.4 幅 — 厚さ 0.95			—				



56号・57号住居跡土層

- 1  にぶい黄褐色(10YR 5/3)シルト。マンガン粒を多量、酸化鉄粒を中量、炭化物粒を少量含む。
- 2  明黄褐色(10YR 6/6)シルト。黄色(2.5Y 8/4)シルトブロックが下位に点在し、炭化物を少量含む。
- 3  明黄褐色(2.5Y 6/6)シルト。炭化物を微量含む。
- 4  橙色(7.5YR 6/6)シルト(粘土質)。マンガン粒、炭化物を多量含む。
- 5  明黄褐色(10YR 6/6)シルト(粘土質)。炭化物粒を多量、部分的に焼土、層状に炭化物を含む。
- 5' 明黄褐色(10YR 7/6)シルト。炭化物が点在している。
- 6  黄褐色(10YR 7/8)粘土。浅黄褐色(10YR 8/4)シルト小ブロック状を含む。
- 7  明黄褐色(10YR 6/6)粘土。マンガン粒、焼土粒を微量、下位に炭化物が層状を含む。
- 8  にぶい黄褐色(10YR 6/4)粘土。炭化物を微量含む。
- 9  黄褐色(2.5Y 5/6)粘土。浅黄褐色(10YR 8/4)シルトをブロック状を含む。
- 10  にぶい黄褐色(10YR 5/6)粘土。マンガン粒、炭化物粒を多量含む。
- 11  黄褐色(2.5Y 5/6)粘土。マンガン粒をやや多量、下位に炭化物を層状を含む。
- 12  にぶい黄色(2.5Y 6/3)粘土。炭化物をやや多量含む。
- 13  橙色(7.5YR 6/6)シルト。部分的に灰色(10YR 8/2)粘土ブロックが集中している。
- 14  黄褐色(2.5Y 5/6)粘土。11層に似ているがより全体的に炭化物がやや多量を含む。下位に炭化物を層状を含む。
- 15  にぶい黄褐色(10YR 6/4)シルト。炭化物粒を少量含む。
- 16  にぶい黄褐色(10YR 6/6)粘土。炭化物を少量含む。
- 17  明黄褐色(10YR 6/6)シルト(粘土質)。浅黄褐色(10YR 8/4)シルト小ブロック、マンガン粒を多量含む。
- 18  明褐色(7.5YR 7/1)粘土。炭化物を微量含む。
- 19  にぶい黄褐色(10YR 7/3)粘土。炭化物を少量含む。
- 20  明黄褐色(10YR 7/6)粘土(シルト質)。炭化物粒を微量含む。



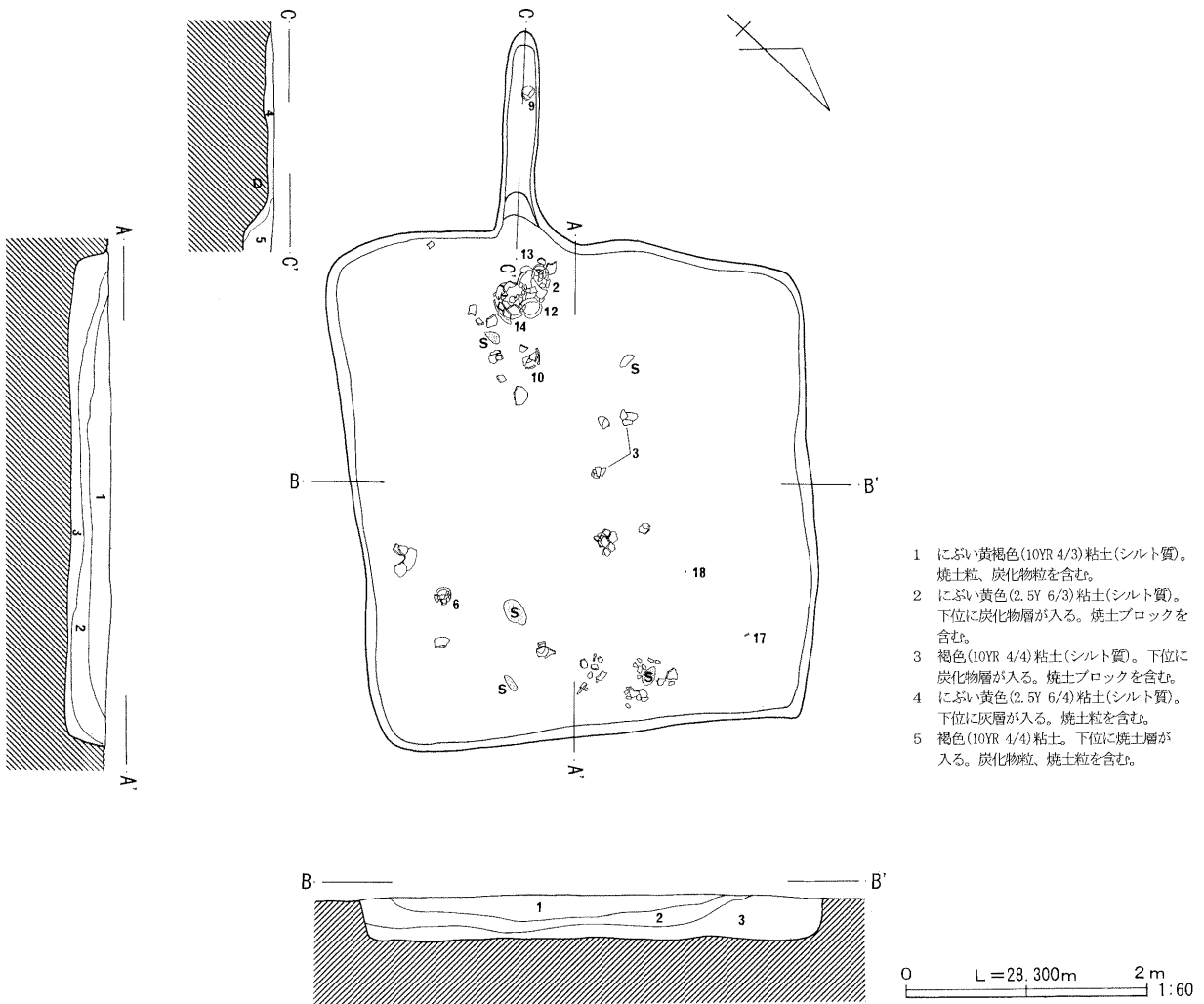
第164図 C区57号住居跡及び出土遺物

**58号住居跡** G-14・15からH-14・15グリッドに亘って位置する。第一確認面からの検出である。  
 (第165図) 北東辺3.42m、南東辺4.14m、南西辺3.90m、北西辺3.20mを計る。二辺が長く、  
 (第166図) 二辺が短いため不整形であるが、正方形を基本としている。主軸方位は、N-135° - Wを示す。

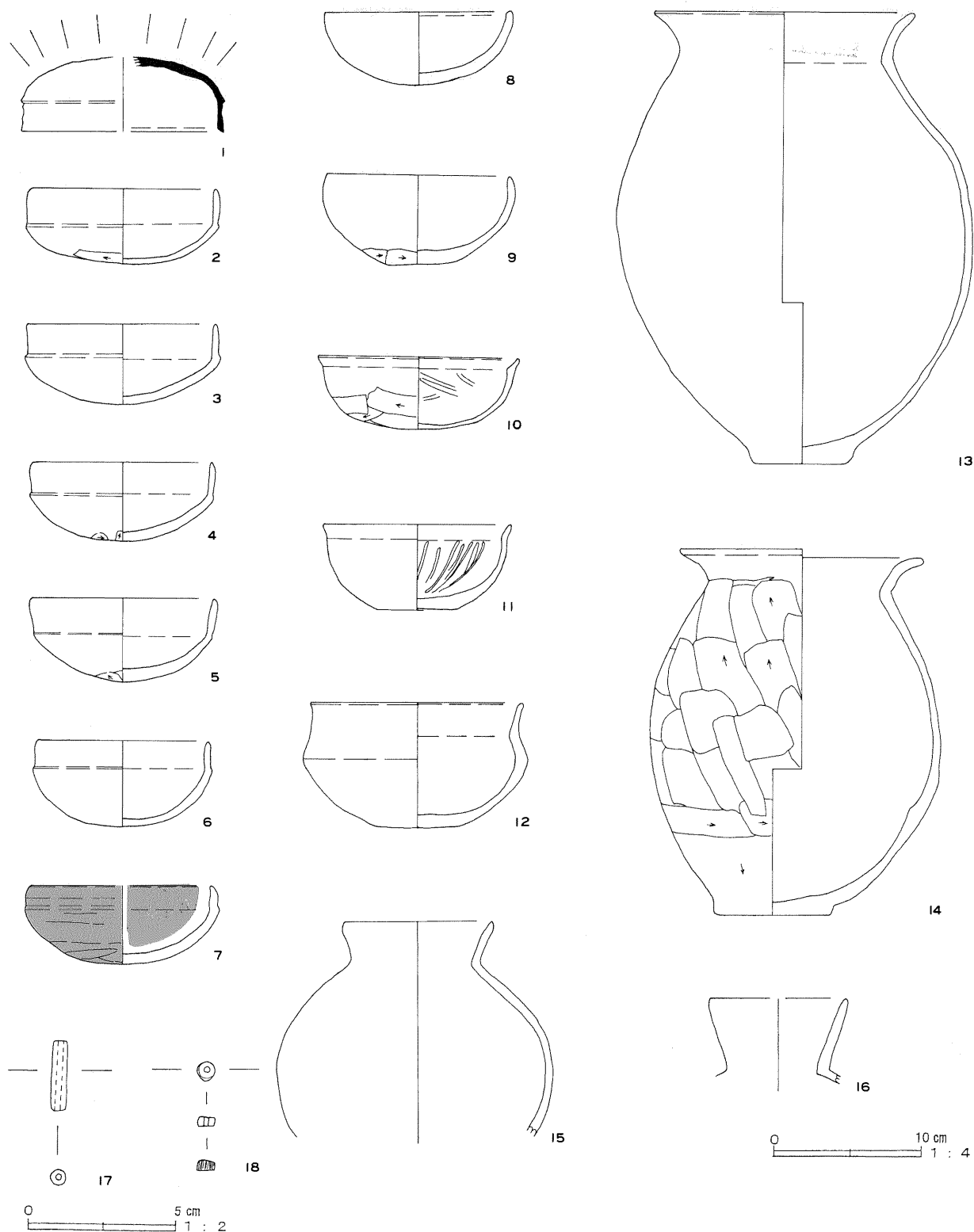
壁は、急傾斜を成して立ち上がるが、床面との接点部分が弧を成す部分もみられる。掘り込み確認面から床面までの深さは、40cm前後である。

床面は、やや凹凸がみられるが、踏み固められた面もあって、安定している。ピットは、検出されていない。

カマドは、南西壁中央から南隅寄りに設置されている。袖は、検出されなかったが、奥行き82cm、幅58cmの隅円長方形範囲に焼土面がみられ、火床・燃烧部は、奥部が堅穴外に張り出すものの、大部分が堅穴内に構築されていることが判明している。奥部は斜面を成して20cmほどの壁を作り出し、ほぼ水平面を成す煙道へ移行している。煙道は、幅20cm、奥行き1.42mを計る。底面は、ほぼ水平であるが、中央部でやや窪み、そのま



第165図 C区58号住居跡



第166図 C区58住居跡出土遺物

ま奥壁に向けて緩やかな弓状を呈しながら立ち上がっている。窪みの中から、土師器杯(9)が出土している。

覆土は、上位から、焼土粒及び炭化物を含むにぶい黄褐色粘土層(第1層)、焼土ブロック及び下位には層状の炭化物を含むにぶい黄色粘土層(第2層)、焼土ブロック及び下位には層状の炭化物を含む褐色粘土層(第3層)が堆積している。

遺物は、カマド内から、煙道内の土師器杯（9）をはじめ、焼土上から土師器杯（2・12）、甕（13・14）が、またカマド前からは、杯（10）が出土している。杯はその他、3・6が床面上から出土している。また北隅寄りの床面上からは、管玉（17）及び臼玉（18）が出土している。

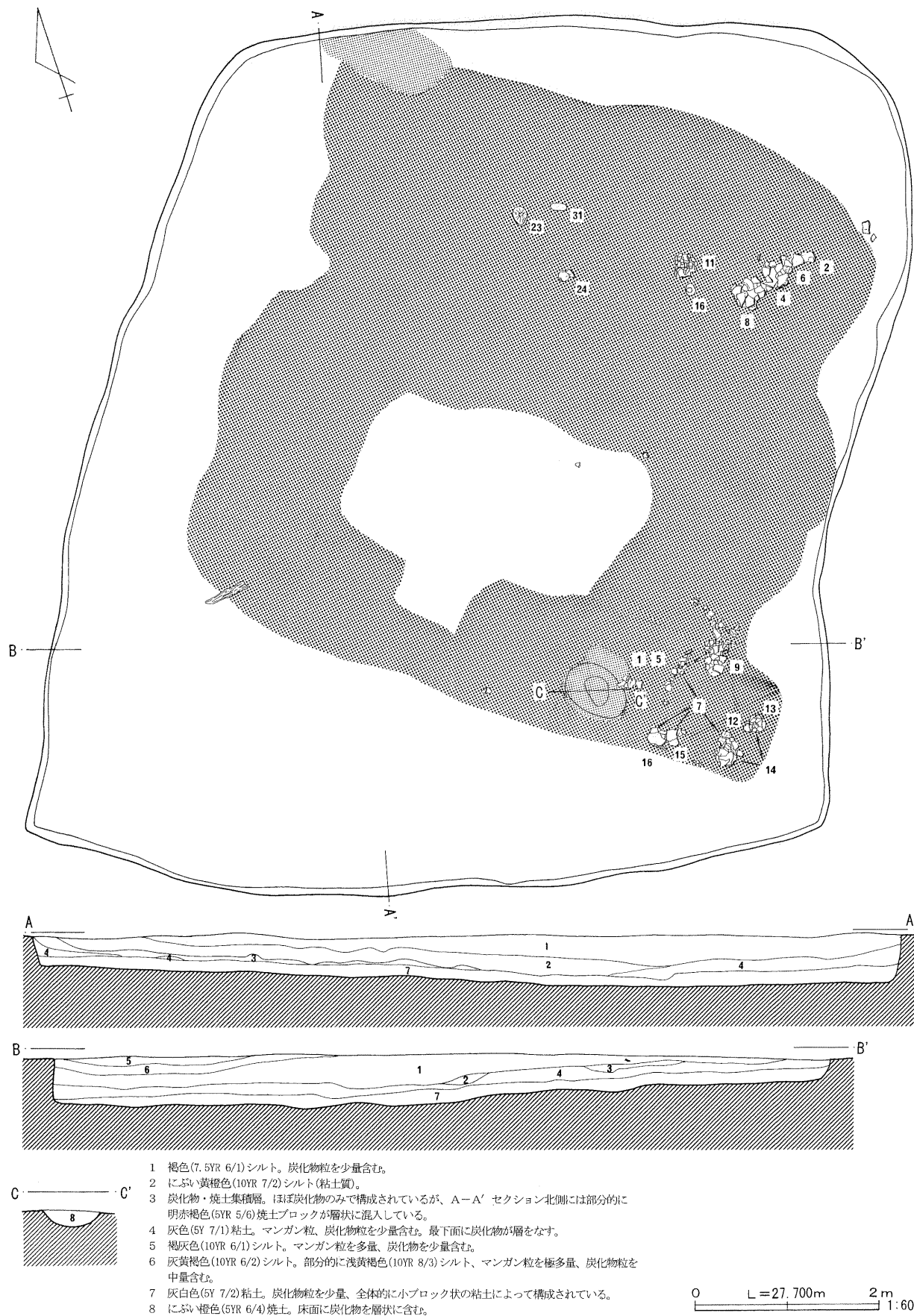
第83表 C区58号住居跡出土遺物観察表（第166図）

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	須恵器・蓋杯	(13.8)	—	—	①②⑥	①	灰	1/4	
2	土師器・杯	12.6	5.2	—	⑥②①④	②	橙	一部欠	口縁部横ナデ。体部外面下位のみケズリ、上位ナデ、1/2吸炭、煤付着。内面ナデ、1/2吸炭、煤付着。
3	土師器・杯	12.8	5.5	—	③①②④	②	橙	2/3	外面全面、内面大部分磨滅。内面口縁部横ナデ、体部ナデ。
4	土師器・杯	12.5	5.5	—	②①③④	②	橙	2/3	口縁部横ナデ、内外面共煤付着。体部外面ナデ、底面のみケズリ、煤付着。内面ナデ、1/2煤付着。
5	土師器・杯	12.5	5.8	—	③①④②	②	にぶい橙	一部欠	口縁部及び体部内面上位横ナデ、体部内面下位ナデ、煤付着。体部外面ナデ、底面のみケズリ、煤付着。
6	土師器・杯	11.8	6.0	—	②①④	②	明赤褐	一部欠	表面磨滅、全面吸炭。
7	土師器・杯	(12.5)	5.4	—	③②①⑥④	②	橙	2/5	全面朱塗。口縁部及び体部内面上位横ナデ、内面底部ナデ。外面ケズリの後、上位にナデが加わる。
8	土師器・杯	12.9	5.1	—	③④②①	②	にぶい橙	完形	全面磨滅。
9	土師器・杯	(12.6)	6.1	—	⑥②①④	②	明赤褐	3/4	外面横のナデ、底部周辺のみケズリ、内面ナデ。内面口唇部及び外面煤付着。外面一部赤色化。二次加熱。
10	土師器・杯	13.7	5.0	—	②①③⑥④	②	橙	4/5	口縁部横ナデ。体部外面上位ナデ、下位ケズリ。内面ミガキ様ナデ。
11	土師器・杯	(12.8)	5.9	—	⑥②①④	②	明赤褐	一部欠	口縁部横ナデ。体部外面ナデ、内面ナデの後放射状ミガキ。全面吸炭。赤色化。二次加熱。
12	土師器・★	14.5	8.7	5.4	③①②④	②	橙	一部欠	ほぼ全面磨滅。内面口縁～体部上位横ナデ。
13	土師器・甕	17.8	31.1	6.4	②①③⑥④	②	浅橙	一部欠	口縁部横ナデ。胴部外面木口状工具によるナデ、内面肩部及び中・下位接合面木口状工具によるナデ、他はナデ、全面薄く吸炭。
14	土師器・甕	16.6	25.1	8.0	⑥③①②④	②	淡橙	一部欠	口縁部横ナデ。外面ケズリ、底部周辺ナデが加わる。内面ナデ、底面炭化物付着。
15	土師器・壺	10.1	—	—	①③②⑥④	②	明赤褐	上位のみ	外面全面磨滅、内面ナデ。
16	土師器・埴	(9.3)	—	—	③②①④	②	橙	口縁部1/4	全面磨滅。
17	管玉	孔径0.2 長さ2.4 厚さ0.5						—	
18	臼玉	孔径1.5 直径6.5 厚さ0.4						—	
19	礫	長さ10.6 幅4.2 厚さ1.8 重さ120g						—	
20	礫	長さ25.4 幅13.8 厚さ8.3 重さ4,300g						—	
21	礫	長さ16.5 幅12.6 厚さ7.6 重さ2,175g						—	
22	礫	長さ16.1 幅13.2 厚さ11.2 重さ3,010g						—	
23	礫	長さ12.3 幅5.4 厚さ4.1 重さ350g						—	
24	礫	長さ— 幅4.1 厚さ3.1 重さ110g						—	
25	礫	長さ5.4 幅4.8 厚さ4.4 重さ140g						—	
26	礫	長さ8.4 幅3.4 厚さ2.7 重さ70g						—	
27	礫	長さ10.3 幅7.2 厚さ1.9 重さ190g						—	
28	礫	長さ8.9 幅3.5 厚さ1.7 重さ75g						—	
29	礫	長さ9.6 幅3.4 厚さ3.1 重さ115g						—	
30	礫	長さ2.4 幅1.1 厚さ0.7 重さ8g						—	
31	礫	長さ8.0 幅4.5 厚さ2.4 重さ130g						—	
32	礫	長さ— 幅6.8 厚さ4.4 重さ345g						—	
33	礫	長さ15.7 幅5.2 厚さ4.6 重さ560g						—	

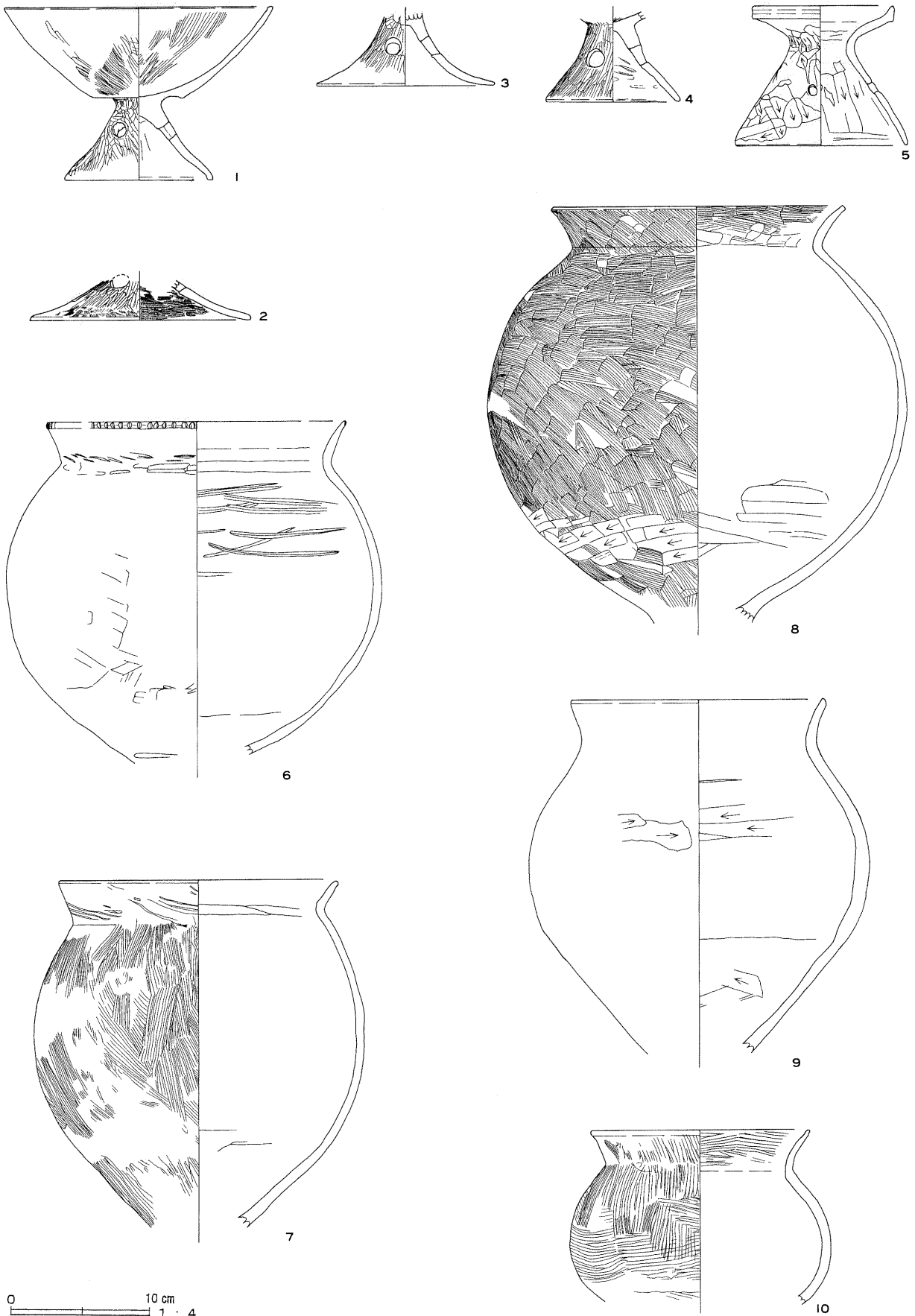
59号住居跡 G-15・16からH-15・16グリッドに亘って位置する。第二確認面からの検出である。  
 (第167図) 北東辺6.26m、南東辺8.70m、南西辺8.85m、北西辺8.95mを計る。概ね平行四辺  
 (第168図) 形を呈していると思われるが、各辺の湾曲が激しいため、不整形といわざるを得ない。  
 (第169図) 北西辺の軸方位は、N-147°-Wを示す。

壁は、急傾斜を成して立ち上がるが、床面との接点部分が弧を成す部分もみられる。掘り込み確認面から床面までの深さは、30～50cm前後である。

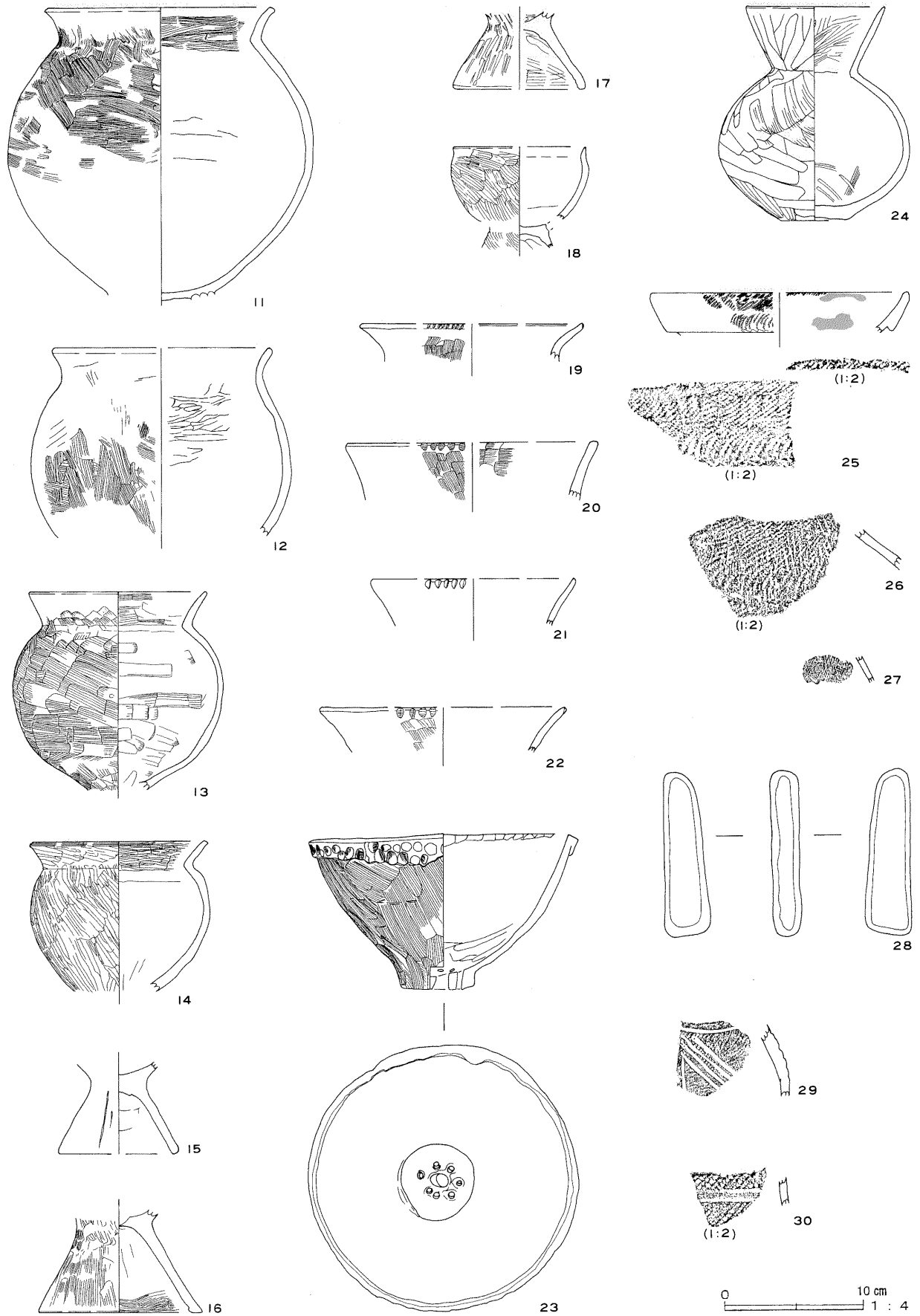




第167図 C区59号住居跡



第168図 C区59号住居跡出土遺物(1)



第169图 C区59号住居跡出土遺物(2)

第84表 C区59号住居跡出土遺物観察表(第168・169図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・高杯	19.4	12.7	10.3	②⑥①③	②	浅黄橙	1/2	脚部三方透かし。杯部全面及び脚外面縦の細かいミガキ、朱塗。脚内面横一部縦のナデ。
2	土師器・高杯	—	—	(16.1)	②④①③	②	にぶい橙	脚部のみ1/3	脚部穿孔(数不明)。外面縦のミガキ、裾部細刷毛目、全面朱塗。内面細刷毛目、一部指紋状朱塗。
3	土師器・高杯	—	—	13.0	⑥②④①③	②	橙	脚部のみ2/3	外面縦のミガキ。内面上位ナデツケ、中位以下ナデ。表面剥離した部分多い。
4	土師器・高杯	—	—	9.8	⑥②④③①	②	にぶい橙	脚部のみ	外面縦のミガキ。杯内面ミガキ。脚内面へら先によるナデ。外面一部煤付着。
5	土師器・器台	10.3	10.3	12.4	②⑥③①	②	浅黄橙	裾一部欠	受台部横のナデ。脚部内外面共縦のケズリ。裾部横ナデ。
6	土師器・台付甕	22.0	—	—	⑥①④②③	②	にぶい橙	脚部なし	外面口縁部横ナデの後口唇部刻み目、胴部縦のケズリの後ナデ、中位斜のスリップ、全面煤付着。内面口縁横のナデ、括れ横のケズリ様ナデ、上位棒頭によるナデ、中位以下ナデ、底部炭化物付着、二次加熱。
7	土師器・台付甕	20.4	—	—	③②①⑥	②	橙	台部欠	外面口縁部横のナデの後へら先によるナデ、胴部縦の刷毛目後全部にナデツケが加わる、特に中位以下に著しい、煤付着、下半赤化剥離した部分もある、二次加熱。内面横のナデ、括れ部のみ横のケズリ様ナデ、下半炭化物付着。
8	土師器・台付甕	21.3	—	—	⑥②③①④	②	にぶい橙	脚部なし 胴部2/3	外面口縁～括れ斜、上位横、中位斜、下位縦の刷毛目、中位と下位の境横のケズリ、中位以上煤付着、以下赤色化、二次加熱。内面口縁横の刷毛目、胴部横のナデ、中位と下位の境横のナデツケ、中位以下炭化物付着。
9	土師器・台付甕	18.6	—	—	③⑥①②	②	橙	台部欠	外面口縁部横のナデ、胴部上位及び下位縦のナデ、中位横のケズリ後スリップ、全面煤付着。内面ナデ、胴部上位及び底部付近横のケズリ、二次加熱。
10	土師器・台付甕	15.9	—	—	⑥④③	②	にぶい橙	上位のみ	外面口縁縦の刷毛目の後横のナデ、胴部肩口縁から連続の縦の刷毛目、中位横の刷毛目、中位より上面煤付着、中位～下位横の刷毛目の後ナデ赤色化。内面口縁部横の刷毛目、胴部横のナデ、炭化物付着、二次加熱。
11	土師器・台付甕	16.2	—	—	⑥①③②	②	橙	台部欠4/5	外面口縁部横のナデ、肩部横～斜の刷毛目の後括れ部縦の刷毛目、胴部中位横の刷毛目、下位縦横のナデ、中位より上位煤付着、下位赤色化、二次加熱。内面口縁部横の刷毛目、口唇部横のナデ、胴部ナデ、一部輪積痕残す、一部炭化物付着。
12	土師器・台付甕	(15.6)	—	—	⑥③①②④	②	橙	上部1/2	外面縦の刷毛目の後口縁～肩は横のナデが加わる、煤付着、煤の下面赤色化。内面口縁部横のナデ、括れ～上位横のミガキ、中位以下横のナデ、表面剥離した部分有り。二次加熱。
13	土師器・台付甕	(13.0)	—	—	⑥②①④	②	橙	台部無し	外面口縁部斜の刷毛目の後横のナデ、括れ部斜、胴部横、底部～台部縦の刷毛目、下半煤付着、全体に強く赤色化。内面口縁部横の刷毛目、胴部横のナデ、一部木口状工具による刷毛目状のナデ、底部指頭による縦のナデツケ、炭化物付着、二次加熱。
14	土師器・台付甕	12.9	—	—	③⑥①	②	橙	上部3/4	外面口縁部横、括れ部縦、胴部斜の刷毛目、全体に煤が付着するが特に括れ部著しい。内面口縁部横の刷毛目、胴部縦の木口状工具によるナデ、全体に炭化物付着。刷毛目は全て粗く深い。
15	土師器・台付甕	—	—	(8.8)	③①②⑥	②	橙	台部1/3	外面全面ナデ。内面横のナデ。全面吸炭。底部～台上部、破砕後二次加熱。全面吸炭。
16	土師器・台付甕	—	—	11.9	①②⑥③	②	明赤褐	台部のみ	外面胴部～台上位、台中位以下に区分した縦の刷毛目、裾部横のナデ。内面上位縦のナデ、裾部横の刷毛目、端部矩形仕上げ、吸炭。
17	土師器・台付甕	—	—	(9.6)	⑥④①	②	赤褐	台部のみ1/3	外面胴部底面～接合部斜、台部縦の刷毛目。内面台部上位ナデツケ、下位横の刷毛目、胴部底面木口状工具によるナデ。全面吸炭。台部一部赤色化。二次加熱。
18	土師器・台付甕	(9.8)	—	—	②③①⑥	②	にぶい黄橙	—	腕部外面斜の刷毛目、内面口縁横の木口状工具によるナデ、胴部横のミガキ様ナデ。脚部外面斜の刷毛目、内面指頭によるナデツケ。
19	土師器・台付甕	(6.4)	—	—	④①②③	②	にぶい褐	口縁部のみ	外面括れ部以下縦の刷毛目、口縁横ナデ、口唇部刻み目。内面木口状工具による横のナデ、吸炭、口唇部炭化物付着。
20	土師器・台付甕	(18.5)	—	—	①④	②	灰褐	口縁部のみ	外面縦～斜の刷毛目後口唇部、刷毛目状押圧(横)。内面横の刷毛目後下位にナデが加わる。
21	土師器・台付甕	(14.7)	—	—	③①②④	②	橙	口縁部のみ	内外面共ナデ。外面口唇刻み目。
22	土師器・台付甕	(18.0)	—	—	③④②①	②	にぶい黄橙	口縁部のみ	外面縦～斜の刷毛目、口唇部刷毛目状押圧(横)。内面表面磨滅。
23	土師器・甕	19.6	11.5	5.4	⑥④②	②	にぶい赤褐	完形	外面口縁貼り付け、指頭による押圧、体部縦の刷毛目。内面口縁部指頭による押圧、体部ナデ。底部穿孔は両面から(8孔)。
24	土師器・埴	10.1	15.8	4.9	②①⑥③	②	橙	完形	外面口縁部磨滅、縦の面取りが残る、胴部上位縦～斜の刷毛目、中位ミガキ様ナデ、下位縦のミガキ及び横のミガキ様ナデ、底部ナデ。内面口縁部斜のミガキ、上位～中位ナデ、底面ミガキ。
25	土師器・壺	(18.2)	—	—	②①⑥③	②	橙	口縁1/10	
26	土師器・壺	—	—	—	⑥②③④	②	橙	一部	
27	土師器・壺	—	—	—	②①④③	②	橙	一部	
28	砥石	長さ 10.2 幅 3.4 厚さ 2.1						—	
29	弥生土器	—	—	—	⑥④②①	②	灰黄褐	—	
30	弥生土器	—	—	—	④②①	②	黒褐	—	
31	礫	長さ 15.9 幅 7.2 厚さ 5.0 重さ 810g						—	

床面は、踏み固められた面もあって、安定しているが、水平面が少なく全体に傾斜をもち、南西部1/4が20cm程低くなる。ピットは、検出されていない。

床面が水平な部分を中心にして、中央から東面の床上には、中央の床面硬化部分を囲むようにして、炭化物が薄く堆積している。

床面硬化部分と南西壁の間からは、炉が検出されている。卵形を呈し、径80×50cm、深さ20cmを計る土坑内に、底面に炭化物を層状に挟む焼土が充填している（第8層）。

覆土は、安定して堆積しているのは、最上層の、少量の炭化物を含む褐色シルト層（第1層）と、最下層の、少量の炭化物及びブロック状粘土を含む灰白色粘土層（第7層）のみである。この間には、にぶい黄橙色シルト層（第2層）、炭化物・焼土集積層（第3層）、下位に炭化物層をもち、少量の炭化物粒・マンガン粒を含む灰色粘土層（第4層）が部分的に入り込んでいる。また南西部では、第1層が掘り窪められ、多量のマンガン粒及び少量の炭化物を含む褐灰色シルト層（第5層）、多量のマンガン粒及び炭化物、部分的に浅黄褐色シルトを含む灰黄褐色シルト層（第6層）が堆積している。

遺物は、全て床面上に堆積している炭化物上から検出されている。炉の南東部からは、土師器高杯（1）、器台（5）、台付甕（7・9・10・12～15）が、中央部と東隅の間からは、土師器高杯（2・4）、台付甕（6・8・11・16）、甑（23）、埴（24）、長円礫（31）が出土している。また、覆土中からは、土師器高杯（3）、台付甕（17～23）、壺（25～27）、砥石（28）、弥生式土器片（29・30）等が出土している。

**60号住居跡** H-13グリッドに位置し、東隅は調査区外に及んでいる。第一確認面下位からの検出（第170図）である。

55号住居跡を削平している。

形態・規模共に不明であるが、現状では、北東辺 $2.10 + \alpha$  m、南西辺 $3.52 + \alpha$  m、北西辺4.77mを計る。北西辺の軸方位は、N-39° - Eを示す。

壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。掘り込み確認面から床面までの深さは、22cm前後である。

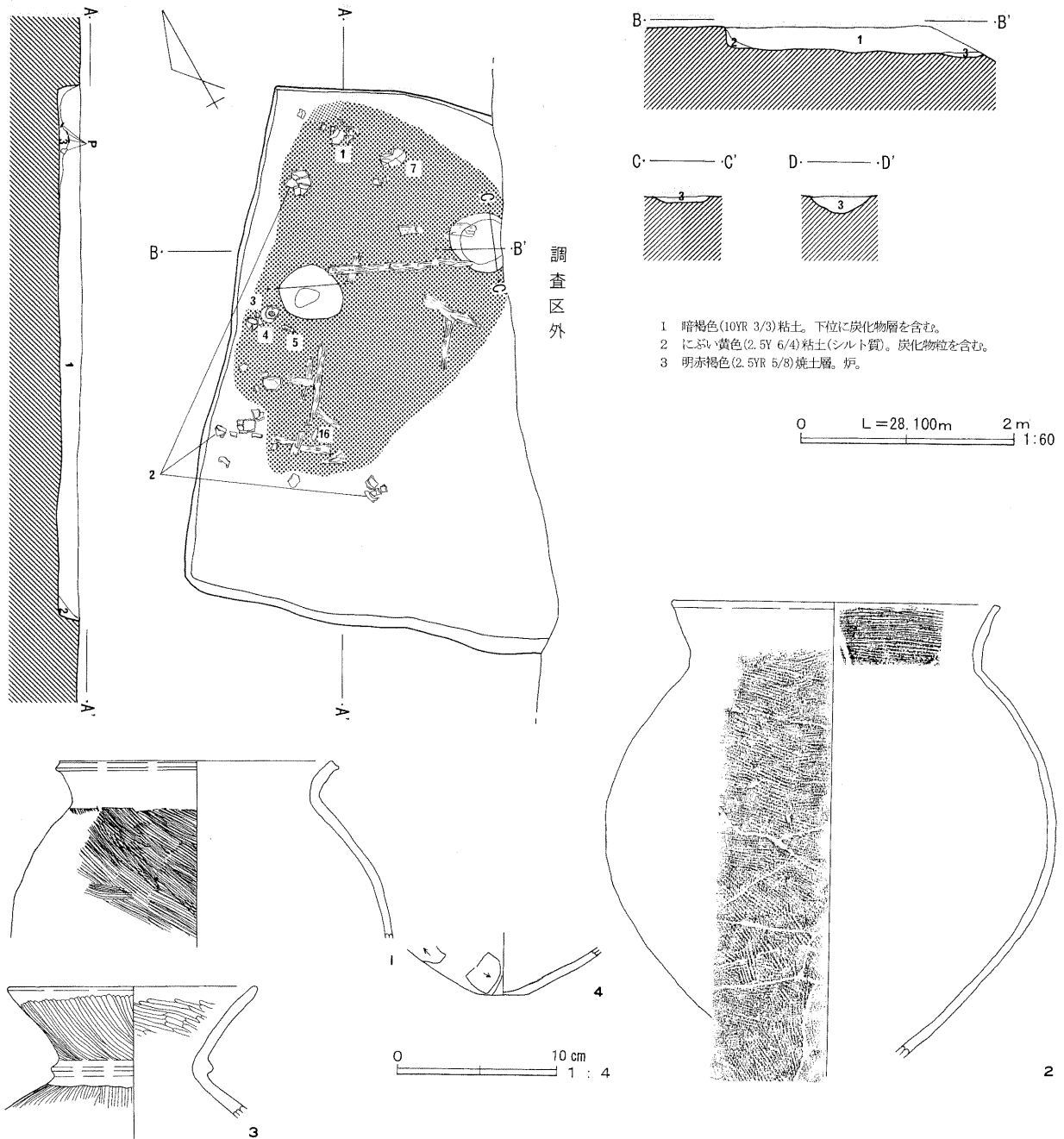
床面は、やや凹凸がみられるが、踏み固められた面もあって、安定している。ピットは、検出されていない。

竪穴中央から北隅にかけて、床上には炭化物が厚く堆積している。炭化物上には北西辺と平行もしくは直交する炭化木材が検出されている。平行する材が細く、直交する材の上下に交互に渡されているところから、直交する材が垂木、平行する材が木舞と思われる。

炭化物下からは、炉が2ヶ所検出されている。いずれも卵形を呈し、西側が径60×52cm、深さ18cm、東側が径 $(50 + \alpha) \times 54$ cm、深さ5cmを計る土坑内に、焼土が充填している（第3層）。また、北隅部では、床面が強く焼土化していた。

覆土は、上層が、下位に炭化物層をもつ暗褐色粘土層（第1層）、下層が、炭化物を含むにぶい黄色粘土層（第2層）である。

遺物は、床面上及び炭化物上から、土師器甕（1・2）、土師器壺（3・4）及び礫（5～7）が出土している。



第170図 C区60号住居跡及び出土遺物

第85表 C区60号住居跡出土遺物観察表 (第170図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・甃	17.7	—	—	②①⑥④	②	灰白	上半部	口縁部横ナデ。胴部外面刷毛目、内面ナデ。
2	土師器・台付甃	20.7	—	—	⑥③①②④	②	灰白	1/2台欠	口縁部外面ナデ、内面刷毛目。胴部外面刷毛目、内面ナデ。内外面1/2赤色化、煤付着、二次加熱。
3	土師器・壺	15.7	—	—	①②④	②	灰白	上位のみ	口縁部横ナデの後、口唇部を除いてミガキ。胴部ミガキの後、頸部凸帯周囲ナデ。内面口縁部下位～胴部ナデ。全面煤付着。
4	土師器・壺	—	—	3.1	⑥④②①	②	にぶい赤褐	底部のみ	外面ケズリ、ナデ、木口状工具によるナデ混在、吸炭、煤付着。内面ナデ、吸炭。二次加熱。
5	礫	長さ 15.1 幅 4.9 厚さ 3.3 重さ 395 g						—	
6	礫	長さ — 幅 4.6 厚さ — 重さ 145 g						—	
7	礫	長さ 20.4 幅 13.5 厚さ — 重さ 3,800 g						—	

61号住居跡 I-13・14からJ-13グリッドに亘って位置し、東隅は調査区外に及んでいる。第(第171図) 一確認面下位からの検出である。

(第172図) 62号住居跡を切断している。

形態・規模共に不明であるが、現状では、北東辺5.66+ $\alpha$ m、南西辺6.95+ $\alpha$ m、北西辺8.86mを計る。北西辺の軸方位は、N-40°-Eを示す。

壁は、ほぼ垂直に立ち上がるが、上位に至って緩斜面を成す。掘り込み確認面から床面までの深さは、80cm前後である。

床面は、やや凹凸がみられるが、踏み固められた面もあって、安定している。ピットは、検出されていない。

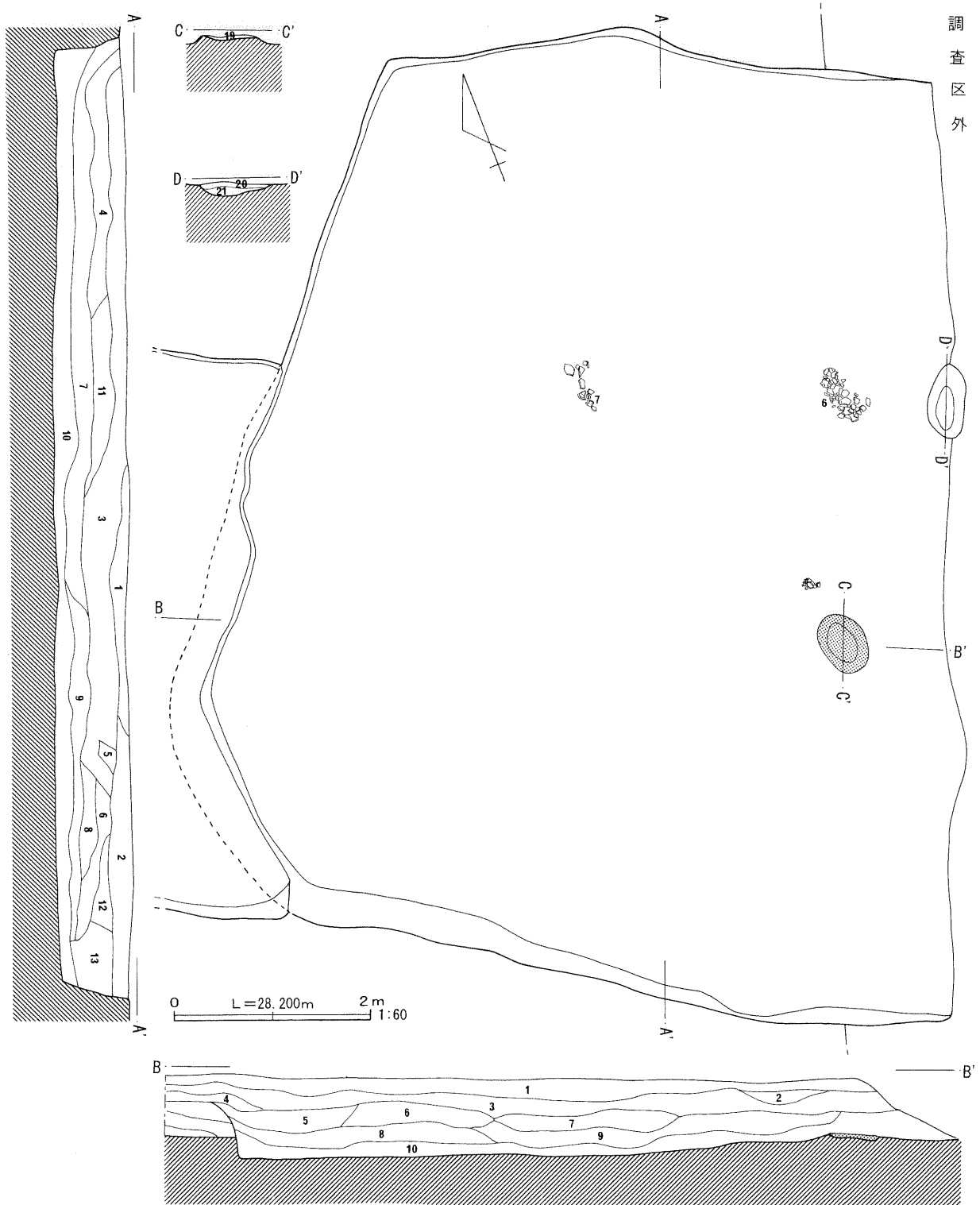
炉は2ヶ所検出されている。いずれも長円形を呈し、南側が径65×45cm、深さ3cm、北側が径75×36cm、深さ15cmを計る土坑内に、焼土が充填している(南炉・第19層)。北炉は、被熱層(第20層)下に炭化物含有層(第21層)をもつ。

覆土は、最下層の、多量のマンガン粒及び灰白色粘土を含むにぶい褐色シルト層(第10層)が安定して堆積するのみであり、上層は部分的である。上層には、マンガン粒及び灰白色粘土を含むシルト層(第2・3・5・6・8・9・11層)と、マンガン粒、炭化物及び灰白色粘土を含むシルト層(第1・4・16層)、酸化鉄、炭化物及び灰白色粘土を含むシルト層(第12・13層)、炭化物及び灰白色粘土を含むシルト層(第14・15層)、マンガン粒のみ含むシルト層(第7層)、酸化鉄及び炭化物を含む粘土層(第17・18層)がみられる。いずれも、投入土の様相を呈している。

遺物は、第10層中から、土師器器台(1)、甕(3)、分銅形土製品(11)が出土した他、土師器器台(2)、甕類(4~7)、壺(8~10)、鉄鏃(12)等が出土している。なお壺(8)は、62号住居跡出土片と接合されている。

第86表 C区61号住居跡出土遺物観察表(第172図)

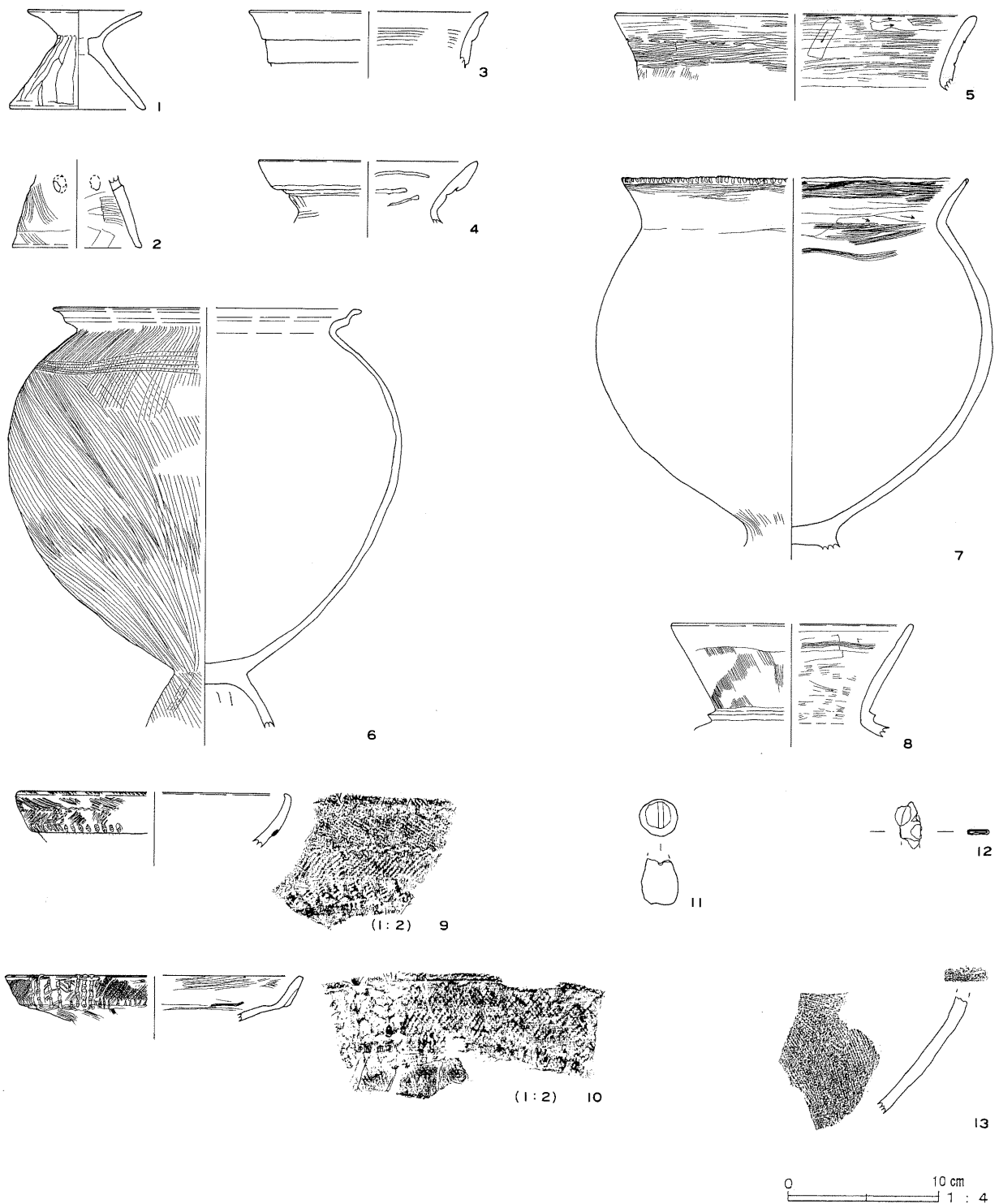
No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・器台	7.4	6.7	8.9	⑥①②③④	②	橙	器受部1/2欠	内面全面ナデ。外面受台部ナデ、脚部縦のケズリの後ナデ、内面ナデ。全体に表面磨滅した部分多い。
2	土師器・器台	—	—	(8.6)	③①④	②	橙	脚下半1/8	四方?透かし。外面縦の刷毛目、内面ナデ。全面吸炭。
3	土師器・甕	(16.0)	—	—	⑥②①	②	橙	口縁部1/5のみ	表面剥離。口縁内面一部横の刷毛目残存。二次加熱。
4	土師器・甕	(14.6)	—	—	③②①④	②	浅黄橙	口縁部1/6	内外面ヘラ先によるナデ。
5	土師器・甕	(23.5)	—	—	①②④	②	にぶい橙	口縁部1/6	外面口縁部横、括れ部縦の刷毛目、輪積み痕を残す、煤付着。内面横の刷毛目、一部吸炭、二次加熱。
6	土師器・台付甕	(19.7)	—	—	②①④	②	褐灰	脚裾欠3/4	外面口縁部横ナデ、括れ部以下刷毛目、全体まばらに赤色化、煤付着。内面全面横のナデ、ほぼ全面炭化物付着、台部指頭によるナデツケ。二次加熱。
7	土師器・台付甕	(23.0)	—	—	②①④⑥	②	明褐灰	台部1/3欠	外面口唇部横の木口状工具による連続ナデ、後刻み目、他全面ナデ、煤付着、下位赤色化。内面括れ部一部横のケズリ、肩部横の木口状工具によるナデ、胴部ナデ、底面炭化物層状に付着。二次加熱。
8	土師器・壺	(15.7)	—	—	①②④	②	明赤褐	口縁部1/4	外面縦の刷毛目の後口唇部及び括れ部横ナデ。内面横、口唇下位連続の横刷毛目、吸炭。
9	土師器・壺	(17.5)	—	—	②①⑥	②	橙	口縁部1/8	外面縦は縄文の施文の後下端に刷毛目状工具による刻み目。内面ミガキ様ナデ。全面朱塗。
10	土師器・壺	(19.2)	—	—	⑥②①④	②	にぶい黄橙	口縁部1/3	外面口縁は縄文の施文の後下端に刷毛目状工具による刻み目、後8条の棒状浮文、棒状浮文は4ヶ所の切断、頸部縦の刷毛目。内面横の刷毛目の後ナデ。一部朱塗。
11	分銅形土製品	—	—	1.5	①④②	②	浅黄橙	—	
12	鉄鏃	長さ—	幅1.4	厚さ3.0				—	
13	土師器・甕	—	—	—	①④②⑤	②	橙	胴部一部のみ	
14	軽石	—	—	—	—	—	—	—	写真のみ。図なし。



- |  |   |
|--|---|
| <p>1 明黄褐色(10YR 7/6)シルト。マンガン粒を多量、炭化物、灰白色粘土を含む。</p> <p>2 明黄褐色(10YR 6/8)シルト。マンガン粒を多量、灰白色粘土を含む。</p> <p>3 明黄褐色(10YR 6/6)シルト。マンガン粒を多量、灰白色粘土を含む。</p> <p>4 黄褐色(10YR 5/8)シルト。マンガン粒を多量、灰白色粘土、わずかに炭化物を含む。</p> <p>5 明黄褐色(2.5Y 7/6)シルト。灰白色粘土、マンガン粒を少量に含む。</p> <p>6 黄褐色(2.5Y 5/4)シルト。マンガン粒、灰白色粘土を少量に含む。</p> <p>7 にぶい褐色(10YR 5/8)シルト。マンガン粒を多量に含む。</p> <p>8 明黄褐色(2.5Y 5/4)シルト。マンガン粒、灰白色粒を少量に含む。</p> <p>9 明黄褐色(2.5Y 6/6)シルト。マンガン粒、灰白色粒を少量に含む。</p> <p>10 にぶい褐色(5Y 6/1)シルト。マンガン粒、灰白色粒を少量に含む。</p> <p>11 明褐色(7.5YR 5/8)シルト。マンガン粒を多量、灰白色粘土を含む。</p> | <p>12 明褐色(7.5YR 5/6)シルト。炭化物、酸化鉄を少量、灰白色粘土を含む。</p> <p>13 黄褐色(10YR 5/8)シルト。炭化物、酸化鉄を少量、灰白色粘土を含む。</p> <p>14 黄褐色(10YR 5/6)シルト。炭化物を少量、灰白色粘土を含む。</p> <p>15 黄褐色(10YR 5/6)シルト。炭化物を少量、14層より灰白色粘土を多く含む。</p> <p>16 明褐色(7.5YR 5/8)シルト。マンガン粒を多量、炭化物、わずかに灰白色粘土を含む。</p> <p>17 灰白色(2.5Y 7/1)粘土。炭化物を少量、酸化鉄を含む。</p> <p>18 灰白色(2.5Y 7/1)粘土。17層に似るが酸化鉄を多く含む。</p> <p>19 暗オリーブ色(7.5Y 4/3)粘土。炭、焼土塊が多量に含む。</p> <p>20 明赤褐色(2.5YR 5/8)粘土。被熱している。</p> <p>21 黄褐色(10YR 5/6)粘土。マンガン粒を多量、炭化物を少量含む。</p> |
|--|---|

第171図 C区61号住居跡

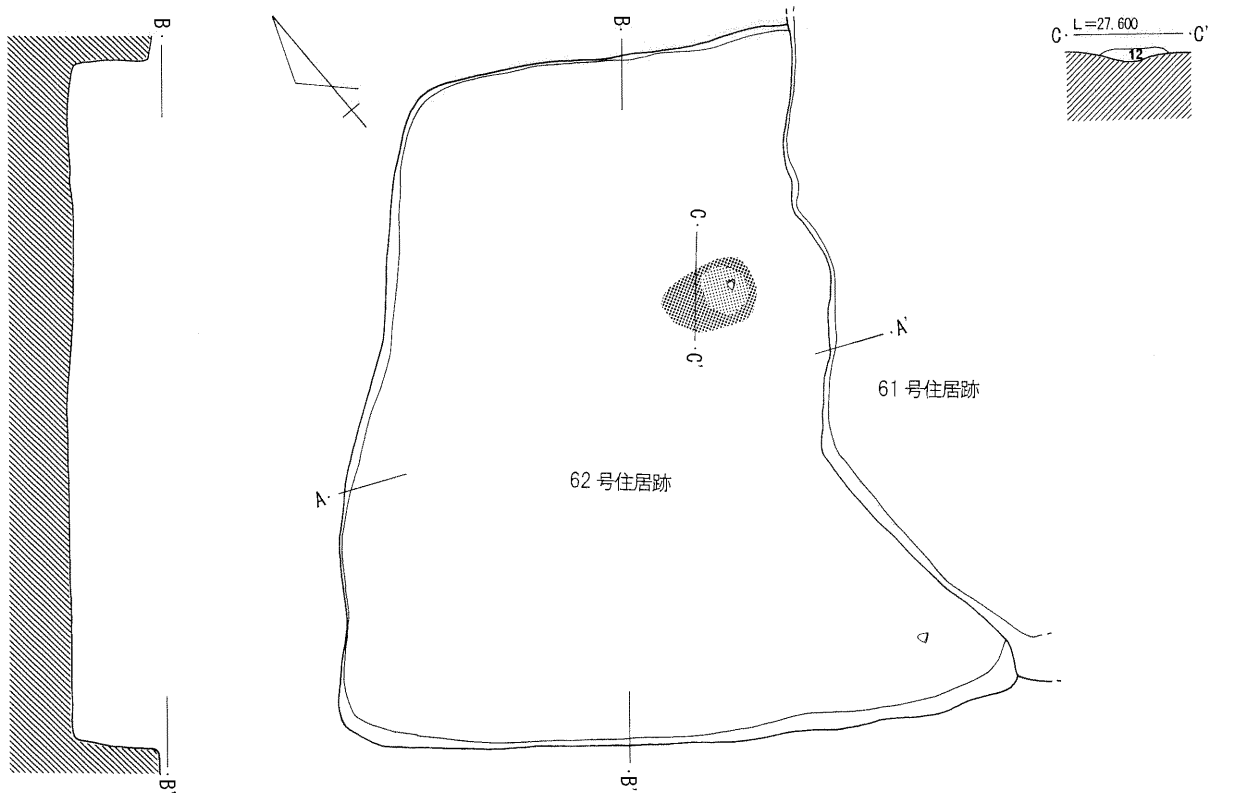




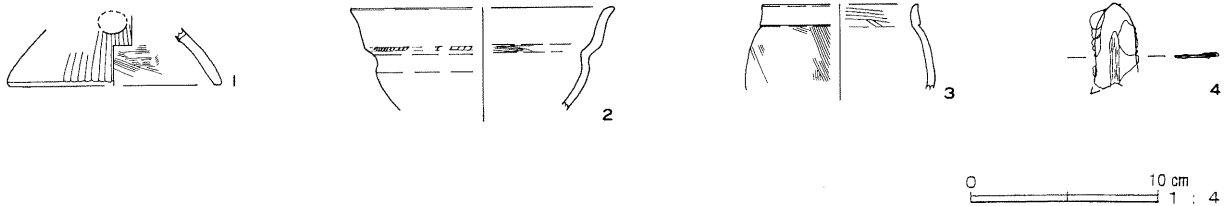
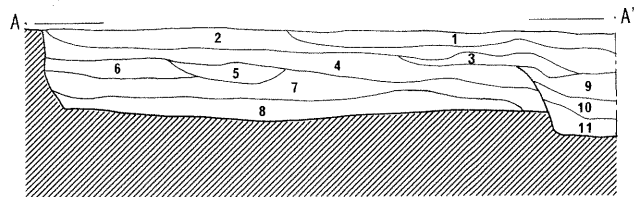
第172図 C区61号住居跡出土遺物

62号住居跡 I-14グリッドに位置する。第一確認面下位からの検出である。  
 (第173図) 61号住居跡によって切斷されている。

現状では、北東辺 $3.00 + \alpha$  m、南西辺 $5.60 + \alpha$  m、北西辺 $5.20$  mを計る。形態・規模共に不明ではあるが、南西辺の南隅が角度を変換する様相を備えているため、各辺長をほぼ



- 1 明黄褐色(10YR 7/6)シルト。マンガング粒を多量、炭化物、灰白色粘土を含む。
- 2 明黄褐色(10YR 6/6)シルト。マンガング粒を多量、灰白色粘土を含む。
- 3 黄褐色(10YR 5/8)シルト。マンガング粒を多量、灰白色粘土、僅かに炭化物を含む。
- 4 明褐色(7.5YR 5/8)シルト。マンガング粒を少量、灰白色粘土を含む。
- 5 明褐色(7.5YR 5/6)シルト。炭化物、酸化鉄を少量、灰色粘土を含む。
- 6 黄褐色(10YR 5/8)シルト。炭化物を少量、灰色粘土を含む。
- 7 黄褐色(2.5YR 5/6)シルト。炭化物を少量、灰色粘土を含む。
- 8 黄褐色(10YR 5/6)シルト。炭化物を少量、5層より多く灰色粘土を含む。
- 9 明黄褐色(2.5Y 7/6)シルト。マンガング粒を少量、灰白色粘土を含む。
- 10 明黄褐色(2.5Y 5/4)シルト。マンガング粒を少量、灰白色粘土を含む。
- 11 明褐色(5Y 6/1)シルト。マンガング粒、灰白色粘土を少量含む。
- 12 明赤褐色(2.5YR 7/8)粘土。炭を多量含む。被熱層。



第173図 C区62号住居跡及び出土遺物

同じくする、平行四辺形を呈すると思われる。北西辺の軸方位は、 $N-46^{\circ}-E$ を示す。

壁は、ほぼ垂直に立ち上がるが、下位で屈曲した面をもつ部分もみられる。掘り込み確認面から床面までの深さは、65cm前後である。

床面は、やや凹凸がみられるが、踏み固められた面もあって、安定している。ピット

第87表 C区62号住居跡出土遺物観察表 (第173図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・器台	—	—	(11.6)	②⑥③①	②	橙	脚部のみ1/6	穿孔有り(数不明)。外面縦のミガキ。内面木口状工具によるナデ。二次加熱。
2	土師器・壺	(14.3)	—	—	⑥①②④	②	浅黄橙	上位1/3	口縁下端斜の刻み目。外面横のナデ。内面方向不定ミガキ様ナデ。口縁下段部のみ横のミガキ。
3	土師器・壺	(8.5)	—	—	①②④	②	橙	上位1/6	口縁部外面ナデ、内面横の刷毛目。胴部外面縦の刷毛目、内面ナデ。内外面一部吸炭。二次加熱。
4	鉄鏝	長さ— 幅2.3 厚さ0.1						—	柄木の痕跡あり。

は、検出されていない。

炉は、竪穴中央からやや北東辺寄りに設置されている。ほぼ円形を呈し、径43×40cm、深さ10cmを計る。また周囲からは、炭化物が検出されている。

覆土は、上位から、少量のマンガン粒及び灰白色粘土を含む明褐色シルト層（第4層）、少量の炭化物及び灰白色粘土を含む黄褐色シルト層（第7層）、少量の炭化物及び多量の灰白色粘土を含む黄褐色シルト層（第8層）であり、中間に少量の炭化物・酸化鉄及び灰白色粘土を含む明褐色シルト層（第5層）、少量の炭化物及び灰白色粘土を含む黄褐色シルト層（第6層）が堆積している部分もある。61号住居跡同様、投入土の様相を呈している。

遺物は、いずれも覆土中から、土師器器台（1）、（2・3）、鉄鏝（4）が出土している。

63号住居跡 J-13・14からK-13・14グリッドに亘って位置し、東隅は調査区外に及んでいる。（第174図） 第一確認面下位からの検出である。

64号住居跡及び1号井戸跡によって切断されている。

現状では、北東辺4.40+αm、南東辺2.15+αm、南西辺5.50+αmを計る。形態・規模共に不明ではある。南西辺の軸方位は、N-37°-Wを示す。

壁は、急傾斜を成して立ち上がる。掘り込み確認面から床面までの深さは、50cm前後である。

床面は、やや凹凸がみられるが、踏み固められた面もあって、安定している。ピットは、検出されていない。

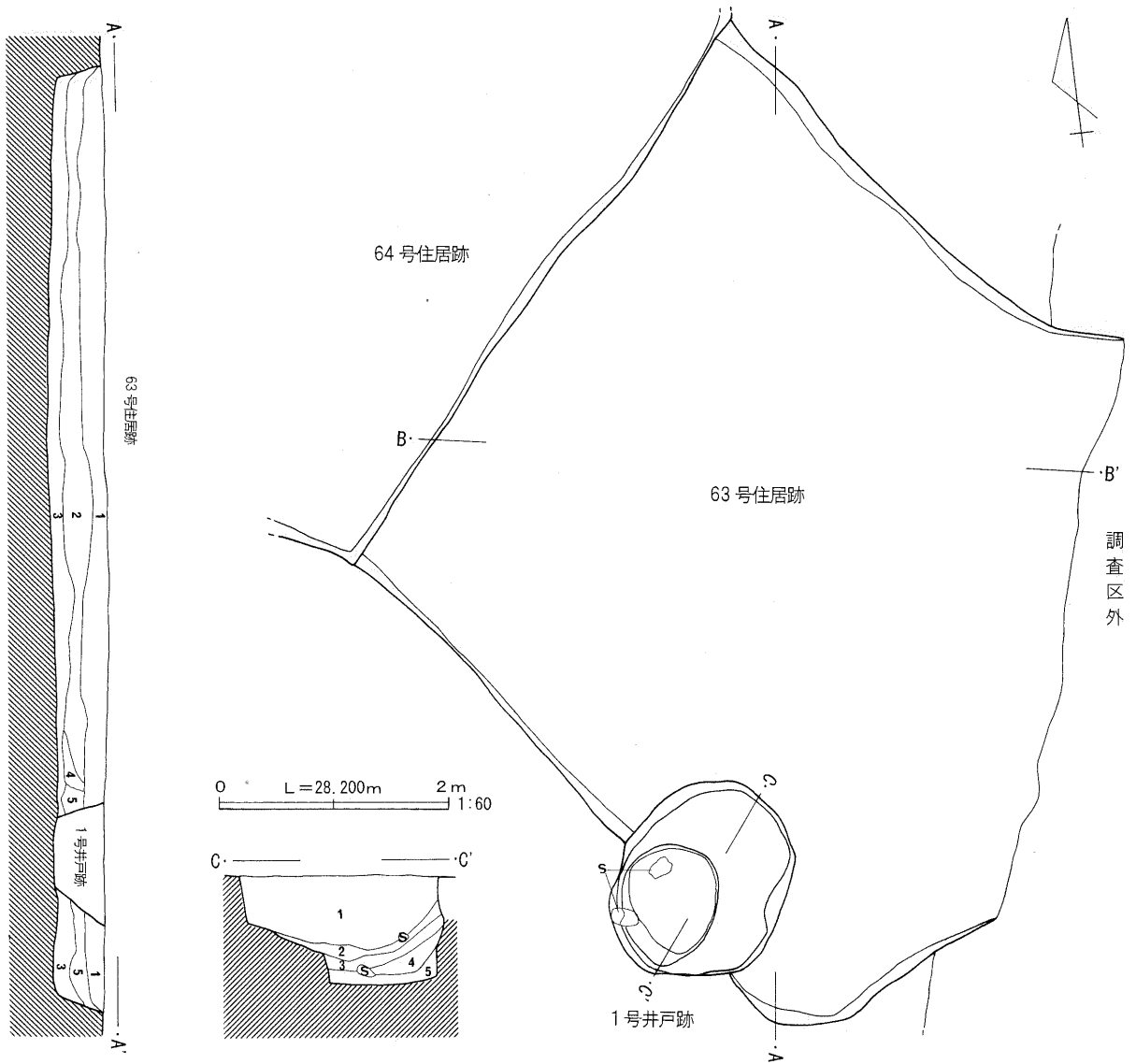
炉も、検出されていない。

覆土は、上位から、多量のマンガン粒及び少量の炭化物を含む明黄褐色シルト層（第1層）、少量の炭化物及びマンガン粒を含むにぶい黄褐色シルト層（第2層）、微量の炭化物を含む明黄褐色シルト層（第3層）であり、南側では、第2層に代わって、少量の炭化物を含むにぶい橙色シルト層（第4層）、淡黄色シルト、炭化物、マンガン粒、酸化鉄を含む灰黄色シルト層（第5層）の堆積している部分もみられる。

遺物は、覆土中から、土師器（1）、壺（2・3）が出土している。

第88表 C区63号住居跡出土遺物観察表 (第174図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・壺	(12.7)	—	—	⑥①②③④	②	黄橙	上位1/4	口縁部横ナデ。体部ナデ(外面横のケズリ痕)。
2	土師器・壺	—	—	(8.6)	①③②④	②	橙	底部のみ	外面縦の刷毛目。内面ナデ、吸炭。
3	土師器・壺	—	—	—	①③④②⑥	②	にぶい橙	—	
4	鏝	長さ9.9 幅3.6 厚さ2.9 重さ380g						—	

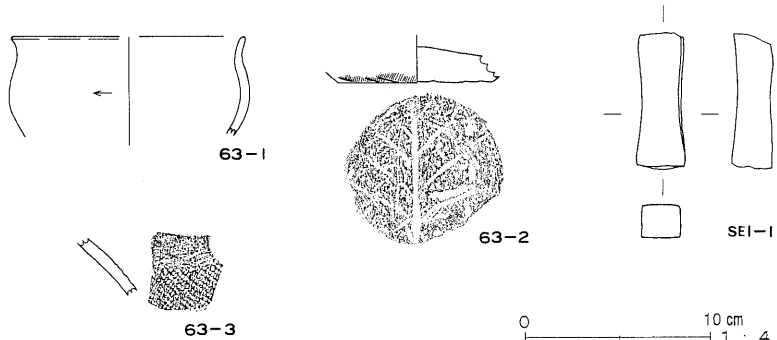
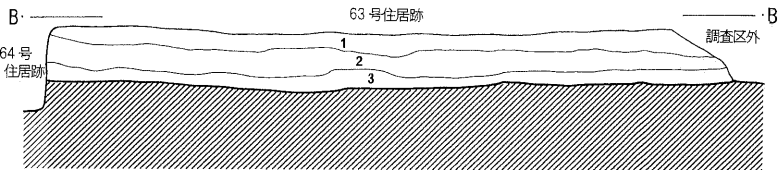


63号住居跡土層

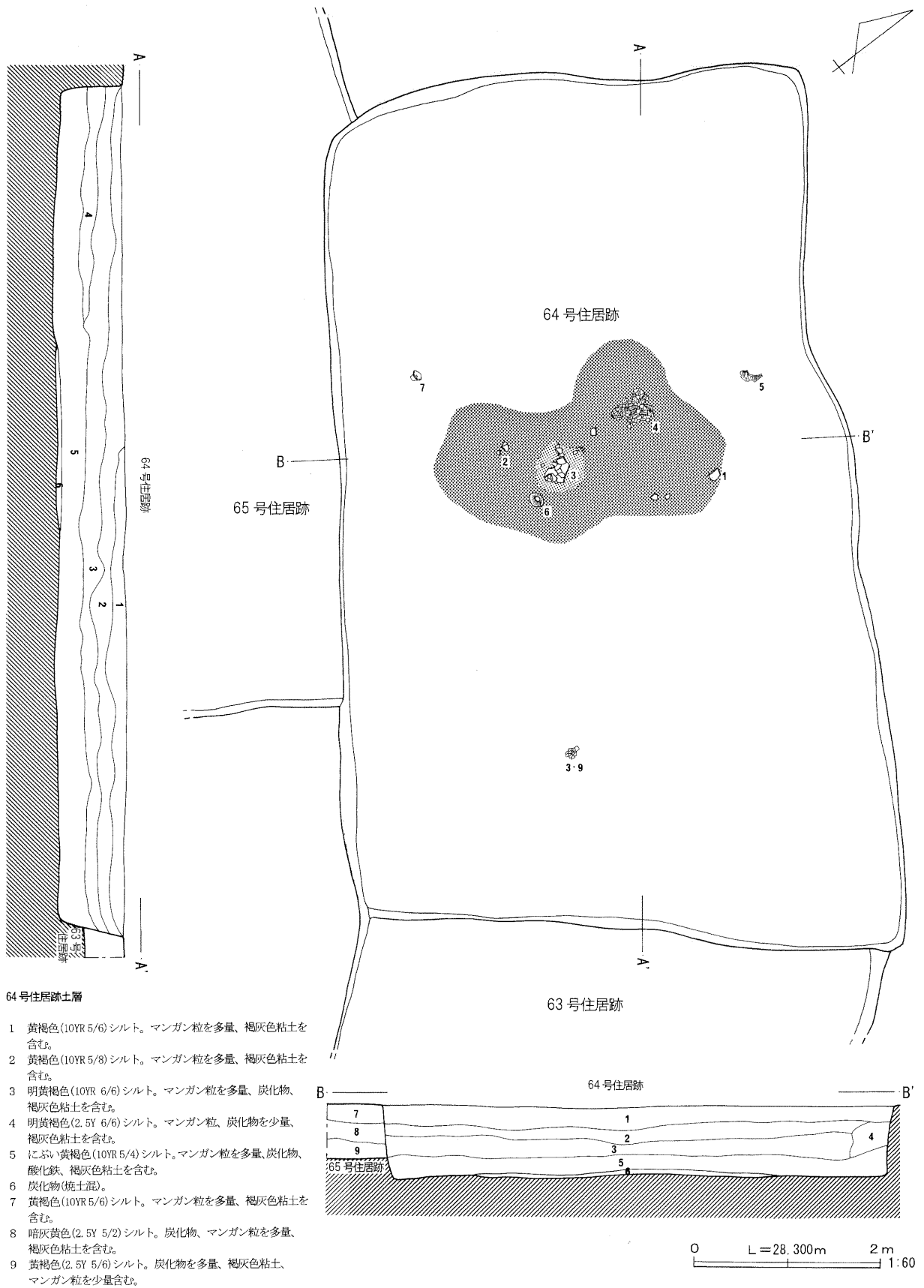
- 1 明黄褐色(10YR 6/6)シルト。マンガン粒を多量、炭化物を少量含む。
- 2 濃い黄褐色(10YR 5/3)シルト(粘土質)。マンガン粒、炭化物粒(2~3mm大)を少量含む。
- 3 明黄褐色(2.5Y 7/6)シルト。炭化物粒を微量含む。
- 4 濃い橙色(7.5YR 6/4)シルト(粘土質)。炭化物を少量含む。
- 5 灰黄色(2.5Y 7/2)シルト(粘土質)。淡黄色(2.5Y 8/3)シルト粒、炭化物粒、マンガン粒、酸化鉄粒を多量含む。

1号井戸跡土層

- 1 灰オリーブ色(5Y 5/2)粘土。酸化鉄、炭化物、白色軽石粒(火山灰?)を多量含む。
- 2 浅黄色(5Y 7/3)粘土。酸化鉄、炭化物を多量含む。下位に酸化鉄が集中している。
- 3 灰色(5Y 5/1)粘土。1層より粒子の細かい白色軽石粒(火山灰?)を多量、マンガン粒、炭化物を少量含む。
- 4 灰色(5Y 5/1)粘土。酸化鉄を少量、上位に灰白色(7.5Y 7/2)粘土小ブロック状に含む。
- 5 灰白色(5Y 7/2)粘土。酸化鉄、炭化物粒をやや多量含む。



第174図 C区63号住居跡、1号井戸跡及び出土遺物



第175図 C区64号住居跡

64号住居跡 I-14・15からJ-14・15グリッドに亘って位置する。第一確認面下位からの検出で(第175図) ある。

(第176図) 63号・65号両住居跡を切断している。

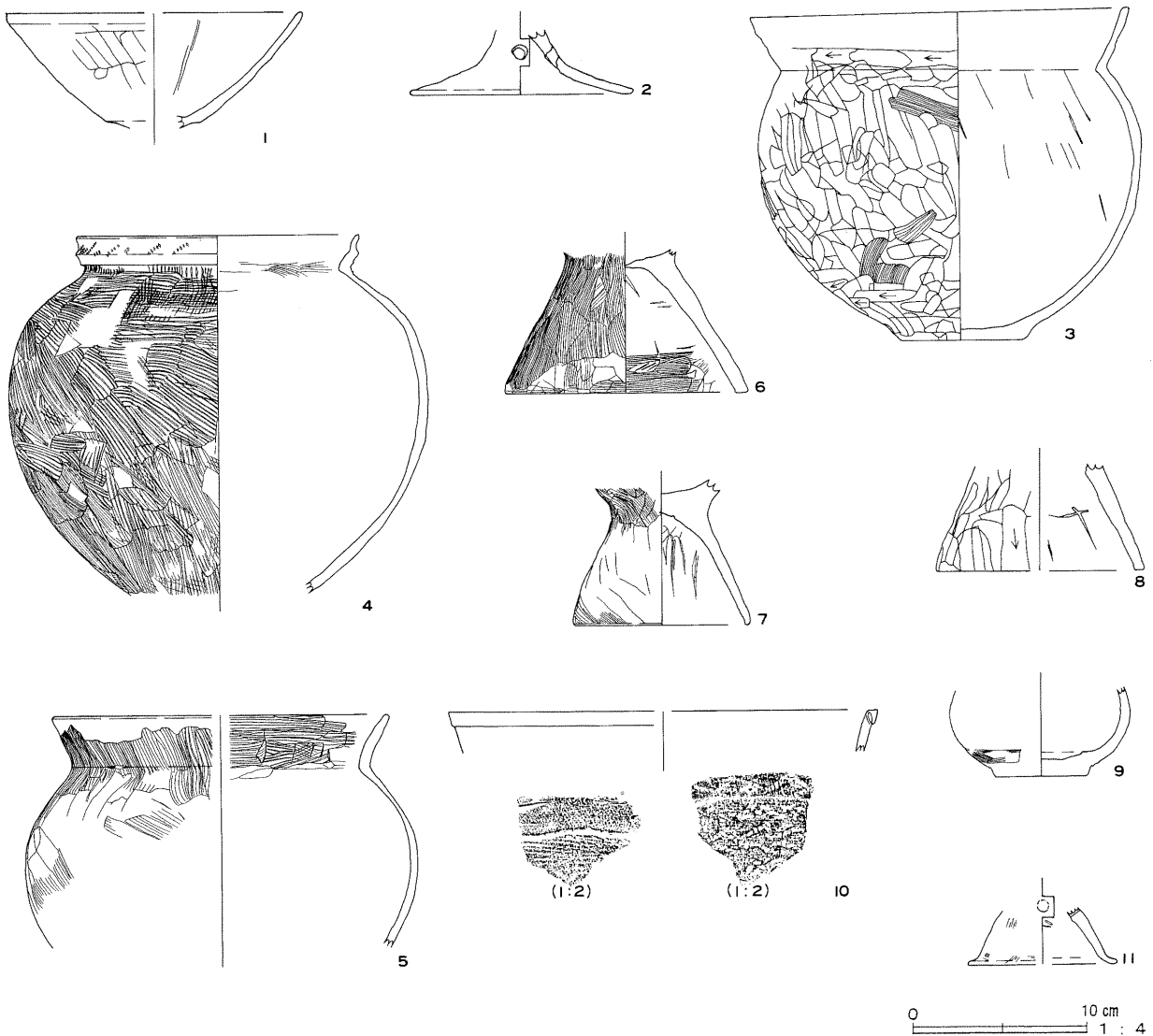
北東辺9.66m、南東辺5.85m、南西辺8.57m、北西辺5.15mを計る。不整形ではあるが、ほぼ長方形を呈している。主軸方位は、 $N-50^{\circ}-W$ を示す。

壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。掘り込み確認面から床面までの深さは、75cm前後である。

床面は、やや凹凸がみられるが、踏み固められた面もあって、安定している。ピットは、検出されていない。

炉は、竪穴中央やや西寄りに設けられている。円形を呈し、径55×58cm、被熱部分の厚さ4cmを計る。周囲には焼土粒を含んだ炭化物層(第6層)が広がっている。

覆土は、第1～第5層、全てが多量のマンガン粒及び褐灰色粘土を含むシルト層であるが、第3・4・5層には含有物に炭化物が加わり、さらに第5層には酸化鉄が加わっている。母体となるシルト層は、黄褐色であり、わずかに明るさが異なっている。



第176図 C区64号住居跡出土遺物

第89表 C区64号住居跡出土遺物観察表(第176図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・高杯	(17.1)	—	—	⑥③④①②	②	橙	口縁部 1/8	外面木口状工具による縦のナデ。内面磨滅した部分多い、放射状ミガキの痕跡。
2	土師器・高杯	—	—	—	⑥③①④	②	浅黄橙	脚部 1/2	脚部穿孔(3孔)。表面剥離。外面縦、内面横のナデか。
3	土師器・甕	22.0	19.4	7.1	②①③④	②	橙	一部欠	口縁部横ナデ、端部矩形仕上げ。外面括れ横のケズリ、胴部横～縦の木口状工具によるナデ、一部刷毛目状条痕、底部付近横のケズリ。内面上位ヘラナデ、下位横のナデ。一部炭化物付着。
4	土師器・台付甕	16.4	—	—	⑥①②④	②	橙	台部欠	外面口縁部横ナデ、上段には斜の櫛形工具による刺突文、肩部縦後横、中位斜、下位縦の刷毛目、煤付着、赤色化。内面全面ナデ、括れ部のみ横の刷毛目、炭化物付着。二次加熱。
5	土師器・台付甕	(19.6)	—	—	⑥①④	②	浅黄橙	上位 1/4	外面口縁部～肩部縦の刷毛目、口唇部横のナデ、胴部斜の刷毛目、表面剥離した部分多い。吸炭、赤色化、二次加熱。内面口縁部～括れ、横の刷毛目、胴部肩木口状工具による横のナデ。中位以下ナデ。
6	土師器・台付甕	—	—	14.0	①③②④	②	灰白	台部のみ	外面縦の刷毛目、裾部横の刷毛目。内面上位ナデ、下位横の刷毛目。吸炭。
7	土師器・台付甕	—	—	10.2	③①②④	②	明赤褐	台部のみ	胴部底面炭化物付着。胴部下端～台部縦の刷毛目、後台部には縦のナデが加わる。台部内面上位ナデツケ、裾部横のナデ。吸炭。二次加熱。
8	土師器・台付甕	—	—	(12.0)	⑥③①④	②	褐	台部 1/4	外面縦のケズリの後ナデ。内面天井部ナデツケ、下位横のヘラナデ。全面吸炭。二次加熱。
9	土師器・埴	—	—	5.4	③②①④	②	淡橙	下位のみ	外面横の刷毛目の後ナデ。内面ナデ、底面ナデツケ。
10	土師器・壺	(24.8)	—	—	⑥①④②	②	橙	口縁部 1/8	
11	土師器・高杯	—	—	(8.5)	③④①②	②	にぶい橙	脚部 1/8	脚部穿孔。外面縦、裾部横の刷毛目の後ナデ。内面横のナデ。吸炭。
12	礫	長さ 14.7 幅 5.7 厚さ 5.3 重さ 720g						—	
13	礫	長さ 16.1 幅 6.2 厚さ 3.4 重さ 320g						—	

遺物は、炉の周囲に集中して、土師器高杯(1・2)台付甕(4～7)、またやや離れて土師器小型壺(9)が出土している。また、土師器甕(3)は、炉の直上第3層中から出土しているが、接合された破片は、床面上から小型壺(9)と共に出土している。壺(10)、高杯(11)は、遺構検出時に出土したものである。

**65号住居跡** J-14・15からK-14・15グリッドに亘って位置する。第一確認面下位からの検出(第177図)である。

(第178図) 66号住居跡を切断しているが、64号住居跡によって切断されている。

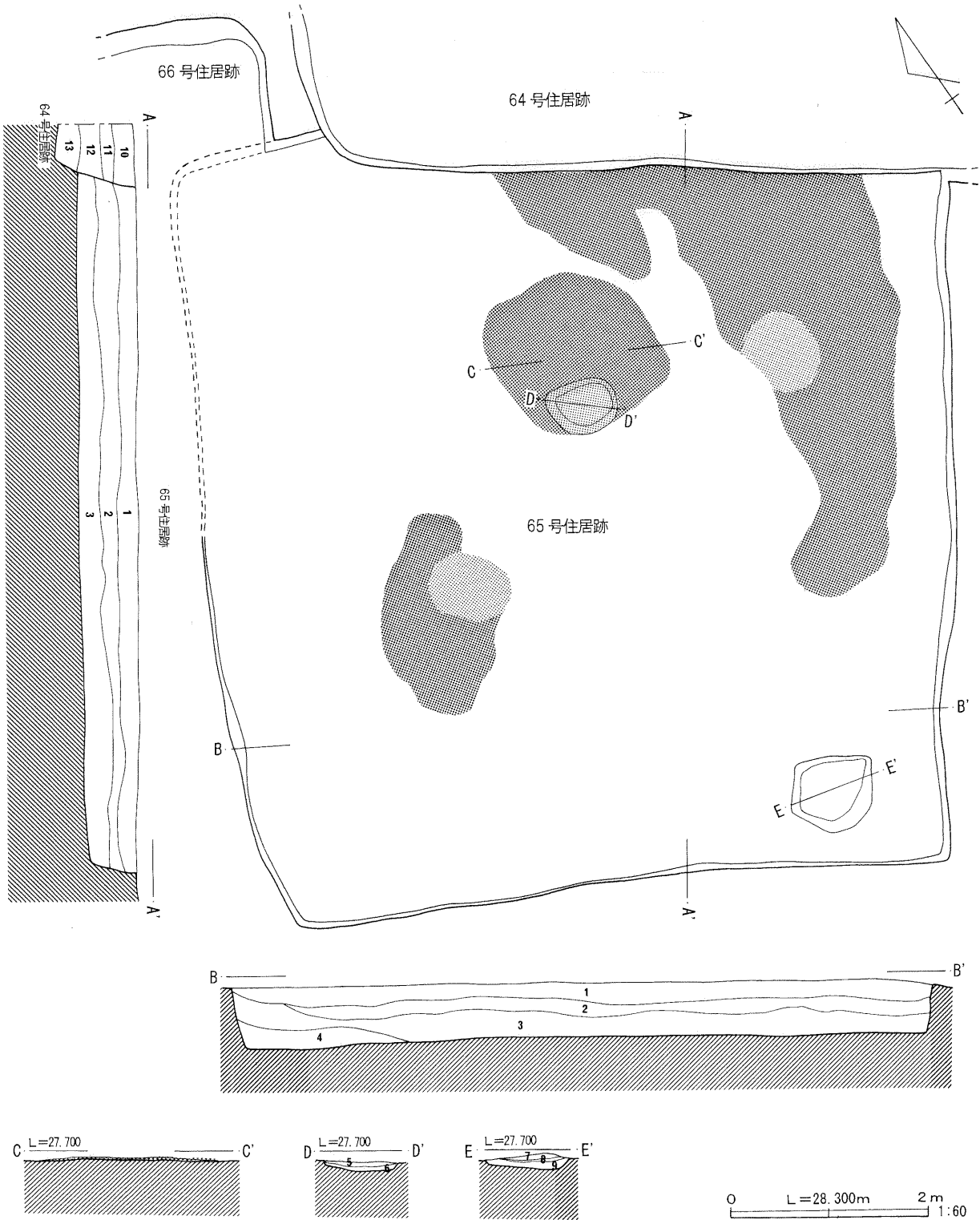
全体規模は不明であるが、北東辺1.60+αm、南東辺7.12+αm、南西辺8.78m、北西辺7.80mを計る。北西部の両壁間も7.80mを計ることから、不整形ではあるが、ほぼ正方形を呈していると思われる。主軸方位は、N-29°-Eを示す。

壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。掘り込み確認面から床面までの深さは、62cm前後である。床面は、やや凹凸がみられるが、踏み固められた面もあって、安定している。

ピットは、南隅に穿たれており、やや崩れた方形を呈し、79×72cm、深さ12cmを計る。

炉は、竪穴中央やや北東寄りに設けられている。隅円長方形を呈し、径67×56cm、深さ9cmを計る。下位に、多量の焼土粒を含むにぶい黄橙色シルト層(第6層)が堆積し、上位には、焼土層(第5層)が、厚さ5cm前後で広がっている。また、周囲には焼土粒を含んだ炭化物層が広がっている。炭化物層は、竪穴北東隅部分及び、中央西隅寄り部分に堆積し、それぞれ、床面が長円形に焼土化した部分をもっている。北東側の焼土は、径90×65cm、西側の焼土は、径80×60cmの範囲に認められ、床面が3cm前後焼土化しているものである。掘り込みは伴っていない。複数の炉が存在していた可能性もある。

覆土は、上位から、白色砂粒、マンガン粒及び褐灰色粘土を含む明黄褐色シルト層



65号住居跡土層

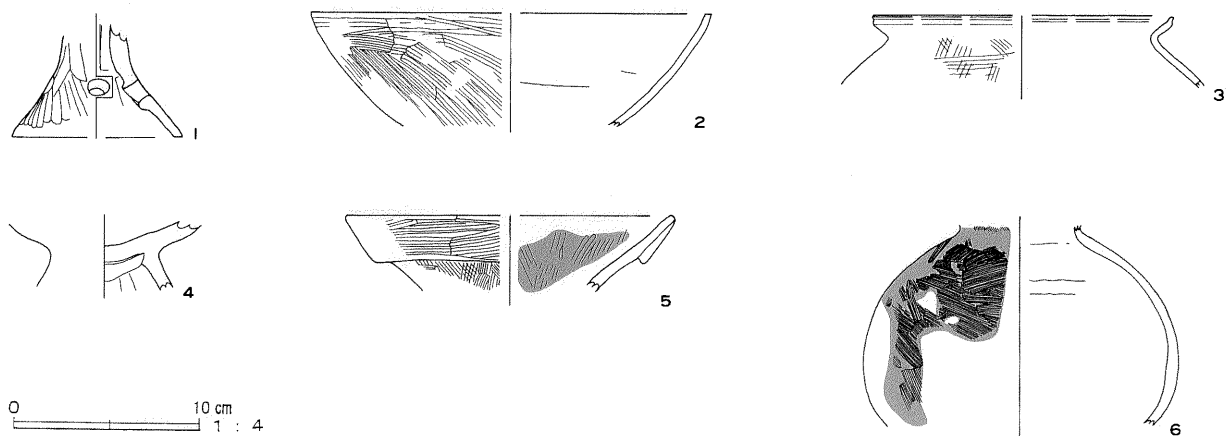
- 1 明黄褐色(10YR 6/8)シルト。白色粒、マンガン粒、褐灰色粘土を含む。
- 2 暗灰黄色(2.5Y 5/2)シルト。炭化物を多量、マンガン粒、褐灰色粘土を含む。
- 3 黄褐色(2.5Y 5/6)シルト。マンガン粒を少量、炭化物、褐灰色粘土を含む。
- 4 にぶい黄褐色(10YR 5/4)シルト。マンガン粒を少量、炭化物、褐灰色粘土を含む。
- 5 橙色(2.5YR 6/8)焼土層。
- 6 にぶい黄褐色(10YR 6/4)シルト。橙色(2.5YR 6/8)焼土粒を多量含む。

- 7 にぶい黄褐色(10YR 4/3)砂層。灰白色(10YR 7/1)シルト粒、橙色(2.5YR 6/8)焼土ブロックを多量含む。

- 8 にぶい橙色(7.5YR 6/4)シルト。灰白色(10YR 7/1)シルト粒を多量含む。
- 9 にぶい黄褐色(10YR 6/4)粘土。灰白色(10YR 7/1)シルト粒が上位で極多量、下位で微量含む。
- 10 黄褐色(10YR 5/6)シルト。マンガン粒を多量、褐灰色粘土を含む。
- 11 黄褐色(10YR 5/8)シルト。マンガン粒を多量、褐灰色粘土を含む。
- 12 明黄褐色(10YR 6/6)シルト。マンガン粒を多量、炭化物、褐灰色粘土を含む。
- 13 にぶい黄褐色(10YR 5/4)シルト。マンガン粒を多量、炭化物、酸化鉄、褐灰色粘土を含む。

第177図 C区65号住居跡





第178図 C区65号住居跡出土遺物

第90表 C区65号住居跡出土遺物観察表 (第178図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・器台	—	—	(9.2)	①③②④	②	橙	脚部 1/3	脚部四方透かし。外面上位縦のケズリ様ナデ、下位縦のミガキ、裾部横のナデ。内面横のナデ。端部矩形仕上げ。
2	土師器・鉢	(21.7)	—	—	⑥②③①④	②	浅黄橙	上位 1/4	外面口縁部横、体部斜の刷毛目。内面剥離しており不詳。全体に薄く煤付着。二次加熱。
3	土師器・甕	(16.2)	—	—	⑥②①③④	②	黄橙	口縁部 1/8	表面磨滅しており不詳。肩外面一部斜の後横の刷毛目。
4	土師器・台付甕	—	—	—	②①④③	②	黄橙	接合部のみ	外面縦のナデ。内面底部横のナデ、脚縁のナデツケ。ヘソ接合、接合部吸炭。二次加熱。
5	土師器・壺	(17.9)	—	—	③①②④	②	橙	口縁部 1/4	外面二重口縁横の刷毛目、下位横のナデツケ、頸部斜の刷毛目。内面横のナデの後縦のミガキ、朱塗。
6	土師器・埴	—	—	—	③②①④	②	橙	胴部 1/4	外面頸部～括れ部縦の刷毛目、胴部上位は横を主体とし中位以下は縦を主体とした刷毛目、肩部にはミガキ様ナデが加わる、全面朱塗。内面水拭き、輪積み痕残す。
7	磔	長さ 13.5 幅 10.7 厚さ 3.0 重さ 640g						—	
8	磔	長さ 11.2 幅 5.0 厚さ 2.5 重さ 270g						—	

(第1層)、多量の炭化物及びマンガン粒、褐灰色粘土を含む暗灰黄色シルト層 (第2層)、少量のマンガン粒及び炭化物、褐灰色粘土を含む黄褐色シルト層 (第3層) が堆積している。また壁際の最下層には、少量のマンガン粒及び炭化物、褐灰色粘土を含むにぶい黄褐色シルト層 (第4層) のみられる部分もある。

遺物は、炭化部の上面から、土師器高杯 (1)、鉢 (2)、台付甕 (3・4)、壺 (5・6)、磔 (7・8) が出土している。

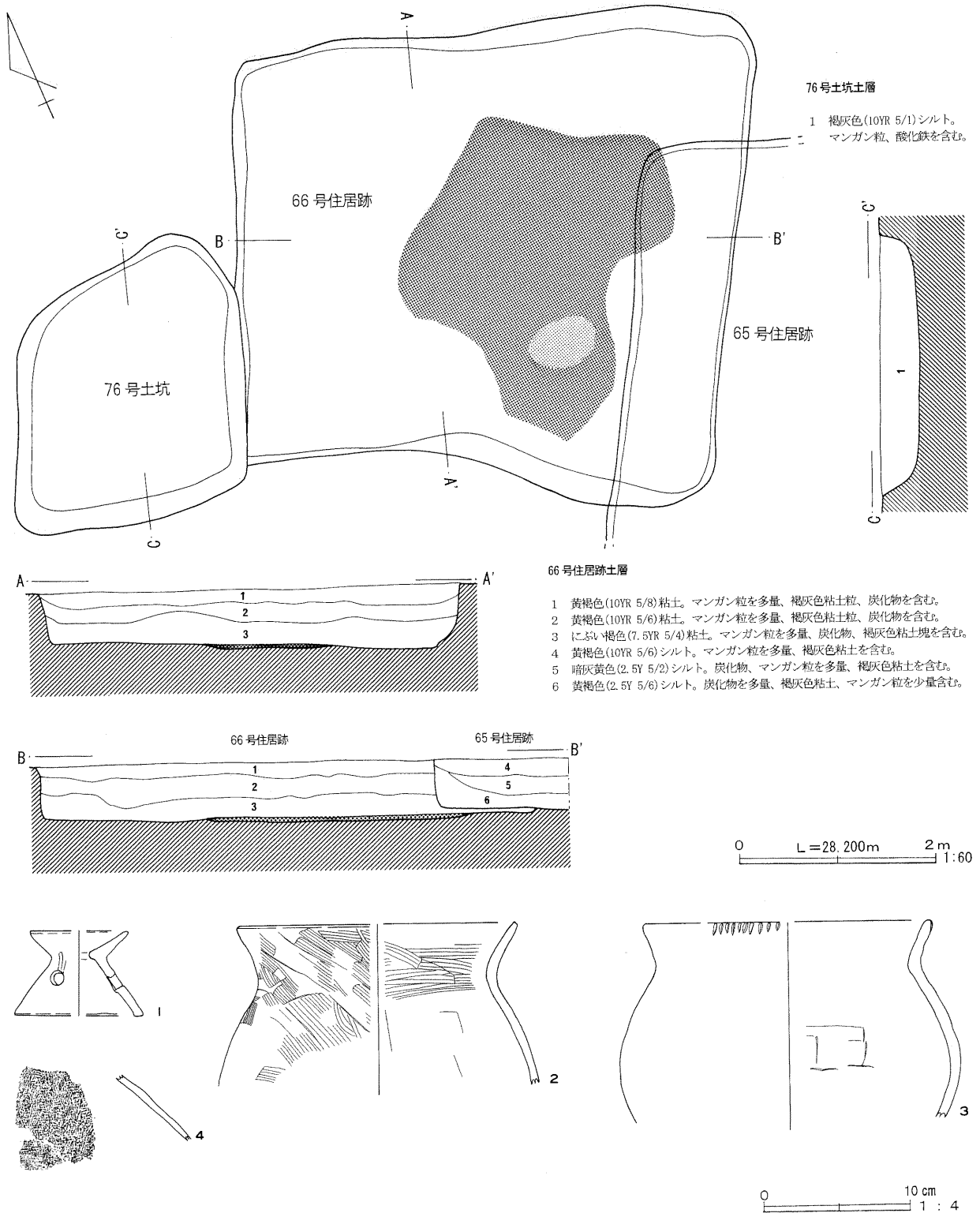
**66号住居跡** I-15からJ-15グリッドに亘って位置する。第一確認面下位からの検出である。(第179図) 65号住居跡及び76号土坑によって切断されている。

北東辺5.30m、南東辺5.05m、南西辺4.76m、北西辺4.18mを計る。南東辺を底辺とした台形を呈していると思われる。主軸方位は、N-60°-Wを示す。

壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。掘り込み確認面から床面までの深さは、56cm前後である。

床面は、ほとんど凹凸がなく、ほぼ水平面を成して、安定している。ピットは、穿たれていない。

炉は、竪穴中央と南隅の中間に設けられている。床面が、径70×48cmの範囲で長円形に焼土化したものであり、焼土層の厚みは、3cm前後である。掘り込みは伴っていない。



第179図 C区66号住居跡、76号土坑及び66号住居跡出土遺物

第91表 C区66号住居跡出土遺物観察表 (第179図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・器台	(6.8)	5.9	(8.9)	③②①④	②	灰白	1/4	受台部全面ナデ。脚外面縦のミガキ、内面ナデ。受台部脚外面磨滅した部分多い。
2	土師器・甕	(19.8)	—	—	⑥③①②④	②	明赤褐	上位1/5	外面斜の刷毛目。内面口縁~括れ横の刷毛目、後口唇部横のナデ、胴部横のナデ、吸炭。二次加熱。
3	土師器・甕	(19.8)	—	—	②①③④⑥	②	浅黄橙	上位1/5	全面ナデ。吸炭。二次加熱。
4	土師器・壺	—	—	—	⑥①②③④	②	橙	—	

また、周囲特に北側に広く、炭化物層が堆積している。

覆土は、上位から、多量のマンガン粒及び褐灰色粘土粒、炭化物を含む黄褐色粘土層（第1層）、多量のマンガン粒及び褐灰色粘土粒、炭化物を含む黄褐色粘土層（第2層・第1層より黄味が強い）、多量のマンガン粒及び褐灰色粘土粒、炭化物を含むにぶい褐色粘土層（第3層）が堆積している。

遺物は、覆土中から、土師器器台（1）、甕（2・3）、壺（4）が出土している。

**67号住居跡** I-15・16からJ-16グリッドに亘って位置する。第一確認面下位からの検出である。

(第180図) 75号土坑に上面を削平され、68号住居跡及び攪乱坑に切断されている。

(第181図) 北東辺6.50m、南東辺7.95m、南西辺4.78m、北西辺10.56mを計る。不整形ではあるが、北西辺を底辺とした台形を呈していると思われる。北西辺の軸方位は、N-36°-Eを示す。

壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。掘り込み確認面から床面までの深さは、50cm前後である。

床面は、ほとんど凹凸がなく、ほぼ水平面を成して、安定している。ピットは、穿たれていない。

炉は、中央北東壁下と、中央南西壁下の二ヶ所に設けられている。北東炉は、円形を呈し、径70×62cm、深さ8cmを計る。焼土に、炭化物等が混在し、焼土化は弱い。周囲には、焼土が混在した炭化物が薄く堆積している。南西炉は、円形を呈し、径55×50cm、深さ9cmを計る。こちらは、焼土塊となっている。

覆土は、上位から、多量の褐灰色粘土粒・マンガン粒を含む黄褐色シルト層（第1層）、多量の褐灰色粘土粒・マンガン粒及び少量の炭化物を含む明黄褐色シルト層（第2層）、多量の褐灰色粘土粒・マンガン粒を含むオリーブ褐色シルト層（第3層）、多量の明黄褐色粘土粒・マンガン粒を含むオリーブ褐色シルト層（第4層）、多量のマンガン粒及び褐灰色粘土塊を含む暗褐色シルト層（第5層）が堆積している。

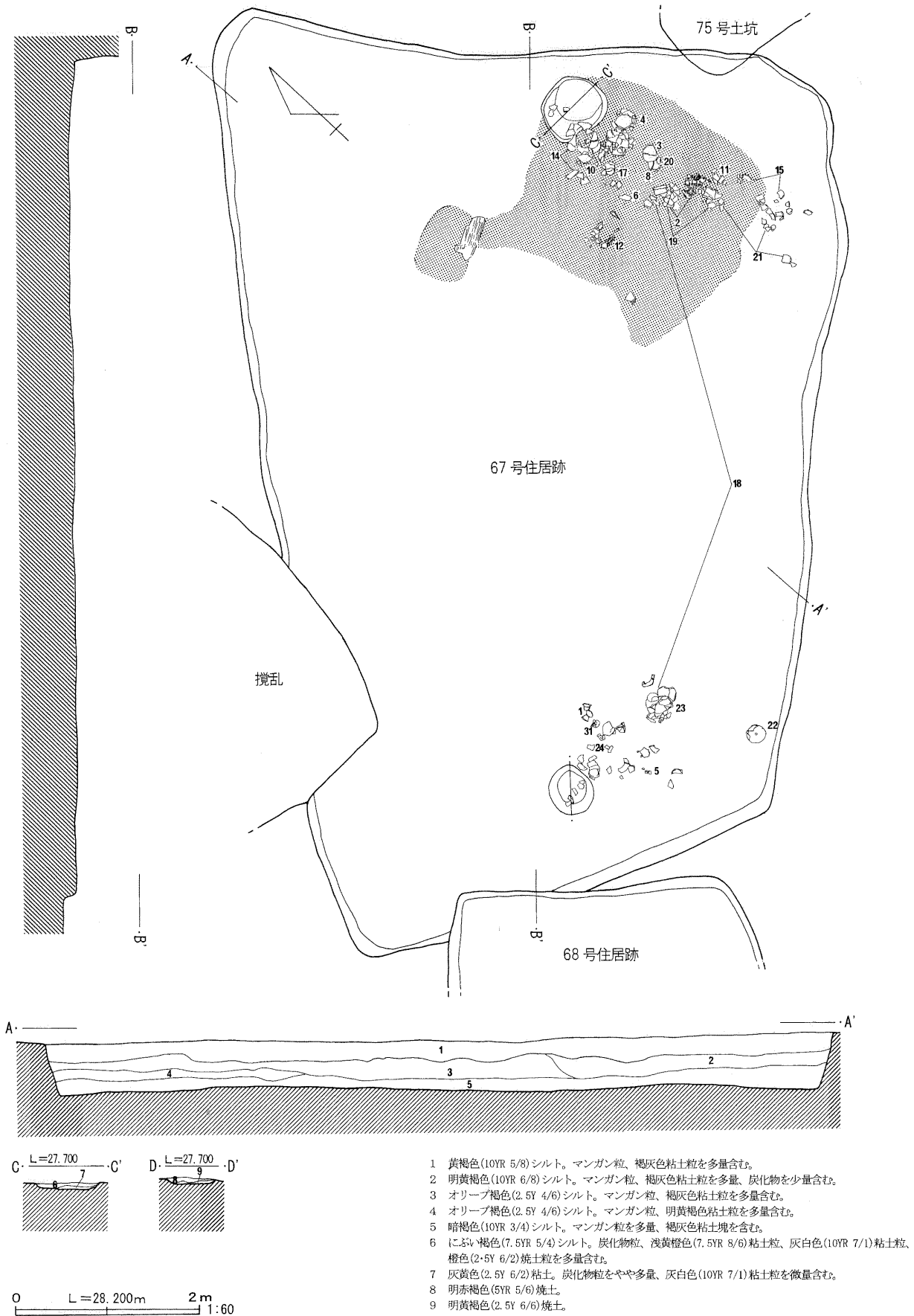
遺物は、二ヶ所の炉周辺に別れて出土している。北東炉周辺では、大部分が台付甕を含む甕類（2～4・6・8・10～12・14・15・17・19・20）であり、他器種は、鉢（21）が1点出土したのみである。一方、南西炉周辺では、甕類は（5）1点のみで、器台（1）、壺（23・24）、甑（22）、埴（31）等、多器種が出土している。複数炉の使い分けが成された結果であろう。また、覆土中から出土した腕輪状土製品（33）は、前報告書『IV』で2号溝出土遺物-3とした土製品と接合されたものである。

**68号住居跡** J-16グリッドに位置する。第一確認面下位からの検出である。

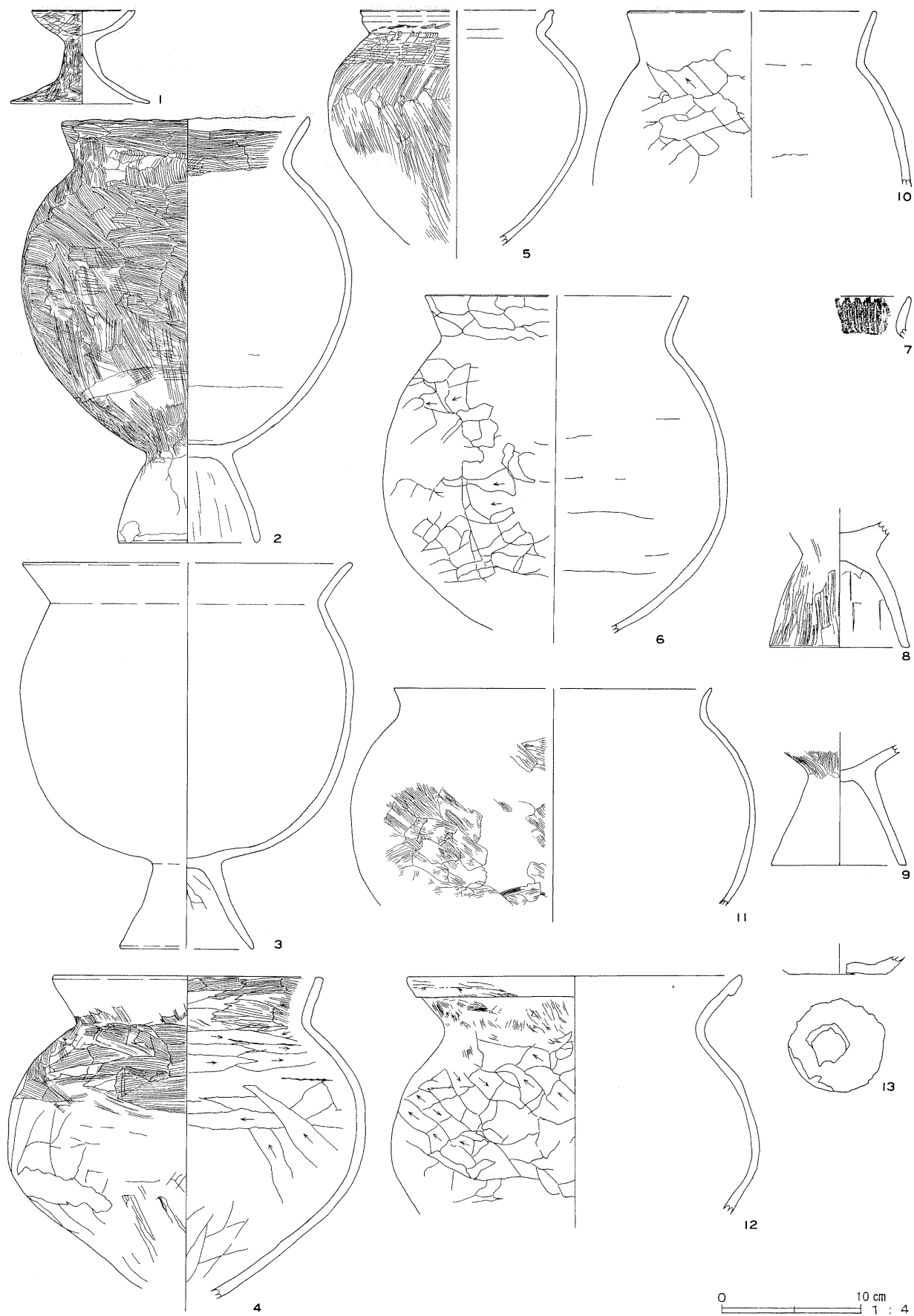
(第184図) 67号住居跡を切断している。

北東辺2.85m、南東辺4.20m、南西辺3.04m、北西辺3.25mを計る。南東辺が脹らみをもつため、不整形であるが、南東辺を底辺とした台形を呈していると思われる。主軸方位は、N-42°-Wを示す。

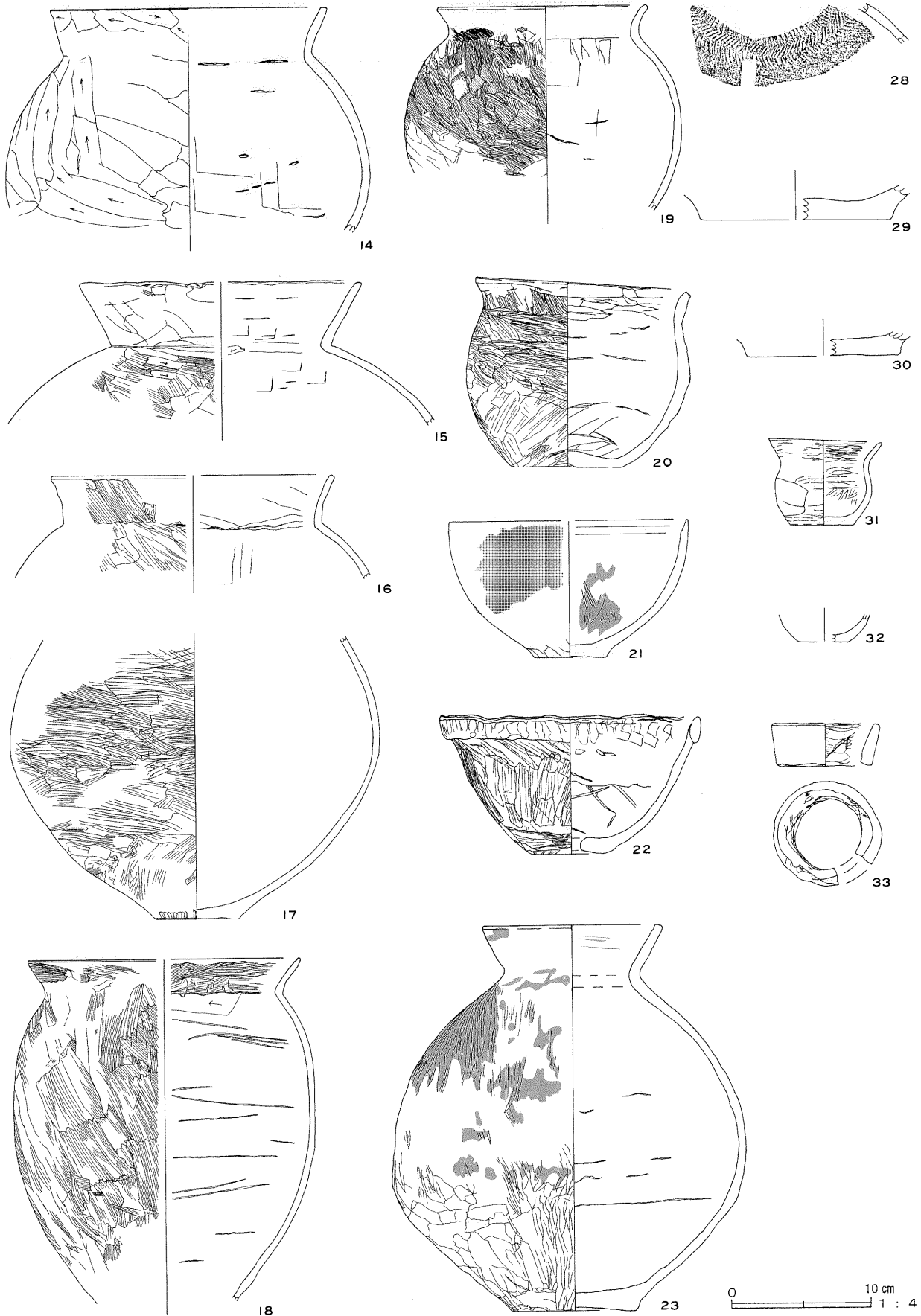
壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。掘り込み確認面から床面までの深さは、60cm前後である。



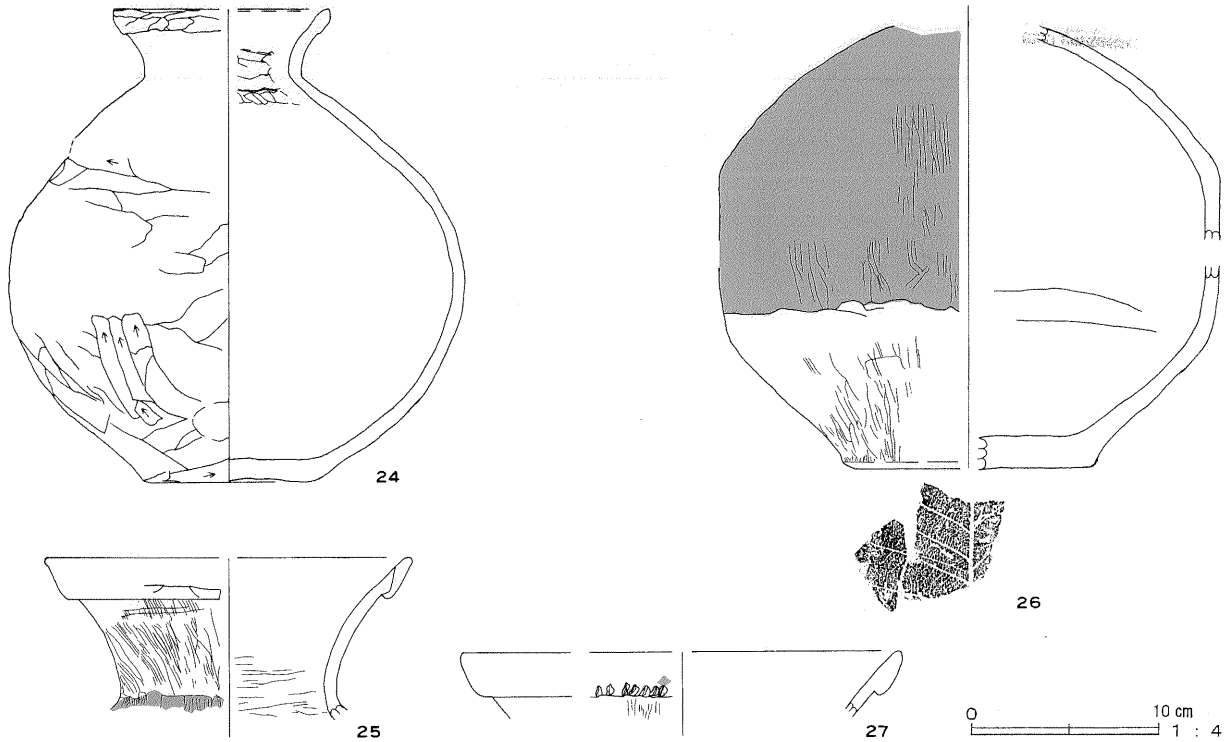
第180図 C区67号住居跡



第181图 C区67号住居跡出土遺物(1)



第182図 C区67号住居跡出土遺物(2)



第183図 C区67号住居跡出土遺物(3)

第92表 C区67号住居跡出土遺物観察表 (第181・182・183図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・器台	7.5	6.9	10.1	⑥③①	②	浅黄橙	一部欠	外面細かいミガキ。内面受台部ミガキ様ナデ、脚部ナデ。
2	土師器・台付甕	18.2	30.9	10.5	①③④⑥	②	にぶい橙	一部欠	外面口縁上位横、下位～括れ部縦、～中位横、中位から台との接合部まで縦の刷毛目、台部ナデ、全面煤附着。内面口縁～括れ部横の刷毛目、口唇部横のナデが加わる。胴部ナデ、下半炭化物附着、台部横のヘラナデ。二次加熱。
3	土師器・台付甕	(24.0)	(28.5)	(9.8)	⑥①④③	②	橙	一部欠	ひずみが激しい。台部内面縦のケズリ様ナデ、他全面ナデ。外面一部吸炭。赤色化。二次加熱。
4	土師器・台付甕	19.8	—	—	④①②	②	灰白	台部欠	外面口縁横ナデ、後括れ部付近縦の刷毛目。胴部上位横の刷毛目、中位横のナデツケ、下位縦の刷毛目の後縦のナデ、中位～上位煤附着、下位赤色化。内面口縁横の刷毛目、中位～上位横～斜のケズリ、下位縦横のナデ、中位以下一部炭化物附着。二次加熱。
5	土師器・台付甕	(14.2)	—	—	①③⑥④②	②	にぶい橙	台部欠 1/3	外面口縁部横ナデ、胴部縦の刷毛目後肩部横の刷毛目、煤附着、下位赤色化。内面ナデ、下位炭化物附着。二次加熱。
6	土師器・甕	(19.1)	—	—	③②④①	②	灰白	底部欠 2/5	外面口縁部指頭による押圧ナデ、括れ部ナデ、胴部横を主体としたケズリ、下位ナデ。赤色化。
7	土師器・台付甕	—	—	—	③①④⑥	②	橙	—	
8	土師器・台付甕	—	—	10.0	③⑥②④①	②	浅黄橙	台付のみ	外面縦の木口状工具による刷毛目状ナデ。内面天井部ナデツケ、以下横、一部斜の木口状工具によるナデ。胴部底面木口状工具によるナデ。一部吸炭。二次加熱。
9	土師器・台付甕	—	—	9.8	②①④⑥	②	にぶい黄橙	台付のみ	胴部外面縦の刷毛目、内面ナデ、炭化物附着。台部外面縦、内面横のナデ、吸炭、二次加熱。
10	土師器・甕	(17.8)	—	—	②③⑥④①	②	浅黄橙	上位 1/8	外面口縁部斜のナデ、胴肩部斜、上位横のケズリの後ナデが加わる、一部煤附着、赤色化。内面全面横のナデ、吸炭一部炭化物附着。二次加熱。
11	土師器・甕	(23.0)	—	—	③①⑥④②	②	橙	上位 1/8	外面胴部横～斜の刷毛目後肩～口縁横のナデ。内面全面ナデ。吸炭。赤色化。
12	土師器・甕	24.1	—	—	③②①⑥④	②	明褐灰	上位 1/3	
13	土師器・甕	—	—	6.8	③④⑥②①	②	橙	底部のみ	
14	土師器・甕	20.1	—	—	①④⑥③	②	灰白	上位のみ	外面ケズリとナデ一部刷毛目混在。内面口縁部横ナデ、胴部木口状工具による横のナデ。内外面共一部吸炭。
15	土師器・甕	(20.5)	—	—	③①②	②	灰白	上位 1/6	外面口縁部斜のケズリ様ナデ、胴部肩横～斜の刷毛目(木口状工具)の後一部同方向ケズリ。内面木口状工具による横のナデ、括れ部一部横のケズリ。一部吸炭。
16	土師器・甕	(20.6)	—	—	③①④⑥	②	浅黄橙	上位 1/8	全体に磨滅した部分が多い。外面縦(肩)横の刷毛目。内面ナデ、括れ部接合痕。吸炭。

17	土師器・甕	—	—	6.2	⑥①④③	②	浅黄橙	口縁部欠 2/3	外面中位横、下位縦の刷毛目、肩部付近縦のナデ、底部ナデツケ、煤付着部と赤色化相違。内面ナデ、中位と下位の境一部横のケズリ、以下縦の木口状工具によるナデ、底面ナデツケ、中位以下炭化物付着、上位吸炭。二次加熱。
18	土師器・甕	(20.0)	—	—	⑥③④①	②	にぶい橙	底部欠1/2	外面口縁部横、胴部縦の刷毛目、口縁部～括れ部一部横のナデが加わる。内面口縁部横の刷毛目、口唇部横のナデが加わる、括れ部下横のケズリ、胴部横のナデ、一部ヘラ先によるナデ、輪積み痕を残す。内外面一部吸炭。赤色化。二次加熱。
19	土師器・甕	15.3	—	—	①⑥③④	②	浅黄橙	上位4/5	外面口縁部横のナデ、括れ部横、胴部縦主体の刷毛目。内面口縁部横のナデ、括れ～肩部指頭による縦のナデツケ、胴部全般横のナデ。全体に赤色化。二次加熱。
20	土師器・甕	15.5	14.0	8.0	③⑥②①	②	灰白	4/5	外面全体に刷毛目、口唇部のみ横ナデ。内面口縁～上位横の木口状工具によるナデ、胴部横のナデ、底部付近横のナデツケ、中央部上げ底。二次加熱。
21	土師器・鉢	(17.5)	(10.0)	5.3	⑥③①④	②	灰白	1/4	表面剥離した部分多い。外面ナデ、底部のみナデツケ。内面ナデ、中位以下縦のミガキ。内外面共朱塗。
22	土師器・甌	19.0	10.3	5.1	③⑥①④	②	灰白	一部欠	外面全体に粗い刷毛目、後口縁部貼り付け、指頭押圧による接合。内面口縁指頭による押圧、口唇部横のナデ、胴部ナデ、接合痕残す。
23	土師器・壺	13.2	28.0	9.0	⑥①④	②	浅黄橙	一部欠	外面口縁部ナデ、胴部全体に縦のミガキ、下位はナデが加わる、中位以上朱塗。内面全面ナデ、中位に輪積み痕を残す、口縁部朱塗。
24	土師器・壺	(11.8)	25.6	9.0	⑥①③	②	にぶい黄 橙	3/4	外面複合口縁部指頭による押圧、頸部～胴部肩ナデ、胴部中位～底部付近ケズリ及び木口状工具によるナデ。内面口縁部横のヘラナデ、括れ部指頭による押圧、胴部横の木口状工具によるナデ。吸炭。
25	土師器・壺	(19.2)	—	—	③⑥④②	②	橙	口縁のみ 1/2	外面口縁複合部横のナデ。頸部～括れ部縦のミガキ、胴部朱塗。内面口縁縦のミガキ様ナデ、括れ部以下横のミガキ。
26	土師器・壺	—	—	(13.7)	③⑥①②	②	にぶい橙	1/5	外面全体に縦のミガキ、中位以上朱塗。内面ナデ、下位接合部のみ木口状工具によるナデ。木の葉底。
27	土師器・壺	(23.7)	—	—	④⑥①②③	②	にぶい黄橙	口縁1/8	全面に磨滅した部分が多い。外面複合部ナデの後下端部キザミ目、朱塗。頸部縦の刷毛目。内面横のナデ。
28	土師器・壺	—	—	—	①③②④⑥	②	にぶい橙	肩部一部	内面黒色化。外面吸炭。
29	土師器・壺	—	—	(13.5)	②⑥③①④	②	灰黄褐	底部のみ	内外面ナデ。吸炭。外底面赤色化。
30	土師器・壺	—	—	(10.8)	①②⑥③	②	明褐灰	底部のみ	内外面ナデ。内面炭化物付着。
31	土師器・埴	8.2	6.3	4.1	①⑥②④	②	赤	口縁一部欠	全面ミガキ。外底面以外朱塗。
32	土師器・埴	—	—	(3.5)	①②④③⑥	②	橙	底部3/5	表面磨滅。
33	腕輪状土製品	7.8	3.2	6.9	③⑥①④	②	浅黄橙	一部欠	内面刷毛目、外面ナデ。

床面は、ほとんど凹凸がなく、ほぼ水平面を成して、安定している。

ピット、炉等は、検出されていない。

覆土は、上位から、多量の褐灰色粘土粒・マンガン粒を含む黄褐色シルト層（第1層）、多量の褐灰色粘土粒、マンガン粒を含む明黄褐色シルト層（第2層）、多量の褐灰色粘土粒・マンガン粒を含むオリーブ褐色シルト層（第3層）、多量の酸化鉄及び少量の炭化物を含む褐灰色粘土層（第4層）が堆積している。

遺物は、第4層中から、土師器甕（1）、壺（2）が出土している。

**69号住居跡** I-18からJ-18グリッドに亘って位置する。第一確認面下位からの検出である。

(第185図) 67号住居跡を切断している。70号住居跡とは接してはいるものの、その前後関係は判明していない。

北辺5.10m、東辺4.58m、南辺5.35m、西辺4.50mを計る。やや不整形であるが、ほぼ長方形を呈している。長軸方位は、N-85°-Wを示す。

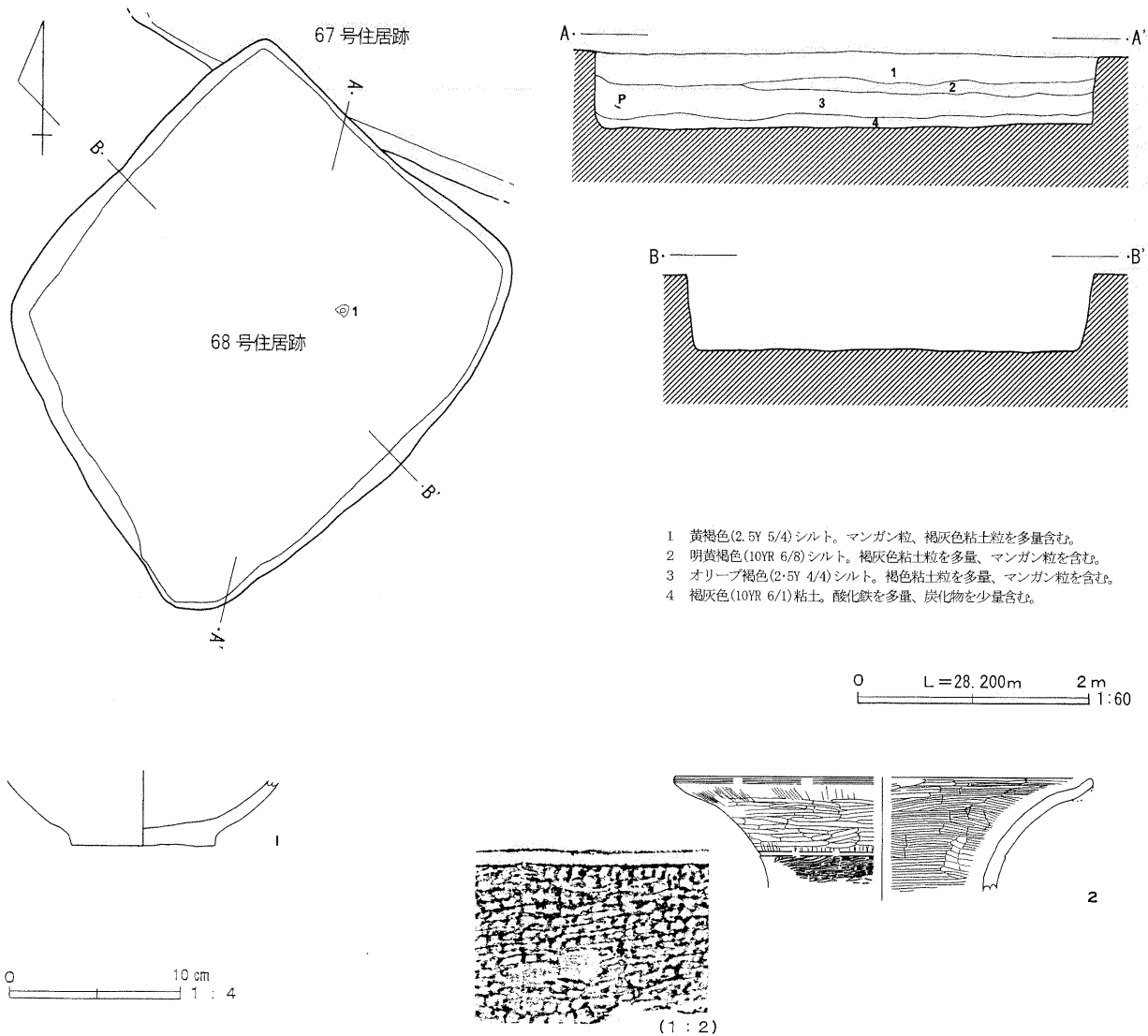
壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。掘り込み確認面から床面までの深さは、55cm前後である。

床面は、ほとんど凹凸がなく、ほぼ水平面を成して、安定している。

ピット、炉等は、検出されていない。

覆土は、上位から、多量のマンガン粒を含むにぶい黄褐色シルト層（第1層）、多量のマンガン粒及び少量の炭化物を含む明黄褐色シルト層（第2層）、多量の黄褐色粘土プロ





第184図 C区68号住居跡及び出土遺物

第93表 C区68号住居跡出土遺物観察表 (第184図)

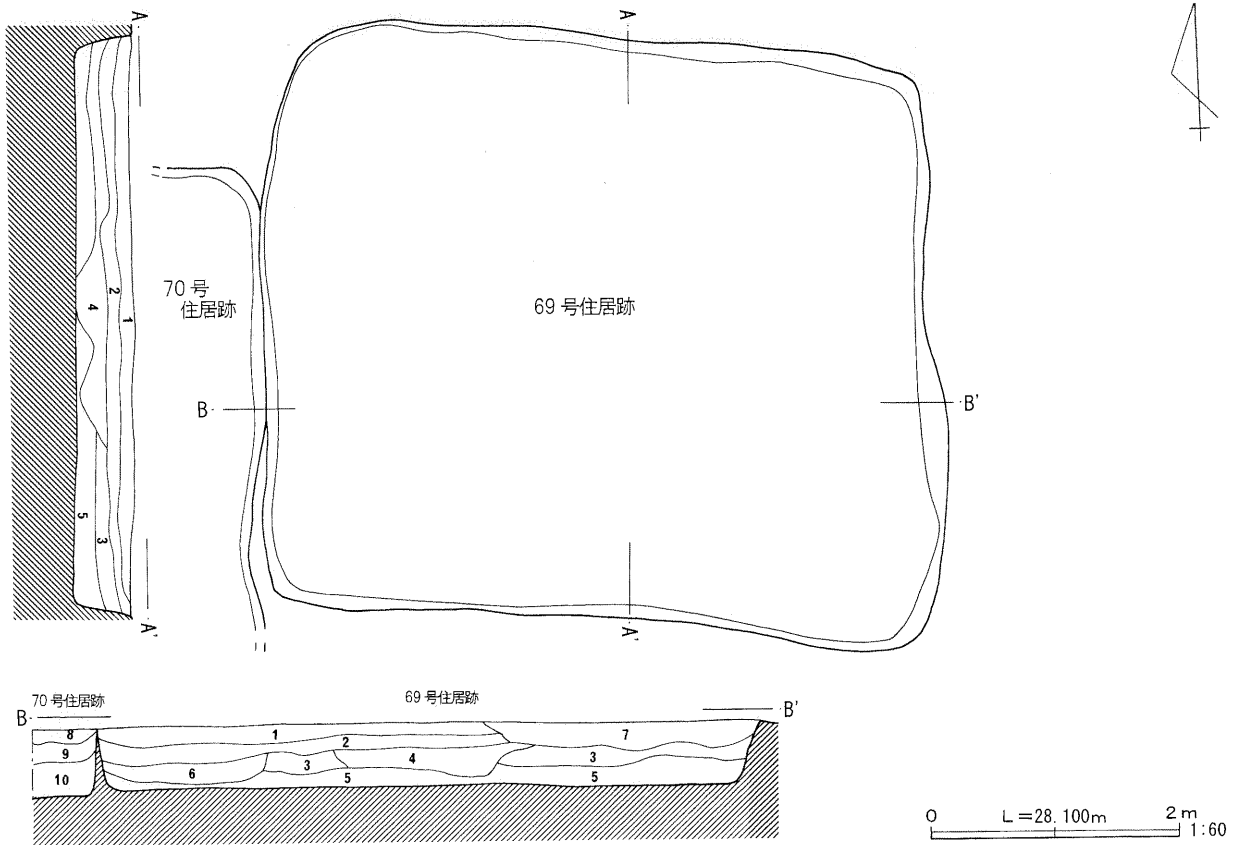
No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・甕	—	—	(8.3)	①③②④	②	橙	底部1/3	内外面共表面磨滅、全面ナデか。吸炭。二次加熱。
2	土師器・壺	(24.1)	—	—	①②④③	②	浅黄橙	口縁部1/4	口唇部横の刷毛目。口縁部縦の刷毛目の後横のミガキ、口唇部貼り付け痕、ミガキ部分朱塗、頸部上端沈線、縄文帯。内面横の刷毛目の後一部横のミガキ、朱塗。

第94表 C区69号住居跡出土遺物観察表 (第185図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・高杯	—	—	—	②①③④	②	浅黄橙	杯底面～脚上位	脚部三方透かし。表面磨滅。整形痕不明。

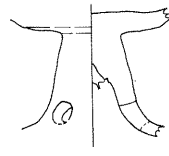
ックを含む褐灰色粘土層（第5層）が堆積し、第2層と第5層の間には、炭化物や焼土ブロックを含む土層（第3・4・6層）が入り込んでいる。

遺物は、覆土中から、土師器高杯（1）が1点出土したのみである。



69号住居跡土層

- 1 にぶい黄褐色(10YR 6/4)シルト。マンガン粒を多量含む。
- 2 明黄褐色(10YR 7/6)シルト(粘土質)。マンガン粒を多量、炭化物を少量含む。
- 3 にぶい褐色(7.5YR 5/4)シルト。炭化物を少量含む。
- 4 黄灰色(2.5Y 6/1)粘土。炭化物粒をやや多量、橙色(5YR 6/8)焼土粒を少量含む。
- 5 褐灰色(10YR 5/2)粘土。淡黄色(2.5Y 8/4)粘土粒をやや多量含む。
- 6 灰黄褐色(10YR 5/2)粘土。炭化物粒、橙色(5YR 6/8)焼土小ブロックを多量含む。
- 7 褐灰色(10YR 5/1)粘土。にぶい黄褐色(10YR 7/2)粘土ブロックを含む。
- 8 褐灰色(10YR 5/1)粘土。マンガン粒を多量、炭化物を少量含む。
- 9 灰オリーブ色(7.5Y 6/2)粘土。マンガン粒をやや多量含む。
- 10 灰色(10Y 6/1)粘土。部分的に炭化物粒を層状に含む。



第185図 C区69号住居跡及び出土遺物

**70号住居跡** I-18・19からJ-18・19グリッドに亘って位置する。第一確認面下位からの検出(第186図)である。

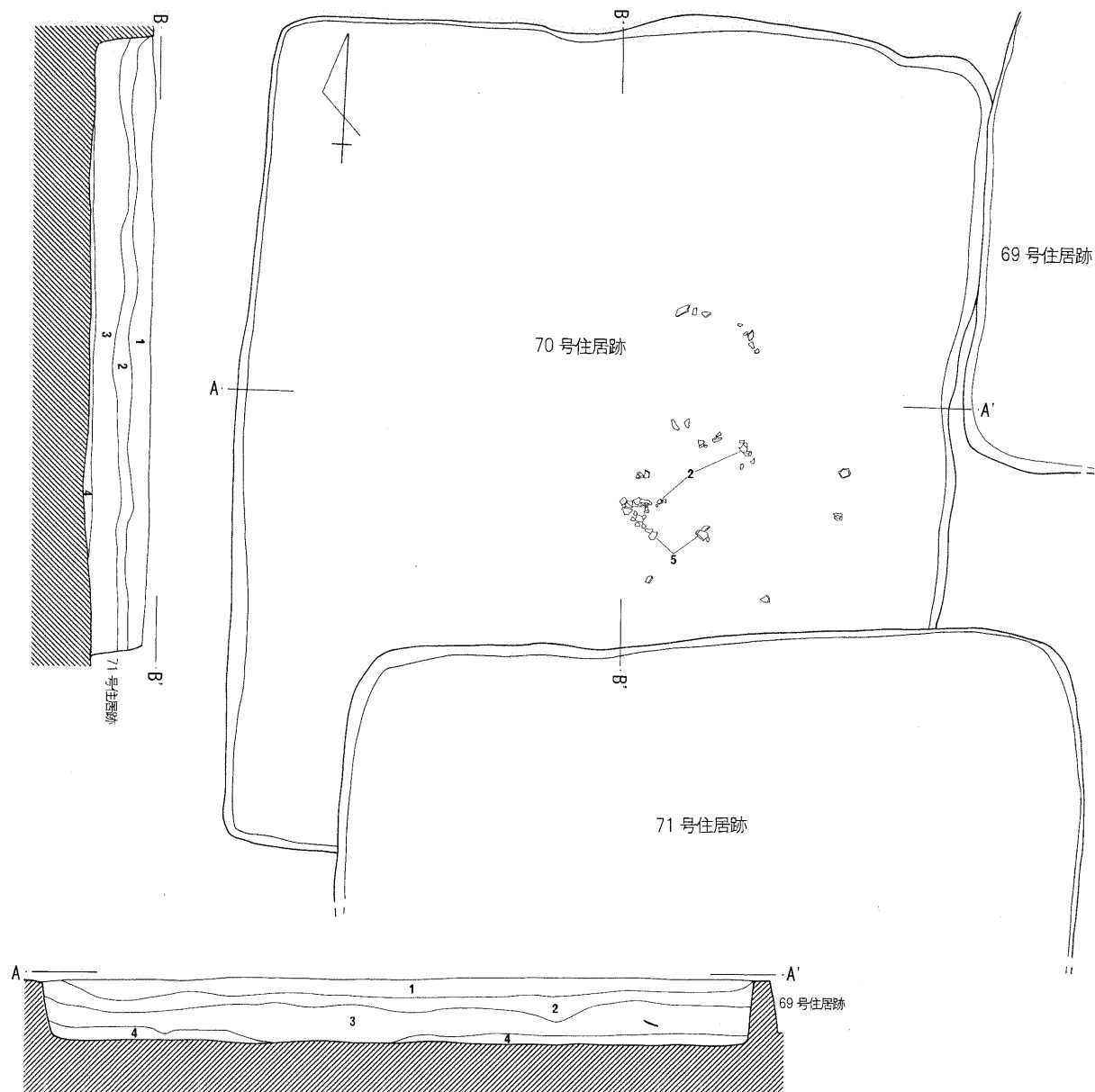
71号住居跡に切断されている。69号住居跡とは接してはいるものの、その前後関係は判明していない。

北辺6.35m、東辺5.16+ $\alpha$ m、南辺1.05+ $\alpha$ m、西辺7.50mを計る。各角がほぼ直角を成し、北辺を短辺、西辺を長辺とした長方形を呈していると思われる。長軸方位は、N-0°-Eを示す。

壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。掘り込み確認面から床面までの深さは、56cm前後である。床面は、ほとんど凹凸がなく、ほぼ水平面を成して、安定している。

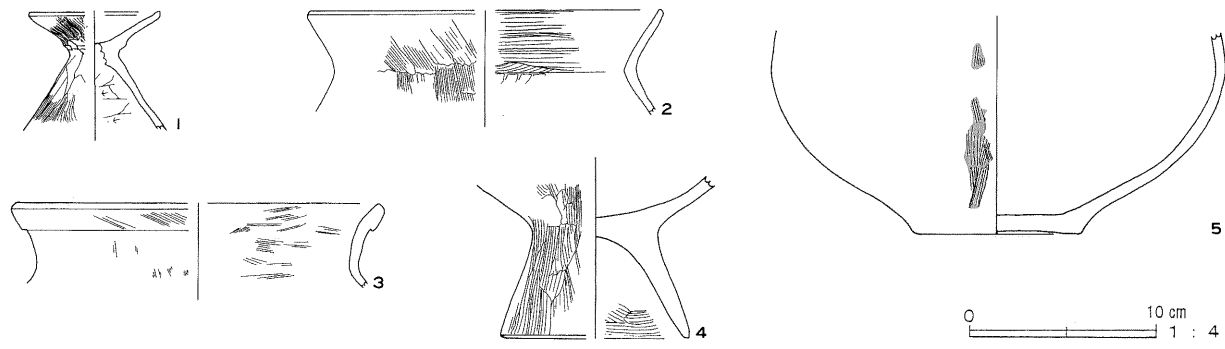
ピット、炉等は、検出されていない。

覆土は、上位から、多量のマンガン粒及び少量の炭化物を含む褐灰色粘土層(第1層)、



- 1 褐灰色(10YR 5/1)粘土。マンガング粒を多量、炭化物粒を少量含む。
- 2 灰オリーブ色(7.5Y 6/2)粘土。マンガング粒をやや多量含む。
- 3 灰色(10Y 6/1)粘土。部分的に炭化物粒を層状に含む。
- 4 灰白色(10Y 8/1)粘土。炭化物粒を極微量含む。

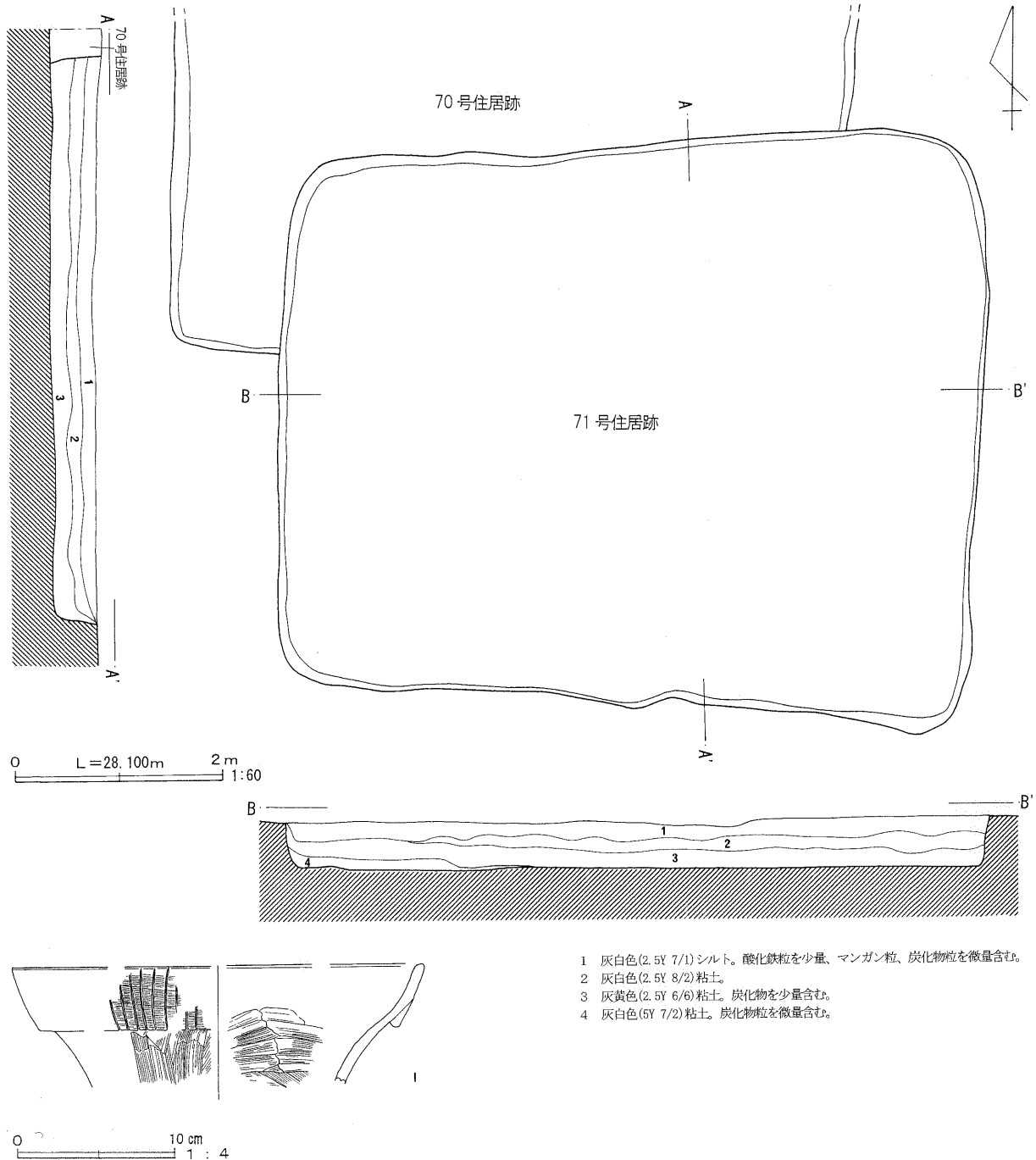
0 L = 28.100m 2m 1:60



第186図 C区70号住居跡及び出土遺物

第95表 C区70号住居跡出土遺物観察表 (第186図)

No	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・器台	(7.2)	—	—	⑥①③④	②	浅黄橙	1/3	外面縦の刷毛目、脚上位ナデが加わる。受台部内面ナデ。底面木口状工具によるナデ。脚部内面、天井部ナデツケ、以下横のケズリ。全面吸炭。
2	土師器・甕	(19.3)	—	—	⑥①③②④	②	にぶい橙	口縁部 1/4	外面縦の刷毛目。内面口縁部横の刷毛目、煤付着、胴部ナデ。
3	土師器・甕	(20.2)	—	—	①③②④⑥	②	にぶい橙	口縁部 1/6	内外面共磨滅した部分多い。内外面共刷毛目、外面煤付着。
4	土師器・台付甕	—	—	(10.3)	①③⑥④	②	浅黄橙	台部 1/4	外面縦の刷毛目、煤付着。内面胴部ナデ、炭化物付着。脚部指頭によるナデツケ、裾部横の刷毛目。二次加熱。
5	土師器・甕	—	—	9.2	⑥①④	②	浅黄橙	下位 2/5	外面底部周辺以外全面朱塗か。外面磨滅した部分が多い。朱塗残存部では縦のミガキ、底部周辺ナデツケ。内面中位ナデ、底面ナデツケ、一部炭化物付着。



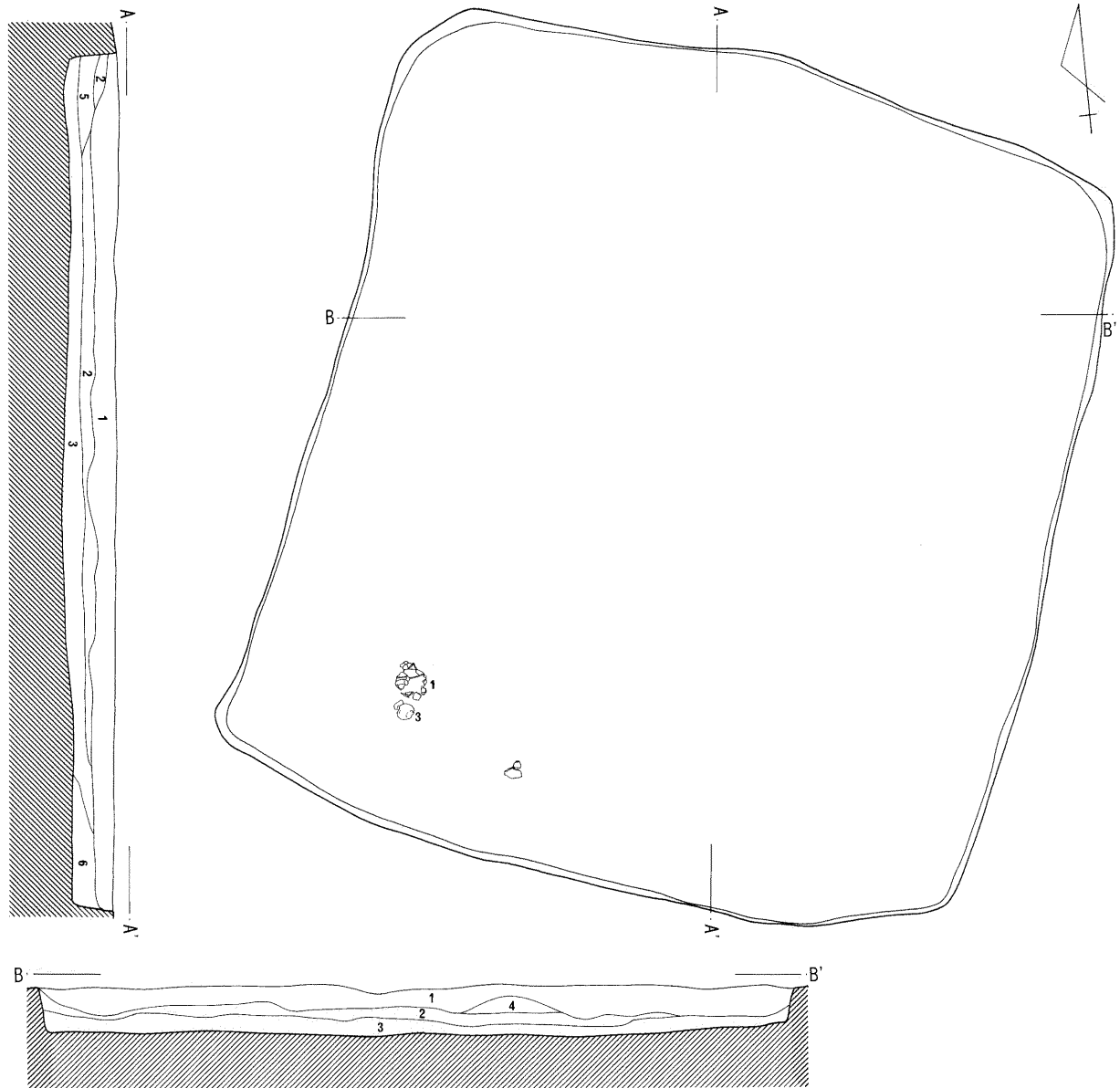
第187図 C区71号住居跡及び出土遺物

多量のマンガン粒を含む灰オリーブ色粘土層（第2層）、部分的に炭化物層を挟む灰色粘土層（第3層）、微量の炭化物を含む灰白色粘土層（第4層）が堆積している。

遺物は、第4層上から、土師器器台（1）、甕類（2～4）、壺（5）が出土している。器台は、台付甕同様の刷毛目整形が成されている。

第96表 C区71号住居跡出土遺物観察表（第187図）

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・壺	(26.4)	—	—	①⑥④③	②	橙	口縁1/8	口縁部横刷毛目の後、縦の沈線、頸部縦の刷毛目。内面口縁部横のナデ、頸部横刷毛目。



- 1 褐色(10YR 6/1)シルト(粘土質)。炭化物を少量含む。
- 2 灰白色(2.5Y 7/1)シルト(粘土質)。淡黄色(2.5Y 8/3)シルト小ブロックを部分的に少量含む。
- 3 灰色(7.5Y 6/1)粘土。炭化物を少量含む。
- 4 黄灰色(2.5Y 6/1)シルト(粘土質)。2層に似るが色調は暗い。
- 5 灰白色(10YR 7/1)粘土。マンガン粒を多量、炭化物粒を微量含む。
- 6 灰色(5Y 6/1)粘土。マンガン粒を多量、炭化物粒を微量含む。

第188図 C区72号住居跡

**71号住居跡** J-18からJ-19グリッドに亘って位置する。第一確認面下位からの検出である。  
(第187図) 70号住居跡を切断している。

北辺6.35m、東辺5.54m、南辺6.55m、西辺5.00mを計る。わずかに西辺が短く、東辺が長いので、やや不整形ではあるが、長方形を呈していると思われる。長軸方位は、 $N-90^{\circ}-W$ を示す。

壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。掘り込み確認面から床面までの深さは、45cm前後である。床面は、ほとんど凹凸がなく、ほぼ水平面を成して、安定している。

ピット、炉等は、検出されていない。

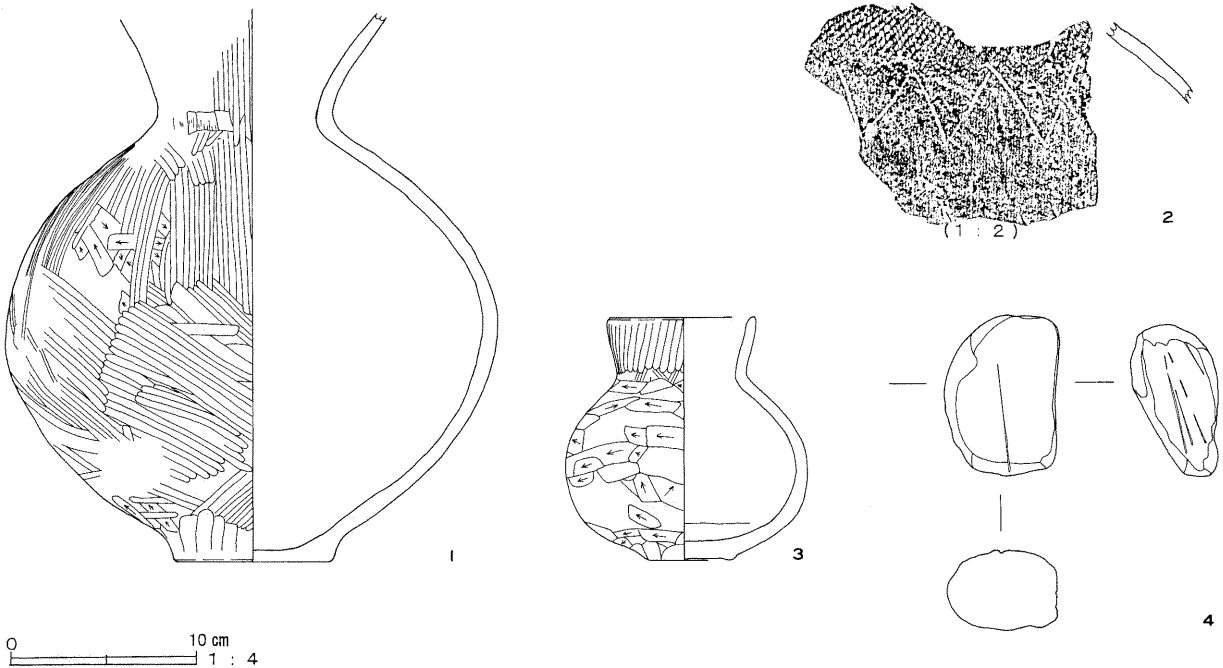
覆土は、上位から、微量の炭化物・マンガン粒及び少量の酸化鉄を含む灰白色シルト層（第1層）、灰白色粘土層（第2層）、少量の炭化物を含む灰黄色粘土層（第3層）が堆積し、壁際の最下層には、微量の炭化物を含む灰白色粘土層（第4層）が堆積している部分もみられる。

遺物は、第3層中から、土師器壺（1）が出土している。

**72号住居跡** J-19からJ-20グリッドに亘って位置する。第二確認面からの検出である。  
(第188図) 上面に、1号畠跡が位置している。

(第189図) 北辺6.50m、東辺5.50m、南辺6.84m、西辺6.80mを計る。東辺が短いのは、南辺が内側に屈曲しているためであり、やや不整形ではあるが、ほぼ正方形を呈していると思われる。主軸方位は、 $N-20^{\circ}-E$ を示す。

壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。掘り込み確認面から床面までの深さは、45cm前後である。



第189図 C区72号住居跡出土遺物

第97表 C区72号住居跡出土遺物観察表 (第189図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考	
1	土師器・壺	—	—	8.6	②③⑥①④	②	橙	口唇部欠	外面全面ミガキ、頸部はミガキの前に縦の刷毛目、中位横のケズリ、底部縦のケズリ。内面ミガキ様ナデ。	
2	土師器・壺	—	—	—	⑥①②③	②	黄橙	—		
3	土師器・小型壺	8.0	13.2	4.8	⑥①③②④	②	橙	完形	外面口唇部横のナデ、口縁部縦のミガキ、括れ部縦の刷毛目、胴部ケズリ、ナデの加わる部分多い。内面ナデ、底部接合痕、炭化物付着。	
4	砥石	長さ 8.7 幅 6.0 厚さ 4.6 重さ 110g							—	軽石製。
5	編物石	長さ 20.5 幅 7.0 厚さ 4.3 重さ 900g								

床面は、ほとんど凹凸がなく、ほぼ水平面を成して、安定している。

ピット、炉等は、検出されていない。

覆土は、上位から、少量の炭化物を含む褐灰色シルト層（第1層）、少量の淡黄色シルト小ブロックを含む灰白色シルト層（第2層）、少量の炭化物を含む灰色粘土層（第3層）が堆積し、壁際の最下層には、多量のマンガン粒及び微量の炭化物を含む灰色粘土層（第6層）が堆積している部分もみられる。第2層の上下には、部分的に黄灰色シルト層（第4層）、灰白色粘土層（第5層）の堆積している部分もみられる。

遺物は、南西隅の床面上から、壺（1～3）、軽石製の砥石（4）が出土している。

**73号住居跡** K-15からK-16グリッドに亘って位置する。第二確認面からの検出である。

(第190図) 74号住居跡を切断している。上面に、2号溝跡が位置している。

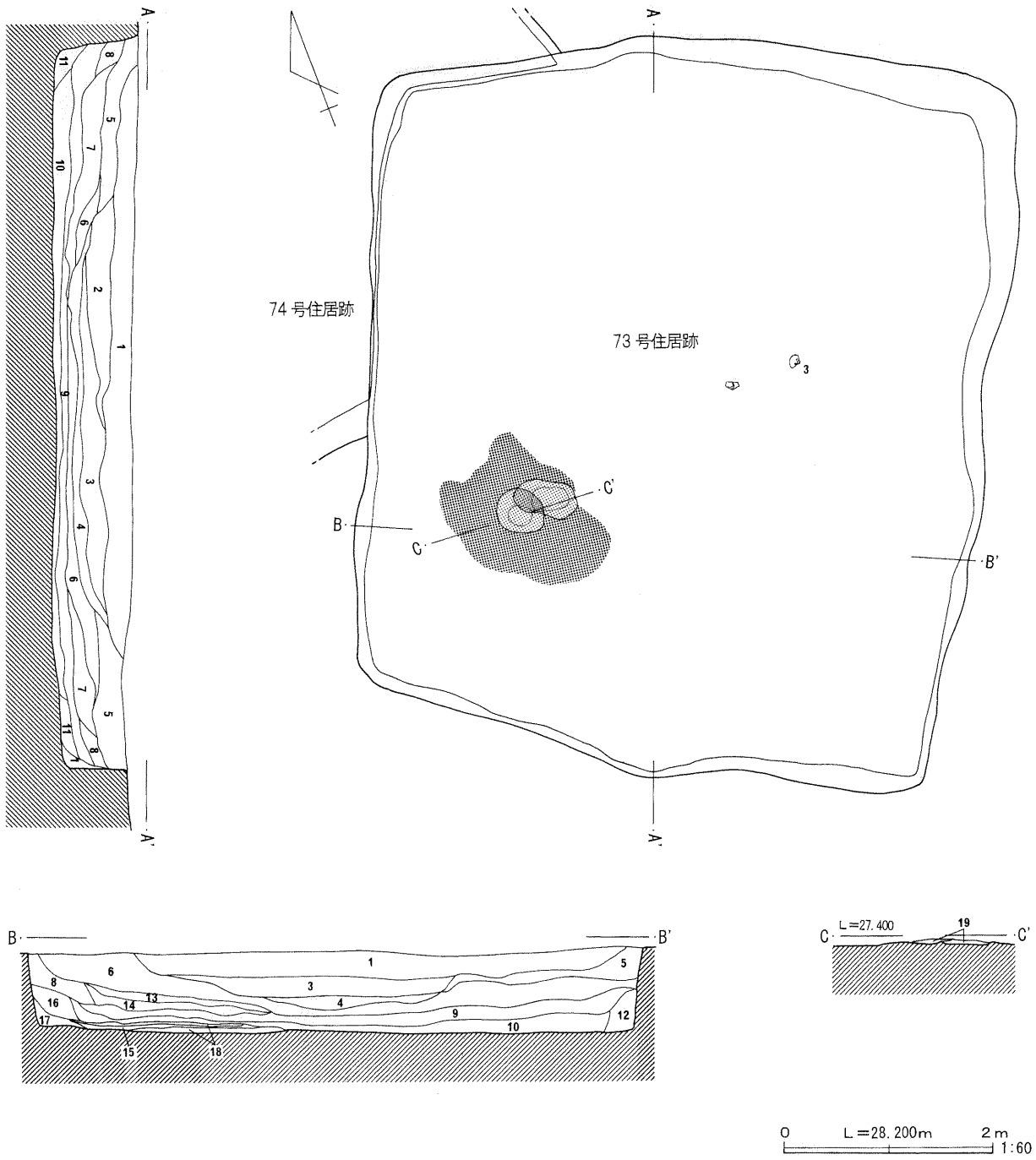
(第191図) 北東辺6.06m、南東辺6.70m、南西辺5.57m、北西辺5.70mを計る。やや不整形ではあるが、南東辺を底辺とした台形を呈していると思われる。主軸方位は、N-65°-Wを示す。

壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。掘り込み確認面から床面までの深さは、80cm前後である。

床面は、ほとんど凹凸がなく、ほぼ水平面を成して、安定している。

第98表 C区73号住居跡出土遺物観察表 (第191図)

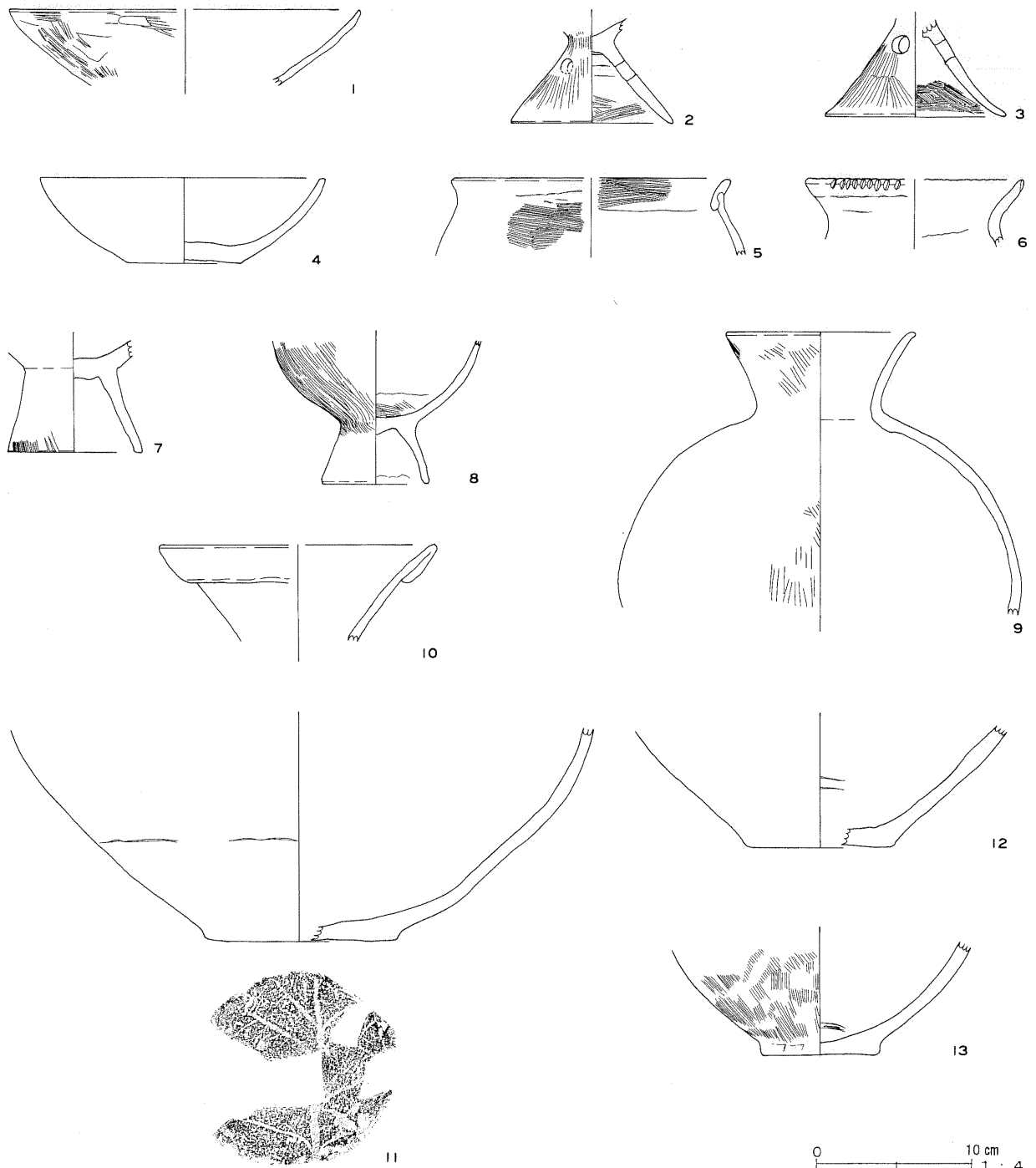
No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・高杯	(23.0)	—	—	②③①⑥④	②	浅黄橙	1/5	外面ケズリ後ナデ、一部ミガキ。内面ミガキ様ナデ。
2	土師器・高杯	—	—	(10.6)	⑥②①④	②	橙	脚部 1/4	脚部三方透かし。外面縦のミガキ。内面上位縦のナデ、下位横の刷毛目。
3	土師器・高杯	—	—	(11.6)	⑥②①③④	②	にぶい赤褐	脚部 1/2	脚三方透かし。外面円孔より上位ナデ、下位縦のミガキ、裾部横のナデ。内面上位縦のナデツケ、下位刷毛目、裾部横のナデ。吸炭。内面一部赤色化。二次加熱。
4	土師器・鉢	(18.4)	(5.6)	(7.4)	⑥①②④	②	明赤褐	1/4	内外面全面ナデ。底外面ケズリ。
5	土師器・甕	(18.0)	—	—	⑥③①②④	②	橙	口縁部 1/12	口縁部内面へ貼り付け。外面口縁部横の刷毛目の後横のナデ、胴部横の刷毛目、一部吸炭。内面口縁部横の刷毛目、胴部横のナデ。
6	土師器・甕	(14.0)	—	—	⑥②③①④	②	橙	口縁部 1/8	外面横のナデ、口唇部刻み目。内面横の木口状工具によるナデ。全面吸炭。
7	土師器・台付甕	—	—	(8.7)	⑥②①③④	②	橙	脚部 3/4	外面縦の刷毛目の後縦のナデ、裾部に刷毛目を残す。内面縦のナデ、胴部底面へラによるナデ、台部全体及び胴部外面赤色化。二次加熱。
8	土師器・台付甕	—	—	(7.0)	⑥②①③	②	橙	体部のみ 1/4	外面胴部～台接合部縦の刷毛目、台部横のナデ、煤付着。内面胴部ナデ、底部円形状の刷毛目、台部ナデ、端部内面への折り返し、吸炭。二次加熱。
9	土師器・壺	12.2	—	—	⑥①②④	②	明赤褐	上位 1/4	全体に磨滅した部分が多い。外面口縁斜の刷毛目、胴部縦のミガキ。内面ナデが一部に確認される。
10	土師器・壺	(18.0)	—	—	⑥①②④	②	明赤褐	口縁部 1/4	全体に表面磨滅、整形痕不詳。内面一部斜のミガキ。
11	土師器・壺	—	—	(12.6)	⑥①②④	②	橙	下位 3/4	内外面ナデ。木の葉底。吸炭。一部赤色化。
12	土師器・壺	—	—	(9.5)	⑥②④①	②	橙	下位 1/3	外面ナデ。内面ナデ。接合部ヘラナデ。吸炭。二次加熱。
13	土師器・壺	—	—	(7.6)	⑥③②①④	②	橙	下位のみ	外面縦の刷毛目の後一部ナデが加わる。内面縦横のナデ。



- |  |   |
|--|---|
| <p>1 にぶい黄褐色(10YR 5/4)シルト。炭化物を少量、橙色(5YR 6/8)焼土粒を微量含む。</p> <p>2 黄褐色(10YR 7/8)粘土。にぶい黄褐色(10YR 5/3)シルトを多量、炭化物少量を含む。</p> <p>3 橙色(7.5YR 6/6)粘土。炭化物、橙色(5YR 6/8)焼土粒を微量含む。</p> <p>4 明黄褐色(10YR 7/6)粘土。炭化物、層状に焼土を含む。</p> <p>5 にぶい黄褐色(10YR 7/4)粘土(シルト質)。マンガン粒を少量、炭化物粒を極微量含む。</p> <p>6 黄褐色(10YR 5/6)粘土。</p> <p>7 褐色(7.5YR 4/4)粘土。マンガン粒を多量含む。</p> <p>8 明黄褐色(10YR 6/6)シルト(粘土質)。炭化物を少量含む。</p> <p>9 にぶい褐色(7.5YR 5/4)粘土。</p> <p>10 にぶい褐色(7.5YR 6/3)粘土。マンガン粒を多量、炭化物粒を微量含む。</p> | <p>11 にぶい黄褐色(10YR 6/4)粘土。マンガン粒を少量、炭化物を微量含む。</p> <p>12 明黄褐色(10YR 6/6)粘土。マンガン粒、炭化物粒を少量含む。</p> <p>13 にぶい黄褐色(10YR 5/4)シルト(粘土質)。炭化物粒、マンガン粒を少量含む。</p> <p>14 にぶい黄褐色(10YR 5/8)粘土。マンガン粒、を多量含む。</p> <p>15 灰黄褐色(10YR 6/2)粘土。炭化物粒を多量、灰白色(10YR 8/2)粘土小ブロックを含む。</p> <p>16 黄灰色(2.5Y 6/1)粘土(ややシルト質)。炭化物粒を微量含む。</p> <p>17 灰黄色(2.5Y 6/2)粘土。炭化物粒、マンガン粒を多量含む。</p> <p>18 炭化物層。</p> <p>19 橙色(2.5YR 7/8)焼土層。</p> |
|--|---|

第190図 C区73号住居跡





第191図 C区73号住居跡出土遺物

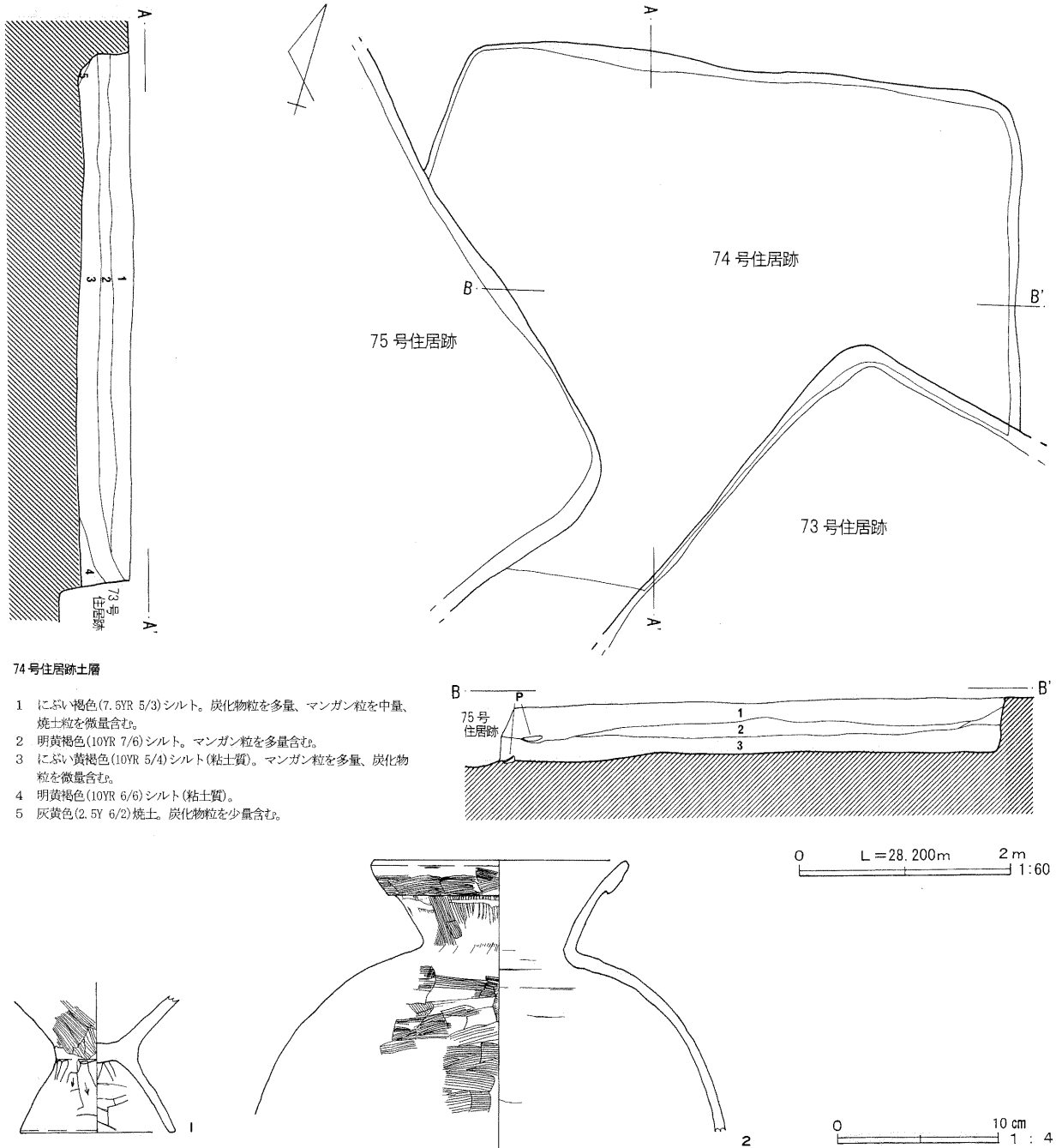
ピットは、検出されていない。

炉は、西隅寄りに重複して、2ヶ所設置されている。西側は、5cm程の厚さの焼土が、径48×45cmの円形内に拡がる。東側も5cm程の厚さの焼土が、径62×33cmの繭形内に拡がっている。西側炉の一部が、東側炉の上位に被さっている状況である。また、炉の周囲には、3～5cmの厚さで、炭化物が堆積している。

覆土は、第5層以下堆積後、中央部の窪みには、上位から、少量の炭化物及び微量の焼

土粒を含むにぶい黄褐色シルト層（第1層）、多量の黄褐色シルト及び少量の炭化物を含む黄橙色粘土層（第2層）、微量の炭化物・焼土粒を含む橙色粘土層（第3層）、層状に炭化物・焼土を含む明黄褐色粘土層（第4層）が堆積している。

遺物は、覆土中から、土師器高杯（1・2）、器台（3）、鉢（4）、甗類（5～7）、壺（9～13）等が出土している。



第192図 C区74号住居跡及び出土遺物

**74号住居跡** J-16からK-16グリッドに亘って位置する。第二確認面からの検出である。  
 (第192図) 73号・75号両住居跡に切断されている、上面に、2号溝跡が位置している。

第99表 C区74号住居跡出土遺物観察表 (第192図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・台付甕	—	—	—	③⑥①②④	②	にぶい黄橙	台部のみ1/3	胴部外面縦の刷毛目、赤色化。内面下位ナデ、底面ケズリ様ナデ、炭化物付着。台部外面縦のケズリ、一部ケズリ様ナデ。内面上位縦のナデツケ、下位木口状工具による横のナデ。二次加熱。
2	土師器・壺	15.9	—	—	⑥③①②	②	赤橙	上位のみ	外面口縁横の刷毛目、口唇部横ナデ、頸部縦の刷毛目、胴部横の刷毛目、肩部ナデ。内面全面横のナデ、胴部吸炭。

計測可能な北辺は5.20m、南北辺間5.10mを計る。しかし、北辺の両角が直角を成さず、南に向けて広がりを見せることから、南辺を底辺とした台形を呈していると思われる。主軸方位は、N-7°-Eを示す。

壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。掘り込み確認面から床面までの深さは、50cm前後である。

床面は、ほとんど凹凸がなく、ほぼ水平面を成して、安定している。

ピット・炉等は、検出されていない。

覆土は、上位から、多量の炭化物、中量のマンガン粒及び微量の焼土粒を含むにぶい褐色シルト層 (第1層)、多量のマンガン粒を含む明黄褐色シルト層 (第2層)、多量のマンガン粒及び微量の炭化物を含むにぶい黄褐色シルト層 (第3層)、が堆積している。また、壁際の最下層には、明黄褐色シルト層 (第4層)、あるいは少量の焼土粒を含む灰黄色粘土層 (第5層) の堆積している部分もみられる。

遺物は、南西隅の床面上から、壺 (1~3)、軽石製の砥石 (4) が出土している。

**75号住居跡** J-16・17からK-16・17グリッドに亘って位置する。第二確認面からの検出である。(第193図) 74号住居跡を切断している。

(第194図) 北東辺7.75m、南東辺7.50m、南西辺9.14m、北西辺7.60mを計る。やや不整形であるが、長方形を呈する。主軸方位は、N-49°-Wを示す。

壁は、やや弓状を呈して立ち上がる。掘り込み確認面から床面までの深さは、60cm前後である。

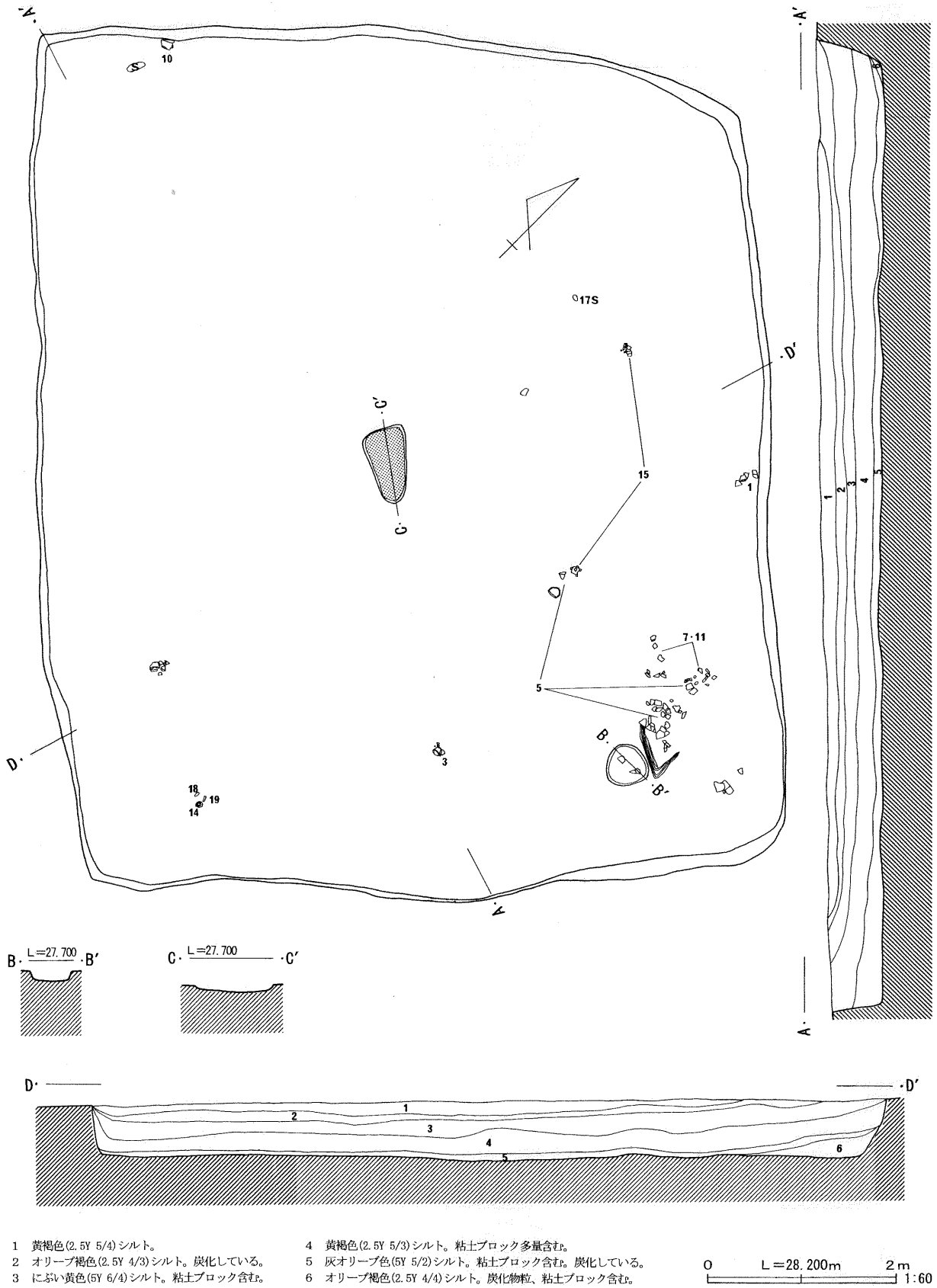
床面は、凹凸がみられるものの、踏み固められた箇所が多く (特に東隅ピット周辺)、安定している。

ピットは、東隅に1ヶ所穿たれている。円形を呈し、径50×43cm、深さ9cmを計る。

炉は、竪穴中央に台形を呈して設けられている。長辺45cm、短辺22cm、長さ80cmを計る。全体に焼土化しているが、中央部では、厚さ6cmを計る。

覆土は、上位から、黄褐色シルト層 (第1層)、炭化しているオリーブ褐色シルト層 (第2層)、焼土ブロックを含むにぶい黄色シルト層 (第3層)、多量の粘土ブロックを含む黄褐色シルト層 (第4層)、粘土ブロックを含み、炭化している灰オリーブ色シルト層 (第5層) が堆積している。また、壁際の最下層には、炭化物粒及び粘土ブロックを含むオリーブ褐色シルト層 (第6層) の堆積している部分もみられる。

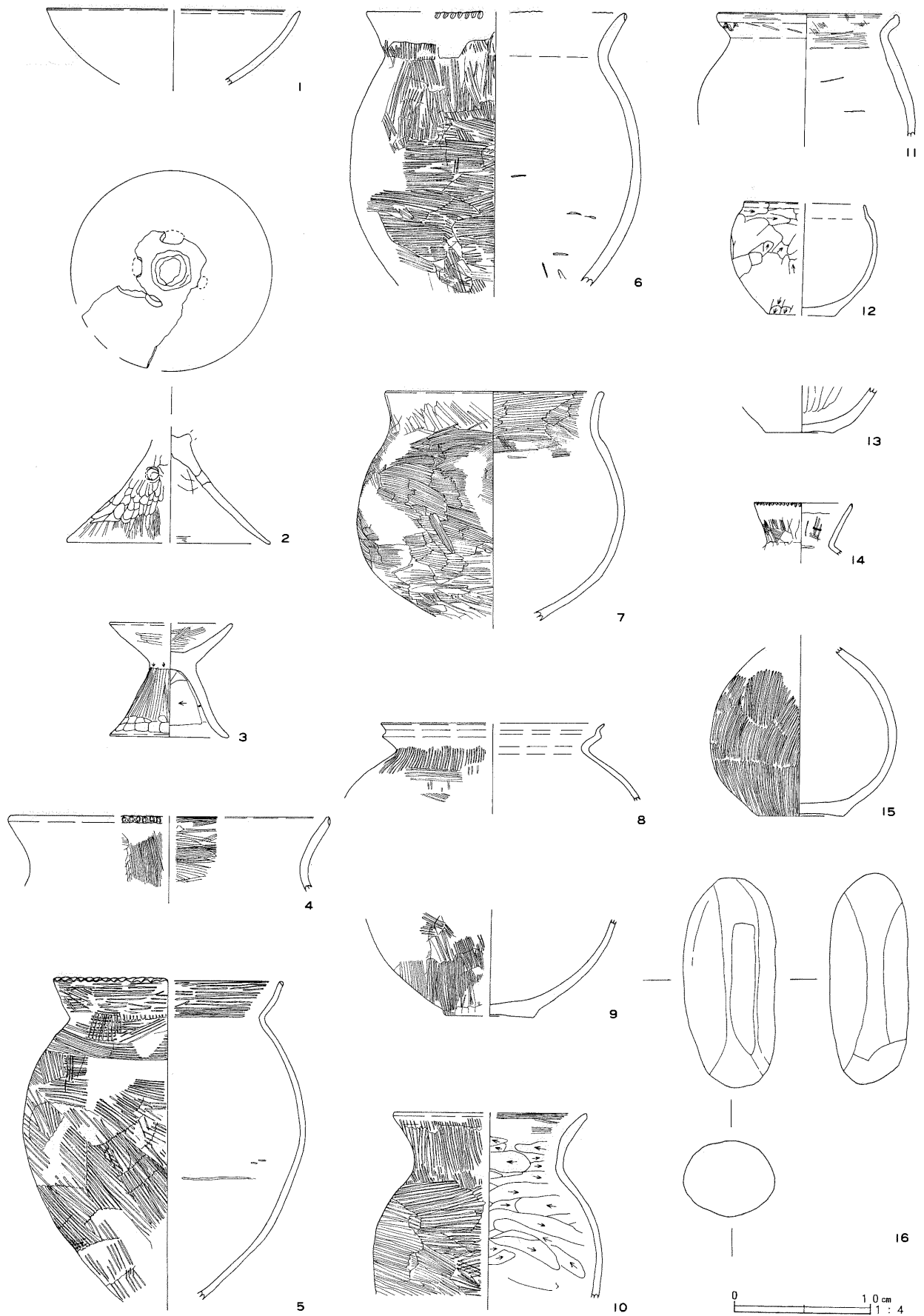
遺物は、第5層中から出土しており、一部は床面と接している。土師器高杯 (1・2)、器台 (3)、甕類 (4~11)、\_ (12) 壺類 (13~15)、砥石 (16・17)、土錘 (18・19) がみられる。



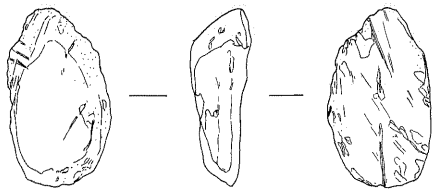
- 1 黄褐色(2.5Y 5/4)シルト。
- 2 オリーブ褐色(2.5Y 4/3)シルト。炭化している。
- 3 にぶい黄色(5Y 6/4)シルト。粘土ブロック含む。
- 4 黄褐色(2.5Y 5/3)シルト。粘土ブロック多量含む。
- 5 灰オリーブ色(5Y 5/2)シルト。粘土ブロック含む。炭化している。
- 6 オリーブ褐色(2.5Y 4/4)シルト。炭化物粒、粘土ブロック含む。

0 L=28.200m 2m 1:60

第193図 C区75号住居跡



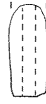
第194图 C区75号住居跡出土遺物(1)



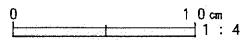
17



18



19



第195図 C区75号住居跡出土遺物(2) 径77×30cmで、わずかに掘り窪められ、厚さ4cm前後焼土面をもつ。炉と西壁の間には、炭化物層が堆積している。

76号住居跡 (第196図) (第197図)

L-14グリッドに位置する。第二確認面からの検出である。77号・81号両住居跡を切断している。

北辺3.80m、東辺3.75m、南辺3.45m、西辺3.85mを計る。やや不整形ではあるが、正方形を呈する。主軸方位は、N-120°-Wを示す。

壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。掘り込み確認面から床面までの深さは、65cm前後である。

床面は、やや凹凸がみられるものの、ほぼ水平面を成し、安定している。

ピットは、穿たれていない。

炉は、中央と西壁の間に設けられている。長円形を呈し、

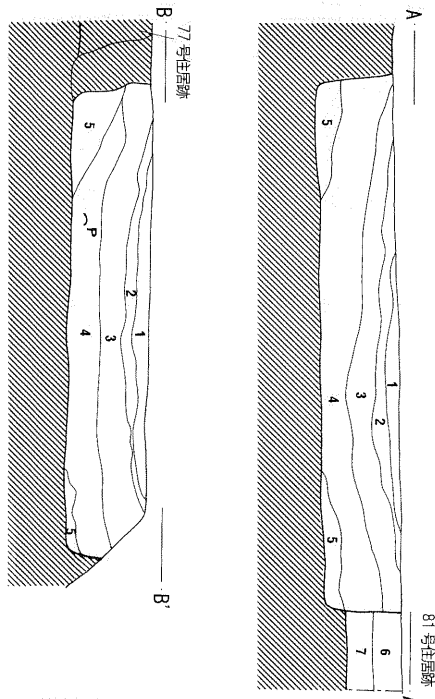
覆土は、上位から、多量のマンガ粒及び下位に炭化物層を挟む

第100表 C区75号住居跡出土遺物観察 (第194・195図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・高杯	(18.4)	—	—	⑥①②③④	②	にぶい橙	杯部	内面全面及び外面口縁部横のナデ、体部外面下位は縦のナデ。
2	土師器・高杯	—	—	(14.9)	⑥①②③④	②	にぶい橙	脚部1/5	外面は縦のミガキ、裾部は細かい縦のミガキ。内面は縦のナデツケ、裾部は横のナデ。
3	土師器・器台	(8.9)	8.5	8.6	①②③④⑥	②	橙	2/3	受台部内外面横又は斜のミガキ、外面の一部に斜のケズリ様ナデ。脚部外面縦のミガキ、内面横の連続ケズリ様ナデ、裾部内外面横のナデ。
4	土師器・甕	(23.4)	—	—	⑥①③②	②	浅黄橙	口縁部1/5	外面縦一部横の刷毛目。内面横の刷毛目、表面磨滅した部分多い。
5	土師器・台付甕	17.0	—	—	⑥①②	②	橙	台部欠4/5	口縁部横、胴肩部横、下位へ向けて斜の刷毛目。胴部内面横のナデ。二次加熱。
6	土師器・台付甕	(19.0)	—	—	①②⑥④	②	にぶい橙	台部欠1/4	口縁部から肩部外面縦、胴部中央下位縦の刷毛目。口唇部及び口縁内面横のナデ。胴部内面横及び斜のナデ。外面煤付着。二次加熱。
7	土師器・台付甕	(16.1)	—	—	⑥③②①④	②	橙	台部欠	口縁部外面横ナデの後斜のミガキ様ナデ。内面胴部上部まで横の刷毛目。胴部外面横の刷毛目、内面横のナデツケ、全面吸炭。
8	土師器・台付甕	(16.4)	—	—	⑥①④	②	にぶい赤褐	上位1/3	内面全面ナデ。吸炭。
9	土師器・甕	—	—	6.6	①⑥④	②	明赤褐	下位2/5	内面底部表面剥離。吸炭。二次加熱。
10	土師器・甕	(14.0)	—	—	①②③⑥④	①	にぶい橙	1/3	内面口唇部以外横のケズリ様ナデ。全面吸炭。
11	土師器・甕	(13.0)	—	—	③①②⑥④	②	にぶい橙	上半のみ	口縁部～拵れ部横の刷毛目が残るが、他全面表面磨滅しており不詳。吸炭。二次加熱。
12	土師器・壺	(8.8)	8.3	5.0	③①④②⑥	①	にぶい褐	3/5	外面ケズリ後ナデ、内面ナデ。外面ブロック状に剥離した部分多。
13	土師器・壺	—	—	4.8	①②⑥④	②	明赤褐	底部のみ	外面ナデ。内面指頭によるナデ。
14	土師器・壺	7.2	—	—	①④③⑥	②	にぶい黄橙	口縁部のみ	内外面共刷毛目の後ナデ。
15	土師器・壺	—	—	6.2	④①③②	②	明赤褐	口縁部欠3/4	外面全面ミガキ。内面ナデ。
16	砥石	長さ15.3 幅6.1 厚さ5.5						—	
17	砥石	長さ9.9 幅5.6 厚さ3.2						—	軽石製。
18	土錘	長さ6.0 径2.3 孔径0.9						完形	
19	土錘	長さ— 径2.1 孔径0.8						一部欠	

黄褐色シルト層 (第1層)、少量の炭化物を含む暗褐色シルト層 (第2層)、多量のマンガ粒を含む黄褐色シルト層 (第3層)、多量の炭化物を含む褐色シルト層 (第4層) が堆積している。また壁際には、最下層として、多量の炭化物を含む暗灰黄色シルト層 (第5層) のみられる部分もある。

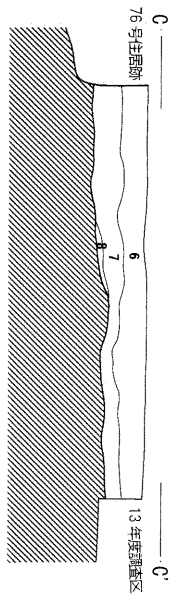
遺物は、土師器甕 (3) が覆土中から検出された以外は、床面上からの出土である。土師器高杯 (1)、器台 (2)、甕類 (3~7)、椀 (8) 壺類 (9~11) 等がみられる。



76号住居跡土層

A - A' · B - B'

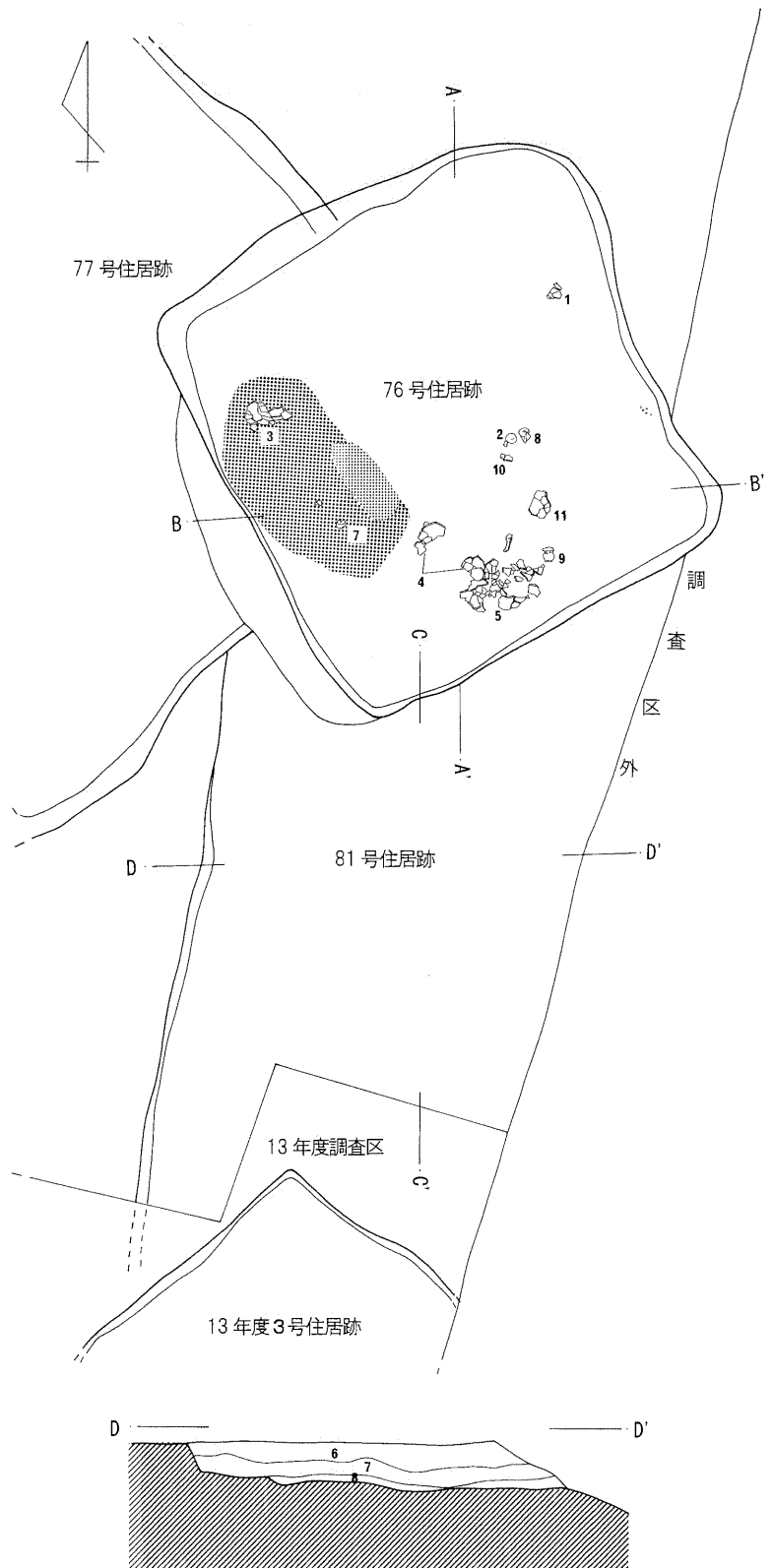
- 1 黄褐色(2.5Y 5/3)シルト。マンガン粒を多量。下層に炭化物を層状に含む。
- 2 暗褐色(10YR 3/3)シルト。炭化物を少量含む。
- 3 黄褐色(2.5Y 5/4)シルト。マンガン粒を多量含む。
- 4 褐色(10YR 4/4)シルト。炭化物を多量含む。
- 5 暗灰黄色(2.5Y 5/2)シルト。炭化物を多量含む。



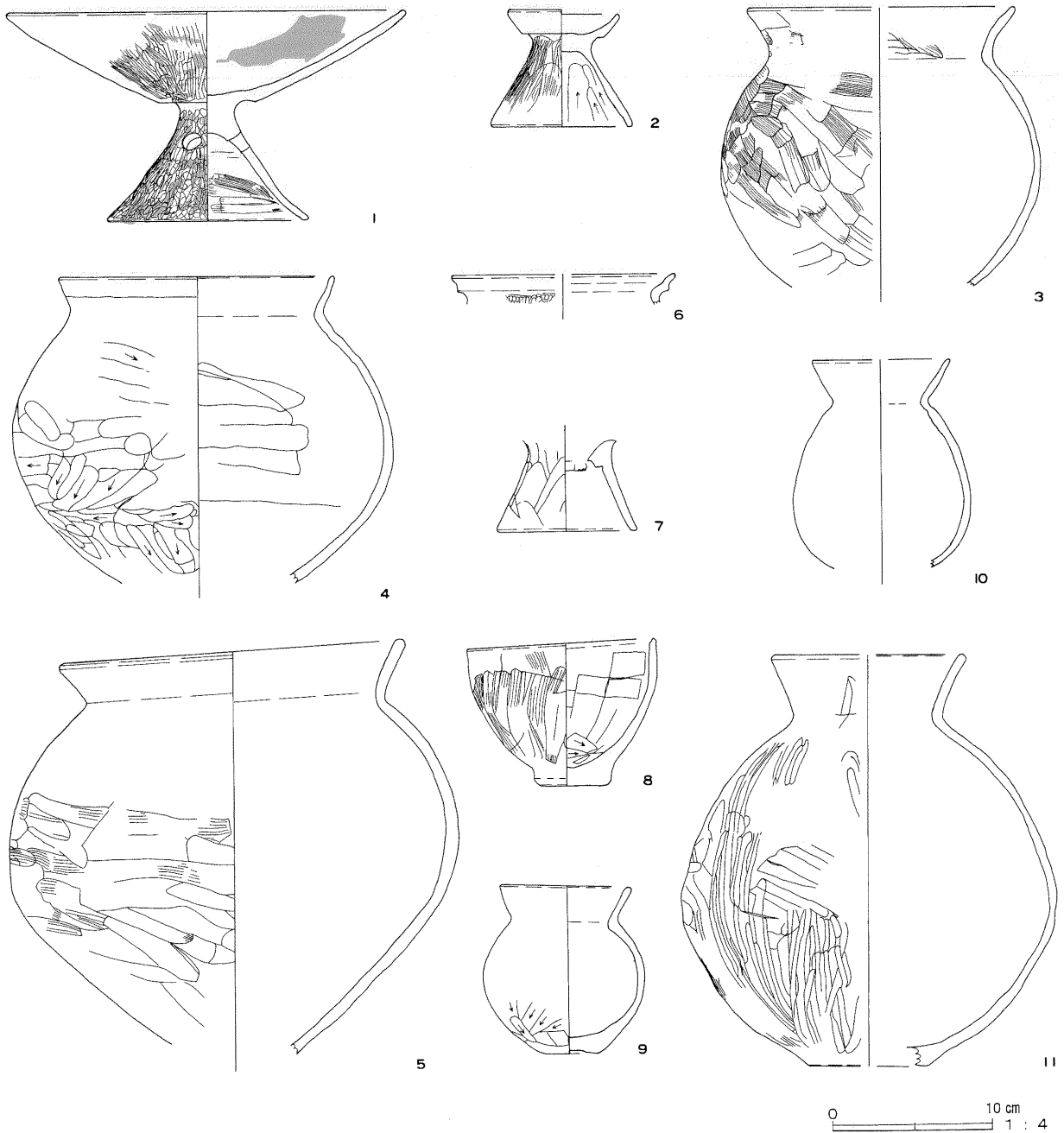
81号住居跡土層

C - C' · D - D'

- 6 明黄褐色(10YR 6/6)シルト。マンガン粒をやや多量含む。遺物を多数含む。
- 7 明褐色(7.5YR 5/6)シルト(粘土質)。褐灰色(10YR 6/1)粘土を2~3mm大のブロック状に含む。
- 8 にぶい黄褐色(10YR 5/3)粘土(シルト質)。炭化物粒を少量含む。



第196図 C区76号・81号住居跡



第197図 C区76号住居跡出土遺物

第101表 C区76号住居跡出土遺物観察表 (第197図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・高杯	24.5	13.4	12.2	①②③⑥④	②	にぶい黄橙	一部欠	脚部三方透かし(円孔)。外面杯部縦のミガキ、脚部縦の細かいミガキ。内面表面剥離、ミガキか?脚部上位指頭によるナデ、下位木口状工具による横のナデ。脚部内面以外全面朱塗。
2	土師器・器台	6.8	7.5	8.7	④②①③⑥	②	浅黄	一部欠	外面受部横のナデ、脚部縦の刷毛目、裾部横のナデ。内面受部表面剥離、底面~一方吸炭、他は赤色化。脚部縦のケズリの後横のナデ。二次加熱。
3	土師器・甕	(16.4)	—	—	②①⑥④③	②	にぶい黄橙	底部欠	外面口縁~肩部横の刷毛目後、口唇部及び括れ部にナデが加わる。胴部斜の刷毛目、下位にはナデが加わる。内面口縁横~斜の刷毛目の後ナデ、胴部ナデ。外面の一部タール状物質付着。
4	土師器・甕	17.1	—	—	②①④⑥③	②	にぶい黄橙	底部欠	口縁部横ナデ、外面輪積み痕残す。胴部外面上位横、中位縦横、下位縦のケズリ。内面ナデ、中位一部指頭による横のナデ。内外面一部吸炭。赤色化、二次加熱。
5	土師器・甕	21.1	—	—	①②④⑥③	②	にぶい黄橙	底部欠	外面口縁部~胴上位横のナデ、胴中位横~斜の刷毛目、下位にはナデが加わる部分もある、中位以下煤付着。内面横のナデ、括れ部炭化物付着。二次加熱。



6	土師器・台付甕	(13.8)	—	—	②①④⑥③	②	浅黄	口縁部1/8	外面胴部刷毛目。全面吸炭。
7	土師器・台付甕	—	—	8.4	⑥②①③④	②	にぶい黄	台部のみ	外面ケズリの後ナデ。内面天井部ナデツケ、他ナデ。
8	土師器・椀	11.6	9.4	3.8	①⑥②④③	②	橙	一部欠	外面縦の刷毛目の後口縁部ナデ。内面横のヘラナデ。内外面煤付着。赤色化。二次加熱。
9	土師器・小型壺	7.9	10.9	3.1	①⑥②④③	②	浅黄	完形	表面磨滅。底面付近ケズリ。上げ底。
10	土師器・小型壺	8.9	—	—	①②④⑥③	②	赤橙	1/2	内外面共ナデ、底面～下位炭化物付着。赤色化。二次加熱。
11	土師器・壺	11.8	26.2	7.0	②④⑥①③	②	浅黄	1/2	口縁部横のナデ。胴部外面ミガキ、内面ナデ。

**77号住居跡** 78号K-14・15からL-14・15グリッドに亘って位置する。第二確認面からの検出(第198図) である。

(第199図) 81号住居跡を切断しているが、78号住居跡には削平され、76号・79号両住居跡に切断されている。

北東辺7.30m、南東辺4.90m、南西辺7.65m、北西辺5.95mを計る。かなり不整形ではあるが、長方形を呈すると思われる。長軸方位は、N-45°-Wを示す。

壁は、やや斜面を成して立ち上がる。掘り込み確認面から床面までの深さは、55cm前後である。

床面は、やや凹凸がみられるものの、ほぼ水平面を成し、安定している。

ピット・炉等は、検出されていない。

覆土は、上位から、多量のマンガ粒を含む明黄褐色シルト層(第5層)、多量の褐灰色粘土・マンガ粒・炭化物粒を含むにぶい黄褐色粘土層(第6層)、多量のマンガ粒及び少量の炭化物を含むにぶい黄橙色粘土層(第7層)が堆積している。

遺物は、手捏ね土器(77-1)が1点出土したのみである。

**第102表 C区77号住居跡出土遺物観察表(第199図)**

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・ミニチュア土器	—	—	3.1	③②①④	②	にぶい褐	口縁部欠	全面ナデ。

**78号住居跡** K-14・15からL-14・15グリッドに亘って位置する。第二確認面からの検出である。

(第198図) 77号住居跡を削平している。

(第199図) 北東辺4.30m、南東辺4.05m、南西辺4.25m、北西辺4.30mを計る。やや不整形ではあるが、正方形を呈すると思われる。北西辺の軸方位は、N-21°-Eを示す。

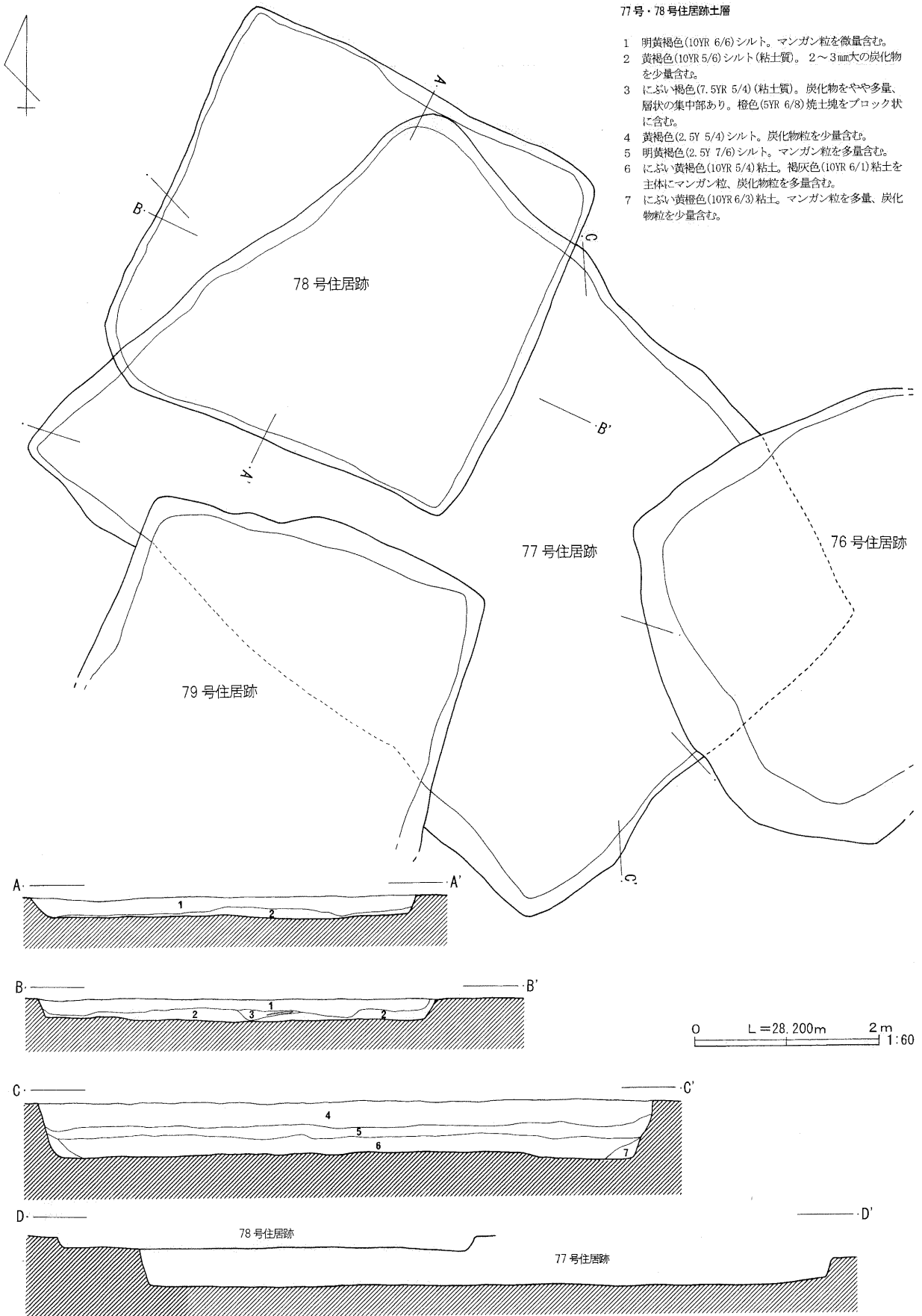
壁は、弓状に湾曲するか、斜面を成して立ち上がる部分が多い。掘り込み確認面から床面までの深さは、20cm前後である。

床面は、やや凹凸がみられるものの、ほぼ水平面を成し、安定している。

ピット・炉等は、検出されていない。

覆土は、上位から、微量のマンガ粒を含む明黄褐色シルト層(第1層)、少量の2~3大の炭化物を含む黄褐色シルト層(第2層)が堆積し、中央部では、両層の間に炭化物層及び焼土ブロックを含むにぶい褐色シルト層(第3層)が堆積している。

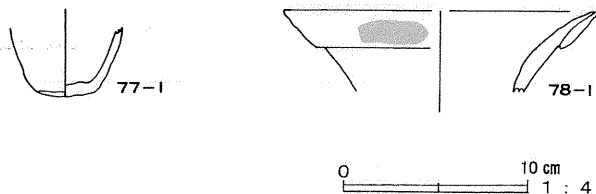
遺物は、土師器壺(78-1)が1点出土したのみである。



77号・78号住居跡土層

- 1 明黄褐色(10YR 6/6)シルト。マンガン粒を微量含む。
- 2 黄褐色(10YR 5/6)シルト(粘土質)。2~3mm大の炭化物を少量含む。
- 3 にぶい褐色(7.5YR 5/4)(粘土質)。炭化物をやや多量、層状の集中部あり。橙色(5YR 6/8)焼土塊をブロック状に含む。
- 4 黄褐色(2.5Y 5/4)シルト。炭化物粒を少量含む。
- 5 明黄褐色(2.5Y 7/6)シルト。マンガン粒を多量含む。
- 6 にぶい黄褐色(10YR 5/4)粘土。褐灰色(10YR 6/1)粘土を主体にマンガン粒、炭化物粒を多量含む。
- 7 にぶい黄褐色(10YR 6/3)粘土。マンガン粒を多量、炭化物粒を少量含む。

第198図 C区77号・78号住居跡



第199図 C区77号・78号住居跡出土遺物

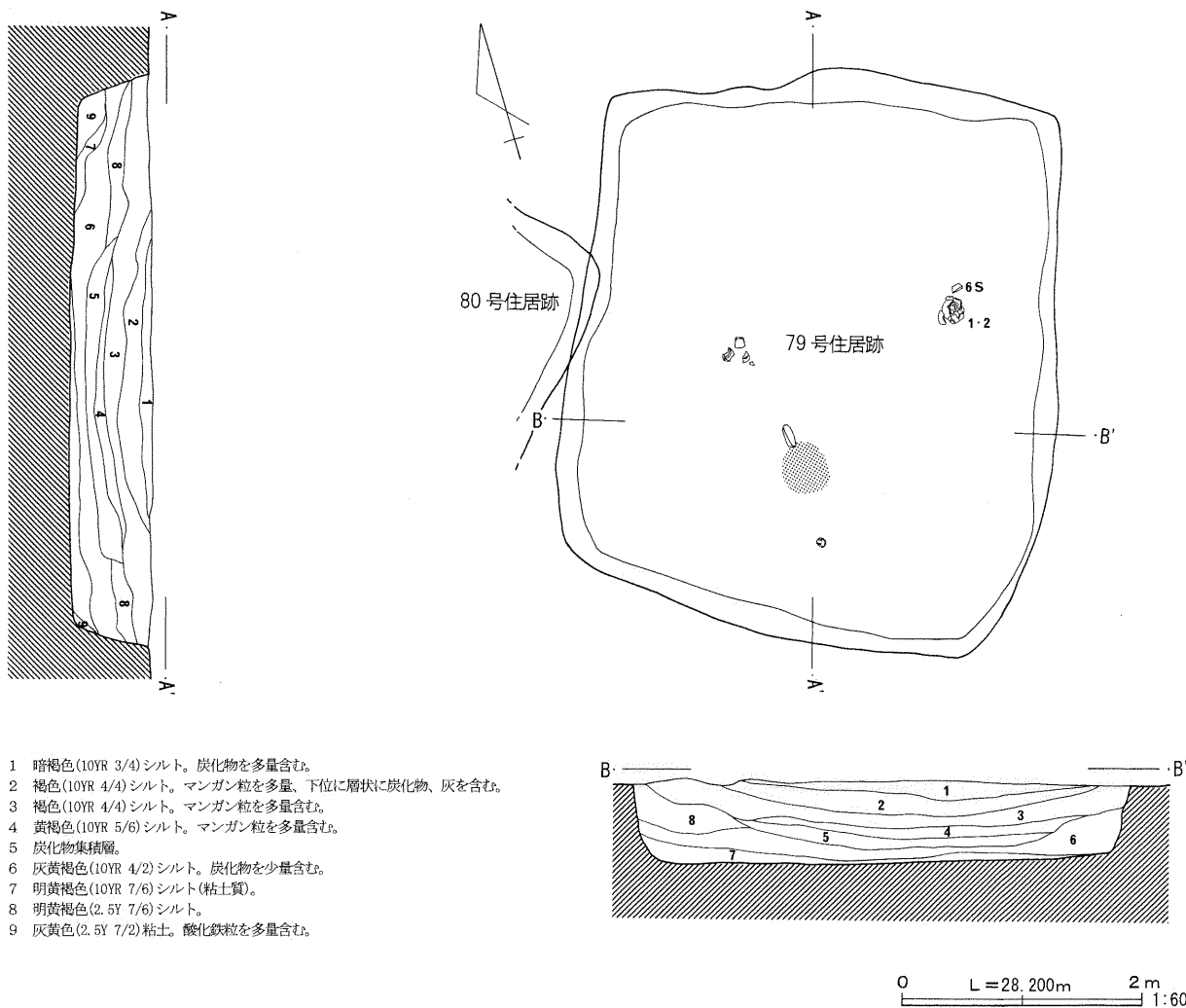
第103表 C区78号住居跡出土遺物観察表（第199図）

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・壺	(16.0)	—	—	⑥③①②	②	橙	口縁部1/8	表面全面磨滅。整形痕不明。内面吸炭。外面複合口縁部一部朱塗の痕跡。

**79号住居跡** L-14からL-15グリッドに亘って位置する。第二確認面からの検出である。

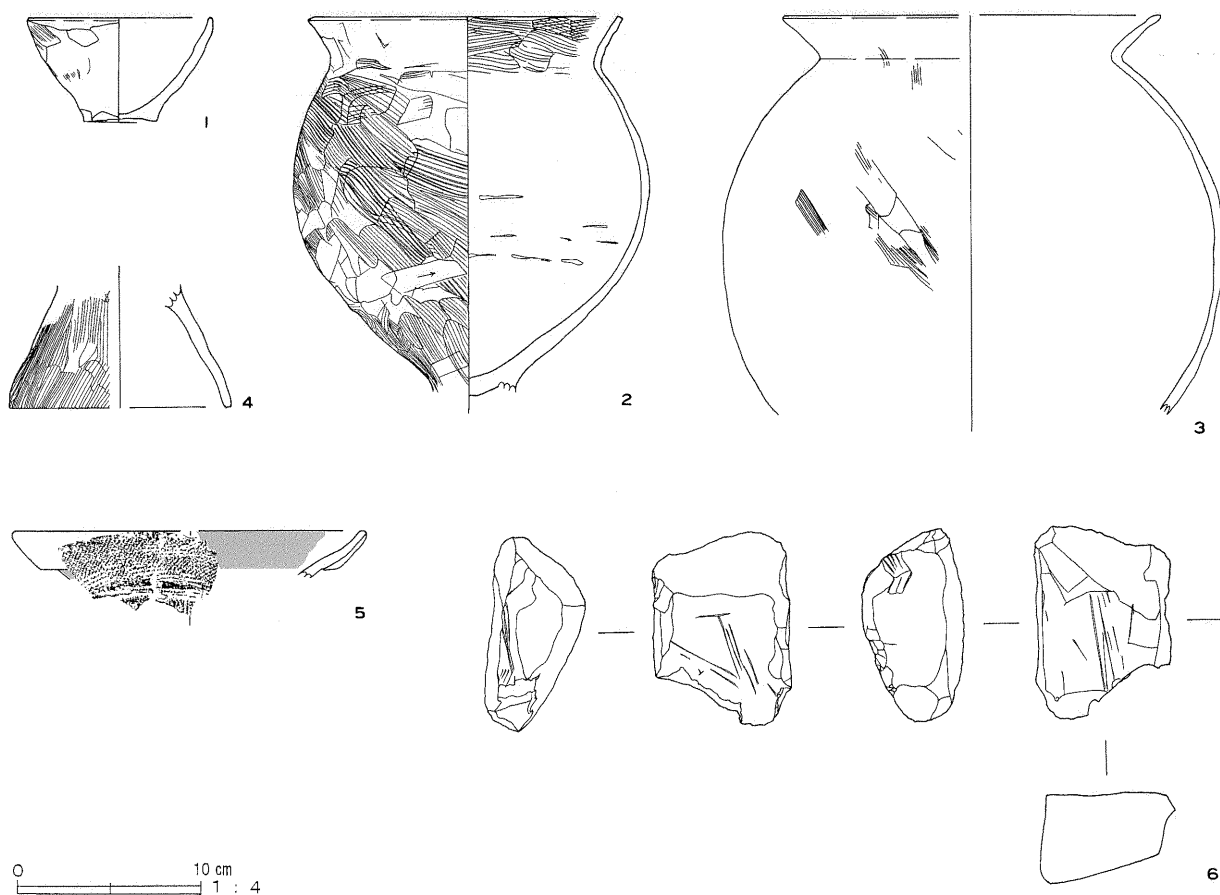
(第200図) 76号住居跡を切断しているが、80号住居跡に削平されている。

(第201図) 北東辺3.85m、南東辺4.66m、南西辺3.50m、北西辺3.75mを計る。かなり不整形ではあるが、南東辺を底辺とした台形を呈すると思われる。主軸方位は、N-16°-Eを示す。



- 1 暗褐色(10YR 3/4)シルト。炭化物を多量含む。
- 2 褐色(10YR 4/4)シルト。マンガン粒を多量、下位に層状に炭化物、灰を含む。
- 3 褐色(10YR 4/4)シルト。マンガン粒を多量含む。
- 4 黄褐色(10YR 5/6)シルト。マンガン粒を多量含む。
- 5 炭化物集積層。
- 6 灰黄褐色(10YR 4/2)シルト。炭化物を少量含む。
- 7 明黄褐色(10YR 7/6)シルト(粘土質)。
- 8 明黄褐色(2.5Y 7/6)シルト。
- 9 灰黄色(2.5Y 7/2)粘土。酸化鉄粒を多量含む。

第200図 C区79号住居跡



第201図 C区79号住居跡出土遺物

第104表 C区79号住居跡出土遺物観察表（第201図）

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・椀	10.0	5.7	3.9	③②①④	②	灰白	一部欠	外面斜の刷毛目の後ナデ、底部周辺へラによる面取り様のナデ、底面粗いケズリで上げ底となる。内面全面ナデ、一部吸炭。
2	土師器・台付甕	17.1	—	—	③①②④	②	明赤褐	台部欠	外面口縁部横のナデ、肩部横～下位に移行するに従って縦の刷毛目、中位と下位の境横のケズリが加わる部分がある、下位赤色化、上位煤付着。内面口縁横の刷毛目、胴部横のナデ、輪積み痕を残す、底面炭化物付着。
3	土師器・台付甕	(20.4)	—	—	⑥①③④	②	明赤褐	底部欠1/3	外面口縁部横のナデ、下端～胴部肩縦、上位～中位斜の浅い刷毛目、下位ナデ、ほぼ全面煤付着、肩部～口縁赤色化。内面全面ナデ、下位炭化物付着。
4	土師器・台付甕	—	—	(12.0)	①⑥③②	②	赤褐	台部1/4	外面縦の刷毛目。内面横～斜のナデ。端部矩形仕上げ。
5	土師器・壺	(19.2)	—	—	③⑥①④	②	にぶい橙	口縁部1/8	口縁部横の刷毛目の後縄文。頸部縦の刷毛目。内面ミガキ様ナデ。全面朱塗。
6	砥石	長さ 10.6 幅 7.3 厚さ 5.5						—	

壁は、やや丸みをもつ斜面を成して立ち上がる。掘り込み確認面から床面までの深さは、70cm前後である。

床面は、やや凹凸がみられるものの、ほぼ水平面を成し、安定している。

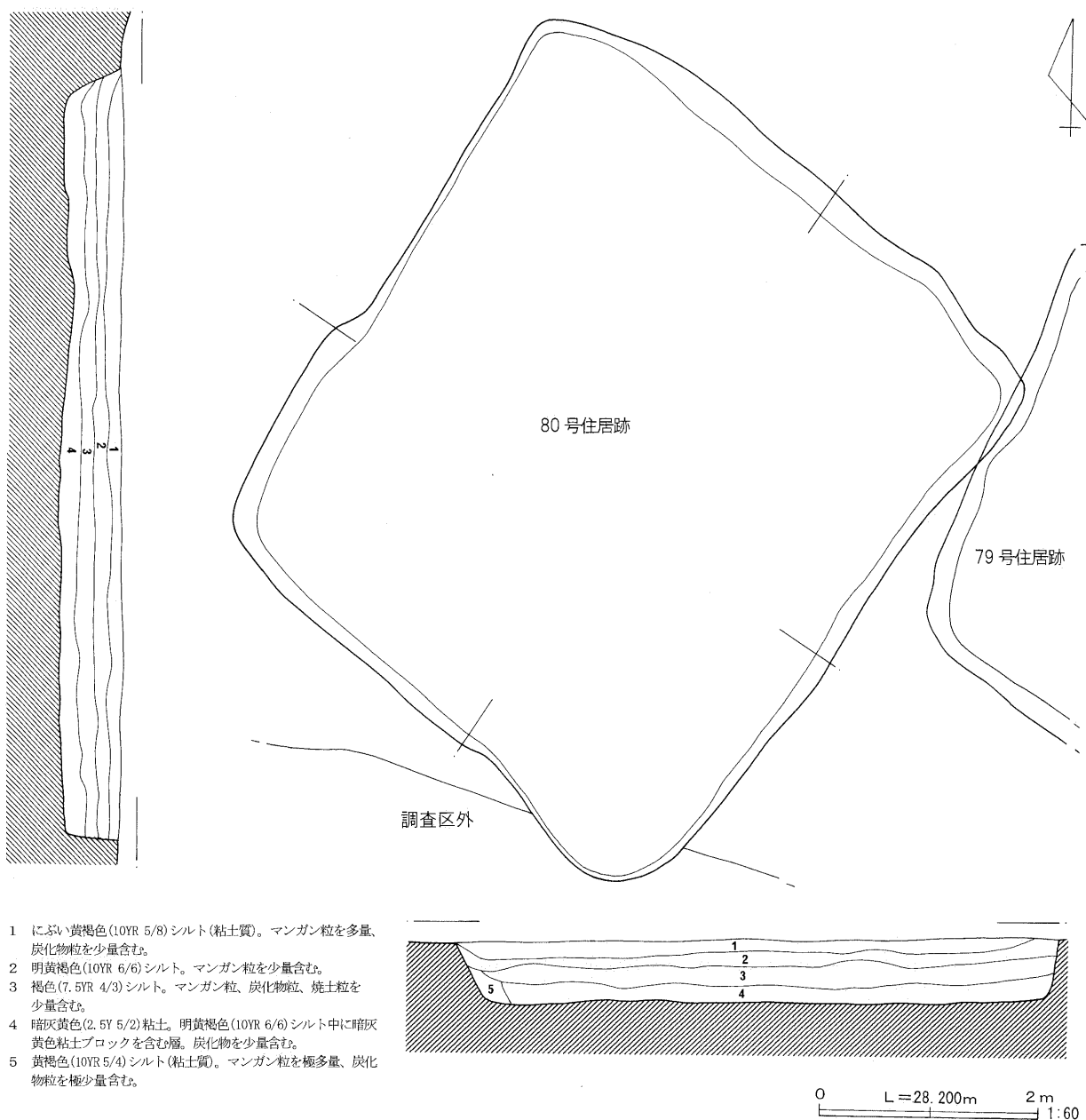
ピットは、検出されていない。

炉は、竪穴中央と南西壁の中間に設けられている。円形を呈し、径42×36cmを計る。焼土の厚さは、1cm内外で非常に薄い。

覆土は、下層から、壁際の一部に、多量の炭化物粒を含む暗褐色シルト層（第9層）

がみられるのを始めとして、やや粘土質な明黄褐色シルト層（第7層）、少量の炭化物を含む灰黄褐色シルト層（第6層）、明黄褐色シルト層（第8層）が堆積している。その後、これらの層の上面を削り込むような様子で、炭化物の集積層（第5層）が堆積している。その上位には、多量のマンガング粒を含む黄褐色シルト層（第4層）、マンガング粒を含む褐色シルト層（第3層）、下位に炭化物及び灰を層状に挟む褐色シルト層（第2層）、多量の炭化物を含む暗褐色シルト層（第1層）が堆積している。

遺物は、床面上から、土師器椀（1）、甕類（2～4）、壺（5）、砥石（6）等が出土している。



第202図 C区80号住居跡

**80号住居跡** L-15グリッドに位置する。第二確認面からの検出である。

(第202図) 79号住居跡を削平している。南端は、第4次調査区域に入る。

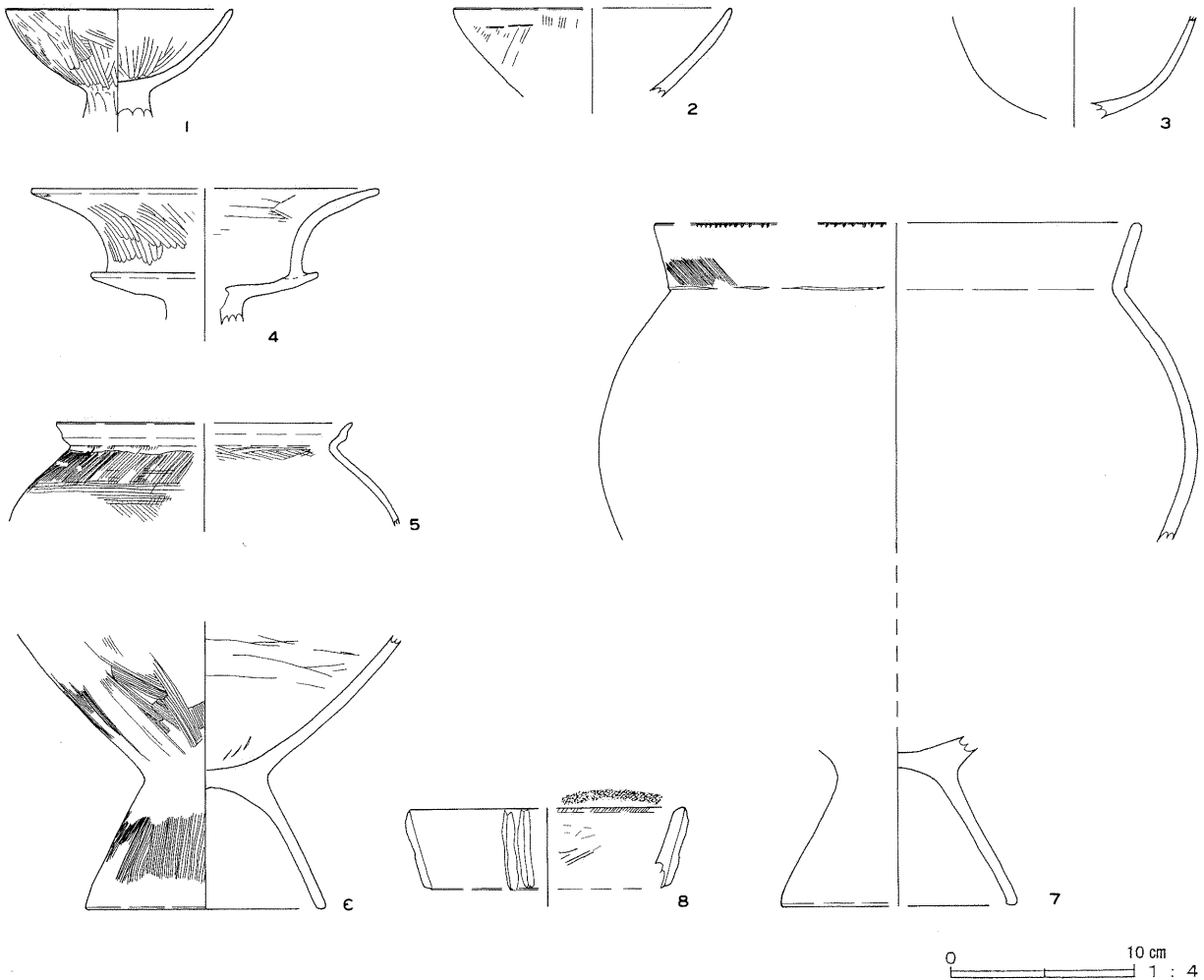
(第203図) 北東辺5.65m、南東辺6.00m、南西辺5.10m、北西辺5.50mを計る。やや不整形ではあるが、平行四辺形を呈すると思われる。長軸方位は、N-36°-Eを示す。

壁は、やや丸みをもつ斜面を成して立ち上がる。掘り込み確認面から床面までの深さは、60cm前後である。

床面は、やや凹凸がみられるものの、ほぼ水平面を成し、一部踏み固められた部分もあって、安定している。

ピット・炉等は、検出されていない。

覆土は、下層から、少量の炭化物及び、明黄褐色シルトと暗灰黄褐色粘土ブロックを含む暗灰黄褐色粘土層（第4層）、少量の炭化物・焼土粒・マンガン粒を含む褐色シルト層（第3層）、少量のマンガン粒を含む明黄褐色シルト層（第2層）、多量のマンガン粒及び少量の炭化物を含むにぶい黄褐色シルト層（第1層）が堆積している。また、壁際の一部には、最下層として、極多量のマンガン粒及び少量の炭化物を含む黄褐色シルト層（第5層）がみられる部分もある。

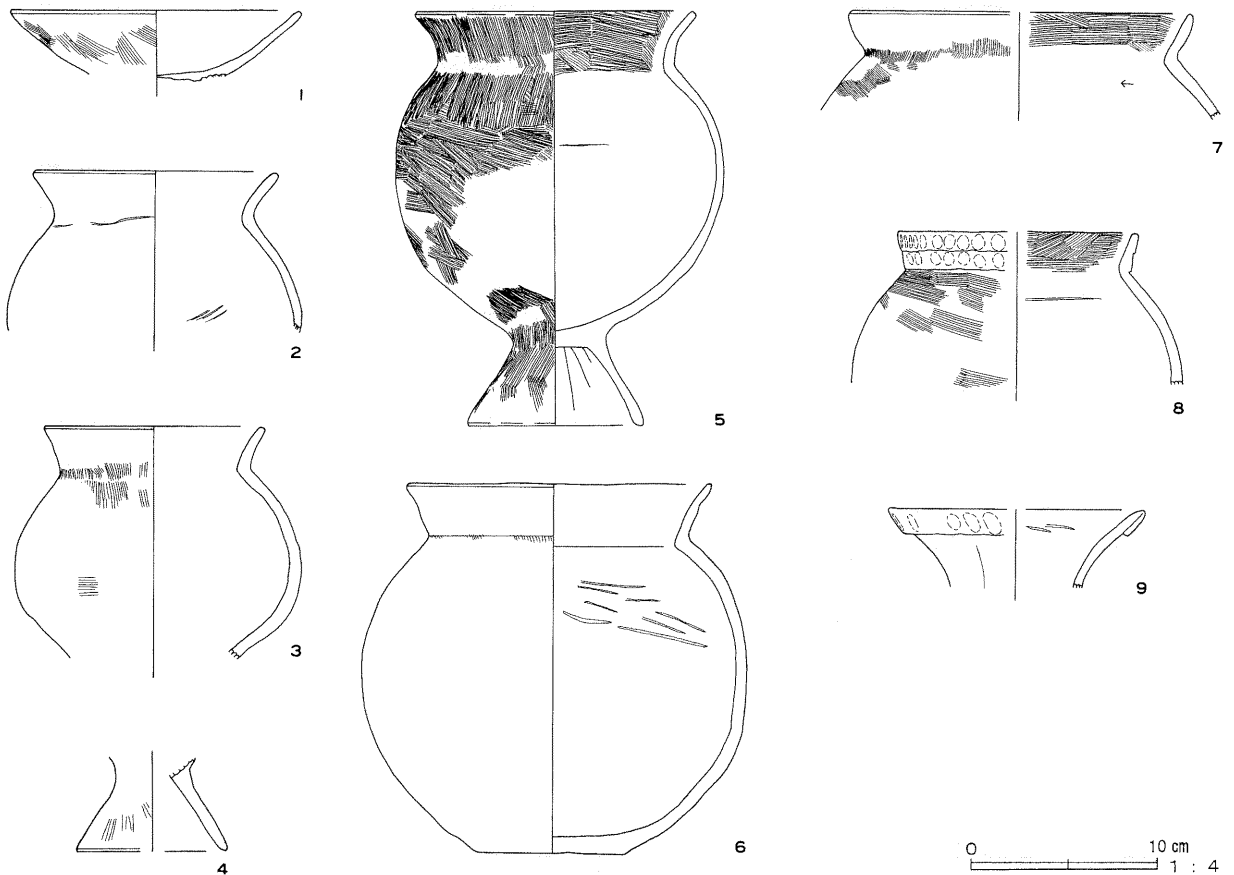


第203図 C区80号住居跡出土遺物

遺物は、すべて覆土中からの検出であり、土師器高杯（1～3）、器台（4）、台坏甕（5～7）、壺（8）等が出土している。

105表 C区80号住居跡出土遺物観察表（第203図）

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・高杯	12.5	—	—	②④③①	②	浅黄橙	杯部 1/2	外面杯部上位斜の刷毛目の後口唇部横のナデ、中位以下縦の刷毛目、括れ部～脚幅広の縦のミガキ。内面口唇部横のミガキ様ナデ、中位以下放射状ミガキ、一部吸炭。脚部充填。
2	土師器・高杯	(15.4)	—	—	③②①	②	浅黄橙	杯部 1/4	表面磨滅した部分多い。外面木口状工具による縦のナデ。
3	土師器・高杯	—	—	—	①②③④	②	浅黄橙	杯部 1/6	内外面共表面剥離。整形痕不明。内面の一部横のナデ。
4	土師器・器台	(19.2)	—	—	②①③④	②	浅黄橙	受台部 1/3	外面口縁部横のナデ、以下縦のミガキ、底外ミガキ様ナデ。内面横のナデ、下位～底面放射状のミガキ様ナデ。吸炭。
5	土師器・台付甕	(16.3)	—	—	①②③④	②	浅黄橙	口縁部 1/4	外面口縁部横ナデ、胴部肩斜の刷毛目、下端で方向を変える。方向の変換部に横の刷毛目。内面口縁部横ナデ。括れ部横の刷毛目、胴部ナデ、全面吸炭。口唇部赤色化。二次加熱。
6	土師器・台付甕	—	—	13.2	②①③④	②	浅黄橙	下位 3/4	外面胴部～台部縦の刷毛目、一部煤付着。括れ部及び台部裾横のナデ。内面胴部横のナデ、炭化物付着、台部横のナデ。二次加熱。
7	土師器・台付甕	(26.8)	—	(13.0)	⑥③②①④	②	浅黄橙	上位 1/4 底部 1/3	外面口縁部斜の刷毛目状木口状工具によるナデ、後水拭き、胴部は横台部は縦の木口状工具によるナデ、全面吸炭。内面口縁部横の木口状工具によるナデ、胴部横のナデ、台部は横のナデ。
8	土師器・壺	(15.1)	—	—	①③⑥②④	②	浅黄橙	口縁部一部のみ	外面複合口縁部2条の貼り付け棒状浮文。口唇部細縄文帯、内面一部朱塗痕跡。



第204図 C区81号住居跡出土遺物

第106表 C区81号住居跡出土遺物観察表（第204図）

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・高杯	(15.7)	—	—	⑥②③①④	②	にぶい橙	杯部 3/4	外面ナデの後下位に斜の刷毛目。内面ナデ、全体に吸炭。
2	土師器・甕	(13.3)	—	—	⑥①③②④	②	橙	上位 1/3	全面ナデ、外面煤、内面炭化物付着。表面磨滅した部分が多い。

3	土師器・甕	(12.0)	—	—	⑥②③①④	②	にぶい橙	上位1/2	全面磨滅した部分が多い。外面刷毛目がわずかに残る、煤付着。内面ナデ。二次加熱。
4	土師器・台付甕	—	—	(8.3)	⑥②①④	②	浅黄橙	脚台部1/4	表面磨滅した部分多い。外面一部縦の刷毛目が残る。内面ナデ。
5	土師器・台付甕	15.4	22.5	9.6	②⑥①③④	②	にぶい黄橙	4/5	外面口縁部～肩部縦の刷毛目、括れ部に横のナデが加わる、胴部横～斜、脚との接合部縦、脚部斜の刷毛目、脚裾部横のナデ、胴部全面煤付着、脚部赤色化。内面口縁部横の刷毛目、胴部ナデ、炭化物付着、脚部横のナデ、二次加熱。
6	土師器・甕	16.5	20.2	(8.0)	②①⑥③④	②	橙	3/5	外面括れ部に縦の刷毛目を残すのみで他は全面ナデ。内面肩部がヘラ先によるナデの他全面ナデ。表面磨滅した部分多い、赤色化、二次加熱。
7	土師器・甕	(18.5)	—	—	⑥①②④③	②	にぶい橙	口縁部3/8	外面口縁～括れ縦、胴部斜の刷毛目、口縁はナデが加わる、吸炭。内面口縁横の刷毛目、胴部横のケズリ様ナデ。
8	土師器・壺	(13.0)	—	—	⑥②①③④	②	橙	上位1/3	口縁部外面2段、指頭による押圧、内面横又は斜の刷毛目。胴部外面横～斜の刷毛目、一部磨滅、内面横のナデ。
9	土師器・壺	(13.8)	—	—	⑥②①④	②	明赤褐	口縁部1/3	外面二重口縁部指頭による押圧の後横のナデ、頸部縦のケズリ様ナデ。内面ナデ、全面吸炭。

**81号住居跡** L-14グリッドに位置し、東隅は調査区外に及んでいる。第二確認面からの検出である。(第196図) 76号・77号・3号各住居跡に切断されている。

(第204図) 規模等はまったく不明である。確認された西壁は、 $4.6 + \alpha$  mであり、床面は76号住居跡東隅寄り北へ延伸していない。西辺の軸方位は $N-9^{\circ}-E$ を示す。

壁は、ほぼ垂直に立ち上がる部分もみられるが、多くはやや傾斜を付けている。掘り込み確認面から床面までの深さは、45cm前後である。

床面は、凹凸が激しく、安定していない。

ピット・炉等は、検出されていない。

覆土は、上位から、多量のマンガ粒含む明黄褐色シルト層（第6層）、褐灰色粘土ブロックを含む明褐色シルト層（第7層）、少量の炭化物を含むにぶい黄褐色シルト層（第8層）が堆積している。

遺物は、土師器甕（3）が覆土中から検出された以外は、床面上からの出土である。土師器高杯（1）、器台（2）、甕類（3～7）、椀（8）壺類（9～11）等がみられる。

**82号住居跡** K-15・16からL-15・16グリッドに亘って位置する。第二確認面からの検出である。

(第205図) 77号土坑に切断されている。

(第206図) 北辺6.75m、東辺7.20m、南辺6.00m、西辺6.10mを計る。かなり不整形ではあるが、方形を基本とした形態を呈すると思われる。西辺の軸方位は、 $N-20^{\circ}-E$ を示す。

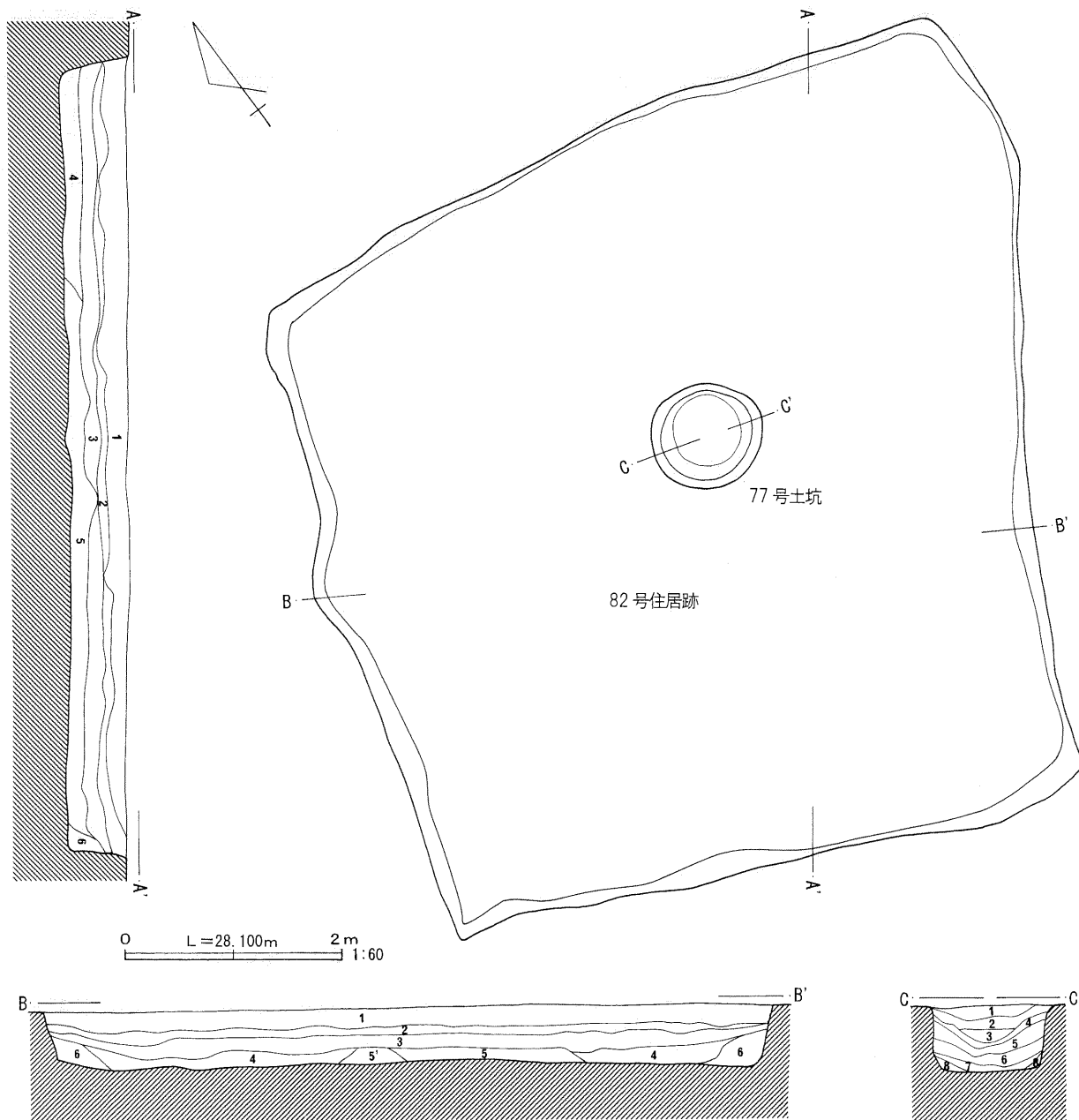
壁は、斜面を成して立ち上がる。掘り込み確認面から床面までの深さは、55cm前後である。

床面は、やや凹凸がみられるものの、ほぼ水平面を成し、安定している。

ピット・炉等は、検出されていない。

覆土は、最下層が入り組んでいる。壁際に、多量のマンガ粒及び少量の炭化物を含むにぶい黄色粘土層（第6層）、その内側に、少量の炭化物を含む明黄褐色粘土層（第4層）、中央に、第4層を主体にして灰白色粘土ブロックを含む層（第5層）、第5層の主従が逆の層（第5'層）が堆積している。この上位には、下層から、少量のマンガ粒・浅黄橙色シルトを含むにぶい黄橙色シルト層（第3層）、少量のマンガ粒を含む明黄褐色シルト





82号住居跡土層

- 1 におい黄褐色(10YR 5/4)シルト。炭化物、マンガン粒を多量含む。遺物を多く含む。
- 2 明黄褐色(10YR 7/6)シルト。マンガン粒を少量含む。
- 3 におい黄褐色(10YR 6/4)シルト(粘土質)。マンガン粒、淡黄褐色(10YR 8/4)シルトを少量含む。
- 4 明黄褐色(10YR 6/6)粘土(シルト質)。炭化物を少量含む。
- 5 4層の中に、灰白色(5Y 9/2)粘土ブロックが混入している。
- 5' 灰白色(5Y 7/2)粘土。
- 6 におい黄色(2.5Y 6/4)粘土(シルト質)。マンガン粒を多量、炭化物を少量含む。

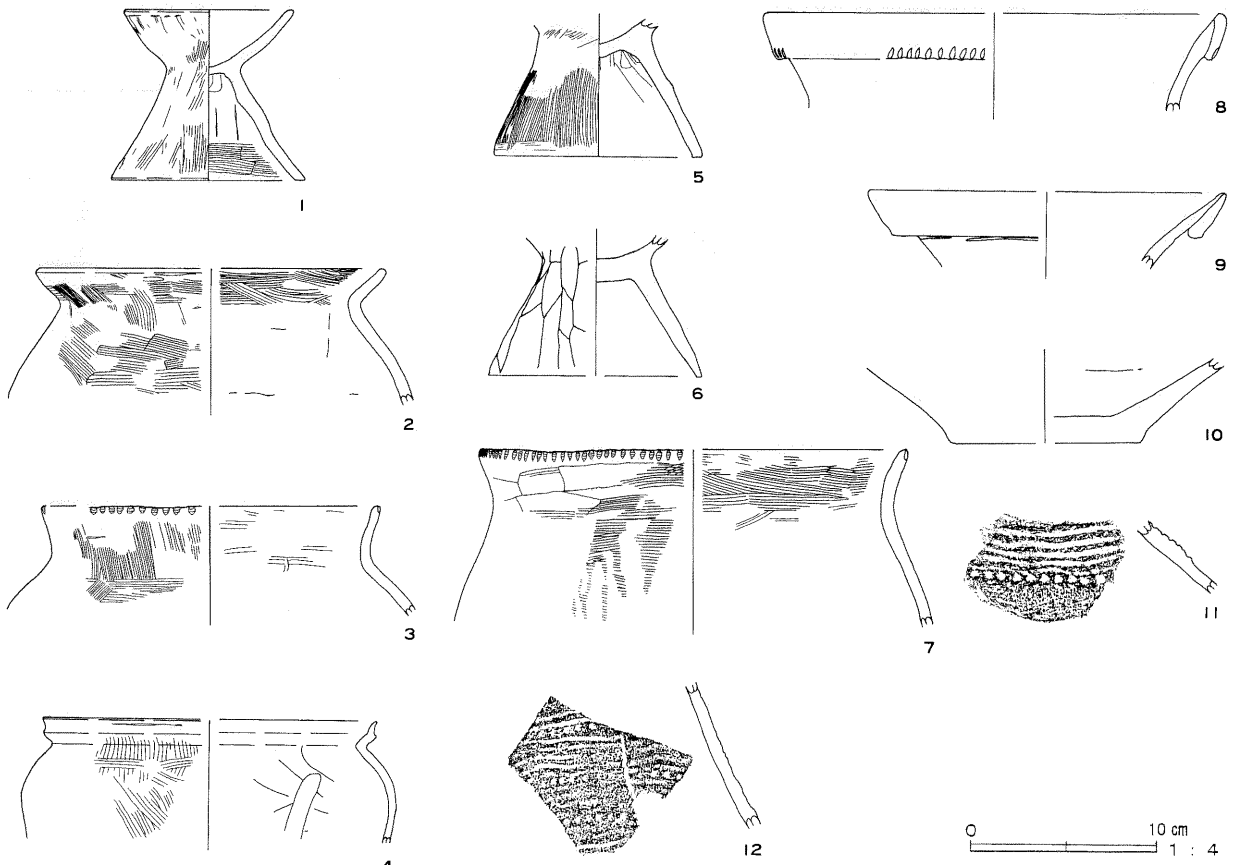
77号土坑土層

- 1 オリーブ色(10Y 5/2)シルト(粘土質)。酸化鉄粒を多量含む。
- 2 灰色(7.5Y 6/1)粘土。マンガン粒を多量含む。
- 3 黄褐色(2.5Y 5/4)粘土。
- 4 灰色(10Y 6/1)粘土。マンガン粒、酸化鉄を少量含む。2層より粘性が強く粒子が細かい。
- 5 黄褐色(10YR 5/6)粘土(シルト質)。
- 6 黄褐色(10YR 5/6)粘土。
- 7 明黄褐色(10YR 6/6)粘土(シルト質)。
- 8 黄灰色(2.5Y 6/4)粘土。

第205図 C区82号住居跡、77号土坑

層(第2層)、多量のマンガン粒・炭化物を含むにおい黄褐色シルト層(第1層)が堆積している。

遺物は、第1層中に集中している。土師器器台(1)、甕類(2~7)、壺類(8~12)等が出土している。

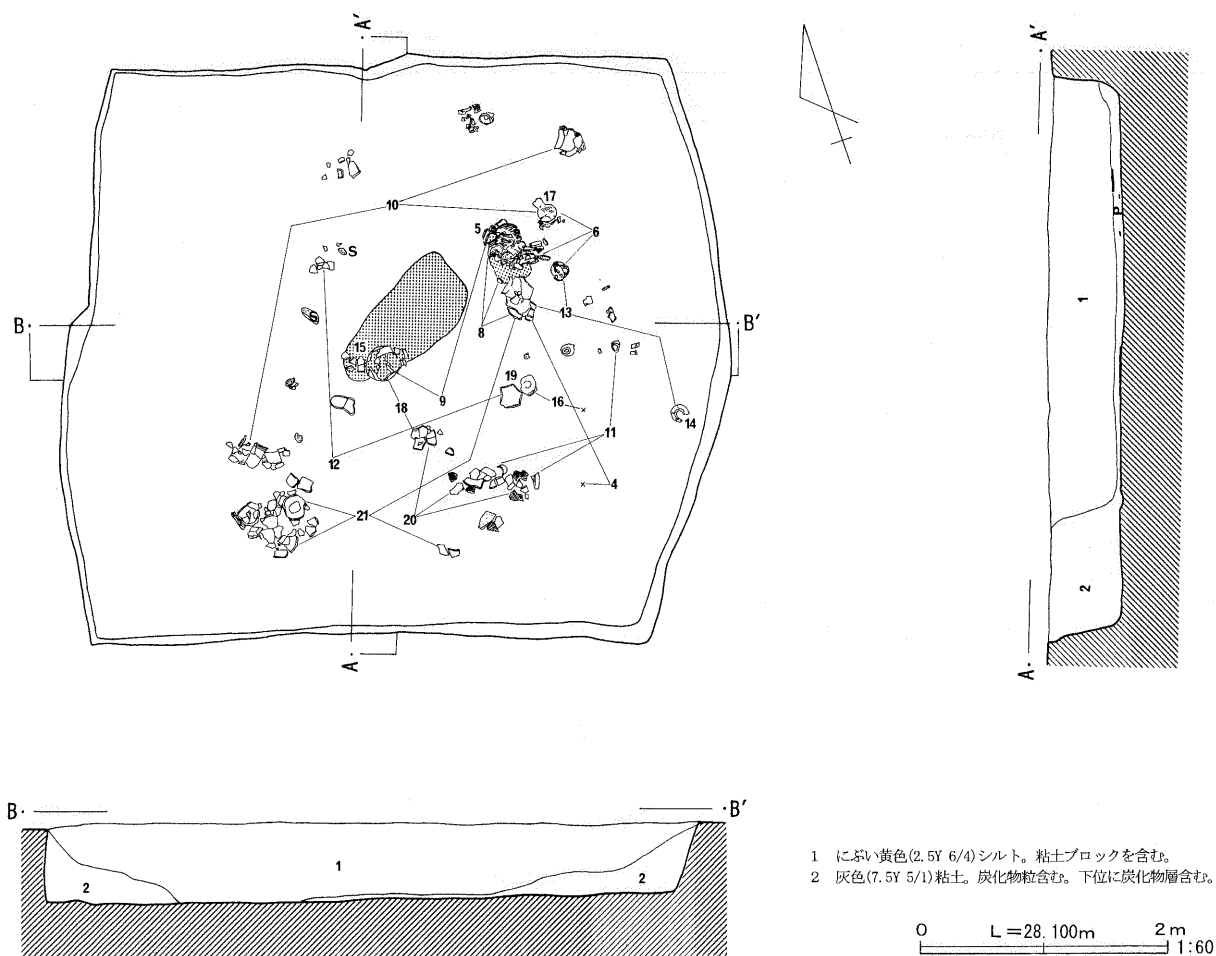


第206図 C区82号住居跡出土遺物

第107表 C区82号住居跡出土遺物観察表 (第206図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・器台	9.1	9.3	10.4	⑥①③②④	②	橙	2/3	外面全面に縦を主体とした刷毛目。内面杯部ナデ、脚上位指頭によるナデツケ、中位縦の指頭によるナデ、裾部横の刷毛目。
2	土師器・甕	(19.0)	—	—	②①③④⑥	②	黄橙	口縁部 1/4	外面口縁横、括れ縦、胴部横の刷毛目、一部吸炭。内面口縁横の刷毛目胴部ナデ。
3	土師器・甕	(18.3)	—	—	②③①④⑥	②	橙	口縁部 1/8	外面口縁横から括れ縦の刷毛目、胴部横の刷毛目、吸炭。内面口縁横の刷毛目、胴部ナデ。二次加熱。
4	土師器・台付甕	(18.1)	—	—	①③②⑥④	②	橙	口縁部 1/10	外面口縁横のナデ、括れ部縦、胴部斜、肩部横の刷毛目。内面口縁部横のナデ、胴部指頭によるナデ、ナデツケ。全面吸炭。
5	土師器・台付甕	—	—	11.2	⑥①②③	②	浅黄橙	台部のみ	外面胴部、脚部下位縦の刷毛目、脚部上位ナデ。内面胴部底面ナデ、脚天井部、木口状工具によるナデツケ。下位横もしくは斜のナデ。
6	土師器・台付甕	—	—	(11.5)	①③②④	②	浅黄橙	台部のみ 1/4	外面縦のケズリの後ナデ。内面ナデ。赤色化。二次加熱。
7	土師器・台付甕	(23.2)	—	—	①②③④	②	橙	上位 1/4	外面横の刷毛目、後口唇部キザミ目、胴部ナデが加えられる。全面煤付着。内面口縁部横の刷毛目、胴部ナデ。
8	土師器・壺	(24.9)	—	—	⑥①③④②	②	橙	口縁部 1/10	表面磨滅、二重口縁下端に刻み目。内面吸炭。
9	土師器・壺	(19.3)	—	—	②①⑥④	②	橙	口縁部 1/6	全面ナデ。
10	土師器・壺	—	—	(10.5)	②①③④⑥	②	浅黄橙	底部 2/3	外面縦のミガキ様ナデ、底面ケズリの後周辺部ナデ。内面接合部横の木口状工具によるナデ、底面ナデ。
11	土師器・壺	—	—	—	②③①④	②	浅黄橙	—	
12	土師器・壺	—	—	—	③②①④	②	浅黄橙	—	

**83号住居跡** K-17からL-16・17グリッドに亘って位置する。第二確認面からの検出である。  
 (第207図) 北辺3.82m、東辺4.00m、南辺3.86m、西辺3.84mを計る。東西両辺が屈曲している  
 (第208図) ため、かなり不整形ではあるが、方形を基本とした形態を呈すると思われる。北辺の軸  
 (第209図) 方位は、N-72°-Wを示す。



第207図 C区83号住居跡

壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。掘り込み確認面から床面までの深さは、50cm前後である。床面は、やや凹凸がみられるものの、ほぼ水平面を成し、安定している。

炉は、竪穴中央に設けられている。台形を呈し、長辺38cm、短辺20cm、長さ122cmを計る。焼土は、厚さ3cm程である。

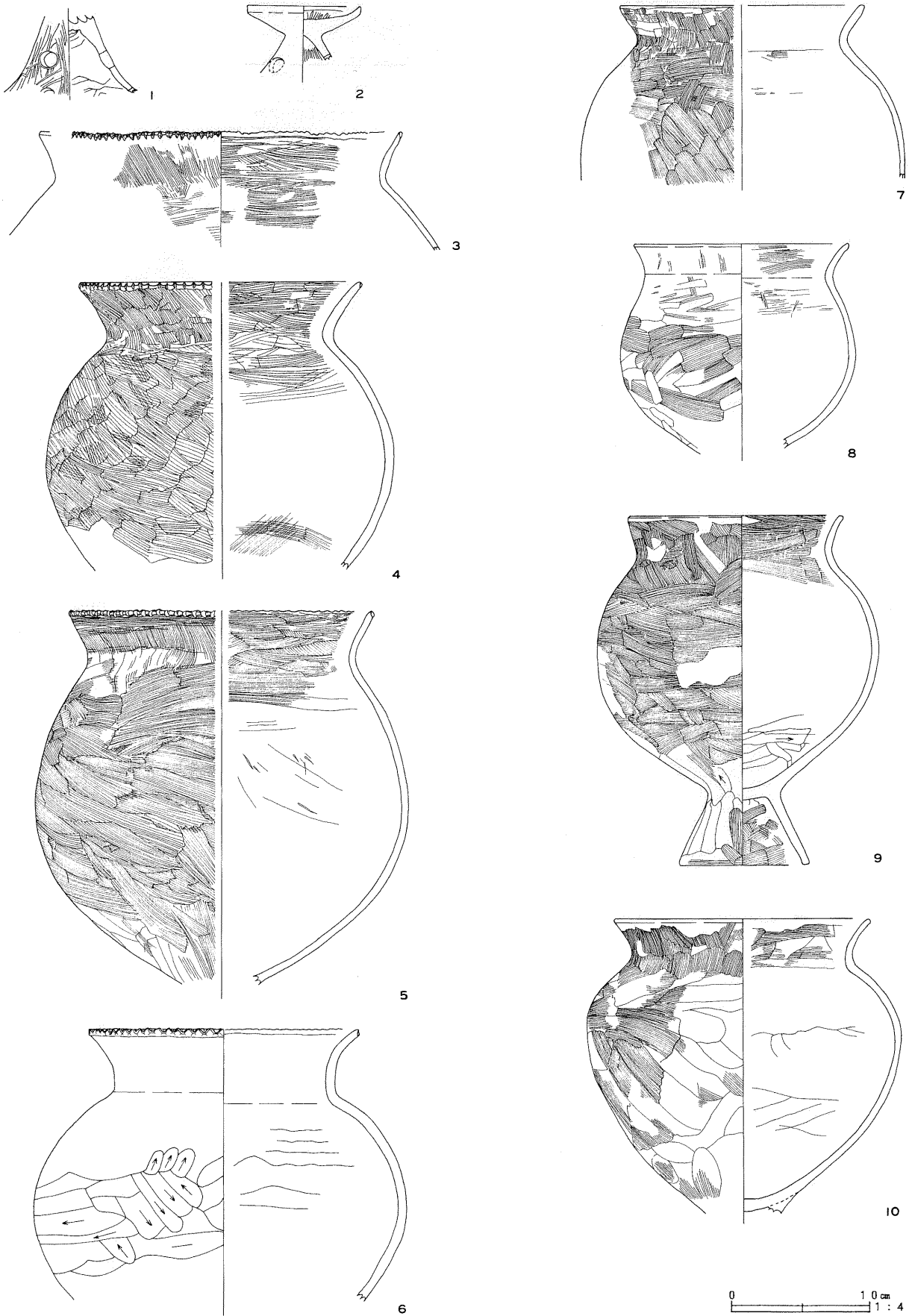
覆土は、下層が、炭化物粒（下位では層を成す）を含む灰色粘土層（第2層）、上層が粘土ブロックを含むぶい黄色シルト層（第1層）である。

遺物は、第2層中からの出土であり、床面に接するものが多い。土師器高杯（1）、器台（2）、甕類（3～15）、壺類（16～21）、土錘（22）、砥石（23）等が出土している。

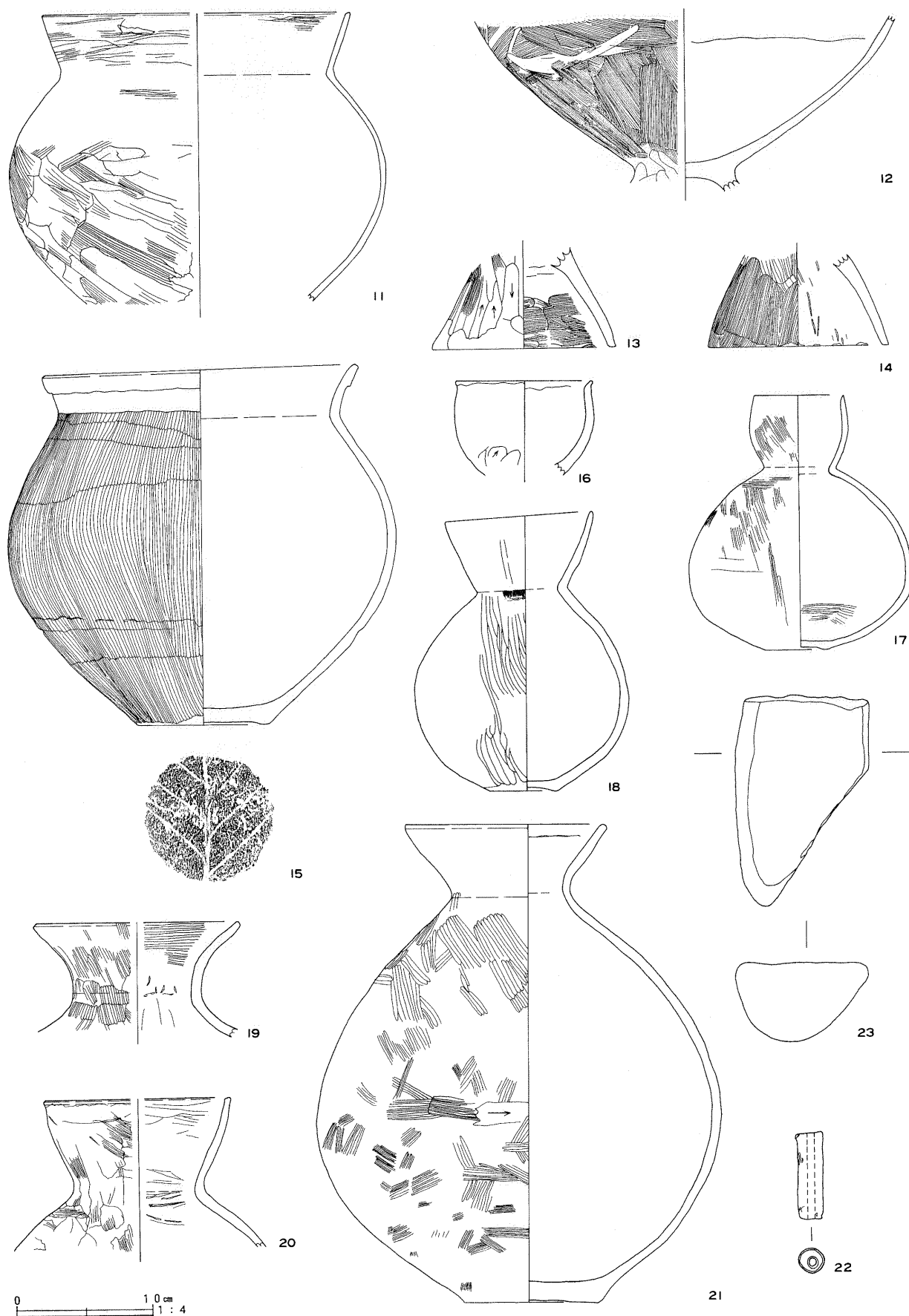
**84号住居跡** S-19グリッドに位置する。第二確認面下からの検出である。

(第210図) 遺構の形態・規模等は一切不明であるが、遺物の出土面が踏み固められ、ほぼ水平面を成していたため、住居跡の床面である可能性が高い。

遺物は、炭化物とともに押し潰れ、一ヶ所に集中していた。土師器高杯（1）、台付甕（1～3）が出土している。



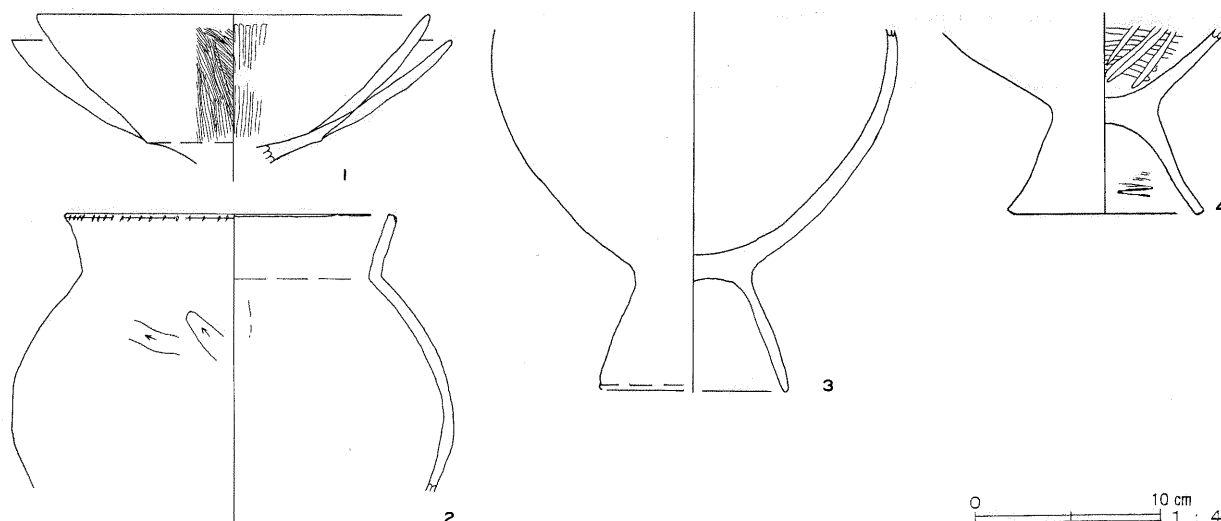
第208図 C区83号住居跡出土遺物(1)



第209图 C区83号住居迹出土遗物(2)

第108表 C区83号住居跡出土遺物観察表(第208・209図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・高杯	—	—	—	①②④③	②	にぶい橙	脚部1/2	脚部外面縦のミガキ後穿孔、下半部斜のミガキが加わる。内面縦のナデツケ、裾部横のナデ。
2	土師器・器台	8.2	—	—	①③⑥	②	橙	器受部と脚部の一部	受上部内面放射状ミガキ。脚部内面縦方向のミガキ様ナデ。外表面大部分磨滅。
3	土師器・甕	(26.3)	—	—	⑥③①	②	橙	口縁部1/6	外面口縁部～括れ部縦、肩部横の刷毛目後口唇部刻み目。内面口縁部～肩部横の刷毛目。
4	土師器・台付甕	(20.3)	—	—	①②③⑥	②	にぶい橙	台部欠	胴部外面下位横の後上位横から斜の刷毛目、その後口縁部縦の刷毛目の後口唇部刷毛目による刻み。内面口縁部から肩部まで横の刷毛目、中位横の丁寧なナデ、下位縦の刷毛目。二次加熱。
5	土師器・台付甕	(22.3)	—	—	⑥①③④	②	赤褐	台部欠1/2	外面中位斜、括れ部～口縁及び中位以下縦の刷毛目の後、口唇部及び肩部に横の刷毛目、下位は縦のナデが加わる、その後口唇部押捺、中位以上煤付着。内面口縁～肩部横の刷毛目、胴上位はケズリ様ナデ、下位は横のナデ、中位以下炭化物付着。二次加熱。
6	土師器・台付甕	19.7	—	—	①②④⑥	②	明赤褐	底部欠	外面口縁から肩部横のナデ、中位横のケズリの後斜のケズリ、下位斜のナデ。全面に煤が付着し、下位は剥落した部分多い。内面ナデ、胴部上位に輪積み痕を残す、下位炭化物付着。
7	土師器・台付甕	(17.6)	—	—	⑥①②③	②	にぶい褐	口縁部1/3	外面口縁部横の刷毛目の後縦の刷毛目、一部横のナデが加わる。肩部横、中位斜の刷毛目。内面口縁部～括れ部横のナデ、胴部縦横のナデ、全面吸炭。胴部内面炭化物付着。二次加熱。
8	土師器・台付甕	15.7	—	—	①②④⑥	②	赤褐	台部欠	外面口縁～肩縦の刷毛目の後、口縁は横のナデ、肩は横の木口状工具によるナデが加わる。中位は横の刷毛目。下位は斜の刷毛目の後縦のナデが加わる。外面全体に煤付着。吸炭。二次加熱。内面口縁横の刷毛目、肩木口状工具による横のナデ、以下縦横のナデ、内面炭化物付着。
9	土師器・台付甕	15.6	20.7	9.4	①②③④⑥	②	にぶい橙	ほぼ完形	外面口唇部横の刷毛目、一部横のナデ、括れ部縦の刷毛目、胴部上位横の刷毛目、剥落した部分多い、中位横の刷毛目の後一部横のナデ、下位～脚縦の刷毛目の後縦のケズリ、脚裾部内外面横の刷毛目。内面は脚内面上位へラ状工具によるナデ、底部ナデツケ、下位木口状工具によるナデ、中位ナデ、上位木口状工具によるナデ、括れ部横の刷毛目、口唇部横の刷毛目、一部横のナデ。外面上半煤、炭化物付着。内面ほぼ全面炭化物付着。二次加熱。
10	土師器・台付甕	18.4	—	—	①②③⑥	②	にぶい黄褐	台部欠4/5	外面口唇部横のナデ、括れ部縦の刷毛目、肩部横の刷毛目、中位斜の刷毛目、底部縦の刷毛目。内面口唇部横のナデ、口縁部横の刷毛目、上位横のナデ、中位斜のナデツケ、下位縦のナデツケ。外面上位一部煤付着。外面中位以下二次加熱による剥落。胴部内面炭化物付着。脚との接台面ナデ。
11	土師器・台付甕	(22.5)	—	—	③①④⑥	②	にぶい褐	2/5	外面口縁部横の刷毛目、肩部横の刷毛目の後ナデが加わる、全体に磨滅、中位～下位斜の刷毛目、煤付着、剥落した部分多い。内面口縁部横の刷毛目、胴部ナデ、炭化物付着。二次加熱。
12	土師器・台付甕	—	—	—	①③②⑥	②	浅黄橙	胴部底面1/2	外面胴部刷毛目、脚部縦及び斜のケズリ様ナデ。内面胴部全面ナデ、炭化物付着(底面以外)。脚天井部ナデツケ。二次加熱。
13	土師器・台付甕	—	—	13.4	①②③④⑥	②	にぶい黄橙	台部のみ	外面上位刷毛目、下位ケズリ。内面上位指頭によるナデツケ、下位横のケズリ。内外面共裾部横のナデ、端部矩形。
14	土師器・台付甕	—	—	13.0	①③④②⑥	②	にぶい橙	台部のみ	外面縦の刷毛目、内面横又は斜のナデ、端部矩形。内外面共吸炭。二次加熱。
15	土師器・甕	22.8	26.4	9.3	③②①⑥④	②	浅黄橙	一部欠	胴部外面縦のミガキ。内面横のナデ。口縁部内外面共横のナデ。木の葉底。
16	土師器・鉢	10.5	—	—	①②③	②	明褐灰	底部欠	口縁部内外面未調整。体部外面ケズリの後ナデ、さらに水拭き加わる。内面ナデ。
17	土師器・壺	6.5	18.7	4.2	③⑥①④②	②	褐灰	完形	外面口縁部斜、肩部横、上半縦の刷毛目、中央一部横のケズリ、下位縦のミガキ様ナデ、表面磨滅した部分多い。内面底部付近木口状工具によるナデ。他は表面磨滅により不詳。
18	土師器・壺	10.9	20.4	4.7	⑥③②④①	②	にぶい黄橙	2/3	括れ部のみ刷毛目残る。外面ミガキ様ナデ、内面ナデ。
19	土師器・壺	(14.6)	—	—	②①④③	②	にぶい橙	頸部のみ	胴部内面表面指頭によるナデ。表面剥離した部分多い。
20	土師器・壺	(13.6)	—	—	⑥①②④	②	にぶい赤褐	口頸部のみ	口唇部横のナデ後口唇再調整。外面縦の刷毛目の後横のナデ、一部黒斑。内面口縁部～括れ部横のナデ。内面肩部横のナデツケ。
21	土師器・壺	(14.4)	35.0	9.8	③①④⑥	②	にぶい橙	一部欠	口縁部横のナデ。胴部外面上位縦のナデ及び縦のミガキ、中位横の刷毛目及び横のケズリ、下位横、斜のケズリの後ナデ。胴部内面ナデ。全面吸炭。
22	土錘	長さ 6.4 径 1.9 孔径 0.6						完形	
23	砥石	長さ 15.3 幅 9.7 厚さ 5.7						—	一部に煤付着。
24	窯体	—	—	—	—	—	—	—	写真のみ。図なし。



第210図 C区84号住居跡出土遺物

第109表 C区84号住居跡出土遺物観察表 (第210図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・高杯	長23.8 短21.2	—	—	①②④⑥	②	橙	杯部のみ	杯部は楕円形を呈し、狭部の口唇部は盛り上がる。口唇部横ナデ。体部外面刷毛目、内面ミガキ、底面ケズリの後ナデ。内外面共赤色化、一部吸炭。二次加熱により表面剥落した部分が多い。
2	土師器・甕	17.9	—	—	③①②④	②	浅黄橙	上半部1/2	外面口縁部ナデの後口唇部キザミ目。内面全面ナデ。全体に吸炭、煤・炭化物付着、下位赤色化。
3	土師器・高杯	—	—	10.3	⑥③②①④	②	にぶい黄橙	下位のみ1/2	胴部内外面共ナデ。脚部外面本口状工具によるナデ、内面横のケズリ様ナデ。外面吸炭、赤色化、煤付着。二次加熱。
4	土師器・台付甕	—	—	10.4	③②①④⑥	②	灰白	台部のみ	外面ナデ。内面胴部底面ナデツケ、下位ミガキ、脚部ヘラ先によるナデ、ナデツケ。外面赤色化、吸炭、内面炭化物付着。

## 2 土坑

C区における土坑は、平成14年度・第5次調査で、67号から117号までの51基が調査されている。大部分が、第一確認面からの検出である。住居跡を切断しているものもあるが、多くは西側に集中し、土坑同士の重複もみられる。また、墓坑以外では、遺物の出土が少なく、時期の不明瞭なものが多い。遺跡全体では、その形態から、以下の5タイプに分類されている。

**1タイプ** 小型で浅く、概ね円形を呈するタイプである。81号、92号、114号各土坑が含まれる。

**81号土坑** (第212図) (第214図) は、F-16グリッドに位置している。卵形を呈し、径95×83cmを計る。確認面から深さ10cm前後で平坦面を成すが、中央部にはさらに、長円形の掘り込みをもつ。掘り込みの径54×39cm、深さ15cmを計る。底面は、ほぼ水平である。覆土は、上位2層が黄褐色粘土層であり、下位2層がオリブ褐色粘土層である。いずれもマンガン粒及び褐灰色粘土粒を含み、その含有率によって分層されている。第2層には、炭化物を含む。遺物は、土師器高杯(81-1)が出土している。

**92号土坑** (第135図) は、D-19グリッドに位置している。41号住居跡を削平している。円形を呈し、径94×92cm、確認面からの深さは、20cmを計る。底面は、ほぼ水平である。覆土は、マンガン粒を含む黄褐色粘土層である。遺物は、出土していない。

**114号土坑** (第214図) G-20グリッドに位置している。円形を呈し、径1.03×1.02mを計る。底面は、東に向けてやや傾斜する。確認面からの深さは、20cmを計る。遺物は、出土していない。

**2タイプ** 小型で浅く、長方形を呈するタイプである。84号、113号の両土坑が含まれる。

**84号土坑** (第143図) は、F-17・18グリッドに位置している。47号住居跡を削平し、85号土坑に切断されている。長方形を呈し、 $(1.07 + \alpha) \times 1.05$ m、確認面からの深さは、30cmを計る。底面は、ほぼ水平である。覆土は、酸化鉄及びマンガン粒を含む灰黄色粘土層である。遺物は、出土していない。

**113号土坑** (第214図) は、G-20グリッドに位置している。長方形を呈し、1.35×0.83m、確認面からの深さは、20cmを計る。底面は、ほぼ水平である。覆土は、多量の酸化鉄及びマンガン粒を含む灰黄色粘土層である。遺物は、出土していない。

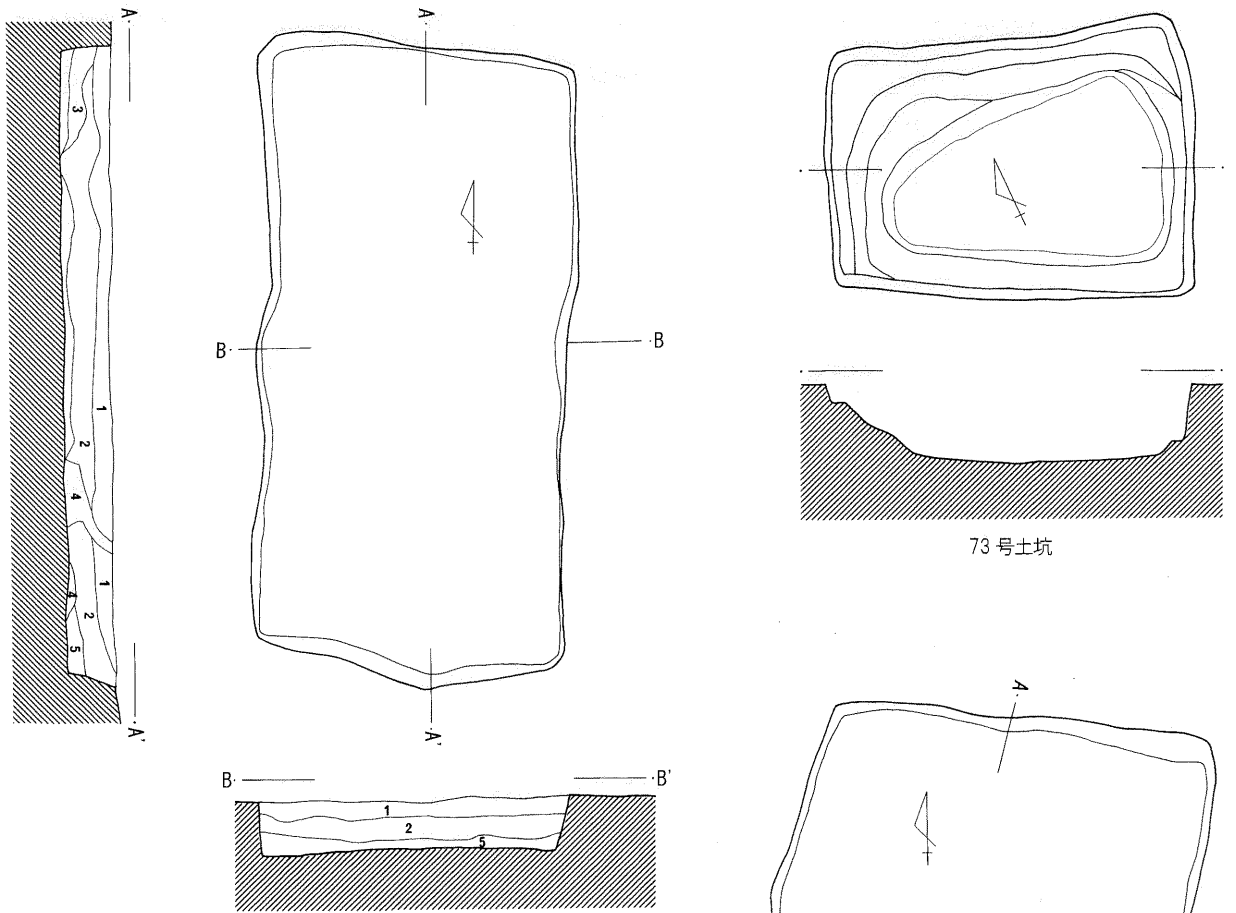
**3タイプ** 小型で深く、円形を呈するタイプである。77号、96号、105号、106号、107号、108号、109号、110号、111号、112号の各土坑が含まれる。

**77号土坑** (第205図) は、L-16グリッドに位置している。82号住居跡を切断している。円形を呈し、径1.04×1.00m、確認面からの深さは、60cmを計る。底面は、ほぼ水平である。覆土は、上位から、多量の酸化鉄粒を含むオリーブ色シルト層 (第1層)、多量のマンガン粒を含む灰色粘土層 (第2層)、黄褐色粘土層 (第3層)、少量の酸化鉄・マンガン粒を含む灰色粘土層 (第4層)、黄褐色シルト層 (第5層)、黄褐色粘土層 (第6層)、明黄褐色シルト層 (第7層)、黄灰色粘土層 (第8層) が堆積している。遺物は、出土していない。

**96号土坑** (第215図) (第216図) は、D-19グリッドに位置している。土坑の平面形態は円形を呈し、径1.34×1.29m、深さ1.10mを計る。底面の中央部は、さらに径88×80cm、深さ14cmの範囲で掘り込まれ、この底面に早桶が据えられていた。早桶の残存高は、78cmである。覆土は、上位から、少量の焼土粒を含む灰色シルト層 (第1層)、部分的に黄灰色粘土ブロック及び炭化物を含むぶい黄色シルト層 (第2層)、明黄褐色シルトブロックを含む黄灰色粘土層 (第3層)、炭化物をわずかに含む褐灰色粘土層 (第4層) が堆積している。遺物は、早桶の底板上から、肥前系磁器椀 (1)、寛永通宝 (2~18)、数珠玉3点のうち、透明ガラス2点 (19・20)、緑色ガラス1点 (21)、及び歯 (22) が出土している。

**105号土坑** (第215図) は、D-19グリッドに位置している。土坑の平面形態は円形

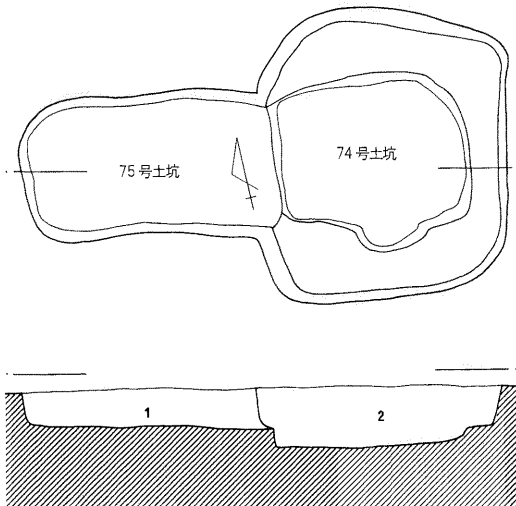




72号土坑

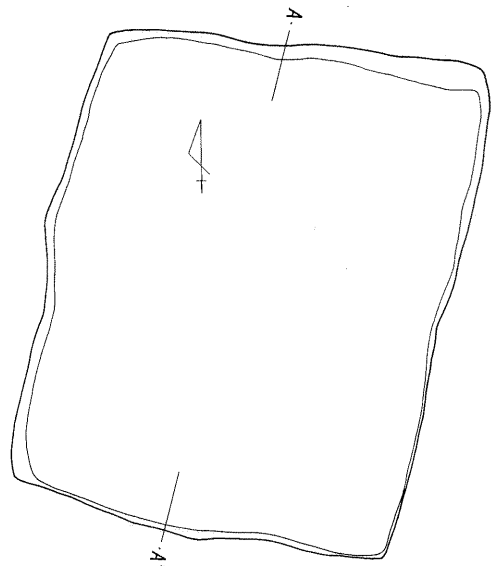
73号土坑

- 1 灰黄褐色(10YR 5/2)粘土。マンガン粒を多量含む。
- 2 にぶい黄褐色(10YR 5/3)粘土。マンガン粒を多量含む。
- 3 にぶい黄褐色(10YR 5/3)粘土。マンガン粒を多量、炭化物、灰色粘土を少量含む。
- 4 灰色(N 6/0)粘土。酸化鉄を多量、炭化物を少量含む。
- 5 灰褐色(7.5YR 4/2)粘土。灰色粘土を多量、マンガン粒を少量含む。



74号・75号土坑

- 1 褐灰色(10YR 5/1)シルト。マンガン粒、酸化鉄を含む。
- 2 褐灰色(10YR 5/1)シルト。マンガン粒(大)、酸化鉄を多量含む。



78号土坑

- 1 黄褐色(10YR 5/6)粘土。マンガン粒を多量、褐灰色粘土粒、炭化物を少量含む。
- 2 にぶい黄褐色(10YR 5/4)粘土。マンガン粒を多量、褐灰色粘土粒を含む。
- 3 にぶい黄褐色(10YR 5/3)粘土。マンガン粒を多量、褐灰色粘土塊を含む。

0 L=28.200m 2m 1:60

第211図 C区土坑(1) (72号・73号・74号・75号・78号)

を呈し、径1.12×1.10m、深さ13cmを計る。底面の中央部は、さらに径94×90cm、深さ7cmの範囲で掘り込まれ、この底面に早桶が据えられていた。早桶の底板部分及び上部一部のみの残存であり、外掘り土坑は削除された状況である。遺物は、早桶の底板上から、人骨（粉状）とともに古銭（寛永通宝と思われるが、錆が強固で判読不能）が4枚出土している。

**106号土坑**（第215図）（第217図）は、D-19グリッドに位置している。土坑の平面形態は円形を呈し、径68×66cm、深さ7cmを計る。土坑内底面中央部の掘り込みと、据えられていた早桶の底面のみの残存であり、外掘り土坑は削除された状況である。遺物は、早桶の底板上から、寛永通宝（106-1～11）、人骨（粉状）が出土している。

**107号土坑**（第215図）は、E-19グリッドに位置している。土坑の平面形態は円形を呈し、径1.30×1.24m、深さ25cmを計る。底面の中央部は、さらに径105×97cm、深さ4cmの範囲で掘り込まれ、この底面に早桶が据えられていた。遺物は、早桶の底板上から、人骨（粉状）とともに古銭（寛永通宝と思われるが、錆が強固で判読不能）が1枚、数珠玉のうち真珠玉（1～3）、透明ガラス（4・5）が出土している。

**109号土坑**（第215図）（第217図）は、D-19グリッドに位置している。土坑の平面形態は円形を呈し、径1.14×1.12m、深さ35cmを計る。底面の中央部は、さらに径84×79cm、深さ7cmの範囲で掘り込まれ、この底面に早桶が据えられていた。遺物は、早桶の底板上から、人骨（粉状）とともに寛永通宝（109-1～8）が出土している。

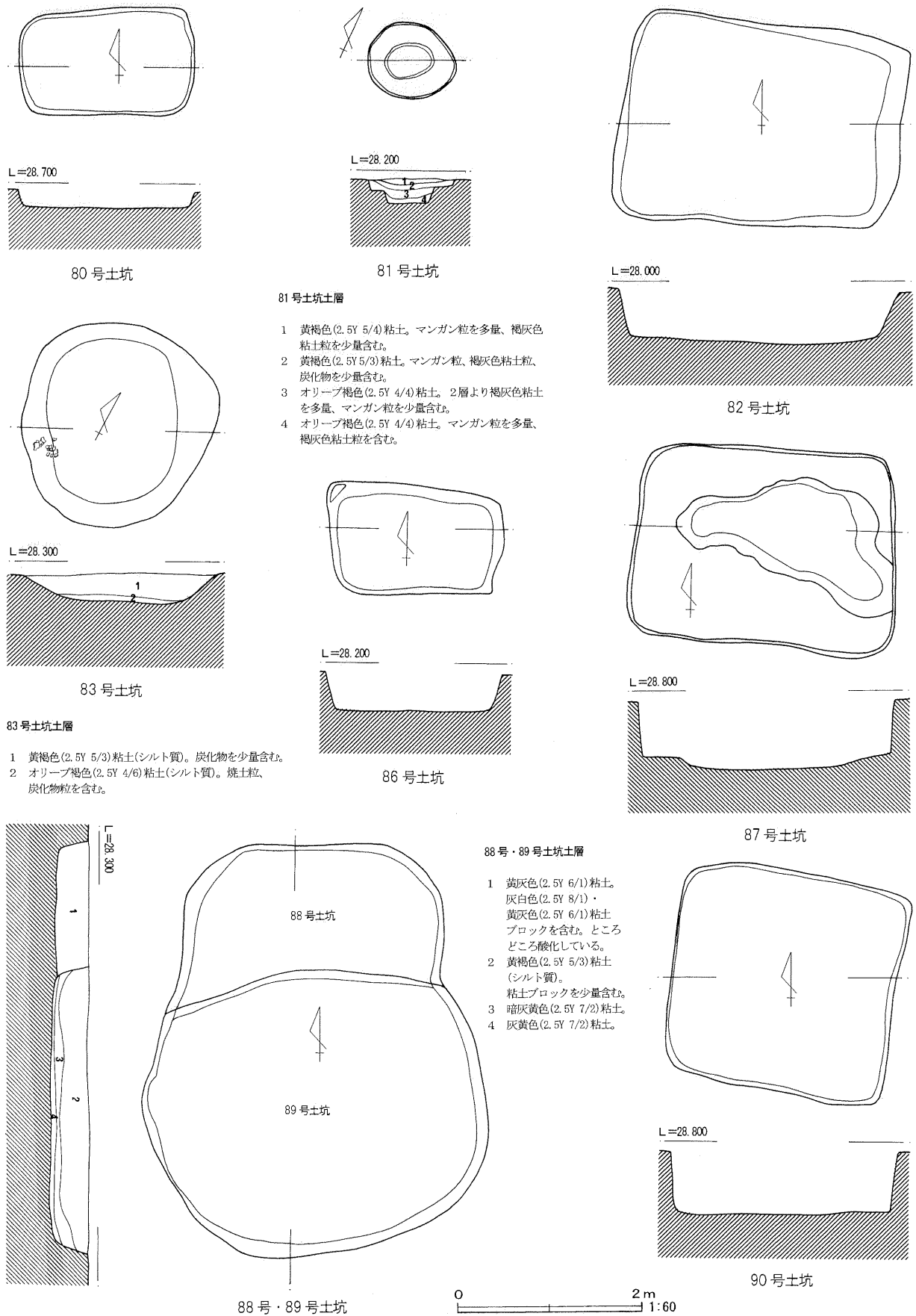
**110号土坑**（第215図）（第218図）は、E-19グリッドに位置している。土坑の平面形態は円形を呈し、径1.24×1.24m、深さ23cmを計る。底面の中央部やや北東寄りには、さらに径62×62cm、深さ8cmの範囲で掘り込まれ、この底面に早桶が据えられていた。遺物は、早桶の底板上から、人骨（粉状）とともに寛永通宝（109-1～8）が出土している。

**111号土坑**（第215図）は、E-19グリッドに位置している。土坑の平面形態は長円形を呈し、径1.15×1.00m、深さ12cmを計る。底面の中央部は、さらに径86×90cm、深さ2cmの範囲で掘り込まれ、この底面に早桶が据えられていた。早桶の底板部分及び上部一部のみの残存であり、外掘り土坑は、ほぼ削除された状況である。遺物は、出土していない。

**112号土坑**（第215図）（第214図）は、D-20グリッドに位置している。土坑の平面形態は円形を呈し、径1.40×1.35m、深さ46cmを計る。底面の中央部やや南寄りには、さらに径90×84cm、深さ5cmの範囲で掘り込まれ、この底面に早桶が据えられていた。遺物は、早桶の底板上から人骨（粉状）、早桶外の覆土内から耳鍋（112-1）が出土している。

**4タイプ** 大型で深く、方形もしくは長方形を呈するタイプである。

第1グループは、大型で深く、正方形もしくは正方形に近い長方形を呈するグループで



第212図 C区土坑(2) (80号・81号・82号・83号・86号・87号・88号・89号・90号)

ある。76号、78号、82号、85号、88号、89号、90号、99号、117号各土坑が含まれている。

**76号土坑**（第179図）は、J-15グリッドに位置している。66号住居跡を削平している。台形に近い不整形を呈し、 $2.38 \times 2.20 \sim 2.80$ m、深さ38cmを計る。壁は、北辺以外緩やかなカーブを描き、底面もわずかに弓状となる。覆土は、マンガング粒・酸化鉄を含む褐灰色シルト層である。遺物は、出土していない。

**78号土坑**（第211図）（第214図）は、D-15・16グリッドに位置している。長方形を呈し、 $4.14 \times 3.22$ m、深さ32cmを計る。壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、底面は凹凸がみられる。覆土は、上位から、多量のマンガング粒及び少量の褐灰色粘土粒・炭化物を含む黄褐色粘土層（第1層）、多量のマンガング粒及び褐灰色粘土粒を含むにぶい黄褐色粘土層（第2・3層）である。遺物は、土師器小型壺（78-1）が出土している。

**82号土坑**（第212図）（第214図）は、F-17グリッドに位置している。長方形を呈し、 $3.00 \times 2.22$ m、深さ50cmを計る。壁は、ほぼ垂直に立ち上がるが、東辺は、やや崩れている。底面はわずかに凹凸がみられる。覆土は、多量のマンガング粒・褐灰色粘土ブロックを含む黄褐色粘土層である。遺物は、土師器甕（82-1）が出土している。

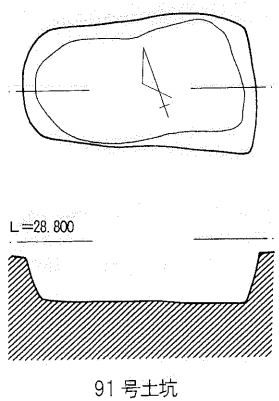
**85号土坑**（第143図）は、F-18グリッドに位置している。47号住居跡を削平し、84号土坑を切断している。ほぼ正方形を呈し、 $2.64 \times 2.84$ m、深さ95cmを計る。壁は、ほぼ垂直に立ち上がるが、南及び西辺は、崩れている。底面はほぼ水平であるが、南西部は、わずかにくぼみをもつ。覆土は、多量のマンガング粒・酸化鉄及び、褐灰色粘土ブロック・粒を含む淡黄褐色粘土層である。遺物は、出土していない。

**88号土坑**（第212図）は、D-18グリッドに位置している。89号土坑に切断されている。隅円の正方形を呈すると思われ、 $1.80 + \alpha \times 2.85$ m、深さ35cmを計る。壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ水平である。覆土は、灰白色粘土及び黄灰色粘土をブロック状に含む黄灰色粘土層（第1層）であり、部分的に酸化鉄が面を成している。遺物は、出土していない。

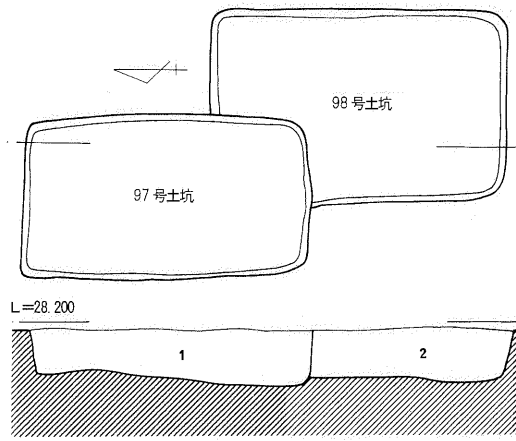
**89号土坑**（第212図）は、D-18グリッドに位置している。88号土坑を切断している。ほぼ隅円長方形を呈し、 $3.70 \times 3.08$ m、深さ40cmを計る。壁は、ほぼ急傾斜を成して立ち上がる。底面はほぼ水平である。覆土は、上層が少量の黄灰色粘土ブロックを含む黄褐色粘土層（第2層）、中層が暗灰黄色粘土層（第3層）、下層が灰黄色粘土層（第4層）が堆積している。遺物は、出土していない。

**90号土坑**（第212図）は、E-18グリッドに位置している。ほぼ正方形を呈し、 $2.47 \times 2.40$ m、深さ65cmを計る。壁は、垂直に立ち上がる。底面はほぼ水平であり、酸化鉄が層を成す部分が多い。覆土は、多量のマンガング粒・酸化鉄及び、褐灰色粘土ブロックを含む灰黄褐色粘土層である。遺物は、出土していない。

**99号土坑**（第213図）は、E-19グリッドに位置している。長方形を呈し、 $2.80 \times 2.05$ m、深さ50cmを計る。壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ水平である。覆土は、



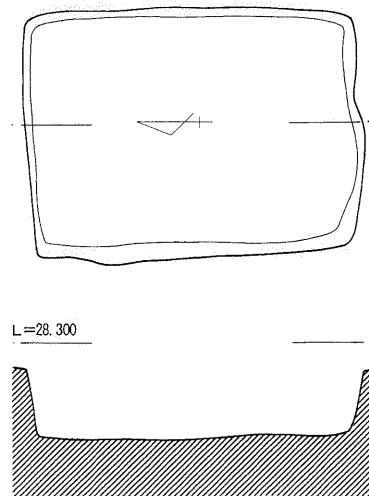
91号土坑



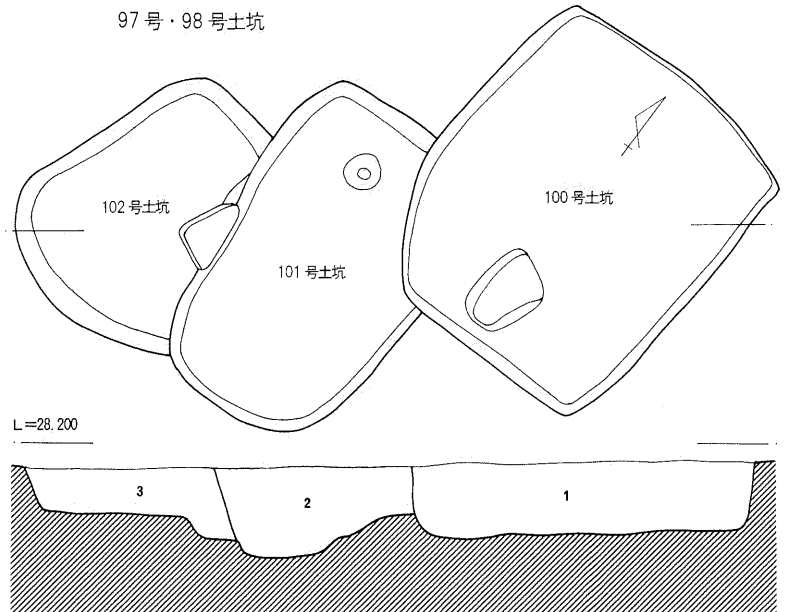
97号・98号土坑

97号・98号土坑土層

- 1 灰黄褐色(10YR 5/2)シルト。長石、酸化鉄、マンガン粒、黒褐色(2.5Y 3/1)シルトブロック、にぶい黄色(2.5Y 6/4)粘土ブロックを多量含む。
- 2 灰黄褐色(10YR 5/2)シルト。長石、酸化鉄、マンガン粒を多量、にぶい黄色(2.5Y 6/4)粘土ブロック、黒褐色(2.5Y 3/1)シルトブロックを少量含む。



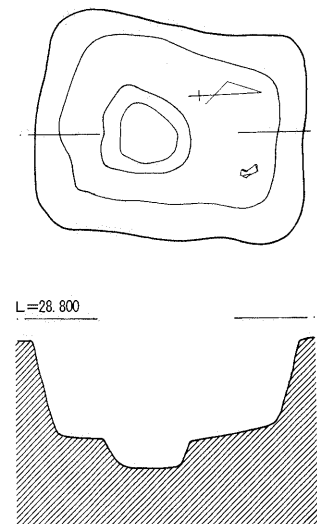
99号土坑



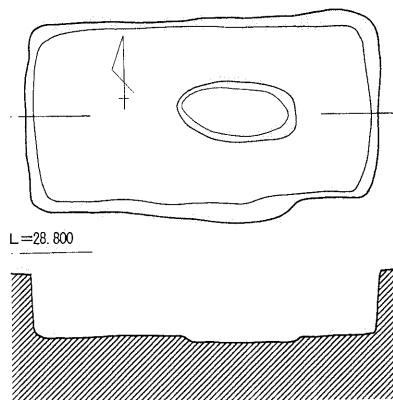
100号・101号・102号土坑

100号・101号・102号土坑土層

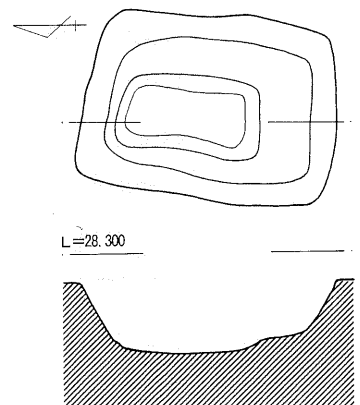
- 1 黄褐色(2.5Y 5/3)粘土。暗灰黄色(2.5Y 4/2)粘土ブロック、黒褐色(2.5Y 3/1)粘土ブロック、酸化鉄、マンガン粒を多量含む。
- 2 暗灰黄色(2.5Y 6/2)粘土。黄褐色(2.5Y 5/3)粘土ブロック、黒褐色(2.5Y 3/1)粘土ブロック、酸化鉄、マンガン粒を多量含む。
- 3 黒褐色(2.5Y 3/1)粘土。暗灰黄色(2.5Y 4/2)粘土ブロック、黄褐色(2.5Y 5/3)粘土ブロック、酸化鉄、マンガン粒を多量含む。



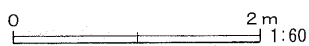
103号土坑



104号土坑



108号土坑



第213図 C区土坑(3) (91号・97号・98号・99号・100号・101号・102号・103号・104号・108号)

多量のマンガン粒・酸化鉄及び、灰黄褐色粘土ブロックを含む褐灰色粘土層である。遺物は、出土していない。

**117号土坑**（第214図）は、G-20グリッドに位置している。台形を呈し、(1.85～2.40)×1.96m、深さ60cm前後を計る。壁は、ほぼ急傾斜を成して立ち上がる。底面は、ほぼ水平であるが、中央部がやや盛り上がる。覆土は、多量の酸化鉄・マンガン粒を含む褐灰色粘土層である。遺物は、20cm大の礫6個、長さ50cm、幅15cmの緑泥片岩が出土している。

第2グループは、大型で深く、正方形もしくは長方形を呈し、底面の中央もしくは中央付近に小ピットをもつグループである。69号、73号、74号、87号、100号、101号、102号、103号、104号、108号、116号各土坑が含まれている。

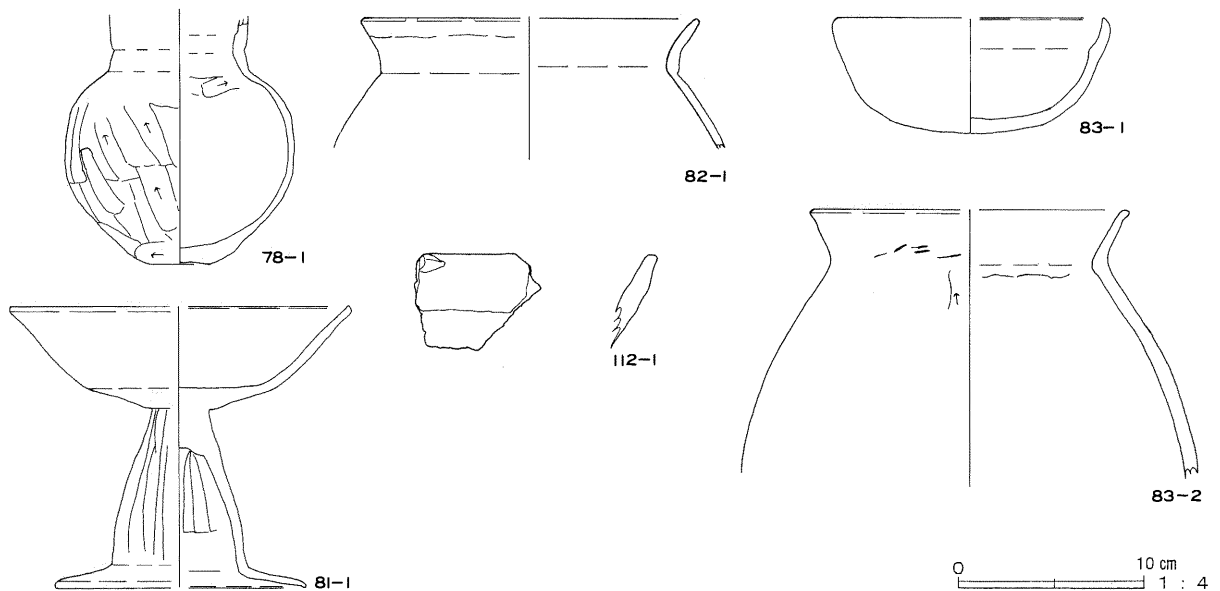
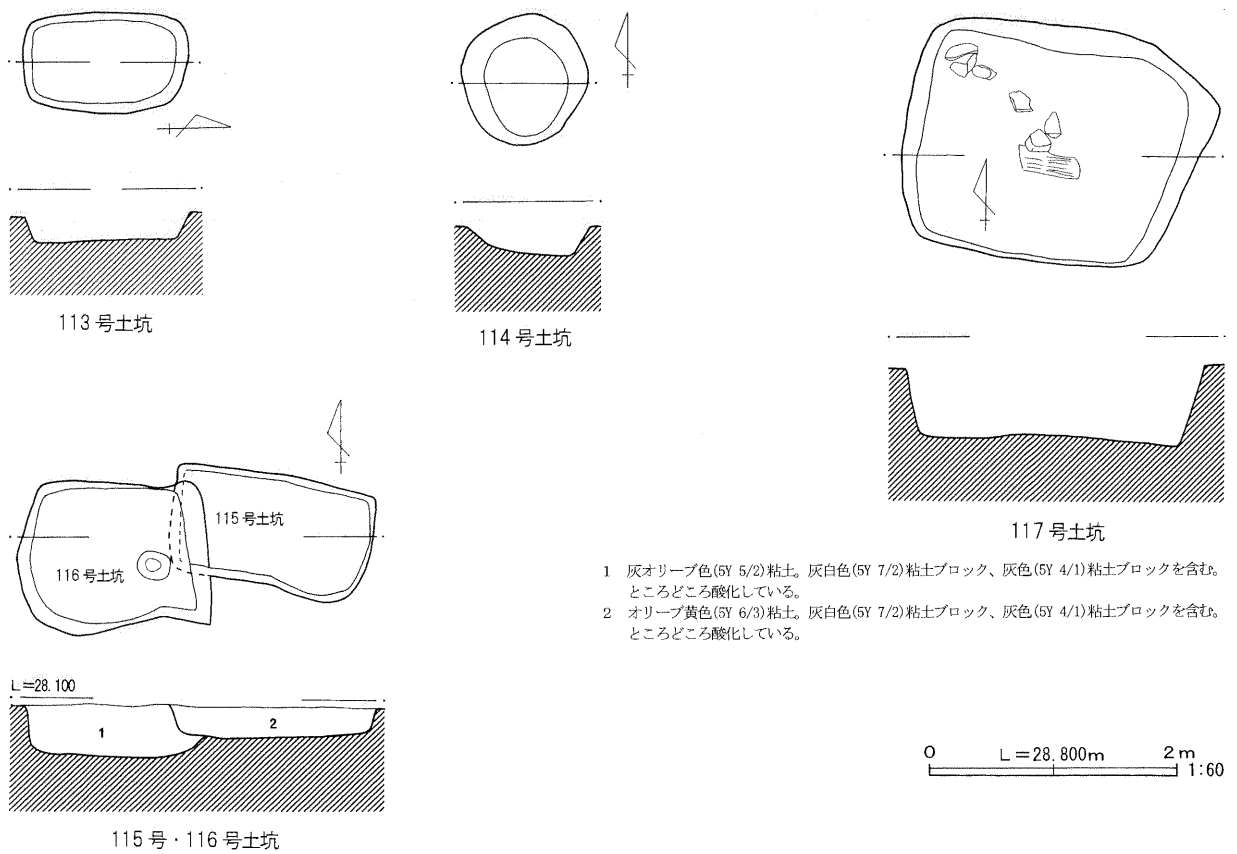
**69号土坑**（第137図）は、E-13グリッドに位置している。42号・43号両住居跡を切断している。70号土坑を切断している。長方形を呈し、2.43×1.48m、深さ35cmを計るが、北壁中央部が20cmほど台形に張り出す。壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。底面は、緩く波状を呈し、中央部にくぼみをもつ。覆土は、多量の酸化鉄及び、灰白色粘土ブロック・マンガン粒を含む灰色粘土層（第8層）である。遺物は、出土していない。

**73号土坑**（第211図）は、I-15グリッドに位置している。台形を呈し、(1.95～2.33)×3.00mを計る。壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。底面は、深さ45cm前後で平坦面をもち、中央部は、(1.60～0.85)×3.38mの範囲で、さらに10～15cm窪む。覆土は、多量の酸化鉄及びマンガン粒を含む灰白色粘土層である。遺物は、出土していない。

**74号土坑**（第211図）は、I-15グリッドに位置している。75号土坑を切断している。北辺がやや張り出すため不整ではあるが、ほぼ正方形を呈し、2.00×2.05mを計る。壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。底面は、深さ30cm前後で平坦面をもち、中央部は、1.60×1.10mの範囲（南側中央部が直径60cm、半円形に張り出す）で、さらに8～15cm窪む。覆土は、多量の酸化鉄及びマンガン粒を含む褐灰色シルト層（第2層）である。遺物は、出土していない。

**87号土坑**（第212図）は、C-18グリッドに位置している。長方形を呈し、2.85×2.16mを計る。壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。底面は、深さ60cm前後で平坦面をもち、中央部から東側にかけて、2.50×1.10mの範囲で、さらに15cm前後窪む。覆土は、多量の酸化鉄及びマンガン粒を含む灰褐色シルト層である。遺物は、出土していない。

**100号土坑**（第213図）は、E-19グリッドに位置している。101号土坑を切断している。南西隅が丸みをもちやや不整形であるが、ほぼ長方形を呈し、2.80×2.44mを計る。壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。底面は、深さ60cm前後で平坦面をもち、中央部南隅では、66×48cmの範囲で、さらに5cm前後窪む。覆土は、多量の暗灰黄色粘土ブロック・黒褐色粘土ブロック・酸化鉄・マンガン粒を含む黄褐色粘土層（第1層）である。遺物は、出土していない。



第214図 C区土坑(4) (113号・114号・115号・116号・117号) 土坑出土遺物(1)

101号土坑 (第213図) は、E-19グリッドに位置している。102号土坑を切断しているが、100号土坑に切断されている。ほぼ長方形を呈し、2.83×1.80mを計る。壁は、急傾斜を成して立ち上がる。底面は、北側で深さ40cm前後で平坦面をもち、中央部北隅

第110表 C区78号土坑出土遺物観察表 (第214図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・小型壺	—	—	3.3	⑥①②③④	②	橙	2/3	頸部横のナデ。外面肩部ナデ、胴部上位～底面ケズリ、吸炭、赤色化。内面肩部ケズリ、上位ナデ、中位～底面ケズリ様ナデ、吸炭。二次加熱。

第111表 C区81号土坑出土遺物観察表 (第214図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・高杯	(18.3)	15.4	(13.6)	⑥①②③④	②	橙	1/2	杯部全面ナデ。脚部外面面取り様ナデ、裾部横のナデ。内面上位指頭によるナデツケ、下位～裾部横のナデ。一部赤色化。

第112表 C区82号土坑出土遺物観察表 (第214図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・甕	(18.4)	—	—	②①④⑥	②	灰白	口縁部1/3	全面ナデ、煤付着。外面一部炭化物付着。

第113表 C区83号土坑出土遺物観察表 (第214図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・椀	(14.4)	6.3	—	⑥②①③④	②	黄橙	1/3	磨滅した部分が多い。全体にナデ、外底面のみケズリ。
2	土師器・甕	(17.3)	—	—	①③②④⑥	②	橙	上位1/3	胴部外面ケズリ痕。表面磨滅、全面赤色化。二次加熱。

第119表 C区112号土坑出土遺物観察表 (第214図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	内耳鍋	—	—	—	—	②	黒褐	口縁部	内外面吸炭。内耳貼り付けの一部残存。

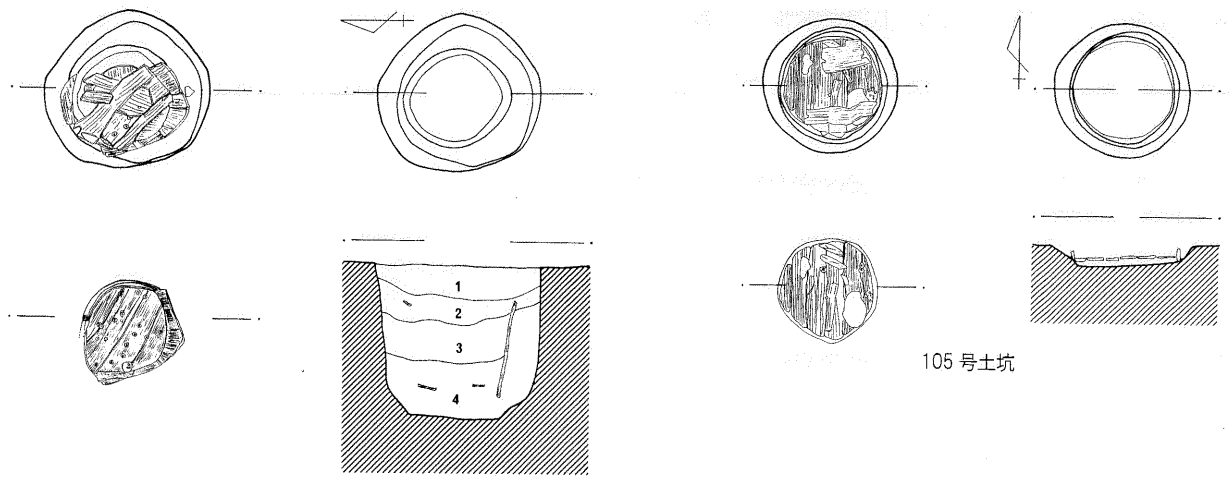
では、円形を呈し径30cm、深さ5cmの小ピットが穿たれている。南側は、徐々に深さを増し、最深部では、深さ74cmを計る。覆土は、多量の黄褐色粘土ブロック・黒褐色粘土ブロック・酸化鉄・マンガン粒を含む暗灰黄色粘土層（第2層）である。遺物は、出土していない。

**102号土坑**（第213図）は、E-19グリッドに位置している。101号土坑に切断されている。南東隅が丸みをもちやや不整形であるが、ほぼ長方形を呈すると思われ、 $2.25 \times (1.83 + \alpha)$  mを計る。壁は、急傾斜を成して立ち上がる。底面は、深さ38cm前後で平坦面をもち、中央部東隅では、 $55 \times (40 + \alpha)$  cmの範囲で、さらに17cm前後窪む。覆土は、多量の暗灰黄色粘土ブロック・黄褐色粘土ブロック・酸化鉄・マンガン粒を含む黒褐色粘土層（第3層）である。遺物は、出土していない。

**103号土坑**（第213図）は、F-19グリッドに位置している。長方形を呈し、 $2.18 \times 1.68$  mを計る。壁は、急傾斜を成して立ち上がる。底面は、深さ70～75cm前後で平坦面をもち、中央部やや南寄りには、ほぼ円形を呈し、径70×65cm、深さ20cmのピットが穿たれている。覆土は、多量の黄褐色粘土ブロック・酸化鉄・マンガン粒を含む灰黄色粘土層である。遺物は、土師器甕小片が出土したのみである。

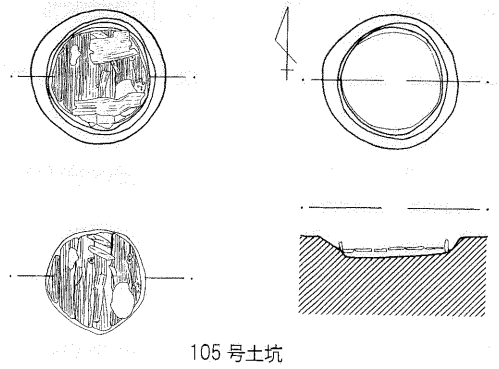
**104号土坑**（第213図）は、G-19グリッドに位置している。長方形を呈し、 $2.88 \times 1.54$  mを計る。壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。底面は、深さ50cm前後で平坦面をもち、中央部やや東寄りには、長円形を呈し、径1.00×0.50m、深さ5cm前後のピットが穿たれている。覆土は、多量の酸化鉄・マンガン粒を含む黄褐色粘土層である。遺物は、出土していない。



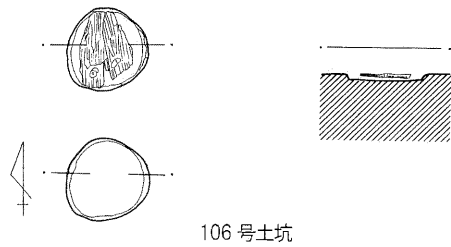


96号土坑

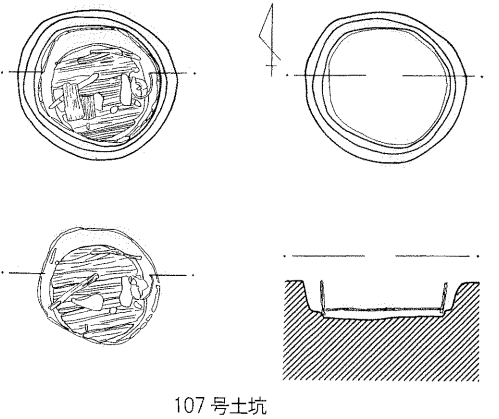
- 1 灰色(7.5Y 5/1)シルト。橙色(5YR 7/8)焼土粒を少量含む。
- 2 にごい黄色(2.5Y 6/4)粘土(シルト質)。部分的に黄灰色(2.5Y 6/1)粘土ブロックを少量、炭化物を微量含む。
- 3 黄灰色(2.5Y 6/1)粘土。明黄褐色(2.5Y 7/6)シルト小ブロック状に少量含む。粒子が極めて粗い。
- 4 褐灰色(10YR 6/1)粘土。炭化物粒を少量含む。



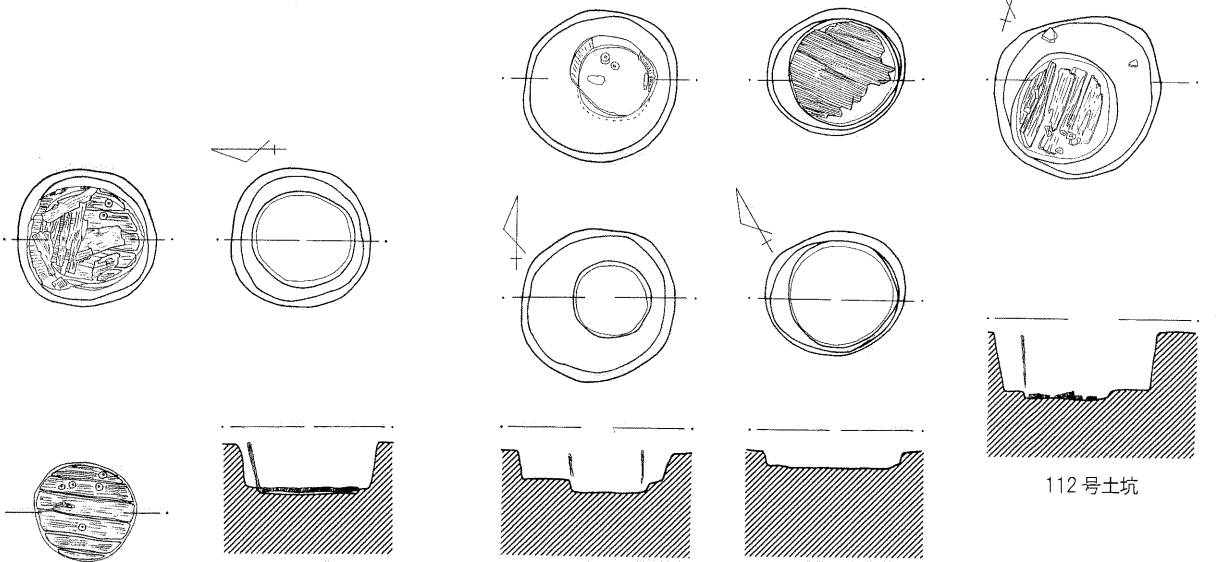
105号土坑



106号土坑



107号土坑

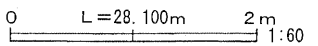


109号土坑

110号土坑

111号土坑

112号土坑



第215図 C区土坑(5) (96号・105号・106号・107号・109号・110号・111号・112号)

**108号土坑**（第213図）は、E-19グリッドに位置している。長方形を呈し、2.04×1.48mを計る。壁は、やや緩傾斜をもって立ち上がる。底面は、深さ40～50cm前後で平坦面をもち、中央部北寄りには、長方形を呈し、1.10×0.65m、深さ10cm前後のピットが穿たれている。覆土は、多量の黄褐色粘土ブロック・酸化鉄・マンガン粒を含む灰黄色粘土層である。遺物は、出土していない。

**116号土坑**（第214図）は、F-20グリッドに位置している。115号土坑に切断されている。長方形を呈し、1.57×1.37mを計る。壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。底面は、深さ35cm前後で平坦面をもち、中央部東寄りには、長円形を呈し、径26×23cm、深さ5cm前後のピットが穿たれている。覆土は、灰白色粘土ブロック灰色粘土ブロックを含むオリーブ色粘土層（第1層）である。遺物は、出土していない。

第3グループは、大型で深く、長方形を呈するグループである。70号、72号、75号、79号、80号、86号、91号、93号、94号、95号、97号、98号、115号各土坑が含まれている。

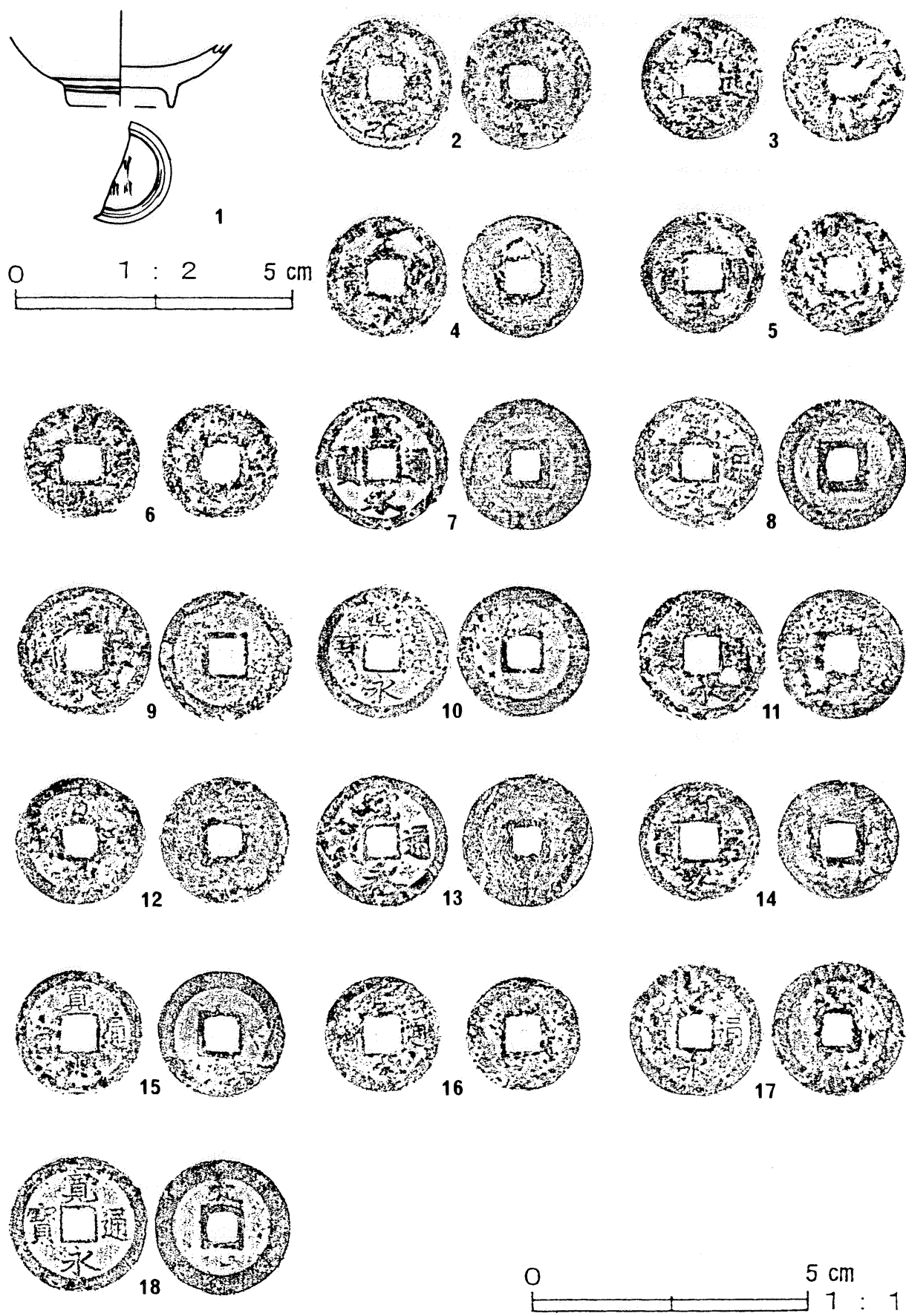
**68号土坑**（第128図）は、Q-12・13グリッドに位置している。34号住居跡を切断している。長方形を呈し、1.62×1.17m、深さ38cmを計る。壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。底面は、ほぼ平坦面をもち、覆土は、灰白色粘土ブロック及び灰色粘土ブロックの混在層である。遺物は、出土していない。

**70号土坑**（第137図）は、E-13グリッドに位置している。42号・44号両住居跡を切断している。69号土坑に切断されている。長方形を呈すると思われ、 $1.05 + \alpha \times 0.98$ m、深さ28cmを計るが、西部では一段高く、深さ5cm前後となる。壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。底面は、緩く波状を呈する。覆土は、多量の酸化鉄及び、帯状の白色軽石粒・マンガン粒を含む灰色粘土層（第7層）である。遺物は、出土していない。

**72号土坑**（第211図）は、F-15グリッドに位置している。54号住居跡を削平している。長方形を呈し、5.28×2.56m、深さ42cmを計る。壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。底面は、ほぼ平坦面をもち、覆土は、上位から、多量のマンガン粒を含む灰黄褐色粘土層（第1層）、多量のマンガン粒を含むにぶい黄褐色粘土層（第2層）、多量のマンガン粒及び少量の灰色粘土ブロック・炭化物を含むにぶい黄褐色粘土層（第3層）、多量の灰色粘土ブロック及び少量のマンガン粒を含むにぶい灰褐色粘土層（第5層）、多量の酸化鉄粒及び少量の炭化物を含む灰色粘土層（第4層）が堆積している。遺物は、出土していない。

**75号土坑**（第211図）は、I-15グリッドに位置している。74号土坑に切断されている。長方形を呈すると思われ、 $2.15 + \alpha \times 1.15$ m、深さ30cmを計る。壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。底面は、緩く波状を呈する。覆土は、多量の酸化鉄及びマンガン粒を含む褐色灰色シルト層（第1層）である。遺物は、出土していない。

**79号土坑**（第132図）は、C-16・17、D-16・17グリッドに位置している。39号住居跡を切断している。長方形を呈し、3.20×1.40m、深さ52cmを計る。壁は、ほぼ



第216图 C区土坑出土遗物(2) 96号

第114表 C区96号土坑出土遺物観察表(第216図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	磁器・碗	—	—	(3.8)	—	①	灰白	底部1/2	肥前系。くらわんか手。高台銘崩れ「大明年製」。
2	寛永通宝	径2.45	孔径0.6	厚さ0.1	—	—	—	—	—
3	寛永通宝	径2.3	孔径0.55	厚さ0.12	—	—	—	—	新
4	寛永通宝	径2.25	孔径0.6	厚さ0.12	—	—	—	—	—
5	寛永通宝	径2.3	孔径0.6	厚さ0.1	—	—	—	—	—
6	寛永通宝	径2.1	孔径0.62	厚さ0.05	—	—	—	—	—
7	寛永通宝	径2.45	孔径0.5	厚さ0.1	—	—	—	—	—
8	寛永通宝	径2.45	孔径0.6	厚さ0.1	—	—	—	—	新
9	寛永通宝	径2.4	孔径0.6	厚さ0.1	—	—	—	—	—
10	寛永通宝	径2.45	孔径0.65	厚さ0.1	—	—	—	—	新
11	寛永通宝	径2.43	孔径0.65	厚さ0.05	—	—	—	—	新
12	寛永通宝	径2.35	孔径0.6	厚さ0.07	—	—	—	—	新
13	寛永通宝	径2.5	孔径0.5	厚さ0.12	—	—	—	—	新
14	寛永通宝	径2.25	孔径0.6	厚さ0.1	—	—	—	—	—
15	寛永通宝	径2.35	孔径0.6	厚さ0.1	—	—	—	—	新
16	寛永通宝	径2.1	孔径0.6	厚さ0.08	—	—	—	—	—
17	寛永通宝	径2.5	孔径0.55	厚さ0.15	—	—	—	—	文銭。
18	寛永通宝	径2.5	孔径0.5	厚さ0.13	—	—	—	—	文銭。
19	ガラス玉	長さ0.35	幅0.55	孔径0.1	—	—	—	—	—
20	ガラス玉	長さ0.35	幅0.55	孔径0.1	—	—	—	—	—
21	ガラス玉	長さ0.35	幅0.55	孔径0.1	—	—	—	緑	—
参	歯	—	—	—	—	—	—	—	8点

垂直に立ち上がる。底面は、ほぼ平坦面をもつ。覆土は、多量のマンガン粒・酸化鉄・灰褐色粘土ブロックを含む灰黄褐色粘土層である。遺物は、出土していない。

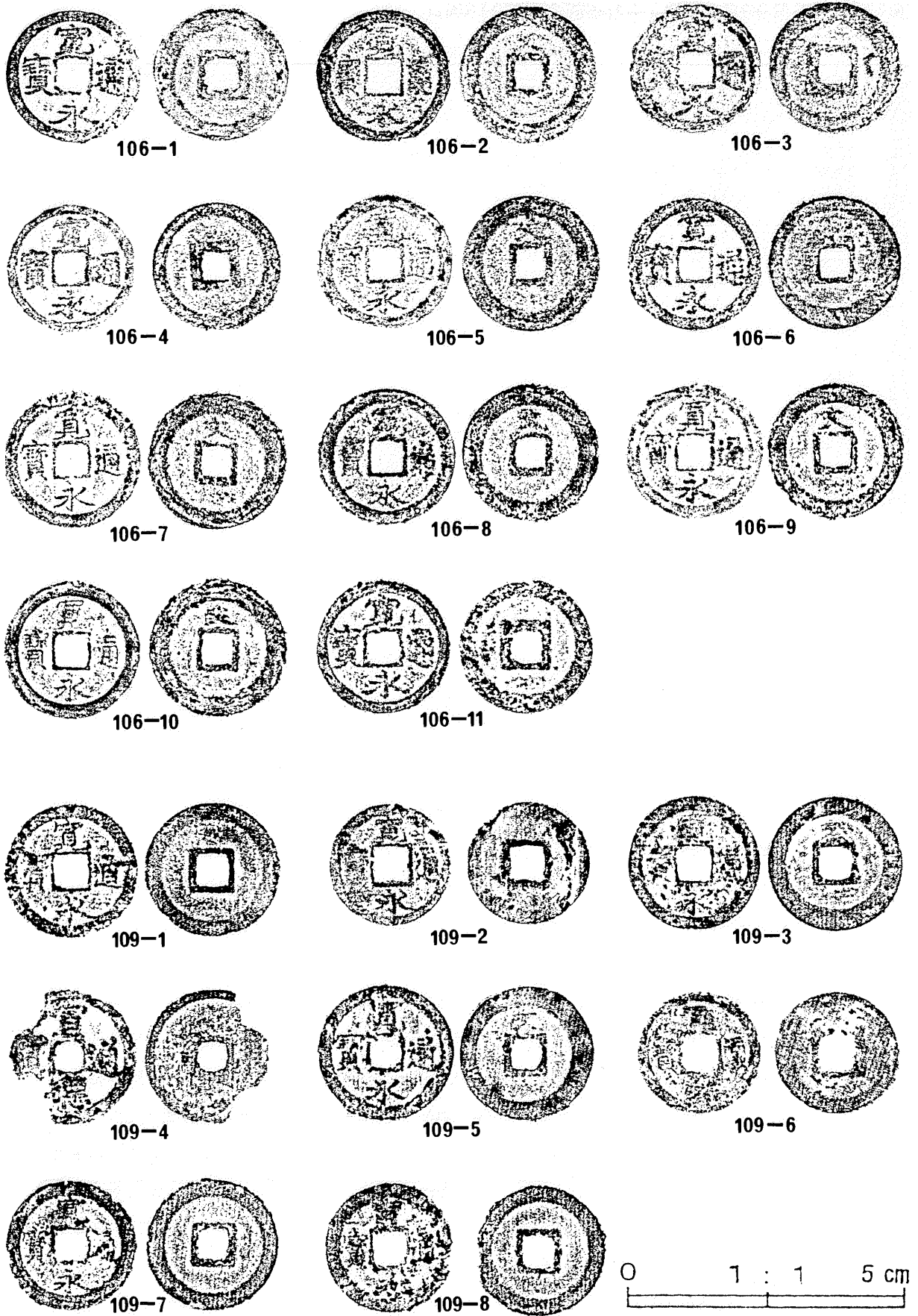
**80号土坑** (第212図) は、E-17グリッドに位置している。長方形を呈し、1.91×1.18m、深さ16cmを計る。壁は、急傾斜を成して立ち上がる。底面は、凹凸はみられるものの、ほぼ平坦である。覆土は、多量のマンガン粒・酸化鉄・オリーブ褐色粘土ブロックを含む灰黄褐色粘土層である。遺物は、出土していない。

**86号土坑** (第212図) は、G-18グリッドに位置している。長方形を呈し、1.90×1.18m、深さ42cmを計る。壁は、急傾斜を成して立ち上がる。底面は、やや凹凸はみられるものの、ほぼ平坦である。覆土は、多量のマンガン粒・酸化鉄・オリーブ褐色粘土ブロックを含む灰黄褐色粘土層である。遺物は、出土していない。

**91号土坑** (第213図) は、E-18グリッドに位置している。長方形を呈し、1.90×1.10m、深さ30cmを計る。壁は、急傾斜を成して立ち上がる。底面は、やや凹凸はみられるものの、ほぼ平坦である。覆土は、多量のマンガン粒・酸化鉄・黒褐色粘土ブロック・にぶい黄色粘土ブロックを含む灰黄褐色粘土層である。遺物は、出土していない。

**93号土坑** (第135図) は、C・D-19グリッドに位置している。41号住居跡を切断している。長方形を呈し、2.48×1.45m、深さ58cmを計る。壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。底面は、平坦面を成している。覆土は、多量のマンガン粒・酸化鉄・灰褐色粘土ブロックを含む灰黄褐色粘土層である。遺物は、出土していない。

**94号土坑** (第135図) は、D-19グリッドに位置している。41号住居跡・95号土坑を切断している。長方形を呈し、2.48×2.05m、深さ60cmを計る。壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。底面は、平坦面を成している。覆土は、多量のマンガン粒・酸化鉄・灰褐色



第217图 C区土坑出土遺物(3) 106号·109号

第115表 C区106号土坑出土遺物観察表 (第217図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	寛永通宝	径 2.5	孔径 0.5	厚さ 0.125				—	古
2	寛永通宝	径 2.5	孔径 0.6	厚さ 0.15				—	文銭
3	寛永通宝	径 2.4	孔径 0.6	厚さ 0.15				—	古。背面右「」字。
4	寛永通宝	径 2.4	孔径 0.5	厚さ 0.1				—	古
5	寛永通宝	径 2.5	孔径 0.55	厚さ 0.15				—	文銭
6	寛永通宝	径 2.45	孔径 0.5	厚さ 0.15				—	古
7	寛永通宝	径 2.55	孔径 0.45	厚さ 0.15				—	文銭

第116表 C区107号土坑出土遺物観察表

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	真珠球	長さ 0.8	幅 0.9	孔径 0.1/0.2				—	T字孔。
2	真珠球	長さ 0.8	幅 0.9	孔径 0.1/0.2				—	T字孔。
3	真珠球	長さ 0.4	幅 0.6	孔径 0.1				—	
4	ガラス玉	長さ 0.5	幅 0.6	孔径 0.1				—	
5	ガラス玉	長さ 0.6	幅 0.7	孔径 0.1				—	

第117表 C区109号土坑出土遺物観察表 (第217図)

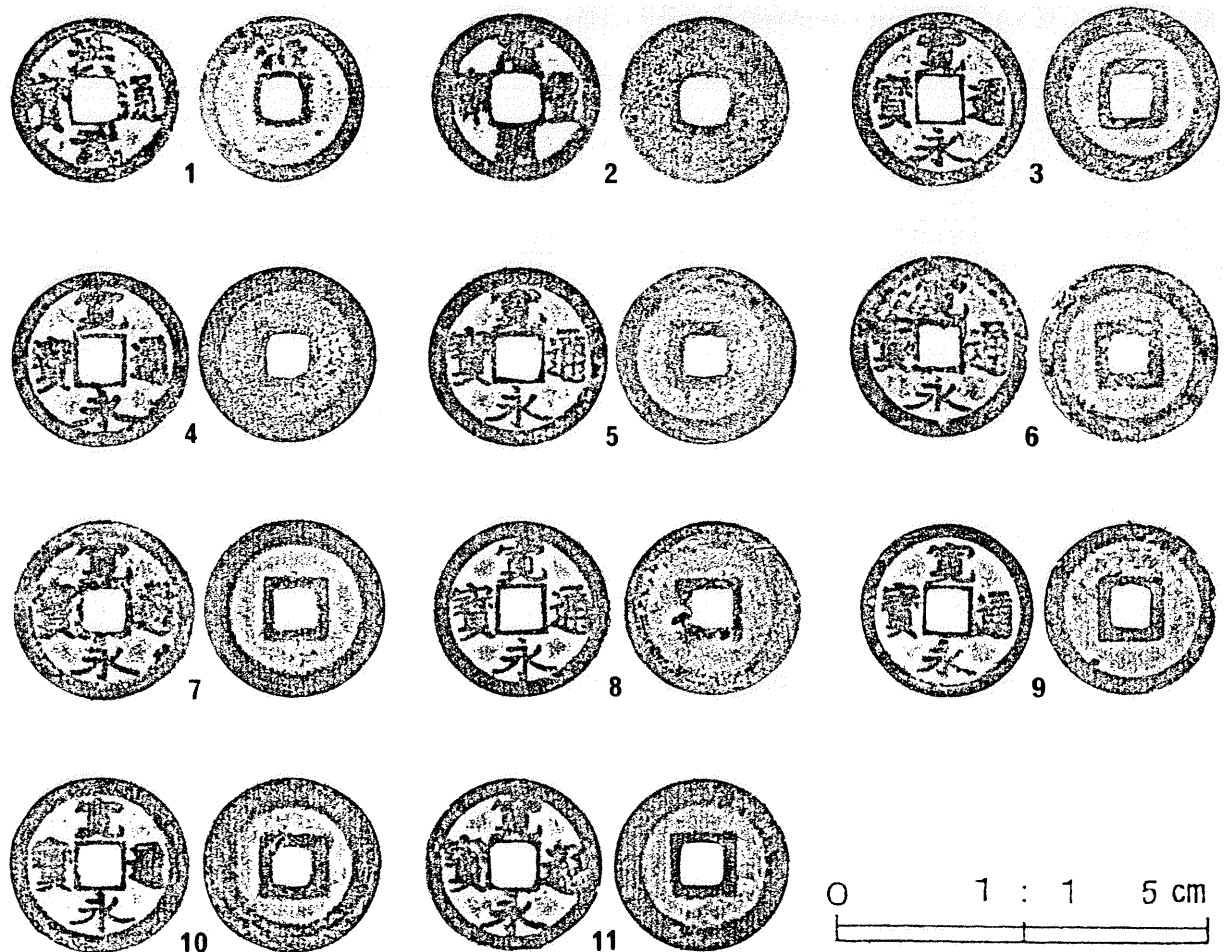
No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	寛永通宝	径 2.45	孔径 0.6	厚さ 0.125				—	新
2	寛永通宝	径 2.22	孔径 0.6	厚さ 0.1				—	新
3	寛永通宝	径 2.5	孔径 0.6	厚さ 0.15				—	文銭
4	宣徳通宝	径 2.5	孔径 0.5	厚さ 0.12				—	明銭。初鑄年1433年。
5	寛永通宝	径 2.5	孔径 0.55	厚さ 0.125				—	文銭
6	寛永通宝	径 2.3	孔径 0.6	厚さ 0.1				—	新
7	寛永通宝	径 2.4	孔径 0.5	厚さ 0.12				—	新
8	寛永通宝	径 2.4	孔径 0.6	厚さ 0.1				—	
9	ガラス玉	長さ 0.5	幅 0.6	孔径 0.1				—	

色粘土ブロックを含む灰黄褐色粘土（シルト質）層である。遺物は、出土していない。

95号土坑（第135図）は、D-19グリッドに位置している。41号住居跡を切断しているが、94号土坑に切断されている。長方形を呈すると思われ、 $(1.95 + \alpha) \times 1.56\text{m}$ 、深さ44cmを計る。壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。底面は、やや凹凸がみられるものの、ほぼ平坦面を成している。覆土は、多量のマンガン粒・酸化鉄・灰褐色粘土ブロックを含む灰黄褐色粘土層である。遺物は、出土していない。

97号土坑（第213図）は、D-19グリッドに位置している。98号土坑を切断している。長方形を呈し、 $2.35 \times 1.35\text{m}$ 、深さ45cmを計る。壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。底面は、波状を成している。覆土は、多量の長石・マンガン粒・黒褐色シルトブロック・にぶい黄色粘土ブロックを含む灰黄褐色シルト層（第1層）、である。遺物は、出土していない。

98号土坑（第213図）は、D-19グリッドに位置している。97号土坑に切断されている。長方形を呈し、 $2.43 \times 1.55\text{m}$ 、深さ43cmを計る。壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。底面は、波状を成している。覆土は、多量の長石・酸化鉄・マンガン粒及び少量の黒褐色シルトブロック・にぶい黄色粘土ブロックを含む灰黄褐色シルト層（第2層）、である。



第218図 C区土坑出土遺物(4) 110号

遺物は、出土していない。

115号土坑（第214図）は、F-20グリッドに位置している。116号土坑を切断している。長方形を呈し、1.65×0.94m、深さ24cmを計る。壁は、急傾斜を成して立ち上がる。底面は、わずかに弓状を呈する。覆土は、灰白色粘土ブロック灰色粘土ブロックを含むオリーブ黄色粘土層（第2層）である。遺物は、出土していない。

5タイプ その他、1～4タイプに属さない形態のもの、一括である。67号、71号、83号各土坑が含まれる。

67号土坑（第108図）は、Q-12・13グリッドに位置している。B区78号・C区55号両住居跡を切断している。長円形を呈し、径1.75×0.77m、深さ55cmを計る。壁は緩傾斜を成し、底面はほぼ平坦面を成す。底面西隅には、円形を呈し、径43×40cm、深さ9cmのピットがみられる。複土は、下層として、ピット内に多量の炭化物粒を含む黄褐色シルト層（第2層）、底面上に少量の炭化物・マンガン粒を含む明黄褐色粘土層（第3層）が堆積し、上位に多量の炭化物・にぶい黄橙色シルト層（第1層）が覆う。遺物は、

第118表 C区110号土坑出土遺物観察表 (第218図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	洪武通宝	径 2.25	孔径 0.5	厚さ 0.15				—	背面上「」字。明銭。初鑄年1368年。
2	元豊通宝	径 2.35	孔径 0.6	厚さ 0.1				—	篆書体。北宋銭。初鑄年1078年。
3	寛永通宝	径 2.4	孔径 0.55	厚さ 0.1				—	古
4	寛永通宝	径 2.4	孔径 0.55	厚さ 0.125				—	古
5	寛永通宝	径 2.5	孔径 0.55	厚さ 0.125				—	古
6	寛永通宝	径 2.5	孔径 0.5	厚さ 0.1				—	古
7	寛永通宝	径 2.5	孔径 0.55	厚さ 0.125				—	古
8	寛永通宝	径 2.4	孔径 0.55	厚さ 0.125				—	古
9	寛永通宝	径 2.4	孔径 0.55	厚さ 0.15				—	古
10	寛永通宝	径 2.4	孔径 0.55	厚さ 0.15				—	古
11	寛永通宝	径 2.4	孔径 0.55	厚さ 0.1				—	古

出土していない。

**71号土坑** (第149図) は、F-14グリッドに位置している。49号住居跡を切断し、50号住居跡を削平している。将棋の駒形を呈し、径1.55×1.19mを計る。底面は波状を呈し、深さは35～55cmを計る。壁は緩傾斜を成す。覆土は、上層に、多量のマンガン粒・粘土粒及び少量の炭化物を含むオリーブ褐色シルト層 (第6層)、下層に、多量のマンガン粒及び少量の炭化物を含む黄褐色シルト層 (第3層) が堆積している。遺物は、出土していない。

**83号土坑** (第212図) (第214図) は、G-17グリッドに位置している。ほぼ隅円長方形を呈するが、東辺が張り出すため、不整形となっている。2.25×2.15m、深さ34cmを計る。断面は、全体で楕鉢状を呈する。覆土は、底面に焼土粒・炭化物粒を含むオリーブ褐色粘土層 (第2層) が堆積し、上面に少量の炭化物を含む黄褐色粘土層 (第1層) が覆っている。遺物は、土師器椀 (83-1)、甕 (83-2) が出土している。

### 3 井戸跡

C区における井戸跡は、平成14年度・第5次調査で、1号か一基調査されたのみである。第一確認面下位からの検出である。遺物の出土が少なく、時期は不明瞭である。

**1号井戸跡** (第174図) K-14グリッドに位置している。第一確認面下位からの検出である。63号住居跡を切断している。

確認面での平面形は楕円形を呈し、径1.83×1.51mを計る。ほぼ垂直な壁は、確認面から43cmの深さで面を成す。面は、北側及び東側にあり、中央部へ向けて傾斜している。そして、南西部では、確認面から67cmの深さで、再び垂直な壁をもって深まる。深まりは、やはり楕円形を呈し、径1.13×0.88mを計る。全体の深さは、95cmを計る。

覆土は、上位から、多量の白色軽石粒 (浅間B軽石) ・酸化鉄・炭化物を含む灰オリーブ色粘土層 (第1層)、多量の酸化鉄 (下位に集中) ・炭化物を含む浅黄色粘土層 (第2層)、多量の白色軽石粒 (浅間B軽石・第1層より細かい) ・マンガン粒・炭化物を含



む灰色粘土層（第3層）、少量の酸化鉄及び灰白色粘土ブロック（上位に集中）を含む灰色粘土層（第4層）、やや多量の酸化鉄・炭化物を含む灰白色粘土層（第5層）が堆積している。

遺物は、20～25大の礫及び砥石（SE1-1）が出土している。

第120表 C区1号井戸跡出土遺物観察表（第174図）

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	砥石		長さ7.4 幅2.1	厚さ1.8	重さ75g			—	四面使用。

## 4 畠跡

C区における畠跡は、平成14年度・第5次調査で、16号・17号の2ブロックが調査されている。第一確認面下位からの検出である。住居跡に切断されている場合が多い。遺物の出土が少なく、時期は不明瞭である。

**16号畠跡** D-13、E-11・12・13、F-12・13グリッドに亘って位置している。

(第219図) 28号、29号、31号、32号、43号各住居跡を切断しているが、30号住居跡には上面を削平されている。さらに、B区75号、80号両住居跡を切断している。

現状では、北西・南東間10.5m、北東・南西間7.4mの範囲に及ぶ。畠間の底面レベルは、北東が高く、南西が低いという特徴を示す。しかし、平均レベルL=27.800mの北西部（上段）と、L=27.500mの南東部（下段）では、30cmのレベル差がみられ、上下2段の畠跡に区分して考えるべきであろう。

上段の畠間は、北西・南東間3.0mの間に、寸断されているものを、流れの中で1条ととらえると、6条が確認される。南東端の畠間は、分断されているが、大きく南東に膨らみをもつが、他の5条はほぼ直線を成し、N-60°-Eを示す。長さは、1.05～2.25+ $\alpha$ mと、差がみられるが、全体として畠間を成すものである。畠間幅は25cm前後でほぼ一定している。畠間の間隔は、25～40cmまでの幅がある

36号住居跡と重複関係にあるが、その前後関係は、明確に成し得ていない。

下段の畠間は、北西・南東間7.5mの間に、寸断されているものを、流れの中で1条ととらえると、15条が確認される。全体にほぼ直線を成し、N-60°-Eを示す。南西部側では、長さ0.9～2.15mの短い畠間が集中し、北東部の長さ3.5～5.9mの長い畠間との間に、一定した分断区間を見せている。分断区間中央部では、その北東部（長い畠間の南西端）に、長さ1.0～1.6mの短い畠間がみられる。短い畠間—分断区間—短い畠間及び長い畠間と連続し、全体として畠間を成すものである。また、長い畠間の北東端は、北西側に2m

第121表 C区16号畠跡出土遺物観察表（第219図）

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・小型壺	—	—	(4.8)	⑥③②④①	②	にぶい黄橙	下位のみ	外面磨滅した部分が多い、胴部中位刷毛目の後ミガキ、朱塗、下位ナデ、底面ケズリ。内面ナデ、一部炭化物付着。



第219図 C区16号畠跡及び出土遺物

前後の畝間が交差し、V字状となるという特徴も合わせもっている。畝間幅は14～25cm前後であるが、20cm前後の部分が最も多い。畝間の間隔は、10～40cmまでの幅があるが、22～30cmの部分が最も多い。

東隅では、N-65°-Wを示し、長い畝間と交差する3条の畝間が、長い畝間の南東端から2条目と5条目を結ぶように位置している。長さは1.9m、畝間幅は15～25cm前後であるが、20cm前後の部分が最も多い。畝間の間隔は、30cm前後の部分が最も多い。方向を違える3条の畝間は、概ね東西行する畝間を切り込んでいることが確認されている(第105図)。

覆土は、全て、多量の酸化鉄を含む黄灰色粘土である。南部では、炭化物を含み、粘土の黄色味の薄い部分もみられる。方向を違える3条の畝間は、多量の酸化鉄及び少量のマンガン粒を含む黄灰色粘土である。

遺物は、土師器小型壺(1)が出土している。

16号畝跡は、次のとおり、B区13号畝跡と共通する要素が多い。!畝間底面のレベル差があり、上下2段に区分されること。"上下段の境の畝間が弧状を呈すこと。#数は少ないが、東端に直交する畝間をもつこと。\$古墳時代前期の住居跡(28号、29号、31号、32号、43号各住居跡及びB区75号、80号両住居跡)を切断し、古墳時代後期の住居跡(30号住居跡)に削平されていること。%第2確認面からの検出であること。&出土遺物が古墳時代前期に属すること。

これらのことから、本畝跡もB区13号畝跡同様、古墳時代前期に構築された可能性が高く、B区13号畝跡と同時に存在していた可能性も高い。

**17号畝跡** D-14・15、E-14・15グリッドに亘って位置している。

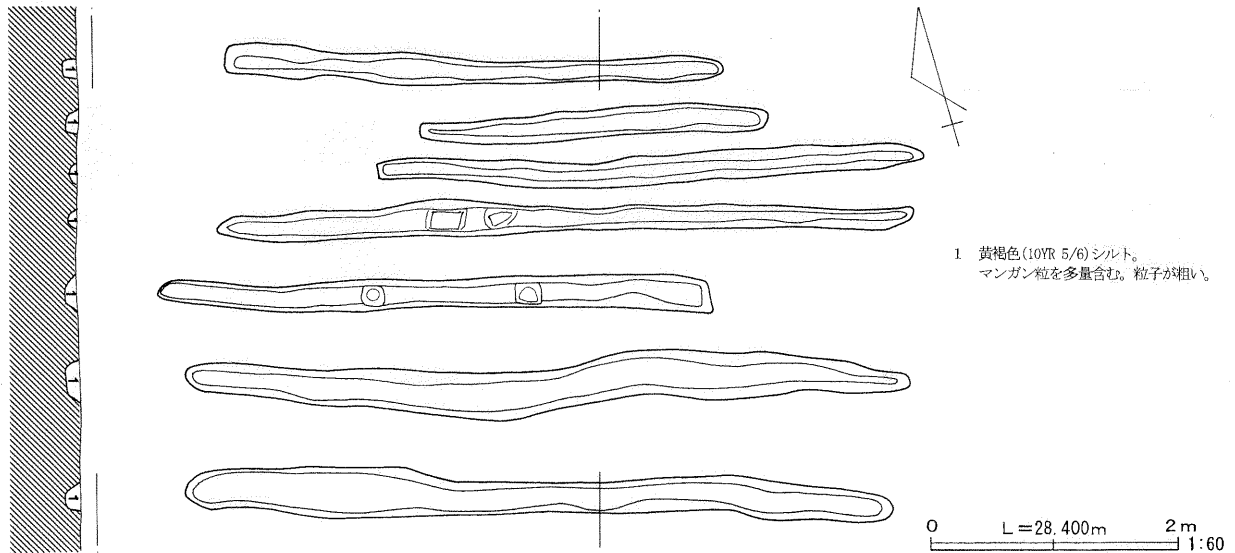
(第220図) 東西6.30m、南北3.76mの間に、7条の畝間が確認される。ほぼ直線を成し、N-74°-Wを示す。長さは、2.47～5.95mと、差がみられるが、全体としては、6m弱の3条が南に配され、4.1～4.6mの3条が北側に配され、それぞれの端の1条が、他の範囲に入り込む格好となっている。最短の畝間は、北側から2条目に配されている。

中央に位置する、他の範囲に入り込んだ畝間の底面には、ピットが2ヶ所ずつ穿たれている。長さ4.55mの畝間(長さ4.1～4.6mグループ南端)・西側ピットは、隅円方形を呈し、径18×16cm、深さ12cm、東側ピットは、隅円方形を呈し、径21×17cm、深さ20cmを計る。ピット芯々間は、2.12mである。長さ5.73mの北端の畝間(長さ6m弱グループ北端)・西側ピットは、隅円長方形を呈し、径48×27cm、深さ12cm、東側ピットは、隅円長方形を呈し、径45×27cm、深さ10cmを計る。ピット芯々間は、70cmである。この間の両畝間の間隔は、36cm前後である。

畝間幅は、北側では狭く15～25cm前後、南側では22～39cm前後までの幅があり総じて太い。畝間の間隔は、北側では狭く15～30cm前後、南側では35～75cm前後となっている。

覆土は、粒子の粗いマンガン粒を多量に含む黄褐色シルト層である。

遺物は、検出されていない。



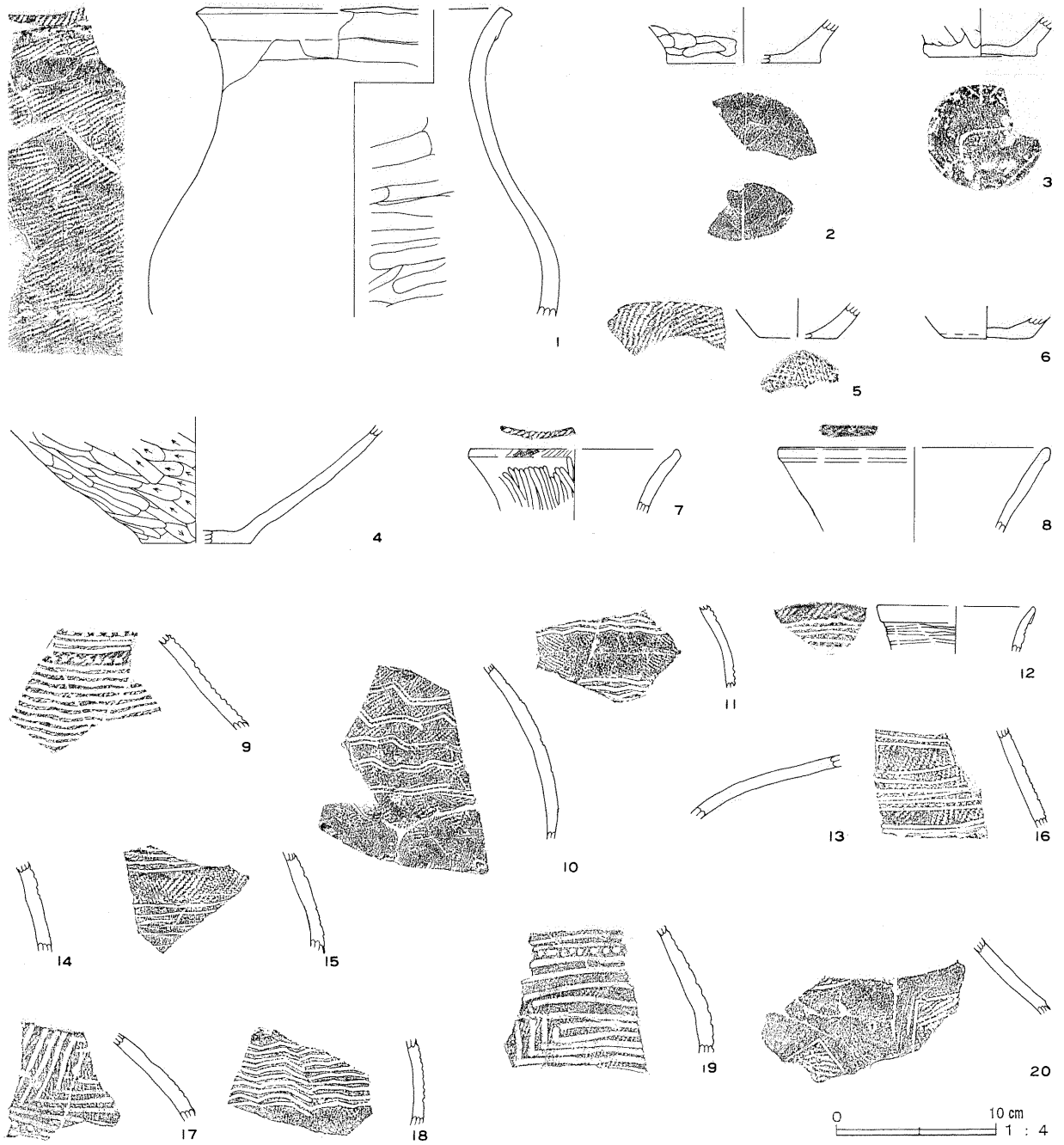
第220図 C区17号畠跡

## 5 遺物包含層

K-14グリッドにおいて、63号住居跡南端の確認調査に伴って、L=27.000m付近から、南北8m、東西3mの範囲にわたって、弥生時代中期の土器片及び礫が検出されたものである。遺物包含層は、炭化物細粒及び酸化鉄、わずかな砂粒を含むオリブ黒色粘土層である。遺構は、確認されていない。

第122表 C区弥生土器包含層出土遺物観察表 (第221図)

No.	器種	出土部位	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	文様及び特徴
1	甕	上位のみ	(20.0)	—	—	①⑥	②	灰黄	口縁部折り返しによる複合口縁。縄文施文後、頸部、口縁端部ナテ調整。口縁部上面にも縄文施文。
2	—	底部	—	—	(9.8)	④①	②	にぶい黄橙	外面被焼。木葉痕有り。底部破片2点。
3	—	底部	—	—	6.0	②③	②	にぶい黄橙	木葉痕有り。底部中央にナテ調整。外面は上から下へのケズリ。内面横方向のケズリ。外面被焼。
4	壺	底部	—	—	(6.8)	①	②	にぶい黄橙	体部外面下から左上へのヘラケズリ調整。
5	—	底部	—	—	(5.0)	①	②	にぶい黄橙	底部網代痕。
6	—	底部	—	—	(5.3)	⑥	②	にぶい黄橙	底部布目圧痕。
7	—	口縁部	(13.2)	—	—	④	②	にぶい黄橙	口唇部LR縄文施文。内面ナテ調整。外面被焼。
8	壺	口縁部	(15.8)	—	—	②①	②	黄灰	縄文施文。
9	壺	肩部	—	—	—	④①	②	にぶい黄橙	
10	壺	体部	—	—	—	⑥	②	にぶい黄橙	
11	壺	体部	—	—	—	②	②	にぶい黄橙	外面被焼。
12	壺	口縁部	(10.0)	—	—	④	②	黒褐	
13	壺?	体部下方	—	—	—	①④②	②	灰黄褐	
14	壺	胴部	—	—	—	①④	①	にぶい黄橙	No.15と同一個体。
15	壺	胴部	—	—	—	①④	①	にぶい黄橙	No.14と同一個体。
16	壺	胴部	—	—	—	①②	①	浅黄	
17	壺	胴部	—	—	—	①	①	暗灰黄	
18	壺	胴部	—	—	—	⑥④	①	灰黄	外面被焼。
19	壺	胴部	—	—	—	②	①	灰黄	
20	壺	頸部～体部	—	—	—	①	①	にぶい褐	



第221图 C区弥生土器包含層出土遺物

## VII まとめ

一本木前遺跡では、方形周溝墓、方形周溝墓主体部の可能性がある人骨を伴う2段掘り土坑、住居跡、柵列、掘立柱建物跡、土坑、井戸跡、溝跡、土器祭祀跡、礫槨、道路跡、畠跡、土器集中地点等、各種の遺構が多数検出されている。また、下面には、縄文時代後期及び弥生時代中期の遺物が包含している土層も確認されている。集落構成の主体となる住居跡は、500軒を超える数が検出された訳であるが、時代は、古墳時代前期から、平安時代に及んでいる。

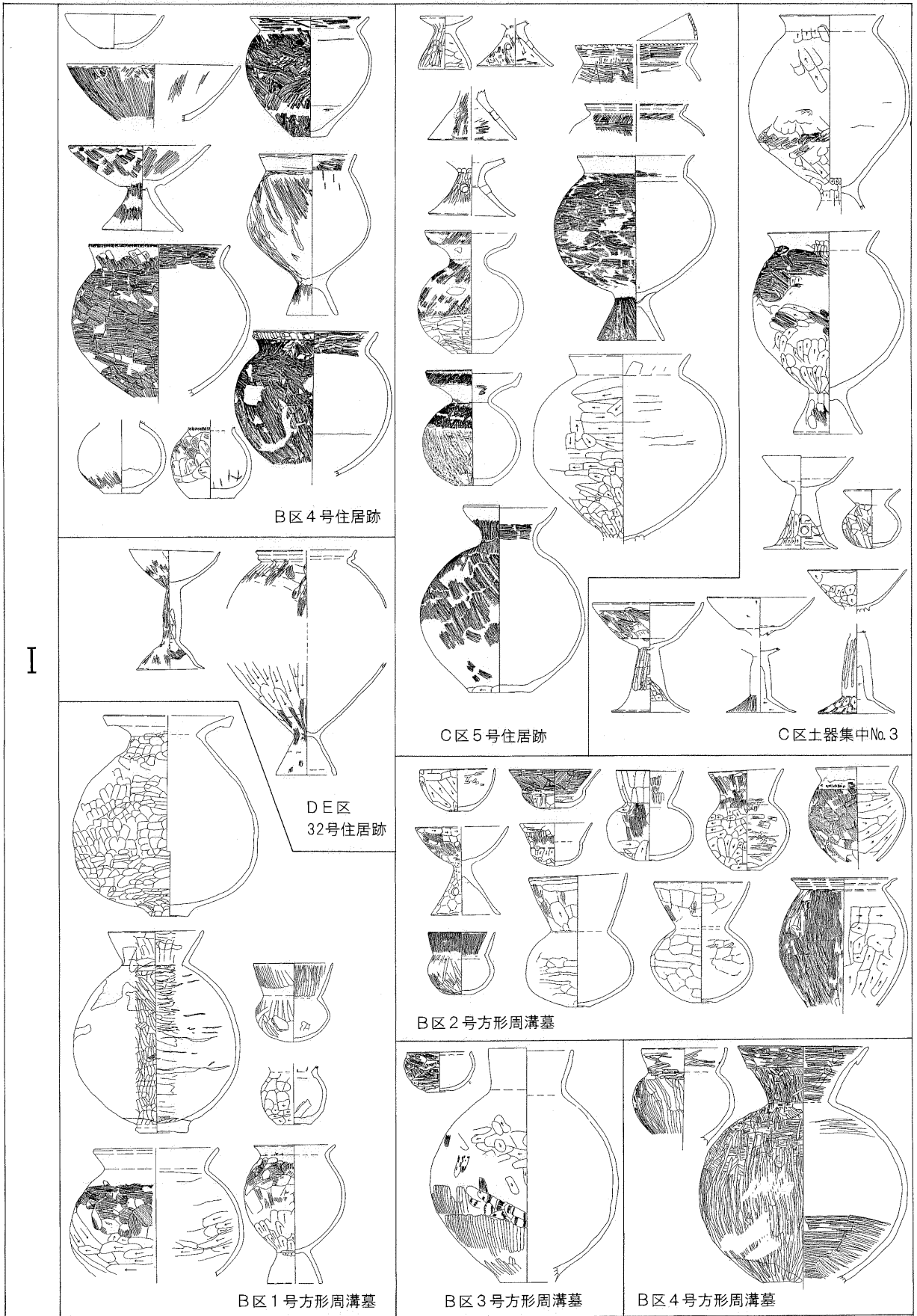
### 出土土器

多数の住居跡に対して、その変遷過程を述べるためには、出土土器による変遷をみていくことが必要となろう。土器自体の区分は、細かい方がより良いことは明らかであるが、住居跡出土の土器は、ほとんどの場合、古い様相を残しつつ新しい様相を取り入れている。また、古い様相がいつまでも残存したりする。そのため、ここでは、新しい様相が加わった時点を画期として捉え、以降さらに新たな要素が加わるまでを一時期として取り扱うこととした。一応、I期からX期に区分し、古墳時代後期に該当するⅢ期からⅧ期は、それぞれを前半・後半で区分した。以下、各期について、みてみることにする。

### I 期

I期は、吉ヶ谷系の甕を伴うC区57号住居跡(第164図)から、長脚で裾部が屈曲するものと、湾曲するものの二種類の高杯を含むC区土器集中Ⅲ遺構(第222図)までを含み、ほぼ古墳時代前期に属している。

このうち、比較的器種の揃っているB区57号住居跡を例にとってみると、出土の土器群は、高杯、器台、甕、台付甕、手捏ねで構成されている(第76・77図)。高杯は、やや内湾しつつ外傾する大きな杯を有するもので、口唇端部は矩形に仕上げられている。器台は、受台部が高杯と同様やや内湾しつつ外傾し、脚は、括れ部から一旦柱状となってから大きく湾曲して開くもの(3孔)と、直線的に開くもの(4孔)がある。また前者には、柱状部分からほぼ真横に湾曲して大きく開くもの(3孔2段)もある。甕は、大部分が台付甕であり、大型と小型の2種類がある。小型の中には、S字状口縁もみられる。素口縁の口縁部は強く屈曲し、高い。いずれも胴部最大径を上位にもち、球形に脹らむ。外面は刷毛目整形が主であるが、上下端及び脚との接合部にナデを施すものがあり、大型の中には全面ナデによるものもみられる。S字甕は、頸部が全くなく、胴部から直接強く屈曲して、斜め上方にほとんど直線的に延びるもので、わずかにS字状を成しているにすぎない。退化した形態を示すものであるが、本遺跡のS字甕は、大部分がこの様相を呈するため、こうした形態の特徴は、時期差を示すものでなく、地域的な特徴として捉えるべきものである可能性もあろう。また、本住居跡の甕には、刻み目あるいは押捺の加えられた例がみられない。壺は、中型と小型の2種類がある。中型の中には、単純口縁のものと貼り付け口



第222图 出土土器集成·I期

縁のものがみられ、胴部は下膨れ状を成す。小型は平底から球形の胴部へ移行するタイプである。以上の特徴から、B区57号住居跡の出土土器群は、古墳時代前期の中でもその中頃にあると判断される。

このB区57号住居跡と、方形周溝墓出土の土器群（第222図）との関連は、どの様であろうか。台付甕は、1号・2号から大型・小型、2点ずつ出土している。1号の大型は、素口縁であり、やや緩く外反し、胴部は球形を呈する。整形は、肩部のみ刷毛目を残し、それより上位はナデ、下位はケズリが施されている。小型も、ほとんど同一の特徴をもつが、胴部の張りは弱い。2号の大型は、S字口縁であり、やや緩く外反し、胴部は球形を呈する。整形は、肩部のみ刷毛目を残し、それより上位はナデ、下位はケズリが施されている。小型も、ほとんど同一の特徴をもつが、胴部の張りは弱い。こうしたことから方形周溝墓出土土器群がやや新しい要素をもっており、古墳時代前期後半とすることができよう。また、C区土器集中Ⅲ3にみられる、柱状長脚の高杯、あるいは台付甕の下位が直線的になり外面の大部分にケズリを施すといったような、末期の様相も未だみられていない。

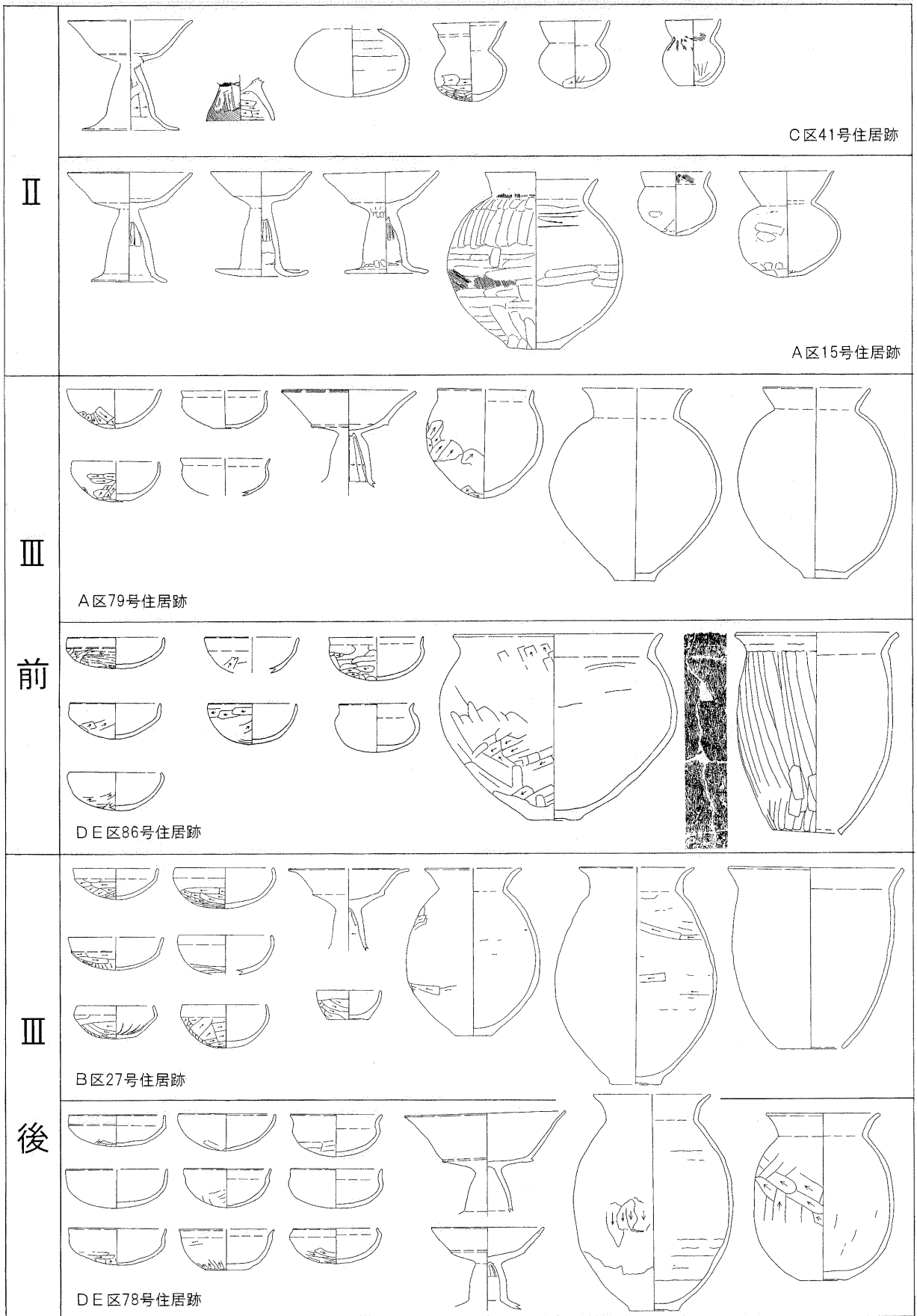
本期に属する住居跡等から出土した土器群をみると、古い要素から新しい要素までが同一遺構内に混在する例が多く、遺構の存続期間が長いものが多いことが大きな特徴となっている。

**II 期**（第223図） II期は、大きく外傾し下端に稜をもつ杯と、長くほとんど脹らみをもたず、裾部が屈曲する脚から成る高杯を中心として、口縁はいずれも外傾するものの、段をもつもの・わずかに内湾するもの・直線を成すものなどが混在する埴、単純口縁でいずれも強く外傾し、球形の胴をもつ甕から成っている土器群を指し、古墳時代中期に属する。総体量は、きわめて少ない。

**III 期**（第223図） III期は、杯・椀・類が数量的に主体を成すようになった段階であり、和泉期から継続する椀・類を主体としている段階をIII・前期、須恵器蓋杯を模倣し、口縁を意識した器種を取り入れ、バリエーションを示してくる段階をIII・後期として区分した。この期から、古墳時代後期に属する。

III・前期は、①平底から扁平球形の体部へ移行し、口縁は短く外反するもの、②同様であるが丸底のもの、③丸底からやや扁平球形の体部へ移行し、最大径から短く外反して口縁を成すもの、④丸底からやや扁平球形の体部へ移行し、絞り込まれた格好から、口縁は短く外反するもの、⑤球形の体部がそのまま切り取られた様相で、口縁が区別されていないもの、⑥球形（平底）の体部から口縁がわずかに内傾するもの、⑦球形（平底）の体部から口縁が内傾気味に直立するもの、⑧球形（平底）の体部から稜をもってわずかに外傾する口縁へ移行するもの、という椀・類が主体を成す。新たに出現してくる杯は、⑨狭い平底であり、直線的な体部から不明瞭な稜をもって直立する口縁へと移行するもの、⑩丸底であり、扁平な体部から不明瞭な稜をもって、短いが直立する口縁へ移行するものがみられてくる。高杯は、大きく外傾し下端に稜をもつ杯と、長くてほとんど脹らみをもたず、裾部が屈曲する脚から成り、II期と同様であるが、杯下端の稜が鋭く明確になっている。甕は、強い脹らみをもち、口縁は、鋭く外傾及び外反する。A区79号とDE区86号





第223图 出土土器集成·II期、III期

を比較すると、杯類⑨・⑩が加わっていない79号の方が古い様相を呈しているといえる。

Ⅲ・後期は、①～⑧の椀・\_類が依然として主体を成すが、⑨・⑩の杯類も数量を増してくるし、口縁の意識が強くなり稜が明瞭なものになる。また⑩については、体部の深淺、口縁の高低等、バリエーションがみられる。高杯は、依然として大きく外傾し下端に明確な稜をもつ杯と、長くて裾部が屈曲する脚から成り、Ⅲ・前期と同様であるが、脚にわずかに脹らみがみられ、短脚化する傾向がみられる。甕は、やや長胴化し口縁下部が湾曲するように、直立部分をもつようになる。B区27号とDE区78号を比較すると、B区27号の杯類⑩にバリエーション化がみられないこと、高杯の脚にふくらみがみられないことから、27号の方が古い様相を呈しているといえる。

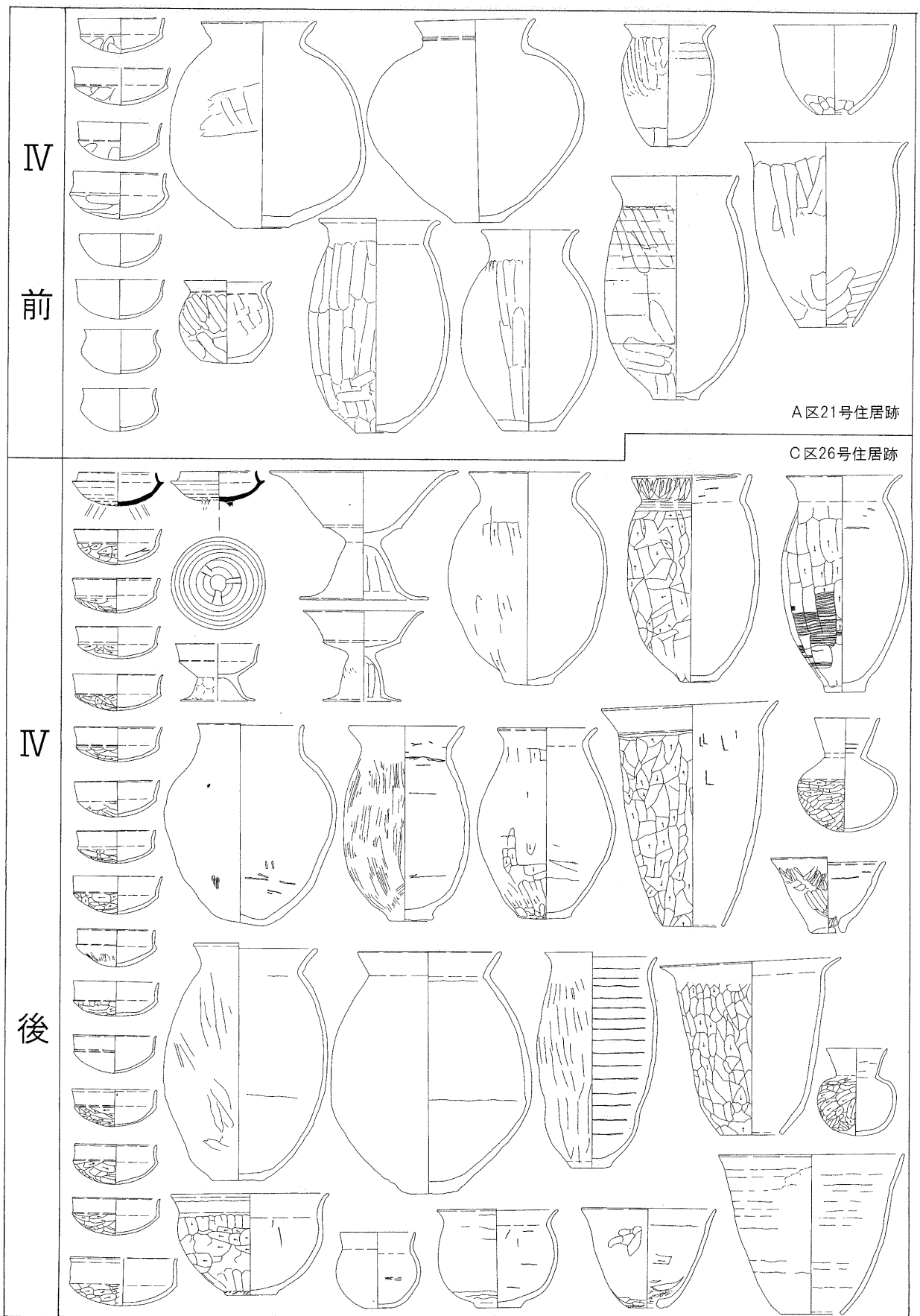
**IV 期** (第224図) IV期は、須恵器蓋杯の完全な模倣杯が登場し、主体を成すようになった段階であり、和泉期からの継続器種が未だ多く採用されている段階をIV・前期、継続器種がほとんどなくなり、模倣杯がその大部分を占める段階をIV・後期として区分した。

IV・前期は、未だ④丸底からやや扁平球形の体部へ移行し、口縁が広がるものの、絞り込まれた格好から、口縁は短く外販するもの、⑤球形の体部がそのまま切り取られた様相で、口縁が区別されていないもの、といった\_、あるいは⑨狭い平底であり、直線的な体部から不明瞭な稜をもって直立する口縁へと移行する杯が残存している。また、⑩丸底であり、扁平な体部から不明瞭な稜をもって、短い直立する口縁へ移行する杯は、やはり体部の深淺、口縁の高低等、バリエーションがみられるまま残存している。一方、丸味を持つ体部から段を成し、長めの口縁が作り出された、須恵器蓋杯の模倣杯が登場する。口縁の形態によって、⑪やや外傾するもの、⑫外反気味に直立するものに区分される。⑫の中には、大型杯もみられる。高杯は、Ⅲ・後期と同様であり、杯部が大きく外傾し下端に明確な稜をもち、脚部はやや短脚化し裾部が屈曲している。甕は、球形胴の大甕、長甕類は鋭く外傾磨るものと、一旦直立し大きく外反するものがみられ、機能分化の定着がみられる。

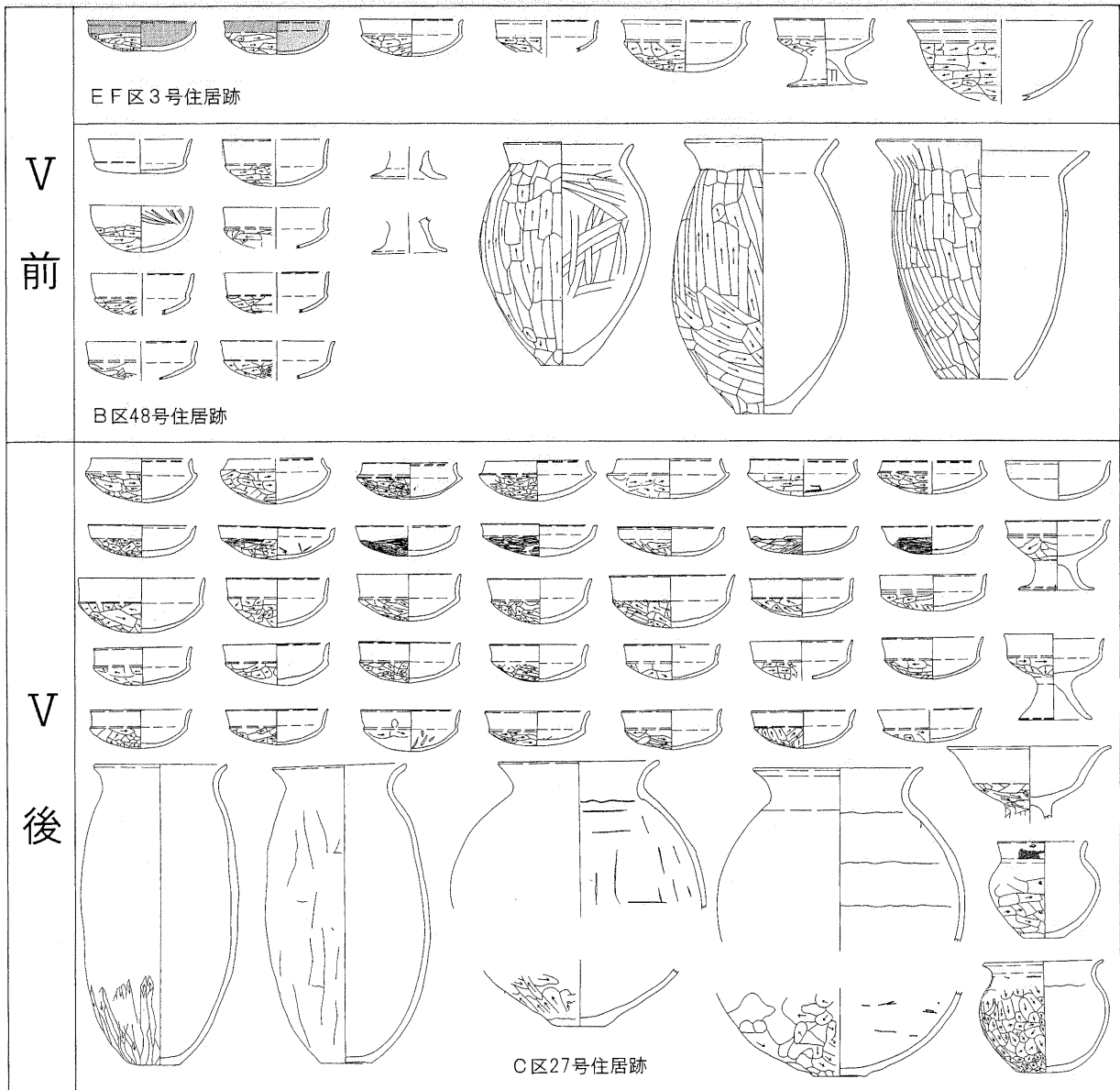
IV・後期は、①～⑩の杯・\_類がほとんど姿を消し、⑪・⑫及び、⑬丸味を持つ体部から段を成し、長めの直立する口縁（口唇部のみやや外反する）をもつ杯のみで構成されている。高杯は、IV・前期から継続するタイプ（大・中型）に加えて、⑭杯に短脚を付けた新たなタイプが登場する。甕類は、前期と大差はないが、全体にやや大型化している。また、丸底の小型壺もみられる。

**V 期** (第225図) V期は、須恵器蓋杯の完全な模倣杯が主体を成してはいるものの、新器種が採用されてくるようになった段階であり、須恵器身杯の模倣杯が採用される以前の段階をV・前期、身杯の模倣杯が採用された以後の段階をV・後期として区分した。

V・前期は、⑪・⑫・⑬に加えて、⑭扁平な体部からわずかに稜をもって直立する口縁へ移行し、口唇は摘み上げられて外反する、いわゆる比企型杯（朱塗されている）、⑮わずかに外傾する高い口縁から、ほとんど平底で、体部を成さないタイプが登場する。しかしながら比企型杯は、数量は少ない。また、Ⅲ期からみられた⑦球形（平底）の体部から口縁が内傾気味に直立するタイプが丸底となり、内面には暗文をもつものが増えるタイプ



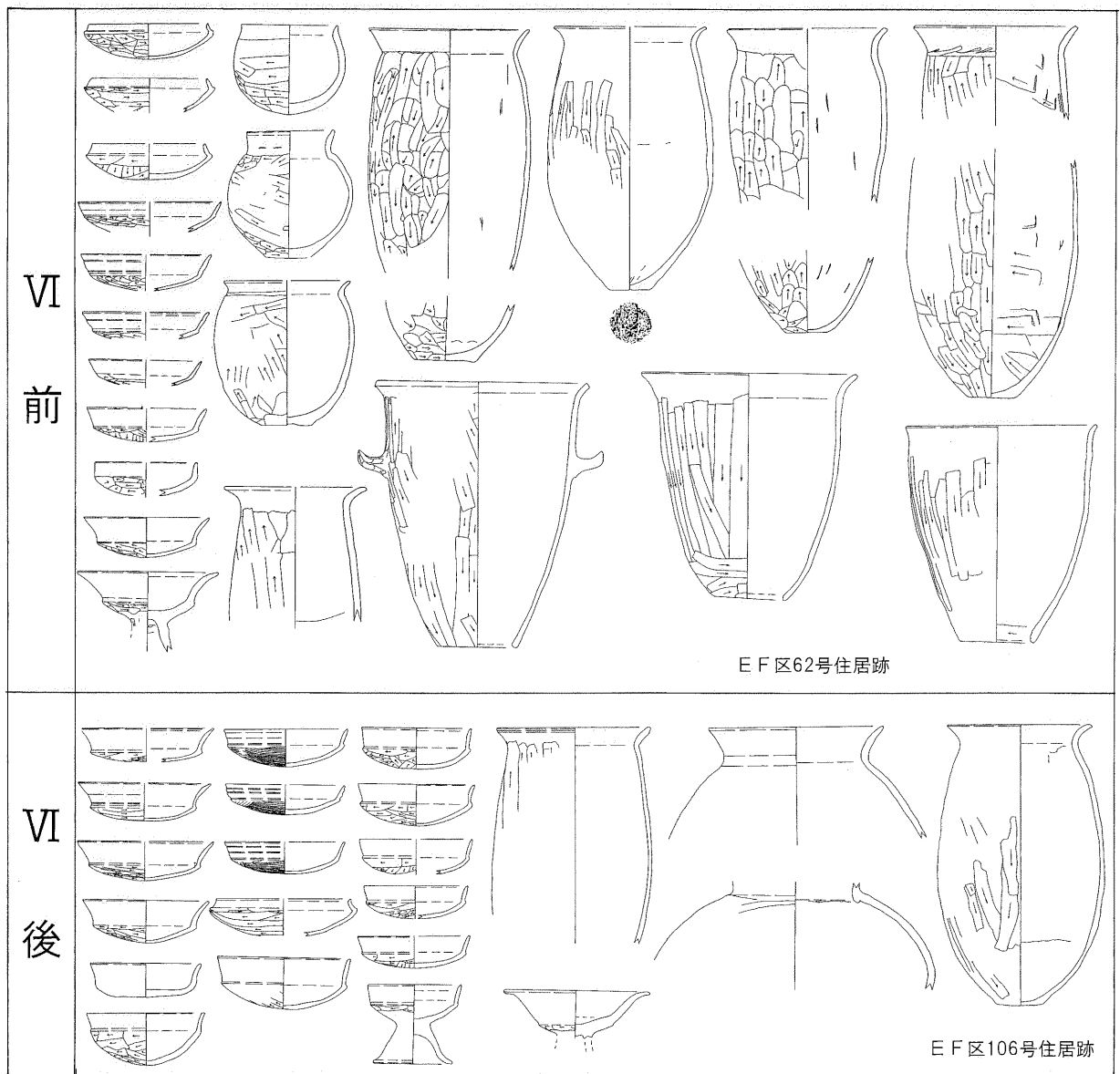
第224图 出土土器集成·IV期



第225図 出土土器集成・V期

となって、みられるようになる。高杯は、IV・後期から登場した、⑫杯に短脚を付けたタイプが主となり、IV・前期から継続するタイプは極わずかとなる。甕類は、前代とほとんど差はみられない。

V・後期は、前期の杯類に加えて、⑯口縁が内傾する須恵器身杯の模倣杯が出現してくる。⑯は、口縁が外反しながら内傾するものと、直線的に内傾するものの2種があり、それぞれ体部の深いタイプを含んでいる。また、1体部が浅く、口縁も低い蓋杯の模倣杯もみられるようになる。1も、外傾する口縁の内面口唇を整形するものと、口唇を摘み上げて外反するものの2種類が含まれている。さらに、⑱浅い体部から稜をもって外傾する口縁へ移行するタイプもみえ始める。高杯は、前代とほとんど差はみられない。長甕は、これまでほとんど変化をみなかったものが、この段階になって、長胴化が進む。

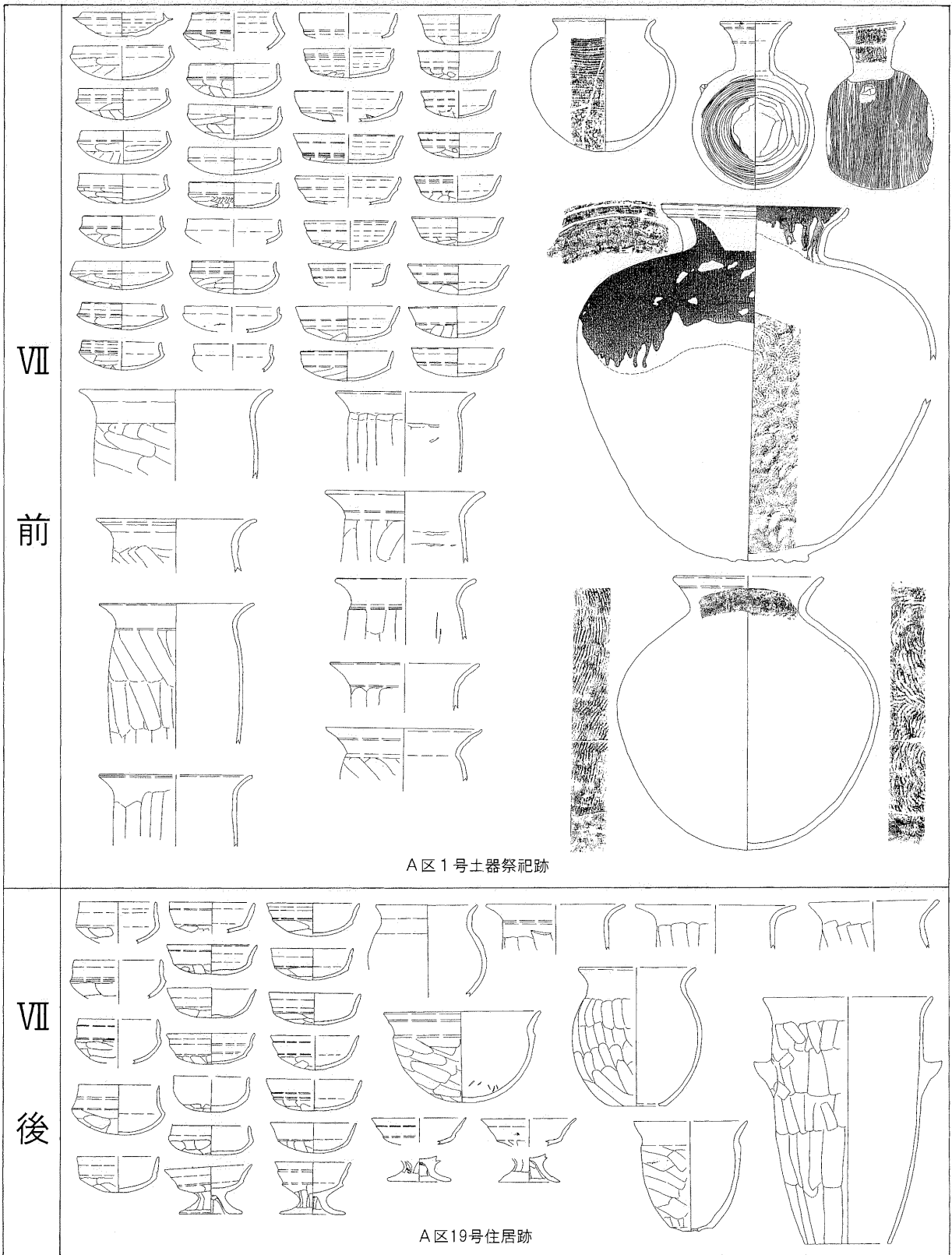


第226図 出土土器集成・VI期

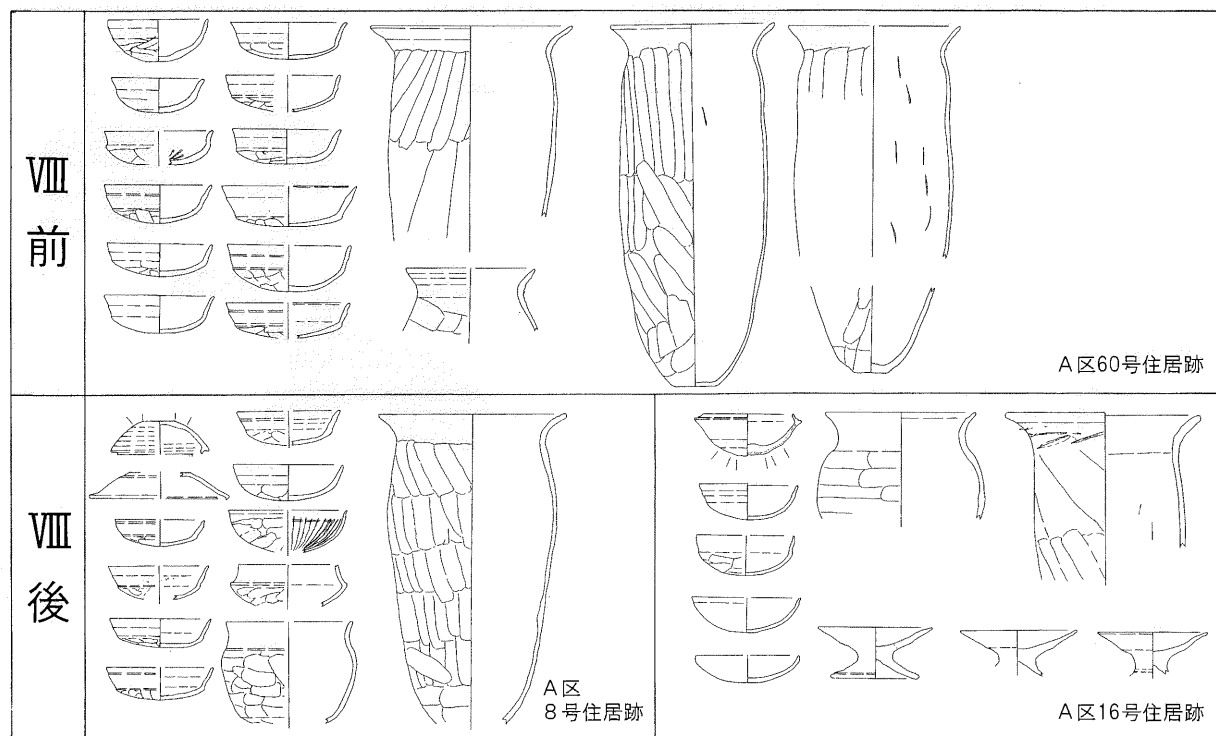
VI 期  
(第226図)

VI期は、これまで杯の主体を成していた⑪・⑫・⑬蓋杯の模倣杯が減少し、前代で登場した須恵器身杯の模倣杯体部が浅くなり、浅い体部から稜をもって外傾する口縁へ移行するタイプの中でも口縁が2段に横ナデされるものや、口縁が大きく外反するものなどの、新器種が採用されてくるようになった段階であり、口縁が3段に横ナデされる杯が採用される以前の段階をVI・前期、採用された以後の段階をVI・後期として区分した。

VI・前期は、⑯須恵器身杯の模倣杯体部が浅くなり、口径がやや大きくなることもあって、全体に扁平となった形態を示すようになる。また、⑰浅い体部から稜をもって外傾する口縁へ移行するタイプの中でも口縁が2段に横ナデされるものや、3口縁が大きく外反するもの（体部は浅くない）などの、新器種が採用されてくる。しかし、減少しながらも⑪・⑫・⑬蓋杯の模倣杯が残存し、主体のない渾然とした様相を呈している。高杯は、前代とほとんど差はみられない。長甕は、この段階になって、より長胴化が進行し、口径と



第227図 出土土器集成・VII期



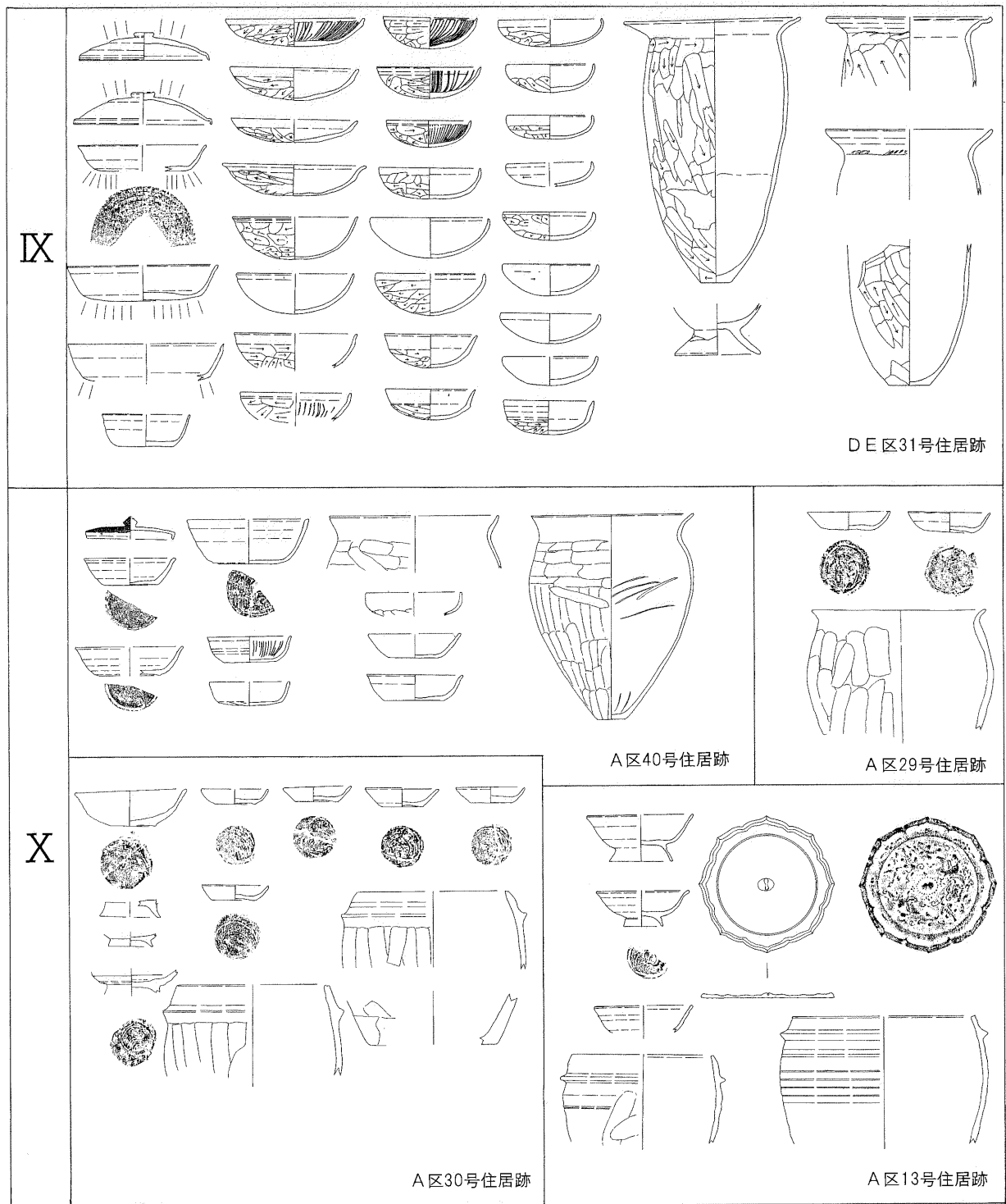
第228図 出土土器集成・Ⅷ期

胴部最大径がほぼ同一となる。

Ⅵ・後期は、構成は前期とほぼ同様であるが、⑱浅い体部から稜をもって外傾する口縁へ移行するタイプの中でも口縁が3段に横ナデされるもの、3口縁が大きく外反するもので体部が浅くなったものなどの、新タイプが現れ、新タイプが数の上では旧タイプを上回るようになる。

**Ⅶ 期** Ⅶ期は、全体を通して、口縁が大きく外反し杯体部が浅くなるものや、⑳身杯の模倣(第227図)杯口縁が異常に高くなるもの、Ⅴ期に登場した㉑わずかに外傾する高い口縁から、ほとんど平底で、体部を成さないもので、口径が拡がり盤状を呈するようになった杯などの新器種が採用されてくるようになった段階である。甕類は、最大径が完全に口縁にあり、底部に向けて徐々に幅を狭めるタイプと、ほとんど同一径で下位まで移行し、底部付近で急に窄まるタイプに分離する。Ⅶ・前期は、㉒口縁が異常に高くなる杯の口縁がほぼ直立して2～3段の横ナデが施される器種が採用される以前の段階であり、採用された以後の段階をⅦ・後期として区分した。また後期には、⑱浅い体部から稜をもって外傾する口縁へ移行するタイプの中でも口縁が2段に横ナデされた杯が、八の字状に開く短脚に載せられた高杯が登場する。

**Ⅷ 期** Ⅷ期は、杯の口径が縮小し、小型化する時期である。Ⅷ・前期は、ほぼ前代を踏襲するが、杯類が小型化し、甕類の分離がより明確になる段階である。Ⅷ・後期は、丸底で、口縁がわずかに外反し、体部内面に放射状の暗文が施された杯や、㉓丸底で口縁が積み上げられた杯が採用され、主体となる段階である。高杯は、皿状の杯が、杯と同高の八の字状の短脚に載せられ、全体でX字状の形態を示すようになる。



第229図 出土土器集成・IX期、X期

**IX 期** IX期は、口径が大きく浅い皿型の杯、口縁部がわずかに外反するもの・そのまま湾曲するもの・上に摘み上げられるものなどの丸底杯が主体を成す。多くの場合、放射状の暗文をもっている。須恵器の蓋・盤・杯が多いのも特徴である。須恵器は、回転のヘラケズリが施されている。甕類は、大部分が、最大径を口縁にもち、底部に向けて徐々に幅を狭めるタイプである。奈良時代に属する。



**X 期** X期は、いわゆる国分期を一括している。A区40号住居跡出土遺物では、須恵器坏底(第106図)部の周辺はヘラケズリが施されているものも含まれ、甕もコの字状を呈していない。そして、コの字状を呈する段階がみられないまま、羽釜の段階へ移行するようである。

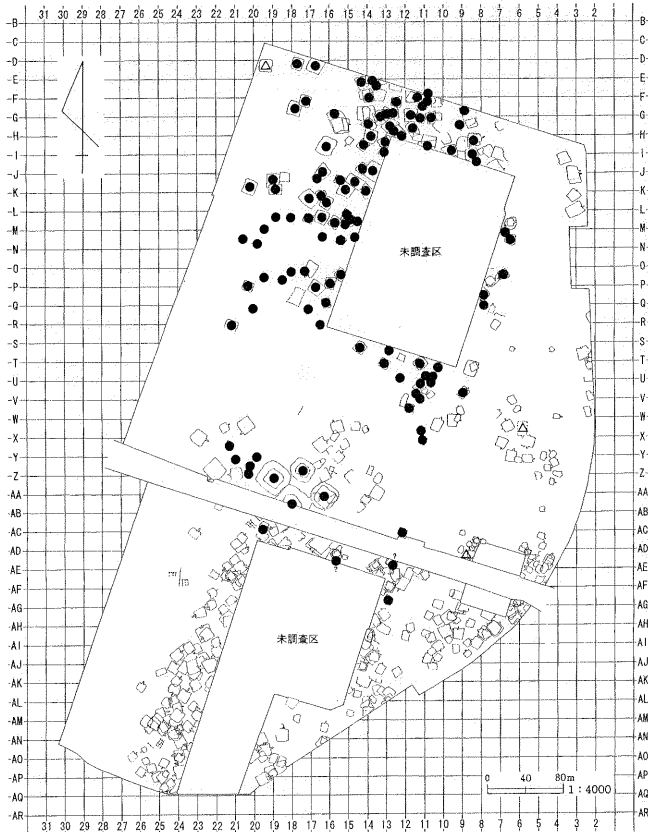
**集落の変遷**

このような土器区分の結果を、出土住居跡に還元すると、第123表に示すとおりとなる。表に基づいて集落の変遷をみてみることにする。

**I 期** I期に属する住居跡数は、A区6基、B区30基、C区66基、DE(D)区1基、EF(第230図)(E)区1基、計104基であり、その他方形周溝墓4基、土器集中地点4ヶ所、畠跡のほ

**第123表 時期別住居跡等一覧表**

時期	A区	B区	C区	D区	E区		F区
					DE区	EF区	
I	85.90.91.93.96.97	1.2.3.4.8.9.10.11.14. 15.17.18.19.47.49. 50.54.56.57.61.62. 63.65.70.72.73.77. 78.79.80	1.2.3.4.5.6.7.8.10.11. 12.13.14.15.16.17.18. 19.20.24.25.31.32.33. 34.36.37.38.39.40.43. 44.46.47.48.51.54.55. 56.57.59.60.61.62.63. 64.65.66.67.68.69.70. 71.72.73.74.75.76.77. 78.79.80.81.82.83.84	29		29	
		方形周溝墓1.2.3.4	土器集中1.2.3.4				
II	15.68		41				
III	2.12.79	39.40.44.66		6.47.62.86			45.53
	1	21.27.30.41.45.46.52 55.58.69.76	22.35.42.45.49.52.53. 58	63.78.88			46
IV	21.23.63.89	22.24.59.60.67		38.77	99		73.88
	18.73.74.75	12.23.25.26.29.35.37 42.51.53	9.26	1.3.7.25.41.43.60.64. 93.94.96	101.103.104 .105	2.11.13.15. 28	32.35.39.42.44.48.49. 50.56.57.58.59.60.70. 71.76.80.105.123.127
V		38.48.		32.45.46.51.53.65.66. 69	102.109.112	3	34.36.40.65.74.82
	3.71.76.88	34	21.23.27	2.9.10.12.20.21.24.42. 50.70.71.83.85.	100.107.115 .116	6.9.14.17. 18.19.21. 22.23.30	38.51.52.61.68.72.79. 81.83.92.95.96.99.101. 103.104.108.110.112. 116.119
VI	5.14.50.52.59.64.72.86 .92	7.33.36		11.48.52.54.72.84	98.106.113	27	43.62.67.77.85.86.89. 90.93.97.109.117.126
	62.94			27.55.67.68.75	110.114	7.24	33.66.69.75.84.87.94. 100.102.106.107.118. 120.121.125.128
VII	1号土器祭祀跡 6号不明遺構			14.19.76			54.55.122
	6.19.35.65.69.70			234号不明遺構			
VIII	17.34.60			56			
	8.10.16.37			40			
IX	9.32.33.41.42.44.45. 47.48.51.54.55.57. 81.82			30.31.33.35.36.37.39. 44.58.59.90.91.92			
X	11.13.20.22.24.25.26 27.28.29.30.31.38.39 40.43.61.78.80.83.84	5.6.13.16.28		15.28.34.57.81	111	1.10	



第230図 住居跡の配置・I期、II期

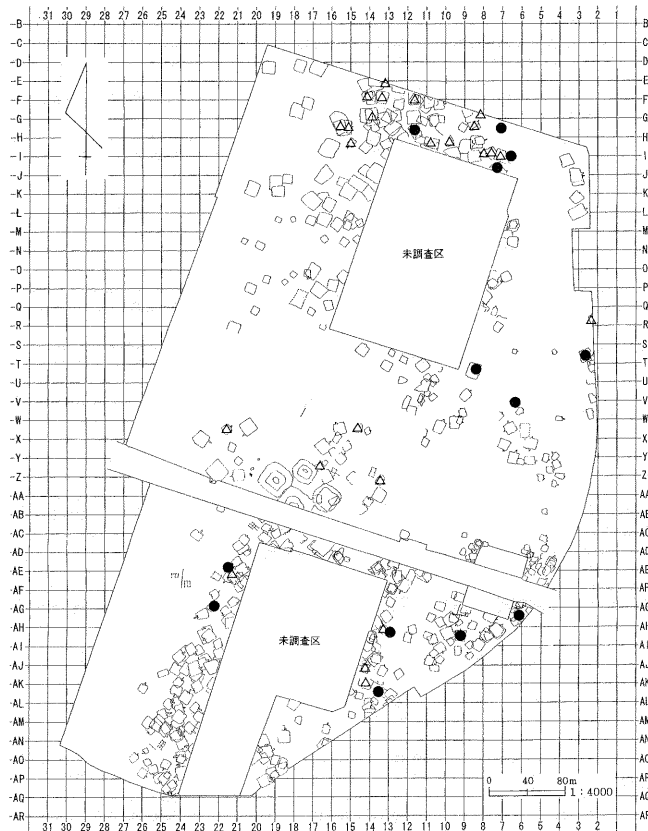
か、方形周溝墓主体部の可能性がある人骨を伴う2段掘り土坑2基がみられる(第230図中●印)。

住居跡の大部分は、遺跡北西部に集中している。あたかも、B区内の未調査区を取り囲むように分布し、中心が未調査区内にあった様相を呈している。空白区を挟んで、遺跡中央部から中央西隅にかけての位置には墓域が形成され、方形周溝墓4基、2段掘り土坑2基が合い接して分布している。さらに、2号方形周溝墓の西側5mの位置には、周溝墓北西溝に平行して、2ヶ所の土器集中地点(『2・3)がみられる。いずれもI期終末の土器群で構成されている。方形周溝墓に関する後世の土器祭祀遺構と考えられる。

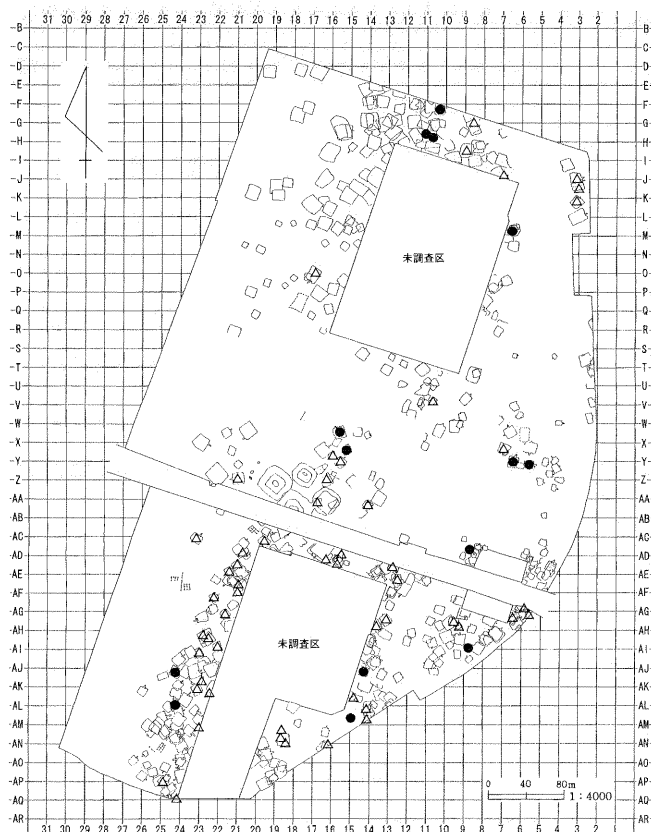
この土器集中地点の西側にはC区24・25号、南西側にはE F区29号、東側にはA区85号、南東側にはD E区29号の、各住居跡が位置している。空白区側にはみられない。各住居跡は、共に小型竪穴であり、出土土器からは、方形周溝墓出土土器よりも新しい要素がうかがえる。2ヶ所の土器集中地点同様、5軒の住居跡は、方形周溝墓に関わる遺構としての存在が考えられる。

空白区には、畠跡が群在している(第43・121図)。畠跡の時期が確定できたのは、B区13・14号、C区16号だけであるが、空白区から居住区を取り囲むように30を越える数が分布し、しかも本期住居の検出されていない他区域からはまったく検出されていないことから、全て本期に属するものと考えられる。そうであれば、B区13・14号、C区16・17号畠跡の北側には本期の住居跡の広がりはないと、考えられるものである。

遺跡北西部に集中する住居跡=居住区、東側を除く3方を囲んで畠跡=生産区、南部に墓域という区分けが成されていたと考えられる。



第231図 住居跡の配置・III期



第232図 住居跡の配置・IV期

## II 期 (第230図)

II期に属する住居跡数は、3軒のみ(第230図中△印)である。いずれもI期住居跡群の外縁に位置している。

## III 期 (第231図)

III期に属する住居跡数は、37軒である。そのうちIII・前期が13軒、III・後期が24軒である。

前期の住居跡(図中●印)は、遺跡の北端中央部に位置するグループ、東端中央からやや北の地域に位置するグループ、遺跡の南半中央部を東端から西端にかけて位置するグループの三つに分離している。

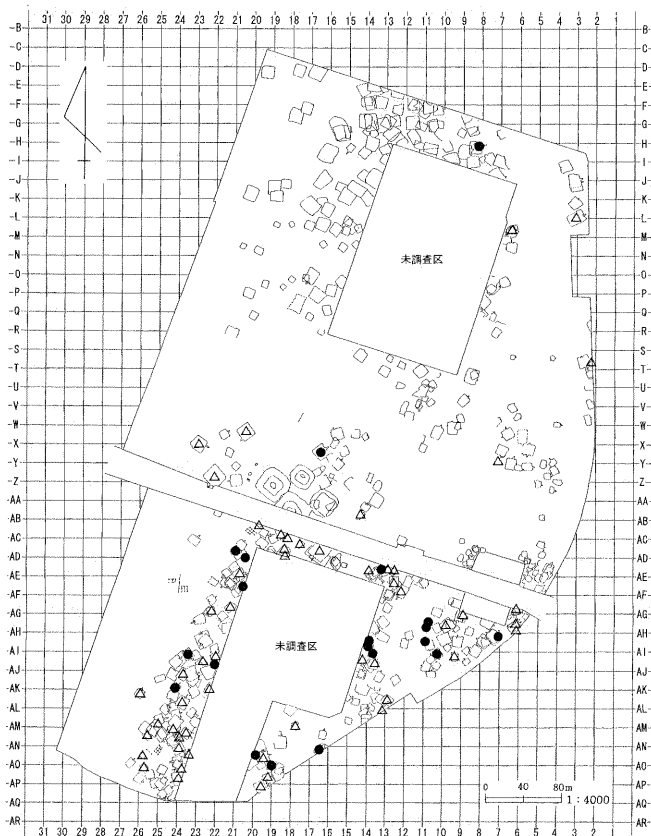
後期の住居跡(図中△印)は、前期のほぼ2倍に増加し、前期の3グループのほか、西端中央からやや南の地域に位置するグループがみられるようになる。住居跡の増加は、遺跡の北端中央部に位置するグループで最も激しく、同時期の住居跡同士での重複もみられる。東端中央からやや北の地域に位置するグループでは、東側への延伸が想定される。新グループは方形周溝墓の北側に近接し、中でもY-16グリッドに位置するB区30号住居跡は、1号方形周溝墓と接している。本期には、すでに方形周溝墓に対する意識が薄れてきたものと考えられる。

## IV 期 (第232図)

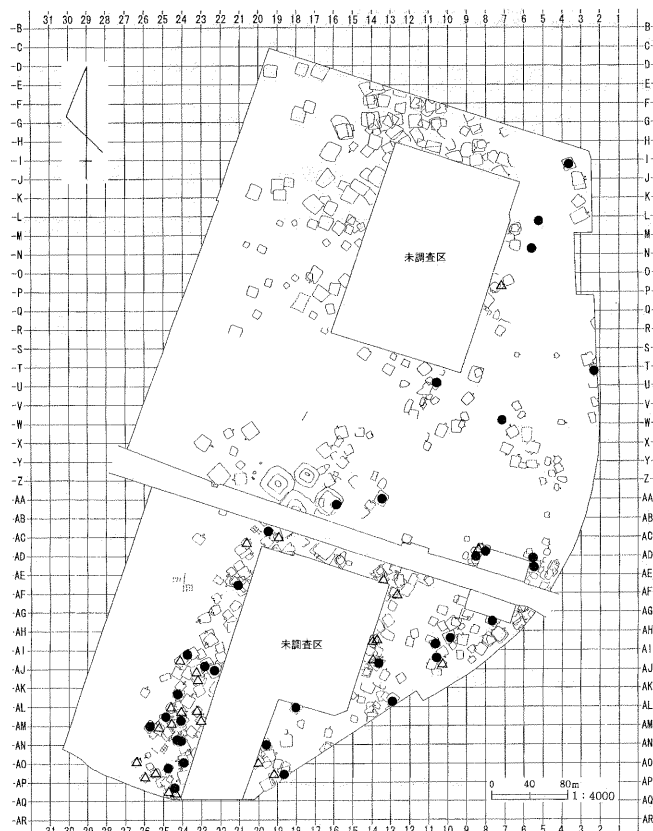
IV期に属する住居跡数は、70軒である。そのうちIV・前期が14軒、IV・後期が56軒である。

前期の住居跡(図中●印)は、遺跡の北端中央部に位置するグループ、中央に位置するグループ、遺跡の南半中央部から南部にかけて位置するグループの、三つに分離している。

後期の住居跡(図中△印)は、ほぼ同一箇所で住居跡数を増加させているが、中央に位置するグループと、遺跡の南半中央部から南部にかけて位置するグループは一体化し、さらに南へ延伸している。なかには、4号方形周溝墓、DE区51号土坑、EF区19・20号土坑、同15・16



第233図 住居跡の配置・V期



第234図 住居跡の配置・VI期

号土坑を切断している住居跡もある。明らかに墓域に対する意識は消滅している。また、遺跡の北端中央部に位置するグループでは、東側への延伸がみられる。

#### V 期 (第233図)

V期に属する住居跡数は、76軒である。そのうちV・前期が20軒、V・後期が56軒である。

前期の住居跡(図中●印)は、大部分が遺跡南半地域に集中し、北半地域は極稀な存在となる。

後期の住居跡(図中△印)は、北半・南半それぞれの地域で住居跡数が増加するが、南半地域では一層、遺跡南端部分への延伸が進んでいる。また、北半地域では、さらに東側へ拡大する様子が伺える。

#### VI 期 (第234図)

VI期に属する住居跡数は、47軒である。そのうちVI・前期が20軒、VI・後期が27軒である。

前期の住居跡(図中●印)は、遺跡南半地域に集中する様相を呈し、前代と同様であるが、中央部と南端部に分散の様子が伺える。また北半地域では、遺跡北東半地域のみ点状に在り、I期・古墳時代前期の住居跡が集中した遺跡北西半地域では、まったくみられなくなる。

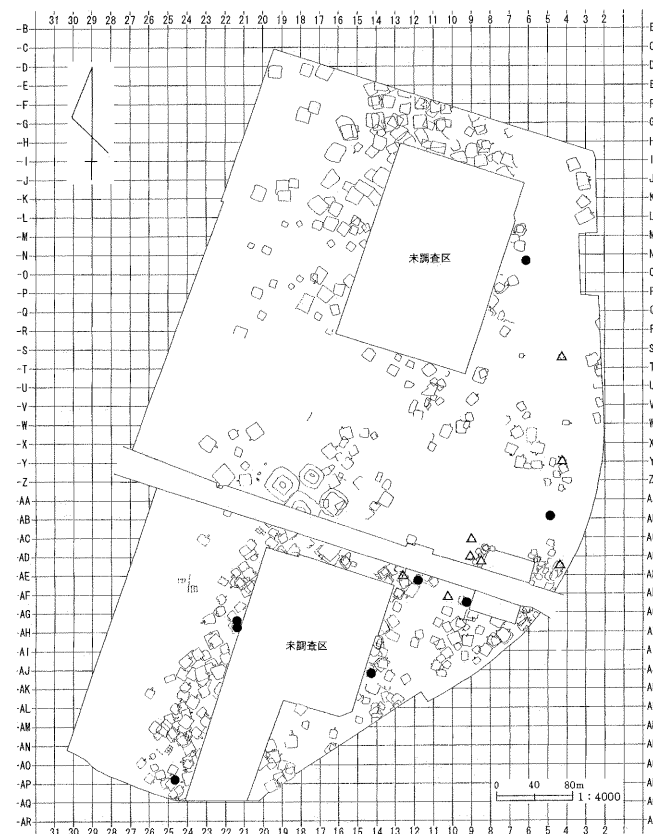
後期の住居跡(図中△印)は、前期の様相をより一層鮮明にし、集中区域の中央部と南端部への分散、北半地域での点状化が強まっている。

#### VII 期 (第235図)

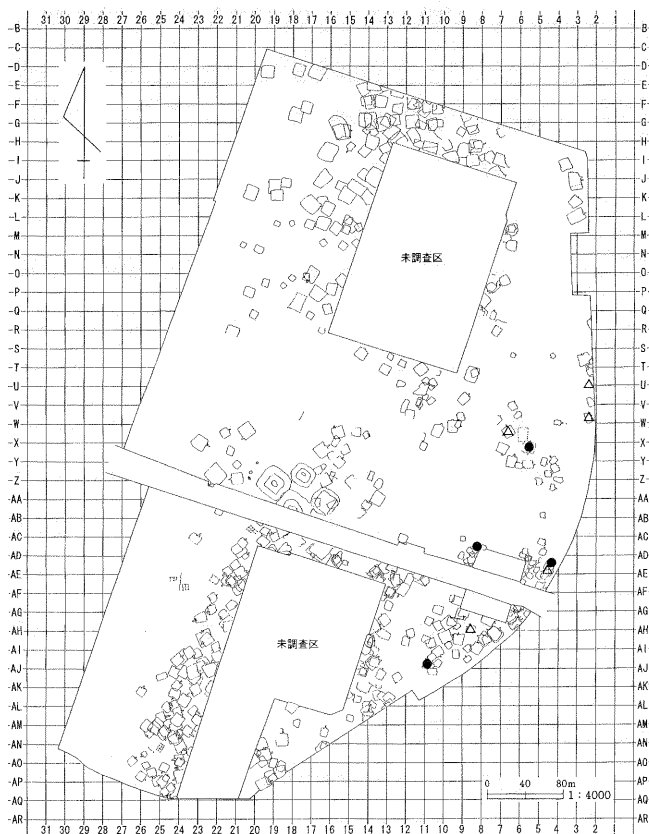
VII期に属する住居跡数は、13軒である。そのうちVII・前期が6軒、VII・後期が7軒である。

前期の住居跡(図中●印)は、中央部にやや集中するが、北半地域及び南端部では、それぞれ1軒ずつが検出されたに過ぎない。

後期の住居跡(図中△印)は、中央部でも東半部分に限られ、北東半地域では1軒が検出されたものの、IV・V期の集中した遺跡南西地域には、まったくみられなくなる。また北東半地域でも、東への移行する傾向がみられる。



第235図 住居跡の配置・VII期



第236図 住居跡の配置・Ⅷ期

### Ⅷ期 (第236図)

Ⅷ期に属する住居跡数は、9軒である。そのうちⅧ・前期が4軒、Ⅷ・後期が5軒である。

前期の住居跡(図中●印)は、前代の傾向をさらに強め、遺跡中央東端に集中する。他の地域では、一切見られなくなる。

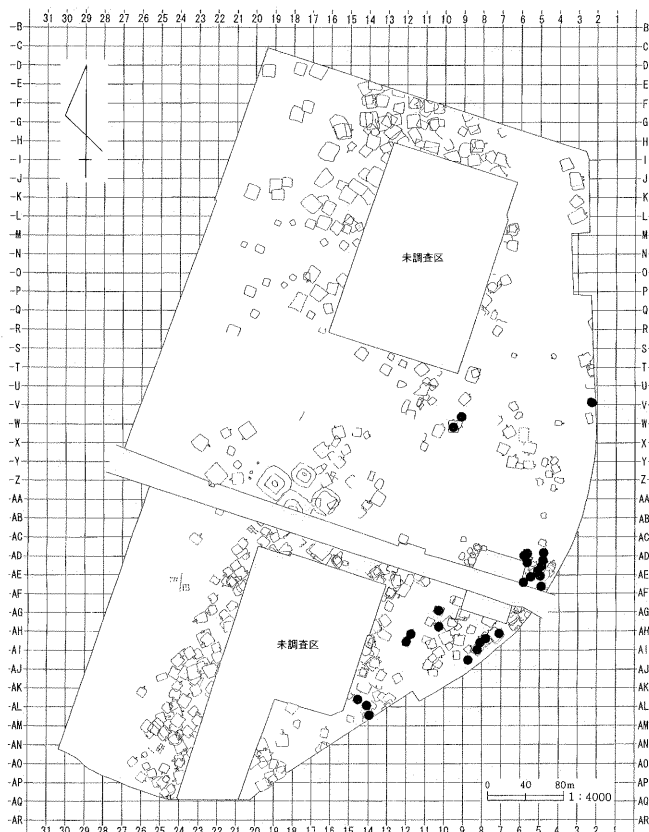
後期の住居跡(図中△印)も、まったく同様な様相を呈している。

### Ⅸ期 (第237図)

Ⅸ期に属する住居跡数は、28軒である。前代の様相を踏襲しており、遺跡中央東端に集中する。他の地域では、一切見られない。また、南東端部では、特に集中し、さらに南東部への拡大が想定される。

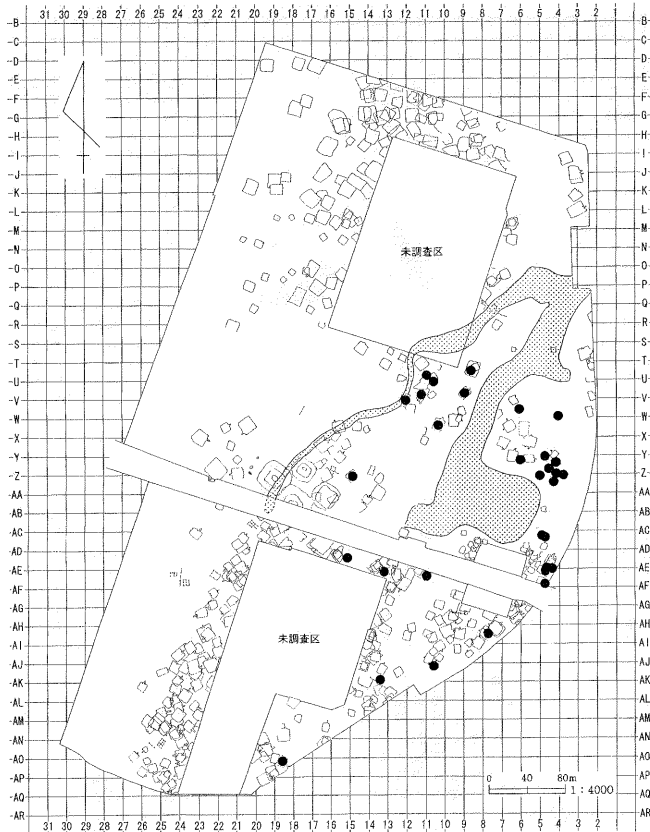
### X期 (第238図)

X期に属する住居跡数は、34軒である。前代に比較すると、遺跡中央東半地域から、南東半地域へと拡大し、中心が遺跡中央部・分布範囲の北部へと移行している。しかしながら、前代の中心地でも、ある程度の集中はみられ、さらに東部への拡大が想定される。



第237図 住居跡の配置・Ⅸ期

遺跡中央の東半地域には、0-2グリッド付近から遺跡内へ入った水路(A区1号溝跡・図中アミ部分)がみられる。P-3グリッド付近で二股に分離し、一方は、B区南半を南西方向に通って、2号方形周溝墓の上面を浅く削平し、終焉している。幅も南へ移行するに従って細くなっている。いま一方は、A区内を南々西方向に進み、A区南端部分で東西50m、南北20mに及ぶ池状となり、終焉している。幅22m、深さは80cmを計る。いずれも南端が閉じられた、入り江状を呈することとなる。覆土中には、浅間B軽石層(天仁元年-1108年-降下)の純層が堆積している。また、溝底面は、周囲で検出されている住居跡の底面よりはるかに深く、A区14号住居跡(半分切断されている)のように、多くの住居跡が切断・消滅したと考えられる。



第238図 住居跡の配置・X期

また、時期の判明した住居跡は、検出された509軒のうち421軒であり、不明の88軒は、重複関係、カマドの有無等住居跡の特徴から、大半が古墳時代後期、中でも本分類のⅣ～Ⅵ期に属するものと考えられる。

こうした中、時代を通観すると、一本木前遺跡集落は、Ⅰ期に遺跡北西半に出現し、同期に徐々に拡大し、居住区の周辺部に畠作地域を、そして、これらの南端・遺跡中央西部に墓域をも作り出していったのである。Ⅱ期には、Ⅰ期居住区の周辺部にわずかに住居跡が検出されたのみであるが、Ⅲ期には、遺跡の北・中央・南中央の3ヶ所に分離し、Ⅳ期に継続していく。しかしこの中で、北側の密度が徐々に薄れ、中心が遺跡中央から南半部分へと移行する様相をみせてくる。

Ⅴ期に入ると、ほぼ南半のみとなり、Ⅵ期に至っては、北側ではその東寄り部分に点在するのみで、Ⅰ期に住居跡が集中した、遺跡北西半地域では、まったくみられなくなる。さらにⅦ期になると、住居跡数事態も減少し、中央部南半地域にまとまりがみられるものの、他は点在という状況となる。Ⅷ期には、遺跡中央東端に集中するのみで、他地域にはまったくみられないようになり、Ⅸ期にやや拡大するものの、同じ状況が継続する。そしてⅩ期に入ると、遺跡南東部全域に拡大するものの、やはり他地域にはまったくみられない状況は続いているのである。

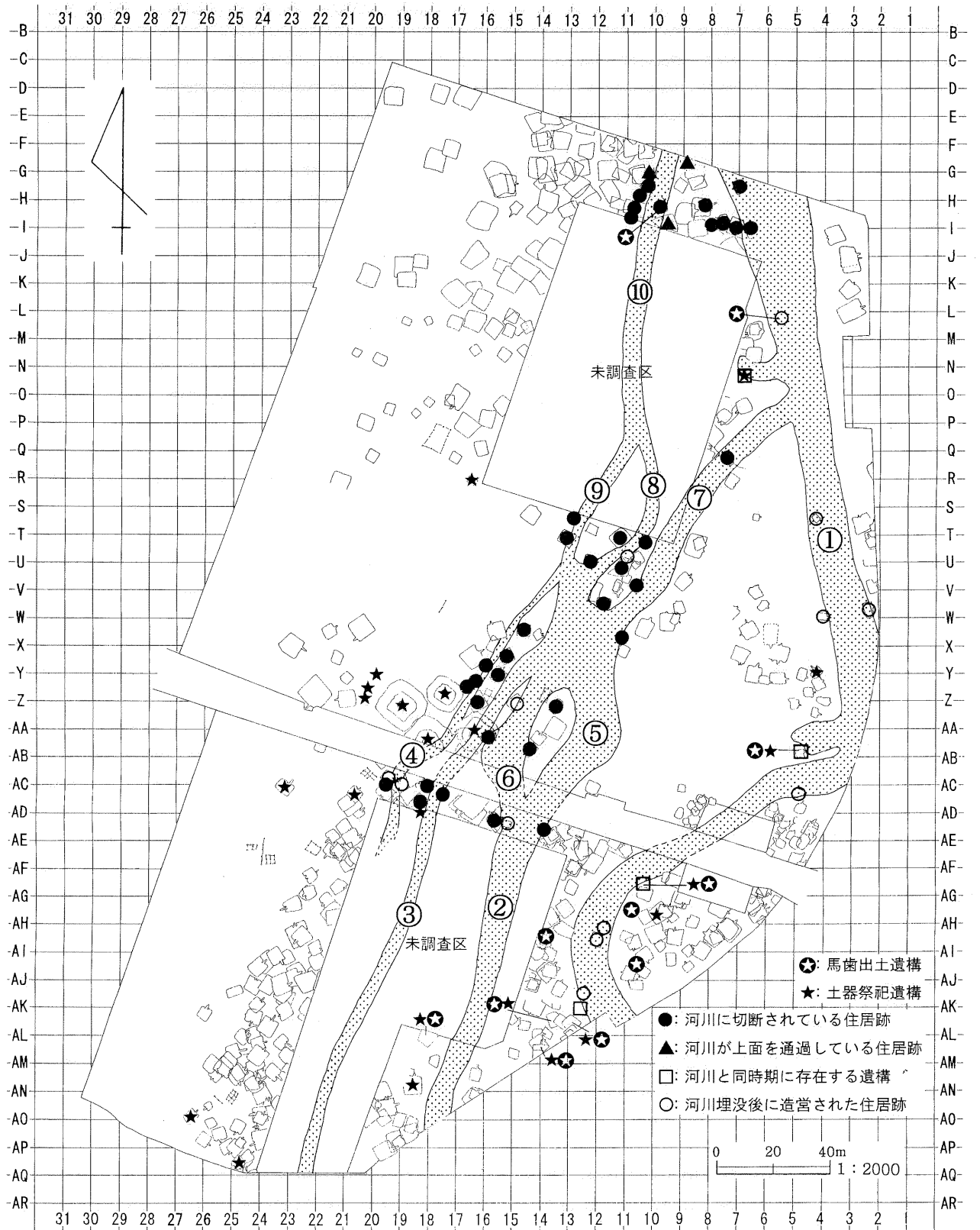
### 河川跡

さて、A区内南西部における住居跡等の遺構不在の理由は、前記のとおり、A区1号溝(第239図)跡による切断削除による消滅と考えられるが、A区の北西部から中央南東寄りの地域及びA区の中央南東寄りからDE区中央部にいたる地域でも住居跡等の遺構不在地域がみられる。こうした住居跡の偏在性をもたらした最大の要因は、河川跡(図中アミ部分)の存在であろう。

河川跡は、覆土に荒川系の砂礫を含み、現新奈良川の原型を成すものと考えられる。

一番東側を通る本流(図中①)、支流(図中②・③・④)、そして②・③・④流が分流・合流を繰り返し、北端では本流①と支流⑩の2条になり、さらに北側でこれらも合流する様相を呈している。河川跡と住居跡等との重複関係は以下のとおりである。

本流①は、DE区及びA区内では、住居跡等を削平・削除していない。しかし、北端の西岸では、B区39号～46号、48号各住居跡を切断もしくは削平している。39号・40号・44号各住居跡はⅢ・前期、41号・45号・46号各住居跡はⅢ・後期、48号住居跡は



第239図 古墳時代後期河川流路及び土器祭祀遺構の配置

V・前期に所属している。また本流路埋没後構築された住居跡は、A区86号(VI・前期)、A区6号(VII・後期)、A区9号・DE区58号・59号(IX期)、A区11号・31号(X期)、DE区79号(不明)である。支流②に切断もしくは削平されているのは、EF(E)区11号・13号(IV・後期)、6号(V・後期)、12号(不明)各住居跡であり、埋没後構築された住居跡は、EF(E)区10号(X期)である。支流③に切断もしくは削平されているのは、EF(E)区17号、18号、22号各住居跡であり、いずれもV・後期に属している。また、B区4号方形周溝墓(I期)も削平されている。支流④に切断もしくは削平されているのは、B区3号・4号方形周溝墓・EF(E)区29号住居跡(I期)、B区21号・30号住居跡(III・後期)、24号住居跡(IV・前期)、25号・26号・29号住居跡(IV・後期)であり、埋没後構築された住居跡は、B区23号(IV・後期)EF(E)区27号(VI・前期)・24号(VI・後期)である。支流⑤に切断されているのは、B区27号住居跡(III・後期)である。支流⑥に切断もしくは削平されているのは、B区4号方形周溝墓(I期)、B区34号住居跡(V・後期)、36号住居跡(VI・前期-支流③の埋没後構築)であり、埋没後構築された住居跡は、B区28号(X期)である。支流⑦に切断されているのは、B区17号・18号住居跡(I期)、B区12号住居跡(IV・後期)、A区100号(不明)である。支流⑧に切断もしくは削平されているのは、B区1号・2号・8号・10号住居跡(I期)であり、埋没後構築された住居跡は、B区5号(X期)である。支流⑨に切断もしくは削平されているのは、B区3号・11号住居跡(I期)である。支流⑩が上面を通過している住居跡は、B区54号・57号・63号住居跡(I期)であり、切断もしくは削平されているのは、B区70号(I期)、66号(III・前期)、58号・69号(III・後期)、59号(IV・前期)である。

各流路によって削除された住居跡の時期と、埋没後構築された最も古い時期の住居跡をまとめると、次のようになる。

本流①・B区39号(III・前期)～B区48号(V・前期)－A区86号(VI・前期)  
 支流②・E区11号(IV・後期)～E区6号(V・後期)－E区10号(X期)  
 支流③・E区17号(V・後期)－B区36号(VI・前期)  
 支流④・3・4号方形周溝墓(I期)～B区25号(IV・後期)－E区27号(VI・前期)  
 支流⑤・B区27号(III・後期)  
 支流⑥・4号方形周溝墓(I期)～B区36号(VI・前期)－B区28号(X期)  
 支流⑦・B区17号(I期)～B区12号(IV・後期)  
 支流⑧・B区1号(I期)－B区5号(X期)  
 支流⑨・B区3号(I期)  
 支流⑩・B区70号(I期)～B区59号(IV・前期)

これらの結果と遺構の分布状況から、本流①は、I期にはすでに存在し、少なくとも5回の変遷が確認されるものである。このうちAC-3グリッド以南の曲折部分は、古墳時代を通して流行していたものが、IX期・奈良時代には埋没し、利用可能になっていたと考えられるが、以北の北北西流する直線流路は、X期に至っても幅を狭めながらも残存



していたと考えられる。しかしながら、もはや支流の状況となり、本流は東（遺跡外）へ移動していたと考えられるのである。

支流は、②-⑤-⑦、②-⑥-⑦、③-⑧-⑩、④-⑨-⑩の4流が存在している。このうち④-⑨-⑩路は、Ⅳ・後期以後流路となり、Ⅵ・前期には埋没しており、③-⑧-⑩路は、Ⅴ・後期以後流路となり、Ⅵ・前期には埋没していることから、Ⅳ・後期以後流路となった④-⑨-⑩の流れが、Ⅴ・後期以後③-⑧-⑩の流れとなって、Ⅵ・前期には埋没したと考えられる。また②-⑤-⑦路は、Ⅴ・後期以後流路となり、Ⅹ期には埋没しており、②-⑥-⑦路で、Ⅵ・前期以後流路となり、Ⅹ期には埋没していることから、Ⅴ・後期以後流路となった②-⑤-⑦の流れが、Ⅵ・前期以後②-⑥-⑦の流れとなって、Ⅹ期には埋没していたと考えられるのである。

こうした、時代の変化に伴う流路の変遷が、一本木前集落に与えた影響の大きさには、計り知れないものがある。

**馬 歯** 出土した遺物のうち、最も注目されるのが、馬の歯である。馬歯を出土した遺構は、(第239図) 第124表に示した以外に、DE区10号不明遺構、25号溝跡（共に時期不明）等がある。

最も古いDE区86号住居跡（Ⅲ・後期）から、最も新しいDE区92号住居跡（Ⅸ期）までみられ、DE区86号住居跡、83号住居跡、EF区98号住居跡、A区1号土器祭祀跡、DE区4号不明遺構、DE区92号住居跡など、土器祭祀跡（住居内土器祭祀跡を含む）に伴って出土している確率が非常に高いという特徴をもっている。また、河川本流①に近接した遺構からの出土が大部分であるという特徴も併せもっている。

第124表 時期別馬歯出土遺構一覧表

時期	A 区	B 区	C 区	D 区	DE区	EF区	F 区
Ⅲ		58		86			
Ⅴ				45. 83			
Ⅵ	86			54. 67	98		
Ⅶ	1号土器祭祀跡			4号不明遺構			
Ⅸ				92			

**土器祭祀** 土器祭祀跡は、独自に河川岸辺で行われるもの-Aタイプ、住居跡廃絶後わずかに埋没した時点で行われるもの-Bタイプ、住居跡廃絶後ほぼ埋没した時点で行われるもの-Cタイプの3種類がみられる（第125表）。

Aタイプには、A区1号土器祭祀跡、6号不明遺構、DE区4号不明遺構が含まれる。

1号土器祭祀跡（第240図）は、A区AA-4グリッドに位置し、本流①から引き込まれた入り江の最奥部に、東西4m、南北3.4m、ほぼ方形の平坦面が作り出され、北東隅に設けられた、方形が意図された敷磔を中核として展開された土器祭祀跡である。敷磔上には馬の下顎が置かれ、北東隅（最も入り江に近接する位置）に置かれた須恵器甕を扇の要として、東辺が須恵器甕、北辺が土師器甕、要の対角（西辺及び南西隅）に須恵

第125表 時期別土器祭祀遺構一覧表

時期	A 区	B 区	C 区	D 区	DE区	EF区	F 区
I		方形周溝墓 1. 2. 3. 4 土器集中 1. 2. 3. 4					
III				86			
IV					[103]		(32)
V				42, [45], (83)		18	
VI				[54], [67]	98		33, 118, [125]
VII	1号土器祭祀跡, [19]. (6号不明遺構)			4号不明遺構			
IX				[31], (92)			

器・土師器の杯が並置されている。杯は、上向き水平で重ねられているものと、単独のものがみられる。また、杯の間からは、鳥型を含む滑石製模造品、白玉、土錘が伴出している。土器群は、須恵器が杯1、甕3（5）、提瓶1、土師器が杯41、甕12で構成されている。VII・前期の所産である。

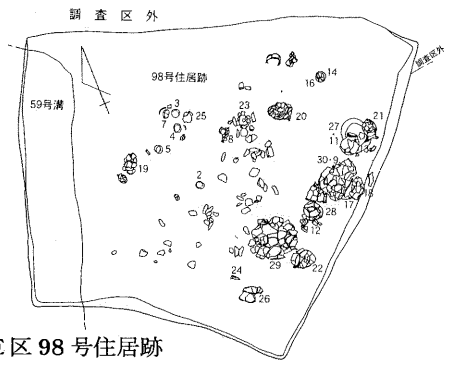
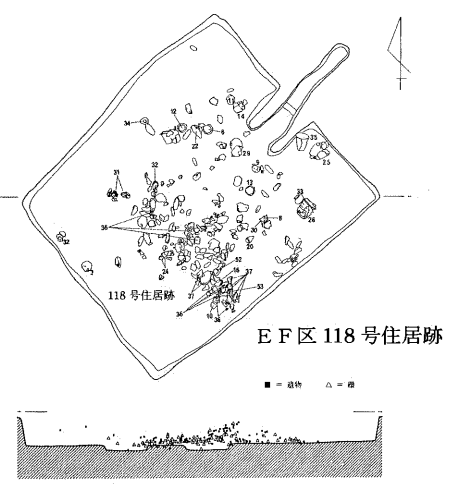
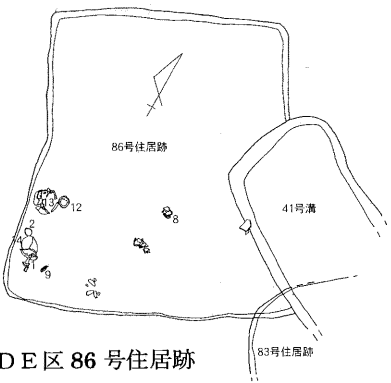
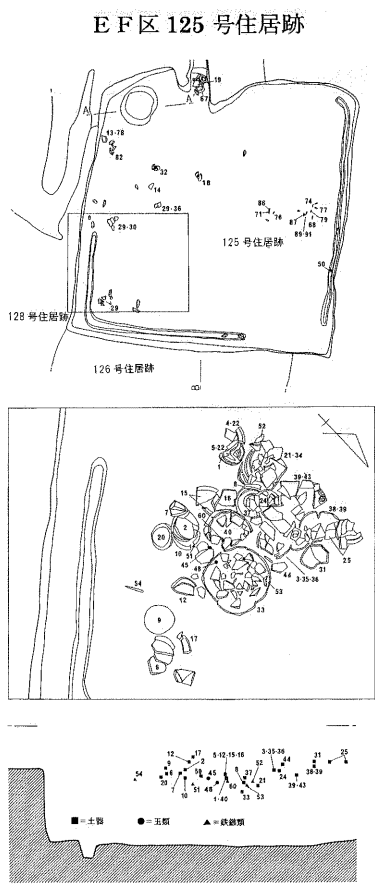
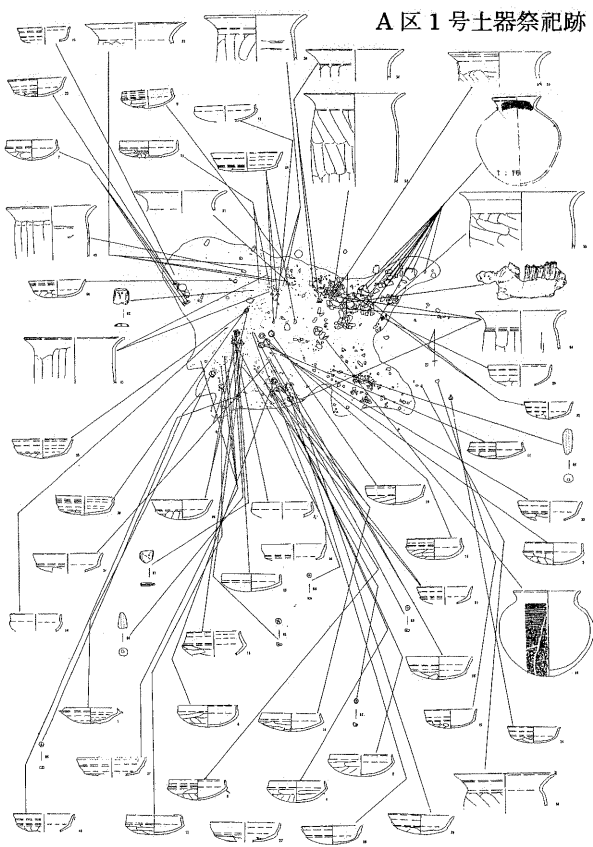
6号不明遺構は、A区N-6グリッドに位置し、本流①から引き込まれた入り江の最奥部から、土器群が流れ込む状況で検出されている。土器群は、須恵器が甕1、土師器が杯2、高杯1、甕1の他土錘が検出されたに過ぎないが、礫も多量に含まれ、その状況から本類に含まれると判断したものである。VII・前期の所産である。

DE区4号不明遺構は、DE区内で大きくカーブを描いて流行する本流①の両岸、カーブの内側（北）と外側（南）に分かれて位置している。（北）は、AF-12グリッドに位置し、本流①の内側・東岸から、馬歯・礫・土器群が流れ込む状況で検出されたものである。土器群は、須恵器が壺1、土師器が杯8、高杯3、甕7で構成され、他に管玉、土錘、土製支脚が伴っている。VII・後期の所産である。（南）は、AJ-12グリッドに位置し、本流①の外側・西岸に、1.2×0.8m範囲に敷礫が施されていたものであるが、実測可能な土器は伴っていない。

住居廃絶後、わずかな時を経て展開されるBタイプには、馬歯を伴うもの・B-1タイプ（DE区86号、83号、98号、92号各住居跡）、馬歯を伴わないもの・B-2タイプ（DE区42号、EF区18号、33号、118号各住居跡）がみられる。

DE区86号住居跡（第240図）は、B-1タイプである。AK-13グリッドに位置する。竪穴南隅部の第一次埋没土上に、南隅から南西壁に沿って杯3、甕1が並ぶ。甕からは、東側に甕が連続する。南隅から東へは、甕を経て礫群へと続く。こうしたほぼ方形に土器群に囲まれた範囲の中央付近から、馬歯が検出されているものである。土器群は、杯7、甕6、甗1で構成されている。本形態の未発達な様相を呈する。III・前期の所産である。

DE区98号住居跡（第240図）は、B-1タイプである。AK・AJ-17・18グリッドに位置する。竪穴南東半部の第一次埋没土上に、礫を一辺2.1m範囲に敷き、馬歯及び剣形模造品を載せている。敷礫の三方縁辺部には、土器群が『コ』の字状に並置されてい



第240图 土器祭祀遺構集成

る。南東辺には、大甕2をそれぞれの核として、甕・杯が並置され、一方の核となった大甕の内部には杯が密着していた。北東辺には、甕・杯が混在して置かれている。また北西辺では、杯を中心に甕が配されている。いずれも密着もしくは近接しており、据え置かれた状況を呈している。残存状況の良い南東辺では、土器列の長さは3.1mに達している。土器群は、須恵器が杯1、土師器が杯13、甕16で構成され、他に剣形模造品を伴っている。Ⅶ・後期の所産である。

DE区42号住居跡（第240図）は、B-2タイプである。AG-9グリッドに位置する。竪穴南隅の第一次埋没土上に、南西壁に沿って土師器甕2・甕2（内1は杯2を内包）が並び、その内側に杯7が2列に並んでいる。土器列の北端からは、南西壁に直行する方向に甕4が配され、内1には杯が内包されている。南端からは、南西壁に直行する方向・南東壁に沿って甕4、杯2が配されている。土器列は、全体で『コ』の字状を呈し、中央には礫が散在している。北西と南東の土器列は1.50mの間隔をもつ。土器群は全て土師器であり、杯14、高杯1、甕14、甕2で構成されている。Ⅴ・後期の所産である。

E F区118号住居跡（第240図）は、B-2タイプである。AN・AO-26グリッドに位置する。竪穴中央の第一次埋没土上に、竪穴と相似形で、一辺約2.2mの方形に礫が敷かれ、礫上に土錘、周囲に土器が置かれている。南隅には、須恵器提瓶、その周囲に土師器杯、北西方向に土師器甕、須恵器横瓶、土師器壺と続く。土師器壺から北東方向へは、土師器壺、杯、高杯、杯3と続く。カマド前は列を成しておらないものの、土師器鉢、杯がみられる。北東端に土師器甕、その周囲に壺、そして杯、壺、高杯と続き、南隅須恵器提瓶の周囲には、砥石2がみられる。土器列は、全体で『コ』の字状を呈する。土器群は、須恵器が提瓶1、横瓶1、土師器が杯17、高杯5、甕6、鉢2、壺3、甕1で構成されている他、土製丸玉1、土錘13、砥石3が出土している。Ⅵ・後期の所産である。

住居廃絶後、かなりの時を経て展開されるCタイプにも、馬歯を伴うもの・C-1タイプ（DE区45号、54号、67号各住居跡）、馬歯を伴わないもの・C-2タイプ（DE区103号、E F区125号、A区19号、DE区31号各住居跡）がみられる。

DE区45号住居跡は、C-1タイプである。AG-10グリッドに位置する。第一次埋没土上に、土師器杯2、甕3、壺1、甕1、ミニチュア土器1、土製支脚1とともに、馬歯、骨片が検出されている。Ⅴ・前期の所産である。土器量の少なさが特徴的であり、同タイプのDE区54号住居跡では13点、DE区67号住居跡に至っては3点である。

E F区125号住居跡（第240図）は、C-2タイプである。AP-24グリッドに位置する。竪穴東隅の覆土上から、東西85"、南北60"の長方形区画内に、土器37、ガラス小玉2、滑石製白玉3、石製紡錘車1、刀子1、鉄鏃13、鉄製鋤先1、砥石1が重ね置かれている。土器群の構成は、須恵器が、高杯1、短頸壺3、瓦1、提瓶1、横瓶1、土師器が、杯21、高杯2、甕5、壺1、手捏ね土器1から成っている。杯は上面に位置するものや甕内に内包されるものが多い。鉄製品は下面に位置する。Ⅵ・後期の所産である。

さて、土器祭祀に伴う馬歯は、総じて未発達な様相を呈し、若い馬が祭祀の対象であった可能性が高い。

このような犠牲馬を伴った土器祭祀のうち、竪穴住居以外の特定の場所で展開されるAタイプは、①河川の屈曲部分及び、入り江の最奥に位置すること、②敷磔を中核とすること、③その中心に馬下顎もしくは馬歯を据えていること、④方形の区画が存在すること、⑤敷磔の周囲に多量の土器群を配置していること、⑥土器群は、器種別の配置がなされること、⑦石製模造品を伴う場合が多いこと、⑧時期がⅦ期に集中していることという特色を備えている。同様に、馬歯を伴い、住居廃絶後わずかな時を経て竪穴内で展開されるB-1タイプには、①河川流路に近在していること、②敷磔を中核としていること、③その中心に馬歯を据えていること、④方形の区画が存在すること、⑤敷磔の周囲に多量の土器群を配置していること、⑥土器列は、方形の三方のみに配されること、⑦土器群は、器種別の配置がなされるものと、器種を交えて配されるものがあること、⑧石製模造品を伴う場合が多いこと、⑨時期がⅢ・前期からⅨ期に及んでいることというように、Aタイプと共通する多くの特色の中に、わずかな差異もみられるのである。

また、馬歯を伴い、住居廃絶後かなりの時を経て竪穴内で展開されるC-1タイプには、①河川流路に近在していること、②敷磔も方形の区画ももたないこと、③馬歯が土器と混在すること、④土器量が少ないこと、⑤時期がⅤ・Ⅵ期に集中することというように、前二者とは、大きな違いをみせている。

一方、馬歯を伴わず、住居廃絶後わずかな時を経て竪穴内で展開されるB-2タイプには、①河川流路に近在するもの（Ⅴ期）と、しないもの（Ⅵ期）があること、②敷磔を中核としていること、④方形の区画が存在すること、⑤敷磔の周囲に多量の土器群を配置していること、⑥土器列は、方形の三方のみに配されること、⑦土器群は、器種別の配置がなされるものと、器種を交えて配されるものがあること、⑧石製模造品は伴わないこと、⑨時期がⅤ・Ⅵ期に集中することという特色を備えている。

馬歯を伴わず、住居廃絶後かなりの時を経て竪穴内で展開されるC-2タイプには、①河川流路は意識されていないこと、②方形は意識されていないこと、③土器は混在し、DE区103号住居跡106点、A区19号住居跡48点、DE区31号住居跡98点というように、特に多量であること、④石製模造品を伴うものと伴わないものがあること、⑤時期がⅣ・後期からⅨ期に及んでいることという特色を示し、一括投棄の手法による祭祀形態と考えられるものである。しかし、EF区125号住居跡では、明らかに方形が意識され、Ⅵ・後期の時期に、B-2タイプと混同して展開された可能性が考えられる

以上を総括すると、古墳時代後期に入るや、河川流路に近在して、土器祭祀の基本形態であるB-1タイプが展開されるとともに、河川流路は意識されることなく従形態であるC-2タイプが並存し、Ⅸ期まで継続される。しかし、Ⅴ・Ⅵ期において、河川の乱流に伴って、竪穴内では馬歯を伴わないが大量の土器群をもつB-2タイプと、馬歯を伴うが土器が極端に少ないC-1に分離し、それが流路の比較的安定したⅦ期に流路に面し、竪穴外で展開されるAタイプに統括されたものと捉えることができよう。

水の恩恵を享受するとともに水と戦い、水への感謝と恐れ、一本木前古代集落の人々の息吹が強く感じられるところである。

# 写真図版



北より



南より

図版2 A区遠景



南より



北より





全景



遺物出土状況(1)



遺物出土状況(2)

図版4 A区87・88・89号住居跡

87・88号全景



88号カマド



89号カマド





90号全景



91号全景



92号全景

图版6 A区93号·94号(1)住居跡

93号全景



同遺物出土状況



94号全景





住居跡内土坑



遺物出土状況 (1)



遺物出土状況 (2)

図版8 A区94号(3)・95号住居跡

94号遺物出土状況(3)



95号全景



94号・95号カマド





全景



カマド



貯蔵穴

96号遺物出土状況



97号全景



98号全景







99号全景



100号全景



296号土坑



同遺物出土状況（1）

图版12 A区土坑 (2)



296号遺物出土状况 (2)



300号



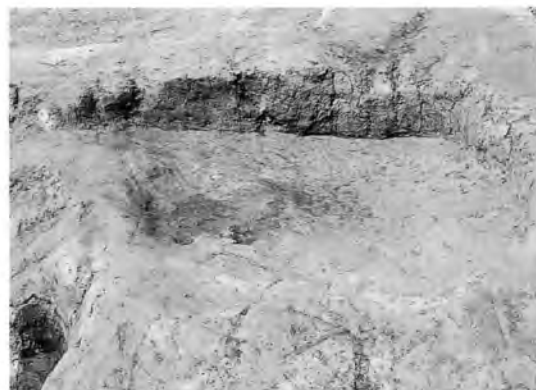
296号遺物出土状况 (3)



301号



297·298号



302号



299号



303号



304号



309号



305号



310号



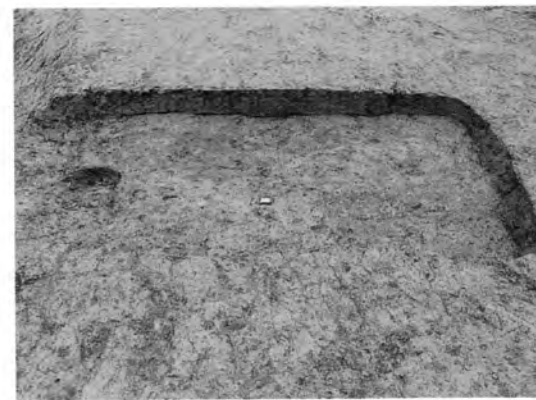
306·307号



311号



308号



312号

图版14 A区土坑(4)·10号井户迹



313号



317号



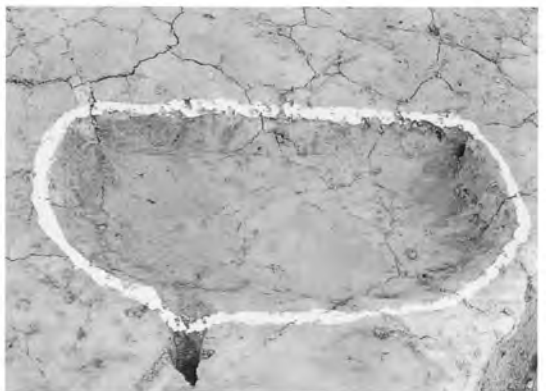
314号



318·319·320·321·322号土坑·10号井户迹



315号



323号



316号



324号



325号



330号



326号



331号



327·328号



6号井戸跡



329号



7号井戸跡

图版16 A区井戸跡(2)・溝跡(1)



8号井戸跡



A区 75・76・77・78・79号溝跡  
B区 34・35・36号溝跡



9号井戸跡



80・81号溝跡



72号溝跡



82号溝跡



83号



84号~87号



88号



89号~94号



94号遺物出土状況

図版18 A区河川跡（1）



全景（北西より）

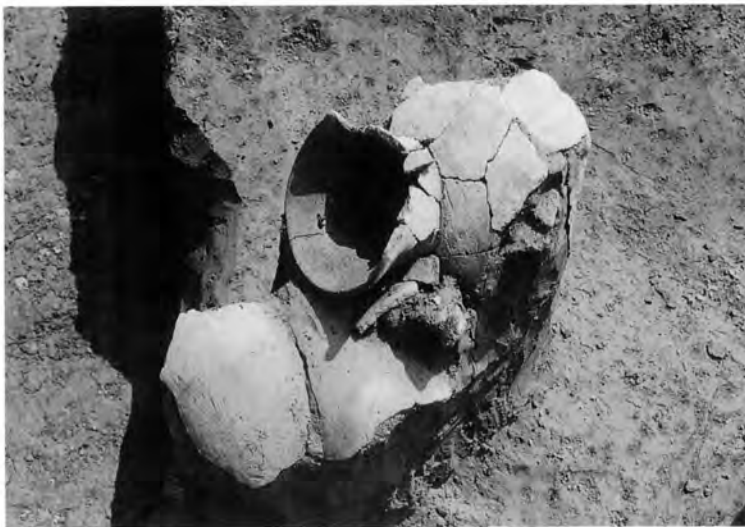


全景（北東より）





遺物出土状況 (1)



遺物出土状況 (2)



遺物出土状況 (3)

遺物出土状況 (4)



遺物出土状況 (5)



遺物出土状況 (6)





遺物出土状況 (7)



遺物出土状況 (8)



遺物出土状況 (9)

图版22 A区河川跡 (5)

遺物出土状況 (10)



遺物出土状況 (11)



遺物出土状況 (12)





全景



遺物出土狀況(1)



遺物出土狀況(2)

图版24 A区不明遺構 (2) 5・6号



5号全景



5号遺物出土状況



6号遺物出土状況



86-3



88-12



86-4



88-13



88-1



88-14

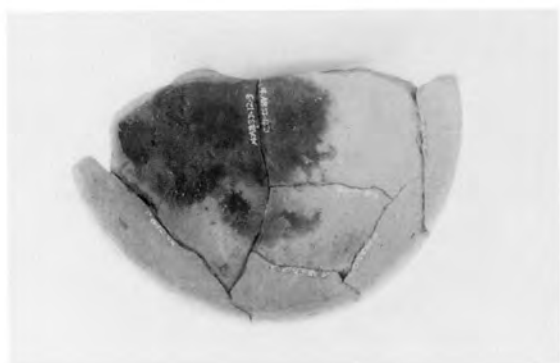


88-10



88-15

图版26 A区89号住居跡出土遺物 (1)



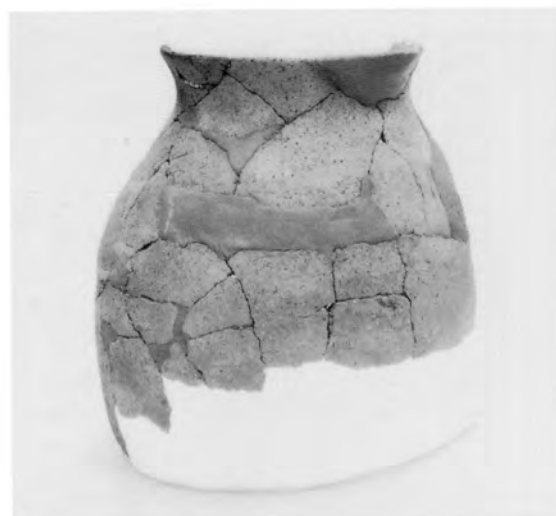
1



2



3



4



5



6





89-7



93-1



90-1



93-2



91-1



94-2



92-2



94-4

图版28 A区94号(2)·96号(1)住居跡出土遺物



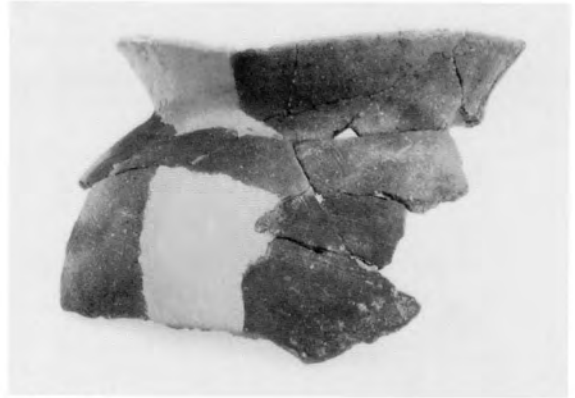
94-5



94-12



94-7



94-20



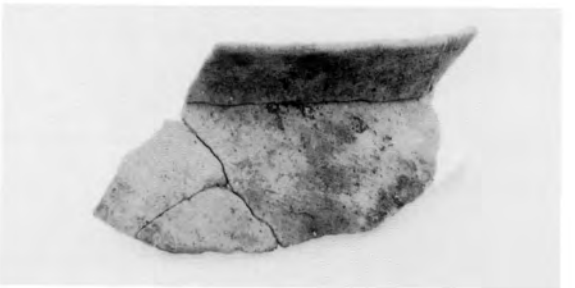
94-10



94-23



94-11



96-2



96-3



96-4



96-5



土坑296- (参考)



土坑303- 1



土坑325- 2



土坑325- (参考)

図版30 A区溝跡・河川跡（1）出土遺物



溝跡94-1



河川跡-9



河川跡-2



河川跡-12



河川跡-4



河川跡-8



河川跡-13



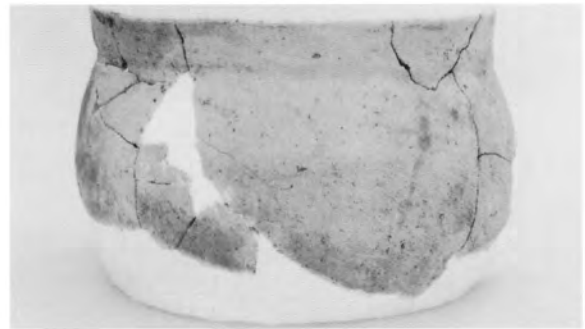
14



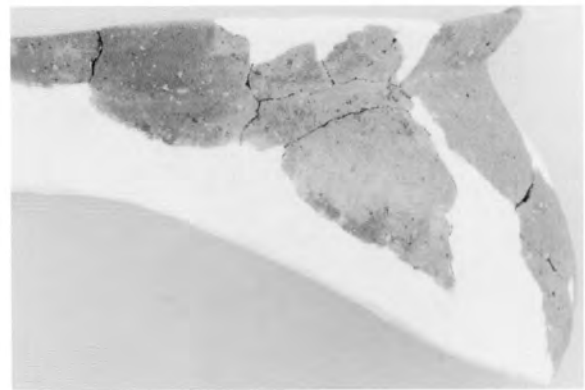
20



15



23



25



16



28

図版32 A区河川跡（3）・不明遺構（1）出土遺物



河川跡-31



不明5-2



不明4-3



不明5-3



不明4-7



不明5-4



不明5-1



不明5-（参考）



不明6-1



不明6-4



不明6-2



不明6-7



作業風景

図版34 B区全景

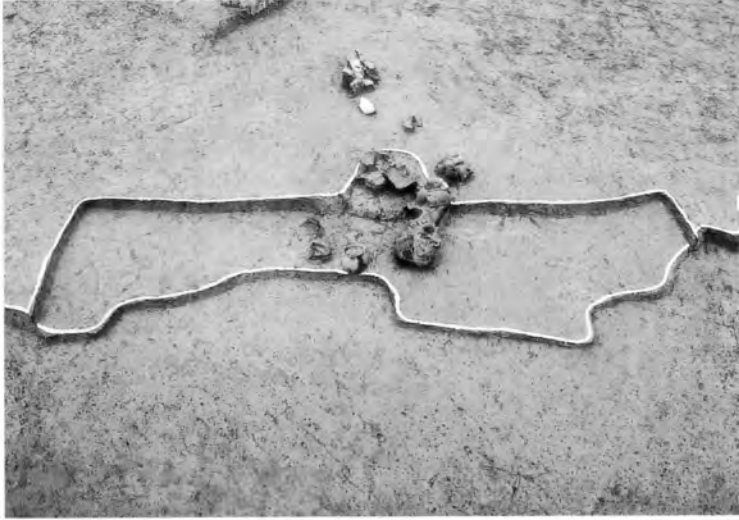


西より

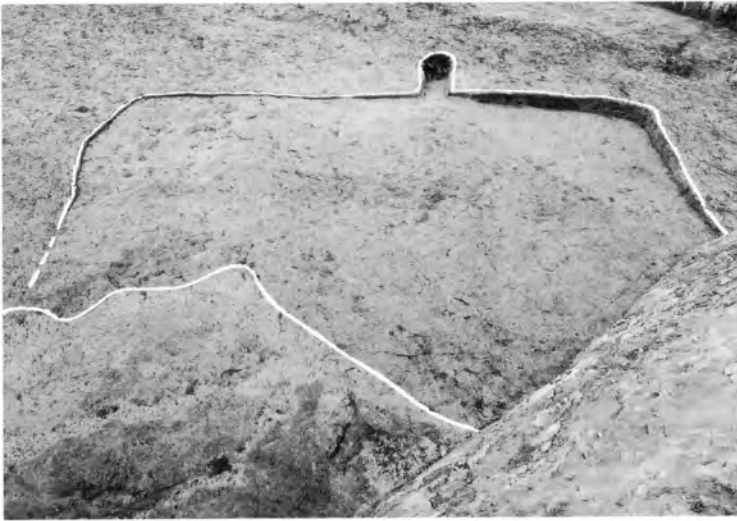


東より





39号全景



40号全景



41号全景

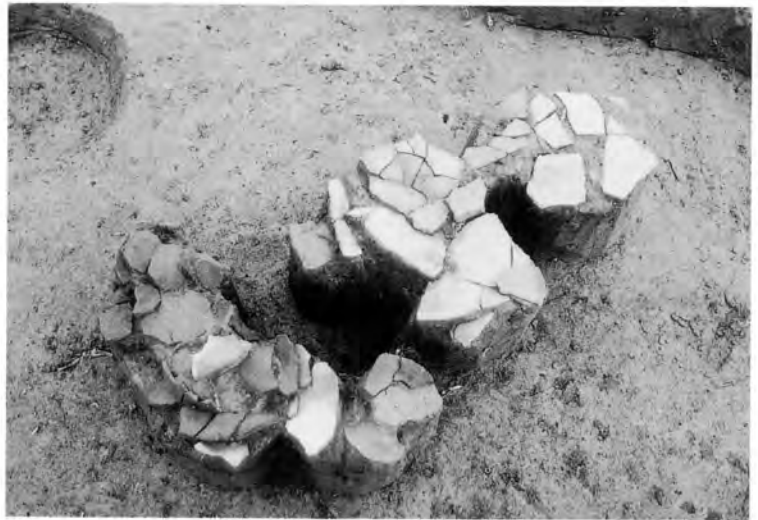
全景



カマド



遺物出土状況





43号全景



同カマド



44号全景

44号カマド



45号・46号全景



47号全景





全景



遺物出土状況 (1)



遺物出土状況 (2)



48号遺物出土状況(3)



49号全景



50号全景



51号全景



同カマド



52号全景

53号全景



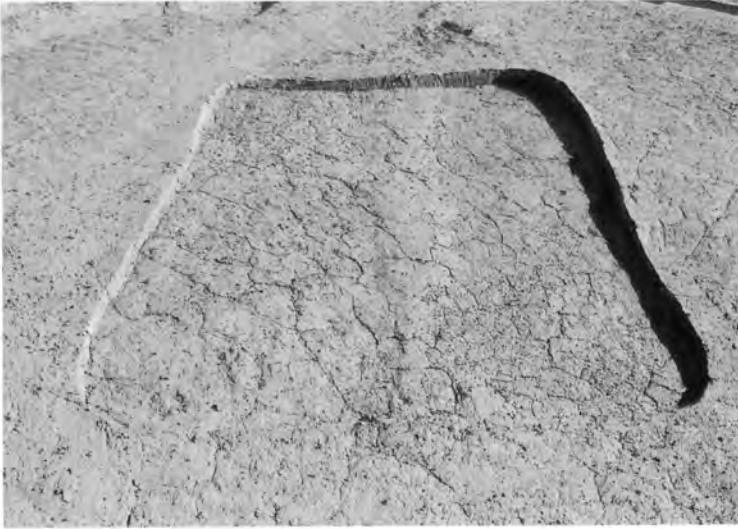
同カマド



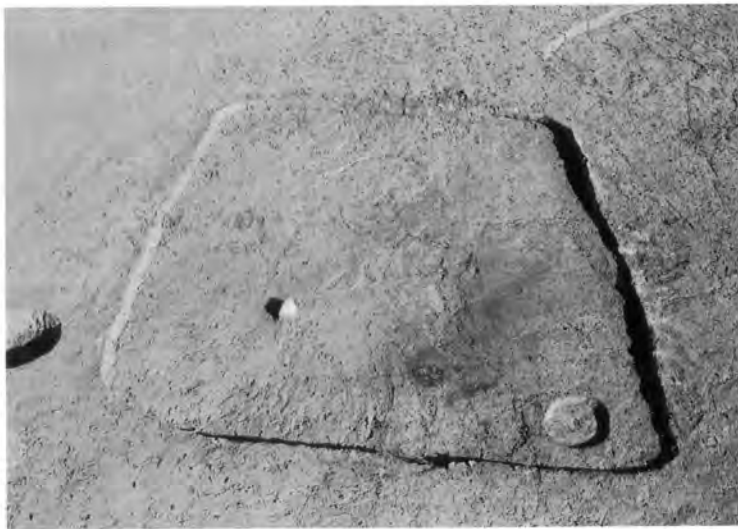
54号全景







55号全景



56号全景



57号全景

57号遗物出土状况



58号全景



59号全景





全景



カマド



遺物出土状況(1)

60号遺物出土状況(2)



61号・62号全景



63号・65号全景





64号全景



66号全景



67号全景

図版48 B区67号住居跡 (2)

カマド



遺物出土状況 (1)



遺物出土状況 (2)





68号全景



69号全景



70号全景

图版50 B区71·72·73号住居跡



71号全景



72号全景

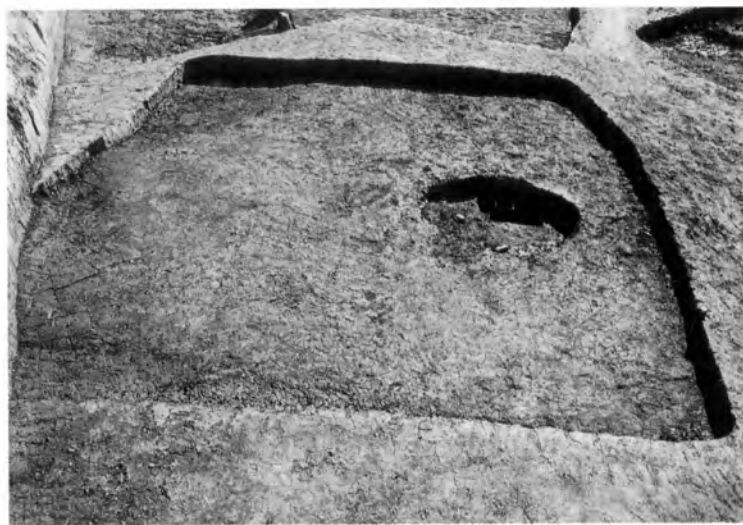


73号全景





74号全景



75号全景



76号全景

77号全景



78号全景



同遺物出土狀況(1)

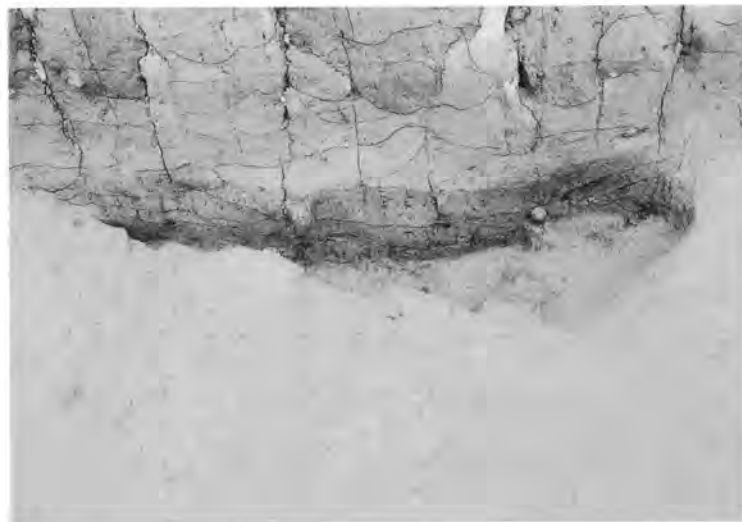




78号遺物出土状況(2)



同遺物出土状況(3)



79号全景(南より)

図版54 B区79号(2)・80号(1)住居跡



79号全景(東より)



80号全景(南より)



同全景(西より)



遺物出土状況 (1)



遺物出土状況 (2)



遺物出土状況 (3)

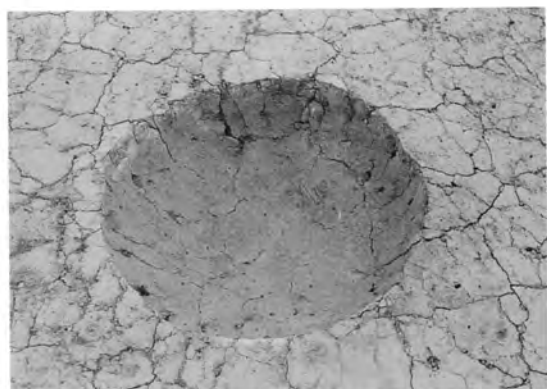
图版56 B区土坑(1)



57号



61号



58号



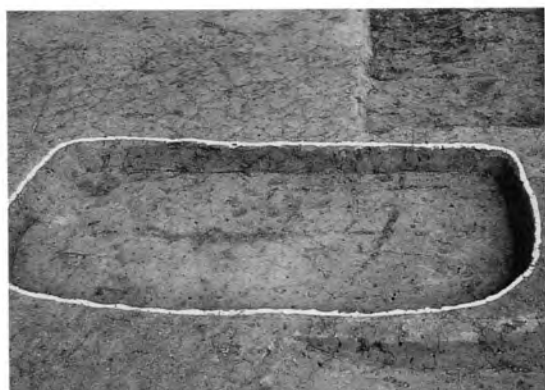
62号



59号



63号



60号



64号



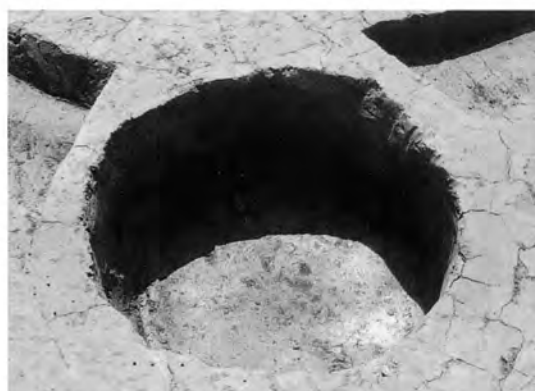
65号土坑



25号井戸跡



66号土坑



27号井戸跡



23号井戸跡



28号井戸跡



24号井戸跡



29号井戸跡

图版58 B区井戸跡 (2)



30号



34・35・36号



31号



37号



32号



38号



33号



39号

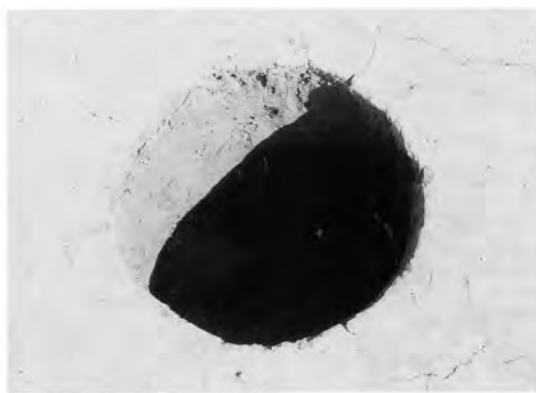




40号



41号



42号



41号遺物出土状況



43号



作業風景

图版60 B区畝跡・溝跡（1）



13号畝跡



37号溝跡



14号畝跡



38・39号溝跡



34・35・36号溝跡



41・42号溝跡



43号



47·48号



44·45号



49号



46号



50号



52号沟迹



55号沟迹



54号沟迹



1号不明遺構全景



1号不明遺構遺物出土狀況



39-3



39-9



39-6



40-1



40-2



39-7



40-6

图版64 B区40号(2)·41号·42号(1)住居跡出土遺物



40-7



41-17



41-7



41-18



42-2



41-9



42-3



41-10



42-5



42-6



44-5



42-10



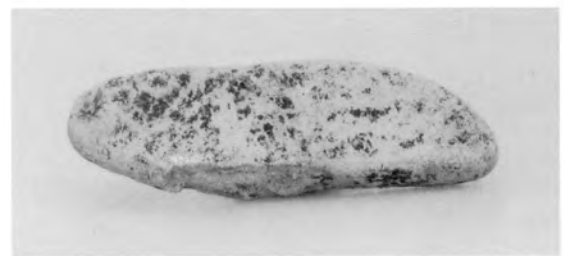
44-6



44-1



44-2



44-7



45-1

图版66 B区45号住居跡出土遺物 (2)



45-2



45-5



45-12



45-15



45-16



45-20



45-21





45-23



45-24



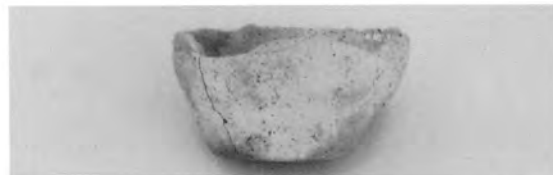
46-1



46-6



46-23



47-2



47-3



48-1



48-3



48-12

図版68 B区48号(2)・50号・51号(1)住居跡出土遺物



48-13



48-16



48-17



50-1



50-5



51-1



51-5



51-6



51-10



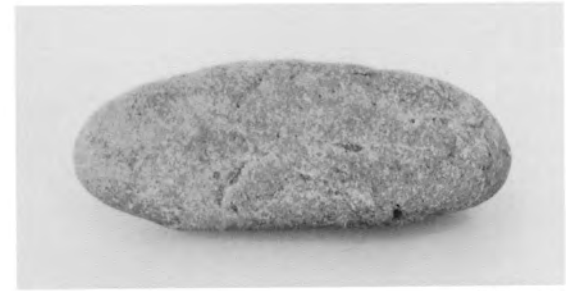
52-15



51-13



52-16



52-17



51-26



53-1



52-1



53-2

图版70 B区53号住居跡出土遺物 (2)



53-5



53-6



53-7



53-10



53-11



53-12



53-13



53-18



53-14



53-19



53-20



53-16



54-1

図版72 B区54号(2)・56号・57号(1)住居跡出土遺物



54-2



54-14



56-1



57-2



57-3



57-4



57-6



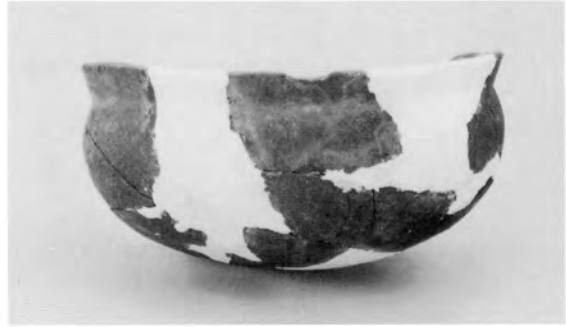
57-7



57-8



57-13



59-2



57-21



59-16



57-22



59-19



57-23



58-1

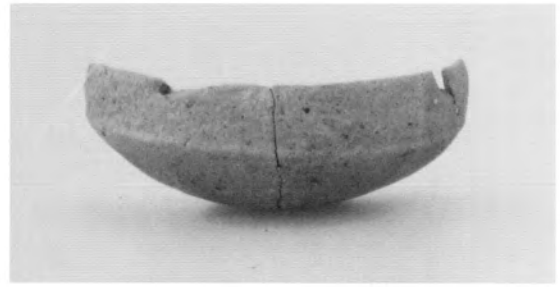


59-20

图版74 B区60号住居跡出土遺物（1）



1



13



2



14



3



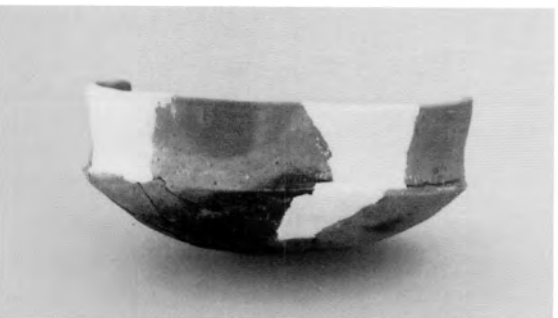
17



4



25



7





60-26



60-40



60-27



61-2



61-5



60-39



61-6



61-9



66-1



63-1



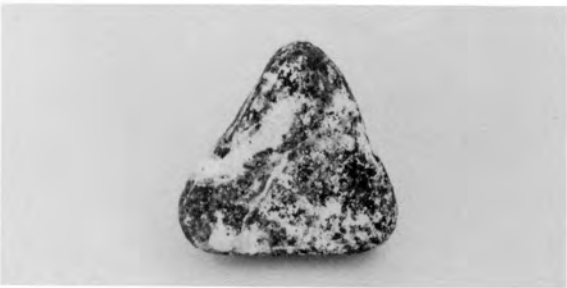
66-2



65-3



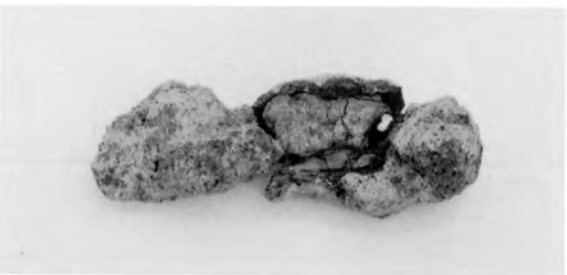
66-3



65-10



66-4



65-11



66-5



67-4



67-5



66-6



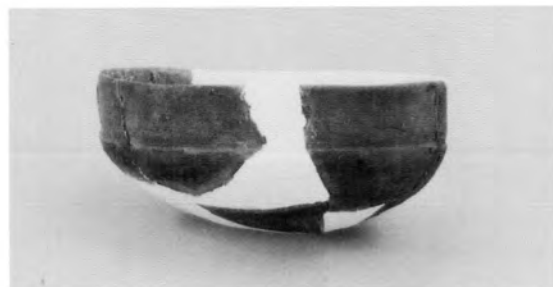
67-6



67-1



67-7



67-2



67-10

图版78 B区67号住居跡出土遺物 (2)



11



12



15



14



16



67-17



67-21



67-18



67-22



67-19

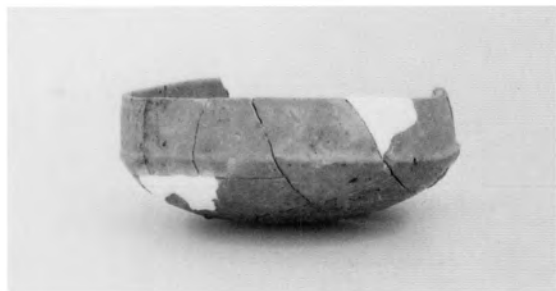


67-29



69-3

图版80 B区69号住居迹出土遺物(2)



4



5



6



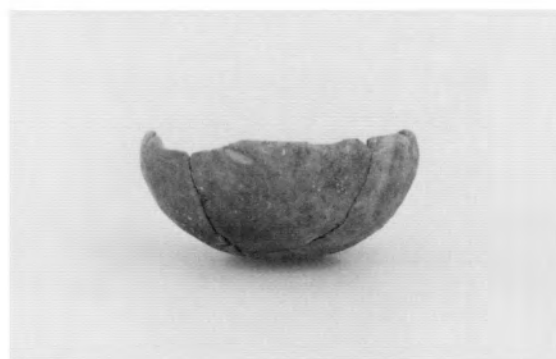
7



8



11



12



13



14



69-17



69-23



69-18



69-25



70-10



73-5



78-7



78-3



78-8



78-6



78-9



79-2

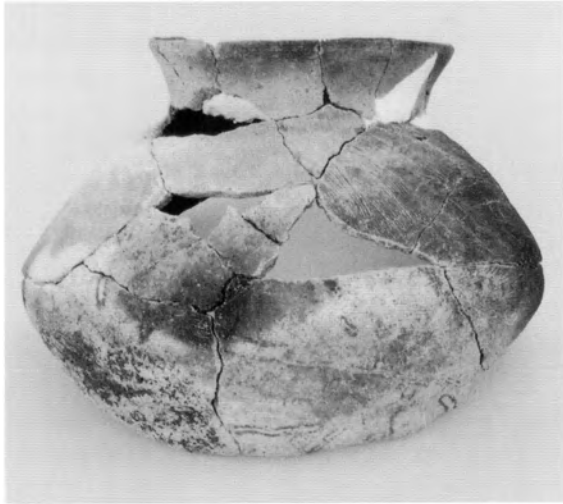




80-1



80-8



80-3



井戸跡23-1



80-4



井戸跡23-3



80-5

图版84 B区井戸跡出土遺物 (2)



23-4



23-5



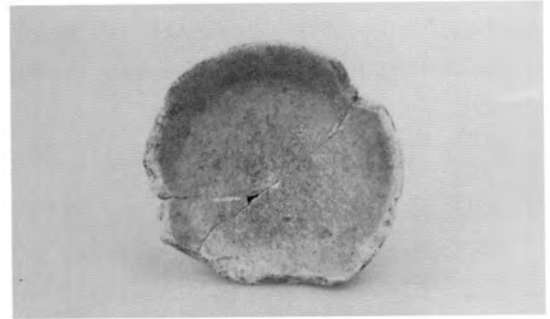
23-6



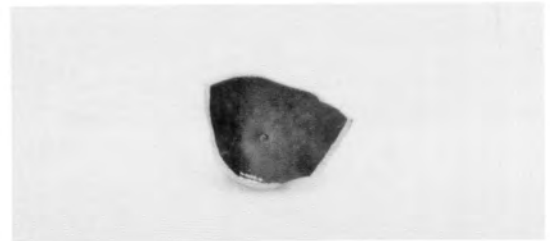
23-7



38-1



43-1



43-2



井戸跡43-3



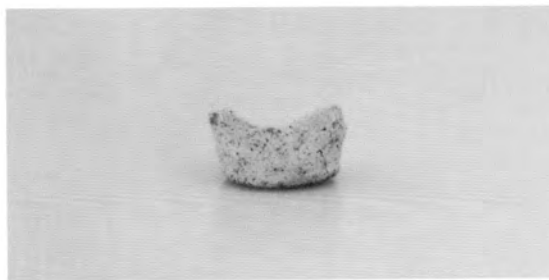
不明1-2



畠跡13-1



不明1-3



畠跡13-2



不明1-1



不明1-4

图版86 B区不明遺構出土遺物 (2)



1-6



1-10



1-8



1-11



1-9



南東より



北西より

28号全景



29号全景



31号全景





32号全景



33号全景



33号遺物出土状況



34号·68号土坑全景



35号全景



36·37号全景





38号全景



39号全景



39号遺物出土状況

图版92 C区40号·41号(1)住居跡·92号土坑



40号全景



41号·92号土坑全景



41号住居跡遺物出土狀況(1)



41号遺物出土状況(2)



42号全景



42号カマド

42号遺物出土状況(1)



同遺物出土状況(2)

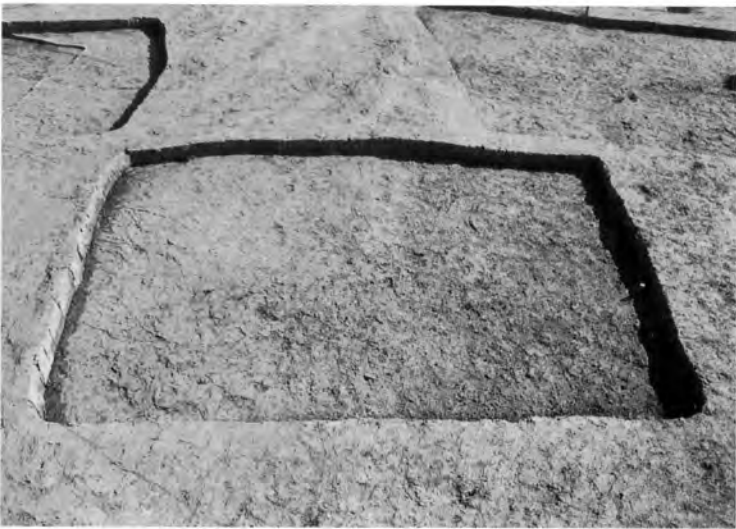


42号・16号畠跡全景





43号全景



44号全景



45号全景



45号カマド



46号・47号全景



48号全景



全景



遺物出土状況(1)



遺物出土状況(2)

图版98 C区50号·51号(1)住居跡



50号全景



51号全景



同遺物出土狀況(1)





51号遺物出土状況(2)



52・53号全景



52・53号全景



52号カマド



54号全景



同遺物出土状況



55号·67号土坑全景



55号貯蔵穴



56号全景

遺物出土状況 (1)



遺物出土状況 (2)



遺物出土状況 (3)





57号全景



同遺物出土状況



58号全景

图版104 C区59号住居跡（1）

全景



遺物出土状況（1）



遺物出土状況（2）





遺物出土状況 (3)



遺物出土状況 (4)



遺物出土状況 (5)



59号遺物出土状況(6)



60号全景



同炉跡





60号炉跡



61号全景

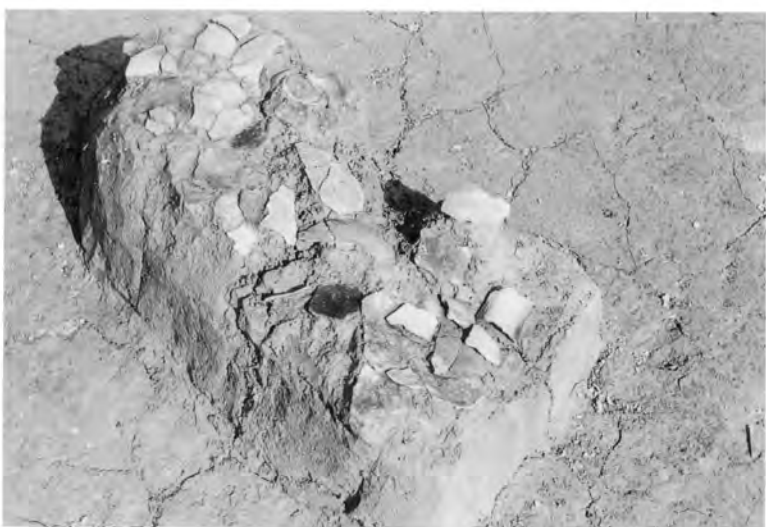


同焼土炭化物検出状況

炉跡



遺物出土状況 (1)

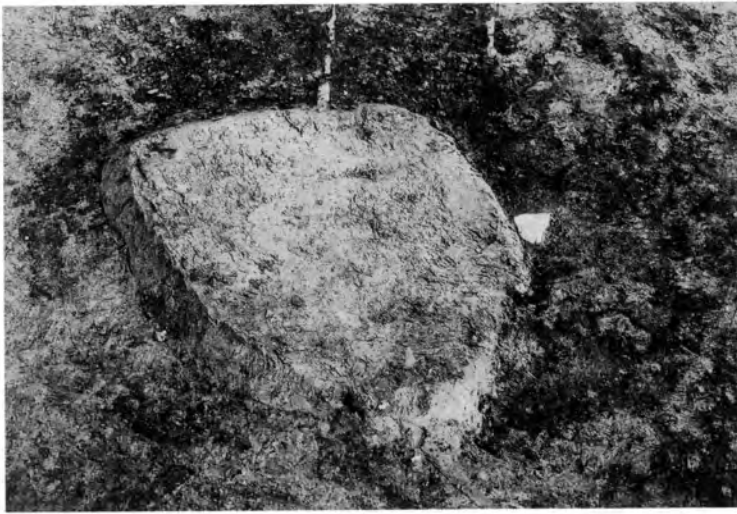


遺物出土状況 (2)





62号全景



同炉跡



63号全景

全景



遺物出土状況（1）

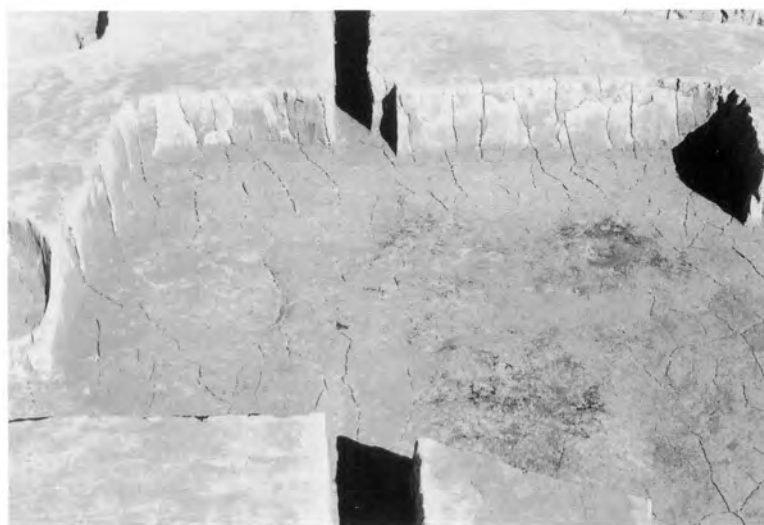


遺物出土状況（2）





65号全景



66号全景



67号全景



67号遺物出土状況(1)



同遺物出土状況(2)



68号全景



69号全景



70号全景



同遺物出土状況(1)

70号遺物出土状況(2)



同遺物出土状況(3)



71号全景







72号全景



同遺物出土状況



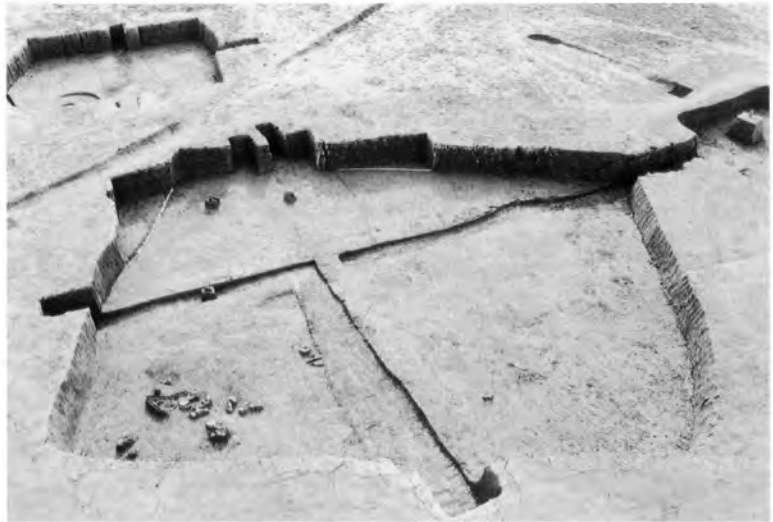
73号全景

图版116 C区74·75号住居跡

74号全景



75号全景



同遺物出土狀況

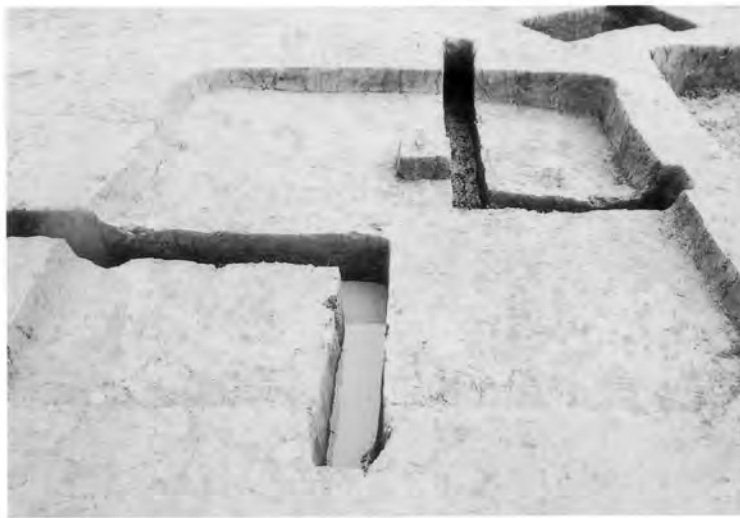




76号全景

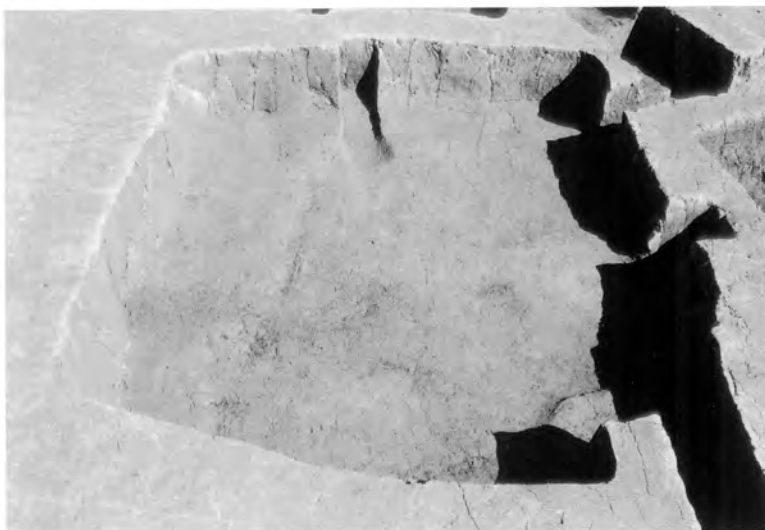


77号全景

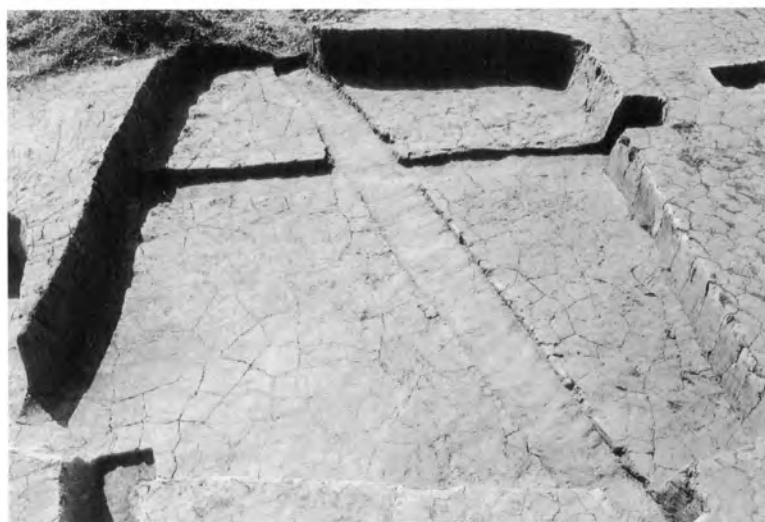


78号全景

79号全景



80号全景



81号全景

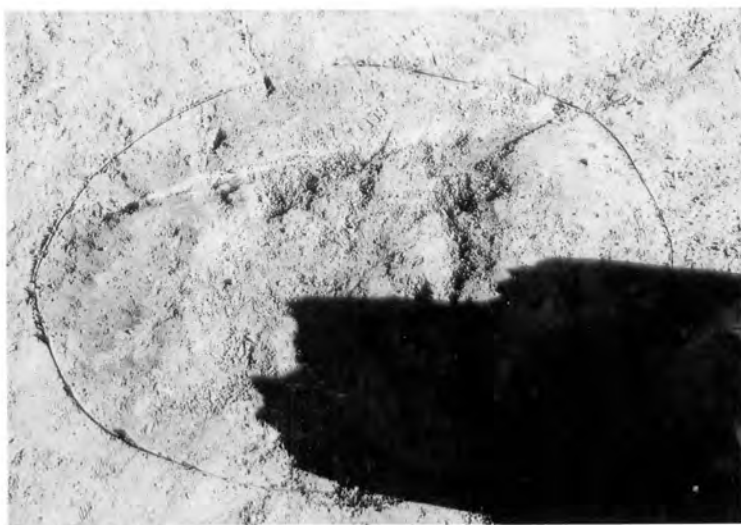




82号・77号土坑全景

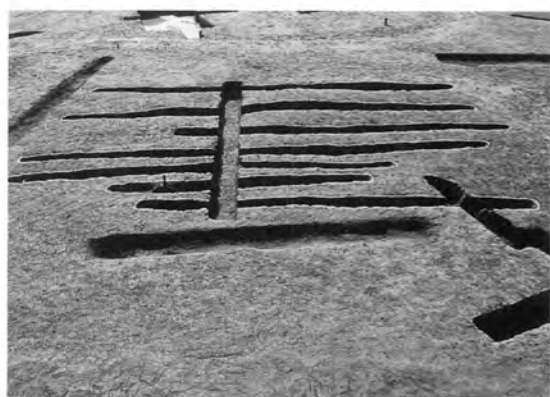


83号全景



同炉跡

图版120 C区畝跡・土坑（1）



17号畝跡



73号土坑



69・70号土坑



74・75号土坑



71号土坑



76号土坑



72号土坑



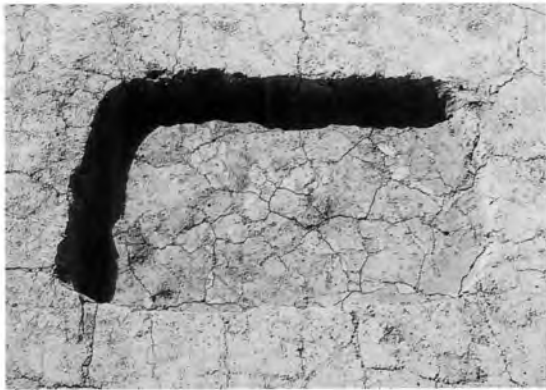
78号土坑



79号



82号土坑遗物出土状况



80号



83号



81号



84·85号



82号



86号

图版122 C区土坑 (3)



87号



93号



88·89号



94·95号



90号



96号桶検出状況



91号



96号桶内遺物出土状況 (1)





96号桶内遗物出土状况(2)



103号



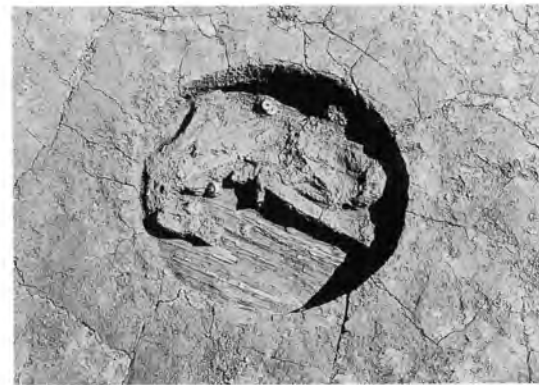
97·98号



104号



99号



105号



100·101·102号



106号

图版124 C区土坑(5)



107号



111号



108号



112号



109号



113号



110号



114号



115・116号土坑



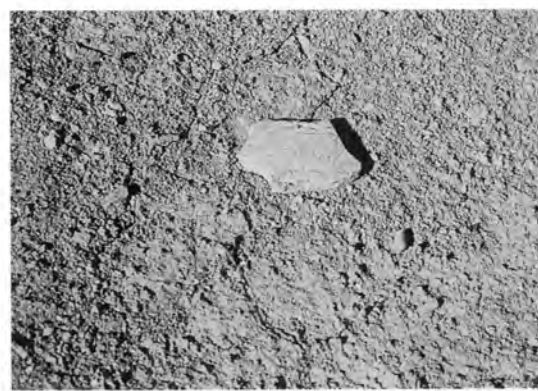
117号土坑



1号井戸跡



包含層土器出土状況（1）



包含層土器出土状況（2）



包含層土器出土状況（3）

图版126 C区31·32·33·40号·41号(1)住居跡出土遺物



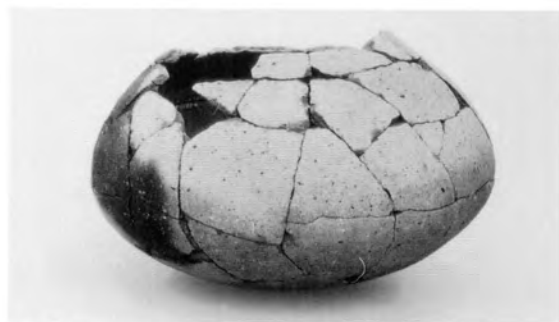
31-3



40-2



32-2



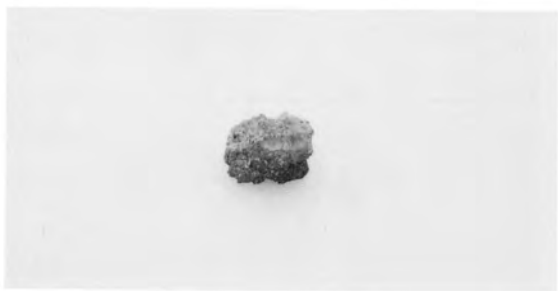
41-3



33-5



41-4



33-7



41-5



41-6



42-2



42-3



42-4



42-6



42-7



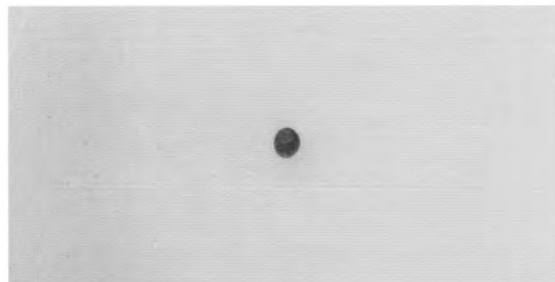
42-8



42-9



42-10



42-15



42-16



42-11



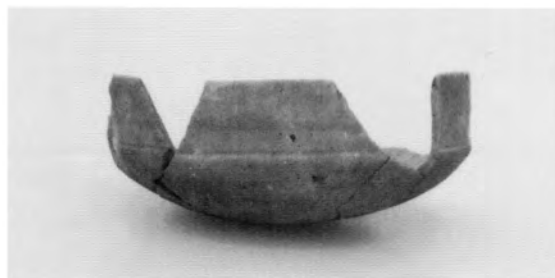
45-1



45-2



42-14



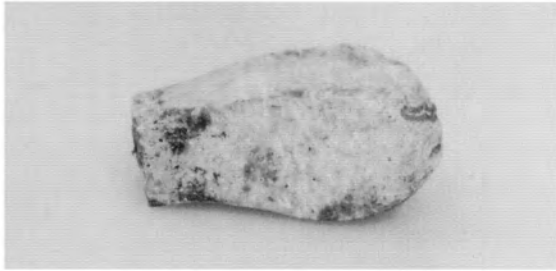
45-3



45-7



49-3



45-8



49-5



48-1



49-6



48-2



49-7



49-1



49-8

图版130 C区49号住居跡出土遺物 (2)



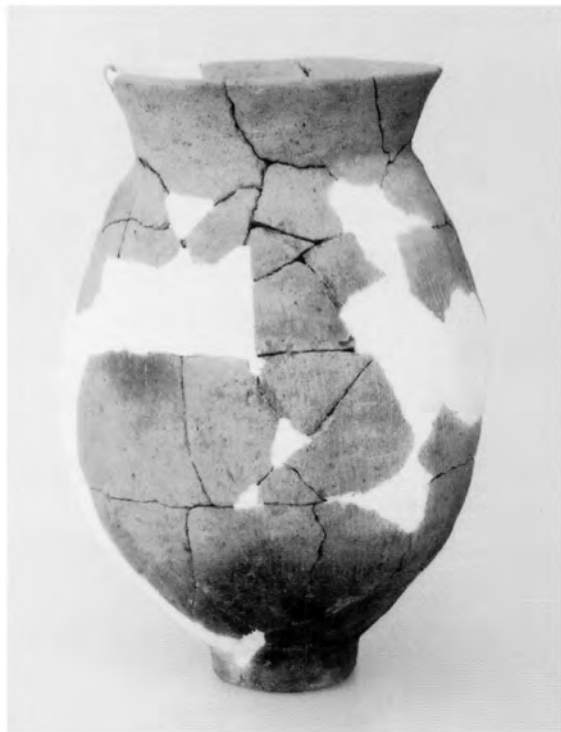
9



10



11



13



14



15





16



18



17



19



20

図版132 C区49号(4)・51号(1)住居跡出土遺物



49-22



49-25



49-23



49-28



49-29



49-24



51-1



51-4



52-5



52-1



52-6



52-2



52-7



52-3



52-8



52-4



52-9

图版134 C区52号住居跡出土遺物 (2)



10



11



12



13



14



15



16



17



19



18



21



25

图版136 C区52号(4)·53号(1)住居跡出土遺物



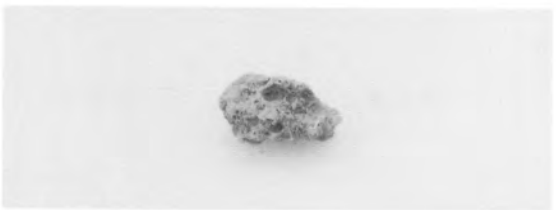
52-29



53-10



52-30



52-32



53-11



53-9



53-12



53-13



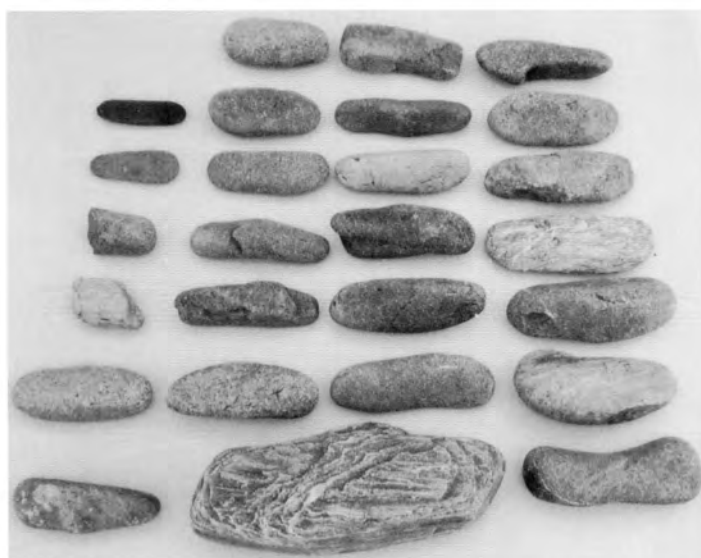
54-2



53-14



54-3



53-17~41



54-7



54-1



55-1



55-4



58-1



56-3



58-2



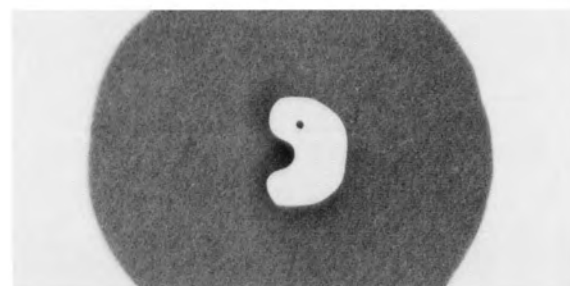
58-3



56-15



58-4



57-5



58-5





6



12



8



13



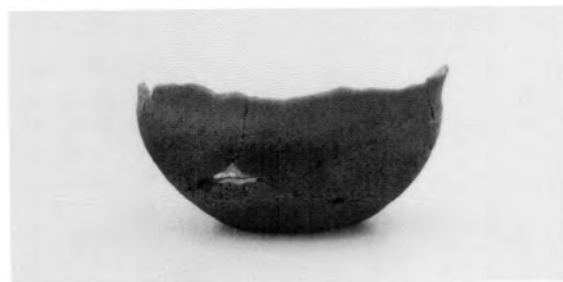
9



10



14



11

图版140 C区58号(3)·59号(1)住居跡出土遺物



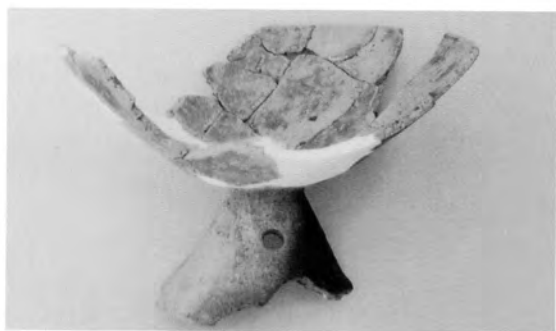
58-15



58-17



58-18



59-1



59-5



59-6



59-7



59-8



59-9



59-13



59-10



59-14



59-11



59-12



59-23



59-24



61-1



60-1



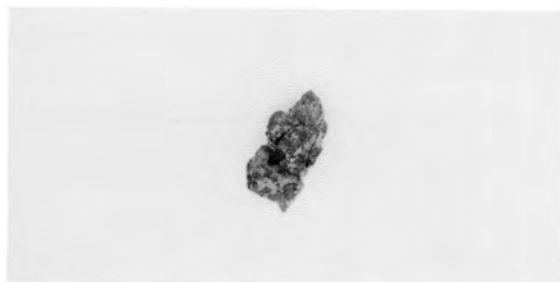
61-6



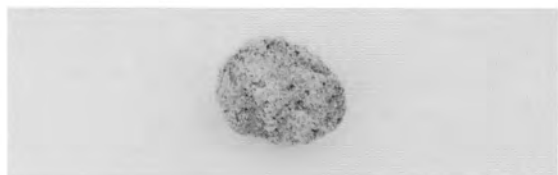
60-2



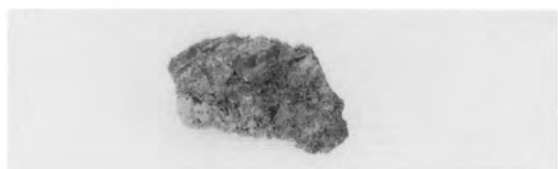
61-11



61-12



61-14



62-4



64-3



64-4



67-1



67-2



67-4



67-5

图版144 C区67号住居跡出土遺物 (2)



6



18



12



19



20



14



22



67-23



70-1



67-24



71-1



67-32



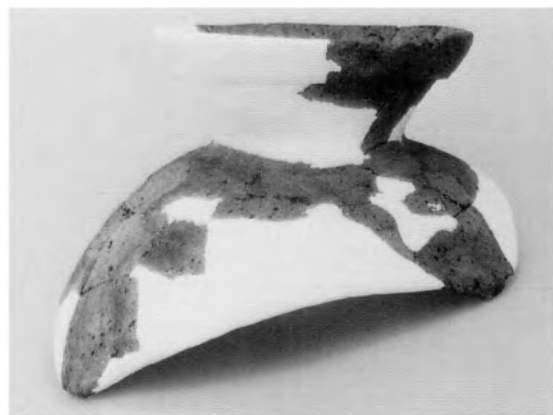
72-1



67-33



72-3



74-2



72-4



75-3



73-4



75-5



73-9



75-7





75-11



75-18·19



75-12



76-1



75-15



76-2



75-16



76-3



75-17



76-4



76-10



76-5



76-11



76-8



77-1



76-9



79-1



79-2



80-6



79-3



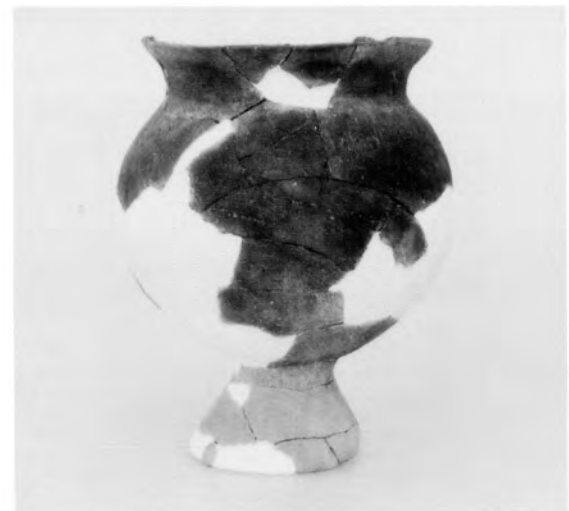
81-2



81-3



79-6



81-5

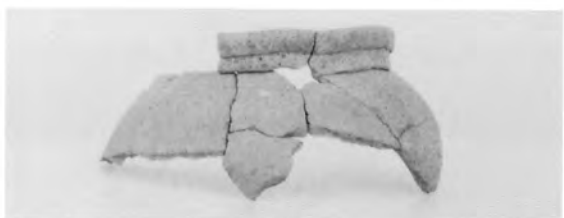


80-1

图版150 C区81号(2)·82号·83号(1)住居跡出土遺物



81-6



81-8



82-1



83-2



83-4



83-5



83-6



83-8



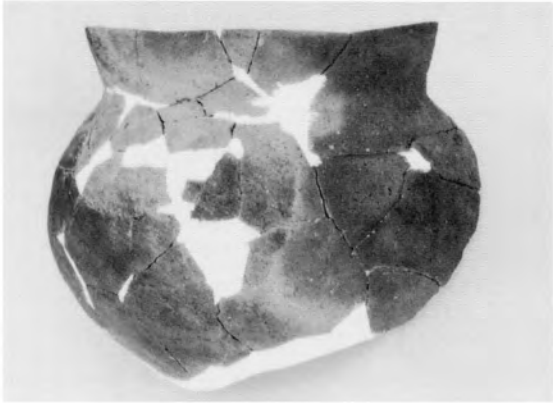
83-9



10



17



11



18



15



21



16



22



83-23



81土坑-1



83-24



1井戸-1



84-1



16畠-1



78土坑-1

# 報告書抄録

ふりがな	いつぼんぎまえいせき							
書名	一本木前遺跡 V							
副書名	平成15年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書							
巻次	—							
シリーズ名	—							
シリーズ番号	—							
編集者名	寺社下 博							
編集機関	埼玉県熊谷市教育委員会							
所在地	〒360-3601 熊谷市宮町2-47-1 TEL048-524-1111							
発行年月日	西暦2004(平成16)年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯 (°'")	東緯 (°'")	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
いつぼんぎまえいせき 一本木前遺跡	くまがやし おおあざひめつぼ 熊谷市大字東別府 ぼんちほか 1390番地他	11202	105	36° 11' 17"	139° 21' 39"	20020601 ~ 20030131	7,787	調節池 掘削
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
一本木前遺跡 A区	包含層	縄文時代			土器片		古墳時代後期に新たに登場した河川跡によって、集落内で多くの規制を伴っていることが判明し、集落のあり方を鮮明なものとした。また、縄文時代、弥生時代の包含層も検出され、時期幅が広がった。	
		弥生時代			土器片			
	集落跡	古墳時代前期	住居跡	5軒	土師器			
		古墳時代後期	住居跡	10軒	須恵器			
			土坑	3基	土師器			
中世以降	河川跡	1条	石製品 (石錘、石鏃)					
	不明遺構	3基	(紡錘車)					
一本木前遺跡 B区	集落跡	古墳時代前期	住居跡	19軒	土師器		A区同様、古墳時代後期の河川跡による規制がここでもみられ、また、古墳時代前期の畠跡も検出された。	
			畠跡	2ヶ所	ミニチュア土器 石製品 (石鏃、砥石)			
		古墳時代後期	住居跡	23軒	土師器			
	河川跡		1条	須恵器 ミニチュア土器 石製品 (紡錘車、砥石) 鉄製品 (鎌) 羽口				
中世以降	溝跡	22条	陶磁器					
一本木前遺跡 C区	包含層	弥生時代			土器片		古墳時代前期の大集落が検出されたこと。ここでも弥生時代の遺物包含層が検出され、大規模な弥生の集落が想定されたこと。	
	集落跡	古墳時代前期	住居跡	48軒	土師器			
			畠跡	2ヶ所	勾玉 土製品 (分胴形・腕輪形) 石製品 (砥石)			
		古墳時代中期	住居跡	1軒	土師器			
		古墳時代後期	住居跡	8軒	須恵器			
土坑	2基		土師器 石製品 (模造品、砥石) 鉄製品 (鎌) 羽口					
中世以降	土坑	38基	陶磁器					
	井戸跡	1基	寛永通宝 数珠玉					

平成15年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書

## 一本木前遺跡 V

平成16年3月31日発行

発行／埼玉県熊谷市教育委員会

印刷／朝日印刷工業株式会社





さくらのまち“熊谷”